

水上瀧太郎全集

十一巻



昭和十五年一月四日　千葉縣鴨川海岸にて

貝殼追放

三

目次

我家のドウガル

バアネット夫人の「小公子」は、本を讀む事の好きな少年少女の、誰しも一度は夢中になつて讀み、大人になつてもなつかしく想ひ出す際の物語である。その物語の中に一頭の名犬があらはれる。どうしたものか、私はその犬をセント・バアナアド種だと思ひ込んで居た。そのむかし若松賤子の飜譯で讀んだ時以來「小公子」は深い感銘をのこし、當時女學校へ通ふ姉が、繪入の原書をならつてゐて、氣どつた發音で小公子の名を呼ぶのを、ひそかに羨しく思つたものである。その本の口繪にも、巨大なる犬に寄添ふ可憐なる小公子の姿が描いてあつたが、年を經て私の記憶には、ふさふさした金髮がゆるやかな波をうつ襟もとや手首に白いレヱスの飾のついた服を着た小公子と、その小公子を守護するもの丶如く想はれる巨大なる犬が、この小說一篇の繪看板として大映（おほうつし）にあらはれるのであつた。

セント・バアナアド種の犬について、手許にある教科書には下の通り記述してある。

本種は瑞西國セント・バアナアド山(アルプス山脈中)の原產なり、元來此地は海拔七千八百八十尺に達し冬期長く且つ甚だ寒冷にして積雪三十尺乃至四十尺に及び年々巡拜者の餓死凍死するもの少なからず、玆に於て第八世紀以來旅人の救助は僧侶の勤となり一方堅固なる石室を設けて宿泊を便にし他方に於ては則ち本犬により遭難者の探索を行ふに至れり。通常搜索には二頭の犬を用ゐ一は溫暖なる毛布を背に纏ひ一は飮料食物藥品等を入れたる籠を頸に提げ山中を跋涉し遭難者を發見する時は之を寺院に運び力及ばざる時は歸りて僧侶に告ぐ斯の如くにして人命を救ふこと多きが中にバリイと稱する犬は一生中四十餘人を救助せりといふ、我國にてもかの八甲田山の遭難に使用せりといふ、本種は現今各國に散在し其主なる用途は伴侶及警戒にして被毛により短毛種及長毛種に區別す、性よく寒國に適し勇敢にして然も嗅力強く搜索に巧なり、

一般形態　　犬族中體格最も強大にして體尺一尺七寸乃至三尺、體重百三十乃至百七十磅に達す、

頭は重大、頭蓋高く、頂大にして圓隆す、眼は適度に大きく慈愛の相を呈し下眼瞼弛垂し赤

色の瞬膜露出す、耳は下垂し大さ中等とす、口鼻部よく發育して廣く其の末端方形を呈し脣稍下垂す、

頸は長く強く厚く、胴は強大にして胸廣く腰強く、臀部の發育佳良なり、

四肢は筋骨強大にして足亦大なるを要す、

毛色赤白、橙黄色、白等の斑にして、額、口鼻部、頸、前肢等白色なるを普通とす、

八甲田山の雪に埋もれた兵士を捜索に行つたといふのは、何處から連れて行つたのかしらないが、果して純粹種であるかどうか疑はしく思はれる程日本には數が少ない。從つて何がセント・バアナアド種であるか知らない人が多く、屢々作品の中に犬を描き、又いかにも犬通らしくおもはれる室生犀星氏さへ、曾てセント・バアナアド種の狼犬などゝ書いてゐた程で、それではラテン人種の日本人と云ふやうなとんちんかんである。

私が日本で見たセント・バアナアドの逸物は、ひとむかし前青山邊で、一人の書生さんが二頭引張つて歩いてゐた奴だ。牡の方が殊に大きく、素晴しい身長を有してゐた。今は故人となつた中村是公氏の飼犬だと云ふ噂だつた。あゝいふやつを引きつれて歩いたらさぞ愉快だらうと思ふにつけ「小公子」を聯想したものである。

ところが昨年、伊勢は津でもつ津は伊勢でもつの舊家川喜田家の御主人から、自分のところのセント・バアナアドが十一疋仔を生んで、一疋はあやまつて親犬が踏殺してしまつたけれど、十疋は完全に成育してゐる、恐らく日本で此の種類の犬の安産ははじめての事だらうと云ふお話を承つた。

その御話を犬きちがひの弟に傳へた。この男は年中數頭の犬を飼育し、先頃お嫁さんを迎へたが、花嫁はその日から、氣むづかしい亭主と、それにも増して手のかゝる犬どもの世話に日も足らぬ新居を營まなければならない身の上となつた。はたで見てゐて、お嫁さんが氣の毒に思はれるのだが、別段苦にもしないで、寢藁をとりかへ、食餌を與へ、お産のとりあげも上手にやつてゐるのを見ると、正に良妻にして將來賢母たる可き素質を備へてゐるに違ひ無い。その弟のいふには、日本うまれのセント・バアナアドだつてゐない事は無い、よく品評會にも出てゐる、しかしいゝやつは見當らないとの事だつた。恐らく川喜田家のは優良種に相違なく、しかも十疋も成育してゐるのはまことに御目出度い事だから、せめて寫眞でも頂いてはくれまいかと云ふ。

その後川喜田さんに御目にかゝる度に、仔犬の成育の狀態を聞かされ、私は又弟に受賣りし、弟は羨望に堪へぬものゝ如く、しきりに實物を見度がつてゐた。送つて頂いた寫眞によれば、正

に逸物に違ひ無いと弟は信じてゐた。

川喜田さんは、珍しく十疋も育つてゐるのだから、殘らず手許で飼つて見る積りだと云つて居られた。傳へきく津市郊外千歲山の川喜田邸は、山あり池あり林あり田圃もあると云ふ廣大なものださうで、その廣い屋敷内を巨大なる十二頭の犬が悠々と漫歩する風景は甚だ雄大なものに想はれる。

然るに今年の春四月、川喜田家には再び御目出度があり、九疋の仔犬が生まれた。いかに邸内が廣くても二十一頭のセント・バアナアドを飼育するのは手がかゝり過る。しかも他の種類の犬も數頭ゐるといふのだから、犬口過剩といはねばならぬ。流石の川喜田さんも相手をえらんで讓り度いと云ふ御話だつたので、直ぐさま弟に知らせてやつた。是非一頭讓つて頂き度いと云ふので、川喜田家犬係の方へ書面で申入れると、折返して御主人から、今年うまれの九頭のうちから一頭をよりどりさせるから、本人に來て貰ひ度いと云ふ御返事だつた。弟は雀躍して、早速出向くと云ふ。私は、弟を御存じない川喜田家の方々の爲にあらかじめ其面構を御知らせして置いた。

身長五尺七寸餘、顏色あく迄も黑く、眼光鋭く、極めて無愛想なり云々

そんな人相書が廻つてゐるとも知らずに、弟は良妻と共に東京を立つた。翌朝川喜田邸に到着、

取次の方にむかつて直に犬舍へ案内を乞ひ、どれでもよりどれと云はれて選定に迷ひ、思召のある二頭を見比べて終日を盡したさうだ。

犬を頂戴して歸つて來たから見に來いといふ案内をうけ、愚妻はお土産に頸輪を買ひ求めて持參した。弟の新居は、家は立派では無いが犬舍は頗る壯大なもので、殆んど一木一草も無い犬の散步向の庭に、それが座敷へ尻をむけて立つてゐるのである。

其處には獨逸シェパアドの親子がゐる。獵につれて行く英吉利ポインタアの親子がゐる。而して、川喜田家から頂戴して來た生後三箇月のセント・バアナアドがゐるのである。それは同じ頃に生れた他の犬の何倍とも云ひ難い程肥大なものである。何故比べる事が出來ないかといふと、まるつきり形態が違ふからで、若しも同じ頃に生れた熊の子がゐるなら、それと對比してどつちが大きいかと云ふ方が適切であらう。先づ頸といふものがあるといへばあり、無いといへば無いと云つても差支ない程太く、愚妻が持參した頸輪の如きは腕輪にする外爲方が無い位であつた。それ程四肢も太く、どこにも細い部分の無い、づんどの如き姿である。往年亞米利加の大統領ルウズベルトに擬したテディ・ベアと呼ぶ玩具がはやり、日本にも渡來したが、仔犬は恰もその熊のおもちやの形だつた。

名前は「小公子」の中に出て來るセント・バアナアドを襲名させろと、はたで騒いだが、弟はマダム・テレルと名づけた。テレル夫人とはつい先頃日本へも來た大女の藝人である。いしくもつけたりと一同感心した。

テレルは一木一草も無い庭をよたよたかけ歩き、お相手役のシェパアドの仔犬の敏捷なのにからかはれ、追かけ、屢々自分自身のからだの重みに堪へ兼てつんのめつた。

その頃拙宅には弟の世話でシェパアドの仔が二疋來てゐた。牝の方は骨格に缺點があつて、誰の眼にも感心しかねる姿だつたが、牡の方はなかなかの尤物で、犬好きのおかつちやんは、朝晩散歩につれて出て、通りすがりの人や、犬猫病院の院長さんにほめられ、大得意で歸つて來た。ねえ、をばさん、この犬は隨分いゝ男なんだとさと、耳の遠い相手に大きな聲で報告してゐるのであつたが、その尤物も、ひとたびテレル夫人にまみえてからは、俄に安つぽく、げすつぽく見えて困つた。

九月になつて、久々で川喜田さんに御目にかゝつた時、若し望みなら君にも一頭やるがどうだと云ふお話だつた。私もかねての望みだから、一度はセント・バアナアドを引張つて歩き度いのだが、何分借家住居の事ではあり、家の向が西北むきで日あたりは惡いし、外に男手は無いし、

且從來の經驗で犬を飼ふ事には自信が無いから、萬一名犬をむざむざ殺しては申譯無いと云ふ氣もあつて、一度は辭退してみたが、欲いと思ふ心がおもてにあらはれると見え、再び御勸をうけた。先づ愚妻に話してみると、これは忽ち懷に抱きとらんばかりに喜び、卽座に犬舍の心配をはじめた。待て、待て、お前がいくらほしがつても、一番世話をかけるのはおかつちやんとをばさんだから、この二人の同意がなければいけないといふと、愚妻は直に立つて行つた。おかつちやんの日く、その犬が來て、シヤウやヂンが見捨てられるやうな事がなければ異存はありません。この返事には私も感動した。なるほど、前にゐるのよりもいゝのが來れば、その方に寵を奪はれ、兎角一方がないがしろにされ勝であらう、これはまことに尤もな一言だと思つた。しかし結局二人とも同意してくれたので、早速川喜田さんには頂戴致しますと返事をした。それでは誰か寄越してくれ、どれでもいゝのをやるからと云ふ事で、兄弟の多いのはふだんはうるさいと思つてゐたが、斯う云ふ時には便利で、名古屋に居る弟に賴んで、津迄出張して貰つた。

身長五尺七寸餘、體重二十三貫餘、血統の事とてこれ亦無愛想なれど、この前のよりは稍凄味少なし云々

と又人相書を送つた。

弟は無事に使命を果し、私の希望する牡を一疋えらんでくれた。話にきくと、弟より一足遲れて、三井一族の誰かの依頼をうけ、東京で有名な犬醫者が、三井家の祕書をしたがへて乘込み、弟が私の爲に選定したのを最もよしとして選び出したさうだ。しかし、川喜田さんは先約を重んじ、私の方へ廻して下さつた。不幸なる犬よ、お前は三井家の犬になりそこなひ、狹い庭に飼はれる身の上となつたが、恨んでくれるな、運命とあきらめてくれ。

アスアサ六ジハンイヌツク

と云ふ電報を手にして、愚妻は有頂天になつてしまつた。川喜田さんから食事その他の注意書を頂いたのを暗記し、又をばさんやおかつちやんの爲には、半紙に寫して壁に貼つた。

名前は何としませうといはれ、私は勿論「小公子」の犬の名をつけ度かつたが、どうしてもそれが思ひ出せない。さりとて愚妻まかせにするのは甚だ危險だ。私は曾て二疋の犬にウイスキイとデンと名づけ、又或時はシエリイといふのも居たが、セント・バアナアドにはそんなふざけた名前はつけられない。シエパアドの方は愚妻が勝手に牡をシヤウとし、牝は第三代目のデンとした。或人の談に、どこかの意氣地の無い月給取が、常々怒鳴りつけられる社長の名前を犬につけ、ひそかに快としてゐるのがあるさうだ。愚妻の說明によると、シヤウはバアナアド・シヤウのシヤ

ウだと云ふ事だが信用出來ない。親が私に與へた名はシヤウザウである。亭主の名を犬につけて、叱つたり、ひつぱたいたり、お廻りさせたり、ちんちんさせたりして、ひそかにこゝろよしとする女房だつてゐないとは限らない。私は斷然「小公子」の犬の名を襲はせる事に決心した。

そこで記憶自慢の久保田万太郎氏に訊いたところ、流石に犬の名は覺えてゐなかつたが、直に調べて報告してくれた。

小公子の中に出て來る犬は若松賤子の譯本にはダガルとあります。外の本はドウガルとよんでゐます。右まで匆々

久保田さんはむかしをなつかしがる事極めて深いひとゝなりから、こどもの頃讀んだ若松賤子の譯本に愛着を持ち、ダガルにしろと勸めるのであつたが、聲に出して呼んでみると呼び惡(にく)いので、ドウガルときめてしまつた。ダガルにして貰ひ度かつたなあと、久保田さんはその後も口惜(くやし)がつてゐた。

九月二十三日の朝、愚妻と共に東京驛に出迎へた。汽車が着くと間もなく、檻に入れられた我がドウガルは、小荷物受取所にあらはれた。若い驛員が檻の戸をあけたが、出て來ない。頸に結んだ細引を引張つても身動きもしない。あまりに動かないので薄氣味惡くなつたらしく、驛員は

私の方に、大丈夫ですかと念を押した。大丈夫です、まだ子供なんですと云ふと、へえこれで子供なんですか、さぞ飯を喰ふだらうなあと同僚をかへりみて笑つた。私はドウガルの後足をつかんで檻の外へ引出した。四肢の太い事、頭の大きい事、一見して大ものだといふ事がわかるので、そこいらにゐた驛員も、第三者も、一齊に驚嘆した。

歩かせようとしても歩かない。長途の旅の疲勞と、狹い檻の中に閉籠られてゐた不快の爲、心細さうにとぼんとしてゐる。止むを得ず抱きあげ、自動車の中へ運び込んだ。

教科書に書いてある通り、我がドウガルは額、口鼻部、頸、前肢が白色で、橙黄色に黑をまじへた斑が美しい。柔和な容貌、悠揚迫らざる擧姿は、種族の高貴なる血統をおもはせ、彼の英吉利の貴族の城か、我が三井家の廣き庭園に飼はれてふさはしいものであつた。だが、不幸なるドウガルは、十數分の後、我が借家の庭に放たれたのである。

犬きちがひの弟は、恰も勤務先の用命を帶びて遠地へ出張中だつたが、その良妻は卽日かけつけて來て、テレル夫人と比較し、テレルの方が遙かに發育がいゝ、しかし尻尾に惡い癖がついたから其の點はドウガルの方がすぐれてゐると、あちらを立てこちらを立て、どつちにも花を持たせた口上を述べて歸つたさうだ。愈々もつて良妻といはねばならぬ。

こゝろみに近所の運送店の計量器を借て體重をはかつてみたところ、五貫五百匁あつたが、それではテレル夫人よりも三貫五百匁ばかり少ないのである。念の爲その道の名醫を聘して健康診斷をうけたところ、十二指腸虫がゐるといふので、直に下劑をかけて驅除をはかつた。この疾患の爲に發育が遲れたのであらう。うちのも負けずに育てませうよと、愚妻は多分の競爭心を起し、良妻とうでを比べる覺悟を定めた。

二疋のシェパアドはのべついたづらをし、土を掘り、木の根を嚙み、自分達の住む犬舍の屋根を破壞し、塀の外を通る人に吠え、寸時も靜かなる心境を樂む事を知らないのであるが、我がドウカルはゆつたりと寢そべり、悠然と步を運び、いたづらに吠えず、みだりにかけ廻らず、王侯の威風を示してゐるのである。

私は川喜田さんに、ドウガル到着後二日間の動靜と、あはせて小説「小公子」の中にあらはるゝセント・バアナアド種の名をとつてドウガルとつけた事を報告した。

ところが共後近所に住む甥に「小公子」を借て來て讀んでみると、私の記憶は全然間違ひで、氣むづかしい老貴族と共に古城に住む巨大なる犬は、セント・バアナアドでは無くてマスチフだつた。おつかない老貴族と共に人をおそれさせてゐる犬としては、慈愛深きセント・バアナアドよ

りも、性獰猛にして飼養宜（よろしき）を得ざれば兇暴となるおそれありといふマスチフの方が效果的であつて無理が無い。おい「小公子」の犬はマスチフだつた、しまつた、しまつたと愚妻に話すと、だつてメリイ・ピックフォードの小公子といつしよに出て來たのは、たしかにセント・バアナアドでしたよと愚妻ながらも亭主をかばつて、有力なる史料を提供した。さうだ「小公子」のやうなやさしい物語には、セント・バアナアドの方が情景あはせ得たるものがある筈だと、勝手な理窟をつけて、自分の失敗を少しばかり慰めた。

我家のドウガルは未だ二週間しかゐないのだが、今やめきめき發育し、確實に二貫目位は體重を増したらうと思はれる。犬好きのおかつちやんは、シャウを曳き、ヂンを曳き、又ドウガルを曳いて散歩に行つてくれる。往來の人が目をつけ、ほめてくれるので、曳く人も相當得意らしいが、何分巨大なる犬の事だから、いたつてかぼそいおかつちやんの瘦うでゞは、引擦られる惧がある。嫁入前の大切な娘さんに怪我があつては申譯が無いので、今後犬の散歩は私の役目とすると自ら買つて出た。

ところが我家のドウガルは、狭くて騒々しい往來を好まない。彼は街つ子の性質を持つてゐない。それが此の種族の犬の先天的の特性なのか、或は廣い所で生れ廣い所で育つたドウガルの習

性なのか、兎に角門外へ出る事を欲しない。無理に木戸の外に引ずり出し、曳綱を引張るのだが、自動車自轉車荷車に脅えて、ちつとも散歩を享樂しない。そこへ行くとシヤウヤヂンは散歩好きで、往來をかけ廻り、かぎ廻り、何か落ちてゐるとやみくもに喰つてしまふ。著しい相違である。

その上不思議なのは、我家のドウガルは大きな家を見ると、いきなり門内へかけ込まうとする癖がある。番町の事だから、近所には大臣だの、元帥だの、大將だの、偉い政治家だの、偉い實業家だのがづらりと並んでゐる。その家々の門を見ると、安息所でも見つけたやうに足をはやめて入らうとする。やつと曳綱を引きしぼつて方向を轉換させるのだが、何處迄貴族的に出來てゐるのか驚く外は無い。あまり眞劍に大家の門内にあこがれる姿を見ると、我家へ曳いて歸るのが氣の毒になる位だ。

散歩區域の中では、四谷から市ケ谷へつゞく見附の土堤が一番氣に入つてゐる。我家を出て四谷へ向ひ、双葉女學校の角を曲ると、忽ちドウガルは勢ひづく。綠の土堤は、恐らく津市郊外の千歳山莊を想ひ出させるのであらう。步度をはやめ、いそいそと步き出す。犬が喜べば私も嬉しいから、散步は土堤ときめてゐるが、此の頃の夜の土堤には、ぴつたりと寄添つてゐる男女が少なくなく、中にはお湯屋へ行くふりをして家を出て來たらしく、湯道具を胸に抱いてゐる女もあ

るから、寸時も惜い逢瀨なのだらうとおもひやつて、こちらの方で遠慮する場合もある。

ドウガルが道行く人の目を引く事はいふ迄も無いが、時には人を驚かす事もある。旣に川喜田邸に於ては、電燈工夫が獅子と間違へて、はだしの儘臺所口からかけ込んだ事件さへあつたさうだが、この間の黃昏（たそがれ）に四谷驛前の石段の上に立つてゐると、下から上つて來た細君同伴の微醉の洋服子は、あ虎の子だと口走つた。

我家のドウガルはその性質も容姿も全く貴族的だ。いゝ犬ですなあと、稱讚の辭を浴せて行く人はいくたりとなくある。たゞ主人ばかりがふさはしくないやうだ。彼の「小公子」フオントルロイは、亞米利加で乾物屋や靴磨と仲よしだつたが、やがて英吉利の貴族の城のあるじとなるべき品格はふたばよりあらはれてゐたさうである。だから、老貴族の城に飼はれた獰猛なる犬も、初對面からぴつたりはまつた伴侶であり、主從であつた。それなのに我家のドウガルは、彼のドウガルにも劣らぬ名犬に相違ないのだが、主人は主人と見えない程度の主人なのだ。

どこのぢいさんか知らないが、土堤の散步の歸道で、もしもしと呼びかけたのがある。大變立派な犬ですが、どちらさまので御座いますかと訊くのだ。私のですよと中腹で答へたが、ぢゞいは信じ難い顏をして、犬とあるじを見くらべた。そこいらのおやしきの犬の世話役と見たのであ

らう。だが腹は立たなかつた。はなつたらしの子供でも、いゝおこさんだと云はれゝば喜ぶのが親心だ。ましてや我家のドウガルは、もつたいない程のきりやうよしだ。主人が見劣する事によつて、確實に犬はほめられたのである。(昭和五年十月五日)

――「三田文學」昭和五年十一月號

浮名儲

昭和五年十月一日發行の「中央公論」に「新聞記者ユモレスク」といふ雜文が載つてゐる。筆者は日暮一夫といふ人で、私にははじめて見る名前である。この人流のいひ方を以てすれば「有閑ブルジョアのおなぐさみにしかならない愚劣なる一文」であるが、大眞面目で途方も無い出鱈目を書いてゐるのが、見樣によつては近代心理學又は病理學の參考にもなりさうな種なので、說明を加へて紹介する。

「スマアトな洋服、氣の利いたネクタイ、キツドの靴がキユウと鳴つても、玄關で脫いで上る時靴下に穴があいてゐたら、それは正しく新聞記者だ」といふまくらをふつて、さて世の中には新聞記者を蛇蝎の如く嫌ふ人間があるが、その中で有名なのは故人では寺內正毅、生きてゐるのでは山本權兵衞、文士では永井荷風、水上瀧太郎などが代表的だといふ。私は豫て新聞記者から

「新聞嫌の水上瀧太郎」と呼ばれてゐるので、又きまり文句を並べてゐるんだなと思つたが、その後を讀んでみると、いかにも世の中には變態心理の持主がゐるものだといふ事がわかつて、おもはずひとりで笑ひ、同時に眉をひそめたのである。

事柄をはつきりさせる爲に、以下數十行原文を借用する。

その水上瀧太郎が「大阪の宿」と云ふ醉拂ひの有閑ブルジョアの、大阪に於ける愚劣なる生活を書いたなかに、日頃の新聞記者嫌の一端を見せて、一日彼を訪問した一新聞記者が、靴下に大穴を開けてゐた無作法を痛烈に罵つてゐる。不幸にも罵られた男は、その屬する大阪の大新聞の夕刊の小說欄にしかも水上瀧太郎が執筆してコツピドクやつつけられたのである。その男は社會部記者であつた。しかも、彼は新聞記者のなかでは、際立つたおしやれで、金廻の好い方の男で、身なりなども好い方だつたが、彼の絹の靴下が大阪一の贅澤洋品店、ロンドン屋で買つた品物であるに拘らず、たまたま一寸したはずみで穴があいてゐたゝめに、新聞記者の靴下といふ概念に、うまうまと不幸にも陷り込んで御難を蒙つたのである。

日暮君の記述に從へば、拙作「大阪の宿」の中に破れた靴下を穿いた新聞記者があらはれる事になつてゐるが、「大阪の宿」のどの一頁にも破れた靴下の新聞記者はあらはれない。日暮君は多分

新聞社につとめる人であらうが、新聞記者の出鱈目はかくの如きものである。

斯う大上段にのしかゝると、それは「大阪の宿」ではなくて、「大阪」の間違ひだが、どつちみち日暮君の所謂「有閑ブルジョアの愚劣な生活」を描いたものだから同じやうなものだといひぬけるだらうが、こつちにとつては決して同じやうなものではない。「大阪」は大正十年の作で「大阪毎日新聞」に連載したものだし、「大阪の宿」は大正十四年の作で、雑誌「女性」に出たのである。

しばらく話がよそへそれるが、元來私はモデルをそのまゝに描く側の作家では無い。自然主義勃興時代から、つい最近迄日本文壇に流行した身邊小說の作家では無い。だが「大阪」と「大阪の宿」にあらはれる場面と人物には、珍しくも實景とモデルが多い。勿論私の遣口で、それを其儘描きはしないし、又架空の人間を創造して、都合よく事件を進展させた。たとへば「大阪」の主要舞臺面の下宿屋は、私が一年間世話になつた家の變形であるが、その中に出て來る人間の半數は、私が勝手にこしらへあげた人格である。

そんなら、當面の問題となつてゐる破れし靴下の新聞記者にモデルがあるか、無いかといふと、あると答へてもいゝし、無いと答へてもいゝのである。

些か說明を加へると、「大阪」の下宿にたづねて來た新聞記者はたつた一人しか無い。しかもそ

れは日暮君が面白をかしくでつちあげたやうな「大阪毎日新聞社」の記者では無い。赤い色の新聞の記者で、おしやれでもなく、みなりのいゝ人でもなく、金廻もよくなさゝうな、五十がらみの、既に人の世に疲れた姿の人であつた。彼の靴下は斷然破れてはゐなかつた。何故ならば、彼は和服を着用してゐたからだ。

その頃、私は新聞の出鱈目の爲に勘當される息子だといふ悪名をうけ、眞赤になつて憤慨し、眞正面から抗議を申込み、自由平等の精神を鼓吹するかに見える新聞が、その實いかに封建的根性を捨てないか、斬捨御免を敢てするかを難じてゐた。折柄此の赤い新聞の記者は、私の下宿に押入り、こつちか話もしない事を書立てたので、私は早速訂正取消を要求した。しかし、殿様主義の新聞といふものは、決して誠意ある取消をするものでは無い。無力なる一小市民の嘆願などは御聽入にはならないのである。此の際私のかんしやくは、小説「大阪」の中にはけ口をみつけ、破れし靴下の記者を描き出した。

何故破れし靴下などゝいふあくどい描寫をしたかといふと、それによつて人間を明瞭ならしめる爲の手段と考へたからだ。當時私はトルストイの小説を耽讀し、彼が或人間を描く場合に、何かの癖をつけ加へて姿をはつきりさせる常套手段を學んだ。破れし靴下の如きも、それと趣を同

じくするひとつの描寫法で、些か類型に過ぎる事を自ら恥ぢながら敢行してしまつた。

そんな風に、新聞記事に對して正義を求め、喧嘩腰になつてゐながら、若しも大阪毎日新聞社が小說を書かせてくれなかつたら、私は大阪で生活する事は出來なかつた。當時は歐洲戰爭の眞最中で、物價は滅茶々々にあがり、月給はあがらず、下宿代はまたゝくひまに三十圓から五十圓になつた。ゐたゝまれなくて轉宿する氣になつた位だ。その苦しい生活を救つてくれたのは「大阪毎日新聞」に連載した小說「日曜」「次の日曜」「大阪」のおかげである。その頃文藝方面の主任者は薄田泣菫氏だつた。往年氏の詩を愛誦したなつかしさと、どうしてもお金の欲い心持とをちやんぽんにして、古びたその社の受附に度々刺を通じた。幸ひにして「醉拂ひの有閑ブルジョアの愚劣なる生活を描いた小說」は、好評を博し、それが緣となつて新聞社の人達ともちかづきとなり、私の宿へ遊びに來る人も多かつた。しかし、それは「大阪」の下宿ではなく「大阪の宿」の方で、その中におしやれで金廻がよくて、大阪一の贅澤洋品店ロンドン屋で買つた絹の靴下の破れたのをはいた人がゐたかどうかは記憶しない。破れし靴下は日暮君の指摘する如く、概念に過ぎないのであつて、特定の人から誘引された描寫では無いのである。

乍然、私の小說が兎角三面記事的事實談のやうに解され易い事は否定出來ない。何故か。描寫

の冴えが眞に徹する爲ならば名譽の事であるが、實は私といふ人間が俗人で、藝術家的氣禀に乏しく、凡庸通俗だからであるらしい。

年少未だ些かは詩情を有した時代の小說は、すべて私の生ひ立ちの記の如く誤認され、中年にして早くも詩心を失ひ、勤人小說を描くにいたるや、すべてが私の勤務する會社內の出來事のやうに誤解された。

先年、矢張大阪時代に「大空の下」と題する小說をかき、盜癖のある給仕をその中に描き出したが、これは私の想像がつくりあげた人物で、私の勤務する會社に、さういふ少年がゐたわけでは無かつた。私の在阪三年間は、上記の通り物價高値の爲、手堅い會社よりもはでな會社を望み、或は工場に行けば高い勞銀が得られるので、給仕は幾人も變つた。年中はなを垂らしてゐることもゝゐたし、ひどく生意氣なのもゐた。しかし、手癖の惡いこどもはゐなかつた。「大空の下」一篇は、全く私の作つた話だつた。

ところが、私が大阪を去り、東京へ歸つて數年の後、大阪のある銀行につとめてゐる人が上京して、あの「大空の下」に出て來る手癖の惡いこどものおやぢが死にましたと話すのである。そのこどもと云ふのは何處にゐるのですときくと、あなたの方の會社をやめてから、私の方の銀行に

來てゐるのですといふ。私は何と返事をしていゝかわからなかつた。小説の中で、私はその手癖の悪い給仕のおやぢを中風症にして置いた。それが長わづらひのあげくに死んだといふのだから、話の辻褄はしつくりあふのであるが、いかにせん一番大切な手癖の悪い給仕なるものが、全然この世の中に存在しない筈なので、何と説明していゝかわからないのである。私はその人にむかつて「大空の下」にはモデルの無い事を確說したが、相手は現にその給仕と同じ銀行で働いてゐるといふのだから、私の言葉を信じるわけが無い。それでは銀行でも時々盜癖をあらはしますかとやけになつて質問したら、幸ひに私どもの方へ來てからは、一度も間違ひはありませんといふ返事だつた。

察するに、その銀行に勤める給仕は、曾て私の勤務先にゐたこどもの一人に違ひ無いのであらう。それが、小說には必ず實在のモデルがゐると考へる近代の讀者の興味から、人々はそのこどもを「大空の下」のわき役者ときめてしまつたのであらう。或はその給仕自身も、そんな小說なんか讀んだ事は無いだらうが、人々がいふ儘に、自分をモデルにした小說があると信じてゐるのかもしれない。拙作を例にとつてゐるので少しく口はゞつたく思はれるが、世間には自分が小說のモデルになる事を喜ぶ人も少なくない。自分を英雄化して喜ぶ心理のあらはれである。犯罪人の

多くは、自分の名が大きい活字で新聞に出る事をほこりとするさうである。〔三十九字略〕新聞種になり度い爲に、有名な人をえらんで肉體を提供する女もあるといふ事である。自分の過去の經歴を話すから、それを小説にしあげてくれといふ人間も少なくない。あたしのロオマンスきつとい丶小説になるわよと、得々として悲壯がり、嘘をまじへて話す藝者や女給は無數であらう。先年或文人が他人の女房といつしよに不自然な死に方をした時、自分もその人と關係があつたとか、あの人は自分におぼしめしがあつたとか云ひ出した女が續々あらはれたさうである。又或小説家が自殺した時、遺書の中に、自分といつしよに死んでもい丶と云つた女人があると書いてあつたところ、それこそは自分の事だと云ふ女が、あちらこちらにあつたさうだ。有名な通俗小説の主人公、女主人公は自分だと名告(なのり)をあげる人は珍しくない。有名で無い「大空の下」と雖も、一人位は物好きな人間があらはれても不思議では無いかもしれない。

又これを一面から見ると、被害妄想症とも解される。日暮君は、たぶん「大阪毎日新聞」か、又はその系統の新聞社につとめる人か、つとめた事のある人であらうが、その社の同僚に、自分は「大阪」の中の破れし靴下の記者その人であると名告る人がゐるのであらう。その人は、恐らくおしやれで金廻がよくて平生絹の靴下を用(もちひ)る人なのであらう。實に面白い人ご丶ろである。戀愛小

說の主人公、あれは自分だと信じる人間がゐる筈である。

なほついでにつけ加へて置くが、私は「大阪」の中で、破れし靴下をひとつの類型描寫の手段としては用ひたが、それを無作法だとか、無禮だとか云つて咎めてはゐない。第一、私自身が常に破れた靴下をはいてゐる組なのである。

被害妄想といへば、最近私が「中央公論」に發表した小說「夏期實習」にも亦、モデルは俺だと名告る人間を見出した。この小說は、私が從來作つた「勤人小說」或は「會社小說」の系列に加はるべきものであるが、一面から見れば主題小說でもある。しかし、どの會社をモデルにするとか、誰をモデルにするとかいふやうな意圖は毛頭無かつた。さういふ意味あひにとられる事を恐れて、いかにして之を避くべきかに心を勞した位だ。私のつかんだ主題は、今日の世の中で保險會社程はげしい競爭をしてゐるものは無く、それが極端にはしり、陋劣なる手段を恥としない狀態にある事を遺憾とし、殊に相互組織と株式組織の優劣を論ずる手前味噌、高配主義と低率保險料主義の手前勝手な宣傳から互につのめだつて誹謗中傷する愚かしさである。ところが、脛に傷持つ連中は、あれは自分の會社の事だ、自分の事だときめてかゝつて、保險新聞に投書し、見當違ひの毒筆を振ふ人間もあらはれた。私は萬一特定の人をモデルにしたと受取られては困ると思つて、

わざと類型的な人間の輪郭に、強てあり得べからざる癖をつけ加へて豫防した。例へば、社長は禿頭白髯といふ概念に、慢性僂痲質斯で足を引擦るといふ特徴をつけ加へ、課長は短軀肥大といふ概念に、破れた管樂器のやうな微震音を伴ふ音聲といふ多くあり得可らざる特徴をつけ加へた。然るに不幸にも、平生最も競爭意識が強く、いかなる手段をもえらばないので有名な會社の社長が禿頭であり、その下に働く課長が短軀肥大の人物なのださうだ。白髯と僂痲質斯、破れた管樂器のやうな微震音を伴ふ音聲の方はどうだか審かで無いが、禿頭と短軀肥大だけで、直に自分の事だときめてしまつたらしい。私の方では、恰も破れし靴下の如く、禿頭と短軀肥大は、容易にその階級を代表する極めて幼稚月並な描法で、この點些か近頃流行のプロ文學派に類する事を恥てゐたのだが、主題小說の常として、簡單明瞭を第一に心がけたのであつた。いたづらなる偶然は、特定の會社に、類型的なる社長と課長を存在せしめたものと見える。尤も平生四方八方から非難攻擊されてゐるうしろめたさが、被害妄想を起させたものかもしれない。短軀肥大の課長の投書に對し、私は直にその誤解をとき、併せてこつちの立場を明かにしようと思ひ、同じ新聞に投書したが、どういふものか掲載されたものは、加筆と省略によつて、私のいひ度い事を盡させてくれなかつた。

彼の自殺した文人達には、美しい女性がひととほりで無い交渉のあつたやうに名告り出たさうだが、私の方は破れし靴下の記者と、手癖の悪い給仕と、禿頭の社長と、短軀肥大の課長だ。いやぢやあありませんか。（昭和五年十一月十日）

――「三田文學」昭和五年十二月號

澤木四方吉氏素描

澤木君は私より一歳の年長者で、私が慶應義塾普通部一年生の時、彼は二年生だつた。澤木君は優等生で、私は落第生だつたから、忽ちのうちに三級違つてしまつた。天性虚弱だつた爲か、その性格の爲か、育ちの爲か、趣味の爲か、多くの學生とは交らず、夙に老成の風があつた。鄕里は秋田縣船川で、土地の豪家の坊ちやんの、しかも末子として我儘に育つたらしい。兄なる人と從兄と彼と、三人が寄宿舍の一室にゐたやうに記憶する。三人とも東北特有の型で、色の白い、額の廣い、弱々しい學生で、いつも絹物を身につけ、板敷の舍室をこゝろよしとしないで、奇麗ならうすべりを敷き、机の上は常に整頓し、凡そ亂雜粗野の風を嫌ふ一族として、他の學生とは著しく異る存在だつた。悪童どもは蔭口をきき「別世界」と呼んだ。同時に澤木君の側では、その悪童共の粗暴、無趣味、低能を悉く輕蔑してゐたに違ひ無い。私は澤木君を「別世界」と嘲り、同時

に澤木君から悉く輕蔑される側の學生だつた。だからお互に顔は知つてゐても、挨拶もしずに十年餘を過した。

私の記憶はたしかで無いが、一生縁もゆかりも無さゝうに思つてゐた澤木君が、突然私をたづねて來たのは、明治四十三年の晩秋の一夜と覺えてゐる。澤木君は既に學校を卒業し、普通部の英語の先生になつてゐた。私はやうやく理財科二年迄こぎつけたが、多く文科の教室へ傍聽に出かけてゐた。恰もその年の新學年から、永井荷風先生や小山内薫先生が文學部の先生となり、五月には「三田文學」が創刊され、三田山上の極めて少數の文學青年に多大の感激を與へた時代だつた。

澤木君來訪の用件は、同君の親友小幡直吉氏の詩集刊行の事であつた。この薄命の詩人は、福澤諭吉先生の女房役として慶應義塾の創設に力を盡した小幡篤次郎先生の令息であつたが、ながく肺を病み、この年の秋死んだのである。はじめて話をしてみて、お互に話が合ひ、夜を更かした。

それがきつかけとなり、間も無く小泉信三、岡田四郎、松本泰三氏を加へた五人が、毎月一回會合して無駄話をする約束をし「例の會」と呼んでゐた。小泉君はその年の春卒業して學校に殘つ

ゐたが、未だ教鞭はとらず、矢張永井小山內兩先生の講義を傍聽する一人だつた。岡田君は卒業して或商店に勤めてゐた。この人はその後川村資郎の名で「三田文學」に小說を發表した事もあるが、今は大阪で商賣人になつてゐる。松本君は文科の學生だつた。

この會合はしばらく續いた。五人を中心とし、その後知合ひになつた久保田万太郎氏を加へたり、永井先生に來て頂いたり、小山內先生を招待したりした。小泉君は勿論野心を持つてゐなかつたらうが、松本君は純然たる作家志望だつたし、澤木君は哲學專攻の筈だつたが、これよりさきに學生の編輯する雜誌にふたつの小說を發表してゐたし、岡田君も充分色氣はあつて、ひそかに試作してゐる樣子だつた。私はこどもの頃から讀む事は好きで、人一倍讀んで居たが、自分で書く事は想像してゐなかつた。ひとつには私の藝術崇拜が自己否定と共に極端に強く、自分なんかに何が出來るものかと云ふ氣分に導いたものらしい。

私は「三田文學」といふ雜誌が出現しなかつたなら、或はその創刊が一二年遲かつたなら、恐らく一生小說作家とはならなかつたであらう。「三田文學」が誕生しても、若し「例の會」が無かつたなら、私は創作の野心を抱かなかつたであらう。殊に「例の會」の人の中でも、澤木君が私を作家たらしめる爲に一番影響のあつた人で、或は澤木君がゐなかつたなら、矢張私は作家にはならな

かつたかもしれないと思ふのである。

その頃澤木君は三田四國町の甲辰館といふ下宿屋にゐた。半分木造洋風の家で、澤木君が占めた一室も、窓は兩方に開く硝子張だつた。窓際に机を据ゑ、金縁の眼鏡の奥で細いちひさい眼をしばだたき、現實に口角泡を飛ばして話す彼であつた。恰も森田草平氏の小說「煤煙」の出た後で、その作品の力強さと、取扱はれた材料が生んだ紛糾せる戀愛問題の興味とが、多くの若者の心に、よくも惡くも何等かの影響を與へた時代だ。澤木君も小幡君も「煤煙」を愛讀し、殊に澤木君はその作風を學ばうと努力してゐた。

「三田文學」第二卷第四號に若樹末郎の名で發表した小說「夏より秋へ」は、明かに「煤煙」に刺戟されて書き始めたもので、再びみたび書直し、又書直すうちに、次第に森田草平氏を離れて澤木氏の持味に移つて行つた。今日にして見れば、極めて感傷的な纖弱な作品であるが、この原稿を讀まされた時の私の感動は非常なものであつた。その頃私などは、小說家といふものは特別の修業をしなければなれないものだと考へてゐたので、吾々の身近にさういふ能力を備へてゐる人間を見出したのは並々ならぬ事だつた。澤木君は名文家で、殊に敍景の筆に長じてゐた。これを永井先生に見て戴く事になり、やがて「三田文學」にあらはれた時は、吾々一同の上に春が來たやう

な喜びだつた。永井先生の批評は、景色は上手にかけてゐるが、人間はいけないといふのであつた。

この小說は、澤木君が一夏を過した溫泉宿の娘に對する思慕の情を描いたもので、娘はその頃は既に他家へ緣づいてゐた。未だ婦女に接した事の無い純情から、その話をする時はほんとに淚を流した。

「夏より秋へ」に刺戟されて、小泉君を除く外の「例の會」の面々は、創作の熱度をたかめた。私もおだてられて、はじめて小說を書く氣になつた。

春の休暇に澤木君といつしよにその溫泉場へ出かけ、互に机を控へて競爭的にかきはじめた。澤木君は、病弱な學生が看護婦に戀する戀愛小說にとりかゝり、私は處女作「山の手の子」をかきはじめた。二人はひとつの室にゐながら、お互の行動を制肘しない約束をし、てんでばらばらの生活をした。澤木君は寢坊で、おまけに床離れが惡いので、いつも私が先に起き、湯に入り、散步して歸つて來ると、やうやく起きる。いつしよに飯を喰ふと、今度は澤木君が散步に出て行く。二人とも机に嚙りついてゐる時は、互に口をきかない事にして十日を過した。

私は「山の手の子」を完成し、澤木君に見て貰つて、大變おだてられた。澤木君の第二作は「夏よ

り秋へ」よりも更にあまくなり、自分も氣に入らず、私も感心出來ないので無遠慮に批評し、結局中途でやめてしまつた。その後、故郷船川に於る幼時の追憶を小説の形式にまとめようとした事もあつたが、これも中途で筆がつかへて、ものにならなかつた。

それつきり澤木君は、小説を書く野心を捨てゝしまつた。根強い精神力を持ち、おのれを信ずる事の厚い人でありながら、他人の言葉をひどく氣にする質だつた。私は澤木君に誘導されて小説を書くやうになつたのであるが、澤木君は私の無遠慮な批評の爲に、小説を書く勇氣を挫かれたのでは無いかと心配した事もあつた。尤も、後になつて考へると、澤木君がいちはやく小説に見切をつけたのは賢明で、ながく未練があつたら、學者として大成するのに邪魔になつたらうと想ふ。

前にも書いた通り、澤木君はこどもの時から、ほかのいたづらつこといつしよに遊ぶ事の出來ない性質だつた。その上、地方の豪家に育ち、且優等生の優越感や、肉體の弱さが、一層孤立させる種となつた。その結果、粗野な人間、頭の惡い奴、うす汚ない奴を嫌ふ事が甚しかつた。さういふ種類の人間が澤木君を批評したり、或は澤木君と違ふ意見を固執したりすると、しんそこから憤り、憎み、唾棄し、輕蔑し、罵倒した。一寸類の無い偏狭な性格だつたが、對人關係に於

る錬磨の無い一方に、全く人擦れのしない正直一圖の心を持ち續けた人である。

甲辰館時代の澤木君は、自分は貴族主義であると云つてゐた。それはニイチェのはげしい強さを要求する心持と、オスカア・ワイルドの唯美主義に傾く心持とのいりまじつたものであらう。ニイチェに就ては「三田文學」に、その「超人と回歸說」を紹介したが、ワイルドの名は屢々彼の口から吾々の耳に入つた。「タアナアが描いてからロンドンの霧は深くなつた」といふやうな巧妙なる逆說を、澤木君は喜んで口にした。

曾てはワアズワアス流の自然詩人でもありたかつた澤木君が、山川の美のつまらなさを說き、すべて人工の美にあらざれば美にあらずとするに到つたのもその頃だ。男も紅白粉をつけて化粧すべきだとか、胸に向日葵の花をさしてロンドンを步いたワイルドの如き美的服裝をしなければいけないとか、かなりの熱情をもつて說いた。季節の變りめに、自ら選んだ着物をほこる事もあつた。玆に於て、根がいたづらつこ畑に育つた吾々は「澤木ワイルド」などとひそかに冷かしたものである。

明治四十五年の夏、澤木君は慶應義塾留學生として獨逸に行つた。專攻科目は審美學の筈だつたが、ミュンヘン滯在中に志をかへて美術史の研究に移つた。

同じ年の秋、私は渡米した。

大正三年戰爭が始まり、獨逸にゐた連中は命からがらロンドンへ逃げ、澤木小泉兩君もその中にゐた。ロンドンと雖も安全では無いからよせと云ふ人々の言葉を振切つて、私も亞米利加に別れを告げた。英京パツディングトン驛に出迎へてくれたのも兩君であつた。

二年の間に澤木君は大變かはつてゐた。質素儉約を旨とする獨逸、統一の力をもつて全世界に冠たらんとする獨逸の旺盛なる意氣は、甚しく澤木君の思想に影響した。男子も粉黛を施すべしと主張し、纎弱の美を專らよろこんだ「澤木ワイルド」ではなくなつて、同時に又日本にゐては、日本特有のヂヤアナリズムから、新奇を尊ぶ傾向に導かれ勝だつたのが、西歐古典藝術の眞髓に觸れ、深い感動を受け、それが全人格に影響した。

その頃日本の畫壇には、佛蘭西印象派の巨匠マネ、モネ等の理論と技法とが日本的の簡便迅速なる流行を見た後で、セザンヌ、ゴツホ、ゴオガン等の畫風が最も新しいものとして一般美術學生の熱情の對象となり始めた頃だ。鈍重な西洋人には思ひも及ばない事だが、これも亦日本人らしい頭のよさで、原畫は見ないでも寫眞版で早わかりにわかり、美術學生も文學書生も、新しい呼吸をした積りの時代である。吾々と雖もその方では人後に落（おち）ず上野の展覽會を見て後期印象派

の理論をあてはめ、あれもこれも古いとけなして憚りない程勇敢だつた。ところが、歐米の美術館で古今の名畫を見るに及び、最新の畫風の面白さも、その理論の必然性も認めはするが、それよりも更に厳として吾々の審美眼を威伏せしめる古典の力にうちのめされた。感激性の強い澤木君が、藝術觀を一變したのも無理は無い。最初のうちこそ町中の畫廊で見る新しい繪畫の紹介や、當今の所謂尖端的な畫論の紹介にも興味を感じたらしいが、間も無く文藝復興期の美術研究に沒頭し、それが一生の仕事になつた。

ロンドンの一年半は、私にとつては樂しかつた。しかし澤木君は英吉利嫌で、始終不平をこぼしてゐた。性格として英吉利嫌だつたらしいが、一般に歐洲大陸へ先に行つた人、殊に獨逸で無遠慮に振舞つて來た人には、ロンドンが窮屈で堪らないらしく、私のやうに亞米利加で輕蔑されてゐた者とは餘程感じが違ふらしかつた。

私は不平をおし殺してしまふ方の質で、粗衣粗食でも我慢の出來る方だが、澤木君には我慢とか辛抱とかいふものがなく、のべつに衣食住の不平を云つてゐた。部屋が寒いとか、食物がまづいとか、下宿の婆さんが不親切だとか、英吉利人て奴はどうして斯う頭が悪いのかとか、數へ切れない事であつた。さういふ不平が旅愁を伴ひ、心寂しくなると私を誘ひに來た。ハイド・パア

クは吾々の最もよき散歩の場所で、カフヱ・ロオヤルは吾々の最もよき休息の場所だつた。このカフヱは佛蘭西式で、曾てはオスカア・ワイルドが毎日ウヰスキイ曹達を浴びながら談話の華を咲かせ、當時はエプスタインを中心とする藝術家が集つてゐた。いつぱいの葡萄酒に白皙の顔を紅く染めて、澤木君は藝術的感激を表白する事に熱中した。不平不滿を忘れ、眼は輝き、唇はうるほひ、つばきを飛ばして語つて盡きなかつた。曾ては情緒豐かなる藝術を喜んだのが、今は立體的な構成力をたくましくしたものを讃へ、ルウベンスよりはレムブラント、シユニツラアよりはトルストイ、メヱテルリンクよりはシヱクスピアを推稱した。

私はウヱスト・ケンシントンの軍人の家にゐた。戰時の事で、主人の少佐は兵營にゐて留守だつた。無闇に家柄をほこる世間知らずの夫人と、三人の娘と、中學に通ふ男の子がゐて、こどもらはいゝ性質だつたが、夫人は家計の不如意から極度のヒステリイを起し、屢々不愉快な事があつた。英吉利人といふものは、少數の偉い人間に萬事を任せ、大多數は自國の強大にうぬぼれてゐて、少しも知識を吸收しないから、餘程間抜なところがある。決して日本人のやうに悧巧ではない。主人の少佐でさへ、日露戰爭で日本が露西亞に勝つたのは、日本の軍艦には英吉利の士官が乘組んでゐて指揮したからだと公言する位時勢遲れだ。三人の娘のうち、一番の姉が尋常な顔

立ちだつたが、澤木君は次の妹の方が活潑で面白いと云つて、その妹に佛蘭西語を習ふ約束をした。三四度通つて來ると夫人はすつかり喜んでしまつて、クリスマスの晩餐に澤木君を招待した。ところが、或日突然澤木君は私へ宛てゝ手紙を寄越し、自分にはお孃さんと云ふものゝお相手は出來ないから語學の稽古はやめると云つて來た。あまり早急で且理由が理由だから、私は夫人や娘に傳へ兼て弱つてしまつた。なんといふ我儘ないひ分だらうと憤慨し、かんしやくを起し「友達なんてうるさいものは無い方がいゝ」と澤木君に書送つた。この手紙には私の心持がはつきり出てゐたと見えて、澤木君は後々迄興味をもつて話題とし、私を批評する時のひとつの材料としてゐた。

だが、間も無く私もトルストイやワイルドの書、英吉利の中流家庭に於ては異端の書と見られてゐるものを讀み、且娘達にも讀ませるのがいけないといふ夫人の抗議を近因として、その家を出てしまつた。

その時澤木君は大英博物館に近い下宿に居た。外に行くところも無いので、私もそこに部屋を求めた。二邊金藏君も小林澄兄君も小泉信三君も泊つた家だ。時にはそれ丈の頭數が揃つた事もあつた。吾々はめいめい勝手な生活をしてゐたが、早く起きた者も寢坊した者も、朝飯がすむと

大英博物館内の圖書館に通つた。勿論安宿の事で、待遇は惡く、或日澤木君は、あまりまづい物を喰はせるので故郷をおもひ、涙がこぼれたと云つた程だ。

その下宿で澤木君は喀血した。朝顔を洗ふ時咳が出て、洗面器の中に吐いたのだ。しかしこれが最初では無く、獨逸にゐる時も同樣の事があつたのだ。私は澤木君の命をうけて、澤木君が獨逸以來の友人理學士木下正雄氏をたづね、その知合の九州醫科大學から留學してゐた小野寺氏に來て貰ふやうに頼んだ。診察後小野寺氏は私を別室に呼んで、澤木君の體質のよくない事を話し、深く注意すべきやう繰返し念を押した。

澤木君はこの事をあまり人には知らせ度がらなかつた。追々恢復期に向ふと、大變人なつつこくなつた。全快の後いつしよに飯を喰ひに行つたりすると、少量の酒に醉ひながら、「大丈夫だよ、君。大丈夫だよ、君。」と決して傳染する程のものではないといふ意味の事をいつて、私に不安をいだかせまいとした。

私はあまり病氣を惧れない方なので、傳染するとも思はなかつたし、又出來る丈そんな心づかひをさせ度ないので、若し吾々の間に獻酬の習慣があつたら、恐らくは彼に盃をさし、返盃をうけて乾したに違ひ無い。

ところが澤木君といふ人は、若しその地位をかへて他人が肺を病んだとしたら、平然としてその人間と食事をともにする事の出來ない性質だつた。おもひやりといふか、同情といふか、或は讓歩か、とにかく相手をいたはる心持は乏しい人であつた。曾て澤木君と私とが或人と會食した事があつた。その人は肺患を經驗したといふ噂のある人だつた。多少失意の境遇にあつたので、吾々と共に食事をする事を非常に喜び、平生たしなまない酒を口にし、吾々に盃をさすのであつた。私はうけて飮んだが、澤木君は拒んだ。このはつきりした態度は私などには眞似が出來ない。一寸つめたい感じもするが、正直のあらはれと見る事も出來る。

春になつたら伊太利に行くといふのは、澤木君の何よりの樂みだつた。戰爭開始の頃、獨逸から眞直に出かける積りで準備してゐたのだ。異國人の多く住むソオホオ・スクエアの伊太利料理店でマカロニを喰べ、キヤンテイを飮みながら、こどものやうに繰返して希望と計畫を語つたが、大正四年の春宿志を達し、私を殘してロンドンを立つた。彼が如何に伊太利で、古典藝術に歡喜したかは、その旅先から郡虎彥君と私へ宛てた手紙にはつきりあらはれてゐた。これは後に「三田文學」に揭出し、更に著書「美術の都」に收錄された。殊にフロレンスに於る感激は、殆ど彼の一生を支配したと云つても差支ない程深いものであつた。「花の都」と題する一文は此間の消息を傳

へるもので、學者であると同時に詩人であつた澤木君の強味と弱味とをひつくるめて湛ふる代表的のかたみである。

その年の秋私は巴里へ行き、其處で又澤木小泉二氏と同じ安ホテルに住んだ。所謂羅典街で、ソルボンヌの教會の前にあつた。既にみんなの歸朝期も迫つてゐた。心のゆるみに旅の疲れもあつて、以前程つめた勉強はしなかつた。よく近所の島崎藤村先生を迎へ、曉方迄ブリツヂをやつた。

翌年澤木君先づ日本へ歸り、つゞいて小泉君も歸り、やがて私も歸朝した。

澤木君は學校で美術史の講座を受持ち、非常なる抱負を持つてゐた。又つぶれかゝつた「三田文學」の主幹として衰運を挽回し、若い學生を導いた。南部井汲三宅宇野小島水木の諸君は當時の學生であるが、澤木君は殊に小島政二郎君の才を愛したやうだ。小島君をして國文學を專攻させ、將來慶應義塾の中心教授として自分の片腕にしたかつたらしい。屢々此の若き學徒の事を語つたが、小島君にとつても澤木君の古典主義はかなり大きい影響を與へたであらう。幸か不幸か小島君は學者としてよりも作家としてこゝろざしを延ばんとし、澤木君の期待に背いてしまつた。自分の思ふまゝにしたい心持の一圖に強い澤木君に、可愛さあまつて憎さが百倍の心持が無かつ

たとはいへないやうである。
ひとり小島君ばかりで無く、この時代に澤木君の敎をうけた人は、いづれも熱情に動かされ、強い感激を分たれ、正しい藝術の理解に導かれたに違ひ無い。澤木君はざらにある學究と異なり、學問藝術に對し、識る事よりも感激する事に全身を打込み、更にその感激を自分の氣に入つた人間に強ゐても同感させようとする傾向があつた。むかしから今に到る迄幾多の人が口と筆で爭つて爭ひやまない古い問題だが、例へば藝術は「形」を重んずべきか「こゝろ」を重んずべきかといふ問に對し、澤木君はヘレニズムの信奉者として當然「形」に重きを置いた。ところが近代の文學美術は、少なくともその騷々しい迄賑かな論評に於て、反對の道を強く主張するものである。均整の美は歪曲の面白さに脅かされ、純粹藝術は宣傳藝術に壓倒されさうになる。古典主義の澤木君がこの傾向を喜ばないのはいふ迄もなく、これを近代民主々義の罪に歸して罵倒するのを屢々聽いたが、恐らく當時の學生は、否といふ字を封じられつゝ、甘んじて傾聽した事であらう。第一期の久保田君や私に對して、新三田派と呼ばれた人々の間から、文學の作品のこころざす可きは其の描寫のうまさであつて取材では無い。文學作品の價値は其の描寫の巧拙によつてのみわかたれるのだといふ極端論が出たが、根源が澤木君の「形」を重んぜよといふ主張に發した事は疑も無

い。

澤木君は又繪畫の鑑賞に於ても若き畫家を啓發した。叮嚀明快な批評は、眞面目な畫家の作品を推稱する時に親切を極めた。

想へば私が歸朝して、はじめて澤木君の高輪泉岳寺近くの家をたづねた頃が、澤木君の一生の最も樂しく生甲斐のある時代だつたらしい。健康も惡くは無かつた。いかに若き學生が素直に自分の指導をうけてゐるか、いかに若き畫家が自分の批評に感謝してゐるか、いかに若き妻が無邪氣であるか、いかに夫を信頼し、いかに純情をもつて盡すか、いかに料理が上手であるか、彼は語つてあきなかつた。ほんとに、澤木君程手ばなしでおのれを語る人は珍らしかつた。正直な性格の發露である。

又澤木君は、将來慶應義塾文學部を自分の理想通りに改革するのだと抱負を語り、且私に勸めて同塾の教師になれと云つた。私は、若しなるならば、これから直ぐに歐洲へ引かへし、みつちり勉強して來なければならないと云つて笑ひ捨てたが、澤木君としては冗談ではなく、自分のこゝろざす改革に手傳はせようとしたものらしい。

間も無く私は勤務先の命令で大阪へ行き、あしかけ三年を過したが、歸來年毎に忙しくなり、

澤木四方吉氏素描

そのうちに澤木君は健康を害して鵠沼に居を移したので、愈々互の足が遠くなつた。時折手紙の往復はあつたが、それも段々怠けて間遠になつた。

震災後鎌倉であひ、お互に無事を喜び、あへばいくらでも話が盡きなかつたが、重ねて逢ふには又時日がたち、澤木君も屢々私の家に來ると豫告しながら、遂に果してくれなかつた。

大正十五年、ひとたびつぶれた「三田文學」再興の計畫が成り、私が代表して澤木君の諒解を求めに行つた。編輯事務を引受けたのは勝本清一郎君で、これも曾ては澤木君の指導の下に美術史を專攻した教子の一人であるが、小島君の場合と同じく、澤木君の期待しない方向に走つてしまつた。

さういふ風に時たま逢ふと、澤木君は非常に喜んだ。喜怒のこりなく色に出る質だつたから、些細な事から人と不和になる事が多かつたが、私とのつきあひは始終變らなかつたと信じてゐる。大變な見當違ひかもしれないが、私自身としては、澤木君を最も喜ばせた友人の一人であり、澤木君に最も信頼された友人の一人であると確信してゐる。吾々の年配になると、若い時とは違つて、友達に逢ひたくて堪らないといふやうな心持は薄くなつて來るのだが、澤木君はつきあひの範圍が狭く、又狷介狭量で自分と違ふ立場の人間を認容しなかつたから、極めて少數の友達しか

ないので、一際私などに逢ひたがる事切なるものがあつたやうだ。それにも拘らず身邊の多忙に紛れ、甚しく疎遠になつてしまつたのは、私の故人に對して心苦しく思ふ次第である。

最近に私が鎌倉に澤木君をたづねたのは、去年の冬から春へ移る頃だつたと思ふ。霜解の道を歩いた記憶がある。澤木君は大變喜んで款待してくれた。健康も稍よい方で、この頃は庭の日だまりで裸體になり、日光浴をしてゐると云つた。そんな事をして風邪を引きはしないかといふと、抵抗療法の效果を說いて健康恢復の自信を示し、恢復後の著述の話や、まだ抱いてゐる學校改革の意見を吐いた。食卓に甘鯛の照燒があり、それをほめたところ、「ね、うまいだらう、うまいだらう」とこどものやうに得意になつた笑顏が、私の澤木君を見た最後の印象となつてしまつた。

その時この分なら新年度からは學校にも休まずに出られるから、東京へ出る機會も多くなる。今度は僕の方から訪問するよといつてゐたが、なかなか實現せず、やうやく夏の終りに近くなつてから、奧さんともども上京訪問すると日取迄きめて來た。こつちも待構へて相客もえらんで置いたが、突然手紙を寄越して、風邪を引いて發熱し行かれぬと斷つて來た。

其の後私は度々鎌倉へ見舞に行く事を考へ、行かなければならないといふ義務感に苦しめられもし、又久保田君とは屢々相携へて行く約束をしながら、これも果さなかつた。澤木君の命がそ

れ程死に迫つてゐるとは思はなかつたのだ。「どちらさまとも御疎遠になりまして」と、棺の前で奥さんにいはれた時、私は申譯の無い心持で參つてしまつた。

奥さんの御話では、自分はからだは弱いが養生はいゝし、年齢も四十を越したのでもう大丈夫だ、水上こそは丈夫にまかせて無理をし、働き過る上に酒を飲むから、きつと自分より先に死ぬに違ひ無いと云つてゐたさうである。（昭和五年十二月四日）

――「三田文學」昭和六年一月號

年末年始

暮は忙しく正月は樂しいものと世間の人のいふ儘にぼんやり幾年か送つて來たが、ほんとに暮の忙しいのはあきんどの家の事で、親代々月給取の家には眞に忙しい暮は無く、その忙しさを切拔けた後の正月の樂しさもありはしない。

私の父は初期の慶應義塾に學んだ合理主義者であり、明治初年の潮に乘つた尖端人であつた爲か、或は生來の無精の爲か、ありきたりの儀禮を守らず、因習に從は無かつた。家には神棚も佛壇も無かつたから神佛を拜む事をせず、盆暮の贈答を好まず、父は年賀狀も出さなかつた。私の記憶では、父は毎朝顏を合せる人間にむかつてお早うといふ聲をかけた事が無く、又いゝお天氣だとか、あいにく雨だとか、時候不順だとかいふ通りいつぺんの挨拶を口にしなかつた。私共きやうだいはのはうづも無く育つた。ほんとに吾々は、父母に對しておじぎもせず、お早うとか、

只今とか、行つて參りますとかいふ挨拶をしないで濟ませた。

父の儀禮嫌は餘程ひどかつたと見えて、先頃その遺稿を整理した時、父が大學南校の教師をしたり、文部省の役人をしてゐた頃、おかみの儀式に參列せず、常に病氣の爲不參の旨を屆出た事が記してあり、その屆書の雛形まで日記の中に書いてゐるのを發見した。

「僕達の無精なのも親讓たから爲方が無いや。」

と吾々兄弟は絶好の避難所を見出した喜びをわかちあつた。

さういふ父の態度に對して、不滿の意を表明しつゞけて來た母は、

「お前達は惡いとこばかり似てゐるんだよ。」

と卽座におつかぶせてしまつた。

さういふ家に育つたものだから、暮だから特別に忙しいといふ事も知らず、正月だから何をするといふ事も無かつた。父は年末年始の儀禮を逃れる心持しか持つてゐなかつたらしく、元日を自宅で迎へた事は無かつた。大概は家族をつれて旅に出てしまつた。その父のおともを窮屈がつて、私は屢々一人居殘つたが、別段ふだんと違ふ着物をきるわけでも無く、ふだんと違ふ禮式もなかつた。たゞ、元日には父のつとめてゐた會社の小使達が集り、臺所の連中が主人役となつて

酒宴があつたゞけだ。

私も一家を構へてから、曾て正月を家で迎へた事が無い。私のつとめてゐる會社は、その仕事の性質上、暮だから特別に忙しいといふ事は無い。勿論事業年度の締切だから、平生よりも仕事の分量の多い事は免れ無いが、商品を賣買する店や、大きな信用取引の決濟をしなくてはならない會社などと違つて、極端な忙しさは無い。それにも拘らず雜用は年の暮にかたまつて來る。その中で一番うるさいのはいろいろの會合と、物品の贈答だ。

私は友達と氣樂に顏を合せる事は好きだが、おつとめの會はつとまらない。それをつとめるのが出世の途であり、世間のあたりまへだと先輩に意見される事もあるが、私はなるべく避けてゐる。だが、避けても避けても避けきれない程各種の會合が年末にかたまつて來る。いつたい世間の人はそれ程迄に宴會が好きなのか、好きでは無いがおつきあひの爲に催すのか、いづれにしても宴會は多過(すぎ)る。

それにもまして私を惱ますものは、年の暮の貰ひ物だ。つとめ先の同僚の申合せは、お互に物品の贈答をしない事になつてゐるのだが、申合せは申合せとして、實行しない人も多いのである。各地方在勤の人からは、各地の名産を送つてくれる。會社に出入の商人からお歳暮が來る。會社

である。しかもその多くはたべものだが、なかなか私の口には入らない。何故か。斷つても斷つても斷り切れない宴會がつゞいて、自宅で飯を喰ふ日が少ないからだ。せつかく土地の名物を喰はせてやらうといふ親切なら、ふだんでもいゝ筈なのだが、それより先に、暮だから何か送らなければならないといふ心持が働くので、斯くは一時に殺到するのだ。私は贈主に對し、お互に物品贈答はやめにしようぢやあないかと申送るのを常としてゐるが、慣習の力は強く、決してきいてくれない。止むを得ず返禮をする。お義理で人に物を送る程面白味の無い事務は無い。手數で、面倒で、時間をとる。いやだいやだと思ふせゐか、大變神經が疲れる。

さういふ習慣の堆積に疲れたからだで、なほ引つゞき正月の儀式に從つては、元氣回復の機會を失ふ惧れがあるから、大晦日には汽車に乘つて東京を離れてしまふに限る。平生用事に追はれ勝で、且身內の者の數が多く、いつなんどき急用が襲つて來るかわからない私には、夜行の汽車の寢臺程安心して眠れるところは無い。人のいやがる車輪の音響も、守唄のやうに睡眠を誘ふのである。

ひととせ岡田三郎助先生に誘はれて京都へ行つた時泊つた宿屋が氣に入つて、折々出かけては

厄介になつてゐるが、今年もそこを休息の場所ときめた。三條大橋西詰の、二階としたと僅かに二組しか客の出來ないちひさい家で、昔は祇園の舞妓だつたと云ふおかみさんと、娘分のおうのはんと、おちよぼが二人の女所帶で、呑氣專一の宿屋である。その下座敷の窓から、東山を眺め加茂川を見て暮すのが私の正月だ。京阪には會社の同僚が多勢ゐるが、私は原則として訪問せず、又訪問される事を喜ばない。せつかくの休みに、煩瑣な會社の事務を談じたり、思ふ儘にならない不平をいひあつたり、なげいたり、やつきになつたりしてはもつたいない。そんな冥利のつきる事は出來ない。

「まあま、あんたはんようおこしやしたなあ。」

甲高で、しかも滑かな京都ことばに迎へられ、直ぐに窓をあけて東山を見た。ちらちら粉雪が降つてゐる。

おかみさんは去年胃癌を患ひ、切開手術をして命を拾つた喜びを、年頭の挨拶から引つゞいて話さないではゐられないのであつた。

「まあ、あんたはん、きいとくれやす。まあ、えらいことで……」

「まあ」と「あんたはん」を連發しながら、ことこまかにきかせる。

年齢がとしだから腹を切つては助かるまいとみんなに云はれ、何處其處へおまゐりしろ、何を飲め、何を喰べろ、土をなめろ、石灰をのめと、いゝ智慧をかしてくれる人ばかりだつたが、結局府立病院の先生に命をおまかせしたところ、幽門をふさいでゐた石がとれ、すつかり健康をとり戻し、只今はこの通りと、忽ち帯を解き、下紐を解き、皺くちやのお腹の傷痕を見せてくれるのである。

むかしの舞妓はんもこの年になつては、いくらあけひろげて見せても別段の興味は感じない。私はそれ程熱心に見たわけではないのだが、おかみさんは頗る滿足して、

「まあ、あんたはん、よう見とくれやした。」

とていねいにお禮をいつた。

お湯に入り、京都風の味噌雜煮を喰べ、近所の都ホテルに前日から來てゐる小泉さんを誘ひ、大阪で島崎眞平さんとおちあひ、花園球場に慶應と京都帝大のラグビイを見に行つた。

花園の蹴球場は、さるやんごとなき御方の御聲がかりで出來たものださうで、生駒山麓の雄大な風景をバックとするものだが、不便で、風當りが強く、感心しない。もつとも、球場の芝生の手入はよく、選手にとつては絶好の球場かも知れない。

寒さにめげず、見物は頗る多く、關西の運動熱の東京以上である事を知つた。金を出して見る以上は俺の勝手だといふやうな上方根性もあるのであらう、個人的彌次が湧起る。

「京大頑張れ。」

と怒鳴るのは學生で、

「慶應、どないした。阿呆。」

と叫ぶのは大衆である。

試合はオープンに終始し、非常に面白かつたが、得點は二十七對六といふ開きを見せて慶應が勝つた。強いといはれた京大の前衛がたゞ押すばかりで、連絡が悪く、弱い弱いといはれた慶應の前衛が存外頑張り、巧妙なるヒイル・アウトで好機をつくり、又屢々鋭く進むドリヴルのうま味を見せた。後衛の力量の相違はいふ迄も無く、殊に京大のフル・バックの拙なさは、試合の興味を損ふものであつた。

中一日置いて、岡田四郎島崎眞平二氏の案内で甲子園球場にベエス・ボオルを見に行つた。音に聞く球場はその廣さと、スタンドの大さに於ては確に誇り得るが、投手板のやけに高く盛上つたのが第一に面白くなく、又廣過る爲に一壘へ暴投すると一擧に三壘迄かけて行かれるやうな馬

鹿々々しい場面を展開する。恐らくは、その儘ホームへ還つてしまふ事さへあるのであらう。

この日の試合は慶應新人對神港商業、慶應新人對和歌山中學で、はじめの試合は慶應に失策續出して神港の勝となり、次の試合は實力の相違で何等の波瀾なく慶應が勝つた。神港の岸本といふ投手が大物の素質を備へてゐるやうに見えた。ベンチには本鄉が控へ、腰本氏はネット裏で一心に記錄をつけながら觀戰してゐた。

見物は多く、さかんに個人的彌次を飛ばし、屠蘇機嫌の喧嘩もあつた。

大阪で飯を喰ふ事になり、何處がいゝかといふから、豫而（かねて）「文藝春秋」で提灯を持ち、小島政二郎氏も激稱してゐた鶴源といふ家を望んだ。小島さんは食味に趣味を持ち、些か獨斷的ではあるがてきはきとよしあしをいふ人で、何處がうまいかときくと、即座に大阪の鶴源と答へるのである。ところが此の日の大阪方の面々は、どうして鶴源なんかをほめるのかわからないといひ、又實際行つて見て感心出來なかつた。みりんの勝つたかんたん明瞭な味が、菊池寛氏の小説に似て非なるものであつた。

次の日は終日雨の加茂川を見て暮らし、夜は島崎さんが白鷹一升と、德島の蛤、土佐の干魚、あひ鴨かしわ、大阪壽司をお重につめて持込み、遲く迄飲んだ。

元日は雪、二日は雨、三日四日は時々小雨、五日の朝になつて始めて快晴の空を見た。

「あんたはん、今年は若葉の頃においでやすな。」

おかみさんは鼻にかゝつた甘つたれ聲で私を誘惑しようとした。

「又來年のお正月來る。」

さういつて私は宿を出た。

京都はいゝ。しかし京都に長く住むのはたいくつであらう。私の如き俗人には、矢張東京の亂雜な生活の中でもがき、一年に一度やうやく惠まれる休日に、暮がうるさいとか、正月が面倒だとかいひながら、京都の靜かな山と水を見に來る方が樂みが深さうだ。(昭和六年一月八日)

——「三田文學」昭和六年二月號

文壇游泳術

「文壇といふ壇は何處にあるんだ」と皮肉を云つた人がある。いつ、誰がいつたのか忘れてしまつたが、相當有名な小說作家だつたと記憶する。實はあの人では無かつたかと名ざし度い人もあるのだが、記憶違ひをあくどく咎められるのは不愉快だから、茲では或人の儘にして置かう。

この皮肉は何を意味するか。文學は個人の仕事であるといふ信念から出た言葉に相違無い。察するに或作家が、時の流行に頓着無くこつこつ仕事をしてゐるか、暫く休息してゐるかの場合に、輕率なる批評家が、例のおきまり文句で「彼も既に文壇から葬られた」とでも批評したのに對する反問であらう。言葉の底に、俺は俺だ、今に見ろといふ意味が含まれてゐる。

文壇といふ壇は何處にあるのか。この質問に對して、大膽に答へれば、文壇は――少なくとも現在日本の文壇は每月發行の雜誌と每日發行の新聞の文藝欄から成立つてゐると云つて差支無い。

今日の日本程、雜誌と新聞が勢力を振ひ、その他の印刷物が無勢力である國は無い。今日の日本程、雜誌と新聞が讀まれ、單行本の讀まれない國は無い。今日の日本程過去の文學を輕蔑し、雜誌と新聞に載る文學をもてはやす國は無い。ヂヤアナリズムは完全に文壇を支配しつゝあるのである。

私のところには始終作家志望の若い人が出入してゐる。その人達は實によく今日の雜誌と新聞の文藝欄を讀み、又實に昨日の文學を讀まない。私は常に過去の文學の模範となるべき物を讀むやうに勸めるのであるが、雜誌と新聞の文藝欄を讀む丈で充分忙しい人達は耳をかさない。圓本が流行した時、こんどこそは讀むだらうと期待したが、矢張讀まない。無理に勸めて讀ませると、過去にすぐれた作品のあつた事をはじめて知り、感服し、嘆息し、悲觀して、あんないゝものを讀まされては當分書けないと云つて後悔し、又しても雜誌と新聞の文藝欄しか讀まない事になる。中には、むかしの作品なんか讀んで感心してゐては、文壇へ出る邪魔になると、はつきりものを云ふ勇敢なのもある位だ。

文壇へ出る——これこそ多くの作家志望者の第一の望で、よき作品を作るといふ事は第二の問題のやうに見受られる。「どうしたら文壇に出られるか」「これからさきはプロ文學でなければ駄

目でせうか」「新興藝術派聯盟に入つた方がとくでせうか」といふやうな文壇處世術、文壇游泳術に就て、多くの若き作家志望者が常に心を腐らせてゐる。かういふ質問に對して、誰が何と答へ得るか。勝手にしろといふほかはない。

もう一度大膽に斷言すれば、現在文壇の特徴は、文學好きでない作者と批評家によつて成立つてゐるともいへるのである。一時代前の作者は、大體に於て自分の好む文學の作品制作に熱情をそゝいだが、今は註文の儘に制作するのが常道となつた。一時代前の批評家は文學好きで、何とかしてよき作者を紹介し度い、よき作品にめぐりあひ度いと念じてゐたやうであるが、今は作品を罵り、けなすばかりでなく、文學そのものを撲滅する事に努力してゐる人もあるやうである。或は、文學美術音樂の如きはブルヂョアの享樂するものであるから、速かに叩きつぶせといふ指令をうけて闘つてゐるのではないかと疑ふ位である。

少なくとも明治年間の作家は、貧苦を覺悟して筆に命を託した。一小説を書いてめしが喰へるか」といふのは輿論であり、常識であり、おやぢをぢさん先生の小言のしろであつたばかりで無く、作家志願の若者自身にも、はつきりわかる眼前の事實だつた。何故喰へなかつたか。文學に對する需要が少なかつたからである。文字を讀む人間が少なく、又儒教の精神から戲作を輕んず

る風があり、知識階級の半分は小說戲曲を無益有害とする程度の知識階級だつた。たとへば、文部省の役人は學生に小說を讀ませる事を好まず、その鼻息をうかゞひ、或はその鑄型にはめて作られた學校の教師は、小說を讀む學生を、女郎買をし、女學生に附文をし、社會主義にかぶれた靑年と同程度に憎んだ。

需要が少ないから、本屋も新聞社も雜誌社も、よき報酬を拂ふわけが無い。殊に著作權の確認されてゐない時代には、作者は僅少の錢を受けて原稿を賣渡し、版を重ねても印稅をとる術も無く、まるまる本屋に儲けられてしまつた。驚く可き事には、今もその頃の約束をたてにとつて、版をかへ版をかへつゝ、作者に御禮をしない老鋪もある。

さういふ時代にあつて、衣食常に足らず、病んで醫藥の代に事を缺く生活をしながら、なほ且文學の爲に一生を捧げて悔まなかつた。勿論名譽心も功名心もあつたであらうが、そんな事よりも、何よりも文學が好きだつたのだ。何處の雜誌社で買つてくれるといふあても無く、こつこつと骨を削り、肉をへらして、こゝろざす道に勵んだのだ。恐らく、當時一流の大家と雖も、後日自分の作品が圓本となり、遺族にたんまり金が入り、競馬のもとでとなり、錦紗縮緬となり、カフエのティップとならうとは夢にも想はず、遺族が路頭に迷ふ事ばかり想ひ惱んだに違ひ無い。

文學では飯は喰へないといふあきらめが、文學でも飯が喰へるといふ觀念にかはり、更に文學程もとで入らずのぼろい商賣は無いといふ嫉妬心をさへ培ふに至つたのは大正時代の事である。歐羅巴の戰爭のおかげで未曾有の好景氣が來た。出版も大量生產になり、雜誌の部數は激增し、人氣作者は引張凧で、雜誌新聞の編輯部員は、流行作家の仕事部屋――書齋の事もあり、待合の事もあり、妾宅の事もある――のお次に控へて、一枚二枚出來るのを待つて印刷所にかけて行くといふ景色になつた。〆切期日を守らず、紺屋の明後日のやうに嘘をつくのが流行兒の見榮になつた。需要者が引張合ふので、供給者は値段をせり上る。昔は錢の事を口にするのをいさぎよしとせず、稿料は向ふまかせがあたりまへだつたが、互にそろばんを彈きあひ、四百字詰の原稿紙一枚が十圓二十圓五十圓百圓に迄なつたときく。最もぜいたくなくらしをするのは文士だといふゴシツプさへ、かなり廣く信じられた。

そんなに儲かる商賣なら、俺もならうわれもならうで、おやぢをぢさん先生も反對しない仕事となつたが、そのかはり、いゝ作品を書かうとする心がけよりも、どうしたら儲かるかといふこゝろざしの方が強く働き勝になる。

一生懸命に書いても、何等の報酬が無いといふのはあまりに酷い。原稿を書けば賣れるといふ

のはいゝ事に違ひ無いが、それはひとつのおとし穴でもある。うつかりすると、何を書いても賣れる、いゝ惡いは二の次だといふ誘惑に陷り易い。身邊雜記小說、心境小說の流行は、多少その邊の消息を語るものでは無いだらうか。それは日本人の細かい情緒のあらはれであり、歌俳諧の心のゆくところ迄行きついた徹底した味ひでもある。寂を喜び、極めて微妙な靜けさの中に詩境を見出す國民性のあらはれでもある。しかし、同時にそれが、構成的努力を要せず、綿密なる描寫を必要とせず、適確なる表現を要さない手輕さから脈を引いた流行である事も疑ない。一夜にして一作を成し、容易に小錢をつかむ事は、我國の藝術家に惠まれた生活樣式である。

しかし、或る傾向を代表する一群の作者が、集團として長く人氣をつなぐ事はあり得べからざる事である。殊に新聞と雜誌の文藝欄から文壇が成立つ時、有爲轉變は極めて急速である。この場合、新聞的價値の豐富な事が何より歡迎されるのであるから、年月をかけて基礎工事をし、どつしりとした完成品を待つのは馬鹿々々しくなる。レヴュウの場面展開の如く、目新しく廻轉する事が望まれる。同時に、或時期の流行を目がけて粗製濫造する制作者側の態度は、忽ち供給過剩を招き、その一群に屬する亞流の徒――豫備軍を夥しくするのは必然である。結局或時期に於て榮えたる一群の中の僅少の人數を記憶に止めるのみで、その一黨のかげは薄くなつてしまふ。

この際殘る僅かの人は、最も腕節の強い、個人としての値うちの充分あるものに限られる。

この經過は事實が證明し、且常に繰返されてゆく。硯友社の一群は自然派の一群に市場を奪はれ、自然派は一時壓倒的に文壇を壟斷したが、夥しい亞流の徒の出現の末に、數名の代表作家を殘して崩壞の途は急傾斜した。

近時、旣成作家は沒落しプロ派が文壇を乘取つたといふ威勢のいゝかけ聲を聽く。文壇が新聞と雜誌によつて形成されてゐる限りに於ては、五十パアセント位眞實である。少なくとも其の頭數と紙面を占めた量に於て疑ふ餘地が無い。プロ文學の主張も、自然派擡頭時と同樣、各態各樣である。しかし大別して、プロレタリア社會運動のお役に立つ爲のプロ文學と、プロレタリア自身がプロレタリアの意識を持つて制作するプロ文學とに分つ事が出來る。吾々のやうに人間活動のひとつの領域として文學を他の活動から切離して考へ得るものは、前者の功利主義を喜ばないのであるが、現下の狀勢を以てすれば、宣傳文學の方が時を得てゐるやうである。いかに月々の雜誌に、貧弱なる材料の寄せ集めから成る現實感の少しも無い上すべりのした爭議小說があらはれるか。社長はでぶで、監督は助平で、職工は正義の權化で、女工は可憐で勇敢で、兒戲に類するレポが飛び、革命歌のきれつ端が高唱され、老父老母は病床に臥し、女房は淫賣になり、子供

は饑餓に泣く。雜誌が屆く。封を切る。大雜誌と小雜誌の區別無く、かういふ種類の小説が幅をとつてゐる事、恰も大通を歩いて朦朧自動車にゆきあふ如くである。又かと思ふ。誰がこんな小説を讀むのかと疑ふのだが、その道の人の話によれば、爭議小説を喜ぶのは、ルンペン・インテリ階級ださうである。彼等は、消防出初式の日の模型火事を見るやうに、無責任な好奇心を滿足させてゐるのださうだ。

勞働爭議は現代に於る重大なる社會問題のひとつのあらはれであるから、小説の主題として適當なものである事は疑も無い。だが、かう迄如實感の乏しいやつが、わんさとあらはれてはたまつたものでは無い。社會意識を充分に持つ小説の出現は歡迎すべきだが、すべて社長と監督には馬鹿野郎といふ代名詞がつき、女工には特に女工さんと地の文の中でもさんをつけるやうなおべつかつかひのプロ文學は恥辱である。

さういふ風に型にはまつた作品は、忽ちにして倦怠を催させる。宜なるかな、新聞と雜誌の文藝欄から成立つ文壇は、總括して新興藝術派と呼ばれる一群によつて半分の天下を占められた。この派の主張も各人各樣であるが、大ざつぱにいへば、プロ文學が共產黨の爲の文學であるに對し、これは文學活動を切離して、その純粹性を尊ぶものゝやうである。文學の獨自性を認める點

に於て藝術至上主義とも見らるゝもので、よく理解されるならば功利的文學よりも勝れたる作品を生む誘引となるに違ひ無い。

けれども、實際の作品にぶつかつて見ると、この派に附隨し易い頽廢的氣分、享樂的氣分が度を過し、淺草のレヴュウの臺本のやうなのが大量に生産されてゐるのを知る。カフヱとダンス・ホオルとアパアトメントと甘い飲物とチヨコレヱトとベツドといつた大道具小道具を取揃へ、未亡人と不良マダムとダンサアと女給とモガとモボが、いづれも舌たらずの名前か、ロシア人の名前をつけられて登場し、あぶらでいためた五目飯のやうに濁つた色彩が入り亂れ、結局入り亂れたまゝでおしまひになる。その間機會のある毎にズロオスといふものに言及し、燐寸(マッチ)の箱に貼りつけた祕畫の程度のエロテイシズムで味をつける。雜誌が來る。封を切る。チヤ子ヘソ子ワン吉ピン太郎のともがらに出つくはすと、又かと思つて氣が腐る。新興藝術派にも既に豫備軍は編成されたのか。亞流の徒がぼうふらのやうに湧いたのか。實際湧くと形容する外にいひあらはし方が無い位、大雜誌にも小雜誌にも、チヤ子ヘソ子のともがらが跳躍してゐるのである。

かういふめまぐるしいうつりかはりには、百貨店のショオ・ウインドウをのぞき見る面白さはある。しかし、その硝子窓の中の品物のひとつひとつを手に取つて見る興味は無い。

だから「早く文壇に出るにはどうしたらいゝでせう」といふ人に對しては、その日の新聞の文藝欄を一番多く埋めてゐる傾向の文學に走れと云はう。それが文壇處世術である。しかし、間もなくぼうふらが湧き、その人は更に新しい流行の爲に脅かされるに違ひ無い。その時はその時で、又轉換すればいゝ。それが文壇游泳術だ。泳げ泳げ、一人で歩くよりも多勢で泳ぐ方が寂しくなくていゝであらう。

今や時を得つゝある共産黨は個人の問題を蹴飛ばす。今日程個性の輕蔑された事は無い。文壇に於ても共同制作の提唱から、やがては個人作家の署名を廢し、その黨派の作品として世に問ふ新しがり迄理論は延長する事が出來る。しかし、二人若くはそれ以上の人間の心が、感覺が、ぴつたりとひとつになり切れるものか。又、個々の異なる思想感情官能を文字に表現し、それをつなぎ合せてちぐはぐのをかしさは無いものか。いづれの場合にしても、その中心となる個性はあるに違ひ無い。それが偉ければすぐれ、それが下らなければ劣るであらう。一木一草を描くにも、ほんとに見たまゝ感じたまゝを、互に譲らずおべつかをつかはずに描くならば、千人が千人異なる線を以て、色彩を以て、文字を以て表現するに違ひ無い。

その千態萬樣の表現のどれが眞實であるか、どれが價値が高いかは勿論問題になる。恐らく之

を判定する人々の間に意見の全き一致を見出す事は困難であらう。尤も批評の場合は創作の場合程個々に異なる事はあるまいが、しかし同じくよしとするものも、そのよしとする理由、よしとする程度は違ふ筈だ。藝術の評價は、結局主觀によつて定める外に方法が無い。だが、どれにも高下をつける事が出來ないかといふと、吾々の審美的努力は、ある點迄これを決定する。しかし、科學的正確さをもつて決定する事は出來ない。私は、藝術批評の方法として、科學的と呼ばれるのは、卽興的印象批評に對して、體系をたてた批評方法を便宜上呼稱するに過ぎないと考へる。藝術作品の評價にあたつて、數學的に正確な値踏をしようとするのは無理だ。さういふ遊戲を好むものは、不老不死の藥を求めるやうに求めるがいゝ。文學好きの文學制作者は、おのれのよしとする道を歩く外に方法が無い。「どうしたら早く文壇に出られるか」といふ質問に對しては、今日の新聞を讀んで身のふり方をきめろと答へればいゝ。「どうしたらいゝ作品が出來るか」といふ質問こそ、更に一層答に窮する事なのだが、それはあまり人々の心を煩はしてはゐないらしい。文壇は忙しい。泳げ、泳げ。（昭和六年二月六日）

——「三田文學」昭和六年三月號

就職難

この間あるところで××新聞社の人にあつた時、ある大學を今年卒業する學生で、同社に入社したがつてゐる人物があるからよろしく御骨折を願ひますと頼んだ。その人は早速手帳をだして學生の名前を書留め、

「あなたもちつと何か書いてくれませんか。」

と隙間も與へずに水を向けた。こつちは學生の賣込に夢中になつてゐる折柄だ、いやとはいへないので、

「書きませう。しかし、どんな事を書いたらいゝのですか。」

といふと、

「就職の事について何か。」

といふ註文だつた。一瞬間の話合ひだつたが、私はことごとく感服してしまつた。何といふ素早い取引だらう。手帳をだして學生の名前を書きながら、直ぐに原稿の話に移り、しかもこつちから持つて行つた就職を課題にした頭腦の働き、これでこそ大新聞の幹部なのだ、すごい／＼と舌をまいた。全くその時は一藝に秀でた人の演技を見せられた時と同じ感激を受けた。

無論私といへども××新聞社のやうな多數の人間が入りたがつてゐるところでは、嚴重な試驗が行はれ、實力の競爭で採否が決定せられる事は知つてゐる。社長に賴まうが、編輯長にお願ひしようが、部長にすがらうがどうにもならないに違ひ無いと思はないでは無い。しかし、かねがねその學生の熱心な希望に同情し、どうかして望みをかなへさせてやりたいと切に願つてゐたものだから、溺るゝ者は藁でもつかむ心持になつてゐたのだ。

私は元來新聞に寄稿する事を好まない。ごたごたした紙面に誤植だらけで組込まれ、ピリオドやコムマは勝手にとりのけられてしまふ虐待を忍ぶのは愉快でない。よせばよかつた、御願ひだけにして置けばよかつたと後悔したが追つかない。次の日は係の記者がやつてくるといふ。忙しいから用件は手紙か電話にしてくれといふと、この間御約束の原稿は、一日分を四百字詰の原稿紙四枚として三日間連載の事にしたいと矢つぎばやに押して來て、ひとたまりも無く寄切られて

しまつた。
さて何を書かうか、何も書く事は無いぢやあないかと、すこやけで原稿紙とにらめつこをして數日を過した所へ、何も知らずに當の學生が訪ねて來て、××新聞社の採用筆記試驗が日比谷の公會堂で行はれ、定員數人のところへ約千人押かけたといふ話をした。成績はいまだ發表されないが、自分では滿點のつもりですと、甚だ自信のある様子なので、私も大いに喜んだ。
この學生は政治科に籍を置き、學績優等、文學的天分に惠まれ、おまけに事務的才能を有し、眉目秀麗かつすこぶるの元氣者で、新聞記者にはもつてこいの人間なのだ。あんまりほめては仲人口になつて、知らない人には却て眞實性を失ふかも知れないから、強ひて難を探して見よう。彼は少し身體がきやしやかもしれない。少し元氣があり過ぎるかも知れない。少し文學がわかり過ぎるかも知れない。少し眉目秀麗過ぎるかも知れない。これ以上缺點として數へる事は困難である。兎に角、彼は新聞記者を終生の目的とし、自分の才能を充分發揮するところは新聞社の外には無いと確信してゐて、私もこの人なら役に立つ、責任をもつて推薦する事が出來ると思つてゐるのだ。
人間が右の通りで、試驗はうまく行つたといふのだから、まづ大丈夫、××新聞もいゝ記者を

つかまへたなと密に慶賀するものの、就職試驗の實際を知つてゐる私には、少なからぬ不安もわいてくる。何といつても試驗は運だ。いくら人間が確りしてゐても、いくら答案をうまく書いても、試驗委員の氣にいらなければそれまでだ。採ると採らないは試驗委員の主觀によつて決定される。こいつ虫か好かないぞと思はれたらそれつきりだ。私は自分自身試驗委員をつとめる經驗から、次第に不安を增して來た。

人口の過剩と國土の狹さは今日の就職難の根本原因と見られるが、その上に當面の不景氣は、職を求める人間は押合へしあつてゐるのに、人を求める職は何にも無いといふ實狀をさらけだした。拂込金額以上の株價を保つ會社は數へる程しか無いといふ現狀で、どうして新規の人間を雇ふものか。どこの會社でも、相手が愚圖愚圖いはなければ、幾人でも首をきりたいところだ。そこへもつて來て、狹い國土に高等學校と大學をやたらに作り、每年春先に產出する學士の數はおびたゞしいので、萬一景氣が直つても、みんながみんな學校を出ると直に職にありつく事などは思ひも及ばない。

殊に近頃著るしい現象は、教育程度の高いもの程就職難がはげしい事だ。昔こそ大學の卒業生は羽が生えて飛んだが、今は世間一般の知識程度が高まり、銀行會社の日常の仕事に大學卒業生

を煩はす必要がなくなつた。そろばんは彈けず、候文は書けず、客扱ひが下手で、頭が高く、月給が高いと來てはとりえが無い。そんなのよりも、もつと年齢が若くて素直で使ひよい商業學校出の方が歡迎される筈だ。それにも拘らず、いまだに大學を就職資格を得る場所だと考へて通學する者の多いのは時代錯誤も甚だしい。もういゝ加減に、大學は學問をするところで、月給取の資格證明所では無いといふ事をはつきりさせたいものである。

こゝに面白いと思ふのは、目下しきりに新聞紙面を賑はしてゐる慶應義塾高等部改革問題だ。つまんでいふと、同塾の高等部といふのは中學卒業後四年間を費したが、それでは大學と大差が無く、特色が薄いから、これを三年に短縮し、若くして世に出られるやうにしようといふのだ。三年學ぶのと四年學ぶのでは四年の方が學識を深めると考へるのが常識だらうが、もし當面の問題の就職にこれを限つて見るならば、この改革案は世間の實際に照して歡迎さるべきものである。先頃ある會合の席上、實業界のお歴々の意見を求めてみたら、いづれも改革に贊成で、六年間を要する大學出よりも、その半分の年限で卒業する高等部の方が賣口がよくなりはしないだらうかといふ豫想だつた。

ところが、現在四年制度で就學してゐる學生は同盟休校をして反對してゐる。いろ〳〵の反對

理由が擧げられてゐるが、年限短縮のために學校の格が下り、就職初任給が低下する事を恐れるのもその一つだといふ事である。成程初任給は下るかもしれないが、一年早く職につくのだから、世間普通の例により、その間に一回昇給する事も想像出來る。又、就職戰線において大學出が嫌はれてゐる現在の情勢では、一年でも大學と遠ざかる方が就職率はよくなると見て差支ない。冷靜に考へると、改革案によつて脅かされるのは高等部では無くて、大學部かもしれないのである。それ程大學生は、彼等が希望してゐる就職先から荷厄介にされてゐる。方々の會社の重役や支配人は、

「今年は幾人位採用なさいますか。」

ときくと、

「この不景氣ですから、一人もとらないつもりです。もつとも大學出でなければ少しはとりますよ。」

と答へるのである。

さういふ風に道がふさがれ勝なので、目ぼしい銀行、會社へ就職希望を申しいれる人數は大變だ。何等の制限をせずに新社員を採用すると宣言すると各學校からの希望者は忽ち數百人に及ぶ

であらう。私はこのところ約十二年、勤務先の社員採用銓衡員として心苦しい選抜を行つてゐるが、一度や二度の面會で、數百人の中から僅に十名内外を選ぶ事は、時間と勞力に比べて效果が疑はしいので、大體學校側に責任をもつてもらつて先方でこの人がいゝといへば、それを信じて採る事にきめてゐる。但し私自身の好みとしては、身體強健學術優等はいふまでもないが、それ以上に、のびやかな感じで且おめずおくせず口のきける人がいい。その意味で、大體運動選手は諸方で歡迎されるのが當然で、有名な選手を引つ張ダコにするのは、必ずしもマネキン・ボオイとして使はうといふ下心ばかりでは無いやうだ。

私は人を試すのは不愉快だから、就職希望者との面會の際も、あまりいろんな質問はしない。四五分で會見を終つてしまふ。それでは勤務先に對しても、就職希望者に對しても不親切ではないかといふ非難が出さうだが、大體學校の意向は確めてあるのだし、又どんなメンタルテストをしたら人物のいゝ悪いがわかるのだ。試みに諸銀行會社の例を訊いてみると、千態萬様で、どれにも一理窟あるが、同時にどれも感心出來ない。

重役以下多勢が威儀をたゞしてゐるところへ、一人づつ呼だして、いろいろ質問する遣り口もある。これは衆議にはかつて決定するといふ美名の下に、寄つてたかつておもちやにする弊害が

ある。第一、一番勢力のある重役の好みに反して、自説を主張する勇氣のある下役がゐるだらうか。反對しないまでも、重役平素の性癖におもねる選び方をするであらう。又、社員の採用は重要事であるから、下役などには任して置けない、自分でやるといふ社長もある。まことに責任をおもふけなげな精神であるが、そんならどんな質問をするのだらう。

先年、船成金と稱されたある船會社の社長は、候補者を眼の前に呼出し、事細かにメンタルテストを行つたさうだが、社長と學生との年齢も思想も學問もあまりにへだたりがあり過ぎて、學生には社長の質問の眞意が飲み込めず、社長には學生のいふ事がわからないで、甚だトンチンカンだつたさうである。

殊にひとつの笑話として語り傳へるのは、父親と母親とのどちらに深い恩を受けたと思ふかといふ質問だ。學生は、社長の年齢から推して、男尊女卑の甚だしいものに違ひ無からうと考へ、異口同音に、

「父親の方に一層深い恩をうけてゐます。」

と答へたさうだ。

「馬鹿な事をいふな。君はお母さんのお腹から生れて來たのではないか。」

社長は苦り切つて、眼前の學生の愚さを叱つた。

そんな馬鹿な話があるものかといふだらうが、ウソのやうな眞實(ほんと)の話なのだと、その社長の身邊に使はれた事のある人が語つた。

これは少々極端だが、メンタルテストなるものは凡そこの種のものと思つて差支ない。ほとんどすべて、試驗をする方の勝手な心持で可否は決定されるのだ。たとへば候補者のたれしも訊かれる質問に下のやうなのがある。

「君はどういふ理由でこの會社を志望したか。」

そこで學生の多くは、その會社の有名な事だの、社長の人格だの、仕事が自分の性質に適してゐるといふ事についてあらん限りの辯舌を振ふとする。それをよしとする判定者もあるであらう。知りもしない癖におべつかをつかふなと怒鳴りたくなる判定者もあるであらう。

それなら、他の一人の候補者が、

「別段の理由はありませぬが、こちらで人を採るときゝましたから來ました。」

と答へたとする。正直でいゝといふ人もあるであらう。そんな氣の利かない返事をする奴は落第だときめてしまふ人もあるであらう。要するに試驗をする者の心々できまるのだ、だから私は

試験らしい試験をしない。

ところが、かねて就職の際の面會には、いろんな質問をされるぞと先輩から聞き傳へてゐる學生は、さつさと濟んでしまふ私との面會に不安を抱くらしい。中には、自分は第一印象で落第ときめられたため試験をされないのでは無いかと心配する人もある。

これ程賴りない採用試験なのだから、私は多年その時期になるのをおそれて居る。いかに學校の意見を主として考査するとはいへ、私のめはしのきかないために、素晴しい人物をとり逃がしてゐるに違ひ無いのだ。それを思ふと曾て面會してかつ不採用となつた人にはめぐりあひたくない。せめて願ふのはその人達がどこかで立身出世してゐる事である。

氣の進まない原稿をこゝまで書いて來た折柄、××新聞社に一生を捧げたいと熱望して採用試験をうけた學績優等にして文學的天分に惠まれ、おまけに事務的才能を有し、眉目秀麗かつ元氣者で、新聞記者にはもつてこいの學生から手紙が來た、いはく「××新聞の方は落第しました。」

(昭和六年二月八日)

――「東京朝日新聞」昭和六年二月十三日・十四日・十六日

宇野四郎氏を憶ふ

「三田文學」の同人も、新顔が殖える一方に、古い方が缺けてゆく。久米秀治氏が死に、井川滋氏が死に、澤木四方吉氏が死に、宇野四郎氏が死んだ。

去年十一月澤木氏が死に、その告別式の日に、私は宇野さんをつかまへ、澤木氏の追悼文を「三田文學」に寄稿してくれるやうに賴んだ。宇野さんはこゝろよく引受けたが、結局書いてはくれなかつた。その宇野さんの追憶を吾々が書かなければならなくなつた。

その後、十二月十日に宇野さんは拙宅へ見えた。私のうちでは、大正十五年「三田文學」復活以來、毎月第二水曜日を同人の集まる日と定め、宇野さんも時々來ては元氣よく談笑した。しかし、十二月の時は顔色が悪く、膽石を患つた後で食餌に注意を加へてゐると云ふ話をした。それでも、いつものやうに元氣よく、高調子で、相手をきめつけるやうな話振だつた。たまたま一座の年長

の人達が、久米井川澤木三氏の次は誰の番だらうと、いはないでもいゝ事をいひ合つた時、宇野さんもともども或一人を名ざして「おい、こんどはお前の番だぞ」とからかつた。神經質の相手がいやな顏をしてゐるのには氣がつかず、獨特の朗かな聲で笑つた。

だが、みんなの歸つた後で、うちのものは宇野さんの血色甚だ冴えず、全身に力の缺けてゐる事をしきりに氣にしてゐた。それが宇野さんと私との最後の會見だつた

十二月下旬から一歳違ひの從兄が急性腎臟炎で入院し、重態に陷り、正月十三日に、七十四歳の母親と、産後の妻と、八人の子供を殘して死んだ。病中から葬儀にかけて私も忙しく、告別式を濟ませると、がつかりした身心の疲に乘じた流行の風邪に襲はれた。いつもの手で、ウイスキイを飮んでみたり、梅酒を飮んでみたが、しつつこく咳が出、耳が痛み、鼻がつまり、凡一箇月を不快に送つた。その間に、宇野さんが腸窒扶斯で鎌倉病院に入院した噂をきいた。私も十七八の頃同病で、夏中その病院に收容されてゐた事があるが、此の頃は醫療益々進步し、窒扶斯で死ぬ者は極めて少ないときいてゐたので、萬一の事があらうとは想はなかつた。快方に向つた頃見舞に行き、あの朗な笑聲を聞かうと思つてゐた。曾て自分が世話になり、無事に退院した病院だといふ事にも信賴してゐたのだ。

二月のはじめに、和木清三郎氏から、宇野さんの容體がよくないさうだといふしらせを受け、私は次の日曜日には必ず見舞に行くと斷言して電話を切つたが、その翌日又和木さんから電話がかゝり、宇野さんは峠を越しておちついたさうだから安心しろといふ知らせがあつた。日曜日はひどい風で、又發熱しさうな豫感があり、寒氣がするので、申譯の無い氣はしたが、終日籠居し、遂に鎌倉には行かなかつた。その夜中から大雪になり、隙もる風はことのほか冷めたかつたが、曉方宇野さんは死んだのである。

宇野さんが慶應義塾に入つたのは、私がその學校を卒業した直後で、且私は間も無く外國へ行き數年を費したので、學生時代の宇野さんを少しも知らない。又宇野さんが卒業した年の秋、私は勤務先の命令で大阪へ赴任し、足かけ三年間えげつない都に住んだ。だから、私が宇野さんを知つたのは、その人よりもその作品の方が先だつた。とはいへ、假に私が大阪から歸つて來て間も無くのつきあひとして、既に十二三年にはなる筈だから、古い馴染の一人には違ひ無い。

その癖、私は宇野さんと二人きりで、長く對座した事は一度も無く、しみじみ話をした事も一度も無い。年齢の相違はあるが、私は宇野さんの正義感、宇野さんのかんしやくの起し方、宇野さんの公憤を發した時のはつきりしたものゝいひ方などに、始終同感を持つてゐた。山の手の子

として受けた家庭の教育に、一脈相通じるところがあつたのでは無いかと思ふ。それにもかゝはらず、私は宇野さんと心を開いて話をした事が無い。

「三田文學」は明治四十三年の創刊で、その翌年に同誌によつて紹介された久保田万太郎氏と私とを一番の古顔とし、それから暫く中が絶えて、五六年經過した後、一時に秀才を輩出した。宇野四郎南部修太郎井汲清治三宅周太郎小島政二郎水木京太の諸氏がはなばなしく世の中へ打つて出で、自分達がいひはじめたのか、世間でいひはやしたのか、一般に新三田派と呼んだ。假にこゝにあげた六人の中で、宇野さんが一番早く文學的活動を始めたやうに聞いてゐる。私は見た事も無いのだが、「とりで」といふ雜誌に、伊豆四郎の筆名で何かを書いたり、その「とりで」の同人は、帝國ホテルで芝居をしたりしたさうで、果して宇野さんがその仲間のどういふ役割を演じたのか知らないが、「とりで」の伊豆四郎として、早くから人に知られてゐたらしい。それは宇野さんが慶應義塾大學部豫科時代の事に違ひ無い。博覽強記の久保田さんは、「とりで」の伊豆四郎なるものがいかなる文學青年であつたかを、屢々酒席で公表して、宇野さんをいやがらせた。

人々の傳ふるところに據れば「とりで」の伊豆四郎は、一寸氣障に思はれる位の文學青年だつたらしい。

さういふ風に傳へきいてゐた宇野さんが、帝國劇場株式會社に入社した事は、吾々を驚かした。これよりさき、久保田さんと同級の久米秀治氏が帝劇に入つてゐたが、久米さんは實にいゝ人で、或はあまりにいゝ人過ぎて、全然芝居のわからない人だつた。そのかはり、帝國劇場株式會社の事務員として、頗る適材だつた。然るに宇野さんは生一本の文學青年だ。藝術至上主義者だ。それが營利本位の劇場に入つてどうして勤まるか、眞向から新しがつた意見を持出して縮尻(しくじ)つてしまひはしないだらうか——それが不安だつた。

ところが、其後劇場であつて見ると、宇野さんは始終目尻に微笑を湛へ、腰は低く、愛想がよく、決して異説を唱へない。時にはあまりに在來の芝居者じみた口もきくのであつた。それが私にはほんとの宇野さんで無いやうに思はれた。この、ほんとで無いと云ふ感じを、私は最後迄消す事が出來なかつた。

幸ひにして私の杞憂は事實を以て打破られ、宇野さんは先輩久米さんと共に、帝國劇場株式會社專務取締役山本久三郎氏の信任を得て、段々重く用ひられるやうになつた。茲で一言したいのは、山本さんといふ人は人一倍熱情家で、まごゝろを以て人を使ふ親分肌の人と見え、死んだ久米さんでも宇野さんでも、小屋貸業となり果てた今の帝國劇場に踏みとゞまつてゐる荻野忠治郎

さんでも、みんながこの人の爲ならどんな事でも忍ぶといふ心持をいだいてゐた事だ。荻野さんの如きは、山本さんが死ねと云つたら死に兼ない位盡してゐる。

扨て、うまくゆくまいと思つたお勤の方は、とんとん拍子に行つたが、うまくゆくだらうと思つた文學的活動は、遂に充分に伸びる時を得ないで終つた。宇野さんには、小說戲曲演劇評論の創作があり、戲曲の中には上演されたものもあるが、それらの分野のどの方面でも、あの人が持つてゐた丈の力を出してゐない。たゞ一つすぐれたものと思ふのは、大正八年の八月から數箇月に亙つて「三田文學」に連載した小說「正義派と大野」である。これは、お茶の水の高等師範附屬中學に通つた時代の宇野さんの自傳とも見る可きものであるが、つとめて客觀的描寫法に據つて書いてある。この一文を草するにあたつて、再び讀んでみたが、今も尙新鮮感を失はず、私は深い感動を受けた。

こゝに正義派といふのは勿論嘲笑を含んだ稱呼で、何處の學校にもある一部のものが、正義に名をかりて團結し、正當の理由も無く暴力を以て制裁を加へる一群の事で、之に對抗する大野は勿論宇野さん自身である。不義卑劣を憎む熱情家にとつて、正義派の存在は一大事件に違ひ無い。フツト・ボオルの練習をし、模擬戰の勝敗を一生懸命に爭ふ中學生が、正義派の横暴と其背後に

在る官立學校型の教師に對し、根強く抗爭し、遂には暴に酬ゆるに暴を以てし、全校の學生の大半が團結して逆に正義派に制裁を加へ、解散させる事件を描いたものだ。各場面の描寫はいきいきと、明るく朗かに、情熱をもつて描かれ、正義派に對抗する大野とその同志のほんとの正義感、なぐられても脅かされても屈せず、百千萬と雖もわれゆかんと云ふ精神は、潑剌として躍動してゐる。無理に難をいへば、事件の展開が進めば進む程、中心主題が弱くなり、集中力を缺く點にあるが、兎に角宇野さん一生の傑作であり、又當時の文壇の水準を遙かに拔いた作品であつた。小說家としての宇野さんははつきり手腕を示し、廣く世間の好評を博し、忽ちにして他の雜誌から寄稿を求められるに至つた。

宇野さん自身も氣をよくし、つゞいて二三の小說を發表したが、不幸にして「正義派と大野」の系統を追はず、全く方角の違ふ半玉小說などを書いて、吾々を失望させた。尤も「三田文學」には「遠藤先生と大野」と題する小說を寄せたが、これは中途で呼吸（いき）が切れて、未完の儘でおしまひになつた。

その後宇野さんは次第に創作家としての努力を盡さなくなり、「正義派と大野」に感激した吾々の期待をうらぎつた。

そのかはり、劇場内に於ける宇野さんの地位は確立したが、不幸にして帝國劇場は震災の打撃をうけ、且又獨裁君主の強味を有する松竹に對し、臆病未練の老耄株主の制肘をうける立場から、到底太刀打が出來なくなり、遂に本城を敵手にゆだね、家主として存在するだけになり、宇野さんも多勢の男女優と共に松竹の人となつた。

松竹に於る宇野さんの地位と、實際の働きについては審に知らないが、帝國劇場と違つて、昔からの芝居者根性の人間が幅を利かせてゐるところだから、坊ちやん育ちの宇野さんは、いぢめられ追出されはしないかと心配してゐたが、消息通の話では、宇野さんを敬遠し、ほんとには腕を振はせないやうな待遇をしてゐたと云ふ事である。それが宇野さんにとつて、すくなからず不平だつた事はいふ迄もあるまい。

宇野さんといふ人は、何事にも無頓着なやうな見せかけをしながら、實は何かはでな仕事をして見せ度い慾望を持つてゐた人だと思ふ。しかし宇野さんには、成敗を顧ずに突き進んでゆく押が無かつた。馬鹿な目にあひ度なく、馬鹿にされ度ない、笑はれ度ないと云ふ心構へが、年中つきまとつてゐて、野望を阻止したやうに見える。正義派の暴力に對抗して屈しなかつた大野の精神は、中學時代の宇野さんにあつて、その後の宇野さんには乏しくなつたのでは無いだらうか。

或は、宇野さんは比較的順調に進んだ爲め底力を出すきつかけを持たなかつたのでは無いだらうか。又或は、宇野さんは自分自身の強い感情を赴くが儘に赴かせる事に危險を感じ、世馴れた人の態度を學んで處世の術とする事に心を勞し過ぎてゐたのでは無いだらうか。

宇野さんは酒を好み、醉ふと上機嫌になつて止度が無くなり、とつ拍子も無い醉態を見せると云ふ噂だつたが、私は一度もさう云ふ景色を見た事が無い。時たま吾々の會合の席上では、平生のこしらへものゝ感じのする程叮嚀過るものごしを捨て、極めて親む可き宇野さんとなつた。私は、程よく醉つた宇野さんに屢々ほんものゝ宇野さんを感じた。平生は世間を憚るやうに、聲をひそめ、半分しか物を云はない形式をとつたが、醉ふと自説を明確にし、日頃の不平をいふにしても素晴らしく明快淸朗だつた。それは決して愚痴にならず、この人の心の中に、仁俠の氣を藏し、常に正義を愛し、不義を憎む精神の鬱勃たるものゝあるのを見せた。ふだんからよく響く高笑を得意としたが、醉つて眞赤になり、胡坐に組んだ自分の脚を持つた儘そつくりかへつて笑ふ時は、思ひよこしま無しといふ風格を示した。こつちも醉つた嬉しさに「おい、宇野さん、近日いつしよに飲まうか」と聲をかけると、「えゝ飲みませう」と卽座に應じる。しかしその次にあつて、酒の氣無しで誘ひをかけると、宇野さんは大概冗談にして笑つてしまつた。「いやあ、この

頃はまるで飲まないんですよ。えゝ、どうも體の具合が惡くて」などゝ、眞顏になつていふのである。同じ言葉を二度三度繰返す事の出來ないのが私の性分で、それつきり別れてしまふのがおきまりだつた。良家に育つた宇野さんは長幼の別が正しく、私なども先輩扱ひにし、禮儀を守られたが、その上に宇野さんの個性は、出來る丈我儘に伸々とする事が好きで、年齡の違ふ人間と飲む窮屈を嫌ひ、又その場合年長者におごられるおひめを喜ばなかつたのであらう。

「宇野は悧巧過る」とは、屢々彼の友人から聞かされた言葉だ。私は、多分それとは違ふ意味で、同じ言葉を口にした事がある。私が悧巧過ると云ふのは、前にも書いたやうに、宇野さんには始終、馬鹿な目にあひ度ない、馬鹿にされ度ないといふ氣が働き過ぎた事だ。宇野さんが小說を書き、戯曲を書き、演劇評論を書きながら、そのどれにも一生懸命になれなかつたのは、矢張この心構への爲では無かつたらうか。弱味を見せる事を極端に惧れた爲では無かつたらうか。ひとつの事をあく迄も追及して行つて、萬一へまをやつたらどうしようかと云ふ事を心配し過ぎた爲では無かつたらうか。例へば何か仕事をする。それが評判になつた場合には、同じ系列のものを再び手がけて、單なる繰返しに過ぎないと罵られる事を惧れ、忽ち手を變へてしまふのである。例へば何か仕事をする。それが評判にならなかつた場合には、これでもかと云ふ意氣でもう一度同

じ手で押して出て、萬一しくじればぬきさしならなくなるから、全く違ふ手で出直す事にする。さう云ふ意味の悧巧が度を過してはゐなかつたらうか。物わかりがよすぎるのだ。都會育ちの人間には、押の強さが無いのだ。

いつたい人間は、心的活動の範圍が狹く、方向の一定した人程早く完成し易い。俳人や歌人が、年少にして一家を成し、同時に早く固まつてしまふ傾向のあるのは其の證據だ。宇野さんのやうに物わかりがよく、ひろく知識を求めた人は、これを統一して完全に己のものにするには長い年月を要し、尙多くの齡を重ねなければならなかつた。

宇野さんは年齡不惑に近づいて、今迄の生活態度に革命を行ひ、自己完成の仕事にとりかゝらうと欲したらしい。「三田文學」に坂下一六の筆名をもつて、演劇評論と海外劇信を連載したが、文に精彩あり、熱情あり、忽ち人々の注目するところとなつた。私はこれを宇野さんの筆と氣づかず、編輯者に質問して始めて知つた。これを讀むと、宇野さんが最近新知識の吸收に熱中した事がうかゞはれるが、死後奥さんから伺つたところでは、宇野さんは誰にも知らせず海外留學を企て、先づ露西亞に一年間滯在の豫定で手續を運び、その許可證は臨終の枕頭に送達されたさうである。「俺も行き詰つたから、どうにかしなくてはならない」と云つてゐたさうだ。廣く知識を

求め、見聞を深める欲求もあつたであらうが、それよりも自分の生涯の仕事を定め、築かうとするこゝろざしが、やうやく強くなつて來てゐたのであらう。ほんものゝ宇野さんが大手を振つて舞臺に登場するかど出の海外留學だつたらうに、意地の惡い運命は死を以て酬いた。宇野さんこそはこれからの人たつたのに、惜い事をしてしまつた。しかし、私は宇野さんが今迄の安逸な生活をなげうつて、新しい一歩を踏み出さうとした決心を知つたのは嬉しかつた。その悲壯なる決心は、吾々を鞭うち、我友宇野四郎氏を一層よき友達として偲ぶよすがとなつたのである。(昭和六年二月二十八日)

――「三田文學」昭和六年四月號

いひわけ

「都新聞」は文藝部に若い、進歩的な記者が居る爲か、常に無名作家、新進作家に貴重なる紙面を提供し、力作を世に紹介してゐる。甚だ結構な事で、他人事ながら喜んでゐる。私のところにも、若手の作家が多勢遊びに來るので、其人達の作品も世の中に出し度いと思ひ、度々「都新聞」に御願ひしてゐるのであるが、時々は古顔もまぜた方が變化があり、又いかに新進作家の方が創作に努力するかをはつきりさせる意味もあるのであらう、私にも何か書けといふ申入をうけた。

私は近年非常に多忙なので、毎日々々追かけられる新聞小説を書く事は苦しみが大き過ぎ、樂みが少な過ぎるので、御斷りするのが當然だつたが、豫ていろいろ御迷惑を願つてゐるし、將來の御厚情に浴し度いので、それならば新進の引立役として凡そ一ヶ月位で完了する小説を書いて見ようと約束してしまつた。ところが身邊の雑事はあとからあとへと積みたまつて、なかなか整理

しきれず昨秋起稿した「銀座復興」は只今やうやく二十日分ばかり片づけたが、果して三十回で終るか四十回になるか見當がつかない。しかも困つた事には出來榮頗るよろしからず、〆切は目の前に迫つて來て、書直す暇が無い。やむを得ず笑ひものになる事を覺悟して原稿の半分を新聞社に渡した。

たゞ玆に自慢の出來るのは、挿繪を描く人を私に選ばせてくれたので、かねてその才能に敬服してゐた最近佛蘭西歸りの富澤有爲男氏に賴んで引受けて貰つた事だ。作品が單調で、且近代風景に遠く、エロもグロもナンセンスも御緣が無く、モボもモガも登場しないので、畫家にとつては面白味が無いだらうと思ふが、その無味單調な小說をもてあまさず、どんな木偶の坊でも美事に着飾らせてやらうといふ富澤氏の言葉にほつと一息ついた。拙作の活字になる事はおそれながら、富澤氏の挿繪を見るのを樂みにしてゐる變な心持を經驗した。

終に斷つて置き度いのは、此の小說にはモデルがあるが、銀座復興の史實には據つてゐない。モデルは銀座の岡田といふ料理屋の夫婦で、あらかじめ諒解を得た。但し此の小說は細敍主義を捨て、簡單明瞭を旨としたから、夫婦の描寫も大ざつぱで、ほんものと比べて大に違ふといふ非難は甘んじて受ける覺悟である。その外の人と事件は、すべてつくりものだ。

読者よ、つまらない小説だからよせといふなら喜んで中途でやめます。小説はつまらないが挿繪はいゝから、繪だけにしろといふなら、私としてはそれでもいゝ。御遠慮無く都新聞社へ御申聞け下さい。（昭和六年三月九日）

——「都新聞」昭和六年三月十一日

その後のドウガル

昨年九月、三重縣津市郊外千歳山莊のあるじ川喜田久太夫氏からセント・バアナアド種の牡犬生後五箇月にして體重五貫五百匁といふ逸物を拜領し、ドウガルと名づけ、我家の自慢とした事は、その年十一月の「三田文學」に書いた。全く拜領といふ文字をもつていひあらはす外には、適切なる表現を見出さない程身分不相應に壯大なる犬である。平生、小說をかき、戲曲をかき、批評をかき、隨筆をかき、時には三十一文字の歌の眞似もして見せるが、つひぞほめられた事は無いのに、我家のドウガルの消息を傳ふる一文はいたつて好評で、常日頃息子がろくでも無い事を書きつらね、ひとさまに御迷惑をかけはしないか、風敎上よろしくない事がありはしないかと心配してゐる母も、あれならいゝとほめてくれた。

その後、人にあふとよく訊かれる。ドウガルはどうしました、無事ですか、病氣はしませんか、

發育はよござんすかと、恰も御宅の皆様は御變もありませんか、奥さんは御丈夫ですかといふ見舞の言葉に代用されるものゝ如く思はれる。一度拜見し度いといふ人もあり、現に來て見て、あなたの書いたもので想像したよりも、實物はもつとよござんすと、手きびしいお世辭をいふ人も少なくない。

扨てそのドウガルは、伊勢の國から來た時は十二指腸虫で些か元氣が乏しかつたが、麻布畜產學校長中村道三郎先生の丹誠と、我家のをばさんおかつちやんの熱心なる努力で、完全に健康をとり戻し、十月六日には八貫五百匁、十一月二十二日には十貫の體重となり、威風近隣のむく犬を壓するものがあつた。

ドウガルの讚美者は頗る多く、久保田万太郎氏もその一人で、あたしはドウガルの態度を學ぶよと、又かと思ふ程繰返す。但し飼主の側から見ると、この人とこの犬では、まるつきり品行が違ふ。久保田さんは、あたしは酒は嫌ひですと、いはなくてもいゝ事をいひ、又實際私のやうに晩酌を樂む風もないが、扨て飲んだとなると、二次會となり三次會となり、身長僅かに五尺二寸にして體重十九貫にあまるといふ始末の惡い體をもちあつかひながら、深更滯無く我家に歸るのは上出來の部で、時には我家近くの交番のあるじに管を巻いて馴染となり、翌日短冊を書かされ

たりしてゐる位で、おとなしく自宅に引籠つてゐる方では無いが、我がドウガルは目下の體重こそ稍久保田氏に劣るかもしれないが、我家をよそにした事は一度も無く、天性極めて内氣で、おもてへ出る事を好まず、したがつて交番のあるじを惱ます事もない。

尤も、久保田さんも幼少の頃はおばあさん兒で無上に可愛がられたものださうで、古來おばあさんと云ふものは孫を弱虫にするものであるから、家に在つては蛤だが、外へ出ると蜆貝だつたと聞く。或は我家のドウガルも長じては世間の廣い、あつちこつちと引張凧になる人氣ものとなるかもしれないが、只今のところは、中村先生の推定體重十九貫といふふうたいで、甘つたれ、よだれを垂らし、羞しがり、甚だ意氣地が無いのである。

拙宅にはドウガルより先に、シエパアドが二頭ゐた。その名はシヤウとヂンで、シヤウの方は佐藤春夫氏のやうな剽悍な風貌を備へ、先頃全國畜犬共進會に於て、總裁伯爵清棲幸保と署名のある優等賞狀と銀メダルを拜受した程度の犬だ。乍然、彼は優等生に似もやらず、頗るつきのいたづら者で、植木を噛り、塀を噛り、自分の住む可き犬舍迄も噛りこはしてしまつた程だ。

やがてはその配偶者となる可きいひなづけのヂンは、發育不良か、先天的畸形か、ちひさくかたまつて、きりやうは決してよろしくなく、しかも毛色が狐に類するので、近所をつれて歩くと、

やあ狐が來たと、腕白どもがはやしたてる。こいつは人間の前では頗る柔順で、おべつかをつかふが、人間の姿の見えないところではシャウにも劣らぬ不逞の徒で、隣家との境の高塀の板をはがして嚙み砕いてしまつた程歯が強い。

この二頭のシェパアドは、最初はドウガルと同じ庭に放たれ、仲よく遊びたはむれてゐたが、或日心たけきシャウはドウガルに喧嘩を賣り、しつつこく體あたりを喰はせるので、流石に溫厚のドウガルも遂に勘忍袋の緒をきつて、本氣になつたと思ふ瞬間、たゞ一擊で相手を組敷き、鼻柱をわんぐりやつた。あ、あ、大變々々々と、愚妻が聲をふりしぼるので、あわてゝかけつけ、棒でひつぱたいたり、緣臺でなぐつてみたが、旣に眼が据わり、こゝを死場所と思ひ極めたシャウは捨身になり、夢中になつてかきむしる。犬の決死の喧嘩は兩後脚を持つて引離す外には引分る事が出來ないと、豫て川喜田さんからきかされてゐたので、自分がドウガルの兩後脚をつかみ、愚妻がシャウの兩後脚を持つて、やつとの事で引分けた。それ以後、シャウの方はおもての狹い庭に監禁した。その後日を經て、試にいつしよにしてみたところ、シャウは舊怨を忘れず、再びドウガルに喧嘩を賣り、危く命を落しさうになつた。

元來ヂンはいひなづけの事だから、シャウといつしよにして置く可きだが、ドウガルは身が重

く、寢そべつてゐるばかりで、ひとりで遊ぶ術を知らないから、當分ヂンを御相手につける事にした。同じ年同じ月に生れたのではあるが、小智惠の働くヂンは、大器ドウガルをからかひ、無器用者に惡戯を教へ、庭のまん中に穴を掘つたり、木の根を嚙つたり、裏の大家さんのところへ出入る人達に吠えたり、何から何迄手本を示し、ドウガルは一生懸命に眞似をしてゐる。二頭の犬はのべつに仲よくふざけてゐるが、たまにヂンをドウガルの側から離し、シヤウの方へ連れて行くと、シヤウは忽ちヂンをいぢめ、ヂンはシヤウを嫌ひ悲鳴をあげて逃廻る。

ドウガルとシヤウが喧嘩してからといふものは、犬の散歩が一層大仕事になつた。三頭が仲よくいつしよに歩いてくれゝば一度で濟むのに、どうしても二度に分けて出かけなければならなくなつた。シヤウとヂンは散歩好で、シヤウは行儀惡く主人を置去にしてかけ出し、往來の犬を脅かし、ヂンは主人の足下に竘伏してはなれず、あまりひつついて來るので屢々踏づけさうになる。然るにドウガルは、門外へ出る事が大嫌ひだ。いやがるやつを無理に引張り出すと、大道のまん中にどつかり腰を据ゑ、獅子頭のやうな巨大な頭をいやいやして、いつかな動かない。なだめてもすかしても駄目だ。しかたが無いから力任せに引擦つて、約半丁位行くと、やうやくあきらめて歩き出すが、自動車が來たり、自轉車が來たり、子供がかけ出したりすると、すつかり脅え上

つて、手近い大邸宅の門内へ避難しようともがく。やつとの思ひで四谷の土手迄行き、曳綱を放すと、俄に元氣になり、デンともつれあつて草土手をかけ廻る。

散歩はいつも夜分だ。四谷見附から市谷の方へ土手づたひに行くあとさきに、ドウガルとデンが引添つてゐるわけだが、屢々暗い木蔭にひそむ男女を驚かす。さういふ時、きまつて男の方はちひさくなり、羞しさうにうつむいてゐるが、女の方はさもあやしまれまいと努めるやうに、さりげなく何かつぶやくのである。あら星が見えるわ、といふやうな事を云ふ。すると男は、そのあさはかな女のたくみに愈々閉口したかたちになる。靄が深いわねえと云つた女もある。いゝ犬だわねえとほめた大膽不敵な女もある。土手の夜更の男女の多くは、會社員風の男と職業婦人風のが多い。月給取は逢引迄もつましいのか。

ドウガルは寒さを知らないらしい。川喜田さんからは、夏になつたら背中の毛を刈込んでやらないと暑氣に負るかもしれないといふ御注意があり、今に夏が來たら、その通りにする手筈になつてゐるが、冬の間はこつちがはらはらする程氣候には無頓着だ。雨が降つても平氣で濡れてゐるし、雪が降つても大地の上に寢そべり、背中に白く積つても驚かない。そんな事をして、萬一風邪でも引かれては困ると思ひ、犬舍に入れと命令すると、いやいや起上り、腹から氷柱をぶら

下げたまゝ、霏々と降る雪中をかけ廻り、なかなか犬舎には入つてくれない。
ところが、これが風と來ると、全く魂も身に添はぬ様子で、忽ち縁の下へもぐり込み、飯も喰はず、終日出て來ない事もある。拙宅の縁はあまり高くなく、ドウガルのからだは極めて大きいので、この頃は入るにも出るにも大變な騒ぎだ。古い家の事だから、ドウガルの出入の度毎に、家鳴震動するのである。
それは全く嘘では無い。彼がヂンを追かけて庭中をかけ廻る時は、づしんづしんと地響がし、夜中屢々夢を破られる。おかげで植木は枝を折られ、草花は踏まれて枯れ、私が好きで植ゑた連翹は莟を持つてまさに薄黄色い花が、春に魁けて咲かうとしてゐたのに、むざんや根元から折られ、數年間つゞけて咲匂つた山百合は、僅かに芽を吹いたと思つたら、踏つぶされ、岡田三郎助先生から一鉢頂き、それが庭中にひろがり、ひろがり過ぎた位に思はれた月見草も今年はかげを見せない。毎年春先には庭に下りて、私が抜いても抜いても抜きれなかつた雜草も出ない。皮肉な事に、犬が進出しないやうにと、はり廻した金網の外には春が來て、蕗が萌え、野蒜が伸び、もろもろの草の若芽が、今やさかんにはびこつてゐるのに、我家の庭はかたくかたく踏みかためられ、緑の色はちつとも無い。たゞドウガルのぬけかはる毛が、綿のやうに春風に舞つてゐるば

かりだ。みなさん、我家のドウガルは、來る四月十五日滿一年の誕生日を迎へます。（昭和六年四月七日）

——「三田文學」昭和六年五月號

「吉野葛」を讀て感あり

近頃は面白い小說が無い、力作が無い、小說は旣に亡びんとする藝術形式であるといふ簡單勇敢な言說がひとつの流行となり、例によつて同人雜誌に據る年少の批評家迄が、さも先見の明をほこるやうな筆つきで亞流的言辭を弄するに至り、小說そのものゝ亡びる前に、この一刀兩斷的言說の方が月並にならんとしつゝある狀態を見る。小說作家の方も制作の興味を失つて、或者はお金の儲かる通俗小說ばかり書く商人となり、或者は雜誌社の註文次第でエロでもグロでもナンセンスでも咄嗟の間に合せる職人となり、これから世の中へ打つて出ようとする若者迄が、その態を眞似する事を以て悧巧と考へ、勞作のなかにもみづから樂むといふ風の少なくなつたのは、せち辛い世の中の止むを得ない姿には違ひ無いが、又作家の熱情の不足意氣地なしの結果でもあるであらう。同時に、描寫藝術である小說の技巧方面が久しく輕視せられ、宣傳價値或は御用價

値が重んぜられる爲、制作態度を安慰にした事も數へて置かう。どうすれば金が澤山とれるか、どうすれば仲間の機嫌を損じないだらうか、どうすれば始終雜誌に名を出してゐられるかゞ第一の問題で、どうしたらよき作品が書けるかは多く心を惱まさぬ事になつたらしい。それは現在の社會組織、殊に文人の生活を左右する經濟組織の自然の結果で爲方が無いのだと考へるのが常識で、最も氣樂な逃避でもあるが、作家自身はさういふ他力に縋らず、自分自身を省みて恥ぢ、鞭うち、精進する必要があるであらう。

この混亂時代に、島崎藤村氏の「夜明け前」は、その制作態度と意氣組に於て、吾々を愧死せしむるに足るものがある。假令この作品を面白くない、つまらないと思ふものも、その組立と表現の用意と努力に對しては敬意を表するに違ひ無い。里見弴氏の「安城家の兄弟」も、出來榮は別とし、又或人から見れば無駄な努力と見らるべき題材かもしれないが、作者のはりつめた根氣と、制作に對する執着は尊敬すべきものである。

私は、天分薄く、いつ迄も未熟な作家として、心細い存在をつゞける者であるが、制作そのものに感興を持ち、作品の中に熱情をそゝぎ入れる事の出來る作家を尊敬する。その意味で、谷崎潤一郎氏の偉さを常におもふのであるが、こゝには最近讀んだ同氏の小說「吉野葛」を借りて所感

を述べて見度い。

「吉野葛」は昭和六年一月及二月の「中央公論」に出たもので、私の目にふれた限りに於て、文壇うけの甚だ悪い作品であつた。或人はこれを單なる紀行文と見誤り、或人は力の抜けた作品だと評し、或人は冗長讀むに堪へず中途で投出したと云ひ、殊に既成作家をけなす事で新人としての立場を見出さうとするともがらは、谷崎既に衰へたりと氣の早い批評をした。

それなのに、私はこの作品を近來讀んだものゝ中で最も完成されたものとして感服し、試みに先輩友人の意見をたゞして見たところ、傳統的文學の素養ある人々はいづれも高く評價してゐる事を知つた。

「吉野葛」は紀行文に過ぎないと云ふ批評は、山に登らないで山を論ずるに等しい。假に紀行文として、何故紀行文ならいけないのかといふ議論も出來ると思ふが、それは別問題として、この作品が單純な紀行文で無い事は、全篇の構想が吉野行の寫景で無い事を見れば明白である。尤も、作者は此の小說の舞臺として歴史と傳說の寶庫のやうな吉野の奥をえらんだのであるが、その主要地點をいきなり客觀的に描寫する方法に據らないで、吉野口から山と山との間を流れる川に沿つて、折から秋の闌なる山ふところに入つて行く道筋を、傳說と作者自身の見聞と感想と批判と

を加へながら辿つて行く方法をとつた。それが此の作者一流の格調の正しい、大河の流れるやうに靜かに、しかも力強く押して來る文體で、次第に場面を展開して行く爲、繪巻物か映畫のやうな動的效果を充分に現はし、山水草木氣象は正確な色彩を紙上にとゞめた。その爲に、かへつて紀行文であるといふ誤解を招いたのであらうが、茲には所謂寫生文の如き行きあたりばつたりの平敍主義はなく、一見何の奇をも求めない淡々たる行文の底に、深くたくんだ構想が一糸亂れず根を張つてゐるのである。先づ、いきなり目的地を描き出すよりも、次第に山路を上つて行く事によつて、此の小說の日常生活を離れた、少なからず現代ばなれのした內容を、極めて自然に思はせる效果を擧げた。

さうして置いて、扨て目的地の吉野の奥に作者は大人の讀む童話の世界を展開して見せた。それは、親の無い兒の思慕の情が、やがて山奥に紙をすく娘を嫁に貰ふ迄の因緣と心理との交錯した物語である。現實暴露の小說では無い。世相描寫の小說では無い。問題と批判を含む小說では無い。何らかの主題を提供してその解決を迫る小說では無い。讀者に訴へる小說では無い。寧ろそれらの現代的興味と面倒と煩はしさをよそにした、美しい詩境に讀者を誘つてゆかうとする讀みものである。その意味で、人間の力が山々の力に及ばず、人智が口碑に壓されてゐる地理的關

係が、凡そ近代都會風景に縁遠い此の物語の世界を定める上に、決定的のものであつた。吉野の奥といふ恰好の場所が無かつたら、作者は此　物語を書かなかつたであらう。さういふ、ぬきさしならぬ用意が此の作品にはぬかりなくゆきわたつてゐて、いかにも上方風の淨瑠璃と地唄の持つうす暗い陰氣な味ひに、童謠童話の哀切な響を加へ、しかもそれを組立てる手法には近代的な合理的な明るさを見せて、無理と破綻を招かなかつたのは、何と云つても作者の素晴しい手腕であるが、同時に又制作の感興を強く把持してゐて、はじめて出來る藝なのである。

いつたい一人の作家の長い生涯に於て、處女作か出世作か、先づ文壇にはなばなしく打つて出た頃は、野心と感興で制作する事が出來る。表現が幼稚でも、組立てが單純でも、情熱がその隙間をふさいで、つやと色とを加へるであらう。それが若いものに特有の色氣であり、イットである事、いきた人間の姿態と少しも變りは無い。女の一生に於て、妙齢の頃は、ちつと位眼鼻だちが惡くても、皮下脂肪が薄皮に光澤を加へ、としごろの者に限る美しさを與へる。それが男を知り、子供を生み、所帶にかまけ、あぶらが拔けて來ると、忽ち生れつきの道具が露骨になつて來て、伸びて行く頃の美しさはあとかたもなくなつてしまふ。賣出しの作家は氣でもつて書く事が出來るが、一家を成した後は、兎角自分のつくつた型に囚はれて新鮮感を失ひ、ちよつとでも氣

がゆるむとだらけ勝になり、又野心が乏しくなつて馴れで書きなぐるおそれがある。それなのに谷崎氏は、いつ迄も制作の感興を失はない少數の作家の一人だ。殊に私が常に敬服するのは、此の作者の好學の志深く、何をかくにも充分調べてかゝる事だ。やつつけ仕事をしない。出鱈目を書かない、間に合せをやらない。すべてが注意の行屆いた設計の上に築かれるのである。旺盛なる意思と努力の賜であらう。

「吉野葛」にも何等のけれんが無い。出たとこ勝負の跡が無い。長い物語の全體を支へてゐる幾筋かの糸はみんなつながつてゐて、中の一本を切つても全體の均衡を破るといふ組立て方だ。一見この物語の本筋に何の關係も無い山川草木が、實はなくてならない道具だてゞ、とかく平淡に流れ易いおはなしを、素晴しく立體的な吉野の奥の秋の描寫でがつしりと組立てたのである。街道の家々の眞白な障子に映る日の色や、熟柿の味を描いたところは、並ぶもの丶ない筆力で、「新しき古典」として當代の文範とすべきものである。

いつたい此の頃は、格調の正しい文章は卽ち古いといふ誤解が行はれてゐる。全く眞實感の伴はない大袈裟な表現のはやる時代だ。內容とそぐはなくても、新奇らしい眞似をして安心してゐる。「誰某が笑つた」といへばすむ場合に「誰某が笑を爆發させた」と云はなくては不安心なのだ。

勿論この二つのいひあらはし方はその笑の性質によつて區別さる可きであるが、少しも爆發らしくない笑の場合にさへ、それが最近行はれる表現である爲に借用してゐる實例が頗る多い。「くちびるがくちびるを互に征服した」といふ表現は新しいかもしれないが、接吻の實感を傳へる効果は稀薄である。これらはすべて、孔雀の羽を身につけた鴉が、孔雀のつもりで歩き廻つてゐるのと同じ心理である。「僕は僕が彼女の爲に僕がいゝと思つた僕の最善の愛を僕のえらんだ表現で示す事で彼女を滿足させた」といふ一句は、私が何かの雜誌から寫しとつて置いたもので、これは正に新しい表現に違ひ無いが、その新しさは、與太郎が使ひさきで述べる口上の新しさである。

同じ事が文章の力といふ方面にもいはれる。無暗に喧嘩面で、馬鹿野郎とか畜生とか、どつこいさうはいかないぞなどゝいふ言葉を地の文に挿入して力んでゐるやうなのは、おもちやの刀を振廻す兒戲に等しく、空嘘の外の何ものでも無い。人を感動させる力は、靜かな言葉の中にもある筈だ。適確なる表現が何よりも力強いのである。よき聲は必ずしも大きくは無い。

「吉野葛」は谷崎氏生涯の傑作として數ふ可き程のものでは無いであらう。しかし、作者自身いつ迄もあきずに繰返して讀んで愛着を覺える際の作品に違ひ無い。何故ならば、恐らくこれは作者が最初計畫した筋立の通りに描き、作者が期待した丈の効果をあやまちなく盛上げたものと推

定出來るからである。手にあまる材料でなく、手ごろのものを、自分の好むが儘に扱ひこなした感が深く、少しの破綻も無いからである。

私が敬服したのも主としてそこにある。充分の準備を整へ、建築技師が設計圖を引くやうな注意深い組立てをして、しかもその準備から仕上げに至る迄、制作そのものに對して作者が喜びを感じてゐながら、ひと度も浮足にならない底力の強さである。

「吉野葛」はその物語の筋が現代的思想感情に縁遠い爲に、あわたゞしく新聞價値を追かけてゐる現今文壇のうけの惡かつたのは止むを得ないが、この作者のおちついた制作態度と、その素晴しい素現力は、學ぶ可く尊ぶべきものである。（昭和六年五月七日）

――「三田文學」昭和六年六月號

「安城家の兄弟」を讀む

里見弴氏の近作「安城家の兄弟」は、四六判、かなり細かく組んで一千數十頁に及ぶ大作である。兎角名を成した作家がやすきについて、作品制作にも勞を惜む傾向がありがちなのに、つかんだ材料を放さず、しつつこくこねかへし、〆切に追はれながら強(しひ)ても感興をわき立たせる事に努め、いやでも應でも纏めあげてしまふ作家精神の旺盛なのには完全に頭が下る。元來里見氏は、書く事が面白くて堪らないといふ側の作家には違ひ無いが、それにしても二十餘年の長い文壇生活は大概の人間を疲れさせてしまふのに、この人は少しも休まず、疲れた身心に鞭うつて氣の張を落すまいと努力してゐるやうに見える。その爲か「安城家の兄弟」を讀んで、新進の若い作家の希望と野心に燃(もえ)るやうな明るさとは反對の、何か重苦しく胸につかへる感じを受(うけ)る。それは作品が陰鬱だからでは無く、作品は寧ろその反對の朗かな場面を多分に持つてゐるのであるが、完成の爲

に費した氣魄の疲れとでもいふやうなものを、おのづから感じる爲では無いだらうか。彼是おもひあはせて、此の作品は作者が完全に扱ひこなしたものでは無く、かなりもちあつかつたものゝやうに考へられるのである。

それは、ひとつには月々雜誌に分載されたので、中途で氣分が變つた爲か、前半と後半とに調子の高低、描寫の厚薄のある事から來る感じかもしれない。概していへば、前半の方が多角的描寫で、後半は稍平敍體になつた。尙疑へば、かきだしの「醉眼朦朧」を書く頃は、もつと規模の大きい小説を計畫し、安城家の兄弟の一人々々の一生を、或は半生を、性格運命夫々に描き分るもくろみがあつたのでは無いだらうか。それが書進んでゐるうちに、昌造と瑛龍との交渉にがんじがらみにされ、二人の存在權を主張する事に忙しく、他を顧る暇が無くなつたのでは無いだらうか。

出版書肆の大袈裟な廣告文にもぬからずつかはれてゐたが、此の小説の標題から直に聯想する「カラマゾフ兄弟」のやうに、特異の性格を描き分けたらば、もつと面白かつたらうとおもはれるが「安城家の兄弟」は、文吉壬之助健吉昌造隼夫の中、小説家である四男昌造を主人公とし、その主人公の心持を主とし、他の兄弟はしだしに過ず、或は主人公の立場から批判される役廻をつと

めてゐる。全く此の小說は、加島家の名跡をついだ、兄弟中一番ぎろりと眼玉を光らせてゐる昌造の感情生活の記錄であり、對人生の主張であつて、昌造は卽ち作者自身だから、當代第一流の描寫力を有する作者が、期せずして主觀的小說を書いたのである。その意味で、これもひとつの心境小說だと云へる。たゞ普通所謂心境小說が、一般に平淡なる日常生活の詩的表現であるのに反し、これは何處迄も自分の心持を貫かうとする主張を含んでゐる違ひはある。さうだ、―安城家の兄弟―は、里見弴氏が自分の心境を克明に說明し、これでもかこれでもかと無理おしつけに他人にも呑込ませ肯定させようとする努力の結晶なのである。

此の小說が雜誌に連載されてゐる頃「善魔」といふ題の用ひられてゐた事を記憶する。善魔とは何を意味するのか、私にははつきりわからない。昌造の心の象徵か、おしげと千葉其他の人々の所爲をいふのか、すべての登場人物にからまる眼に見えぬ支配力をさすのか、或はもつと外の意味なのか見當もつかないが、少なくとも「善魔」といふ言葉を考へ出して喜ぶ作者の心持ははつきりわかる。世間普通の解釋によれば、魔物に善と呼ばる可きものは無いであらうが、魔物にも善を見出す事が、此の作者の人生解釋の鍵で、同時に又世間並の善に、忽ち鼻持ちならぬ甘さを見出す心的活動も敏速なのである。私は里見氏に、天才的天の邪鬼を感じる。彼の鋭い觀察は、世

間の倫理道德の一重うらを見透す事の面白さに一層尖鋭の度を増すのである。
度々繰返すやうだが、私は里見氏を現代に於る最も描寫力の強大な作家の一人に數へるのであるが、それはこの人が客觀的に人間を描き、場面を描く時の多角的な描法の冴えに打たれる爲で、其處に作者の人生哲學がまじり、その說明お談義が綿々として續く時は、甚しく筆力を鈍らせる。斷る迄も無く此の小說の本筋は事實の記錄であり、人物は殆んどすべて實在の人をモデルとし、作者自身の見るが儘に如實に描出したものに相違無い。現に私も、本筋には何の關係も無い一場面に、河津といふ名前で登場してゐる位だが、私の知る限りに於て、モデルは實に生々と、あるが儘の姿で描かれてゐる。作者の見る眼の鋭さと、それを表現するうでの冴えは驚く可きもので、たとへば誰が見ても久米正雄氏に相違無い昌造の友人久保某の如きは、誰人が描いてもこれ以上久米正雄氏らしくは見せられない程生かし切つてゐる。言葉の面白さで無く、久米氏自身よりも遙かに久米氏らしくさへ見えるのである。それは巧みに夾雜物を除いて、久米氏の特徵丈を力強く再現したからである。その姿態、癖、言葉づかひから其時々の心づかひ迄、憎らしい程はつきりつかまへ、適確な描線であくどいと思ふ迄描き出した。たゞ作中の人物で一番不鮮明であり、又その心理解釋にも無理を感じるのは主人公昌造と女主人公瑛龍である。何故か。要するに他人

は邪險につつぱなし、冷酷に取扱へるけれども、この二人丈はつつぱなし切れなかつた爲であらう。誰しも自分を客觀的に描き出す事はむづかしいものであるが、瑛龍に對しては明かに遠慮かあり、甘やかせ、何でも彼でも是認しようとし、他の人々と對照して甚敷不公平を感じる。若しかすると、この小説はたゞ一人の瑛龍に讀ませる爲に書いたのでは無いかと疑はれる位である。それはあり得る事である。たとへば人の恩義に感激したとか、情愛に感じたとか云ふ場合に、口では感謝があらはせないで、これを手紙にし、歌にし、詩にする事は想像出來る。この場合、自分が常に希ふ嘘をつくな、赤裸々であれ、本氣であれ、一生懸命であれといふまごゝろの顯現したやうな女性に對して、一篇の小説を捧げるといふのも浪漫的で愉快では無いか。

私は曾て此の作者の他の小説を批評した時、里見氏が反覆して說く「まごゝろ」の說を、極めて我儘なものであると解釋した。それは、世間並の他人に對する「まごゝろ」、或は人に對しておのれを忘れる「まごゝろ」では無くて、反對に自己確立の念願を「まごゝろ」と稱するものゝやうに思はれる。おのれに忠なれといふ覺悟で、時に他人の爲にほだされさうな場合にも、こんなことでさうやみやみほだされて堪るものかと踏みとゞまり、相手を叩きふせてもおのれの信奉する主義を守る爲の「まごゝろ」である。

加島昌造の「まごゝろ」は、嘘をつくな、赤裸々であれ、本氣であれ、一生懸命であれといふ事に歸着する。昌造は自分が「まごゝろ」の人であるといふ強い自信を持つてゐるが、それにも增して他人にこれを要求する。要求して、相手の「まごゝろ」が不足だと認めた場合には、相手には浮ぶ瀨が無く、さんざんに罵られる。

何しろ、世間並の「惡魔」といふ觀念から、直ぐに一皮ひつぺがして「善魔」といふ理想を見つけて來る位だから、世俗のよしと見るものをよしと見ない精神が強烈だ。そんな甘口に乘るものか、感傷主義はまつぴらだと、始終心をひきしめて、ぎろりぎろりと觀察の眼玉を光らせてゐる作者その人である昌造は、大々的センチメンタリストである長兄文吉が、人妻に引ずられて縊れて死んだ事件に直面しても、肉身の歎きにひたるよりもはげしく、その兄の中學生程度の感傷主義に苦り切つて、殆んど冷酷とも見える態度を持し、批判の呵責を加へてゐる。文吉の親友を以て任じてゐる加茂や、文吉と關係があつたとみづから名告(なの)る落合夫人が、此の悲劇に逆上し、昂奮してゐるのに、明白に嫌惡の色を示して相對してゐる。彼は明かにエゴイストだ。小禽をねらふ鷹のやうに、高いところでひとり鋭い眼をぎろつかせ、爪を磨いてゐる。おもふに安城家の他の兄弟達にとつて、一番薄氣味の惡いのは此の昌造に違ひ無い。それ程したゝかた昌造が、ひとたび

瑛龍の前に出ると、全く利刄の冴えを見せない。

瑛龍は赤坂第一といはれる大きな藝者屋の娘分で、それもうちが貧しいから稼がなければならないといふやうなしをらしいのでは無く、もつぱら兩親の趣味で身を妓籍に置いた位で、しかも百三十餘人の同じ家に屬する妓女の中で誰よりも我儘に、云ふ目を出すといふ運勢の強さで、大河内といふ金持の息子のものとなりながら、歌舞伎役者の鰕藏ともいゝ仲となり、忽ち昌造とも仲よしから進んで、遂には他の二人とははつきり別れて昌造といつしよになる。怖ろしく悧巧な女で、安城家の兄弟中一番才智のすぐれた昌造と一騎打の出來る人間だ。普通の女らしくない、づけづけ物を言ふところや、昌造にも劣らないお談義好きの性格が、珍らしい型をつくつてゐて、作者が筆を盡して書いてゐるのも、この女の美しさ、やさしさでは無く、特異の氣性と共の悧巧である。悧巧と悧巧、お談義好きとお談義好きの逢引は、かなり理につんだもので、作者は非常な努力を拂つて、二人の理想的な人間の心が歩み寄つてひとつになる道筋を書き、立派な戀愛の模範を示すといつたやうな意氣組を見せてゐるが、存外讀者にとつては、作者の豫期しないをかしさが感じられるのである。それは惚れたはれたの沙汰で無く、昌造が瑛龍を正しい生活に導くのだといふ理論が、讀者にはうべなへないからである。

昌造は、自分では氣が弱いとか、自分程反省の深い人間はないとか云つてゐるけれど、實は怖ろしく氣の強い、反省よりも自己肯定の傾向の強烈な人間に見える。彼が反省だと思つてゐるものは、何とかして自分の行爲を是認しようとする心意の働を意味するのではないだらうか。それよりも、或時彼が瑛龍に對して、自分は我儘な人間だ、それが寧ろ長所だといふやうな事を云つてゐるが、此の方がはつきりと昌造の本質をあらはしてゐる。讀者から見ると、彼は全く我儘の人格化されたやうな人物で、そのうしろめたさも感じず、安んじて人間論をお談義する程の強氣である。私は彼が醉拂つて、こんな事をしてゐては駄目だぞと感じてゐる時の昌造をいゝ人間だと思ふが、殆んどおもひあがつたやうな態度で、彼が信ずる儘の理窟をこねかへしてゐる時の昌造に反感を持つ。

由來里見氏はセンチメンタリズムを極端に輕蔑する。彼は大衆におもねり、ほろりとさせたり、涙を流させたりする甘い倫理や道德を排斥し、寧ろ大衆の喜びさうもない倫理道德を樹立する事に興味を持ち、努力してゐるやうな作家で、或意味に於ては惡魔主義と呼ばれても然る可き傾向を持つてゐる。

この感傷主義を嫌ふ心は勿論昌造にも強烈である。その爲に、兄文吉ははげしい鞭をうけなけ

ればならなかつた。おしげも千葉も同じしもとに打たれる人々である。それが餘りに苛烈であり、我儘である爲に、本來人に好かれさうもなく、又作者がそのよくないところを力說してゐるやうに見うける千葉にさへ、吾々の同情は向けられる位だ。哀れなる青年千葉は、地震のその夜昌造の家族の安否をたしかめに、命の危險を冒して自轉車で逗子に急行する。その日昌造はどうしたかといふと、赤坂の待合に瑛龍と泊つてゐて、家がつぶれて危く死にさうになつたが、共々に見の家に逃れて來て、大地の上に敷いた蒲團に、瑛龍と共に眠つた。彼は妻の事も子供の事もおもふにはおもふのだが、何故自分自身逗子へ強行する心にはならなかつたのか。

瑛龍がすつかり理想化されてゐるのに反し、おしげは容赦なく表から裏から描かれてゐる。幼い子供達を抱へ、賴り少なく感じてゐる危急の際に、救援に來た千葉に對して感謝以上の心を持つやうになるのは極めて自然である。その上昌造は瑛龍に夢中になつてゐて自分をかへりみないのであるから、二人が遂に行くところ迄行つてしまふのも無理が無い。ところがこの不義を知つた時の昌造の態度が、又世俗の倫理道德と異なる道に見出される。彼はその不義に對して憤りはしない、若しも二人が責任を持つての上の事なら、眞劍なら、念力かけての上の事なら容認しよう、又その所爲を不都合だとして詰責もしないといふのである。彼が望むのは、出來た事は爲方

が無いとして、その始末を三人が平等の立場に立つて、公平に、悧巧に處置しよう、決して馬鹿な眞似をしないやうにしようといふのだ。この寛大なる心持は當の二人にもなかなか呑込めないので、昌造は例の通り噛んでふくめるやうにくどくどとお談義に及ぶ。しかし、昌造と千葉では決して對等の立場には立てるわけが無い。昌造は自ら公平がりながら、結局千葉の劣れる立場を利用して壓倒した結果になる。二人が無理にもいつしよになつて、現在の千葉の力で幸福に暮らせる自信があるならやつて見ろといふ昌造の言葉は、誰の目にも無理難題である。吾々は千葉に同情する外爲方が無い。更に又おしげに對し、千葉とからだの關係があつたかどうかを詰問する場合、昌造はそれがあつたとしても怒りはしない、たゞかくす事、嘘をつく事がいけないとしきりに繰返すが、これも亦おしげを一番苦める攻め方であつて、此の場面にはサディズムの徴候を感じる位だが、しかも昌造はいちいち冷靜なる理窟をくつつけて、自分の心持の正しさによつて相手を導くもののやうに云つてゐる。然し、よき解決を求めながら、結局此の事件は未解決の儘に終つてゐて、最後は極めて漠然たる、且甚だ突然に感傷的なる昌造の感慨を以て結ばれてゐて、何事をもはつきりさせる事の好きな彼の主義を裏切るものがある。

里見氏のうまさは今更いふ必要が無い。殊に此の小説が、明白に主觀的小說であり、作者その

人の心構への説明であり、主張である限り、吾々も主としてその心構へに對して批判を加ふ可きものと確信する。その點で、私にはどうしても加島昌造の主張に同感が持てない。彼一流の、おのれのおもひを通すといふ心の強さは羨しく思ふが、彼が正しいと信じてゐる事に何の據りどころがあるのか、いくら反復してもわからない。嘘をつくな、赤裸々であれといふ抽象的な註文は示されてゐるけれど、嘘をつかず、赤裸々であるならどんな事をしてもいゝといふ我儘勝手は理論として成立たない。自分は何をしてもそれが嘘でない、正直であるといふ確信を持ち得るであらうが、他人の所爲に對しては、必ずしも嘘でないといふ事のみで許しはしないのである。おしげが千葉のやうな値うちのない青年とたゞならずなつた事に對し、昌造は忽ち役不足を感じてゐる。彼は明かに自分がよしと見るものは正しい、自分が好むものは正しいと云ふ勝手氣儘な標準によつて他を律してゐるので、第三者から見れば少しもうなづけない信仰に一切を托してゐるのだ。しかもその一人ぎめの正しい道にそむく他人を攻る事極めて急で、おもひやりが乏しい。その爲に登場人物があまりにいたはられ過るのと、あまりに苛酷に扱はれ過るのと二種類に別れてしまつた。

「安城家の兄弟」は、一種の告白文學ではあらうが決して懺悔の心に出るものではない。そんな

弱氣は作者の唾棄するところであらう。これは反對に、自己の行爲を肯定し、又他人にも是認させようとする努力の結晶である。しかし主人公の主張が客觀的に正しいと認められない限り、同感を強るのは無理で、多くの讀者は寧ろ反感を持つのではないかと疑はれる。

私は上來述べ來つた理由で、この作品を里見弴氏の作品中上位には置き兼るのであるが、好むと好まないとに拘らず、あく迄も制作に努力する氏の態度には深く敬意を表し度い。（昭和六年六月八日）

——「三田文學」昭和六年七月號

元祿屋敷

長い間の獨身下宿生活に馴れたからばかりでなく、生れつき衣食住の世話のかゝらない性分たので、私は經濟が許すならばホテル住居をし度いと願つてゐたが、その第一條件は何時迄たつてもみたされさうも無く、又今となつては愚妻が同意しさうもないので、一生願は願のまゝでおしまひになるかもしれない。

大正八年の暮に大阪から歸つて來て、赤坂の氷川神社の前の坂の中途の新建の、まだ壁も乾かない家にひとりみの所帶を持つたのが最初で、翌年三田の慶應義塾の稻荷山の裏手の福澤家の御持家を拜借して移り住み、二年間ゐる間に愚妻がやつて來た。吾々には分に過ぎた家で、家そのものには決して不滿はなかつたが、何分車馬の往來のはげしいところで、曉方から深更迄物音が絶えず、殊に自動車や荷馬車が通ると家鳴震動して神經を脅かし、勉強の妨になるので、たまた

ま知人が知らせてくれた青山二丁目の墓地に近い閑靜なところへ引越した。家は古かつたが相當の庭があり、いろいろの花の樹果の樹があつて頗る氣に入つてゐたが、地方の市長をしてゐた持主が、原敬氏の急死がもたらした政變の爲に再選されず、俄に歸京の事になつたので、突然追出される事になつた。

家事に關しては極めてまめで無い質なので、自分で借家を探したり、新聞の廣告欄を見たりする氣は無く、たゞたゞ困つてゐると、

「それはいゝ家があるのよ。」

と泉鏡花先生の奥さんが敎へて下さつた。ところは番町で、泉先生の御宅から半丁と離れてゐない、室數が十二三あつて、庭が數百坪あり、門長屋があり、瓦屋根を頂く大門の如きはまるでお大名の御門のやうだといふ話なのだ。それでは駄目だとてんから問題にしないでゐると、

「いゝえ、それがそんなにお高くないのよ。」

と奥さんは悉く熱心だ。

「だつて、そんな大きなうちが、そんなに安い筈が無いぢやありませんか。」

だまされるやうな氣持で警戒しながら云ふと、

「でもね、うちがとても古いんですとさ。」

奥さんは魚屋のきよ公とかにきいた話を、そのまゝ傳へて下さつた。それでも私は半信半疑だつた。人をかつぐ事が好きで、且又御主人同様かなり話は大袈裟を尊ぶ泉夫人の事だから、うつかり引かゝると笑はれるぞと思つたのである。

しかし追立てられる日限は容赦なく切迫して來るので、或晩一杯機嫌で番町へ廻つて見た。豫て泉夫人から聞いた町所をあてに行つて見ると、煤けた門燈が暗く、番地を認めた木札も古くてはつきりとは讀めなかつたが、たしかにそれらしい家の前に出た。お大名の御門の扉はしまつてゐたが、型通り格子のついた出窓のある門長屋があつて、正に旗本屋敷に違ひ無かつた。門の中は見えないが、少なくとも十以上の室數があり、廣い庭のあるらしい表構へに見えた。こいつはとても自分などの住む可き家では無い、萬一これが泉夫人のお話のやうに中庸を得た家賃ならば、恐らく何か曰くがあるに違ひ無い、番町皿屋敷とはこれだなと考へた。

夜分の事だから門を見た丈で引取つたが、間も無く愚妻は岡田八千代夫人を顧問に頼み、泉夫人を煩はして、審(つぶさ)に家を拝見して來た。家はきゝしにまさる古さだが、室數は十位あり、臺所も廣く、庭も廣い、家賃も決して高くない、それはそれはいゝ家だといふ。

「庭なんて、何處迄あるか、さきが見えない位ですわ。」

と岡田夫人もつけ加へた。これは凄いぞと私も悦喜して、はじめのうちこそ半信半疑だつたが、門だけは自分でも見て來たし、斯う生證人があらはれては、却て大がゝりな空想を逞しくする事になつた。先づ芝生があり、植込があり、木立の茂みの向ふには大きな池があつて清水が湧く、松杉檜の大木は晝なほ暗く、五位鷺が群つて飛立つであらうなど丶、浪漫派の小説の舞臺を想像して心甚だ樂しかつた。

私は早速出かけて行つて、門のそばに住む大家さんの御親戚の方に拜借希望の趣を願出た。その方は寺崎廣業氏について學んだ畫家で、今は某校に勤めてゐると名告られた。偶々机の上にあつたかきかけの佛畫を見せて頂き、奥床しく思つた。その方の御話では、大家さんの先代は此處で開業してゐた醫師で、早世し、ふた親に別れた相續人は幼少の時から信濃の國の伯父さんにあづけられて成人したので、今はこちらにゐないと云ふ事であつた。兎に角家を拜見させて頂く事になつたが、成程古いもので、恐らく二百五十年位はたつてゐるだらうと云ふお話だつた。以前はもう二つ三つ室があつたが、それは朽廢して取毀され、座敷の雨戸も腐つて落ちたまゝで、今は硝子戸だけだといふ。その硝子戸をあけて見ると、折柄梅雨の頃で、雨に烟る築山の樹々には

藪からしや烏瓜の蔓がいちめんに這ひまつはり、その向側は成程一寸見透せなかつたが、私が空想したやうな林や池があるわけではなく、雑草の伸るに任せた空地があるのであつた。何にしても結構なので、是非拝借させて頂き度いとお願ひし、身柄を説明してまかりさがつた。いづれ信濃の國に住む大家さんと相談の上返事をすると云ふ事であつた。

やがて御許が出て、私共は夏の始に引越た。それが大正十二年の事で、既に八年の歳月が完全に過ぎた。

その八年の間にはいろいろの事があつた。先づ引越した年の八月三十一日に、私共は夏休のつもりで、かきかけの戯曲の原稿を鞄に入れて鎌倉へ行つた。愚妻の兄と妹が來る。私の弟が來る。私の兄の子供達が來る。十數人の同勢になつて、明日は船を出してさうだ鰹を釣らうと約束した共の翌日が、例の地震で、家はひとたまりも無く倒潰し、危く逃れて裏山の松林に野宿する身の上となつた。

その時私共が一番心配したのは東京の家の事だつた。何しろ二百五十年の家で、ふだん歩いても根太（ねだ）があやしくきしむ位だから、到底助かる筈が無い、それには留守番の少し足りないのと、無闇に氣の強い二人の小娘が、共々命を失ひはしなかつたらうか、足りないのは足りないまゝに

逃遲れ、氣の強いのは氣の強いまゝに無益な冒險をしはしなかつたらうか、或は正午の事だから、臺所から火事を出して、大家さんはいふに及ばず、御近所に迷惑をかけはしなかつたか、萬一助かつても、行くあてが無く途方にくれてゐやあしないだらうかと、松林の梢遙かに、横濱か、まだそのさきか、何處かにあがる入道雲のやうな火の手を眺めながら心配したのであつた。だが、十日たつて歸つてみると、所々の壁が崩れ、お大名の御門の屋根瓦が落ちただけで、二百五十年の家は無事だつた。無事だつたおかげで、泉鏡花先生の隨筆には元祿屋敷の名をうたはれ、有島生馬氏の山の手風景には、永く保存すべき番町風景として記された。

震災直後は町内の申合せで戸毎に一人づゝ夜警に出る事になつてゐた。無益な事とは知りながら、私も應援に來てくれた弟と半夜交代で、お大名の御門の下で町内の義務を果した。

震災後の修理も迅速に濟み、お大名の御門の屋根の瓦は亞鉛(トタン)となつたけれど、ついでに方々に手が入つて、家は一層がつしりした。その後も、私の家は小人數のくせに疊ざはりが荒いと見えて、そこいら中を損じ、汚し、金魚を飼ふといつてはやたらに池を掘り、犬共は草木の根を枯らし、殊に氣の荒いシェパアドは板塀迄も喰ひ破り、申譯の無い次第だらけだが、大家さんは寛仁で、あく迄も親切にして下さる。

地震の翌年には信濃の國にゐた大家さんも結婚して上京し、築山の向ふの空地の樹を移し、草をはらひ、近代風の日あたりのいゝ瀟洒な住居が出來て、若い御夫婦が住んだ。築山の植込を自然の境にして、別に垣根は無かつたから、若い奥さんの多彩の着物の色は、樹々の細かい枝をすかして、はれやかに見えるのであつた。間も無く御子さんが出來、大變な難産だつたさうだけれど、玉のやうな男子が生れた。奥さんは引つゞき長く床を離れず、御子さんは滋養藥で育つた。

私共は此の家に越して來てから、いゝ事ばかり數へてゐた。出入は便利だし、室數は多く、庭は廣く、いろいろの花の樹があり、隣近所は靜かだし、町内には事が無く、大家さんはもつたいない程よくして下さる、いゝ家だいゝ家だと云ひ合つたが、たゞひとつ缺點としてあげなければならないのは、夏暑く冬寒い事だつた。お大名の御門は正に南に向いてゐるのだが、座敷は西向、茶の間は北向で、冬の風ははげしくあたり、西日は殘りなく直射した。何故これだけの地面があるのに、東南向の家を建てなかつたのか不思議に思つたが、或人の說によると、昔は多く斯ういふ建て方をしたもので、樹木には表と裏があり、その表を觀賞する爲には庭を南向にしなければならないと云ふのであつた。果してさうならば、昔の人は人よりも草木を深く愛したのであらう。私は不圖、人間が無闇に權利を主張し、恭謙の心を忘れるやうになつたのは、南向の家に住むや

うになつてからではないか、或はその逆に、權利思想の發達が南向の家をつくるに到らせたのではないかなどゝ、無用な事を想ひ浮べた。

私はその南向の庭に安物の草木を植ゑ加へた。紫陽花、連翹、萩、芙蓉、山吹、紅蜀葵、蔓薔薇の類である。又岡田三郎助先生に貰つた月見草は、ひところ庭一面にはびこつて咲いた。

庭の春は先づ連翹椿がまつさきに花の色を見せ、大家さんの家の前の二三の大木の櫻が咲いて散ると、つゝじ山吹紫陽花の順に花を開く。庭の眞中にそゝり立つ槐は、白いかよわい花を持ち、感じ易い若葉はあるかないかの風にもそよぎ、夏はその木に蟬が來てなき、日ぐらしが來てなく。この木は素晴らしく根を張るものださうで、植木屋の話では、恐らく庭一面に足を伸ばしてゐて、移し植(うゑ)る事は不可能であらうと云ふ事だつた。秋、落葉の頃は、霙のやうに葉を散らし、眞冬の梢の枝のなりも惡くない。落葉といへば隣家との境にある朴の木の廣葉がかさかさに干反(ひそ)つて、枯葉と枯葉とがさゝやきかはすやうに風に鳴りながら、未練らしく散るのも風情である。櫻も桐も紅葉も散つて、俄に眼界が廣くなると、眞青に澄んだ秋の空に、あかあかと柿の實の鈴なりになるのも毎年の眺めである。その頃はいろいろの小鳥も來て囀り、冬から春へかけては毎年忘れずに來る山鳩がゐるし、春から夏へかけては、これも缺かさずに來て鶯がなく。この自然の惠は、

身にあまる仕事をしよひ込んでへこたれ勝な私をなぐさめてくれる。私は廣い庭を有する家を借りて住む幸ひを常に感謝してゐる。

それなのに、うちへ來る人――殊に私の近親の者などは、よくもあんな家に住んでゐられるものだと噂しあつてゐるやうだ。家が古く、歩くと根太がきしみ、簞笥や本箱がかたこと鳴り、室數は多いけれど間取が惡くてかくれ場所が無い、朝日がさゝず夕日がさし、南風が通らず北風がつれなく吹きつける、暗い、陰氣だ、しめつぽい、庭はあるにはあるが荒れはうだいに荒れてゐると惡い事ばかり數へ立てる。

さういふ相手とは、いくら爭つてもはてしが無いから、

「でも、これ程の大家さんは何處にも無いだらう。」

と話をわき道へ持つて行つて結論をつけるのである。

恰度大家さん御夫婦が東京へ來られて、新居を構へた年の夏の事だつた。私は又金が無くて困り切つてゐた。保險證券を擔保にして借りた金で所得税を納めたが、その月末の始末がつかない。平生は、自分の借金は忘れないやうに手帖に記して年中懷に入れ、一日も早く返さなければならない、他人へ貸した金は返つて來ないものときめて忘れてしまふのを本意としてゐるのだが、扨

て斯うなると不覺にも、何處からか返濟して來てもよささうだなどゝ、あてにならない事を考へるのであつた。止むを得ず小説を書いて賣らうと決心したが、短いのでは金高が少ないから、長いのでなければならない。眞夏の暑氣にげんなりしながら、夢中になつて書いてゐた。その日は日曜の朝の事で、風通しの悪い座敷の端近く机を持出して稼いでゐたが、少し疲れて足を投出し、何とかして手取早く金の入る方法は無いものかと空想してゐたところへ、裏木戸から大家さんが入つて來た。何の御用かと思つてゐると、かねて御預りしてある敷金をおかへししますと云つて持參されたのだ。私はあまりの意外に大家さんの心の狀態を疑つた位だ。いゝえ、もう氣心の知れた方から斯ういふものを御預りしてゐるのは氣持がよくありませんからと、私の手に一封を殘して行つた。その時の私の喜びといふものは無かつた。愚妻を呼んでともども感謝した。だが凡夫のあさましさで、その後も金に困ると、縁側に足を投出して、何處からか思ひもかけない金が飛込んで來やあしないだらうかと、あてもなく期待する事がある。

この話をすると、さんざん家をけなしたものも、一言も無く感服して引さがるのである。

大家さんの住居には離室(はなれ)があつて、誰か獨身者で借りてくれる人は無いだらうかと云ふ御相談があつたので、多勢集つた席上で、誰か借りないかと叫んだところ、言下に手をあげたのが勝本

清一郎さんだつた。恰も「三田文學」復活號を出す頃で、勝本さんは未だ左翼の闘士にはなつてゐなかつた。時々踊の御師匠さんなどがたづねて來たが、兎に角非常な精力家で、その勉強には驚かされた。勝本さんは、よく大家さんのところの御子さんを抱いて、往來を歩いてゐた。清一郎さんが行つてしまつた後には弟の英治さんが入り、英治さんの後には私のつとめてゐる會社の若い人がしばらく居た。

御子さんはすこやかに育つたが、奥さんは病床に就かれる事が多く、又御主人も屢々風邪を引かれるやうで、時には御夫婦揃つて寢てゐるときゝ、私共はいつもかげながら心配してゐた。私のやうな強突張は、いくら體を虐使しても患はず、あゝいふ方が揃つて病氣とは何たる事であらうと、槐の梢の暮れかゝる頃、木立の向ふの灯影をすかして、感慨に耽る事もあつた。それが去年の秋、長い間御主人の養育された信濃の國の伯父さんの看護に赴かれた後で奥さんは病臥され、時折あわたゞしく馳つける醫者の姿に驚かされたが、しめつぽい雨の降る頃に、遂になくなられた。

大家さんの方の御不幸にひきかへ、私共の方は麴町へ來てから愚妻も丈夫になり、近年久しく醫者の顔を見ないで濟んだ。同町内には泉先生がゐる、有島生馬さんがゐる、里見弴さんがゐる、

吉井勇さんも引越して來た、隣町には小村雪岱さんもゐる、何かにつけて心丈夫だ。又附近の町はすべておちついてゐて氣持がいゝ。大きな屋敷が多いので、魚屋八百屋は不廉だといふ事だが、一般に町内の人は、昨今越して來たのではなく、十年二十年三十年ゐついてゐる行儀のいゝ市民だから、人氣も至極穩かだ。私は大家さんの御都合の許す限り、元祿屋敷に永住し度いと願つてゐる。

近年引續く不景氣に、諸方で家賃引下の爭ひが起つたが、私共の方は、こちらからは何もお願しないのに、あちらから多分に引下て下さつた。實をいふと、私はこゝに越して來て以來一度も家の事について煩はされた事が無く、何から何迄滿足してゐるので、引下て頂かなくても結構だつたのだが、お斷りすべき筋合でも無いので、ありがたく御受けした。ところが今年の夏のはじめ、大家さんは庭の一部に二階建の東南向の日あたりのいゝ家を建増てやらうと云つて來られた。愚妻は元來からだが弱く、暑さにも寒さにも負る方なので、かねて出來る事なら大家さんの御許を得て、東か南を向いた二階を一室建てさせて頂き度いと念じてゐたが、私には懷の都合があり、又あまり我儘過る事なので、差控ろと申含めてゐたところだから、愚妻にとつては曾ての日の私に於る敷金の如く、思ひもかけない惠に見舞はれた譯だ。よろしく御願ひ申ますと返事をしたが、

もれきくところによると、なくなつた奥さんが、生前あの家は西向で寒暑ともきびしく、氣の毒たから、一室なりとも日あたりのいゝ室を建増てやり度いと云つて居られたのださうで、私共はそれを聞いて、なき人を又新しく追慕した。折角の庭が狹くなり、元祿屋敷を近代化するのは殘念のやうでもあるが、それよりも日常生活の要求は強く、私共は喜んで仕事師や大工の立入る事を歡迎した。

建增の家は今正に出來上らうとしてゐるので、或日の夕方、まだ壁の乾いてゐないその二階へ、愚妻といつしよに上つて見た。東と南があいてゐて、その東の窓の外に、槐の枝が伸びて來てゐた。今迄の元祿屋敷の茶の間では、端坐してゐても汗が出るのに、こゝは夕風が涼しく吹き、廣々とした夏の穹窿が、ゐながらにして見晴らせるのであつた。

斯う迄して頂いては、もう此の家は引越せませんねえと、愚妻は心から感謝して云つた。何とか御禮をし度いものだといふ心が一致した。

「せめて家賃でもあげて貰ひ度いなあ。あげるのが當然なんだ。」

と私は應じた。この夏も懷さびしく、多年の借金は少しも減らず、所得稅の納期は迫り、又來るべき冬の洋服も外套も滿足なのは一着も無い窮狀にありながら、私はいくら家賃をあげて頂い

たら適當であらうかを只管考へた。（昭和六年七月六日）

――「三田文學」昭和六年八月號

喰へない文學

陋巷に窮死したと傳へられる鬼才正直正太夫は、

按ずるに筆は一本也、箸は二本也。衆寡敵せずと知るべし。

と、文學では飯の喰へない事を嚙んで吐き出すやうに言つてのけた。

同じ人か、或は他の人か、他人の子供がなるといふのなら止むを得ないが、我が子は決して小說家にはしないといふ意味の事を云つた。まことに吾々は、一本の筆を以てしては腹を滿す事の出來なかつた幾多の先輩の悲慘なる生涯を知つてゐる。殊に正直正太夫在世の頃の作家の生活は甚だみじめなものであつた。一代の寵兒紅葉山人さへ、決して物質的には酬いられなかつた。樋口一葉も長谷川二葉亭も國木田獨步も、二本の箸の不斷の脅威に惱まされ通したに違ひ無い。或作家の家族の如きは、遂に水盤の中の金魚を喰つたとさへ傳へられた。それは勿論いたづらの噂

に過ぎまいけれど、聞く者が多く疑はなかつたといふのだから、如何に悲慘なる生活狀態であつたかは想像するに難くない。

小說戲曲の制作の如きは男子一生の仕事たる可きものでないといふ思想は社會一般に根ざし深く、その作品は子女の讀む可きものにあらずとして毒藥のやうに遠ざけられた。したがつて雜誌單行本ともに發行部數は少なく、書肆の儲も薄く、作者の報酬も充分で無かつた。加之著作の權利を認める事もうとかつたから、原稿は僅かの金で書肆に買取られ、偶々版を重ねる事があつても、作者はその印税を要求する途の無い狀態に在つた。

私がはじめて小說を書いた明治四十年代に於ては、正直正太夫の時代よりは遙かによき環境にあつたけれども、新しく世に打つて出ようと云ふ作家志望者の多くが、筆で飯が喰へるとは考へてゐなかつた。強氣で、人にも世にも負ける事の嫌ひな、おのれの力を信ずる事の深い里見弴氏さへ、果して一生涯を筆に托し得るや否やを考へて躊躇したが、親戚の名跡を繼ぎ、その家に自分の一身を保證する丈の資産のある事を知つて、はじめて作家たらんとする決心がついたと告白してゐる。鈍根私の如きものが、遂に一本の筆に信頼を置かず、月給取となつて衣食の資を得る外に方法が無いと考へたのは當然の事であらう。

しかし、歐羅巴の大戰爭は日本の社會狀態を急激に一變した。俄に金が流れ込んで來た結果すべての方面に發展著しく、出版書肆も大資本を擁して大量生産を行ふやうになり、雜誌も新聞も文藝欄を擴張して流行作家を引張凧にし、恰も時代の潮に乘つた作家は忽ちにして一本の筆が二本の箸を樂々と動かし得る事を實證した。

文學では喰へないといふのが常道だつた時には、どうせ金には緣が無いのだと最初からきめてかゝつて居るので、恰もむかしの職人のやうに金錢には淡白で、原稿料や印税の額も、向ふまかせですましてゐる習慣だつたが、文學でも飯が喰へ、地面が買へ、家が建てられるとなると職人氣質が商人根性に變つた。商談の上手な作家は、その技倆は左程でなくても、職人氣質の作家よりも遙かによき條件で取引を行ふやうになつた。本屋といふものは頗るこすいのが定法だから、昔の通り默つて原稿を渡せば、知らん面をして安く踏んでしまひ、しつつこくせびる相手には、澁々ながら多くを支拂ふのである。當時の出來事であるが、恐らくは日本が生んだ第一位の作家であらうといはれる老大家が、一般に稿料が倍加した事を知らずに、多年緣故の深い書肆の乞ふが儘に作品を與へてゐたところ、或る宴會の席上でかけ出しの若い作家連とおちあひ、談偶々原稿料の多寡に及んだ時、はじめてその若者共よりも自分の方が安い稿料を受け取つてゐた事を知

つて、直ちに書肆に談判に及んだ事があつた。のれんが古いのと、慾張と、物わかりの惡いので有名なその書肆も、すつかり閉口して頭を疊に擦りつけたさうである。

その頃は世並がよくなり、既に小說を讀むのを罪惡視するのは時勢遲れとなり、中學校女學校の敎科書にも小說の拔萃が載り、文藝作家の社會的地位も高まつた。文人は俗事に携はらず、霞を吸つて生きてゐるやうに思はれたのは昔の事になり、俗中の俗なるものこそ流行兒として幅をきかす時代となつた。

一方明治時代の一大特徵を成した畫一主義の敎育は津々浦々迄行き亙り、歐米には文字の讀めない人間も澤山ゐるが、我國には半世紀を經ずして跡を絕ち、その手取早い敎育方針を助けて雜誌と新聞が通俗なる知識の普及に著しい功績を擧げた。本を讀む人間が殖えるといふ事は、筆で喰ふ事を樂にする結果を伴ふ。私の如き臆病者さへ、大正年代の文壇の狀勢を見る時、自分の程度の作家と雖も、一本の筆で飯が喰へるのではないだらうかと考へた。少なくとも十數年勤續してゐる私が、勤務先から貰ふ月給よりも遙かに酬いられさうに思はれた。さあ、文學で飯の食へる時代が來たぞと、文學志望者が躍上つて喜んだのはもとよりだが、曾ては之を罪惡視した親達迄、我子の商賣のひとつとして一應は考へる有樣となつた。

しかし其處には問題がある。私は此の狀態が長く續くとは認めなかつた。何故かといへば、曾て純粹藝術が一般大衆に理解された事は殆んどないからである。小說の畑でも、いぜんは少數の愛好者が親にかくれ、師に祕して讀んだ。その人々は無條件に既成文學の熱愛者であるか、或は相當その道の批評能力を持つてゐたが、讀者の範圍が擴大されると共に、その平均素質は低下した。あらゆる文化の發展形式が民衆化の一路を辿る時に、文學丈が反對の道程をとるわけが無い。それは抗す可らざる力である。だが、古來藝術の諸部門に於て、專門批評家が最高の評價を下し、古典の烙印の押されたものは、いゝ物だといふ先入觀念によつて大衆の尊敬を購ふけれども、作品その物の魅力が多數を引つける場合は極めて少ない。左甚五郎の作品と稱さるゝものは、それが古來の物語によつて民衆に親しい爲、運慶の作品よりも遙かに人氣を持つてゐる。ひさかたの光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらんといふ歌の趣は、少數の藝術家的素質を惠まれた人にこそ深く味はれるであらうが、咲いた櫻に何故駒つなぐ駒がいさめば花が散るといふ俗謠程には理解されず喜ばれない。洗練に洗練を加へられた江戸音曲は、今や浪花節の大衆性に比肩すべくも無い。雪舟も若冲も、蕗谷虹兒程多くの人をうつとりとさせない。甚だあいまいな言葉だが、藝術小說と大衆小說とを對立させて論じれば、概念は手取早く呑込めるであらう。例を明治

文壇にとれば、前者に屬する紅葉露伴鷗外二葉亭柳浪一葉獨歩は、後者に屬する弦齋浪六涙香蘆花程多數の人に讀まれなかつた。大衆は文章の巧拙を問題にしない。一篇の組立方や表現の適不適を問題にしない、それればかりで無く、作家の側でつとめて排除する事に成功した諸要素に愛着を持つてゐる。たとへば、駄洒落、感傷主義、千篇一律性、類型、あり得べからざる出來事、偶然、不自然等。

卽ち私は出版がさかんになり、讀者の數が殖える事によつて文學でも飯が喰へる事を認めるが、それはやがて大衆小說にのみ限られる運命を免れないと思ふのである。一作が當れば一代は喰へると云はれる亞米利加でも、それは藝術小說の事ではなくて大衆小說の話らしい。專門批評家の批判の對象とならないやうな作品に於て見受ける事らしい。この傾向は民主的の國に於て著しい。敎育が進み、誰しも本を讀むやうになる事は、とりもなほさず一般觀照の水準の低下を招來する。殊に現時の我國の如く新聞雜誌が悉く商業主義に支配されてゐる時、編輯のめやすは大衆にあるから、苦心して仕上げた藝術小說よりも幾度となく繰返し蒸返された講談の燒直しの方が歡迎される。

一本の筆で飯が喰へるか喰へないかは、今後世に出ようとする若い作家にとつての大きな惱み

である。私が日頃つきあつてゐるそれらの人の殆んどすべてが、果して將來自活して行かれるかどうかをあやぶみ、相談をうける度に、私は大衆小說ならば喰へるが藝術小說では喰へないと答へる。前にも云つた通り、私がはじめて小說を書いた頃は喰へないのがあたりまへだつた。それが一時大に酬いられ、昨今再び苦境に直面して來たのだ。それを私が見透して月給取となつたのではない。私の場合は主として自分の鈍根を知る故の用心に過ぎなかつた。藝術至上主義の熱情旺んなりし時代に、私は新聞雜誌の月評家やゴシップ・メエカア達から二重生活者の汚名をきせられ、いはれなき排斥を受けた。それに對して私は藝術家の生活が二重であるかないかは、衣食の資を得る道が二つか一つかによつて分たれるのではなくて、その制作の態度が生一本ならば二重ではなく、心にもない制作をして金をとる事こそ寧ろ二重生活なのではないかと、機會のある毎に反駁した。

元より多數と少數——或はたつた一人——の爭ひで、とても私の言ひ分は取上げられなかつたが、よくよく考へてみると、明治大正へかけての作家で、最初からしまひ迄筆一本で喰つた人は衣食住に些かも心配の無い白樺派の人の外には殆んど無い。鷗外漁士が陸軍々醫であつた事は誰も知つてゐるが、紅葉山人さへ讀賣新聞社の社員だつた。二葉亭は海軍省の飜譯官をつとめ、田

山花袋國木田獨歩正宗白鳥の諸氏も新聞社雜誌社から月給を貰つてゐたし、島崎藤村氏は小諸義塾に教鞭をとり、泉鏡花氏も一時春陽堂の編輯局に通勤された。菊池寛氏は時事新報社員だつたし、芥川龍之介氏は海軍の學校の教員だつた。久保田万太郎氏は、さきには慶應義塾の講師、今は放送局にときめく課長さんである。

さういふ先人の事はどうでもいゝ。今後文學は明白に喰へる文學と喰へない文學に分れるであらう。而して時勢は既に移つて、他の職業によつて衣食の道を求め、同時に喰へない文學に精進する事が二重生活のそしりを受けず、寧ろ當前の事と見られる時代が來てゐるのでは無いだらうか。

乍然(しかしながら)又一面に於て、他に一定の職業を持つと持たないとに拘らず、破壁殘軒の下に生をうけてパンを噛み水を飲む身も天ならずやと、その愛弟子が貧苦を訴へるのを叱咤して、只管藝道を勵めと説いた紅葉山人の意氣は、われひとともに忘れてはならない事だと思ふ。(昭和六年八月五日)

——「三田文學」昭和六年九月號

父となる記

どうもあたし變なんですよ――とはじめて家内がいひ出したのは、去年の暮の事であつた。平生から血の色の少しもあらはれてゐない顔は、不安と胸の惡さに、冷い風に曝らされたやうに白け、額か廣く見えるのであつた。毎年の例で、大晦日にたつて京都へ行くつもりでゐたのを、見合せた方がよからうと云つたが、まださうときまつたわけでは無し、別段寢込む程の事では無いと云つて同行した。

京都は家内の父が勤の爲に長くゐたところで、家内も其處で生れた爲、都といふ名をつけられた。數年來私共は、正月を休息の時にして、加茂川べりの宿の世話になる事にきめてゐた。私はよく出步くのであるが、寒むがりの家内は、いつも炬燵にあたつてゐるばかりで、何の爲に京都迄出向くのかわからないとも思はれるが、家事の面倒から解放されて、都雅な京風のすべての物

に取圍まれて居るのは、幼時の追懷をも加へて、樂しい事に違ひ無かつた。それが今年は宿へ着くと床を敷かせて寢てしまひ、旅へ出たのを後悔するやうな氣色を見せて惱んでゐた。

私共では、九年前に死産のあげく、家内もあやふく命を落しかけた事があつて、それ以來こどもは惠まれないものにきめてゐた。私はこどもの煩はしさ、將來の多難を考へ、いつそない方がしあはせであると思つてゐたが、家内にはあきらめ切れないところがあつた。犬を飼つたり、鳩を飼つたり、小鳥を飼つたり、金魚を飼つたりしながら、それよりも何よりも、親類の夥しいこども達に、洋服外套帽子靴下の類を縫つてやつたり、編んでやつたりするのが、無上の慰みだつたやうである。

こどもなんか無い方が氣樂でいゝ、金でも澤山あるならいざしらず、現在及將來のどうせ苦しい世の中にうみ落し、受驗地獄で難澁させ、就職難で心配させるのはこどもの爲にも可哀さうだ――と私は常々云つてゐたが、家内は口には出さないでも、承服し難い色を示してゐた。

それが、どうもからだがたゞで無いと自覺したので、家内は胸苦しさに靑ざめながら、一脈の希望と多分の不安に緊張し、私は今度こそは家内の命を奪はれるのでは無いかとおもふのであつた。ふだんから乘物に弱く、汽車の旅には大概參つてしまふのが家内のあたりまへだつたが、京

都の宿で元日からのびてしまつた姿には、いつもの旅疲れよりももつと暗い陰影がまつはつてゐた。

東京に歸つても氣分は少しもよくならないので、九年前の死產の時、ひと方ならない御世話になつた杉田隼人博士にみて貰つたところ、正しくそれに違ひ無いと斷定された。博士は杉田玄白先生の幾代目かにあたる方で、その頃は慶應病院の產科に勤務して居たのであるが、その後獨逸に留學中博士となり、今は赤坂見附で獨力病院を經營して居られる。私共は博士を深く信頼し、平素も御心やすく願ひ、御自慢の淨瑠璃を拜聽するやうな御つきあひもあるのである。それで、一切を博士に任せる事はいふ迄も無いのだが、私としては、萬一母體に危險があるやうなら事前にこどもを犧牲にするのが道であらうと考へ、直接博士に相談したところ、そんな心配は先づ無いものと思へといふ言葉だつた。それでも私には、此の前の時の凄慘な病室のありさまが、強烈な印象を殘してゐて、惡い場合の事ばかり想像されるのであつた。

又失敗するかもしれないから、あまり人には話さない方がいゝと家內も云ひ、私も勿論同感なのであつたが、母體は次第にふくらんで來るので、忽ち諸方から祝辭を浴せられ、それが世間の御世辭と見えて、きつと男の子に違ひ無いと誰もきまつて云ふのであつた。ところが私共では女

の子を望んでゐた。家内は女の子ならば奇麗な着物をきせ、髪を結ひ、人形をあてがひ、遊藝をしこむと云ふやうな、ありきたりの母親の希望で胸をいつぱいにふくらませてゐたに違ひ無く、私は此の世の中では女の方が男よりも望ましい地位を占めてゐてしあはせなものだと確信してゐる上に、女の子ならば親を邪魔もの扱ひにする度も低からうが、男の子ではどうせおやぢに叛逆するのが當前だから、末始終厄介だといふ利己的な考も持つてゐたのだ。うまれるものなら女の子の方がいゝと人にもきかせ、うちでも共々いひ合つてゐた。家内は早くも出産の準備をはじめ、うまれるのは女の子ときめて、産着の柄などもえらんでゐたやうだ。

私共でこどもが出來たと聞き傳へた人が、異口同音に、今年はお産の多い年ですよ——と云ふのであつた。さういはれてみると、私の弟のところでは四月頃うまれる豫定だといふし、家内は男一人女二人の三人きやうだいだが、兄の家でも妹の方も目下お腹が大きいと云ふ。私の勤務先の同僚中にも、十指にあまるお目出度が數へられた。しかし、私共のやうに久しく無くて、うまれると云ふのは一寸類が無いやうだつた。奇蹟ですよ——と云ふ人もあつた。尤も私の同僚で結婚後八年目だかにうまれ、引つゞいて三人の親となつた人もあつた。他の同僚で、十三年目だかに親となつた人もあつた。どうしたわけか、この二人の同僚は共に世を去つてしまつた。殊に後

者は、肺患で靜養中に妻なる人が受胎し、出産の翌々年長逝したのであつた。私も親となつて、間もなく死ぬのかなと、不吉な事もおもひ浮べた。

よくない事を云へば、四月に出産の筈だつた弟の妻が、二月の何日頃か流行性感冒に罹り、中耳炎を發して入院したが、どうしたわけか入院後に丹毒を發し、こどもは八ヶ月でうまれたが、母體は長く苦んで三月の末に永眠した。早く母に別れ、父に別れた不幸な身の上で、カトリック教をかたく信じてゐた美しい人だつた。

弟の妻の死は私の心を暗くした。その夫婦のはかない別れも、あとに殘された二人のこどもの事も、そのこども達を引取つて世話をしなければならない今年七十歳の私共の母の事も、勿論深く同情したが、同じ不幸が萬一私共にも起りはしないだらうかと云ふおそれが強くなつた。家内も此の訃報に接した時は、脣の色を失ひ、繰返して歎いてゐた。つい先年も、私の姉の娘が、二度目の産の後で死んだ。その事とあはせて、二度目の産のこはい事を或る時家内も口に出した。

元來丈夫な質でない上に、最初の産でひどいめにあつた家内に怖氣をつけない爲、私はつとめて内心の心配を口にしなかつた。家内も自分の不安をかくし、安産を信じてゐるやうな態度を裝つてゐた。それが、弟の妻の死んだ時は、言葉にも表情にも不安と恐怖がかくしきれなかつた。

四月に入つて、家内の父が急死した。死ぬ少し前に多摩の墓地を買ひ、古稀の祝をし、やがて私共の家に孫のうまれる事を樂みにして、もうおもひ殘す事は無いと言つてゐたのが、その孫のうまれるのを待たずに死んでしまつた。重ね重ねの一門の不幸が、たゞでない家内の體に障りはしないかと人々は心配してくれたが、私は自分も家内の父と同じ時に墓地を買つた事の方を氣にして、少なからずかつかいだ。それは弟の妻が死んだ時、かねて私共の父の墓所が廣くとつてあるので、その唐櫃の中にいつしよに納骨するつもりでゐたところ、分家したものゝ骨は新規の墓地に埋葬しなければならぬと云ふ窮屈な規則があつて許可されない。止むを得ず、弟は墓地を買ふ事になつたが、さう云ふ規則ならばいづれはみんな別々になるのだから、いつそ今のうちに兄弟揃つて接續したところを買はうといふ事になり、私共兄弟七軒が長屋のやうに續いた墓地を求めたのである。その時家内の父も希望して仲間に加つた。私は、その新しい墓地が間も無く役に立つのでは無いかと、すつかりかつかいでしまつたのである。

その上一層私の心を平靜にして置かなくなつたのは、家内の様子だつた。私は晝間は勤があるので、讀書や執筆の爲につい夜分遲くなる。十二時一時は珍しくないので、うちの者はいつも先に寝て貰ふ事にしてゐる。殊に大事をとらなければならない家内には、うるさく就寢を勸めるの

であつたが、寝所へ行つた筈のが、氣が付くと何時迄も起きて何かしてゐるのであつた。夜更かしは體に障るからいけないと云つても、毎晩遲く迄床に入らない。何をしてゐるのかと思ふと、片づけものをしてゐるのだ。自分の衣類はいふ迄も無く、私の簞笥から本箱迄すつかり整理してゐるのだ。私は、はつとして口がきけなかつた。家内は覺悟をしてゐる――私はその覺悟を無理が無いと思つたが、さうとは云へずに、たゞ早く寢ろ寢ろと無駄に繰返すばかりだつた。

恰度その頃、月々催す飲み會で、既に充分醉つた久保田万太郎氏が、都さんどうしてゐます、それ大丈夫ですか――と突然きいた。久保田さんは家内がみごもつた事を誰よりも喜んでくれ、それ丈なりゆきを心配もしてくれたのである。しかし、酒席の事ではあり、又私がおやぢになると云ふ事に對し多少揶揄するやうな調子も含んでゐた。私はうつかり、死ぬ覺悟をして毎晩片づけ物をしてゐるよ――と答へてしまつた。全くうつかり口に出してしまつたのだ。しまつたと思ふ間も無く、久保田さんは義憤に堪へないやうな態度で詰問した。そんな事が、そんな馬鹿な事があつていゝんですか、よし、あたしが玄白にあつて來ます――うつちやつては置けないといふ意氣を示したが、なほその上に輿論に訴へようとして、ねえ先生、そんな事つてありますか――と一層語氣を強めたが、幸ひにして泉鏡花先生は、夙に軟體動物に化けてゐて、世の憂き事には耳を

藉さなかつた。
久保田さんは殘酷な事が大嫌なので、家內が決死の覺悟をしてゐると云ふ事も好きな事でなく、又私がいかにもそれを平然と口にしたのが許して置けない氣持を誘つたのであらう、しきりに盃をふくみながら、恰もそれが杉田博士の責任でゞもあるやうに憤慨するのであつた。茲に玄白とは、勿論當代の隼人博士の事なのであるが、久保田さんの記憶には有名なる祖先の名だけが殘つてゐたのである。
こどものうまれるのは八月の十日頃といふ豫定だつたが、夏になつても家內のおなかは、世間の妊婦のやうに大きくはならなかつた。醫者は順調だといふけれど、發育不良のこどもでもうまれるのでは無いだらうかと心配してゐた。
七月二十九日の事であつた。夜の十二時頃、家內が樣子が變だと自分でいひ出した。お腹の痛み方がたゞ事で無い、或は陣痛では無いだらうかと云ふのである。そんな事があるものか、昨日お醫者が來て、矢張來月十日頃だと云つたさうではないかと、私は相手の不安を一掃するつもりで、わざと取合はなかつた。でも、今にも出て來さうな氣持がするから、兎に角醫者に來て貰つてくれと云ふので、私は寢てゐる女中達を起さないやうに、そつと電話口へ立つた。病院の事だ

から深更でも直に通じた。おやすみのところを申兼るが、是非來て頂き度いといふと、こゝろよく引うけてくれた。私は玄關のかけがねをはづし、門の扉をあけて夜更の町に佇んだ。愈々時が來たなと思つて、丹田に力を入れ、どんな事があつてもおちついてゐなければならないと、自分自身にいひきかせた。角の交番の人が不審さうに此方を見てゐた。

引返してみると、たつた數分間だつたのに、家内の樣子は事態の頗る切迫した事を示してゐる。眞靑になつて、額にあぶら汗を流し、襲ひかゝる苦痛に身の置所が無いやうな有樣だ。女中達も物音に驚いて起きて來てゐた。うまれさうだ、うまれさうだといふので又電話をかけると、先生はもう御出かけになりましたといふ返事だつた。僅かな時間が、おそろしく長かつた。博士は病院の助産婦川守田さんといつしよにかけつけた。今にもうまれさうな事を云つてゐますが、出來る事なら病院へ連れて行つて下さい、本人も自宅では萬事が不行屆でいやだと云つてゐます――と、私は素早く博士に賴んだ。もともと產は病院でする約束だつたので、博士もうなづいたが、扨て家内の樣子を見ると、流石に博士もあわてたやうだつた。これはもううまれるかもしれない――といひながら、どつちにしたものか迷つてゐたが、お湯をわかして、お湯をわかして――と繰返して、うちのとしよりに云つた。だが、耳の遠いとしよりは家内の足をさすりながら、奥樣，

大丈夫で御座いますよ、大丈夫で御座いますよ――といふばかりで、博士の言葉は聞えないのである。よろしい、病院へ持つて行かう――と博士は遂に意を決して、川守田さんといつしよに産婦を抱上げた。何しろもう破水してゐるので――博士の顏面には歴然と疑惑の色が漂つてゐた。私は二人の手から家内をうけとつて、門前の自動車迄運んだ。果して病院迄無事に行くかな、途中で車の中でゞもやつたら大事だぞと思つて、手のつけやうもない事柄に茫然としてゐると、自動車は急速度で走り出した。それが十二時半だつた。

私は女中達に心配させ度ないので、強て床の中に入つて寢たふりをしてゐたが、人の命がうまれるか、奪はれるかといふ時に、到底眠られるものでは無かつた。自分もいつしよに病院へ行つてやらなかつたのが、死の危險をも豫想してゐる家内に對して申譯なく思はれた。頭も目も冴えて困つてゐると、電話の鈴が鳴つた。私はそれを吉報とは感じなかつた。

かけつけると、向ふには博士が自分で出てゐた。一時三分に男の御子さんがおうまれになりました、母子共に御異常は御座いません――ふだんとは全く變つた、嚴粛な切口上で報告された。私もそちらへ伺つた方がよろしいでせうか――誰も附添がないのは、何かの場合病院に對し無責任のやうに考へられたので、かう云つて見たが、それには及びません、明朝御出でになれば結構

です――と博士にはつきり斷られた。

女中達も心配して又起きて來てゐた。男の子がうまれたさうだよ――私は耳の遠いとしよりに聞えるやうに、大きな聲で云つて、その儘床についた。

朝、會社へ行く支度をして病院へ行つて見た。家内は意外千萬にもあまり疲れた樣子もなく、附添の女の人と口をきいてゐた。少し離して置いてあるちひさいベッドに、引締つた眞赤な顏をした男の子が兩手を兎の耳のやうに頭の近くまで延ばして、安らかに眠つてゐた。自分に似たところもある、家内に似たところもある――それが我が子だと思ふより先に、人間といふものは何といふ不思議なものだらうと、生物のうまれてくるはかり知られぬからくりを讃嘆したのである。

(昭和六年十月四日)

――「三田文學」昭和六年十一月號

續父となる記

おやおや、こいつは里見弴だぞ——私は赤坊の額を指していつた。有島兄弟の特徴である面擦(めんずれ)のやうに拔上つた額を、生憎聯想したのである。

今に濃くなりますよ——と產褥の家內は赤坊をかばふのである。なんて赤い顏なんだらう——といふと、生れた時赤ければ赤い程色は白いんですとさ、ねえ間淵さん——と附添の人に應援を求める。普通の赤坊より餘程ちひさいのぢやあないかな——といふと、それは爲方がありませんよ、十日も早く生れたんですもの、そのかはりお產が輕くて濟んだんですよ——と家內は何處迄も辯護する。

さうですよ、あなたはお利口さんですねえ、お母さんを苦しめないやうに早く出て來てあげたんですねえ——廻診に來た博士も赤坊の顏をのぞき込んでいふのであつた。

家内の母やきやうたいは早速かけつけて、一同無事を喜びあつたが、私の母はあまり澤山の身内の者が押かけては産婦の爲によくない、自分が率先して辛抱の範を垂るから、なるべくお斷して絶對安靜を心がけなければいけないと云つて來た。

七月三十日の佳日に男子御安産まことにめで度御悦び申上候早く見たく候へども今しばらく靜かに過され候やうにとさしひかえ居候五日は七夜に候まゝ附添の人々に赤飯にても持參致可申と存候がいかゞなものに候や御遠慮なく御申越被下度候私の手にて出來候事ならば何なりと御申聞被下度候當分ゆつくりおやすみ可被成候いづれ遠からず御めもじ可申上樂しみ居候先はあらあらかしこ

またれつるととせの月日ながくして世にあらはれぬ千代の若竹

母は一週間辛抱して七夜の日にはじめて來て大層喜んで行つた。

きのふはつゝがなき御様子を見嬉しく存候あつさの折から猶々たべ物朝夕の冷風御用心なされたく候思ひしよりも男らしくよき子にて又一入嬉しく生たちを樂しみ申され候

めづらしく生し若竹二葉より

世にすぐれたるふしも見えけり

御申越のごまみそ少々さし上候いつにてもこしらへますからとそは女よりもよろしく申上候梅に鶯松に鶴、女の子が生れゝば姫小松で、男の子が生れゝば千代の若竹ときまつてゐる母の歌が、この場合たくみな歌よりもかへつて眞情が流露してゐるやうに思はれた。ごま味噌は家内がねだつたので、そはと云ふのは本家の臺所に長く働く女である。

こどもが生れたら何といふ名をつけるか、どこの親も考へ迷ふ事であらう。こどもの名を考へて置いて下さい——と家内は度々私を促した。お前の好きな名前をつけたらいゝだらう——と私も責任を廻避したかつた。同じ言葉を互に繰返し、決しかねてゐると、兄弟姉妹友達からも、名前は何とするのだとしきりに質問された。

私共は男八人女四人といふ非近代的のきやうだいで、しかも血統は争はれず、總じて多産の傾向があり、今年七十歳の母の孫は四十餘人(正確な數字を記憶しない)に及ぶので、十年こどもの無い私は珍しい存在だつた。それが愈々おやぢになると云ふので、期せずしてみんなの興味の中心となり、冷かしのたねとなつた。それといふのが、今迄さんざん不遠慮に、どこの子は鼻が低いとか、目つきが些かベン・タアピンだとか勝手な批評をして親どもを忌々しがらせてゐたむくいで、あんな大きな口をきいてゐたのが、どんなはんぱな子供を持つか、どんなに頓馬な名前を

つけるか、手ぐすねひいて待つてゐる形だつた。

男が生れたら泰藏、女が生れたら優だ――と私は又みんなをはらはらさせてやつた。それは私共の父と母の名前で、祖父母の名を孫が貰ふのは世間によくある例であるが、凸凹のが生れるか、平べつたいのが生れるかわからないのに、未だ生々しい父母の名を繼がせると云ふのは、理窟ぬきで眉をひそませる事だつた。又やつてやあがると云ひ度さうな顔が、あつちこつちにちらついた。それと察して、それだけはよして下さい、皆さんに悪いから――と家内も贊成しないのであつた。

そんなら、夏生れるのだから男なら夏雄女なら夏としよう――と私も素直に撤回した。たゞそれ丈の事で、別に深い意味は無いのだが、近代彫金の名匠加納夏雄と、薄命の閨秀作家樋口夏子に加へて、泉鏡花先生の傑作「三枚つゞき」の立女形お夏さんを聯想していゝ氣になつてゐた。たゞ些か名前がすつきりし過て、日清戰爭時代のいゝ男いゝ女を想像させるおそれはあつた。しかし、あゝでも無いかうでも無いと考へるのも煩はしく、腹の中ではこれときめた。

ところが、家内の兄の家で、こちらよりも二十日ばかり早く男の子が生れ、夏男とつけてしまつた。やつたなと思つたが爲方が無いから、こつちは父と母の名を一字づゝとつて優藏と命名し、

家内の亡父も景藏だから、それにも緣があるのだとこじつけた。そんなに早くきめなくてもいゝと云はれたけれど、目出度い事は早い方がいゝ、私は出產の翌日區役所へ行つて屆を濟ませた。お七夜の日には

命名　優藏

と杉田博士が筆をふるつて書いて、赤坊の寢てゐる頭の上の壁に貼つてくれた。

　あまり方々に御知らせしなかつたのだが、聞傳へて御祝に來て下さる方が多く、病室には犬張子やでんでん太鼓の古風なのから、セルロイドの新興藝術派風の玩具が、づらりと並んだ。大學校附屬の病院などゝは違つて、家庭的なちんまりした病院だから、院長さんや奥さんからもさう云ふ品々を頂戴した。犬張子の中で馬鹿でかいのをかつぎ込んだのは銀座のはち巻岡田で、拙宅の巨犬ドウガルになぞらへた別誂の逸品だ。

　拙宅にこどもが生れたといふのは、友人知己の間で甚しく珍しがられた。もう生涯こどもは授かるまいと私共さへ思つてゐた位だから、世間は尙更だ。それが先入主になつてゐるので、始終遊びに來る人の中にさへ、家内のお腹に氣がつかず、へぇ赤ちやんが生れたんですか――と驚いたのもあつた。孫ではないかと冷かして來たのもあつた。勤務先の人達も半信半疑だつたらしく、お宅にこどもが生れたとみんなが云つてゐますが、犬のこどもですか――と眞面目に訊いた若い

人もあつた。ドオガルの親もと、伊勢の川喜田さんからは、自分が犬を送つたからこどもが授かつたのだと、喜んで下さつた。

犬といへば、家内が安產の後間も無く、或朝寢床の中で、うちのおかつちやんがあわたゞしく廊下をかけて來る足音を聞いた。病院の方に何か變事があつたなと、私は想像した。

旦那さま、大變です。ショオが死んで居ます――と呼吸を切つていふのだつた。變事は變事でも病院ではなく、我家の犬だつたかと、ふしあはせな犬には氣の毒だが、先づ安心して起きた。ショオはシェパアド種の雄で、去年の秋の展覽會で優等賞を貰つた家内の愛犬だ。彼は朝日のさし込む庭の上に橫つて動かず、雌のジンが悲しげに傍にゐた。前日有名な犬醫者の中村先生が健康診斷に來て、どこも惡くない、元氣だ、完全だとほめて行かれたのに、突然の此の死態は甚だ疑はしかつた。念の爲麻布の獸醫學校で解剖して貰つたところ、猫入らずをのまされた事がわかつた。泥棒のしわざか、誰かのいたづらか、先年も英吉利セツタア種の母犬をやられた事があり、重ね重ねの不祥事であつた。

だが、先年家内が死產で命を落しかけた時、娘時分から飼ひ、里からつれて來た銀鳩が死に、それが身がはりになつたのだといひ合つたが、今度も亦家内の可愛がつてゐた生ものが死んだの

は、何かの因縁があるのでは無いか、意外に産が輕く、意外にこどもが丈夫なので、尙更そんな風に想はれるのであつた。

　もうひとつつけ加へると、家内の妹で私の弟の妻になつてゐるのが、これは三度目のお産だが、八箇月で死産をしてしまつた。それが優藏の七夜に當る日であつた。先年家内が死産をしたのも八箇月目だつた。彼是想ひ合せて何かのつながりを感じるのである。

　病室の窓からは山王臺が見え、夜は涼しい風が通ふのであつたが、日中は暑く、優藏は私に似て汗つかきと見え、手の中にいつぱい汗を握り、それを頭の兩側に高く突出して寢てゐた。赤坊の手はしまつて置かなければいけない、物音に吃驚しないやうに昔はからだに縛りつけた位だと聞かされたが、優藏は手をしまはれると機嫌が惡くむづかるのである。

　御近所の泉先生の御宅では御子さんが無く、又奇麗好の先生は垂流しの赤坊なんか嫌ひだらうと思つてゐたところ、或晩よそで飲んで歸つて來て、格子先で奥さんに醉體を引渡し、さよならを云つて歩き出すと、おいおい優藏のおやぢ――と後から先生が呼止めた。おい、赤坊を見に行つていゝかい――と追ひすがる。えゝどうぞ――と答へると、よおし行つてやるぞ、ほんとに行つてやるぞ、僕は赤坊の爪が好きなんだ――ふらつく足をふみしめて、往來のまん中で、小指を

ぴよんと立てゝ見せた。

次の日、勤の歸りに病院へ廻ると、今朝泉先生が來て下さいましたよ――と家内はひどく喜んでゐた。私も意外だつた。昨夜は醉つたまぎれにあゝは云つたものゝ、飮んだ晩の事は大概忘れてしまふのが先生のおきまりだし、酒席の翌日は參つてゐるのがふだんだと思つてゐたのだ。先生はね、赤坊の爪が好きだから見ていゝかつて、手を開かせて見てゐらつしやいましたよ――わざわざ來て下さつた事を、家内は大變光榮に思つてゐた。

その晩先生の御宅へ遊びに行き、どうですいゝ子でせう――と先手を打つと、うんいゝ子だ、こんなになつて寢てゐたぜ――と先生は握拳をこしらへ、ひとつを頭の上高く、ひとつを腰の際迄突張つて、優藏のかたちをして見せた。いゝわ、あたしも見に行つてやるから――と長火鉢の向から奥さんが云つた。それ以來泉先生は、私の顏を見ると、おい優藏君はこれかい――と握拳を天地に構へて見せるのである。

三週間たつて、家内は優藏を抱いて凱旋將軍のやうに歸宅した。十日ばかり早く母の體內を出てしまつたので、最初のうちこそ小粒だつたが、元來丈夫な質と見え、榮養はよく、熟睡し、めきめき肥り、忽ち普通の赤坊よりも大きくなつてしまつた。今に濃くなるといふ額はいまだに里

見型で、生れた時赤ければ赤い程ほんとは色は白い筈だと聞かされたが相變らず赤黑い。久保田万太郎さんはこの子には童顏が無いと云ひ、田中峰子さんはこの赤ちやん少し泣いた方が赤ちやんらしくていゝと云ひ、平岡權八郎さんは留守に來て見て御宅の赤ちやんおつかない顏をしてゐましたぜと云つてゐた。或人はこんなにはつきりした眼つきの赤坊を見た事が無いと云ひ、又他の人は凡そ赤坊といふものは男と女の中間にあるやうなものだが、この赤坊には全然女らしい要素が無いと云つた。おやぢの面つきが怖く、且年をとつてゐるので、赤坊に特有の柔味が乏しいのに違ひ無い。この子には一寸でも紅い色のあるものなんか着せられませんよ——と家内は度々云ふのである。

着物の事をいへば、あゝ今日はよかつた、おばあさまにほめられましたよ——と大した手柄をしたやうに云ふ事がある。年寄は洋服が嫌ひで、時々孫の顏を見に來るのに、洋服を着てゐると喜ばない。たまたまきものを着てゐると、今日は大變可愛らしいとほめて行くのである。だから、その反對に、あゝ今日は失敗しちやつた、恰度洋服に着かへたところへ、おばあさまがいらつしやるんですもの——と家内の殘念がる日も度々あるのだ。

年寄は洋服が嫌ひだと云つた直ぐ後で、泉先生の名を出しては叱られさうだが、先生御夫婦も

勿論洋服は大嫌だ。いやあ今日は一段と男ぶりをあげたぞ――はじめから先生に見せる下心で、他所からお祝に貰つたきものを着せ、近くの親類へ行く途すがら先生の御宅の格子を叩くのだ。先生と奥さんが出て來て抱いて下さる時の效果を、家内はちやんと心得てゐる。僕は指にさはるだけだが、どうもかゝあはなめたがつていけない。若しなめたら叱つてやつて下さい――と先生は潔癖だから、幾度も繰返して云ふ。奥さんは奥さんで、拙宅へこどもを抱きに來て、うちのをぢちやんは意地惡よ、をばちやんが毎日遊びに來たいつていふのに、いけないつていふんでちゆよ――と赤坊を相手にお話をしてゐる。

矢張男の子の方がよかつたぜ、町内に男の子が生れたつていふのは惡くないよ――とかねて女の子好きの先生が云つた。こつちも持論にして、女の子の方がいゝいゝと云つてゐたのだが、親になると馬鹿になる、忽ち變節改論して、泉先生が男の子の方がいゝつて云つたが全くさうだなあ――と云ふと、ほんとにさうねえ――と家内も悦喜して贊成した。

赤坊が兩親のどつちに似てゐるかは、誰も興味を持ち、口に出してもいふ事だが、何分優藏は頑丈づくりなので、かぼそい家内には似てゐないと云ふのが目下の定說である。お世辭にもしろ、いゝ子だいゝ子だ――と泉先生はほめてくれるので、愚にかへつた親は圖に乘つて、いゝ子でせ

う、僕に似てるでせう――と追ひすがると、お前さんなんかに似てるもんかい――とすげなく突放された。眼が凄い、こどもらしくない、かんしやく持らしいと人々がいふかと思ふと、流石に女の子はやさしいから、親類の年頃の娘は可愛い可愛いと頬擦りして、をぢさんもこんなに可愛かつたんでせうか――と不審に堪へない顔つきで、私の母に質問した。をぢさんなんか、こんなに可愛かつたものかね――と母は憤然として否定した。

優藏、お前は誰に似てゐるのだ――愚かなるおやぢは、是が非でも自分に似てゐるのだときめてしまふつもりで、我子の顔を見守ると、こどもはたゞすこやかに伸びて行く肉體の喜びで、力いつぱい手足を動かしながら、無心の笑顔を酬(むく)いるのである。

此の一文は、或人があそこのうちにも赤坊が生れたさうだが、きつと今にこどもの事を書くに違ひ無いと云つてゐると「父となる記」があらはれたので、どうだい俺の云つた通りだらうと得意になつてゐるときゝ、そんならもう一度つゞけてやらうと、あまのじやくな洒落氣を出して書いたのである。二度目は前のよりつまらなく、若し更に重ねたら、三度目は二度目よりも又つまらない事だらうが、親は馬鹿だ、優藏が自分で自分の事を記すやうになる迄の記録を書のこしてやらうといふ心持も働いてゐる。

同じ心で、家内は家内で育兒日記をつけてゐる。その拔書。

昭和六年七月三十日午前一時七分

體重、二瓩九〇〇(七百七十三匁)　身長四九糎　頭圍三一糎

夜靜に睡る。

七月三十一日　午前三時はげしく泣き砂糖湯三〇グラム。午前七時第一回の母乳。

八月一日　無意識に笑ふ。幾分黃疸の氣味あり。

八月四日　第一回指爪剪斷。

八月五日　お七夜の祝。哺乳より哺乳迄三時間乃至四時間。

體重　八百十三匁

八月八日　哺乳十五分間にて八〇グラム。第二回指爪剪斷。

八月九日　臍帶脫落。此日初めて父親に抱れた。夜半三時より六時の間蚊に四箇所さゝれた。

八月十二日　此一週間少し暑氣あたりの氣味。

體重　七百五十九匁

八月十三日　第三回指爪剪斷。

八月十六日　午後より元氣なく時々泣く。暑さの爲らしい。便面白からず。

八月十九日　午前十一時退院。

體重　七百七十三匁

小兒科醫金野先生の來診を乞ふ。

八月二十一日　第四回指爪剪斷。

八月二十九日　お宮詣の日。第五回目指爪剪斷。物音を幾分聞つけるらしい。

體重　八百八十四匁　身長　五二糎

九月二日　母乳あまり充分ならず。

體重　九百二十七匁

九月七日　第六回指爪剪斷。

九月九日　機嫌ことのほか良好。足の爪初めて切る。

體重　一貫二匁

九月十三日　物音をはつきり聞つける。母親の聲をよく聞分る。

體重　一貫五十二匁

九月十四日　視力漸く幾分あらはる。第七回目指爪剪斷。
九月十九日　金野先生御來診。母乳少なく且薄き爲便惡きものと認めクリイム使用の事きまる。第八回指爪剪斷。
九月二十日　午後三時及十二時クリイム百五十グラム宛與ふ。結果よろしく便狀よし。殆ど泣く事なし。
九月二十一日　初外出。杉田先生へ御禮に行く。機嫌よし。歸途泉先生の御門口より御挨拶。
體重　一貫百七十匁
九月二十三日　クリイム使用後睡眠も充分にて一日中殆ど泣く事なく機嫌よろし。
體重　一貫二百四匁
九月二十四日　レモン汁一〇瓦使用。早朝ことのほか機嫌よく、笑ひ話す。
九月二十七日　足をつつぱる。
體重　一貫二百六十六匁
九月二十八日　だつこのおねだりらしき話しぶり。
九月二十九日　視力著明。機嫌よく笑ふ。話も上手になる。

十月七日　玩具をなめる。
體重　一貫四百二十四匁
十月十日　大分首が据つて來た。
十月十四日　午後泉先生と下二番町へつれて行く。愈々視力はつきりして物を追つて見る。
體重　一貫五百十三匁
十月十五日　俣野おばあさまを訪ふ。
十月十九日　金野先生御來診。發育良好と大にほめらる。この頃時々大きな聲を出して自分でびつくりする。
十月二十三日　嚏くしやみ多過る。
十月二十四日　午前十時頃發熱三十八度二分。金野先生御來診。吸入二回。頓服藥服用。午後三時頃より全く平熱。
十月二十五日　平熱。發汗多し。吸入二回。
十月二十七日　體重　一貫六百五十六匁
十月二十九日　下二番町行。

十月三十日　青山行。機嫌極上。
十一月三日　はじめて有形便。
十一月四日　體重　一貫七百三十二匁

（昭和六年十一月五日稿了）
――「三田文學」昭和六年十二月號

酒七題

(その一) ヴェルモット

すきとほるたかつきにヴェルモットをつぐ。透明ながらに澁く古びた色を帶び、しかも光りかゞやき、口に含めば甘くすつぱくほろ苦い味が幼い時の記憶をよび起す。私は麻布區飯倉三丁目犬の糞横町に生れた。滿四歳にならないで芝に越したが、天文臺のそばの古びた旗本屋敷で門長屋のあつた事、臺所に近い柿の木に赤く實のなつた事、庭の池にあやめの咲いた事、父と母の間に寢かされてゐる枕もとにヴェルモットの瓶のあつた事だけは、はつきり覺えてゐる。父は酒を飮まなくては眠れない質（たち）で、晩年迄燗酒二合冷酒一合を寢酒にし、夜中に咽喉の乾くのをしのぐ爲、枕頭には必ず水瓶が置いてあつたが、若い時はその外にヴェルモットを、寢そびれた時の用

意に備へたのでは無いだらうか。幼い私が其ヴェルモツトを飲まされた記憶がある。風邪を引いて寝てゐる時で、西洋崇拝の明治中葉の事だから、父も母も洋酒は薬だと信じてゐたのであらう。この薬はうまかつた。（昭和六年十一月九日）

（その二）　葡萄酒

父は甚だしく酒を愛し、慶應義塾が新銭座にあつた頃は、後進の書生に講義をする時、土瓶に冷酒をいれこんで番茶と見せかけ、飲みながら英書を讀んでゐたさうである。私共が知つてからは、寝酒が何よりの樂みで、宴會で飲んで來ても、これだけは缺かさなかつた。食卓の上に黒塗の膳をのせ、何か肴を前にして、それにはあまり箸をつけず、手酌で陶然となつた。旅へ出る時は常用の酒を鞄に詰（つめ）た。父は日本酒の味に惚込んでゐて、洋酒は好かなかつた。客の爲に備へてあるのは、私共兄弟が勝手に飲んだ。私共はちひさい時から、葡萄酒に砂糖を入れ、水を割つて飲むのを好んだ。風邪を引くと、母がそれをあつい湯でこしらへ、レモンを薄く切つて浮べてくれた。ハンケチを咽喉に巻かれたり、眞綿を懐に抱かされたりして、それを飲み、頭から蒲團をかぶつて、ぽかぽかして眠つた事を忘れない。私は葡萄酒をグラスにつぐ毎に、そのグラスのほとりに、

若かつた頃の母の白い顏を感じるのである。（昭和六年十一月九日）

（その三）　麥酒

幾歲の年の春であつたか、向島の佐竹の邸跡で、明治屋の花見があつた。私は父に連られて築地河岸から船に乘り、大川を溯つた。船の中でも、向に着いてからも、立騷ぐ人々の中で、父の靜に冷な姿が目立つた。殊に立食の皿を爭ふ景色に、父は甚だしく不機嫌だつた。いろいろの人が來て挨拶し、不行屆を詫び、中には腕力を振つて喰べる物をとつて來てくれる人もあつたが、父は私を促して土堤に出て、早く歸つてしまつた。その園遊會で、綺麗な御酌が麥酒の給仕をしてゐるのを、非常に美しく感じた。麥酒はコップの緣をあふれて光輝いた。其頃の大人達は、麥酒は泡がうまいのだと云つてゐた。まあ、こんな泡がおいしいのですかと、女の人などは仰山に目をみはつた。こども心にそれをほんとゝ信じてゐたが、大きくなつてから飮んでみると、泡は口の端にくつついて邪魔になるばかりで、ちつともうまくない。想ふに麥酒が流行しはじめて日が淺く、泡立つのは新鮮で、泡の立たないのは古いと云ふ事實を誤り傳へたのであらう。後年、カフエ出來始めの頃、銀座で外人數名が一息に泡を吹飛ばして乾杯した景色に吃驚した。（昭和六年

十一月十一日）

（その四）　ウヰスキイ

今こそ亞米利加は呪ふべき禁酒國となつたが、二十年前私が渡米した頃は、町の角々は大概酒場が占めてゐた。ところが私の住んだマサチユセツ州ケムブリツヂは其頃から禁酒地で、酒屋は一軒も無く、旅舍（ホテル）でも飲食店でも酒は賣らなかつた。酒の飲みたい時は、鐵道でボストン市迄出かけなければならないのであつたが、學資が乏しく、おもふにまかせなかつた。私は安物のウヰスキイをボストンで仕入れて來て、鍵のかゝる机の曳出（ひきだし）にかくし、夜中ひそかに樂んだ。何故ひそかに飲まなければならなかつたかと云ふと、ニユウ・イングランドの頑固な宗教心に凝り固まつてゐた下宿の婆さんが、極端に酒を罪惡視してゐたからである。この若者はおとなしくて勉強家で、煙草も吸はず、酒も飲まない、玉に瑕は基督教徒で無い事だと、婆さんは口癖のやうに近隣の人々へ私を紹介した。私は今、ウヰスキイを飲む度に、お前も基督教徒になつてくれ、さうでないと吾々と同じ天國へは行かれないと、別離の涙を流してくれた般若のやうな婆さんの顏を中心に、亞米利加時代の貧乏生活を思ひ出して憂鬱になる。（昭和六年十一月十二日）

（その五）　クンメル

歐洲戰爭の最中、倫敦の安下宿で、夫婦者の英人と知合になつた。つい先頃迄一流の旅館（ホテル）で贅澤な生活をしてゐたのが、相場と競馬で失敗し、俄に下宿へ落（おち）て來たのだと聞いた。細君のもの迄つかひ果してしまつたのをひどく氣の毒がり、氣兼し、機嫌をとる亭主を評して、文學趣味の細君は、彼は善良ではあるが悧巧では無いと云つてゐた。この夫婦の友達にお洒落で金持の未亡人があつた。いゝ年をして、白粉を厚く、口紅を濃く、大きな眼のふちに青黑い塗料をさして一層大きく見せてゐた。未亡人は骨牌（かるた）と酒が好きで、殊にクンメルを愛飲した。或日、大英博物館の門前で偶然出あひ、見せたいものがあるから來ないかと誘はれて、アパアトメントへ伴はれた。同人雜誌に夥しい小說の場面めいて困るが、おそろしく紅い色調の室內で、骨牌卓（カアド・テエブル）の上に二のグラスを置き、白くすきとほるクンメルを私に勸め、未亡人も飮んだ。私に見せたいと云ふのは歐洲大陸の風景寫眞帖に過ぎなかつた。酒で唇が濡れ、眼がうるほひ、見上（あげ）る程大きな體が目の前に迫つた時、私は思はずクンメルのグラスを床に落した。年增女の慾情のやうに、強く惡甘（わる）いクンメル。（昭和六年十一月十四日）

（その六）　老酒

シャンパンや葡萄酒のいいのは味はつた事が無いから、大きな口はきけないが、さほど苦勞しずに吾々の手に入る酒の中では、日本酒と老酒が一番うまい。蘭陵美酒鬱金香といふのは此の酒のやうに想はれるが、水滸傳の豪傑魯智深や武松が肉饅頭を肴に大杯を傾けたのは、高粱酒のやうな強烈なやつであらう。老酒では上品過ぎる。私が老酒の味を激稱するので、支那の土産にくれる人もあるが、我家の惣菜ではうまく飲めない。こつてりした支那料理でこそ、酸味を帶びたこの酒が口を清々しくしてくれて、底の知れない含味が生きて來るのだ。どこの家でも老酒には氷砂糖を入れるのを本道のやうに心得、それを拒むと田舍もの扱するが、あれは惡酒をごまかして飲む一手に過ぎないので、すぐれたる老酒に甘味を加へるのはもつたいない限りである。いつだつたか、久保田万太郎氏の御馳走で、濱町の待合を直して開業した家へ行き、老酒を命じたところ、冷いまゝ持つて來たので、燗をしてくれと頼むと、あら御燗をするもんですか、皆さんこのまゝ召上りますがと云つた。天網恢々疎而不漏この家は間もなくつぶれた。（昭和六年十一月十四日）

（その七）　バナナ酒

佛蘭西の農民が林檎酒をたくはへ、薩摩人が薯燒酎を造り、或は山家の桑酒木瓜酒、夫々の酒を手造りする風習は、今も諸地方に行はれる。私の母は毎年梅酒を造り、暑氣はらひに用ゐてゐる。拙宅でも傳授をうけて試みるが本家の程うまくない。それでも自慢で客にすゝめる。たしか地震の翌年だつた。銀座のうまいものや、はち巻岡田が魚をさげて遊びに來た時、いつぱい飲ませてみた處、これも飲めるがバナナ酒もよござんすよと教へてくれた。瓶の中にバナナを切込んで密封し、土中に埋る事三年にして、いゝ酒が出來ますよと云ふのである。三年間土の中に埋るといふのがお伽噺の面白さを加へて愉快だ。早速實行した。しかし三年は長い。おい、きつかり三年たゝなくたつていゝんだらうと、意地ぎたなく家内に相談をかけたが相手にしてくれない。やつとのおもひで三年目にあけてみると、中はすつかり黴がはえ、水氣などは一滴もなかつた。これは、はち巻の教へ方が惡かつたのではなく、こつちのやり方にぬかりがあつたのであらう。琥珀の酒を湛へる筈だつた瓶は庭の隅に見捨てられ、やがて蟋蟀の住家となつた。（昭和六年十一月十四日）

——「都新聞」昭和六年自十一月十二日至十八日

ファンのいろいろ

その一

あらゆる階級の人間の見るものとして、芝居と角力は長く王座を保つたが、近頃はベエス・ボオルにとゞめをさす。

おそれおほい事であるが天子様も御覽になつた。宮様方は始終御出かけになり、庶民と樂みをわかたれる。大臣も來る。重役も來る。文士も來る。役者も來る。つましいくらしをよぎなくされてゐる勤人も、不景氣をかこつ商賣人も、職人も、職工も、凡そ現代商賣往來にありとあらゆる階級が、その日の商賣をそつちのけにして球場に殺到する。球場に行きそこなつた者はラデイオの前に陣取つて、出鱈目まじりのアナウンサアの放送に夢中になる。商機を逸しようが、おと

くいをしくじらうが、賣物が腐らうが、日給をふいにしようが頓着するところでは無い。まして、男よりも閑の多い女のフアンの一シイズン毎の増加率は、此の國の人口のそれにもまさる勢である。奥さん、おかみさん、ママ、令孃、女學生、藝者、女給、いろとりどりに、中には見に來るのと見せに來るのと五分々々位のきんきん光つたのもゐる。選手を追かけ廻してサインを求めるのもゐる。附文をするのもゐる。花環を送るのもゐる。合宿へ押かけるのもゐる。最も醜態を極めるのは、球場のはゞかりの前をうろうろしてゐて、そこへ用を達しに行く選手に色眼をつかふ奴だ。

何といつても數の多いのは女學生で、中には學校をヱスケエプして來るのもゐるさうである。學校をずる休みし、サインを強要したり、はゞかりの近所をうろつくのは、明かに良妻賢母主義に反し、善良の風俗をみだるものであるから、或學校では野球とラグビイの見物を禁じ、敎頭の老孃がわざわざスタンドに潛入して監視の眼鏡を光らせたさうだが、そんな事で驚くやうでは近代女性の恥辱である。パパやママやお兄さまなるものを楯にして堂々と入場し、一向禁止の實をあげなかつたが、そのうちに肝心の老孃敎頭の方が男性スポオツの魅力に打負かされて、遂に斷然フアンと化し去つたさうである。

女學校を卒業し、制服や袴を脱いで、おもふがまゝに、いゝきものゝ着られる、所謂家事の御稽古にいそしんでゐると稱さるゝ階級も頗る多い。女學生のから騒ぎはお酌の岡惚に類するが、この年頃のはおもひを輕々しく口に出さないから、陰に籠つて物凄いのがある。無名の贈物の主は、大凡このグルウプに屬するものと見て差支無い。

時々は球場に於て見合も行はれる。現に私も或一組の野球見合の附添役として現場にのぞんだ事がある。白日の下に行はれるのであるから、人工的の光線できらきらする芝居の見合よりも嘘が無くていゝ。たゞ缺點をいへばスタンドは直線的で、當人同志は横顔しか見合へない事である。尤も、横顔の美しい人ならば、其特徴の效果を一際はつきりさせる事にもなる。

新聞語に謂ふ所のスポオツ時代は又早慶時代とも呼ばれてゐる。大方の野球フアンは、大概早稻田贔負か慶應贔負に分たれる。東にあらざれば西、西にあらざれば東といふ態度は、女性フアンに於て殊に猛烈だ。おやぢ、亭主、息子、兄弟の學校關係があれば尙更の事、さうでなくても住居の地理的關係、何となく蟲が好く好かないの感情からどつちかをえらんで我身の事のやうに肩を入れる。私は曾て宴席に於て、一群の早稻田贔負の藝者に包圍され、喧嘩面で應援歌を合唱された苦い經驗がある。

或家の一粒種の令孃は頗るつきのファンで、別段父親がその學校を出たのでも無いのだが、絕對の慶應贔負だつたさうである。近所の人々は、試合當日、球場から歸つて來る令孃の足どりで、慶應が勝つたか負けたかを判斷する事が出來ると、いひあつたさうだ。家は富み、本人は美しく、養子の志願者も澤山あつたさうだが、慶應出でなければいやだといひはり、且運動選手である事を希望した。したがつて、慶應出で無い者はいふ迄もなく、慶應出でも運動選手でないのは、入り替りたち替り首を横に振られて引きさがつた。その數實に二十有餘人ときく。斯ういふといかにも蓮葉な娘、手のつけられないしたゝかものゝやうに思はれさうだが、さうでは無い。令孃は小學校から女學校卒業迄優等の模範生で、ひとたびも浮いた噂などはない、試合開始前のボオルの如く純潔なのださうである。恐らくは極めて無邪氣なので、自分の好みを正直に主張したに過ぎないのであらう。扨てその念願は屆いて、立派なお婿さんを迎へたゞ野球では無いけれども、慶應で鳴らした運動選手がホオム・インとなつたのださうである。

久保田万太郎氏夫人お京さんは既に新聞雜誌に野球に關する談話筆記が出た位で、天下周知のファンだが、溫良貞淑家を守る事にのみ心を碎いてゐた人が、どうしてファンになつたかといふと、此の手引は實は私だ。去年の春だか秋「三田文學」の連中が學生相手に試合をした時、無理に

引張つて行つたのがはじまりで、やがて病みつき、神宮球場のネット裏に全シィズン皆勤のファンとなりすました。母性愛百パアセントの夫人の事だから、いつも一人兒の幼稚舎生耕一君の手をとつて球場にあらはれる。子供も最初は面白がつたが、一時中だるみが來て「ママ、野球の無い土曜はいつ？」と訊いたさうだ。だが、耕一君も忽ち面白みがわかつて來て、今では庭の芝生でさかんにキヤッチ・ボオルをやり、お相手はママが勤めてゐる。宮武、水原などゝいふ名投手は、どういふ姿勢でプレエトを踏み、どういふモオションで投るかいちいち型をやつて見せる位だ。スポオツには縁遠い久保田氏の事だから、「どうも困つた、うちの奴までキヤッチ・ボオルをはじめたよ」と嘆息したが、その實時々はお相手を仰せつかりさうな氣配が見えるので、耕一君の耳に口を寄せ、パパとママとどつちがうまいときいて見たら、子供は正直だ「ママの方がうまいや」と答へた。

その夫人が今年の秋、早慶戰の濟んだ頃から、甚だ冴えない顏をして「もう直き野球がなくなつてしまふんですが、どうしたらいゝでせう」と浮世はかない様子なので、又してもメフイストは入智惠をし、ラグビイを御覽なさいと案内したところ、忽ちこれも御氣に召し、風雪をものともせぬ熱心なファンとなつた。野球場の指定席を買ふ事を許してくれゝば、着物もいらない芝居

も見ないと云つた人が、ラグビイを見るに及んで、今度は洋服をつくるといひ出した。御主人甚だ閉口し、ベエス・ボオルからラグビイになり、洋服を着ると云つてるが「この次はわかつてる。きちがひになる外ないや」と酒間舌鋒鋭く嘲つてゐるが、又ひそかに洋服を許して然る可きや否やを相談する位だから、絶對不許可といふ形勢ではなさゝうだ。私と雖も正直のところ、今になつて愚妻に洋服を着ると宣言されては閉口するに違ひ無いが、ラグビイといふやつは土砂降の雨の中でも、雪や霙が降つても敢行するのだし、その際傘をさゝれては後の人の邪魔になるから、ぺらぺらの和服では到底無理だ。賢明なる夫人は、自分の裝ひについては誰よりもよく承知してゐる。決して洋服の方がみづからを美しくするものとは考へてゐないに違ひない。しかしそんなみつともいゝとか惡いとかいふ事を超越する程ラグビイに夢中になつたとすれば、もつて美談とするに足る。「そりやあラグビイを見るには、洋服でなければ無理だよ」と、惡魔はしきりに主人を說いてゐるところだ。

美談といへば、もうひとつつけ加へ度い。世間が狹く、吉原といふ土地を知らない吾々夫婦に廓のまちの賑ひを見せてやらうといふ久保田氏夫妻の親切で、つれて行かれた。お茶屋の二階で御酒を頂いた際、ひとりの幇間が初對面の夫人にむかつて「ねえ奥さん、先生つて方は非道（ひど）いち

やありませんか。與作をよんであつしをよばないつて事はないでせう」とお座なりをいつたと思へ。夫人は極めておだやかな調子で「さあ、どうでせうか、あたしは野球のお話のほかわかりませんの」とこたへた。どうです、ことばはおだやかだが凜然たるものではないか。勿論帮間は二の句がつげなかつた。(昭和五年十二月二十二日)

その二

凡男子の演ずる運動競技、觀覽物を見る女性ファンの心持は、何處其處の行者何々教の生神様に對する信者の心持であり、陸軍大將を仰ぎ見る子供の心持であり、又レヴュウを見る男の心持に類するものでは無いだらうか。英雄崇拜と助平とのいりまじつたためいきを、私は屢々劇場で、角力場で、球場で、水泳場で、脂粉の香と共に身邊に感じるのである。其處に登場するスタアは、神であり英雄であり、戀人であり、又あとくされが無いならばおもちやにもし度いのであらう。

女は男よりも批評能力が劣るかはりに感激しやすく、贔負強い。好きは好き、嫌ひは嫌ひと簡單にきめてかゝり、好きには有頂天になり嫌ひにはおぞけをふるふ事、芋南瓜蒟蒻と其の一黨對蛇蜥蜴毛蟲蚰蜒と其の一黨が代表する通りである。

芝居は芋よりも南瓜よりも女の好むものであるが、かはりめかはりめに見る事をほこりとする者でさへ、批評眼は極めて乏しいのを例とする。批評が無い丈、好きな役者を崇拝し、英雄にし、神にし、ひそかに戀人にして樂む事が出來るのであらう。菊五郎が好きだとすると吉右衛門を嫌ひ、吉右衛門が好きだとすると菊五郎を罵るのが女のならひだ。雙方の長所短所を明かにし、雙方を認めると同時に雙方にあきたらずとするが如き態度は、女のファンには望み難い。女性ファンの贔負役者に對するは、神でなければ戀人である。

私は勤務先に通ふのに毎日省線電車を利用してゐるが、東京驛頭で血眼になり、裾も露な若い女の群に途を遮られる事が度々ある。最初は、現代風景の一つである工場ストライキのデモンストレエシヨンに女工が騷いでゐるのかと思つたが、さにあらず、たつた今汽車で着いた映畫俳優歡迎の女性ファンの狂態なのであつた。目ざす神様か戀人の袖にでも裾にでも取縋り度い一心で、なりふり構はず殺到するのだ。そのすさまじさは、恰も人なき山道で旅の娘を追廻し先を爭ふ雲助に等しい。追かけられるのつぺりした男は、總理大臣のやうに屈強の男を護衛につけ、危く血路を開いて自動車で逃出すのである。若し護衛がゐなかつたら、長さんも千惠さんも、傳ちやんも、白晝東京のまん中で、前後のわきまへを失つた女群の爲に凌辱され、もみくちやにされてし

まふであらう。

私は未だ實見しないが、傳へ聞く所によると、これら人氣俳優が舞臺で實演する時の女性フアンのもの凄さといつたら、花屋敷の狒々に自由を與へた有様だといふ事である。

肉體の魅力で女性フアンを熱狂させるのは昔は力士、今は水泳選手だと云はれてゐる。ぴつたり體にくつつき、はち切れさうな腕や股に喰ひ込んでゐる黒か紺の水泳着が、ひと度水に濡れてつやつや光り、愈々からだに吸ひついて筋肉の隆起をはつきりさせる時、うつとりしてめまひを感じる女のフアンもゐるといふ噂である。殊に女流水泳選手が、男性選手を崇拜する事は全く神様で、進んで人身御供となる事を辭さないものもあると云ふ話である。

フイリツピンの選手をサイン攻めにし、その宿舍に押かけ、共に外苑の芝生を汚した女學生フアンの夥しかつた事は旣に天下の知るところである。異人崇拜の現代女性も歐米人は何となく近づきにくいが、フイリツピンは恰度手ごろだし、又旅の恥はかき捨てのうらを行つて、旅人とのたはむれに、平生同胞選手に抱いてゐた悶々の情をなぐさめたのは、ことわりせめて哀れであつた。始終陸上競技を見に來る評判の姉妹が、たやすくフイリツピン人といつしよにおかみの手に捕はれた事を知つて、不良學生どもは切齒扼腕して叫んださうだ。「なんでえ、そんなにお安い

のか。そんなら遠慮することたあ無かつたんだ。」

野球場に常に姿をあらはす人の中にも、屢々見苦しい迄とりみだすのがある。ネツト裏に一人慶應贔負で、紫の旗を手にして應援歌をうたふのがゐるさうだが、校風の相違からか、概して勇敢なる行動を以て應援する女は早稻田贔負に多い。昭和五年秋の早慶戰にも、幾多醜惡なる女性フアンを見たが、遂に一人洋裝の奴は、進んでリイダアとなり、物笑ひの的となつた。私は早稻田の野球選手の態度を常に稱讃するものであるが、昔から此の學校贔負の應援には場ちがひが多くて氣の毒である。

或人の話によると、野球選手の合宿に手紙を寄越し、花束をよこし、又時には自分で押かけて來る、女性フアンの數は頗る多いさうである。中には母親と娘といつしよになつて選手に接近しようとするものもあるさうである。案ずるに娘の方は經驗の乏しさから選手を英雄化し、神化して憧憬欽慕するのであらうが、母親の方は、これこそレヴユウを見る男の心持で、あはよくば選手を燕にしようとたくらむに違ひ無い。

いつたい、野球やラグビイを見に來るママ階級は、ひまと金があつて且臆面の無いのが多い。近代野球は愈々戰術が細かくなつて、その道の素養の無い女には充分味はひ兼るやうであるが、

ラグビイはもつと手取早くわかり、殊に極めて闘争的な瞬間は、痛切に胸に響くであらう。野球よりもラグビイを好む女の多いのは、もつともに思はれる。女は天性のかよわさを、更に幾代かかゝつて人工的になよなよさせたが、自分自身實行する事は思ひも及ばない勇猛なる闘争を、涼しい顔をして眺めて快とする心持は多分に持つてゐる。亞米利加で眞に拳闘を喜ぶのは女だといふ。西班牙で眞に闘牛を好むものは女だといふ。そこで雨が降つても雪が降つても敢行するラグビイ選手の、眞新しいユニフオームが泥土にまみれ、顔も手足も汗と土でよごれながら揉合ふ壯觀は、絹物づくめの女達のロマンティシズムと、或種の感激をわきたゝせる爲に素晴しい魅力を持つてゐるのだ。私の見る所では、野球の女性フアンよりも、ラグビイの女性フアンの方が、遥かにモダアンであり、同時に猥感を流露させてゐる。

或女は、ラグビイの選手が、戰前奇麗に分けた髪が亂れ剃りたての顔に流汗淋漓とし、砂塵にまみれた勇姿程力のみちた美しさは無いと斷言した。さういへば近頃、試合當日の選手のみだしなみは念が入り過ぎてゐるやうである。

去年の秋の或試合の日、私の座席の後で女性フアンが、あれは誰さんそれは誰さんと戰前の練習をしてゐる選手を指さして話あつてゐたが、やがて敵方の選手と交代して、一時控室に引上る

時」なんて可愛いんでせう」と、殆んど氣が遠くなるやうな聲で讃嘆した。その眞情の籠つたため息に誘はれて思はず振返つて見ると、洋裝のと和裝のと、どつちも四十前後の婦人だつた。そのママに引そつて妙齢の娘達が、頰をあからめ、うるんだ眼をして固くなつてゐた、よいかな、この實物教育。

その試合が濟んで歸る時目擊した光景は、更に驚く可きものであつた。今、たゝかひ終つた二三の選手が、手拭一筋持つたばかりの素裸で、控室から浴室へ行く。文字通りの素裸なのだ。控室の附近には、恰も東京驛頭で映畫俳優をおつとり圍む女達のやうに、うろうろしてゐる女性ファンがゐて、咽喉迄感激をつまらせて見送つてゐる。「いゝからだねえ」一人のママは、洋裝の娘の肩に手をかけてさゝやいた。襟卷で顏の上半部をかくしながら、娘はぢいつと選手の裸身を見送つた。（昭和六年一月二十四日）

その三

早慶野球戰はつまらないといふ人がぽつぽつあらはれて來た。資本主義は沒落する、歌舞伎芝居は滅亡する、角力はすたつた、小説は亡びる、ベエス・ボオルは最早あきられて、これからは

ラグビイと拳闘の時代だと騒々しくはやしたてるチンドン屋的新人の言葉では無くて、そのみちの玄人の言である。

その説に曰く、早慶戰はほんとにベエス・ボオルの眞味を味はふ可き試合では無い、兩軍の選手はこちこちに固くなり、失策し、拙策續出し、應援團は芝居がかりで熱狂し、中でも一番臆面の無いのがリイダアとなり、怒つて見せたり泣いて見せたり、手を振り足を振り、頭髪を亂し、わざと觀覽席から下の地面にころがり落ちて見せたり、これが役者ならば「くさい」といふ一言のもとにけなされるに違ひ無い様子をして皆々さまの御機嫌を取結ぶ、又球場の外――北は樺太北海道、西は九州臺灣の果て迄も、ラヂイオ、號外新聞で、球場内の熱狂の電波を受け、祝盃を擧げる奴があれば、泣いて憤る奴がある、見ず知らずの人間をつかまへておごる奴があれば、女房子供にあたりちらす奴がある、これは現代日本國民にとつてのお祭で、ベエス・ボオルの眞味を味はふべきものでは無い、そのお祭のお祭たるや、將來若し法政明治帝大立教がほんとに強くなり、早稻田、慶應が六大學聯盟の五位六位に甘んじなければならなくなつても、恐らくは第一位第二位の法明か、帝立か、明帝か、法立か、帝法か、立明かの試合よりも、矢張滿天下の人氣を背負ふに相違無いと思はれる位お目出度いお祭だといふのである。

そんなら べエス・ボオルの眞味とは何だといへば、投球捕球打擊走壘等の技術と、その技術を活かす判斷と作戰とテイーム・ワアクなどの味であつて、勝敗は二の次であり、應援なんぞは迷惑至極のから騷ぎだと云ふので、さしあたり、べエス・ボオル至上主義と呼ぶ可き說である。

この說にも充分同感すべき理由はある。あまりに度を過した應援には、時に厭惡を感じる事があるが、然しながらあの熱狂裡に大飛球の飛ぶはなやかさも、決して捨てたものでは無い。まして況や一般大衆フアンにとつては、早慶のどつちかの味方として、自分も登場人物の一人となり、聲をからしてわめき騷ぐのは、無上の快樂に違ひ無い。むかしから角力場では、最負々々が咽喉のつゞく限り聲援し、屢々客同志の喧嘩を引起したが、近頃では芝居に迄此の風が及び、所謂左翼の芝居には物騷な應援が場を壓し、活動役者の實演にはきいちやんみいちやんのやるせない聲援が湧きかへる。「左翼の芝居は實に面白い、舞臺と客席とをへだてる何物も無い」と感激する人達は、べエス・ボオルの應援團に加はり、選手と共に活躍した氣持になれる幸福な人々と同じだ。

されぱこそ早慶戰の切符を手に入れる爲には夜を徹して球場近くに野宿するもの幾千人、下役を威壓して搾取する上役あり、下級生を脅して奪取する上級生あり、甚敷に至つては、女を釣るのにこれ程有效な餌は無いと豪語する不良學生もありと聞く。扨て當日は銀行も會社も商店も、

日頃の仕事、肝心の商賣を忘れてラヂイオやプレイヤア・ボオルドに夢中になり、帳簿は誤り、札は勘定しそこなひ、心こゝにあらざれば、いたづらに掏摸萬引をして自由に腕を振はせる場面を展開する。役所も、學校も同じ事で、全く國を擧げてのお祭だ。

お祭に喧嘩はつきものだ。おみこしをかついで、あの町とこの町とつき當り、血を流す風習は津々浦々に殘つてゐる。二十有餘年前、早慶戰中止の馬鹿騒ぎを演じた時は、兩軍の應援團委員は前以て會見し、人數方法等の打合せを行つたが、由來政治家揃の早稻田は、ふところ育の慶應を出しぬいて、人數の制限をするどころか、當時神田邊にうろうろしてゐたごろつき書生迄狩集め、前夜から敵の領土に等しい芝山内に陣を布くといふ大がかりな計畫をたて、兇器を懷中するものあり、棍棒竹刀弓の折を持參するものあり、審判官に脅迫狀を送る者あり、噓かほんとか、リイダア吉岡某は、馬上陣羽織を着て指揮するとさへ傳へられた。政治は力なりとはその學校の創立者大隈氏の言であるが、まことに力を以て慶應を壓倒した觀があつた。事こゝに至ては、片方も默つてはゐられない。決勝戰には是非勝てと學校中が熱狂し、六十餘歳の漢學の先生迄年少の學生にむかひ「吾等あく迄も勝たん、然らざればたゞ死するのみ」と絕叫する形勢となつた。亂暴しつこではかなはないとわかつてゐる丈悲壯だつた。中止は止むを得なかつたのである。

復活後第一回の早慶戰は、長年中絶の爲に一層人氣を煽つたが、力量は段違ひで早稻田の大勝に終つた。新聞紙の報ずるところによれば、早大野球部の生みの親、安部磯雄氏は、戰ひ終つた後人に語つて、萬一早稻田が負けたら、又中止となるやうな事態を生んだであらうと云つたさうだ。子を見る事親にしかず、重苦しい低氣壓は、球場の內外に迫つてゐたのだ。

熱狂した應援團が間違ひを起してはいけないといふ心配からか、時勢の進步か、近頃は兩軍ともにその組織統制に充分心を用ゐてゐて、亂雜無節制な自由應援隊よりも、すべてに於て立ちまさつてゐる。時々あらはれる便衣隊が、秩序ある正式の應援團に比して如何にみつともないかは誰しも知るところだ。いつも早稻田の應援をする肌着と股引のおぢいさんに對して、慶應側には日の丸の扇を開いて大見榮を切る呑兵衛がゐて、共に顰蹙されてゐるのを知らないのは本人ばかりだ。

それは未だいゝが、つい近年、連戰連勝の慶應側が薄紫の小旗を振つてスタンドで亂舞してゐるのに業をにやし、木刀だか棍棒だかを握りしめ、たゞ一人外野の芝生から球場に飛下り凱歌をうたふ敵陣になぐりこみをかけようとして、警戒の人に阻止された勇士があつた。この種の愛校心に燃ゆる青年は、銀座で有頂天になつてゐる慶應ボオイの隊の中に割つて入り、何とかして武

勇をあらはさうと示威運動を行ふさうである。

さうかと思ふと、去年の秋は早稲田の自由應援隊の中から妙齡の洋裝の女が飛出して、リイダアの役を買つて出た。醜態見るに忍びず、早稲田の迷惑いかばかりと慨嘆したが、後で豪傑の學生に鐵拳を見舞はれたといふ噂もきいた。

その晩或る處で甲乙丙が話してゐた。

「あれでも女學生ですか。」

「なあに女給だらう。」

「いゝえ、あれがスタンド・ガアルといふ奴ですよ。いつも來てゐますからね。うまい商賣ぢやありませんか。面白い野球を見ながら、近所ののろさうな奴に話しかける。あらあなたもこつちの味方なんですか、まあ嬉しいつていふやうな具合に持ちかけてごらんなさい、大概のファンは共鳴しちまひますよ。」

傍できゝながら、まさかと思ふ外は無かつたが、嘘としてもゴシップ子の創作の巧みさは認めなければならなかつた。（昭和六年二月二十六日）

その四

民主思想は英雄を否定し度がり、社會主義者は個人の力を認めまいと努力するが、ウイルソンを崇拜し、マルクス、レエニンを神樣扱ひする心持は消す事が出來ない。自分が英雄になれゝばなり度いのが千萬人の心であり、自分が英雄になれなければ、せめては英雄を我物顏して見せ度いのが千萬人の心である。あれは自分の國の者だ、あれは竹馬の友だ、あれは親類だ、あれは親類の親類だ、あれのおやぢはうちのおやぢの友達だ、あれの女房はうちの近所の娘だといふやうに、何かしらかゝりあひをつけ度がる。濱口雄幸氏が總理大臣になり、玉錦三右衞門が大關になつたり優勝額をあげたりすると、土佐の國では戸每に祝盃を擧げ、早慶野球戰が慶應の勝となれば、宮武水原井川堀を生んだ四國高松では、醉拂ひの數を增すときく。お國贔負はもとよりであるが、他人よりも自分の方がこれらの英雄に何か近しい關係にあるといふほこりが強いのである。有名になり度い、然らざれば有名な人間と知合になり度いといふ心持は、萬人共通のものらしい。藝者は役者の座敷に出た事を自慢し、女給は映畫俳優と知合である事をほこり、文學少女は文壇の大家を訪問する冒險を喜び、又屢々進んで肉體を捧げ、新聞雜誌の特種とならん事をこれつと

める傾向がある。

昔は大名が力士を抱へ、明治になつても角力ファンは、贔負力士の爲に千金を惜まず、化粧廻をこしらへてやつたり、家を建てゝやつたり、女房を世話してやつたりしたものだが、近頃はスポオツ愛好の重役は、爭つて運動選手を雇入れ、恰もそのかみの大名の抱力士に於るが如き優越感を味はふ事がはやつて來た。

よくある事だが、運動競技に半解の興味を持つ先輩で、選手を引具して料理茶屋に行き、いつぱいのませて得意がるのがある。それがきつかけになり、田舍から出て來て忽ち東都運動界の花形となり、心持の上にもおちつきを失ひ勝な選手が、奇麗な座敷で女達にちやほやされ、つい身を持崩した例は少なくない。

つい近頃の事だが、或人が憤慨して話した。その人は休暇を利用して溫泉場へ出かけ、ホテルに宿をとつた。客も相當たてこんでゐたが、ホオルの賑ひがたゞ事で無いので、のぞいてみると、或學校の運動選手で頗る人氣のあるのが、お孃さん達のお相手をしてピンポンをやつてゐるのを、ホテル中の客が集つて見て居たのだ。その選手の人氣たるや、濱口犬養若槻をしのぎ、天龍武藏山朝潮をしのぎ、左團次猿之助八重子をしのぎ、千恵藏傳次郎妻三郎をしのぐものであるから、

黑山の人たかりも無理は無い。殊にお孃さん達は本妻の子か妾の子かは知らないが、現代の貴族富豪の娘で、素顔は兎に角、お化粧には手を盡し、衣裳は贅澤の限りをつくしてゐるのだから、見物の好奇心を滿足させるには充分だ。しかも、一度運動場に立つや幾萬のファンを熱狂させる選手が、お相手役の性根を忘れず、わざとをかしな身振をして負て見せるので、笑聲堂に滿る騒ぎだつた。目撃者は試みに、ホテルのボオイをとらへ、その選手が誰と來てゐるかをたづねたところ、返事が手きびしい。「何々様のおともです。」それ以來その人は其選手を憎み、その選手の母校迄も嫌ひになつた。

有名な選手を連れて歩き、ともに遊ぶ事は女のファンのひとつの願となつた。殊に金持の女房などで、選手を我家に招いたり御馳走したり、小遣をやつたり、お洋服をこしらへてやつたり、時には泊めたりするのが出て來たさうだ。昔は女の浮氣者は役者と遊ぶ事を好んだが、役者だと世間がうるさく、亭主がうるさく、あとくされの煩はしさがあるが、學生は面倒が無く、金がかゝらず、おまけに近代味があるので、遙かによき遊び相手だといふ。

私はさういふ話を聞く度に、選手を非難するよりも、羨むよりも、それ程うるさい誘惑の網を張られてゐるのを氣の毒に思ふ。大概の人間なら、その誘惑に負てしまふであらう。年少の選手

よりも、擦つからしのフアンが悪いのだ。

運動選手をお抱力士のやうに扱ふふてく\しいのに比べると、サインを求め、寫眞を買集るのなぞは甘いもので、たかく\浴衣に羅馬字で贔負の學校の名を染出したのを着て歩くか、慶應なら慶應、早稻田なら早稻田の味方であると宣言する意味で、草履のおもてに校名の歴然たるのを、土ふまずの少ないあぶら足で踏づけて得々たる程度に過ぎまい。

きくならく方々の女學校では、運動選手を兄に持つ生徒に交際を求める同窓生が頗る多いとか。將を射んとする者が馬を射るやうに、先づ妹と仲よしになり、おもむろに御兄さまと御親密にならうとする深謀遠慮のいたすところである。花束を贈つたり、レタアを差上げたりするのなぞは、寧ろしをらしいといはねばならぬ。

しをらしいといへば、曾て早慶庭球戰の日に、頗る可憐な風景を見た事がある。大森のコオトだつたから、慶應贔負の女學生が多勢ゐた。大概は特殊階級の子弟の通ふ學校の生徒で、いづれは由緒ある家々のお姫樣であらうが、二三人づゝかたまつて歩き廻り、又拍手の應援を送つてゐた。きけば、この連中は、平生大森のコオトで練習してゐるのださうである。凡そ當今流行のスポオツの中で、庭球程貴族的な、お上品なのは無く、歴史ある對校試合と雖も、決して見物は熱

狂しない。野球やラグビイのやうに、たつた一度の機會がものをいふやうな緊張感は無く、大宮人はいとまあれやといひ度い遊技で、折柄微風に散る櫻の花と、女學生の見物は、一層柔かい色彩を加へたのであつた。その日の試合は慶應が勝つて、女學生は胸を叩いて喜び合つた。選手等は更衣室に引上げたが、春の日は長く、昔の選手や、これから選手にならうとする連中は、コオトに下りて行つて、打合つた。遲れ走に一人、つい前年度迄最も有力な、最も人氣のある選手だつた人が、スマアトな姿態でかけて來た。とたんに水兵服の女學生が、その行手を遮つた。「ちよつと御寫眞を」女學生風に、頭を下げずに胸をつき出すやうな挨拶をして、いきなり小型の寫眞機をつきつけた。青年紳士はにこにこして、ラケツトを持直し、氣取らないやうな氣取つたやうなポオズをとつた。「もうい丶の」青年紳士は相手の頷くのを見て、いつさんにコオトへ飛んで行つた。

私はこの風景を愉快に見た。青年紳士は、その頃女流庭球選手と結婚したばかりだつた。彼は眉目すぐれたる優男ではあるが、それ故に寫眞機をさし向けられたのではあるまい。恐らく水兵服の令孃の心の中をおしはかれば、現役の、未婚の選手の寫眞をうつす事は氣がさし、はゞかられるが、既に卒業し、結婚した人にはおめず臆せず接近する事が出來たのではないだらうか。乙

女心を誰かしる。（昭和六年三月二十九日）

その五

相撲はすたつた、もう今日の時代のものでは無いといふ者にはいはせながら、今日の國技館は常陸山梅ケ谷對立時代の回向院の客の三倍を收容して、十一日の本場所中五日や六日は賣切つてゐる。殊に玉錦朝潮天龍武藏山の四豪が横綱の榮位を爭ふ壯觀に、つい此間迄相撲はすたつた說の最尖端に立つてゐた新聞雜誌も、いつの間にか筆法をかへ、再び特大のみだしで書きたてる事になつた。今日世の中で新聞程宣傳力を持つてゐるものは無いから、相撲はすたつた說をひろめられるのは斯道の痛事に相違無い。或相撲フアンの如きは、新聞が逆宣傳さへしなければ十一日間賣切るだらうと云つてゐる。それは少々大袈裟だが、半分の眞理はある。

他の多くのフアンは、一寸相撲がすたつたやうに見えたのは、久しく大力士が出現しなかつたからだと云ふ。これも噓とはいへないが、私の見る所では、昔は多數の人の觀覽するものは芝居と相撲丈だつたのに、今は野球蹴球庭球拳鬪競馬水泳陸上競技その他數へるのに骨の折れる程各種のものが揃つてゐて、血の氣の多い人間を相撲だけに集めるといふわけには行かなくなつたの

が、抗す可らざる原因であらうと思ふ。

この事を頭に置きながら、私も常陸山梅ヶ谷對立時代をもつて相撲の全盛期と見るものである。常陸山と梅ヶ谷が相鬪ふ日は全く今日の早慶野球戰の騒ぎに等しかつた。天下をあげて、常陸山贔負にあらざれば梅ヶ谷贔負だつた。初顔合は明治三十一年五月で、前者は幕下貧乏神、後者は幕內前頭二枚目で、本來ならば位が違ひ過て顔の合ふ筈では無いのだが、ファンの熱望に協會も商賣氣を出し、二日目に取組んで常陸山が勝ち、二度目は八日目迄雙方土附ずで九日目(その頃は晴天十日の相撲で幕の內は九日しかとらなかつた)に顔が合ひ、再び常陸山が勝ち、三度目は引分に終つたが、四度目に又々常陸山が勝つた。その晩或旗亭で、梅ヶ谷贔負の藝者が、口惜泣きに泣きながら、常陸山の腕にくらひついたといふゴシップが傳はつた。

その翌日が常陸山と荒岩の初顔合だつた。ひとたび常陸山のあらはれるや、向ふところ敵なく、弱きを扶ける人心は、どうかして彼を破る勇士を見出し度がつた。荒岩は地方巡業中弄花事件にひつかゝつて、前場所には出場しなかつたが、此の場所は頗る元氣で勝放してゐた。當時の兩力士は東西の關脇だつた。私の記憶は明かで無いが、立上ると常陸山が一氣に押し、荒岩は土俵際で堪へ、掬投を見せて廻り込むと反對に押切つたのである。四方の棧敷から帽子羽織が降つて土

俵に山を成し、歡喜熱狂したフアンは蒲團を投げ茶碗をはふり、辨當箱を投げる者もあつた。現に私の從兄は、飛んで來た辨當箱が頭にあたつて痰瘤をこしらへ、痛いよ痛いよと訴へても、昂奮しきつた父親はあとの勝負を見逃してなるものかといふ根性から、痛くない痛くないと叫びつゞけ、斷然痛くない事にしてしまつたと云ふ笑話もある。

その晩荒岩はあつちこつちとフアンに招かれ、泥醉して歸宅した時、無雜作につつこんだ懷や袂の祝儀は壹萬圓に餘つたといふ事である。當時の壹萬圓だから素晴らしい。

國技館の出來たのは四十二年で、既に常陸山梅ケ谷は衰退期に入らんとし、太刀山完成の時代が近づいてゐた。時代を異にする力士の強さを比較する事は不可能であるが、太刀山の全盛時代の強さは常陸山の盛時にまさるものがあつたのでは無いだらうか。それにも拘らず彼は不人氣の力士だつた。容貌性格皮膚の色が陰性であり、相撲振がはげし過ぎ、且立ちの汚なかつた事などが原因したものであらう。たちが汚ないといへば常陸山隱退の直前に、既に太刀山の強味はこの先輩を凌いでゐるにも拘らず、氣を拔いて立つて勝を占めた事がある。時の新聞のゴシップ欄によれば、國技館の便所の壁にらくがきをしたものがある。曰く「ペテンタツヤマ」東北產のフアンの義憤の凝つて文字となつたものであらう。

力士の人氣のあるなしは、強弱よりも容貌姿態の美醜によつて決定される事、役者のそれと異ならない。きりやうのいゝのが何よりとくは、決して女には限らないのだ。美貌で且強しとくれば申分はたく、明治二十年代の相撲の人氣を一身に集めた横綱小錦八十吉の如きは、身長あまり高からず、まるまると肥つた白晳の美膚は玉肌と稱して差支なく、しかも全盛時のはげしい鐵砲には立むかふ敵も無かつたから、強くて奇麗なおすまふさんとして一代の人氣を背負つたのも無理は無い。荒岩逆鉾國見山鳳大鳴門浦の濱梅の花野州山土州山綾川黑瀨川兩國稲柳常の花星甲の如き、或は強くて奇麗なおすまふさんであり、或は弱いが奇麗なおすまふさんとして金切聲の聲援を浴びた面々である。現在でも、天龍武藏山は強くて立派なおすまふさんとして、グロいつてんばりの朝潮とは比較にならない人氣を持つてゐる。

その點で、古來常の花程の素晴らしい横綱土俵入は無かつたらうと思ふ。小錦は美しく、常陸山は豪壯にして比ぶ可くも無いが、常の花には露拂に武藏山、太刀持に天龍といふ附人があつた。昔から横綱の土俵入には、當の本人を大きく見せる爲に、兎角ちひさい力士を露拂や太刀持にするならはしがあつた。それも所期の效果を擧る上に充分意味はあるが、常の花の場合に、横綱よりも體格偉大な二人を前後にしたがへたのは逆手の效果を發揮した。しかも、三者いづれも容姿

の整つた力士だから、満場をうならせたのは御承知の通りである。

現在誰が強いといへば、玉錦朝潮天龍武藏山の四人を數へるのが客觀的に正しいが、中では一番弱いやうに思はれる天龍が、人氣では第一位を占めてゐる。武藏山の引締つた筋骨の美しさは、惜いかな煤けた肌の色の爲に割引かれるが、天龍のきめの細かい、つやゝかな肌の色は、薄い光澤と柔みを持つてゐて、イットは充分あり、大様（おほやう）な態度堂々たる相撲ぶりと相俟つて、人氣を一に歸せしめたる所以であらう。天龍土俵に登るや、四方の棧敷は俄に醉拂ひ女の存在を明かにする。

愚妻の里のものどもは、極めて嚴格なる訓育をうけ、活動寫眞さへ見た事は無かつた位であるが、私は反對に勝手氣儘を本則とする生活をしてゐるので、自然先方の型を破る事になつた。愚妻は幼少の時から弱蟲で、かけつこをして一着になるにはなるが、テエプを切ると同時に氣が遠くなつたり、遠足に行つて目的の山の高きを仰ぎ見ると目が廻つて麓の茶屋でのびてしまふといふ難物だから、凡そ戸外の運動は辛抱して見てゐない。それが相撲を見るに及んで忽ち十一日間かゝさないファンとなつたが、第一の贔負が天龍、第二が武藏山と型通りに出來上つた。芝居で音羽屋の寫眞を買ふやうに、天龍の寫眞を手に入れるといふ有樣だ。萬事が姉まさりの愚妻の妹

も矢張り天龍、母親もごたぶんにもれず天龍、妹の子供のちび迄が、「テンリウ」とかぼそい聲を張上る。電車に乘つても氣持が惡くなるといふひよろひよろの愚妻の目下の望がなんだといふと、天龍と武藏山を左右にして、新橋から京橋迄歩きたいといふのだ。畜生、なまいつてやがる、そんならこつちはグロで行けと意地になつて、私は朝潮と出羽ケ嶽を左右にして、同日同時刻に京橋から新橋迄歩いてやるぞと宣言した。（昭和六年四月二十九日）

その六

天下の人氣を集めた六大學野球聯盟の、この春のシイズンは、昨秋の覇者法政が渡米中で些か寂しいが、そのかはりに新聞雜誌で一番人氣のある早稻田が小川の復活と伊達の投手起用で近來にない大評判をとり、優勝確實のやうに噂される一方、久しく早稻田を完全に壓倒した慶應が宮武山下岡田三谷本郷を一時に失つて力量俄にがた落したと認められ、弱い弱いとうたはれる結果、數に於て斷然多い早稻田贔負の大向は、すつかり張切つて球場へ押かけた。ところが豫想は全く裏切られ、早稻田は新聞辭令に所謂「至寶」小川をプレエトに立たせながら、しよつぱなから明治にひつぱたかれ、二回戰をも失つて忽ち優勝には緣遠くなつてしまつた。世間の人は氣が早い、

昨日迄優勝は早稲田だときめこんでゐたのが、今度は明治を第一候補に祭り上げた。新聞も書く、カフェ、バア、待合、料理屋、倶樂部、役所、會社、銀行、湯屋、床屋、女學校の運動場――凡そ人間の集る所で野球の話が出れば、今春の明治の強さを最大級の言葉で語合ふのが常識となつた。それなのに、再び豫想は裏切られて、弱い弱いといはれた慶應が、強い強いといはれた明治をストレエトで破つてしまつた。

この第二回戰に、負けた明治の應援團は又々亂暴狼藉を働き、神宮球場に石つぶてを降らし、惡意の無い相手校の學生をふくろだゝきにし、慶應の監督と選手のかへりを待伏して危害を加へんとし、その暴狀の證據の殘る事を惧れて新聞社の寫眞班を半死半生のめにあはせ、六大學野球聯盟戰の興味を減殺し、且母校の名譽を傷つけた。

たぶん審判團にも手落があつたのであらうが、何等發言權を與へられてゐない應援團が觀覽席から球場内に飛下りて相手を威嚇し、一齊に退場して「統制ある待伏せ」を企て「統制ある投石」をし「統制ある暴行」を働いたのはかへすがへすも見苦しい事である。私は當日勤めがあつて試合を見る事の出來ないのを殘念に思つたが、後になつてみると、そんな不愉快な光景をまのあたり見なかつたのは寧ろしあはせだと思ふのである。

元來應援團なるものは、あつてもなくてもいゝものである。自校の學生が、その競技に冷淡であり、無關心であれば、自然士氣は沮喪するに違ひ無いが、それは寧ろ平素の事で、試合當日の餘りに大がかりの應援は、かへつて味方の選手をあがらせてしまふ結果をも招來する。正直な監督や選手は、應援が屢々迷惑な場合もあると言明してゐる。それにも拘らず應援團は、勝てば自分達の力で勝つたやうな顔をしたがり、負ると選手を罵つてゐる。どうも、應援は選手の爲に存在するのではなくして、應援團自身の陶醉を深める爲に存在するものゝやうである。まして況や無用なる長髮長髯を振りたて、日の丸の扇をかざし、おかぐらのひよつとこの手つきをしたり、國會開設以前の壯士の如き口調で激勵演說をやるなぞは、畢竟應援團長みづからを樂ませる事に過ぎない。

由來明治の應援團程よくない歷史を持つてゐるものは無い。審判員を脅かす事再三に及んでゐるので、今度といふ今度こそ相當の制裁を加へ、又明治大學當局も、應援團自身も反省して名譽回復を心がく可きである。誰だつて、あんな暴行を敢てしたものに同情はあるまいと、大に憤慨してゐると、或友人がせゝら笑つて、世の中は廣いぞ、明治の應援團に同情してゐるばかりか、あの暴行を讃美してゐるファンもあると云つて、次のやうな話を聞かせてくれた。

あの暴行事件の數日後、或夜或バアで行はれた光景である。うす暗い室内には濛々たる煙草の煙、紫に緑に赤に照明は混亂した效果を出し、蓄音器のジヤズ・バンドは天井に壁に反響し、型の如き騷々しさのたゞ中で、又しても慶明戰を論じてゐる醉客があつた。明治の應援團はいけない、フエア・プレイといふ事を知らない、三十一年型の明朗なるスポオツ精神を解さない、時代遲れだ、野蠻だ、學生らしくないと三人四人口を揃へて喋つてゐるのにぴつたり寄添つた女給達も、青森縣秋田縣岩手縣廣島縣岡山縣群馬縣茨城縣などの訛の歴然たる嬌音を以て賛成の意を表してゐると、突然まん中どころの卓子の客が突立ち上つた。諸君、何故明大の應援はいかんのでありますかと、まなじりを決して叫び出した。大分銘酊の樣子ではあつたが、當今流行の型の背廣を一着した月給取風の人物だつた。つれと見える二三人が拍手した。その男はいゝ氣になつて椅子の上にあがつて演說をつゞけた。

私は明大の出身者では無い、しかし明大テイイムを最も好むフアンの一人である、湯淺、梅田の黄金時代から終始一貫した明治贔負だ、何故明治がいゝかと云ふと、慶應は技術を以て戰ひ、早稻田は訓練を以て戰ふが、我が明治は意氣を以て戰ふ、これこそ學生野球の本道であり、學生選手の本分である、果して然らば應援團も亦猛烈なる鬪爭心、熱烈なる愛校心を持たねばならな

い、不可解なる審判の態度によつて母校の勝敗の分るゝ時、彼等が純眞なる情熱は理性を以て止むる事が出來ない程旺盛だつたのである、彼等と雖も暴行の爲の暴行をよしとするものでは無い、暴行の爲の暴行のよくない事は、人殺の爲の人殺がよくないのと同じである、しかし皇國の爲に戰場に於て敵をみなごろしにする事は稱讃されるではないか、何故か、皇國の爲だからである、それならば母校を熱愛するあまり、若人の血に燃ゆるものどもが、死を決して敵陣へ殺到するのは今日の惰弱なるモダアン・ボオイには思ひも及ばない事であつて、我が明治の學生にしてはじめて敢行し得る壯擧といはねばならぬ、私は感激した、若し日本の國民がすべて斯くの如き意氣に燃るならば、亞米利加も露西亞も決して怖るゝに足りない、私は明治の應援團の勇氣を稱讃するものであつて、且慶應ボオイの意氣地なさを慨嘆するものである、慶應ボオイよ、君達は何故應戰しなかつたか、拳を以て來らば拳を以てむかへ、劍をもつて來らば劍をもつてむかへ、然るに慶應にはこの意氣が無い、彼等は震へ上つて神宮球場に罐詰となつた、そんな意氣地なしに何が出來る、我輩は彼等を唾棄し明治大學の應援團を稱讃するのであります、諸君、幸ひに若し我輩と所見を同じくする方々は、もろともに明治大學の校歌を合唱して下さい。

四方八方から拍手が起り、彼は感謝のおじぎをして椅子から飛下りた。

白雲なびく駿河臺
眉秀でたる若人が
…………

その男を中心とする一群がうたひ出すと、あつちからもこつちからも合唱するものが出て、先刻迄明治の惡口を云つてゐた女給達の甲高い聲もこれに和した。

かういふてあひがゐるんだから、應援の淨化なんて思ひも及ばないよと、當夜の目撃者は歎息して語つた。

まさかと思ひながら聽いたのだが、その後球場に行つて見ると、フアンの態度は益々惡くなつてゐる。殊にひどかつたのは五月三十日、早稻田が立教に負けた後で行はれた慶應帝大の試合の時だつた。先刻迄早稻田の爲に聲援してゐたフアンが一齊に慶應を彌次るのである。審判の判定に對して見當違ひの抗議を叫び、なんでもないのにボオク、ボオクとわめき立て、又自分達の目の前に守備する慶應の選手に無禮なる言葉を浴せかけ、甚しいのになると、歸りに見ろとか、又罐詰にされるなゝどとがなり立てた。いつもいふ事だが、早稻田の選手の態度は極めて立派だが、その早稻田を聲援するフアンの態度の惡いのは、早稻田にとつて氣の毒である。

神宮球場は新装成り、野球の技術は益々發達したが、ファンが競技精神を正解するのはいつの事であらうか。(昭和六年五月三十日)

その七

時。昭和六年春季早慶野球第一回戰の日の夜。
所。酒場の一隅。
人。甲と乙。

甲。ア・ラ・ボオトル。
乙。チェッ、癪だなあ。斷然勝つてる試合なんだがなあ。
甲。二對一さ。ベエス・ボオルは得點の多い方が勝で、少ない方が負だ。その外に勝敗を決定する標準は無い。
乙。それはさうだけれど、あんまり馬鹿々々しいぢやあないか。早稻田の一點はアアンド・ランだぜ。凄いヒツトで堂々入つたんだぜ。それにひきかへ慶應の二點はなんだい。ツウ・ダウンで

土井の凡飛球さ。あんなのなんか川口町の藝者テイイムの選手だつて落しつこないひよろひよろフライだ。それを……

甲。それを落したんだから下手なのさ、無失策の慶應の勝つのがあたりまへぢやあないか。

乙。馬鹿いへ。うまいまづいぢやあないよ。運だよ。村井なら村井、三原なら三原、どつちか一人行けば樂にとれた球なんだ。そいつを二人が讓らずにぶつかつて、ぽろりと落して二點なんていふのは、運命の惡戯といふ外は無いぢやあないか。

甲。冗談いつちやあいけない。ひとつの球を同時に二人がとらうとするなんて、頭腦的失策だ。テイイム全體の無統制を暴露したものだ。外の誰かゞ、フアアストならフアアスト、セカンドならセカンドと怒鳴ればいゝのに、みんながぼんやりしてゐるものだから、あゝいふへまをやつたので、まるで代々木の原のベエス・ボオルだよ。神宮球場のものでは無いよ。負るのがあたりまへさ。

乙。運だ。全く早稻田は不運だつた。あの一點とつた時だつて、若しランナアが三壘で滑らなかつたら、右翼の送球は間に合はなかつたんだ。さうすると二對二の同點で、同點となつたら追ふものは追はれるものより強いんだから、當然早稻田が勝つた筈だ。

甲。駄目々々、そんな事を云つたら限りがないよ。勝敗が決定された後で、若もあの時あゝだつたら、若もあの時斯うだつたらなんていふのは、死児の齢を数へる以上だ。それが許されるならこつちにだつていくらでも言ひ分はある。若もあの時水原の投げた球が二寸はづれてゐたらヒットは出なかつたとも云へば云へるんだ。要するに若も若も若もは愚痴に過ぎない。未練だ。勝負は勝つた方が勝で、負けた方が負だ。勝つたが負けたなんていふ事は無い。三鞭と行き度いところだが、緊縮減俸時代だ。麦酒で我慢しよう。ア・ラ・ボオトル。

乙。チエツ、癪だなあ。

時。昭和六年春季早慶野球第三回戦の日の夜。

所。酒場の一隅。

人。甲と乙。

乙。おい、三鞭々々。ほんとだよ。けち／＼するない。早稲田が勝つたんぢやあないか？

甲。からうじてね。

乙。何がからうじてだ。え、ヒツトの數を勘定してみろよ。
甲。當りそこなひのゴロも安打に勘定すればね。
乙。冗談いふなよ。權威ある六大學公認記録によつて安打と決定されるんだ。
甲。ふゝん、權威ある記録か。この頃は安打廉賣時代だ。眞直に來た球をトンネルしても強襲安打さ。なるべく安打にしといた方が、打者には功名になり、野手には傷がつかずに濟み、四方八方圓滿なんだ。四回四點の時の岡見や村井の打つた球、あれを安打と稱するんだらう。
乙。立派な安打ぢやあないか。君達素人にはわかるまいが、岡見の打つた球なんか完全なる内野安打だよ。
甲。噓をつけ。若(もし)もあの時牧野が無理な本投をやらずに、三壘に投げて一人アウトにして置けば、みすみす四點とられる事は無かつたんだ。
乙。それが頭腦的失策さ。文句は無いよ。
甲。それから、あの村井の打つた球を、若も牧野がつかんでゐたら……
乙。若も若もか。みつともないからよせよ。
甲。だけどさ、あんまり運が惡過(すぎ)るよ。ふだんコントロオルのいゝ水原が、どうしてあゝ四球を

出したか、實際あの一回丈で、後は危つかしいところは無かつたんだからなあ。
乙。何を云つてるんだ。最初から慶應はおされ通しぢやあないか。鐵腕投手伊達に牛耳られて、手も足も出なかつたぢやあないか。
甲。なあに四球さへなければ負る試合ぢやあ無かつた。早稻田は四球のおかげで勝つたんだ。
乙。選球がうまいからさ。それに打ちたくても、あんなにボオルが多くては打てないよ。兎に角四球連發のふら〳〵投手と、三日連投の投手を比べれば、どつちが勝つのがあたりまへかわかるだらう。いつたい伊達程あぶなつけの無い投手が今迄あつたかしら。宮武以上だね。
甲。馬鹿いへ。慶應はいつもストレエトで勝つもんだから、宮武には三日連投なんて必要は無かつたんだ。まあ考へても見たまへ。慶應の勝つ時はいつもストレイトだ。早稻田の勝つ時は三回戰迄來てやつとこさゝ。今度だつて、若も塚越、上野が病氣にさへならなかつたら、慶應はストレイトで勝つてるんだ。
乙。又若も若もか。病人の事をいへば早稻田の方が尙更だ。第一投手の小川が病氣さ。リイグ第一の打者佐藤も病氣さ。
甲。たつた二人きりだらう。慶應にはまだあるんだ。井川は肋膜で本當なら出場出來ないのを無

理して出てゐるんだ。だからふだんの半分も打てやしない。いつも勝利のチャンスをつくるラツキイ・ボオイ高橋は練習中に負傷して一回も出場出來なかつた。さうだ、若もあの九回の裏に高橋を起用する事が出來たら、きつと慶應が勝つてゐたに違ひ無い。

乙。おい／＼、いつ迄若(もし)も若もに執着してるんだ。

甲。だけどさ、若も宮武、山下がゐたらどうだい、問題にも何にもならないんだぜ。

乙。いやだいやだ、卒業だか退校だか知らないが、夙(とつく)にゐなくなつた奴を引張出して來て、若もあいつがゐたらなんていふのは、若も俺が百萬圓持つてゐたら、若も俺が總理大臣だつたら、若も俺の女房が絕世の美人だつたらなんていふ類の夢だ、愚痴だ。誰だつたかなあ、勝敗を決定するのは得點以外の何ものでも無い、得點の多い方が勝で、少ない方が負だと云つたのは。

甲。それはそれに違ひ無いが、あの慶應後半の追擊力の凄さを見ると、實際負る筈ぢやあ無かつたと思ふんだ。若も最後に川瀨の打つた球が、もうちよつと左に寄つてゐたら……

乙。あはゝゝゝ。まだ若も若もを繰返してるのか。氣の毒は氣の毒だが、まあ飲めよ。おい三鞭だ、三鞭だ。（昭和六年六月二十八日）

その八

　ファンはその贔負の人物が我物となる事を熱望する。それが役者であつても、力士であつても近代スポオツ選手であつても、何とかして接近し、知己となり、友達となり、パトロンとなり、親類となり、若し又女のファンならば夫婦になりたがる傾向が著しい。旦那面をしたがるファンが、役者や力士をつれて遊びに行き、お供の方が大もてにもてるのをいゝ氣になつて喜ぶ景色は、既に甚だ古風であるが、野球蹴球水泳等現代の人氣を背負つて居る學生選手を悪所場へ引張つて行き度がるファンが多く、席に侍る女等も、往年役者に對したと同樣の熱狂振を惜みなく示し與へるさうである。たとへば何某選手が牛鍋をつゝいた箸を貰つて歸つて、大事にしまつてゐる女もあり、又それを自宅に於て三度々々用ゐて密かに親嘴の感になぞらへる者もありと聞く。或は何某選手の口にした卷煙草の吸殼をその儘掃溜に捨てゝはもつたいないとあつて叮嚀に紙に包んで持歸り、自分で吸つて樂むばかりでは冥利が悪いと考へる同朋感の強いのは、同じおもひのきやうだい達に分讓して、いゝ顔になる者もあるさうである。その馬鹿々々しさは、恰も本願寺さまの御入になつた風呂の湯をありがたがつて飲む信徒の狂態に比ぶべく、又湯具やドラウワアス

を盗んで快とする變態症にも似てゐる。女性ファンの側ではさういふ風な岡惚組は澤山あるが、パトロン面をして料理屋待合に引張つて行くわけにも行かないので、物品を贈つて最負の熱度を示さうとする者が少なくない。花束や菓子果物は事古りて、わたくしのえらんだネクタイだから是非々々身につけて頂戴、心をこめた手編のスウェタアだからお召下さい、といふのがあるかと思ふと、金廻りのいゝ不良マダムは洋服外套取揃へておしきせの如く拜領させようといふのもあるさうである。どうも近頃の選手は貰ひ癖がついて困ると嘆じた監督もある。

それ程はつきり接近する機會のつかめないファンの心はいぢらしく、悶々の情同情に堪へないものがある。その昔娘義太夫全盛の時代には、堂摺連(どうするれん)の名を以て呼ばれたるファン、目ざすは別嬪の太夫が掛持の寄席から寄席へ飛ばす人力車の後押をして、遙々山の手から下町へ呼吸を切らして追隨したものもあると傳へるが、役者が舞臺を濟ませて歸るのを樂屋口で待構へ、素顏を拜まうとするきいちやんみいちやんは當今と雖も其の數を減じない。たゞ拜むばかりでは滿足しない積極的なのは、何とかして袖袂、二重廻の端になりとも觸つて見たい慾情に驅られて、日頃のつゝしみをかなぐり捨て、おめあての乘る自動車の周圍に潮の如く蠅の如く又蝱(あぶ)の如く、押寄せつきまとひ時にはしがみつかんとあせりいらだつ者もある。それが小芝居の場合には一段と尖鋭

化し、充分なる目的意識を以て花道際に陣取る娘達は、屢々仇討に出立つ若き武士の袴の裾に手を差延ばす悲壮なる場面を展開する。芝居道では古くから舞臺の上で女の客から聲がかゝると樂屋一統に蕎麥を振舞ふ慣習があると聞いたが、大劇場の女客は野性をかくしてとりすましてゐるからたまに役者の家名を叫ぶのも婆さんの聲に過ぎず、おごり榮もしなからうが、上記の如き小芝居のあられもない女客は、熱狂おのれを忘れてゐるので、四方八方から金切聲の聲援を浴せかけ、恰も早慶野球戰當日のスタンドの光景を彷彿させるので、いちいちおごつてゐては役者の懐がたまるまい。女性ファンの進出は、いづれの方面に於ても斷然トップを切つてゐる。

　贔負の身邊に近づかうとするファンの心理は、六大學野球聯盟の試合の日、神宮球場に於て白日の下赤裸々に見せつけられる。例へば試合が終了し、腸に響くサイレンが悲しく鳴りはじめると、出口に殺到する幾多の若い女を見るであらう。この連中は決して歸りを急ぐ爲に人波をかきわけ、大漁の日の鰯のやうに揉合つてゐるのでは無くて、役者の歸りを樂屋口に待つきいちやんみいちやんに等しき阿子魔子チヤコのともがらなのだ。今や戰ひ終つて引上て行く選手を拜み、能ふべくんばその身邊に近より、汗臭いユニフオオムの端に觸り度い野望を抱いてゐるのである。

　最近私が目撃したのは、春の慶立第二回戰の日、八回迄一對零で立教リイドし、辻投手の好投

に慶應の氣勢あがらず、殊に七回絶好のチャンスにダブル・プレイを喰つて退けられた時は立教軍は互に手をとり肩を組んで躍上り、慶應軍は眞靑になつて一語を發する者も無い有様だつたが、最終回一死後井川の強三匍を野手一壘に悪投し、二死後土井の遊越直球に同點となり、碣石のふらふら飛球が安打となつて幸運の勝利をつかんだ劇的場面で、嬉涙と口惜涙にむせぶ選手が夫々引上て行く折柄だ。私の目の前に道を遮る數臺の自動車があり、危く勝つた慶應の選手は互に抱合つた儘車上の人となり、中には面を覆つて泣いてゐるのがあつた。それと見て待構へてゐた堂摺女學生は自動車を包圍し、羞氣も無くのぞき込み、あら泣いてるわ、あれ誰？　あら何某さんだわよ、と口々に云ひながら自動車の窓に手を觸れる者もあり、選手の肉體の一部でゞもあるかのやうにまるまると肥つた車體を撫でる者もあり、中にはあたしも泣いててよ、いつしよに泣かせて頂きますわと云ひ度さうな様子で、半巾を顔に當てた小妖精もあつた。

この種のフアンは決して選手と面識があるわけでも無く、曾て一度も口をきいた事も無いのであらうが、隙さへあれば果斷なる盗壘を企てんとする心構は充分ありと見て差支無く、合宿へ宛て手紙を書いたり、カレッヂ浴衣を着て見たり、カレッヂ草履を穿いてみたり、又繪葉書を買集めて日夕我が想ふ君の勇姿を拜する組であらう。繪葉書といへば曾てある人氣俳優を密に戀し、

その素顏と舞臺顏とを問はずかりにもその人の寫眞なら何から何迄集めて持つてゐる令孃と呼ばれる側の女があつて、寫眞の數は數百枚數千枚にのぼつたさうだ。ところが此の女性にとつて永遠の戀人でなければならない役者はお定りの通り大阪の妓籍にある女を迎へて妻とした。それと聞いた令孃は、多年買集めた寫眞に針で目を刺し鋏で鼻をくりぬき、小刀で面上を滅多斬にして、これを當の役者へ送屆けたさうだが、先年早慶戰の切符を買求めんとて神宮球場外に夜を徹した者の中に、時の慶應の投手宮武の寫眞を球場の壁に貼つけ、その心臟に釘を打つた者があつたと聞く。犯人が男であるか女であるかはわからないが、丑の刻詣に等しきしわざは女でなくては、凄味がなく、又呪のきゝめも薄いであらう。(昭和六年七月二十六日)

その九

既に草相撲あり、草競馬のある以上、草野球、草庭球、草蹴球其他いろ／＼のあるのは當然であらう。就中最もさかんなのは、一番大衆化されたスポオツ卽ち野球でなければならない。これを東京近郊に見ても、空地のあるところ必ず野球試合が行はれ、附近のフアンが群り、拍手喝采し、彌次り、批評して騷いでゐる。その代表的風景は、毎日代々木の原に展開せられ、土曜日曜

の如きは一時に十數組の試合が行はれる盛觀である。私も曾て此處に行はれる草野球の應援に出かけた事があるが、さしもに廣い原つぱも、幾百の無名選手が馳驅する時は、甚敷狹隘をつげ、あつちの試合とこつちの試合と入りまじり、甲の組の左翼手が丙の組の右翼手と背中合せや向合つて立つたり、しきりが無いから何處迄もころがつて行く本壘打を追ひかける外野手は、他の試合中の投手の傍を通りぬけ、更に／＼別の試合中の捕手の背中に衝突するやうな場合も稀では無い。よく怪我をしないものだと思ふが、四方八方から球の飛んで來る危險極まり無い場所に雲集するフアンの熱心には一層驚かされる。近所のフアンは終日見て暮らし、通行人は道草を喰ひ、御用聞は自轉車や岡持をおつぽり出してさぼつてゐる。集つて來る團體は、役所銀行會社商店工場といふやうな勤務先によつて結合されたもの、學校友達の寄集つた倶樂部、隣近所、何町、それ町のテイイム、いろとりどりであるが、こゝにもおのづから二三の傑出した組があつて斷然覇を唱へ、隱然繩張を有し、原の中の最適の地を占領し、選手は顏を賣つてゐる。今も健在かどうか知らないが、代々木の原の草野球のスタア・プレイヤアに片腕の投手がゐて、フアンの寵兒だつた。亞米利加にも片腕の有名な投手がゐたとかゐるとか云ふ事だが、代々木の原の隻腕投手は、球を投ずる時は切斷した方の腋の下へグラブを挾み、球を投じた瞬間にそれを利手にはめて守備

にそなへ、隻手よくつかみ、又とつさにグラブを脱して各壘へ投球する。その間何等の停滞も無く、敏捷圓滑の動作は見る者を驚かせ、フアンの稱讚を一身に浴びるのであつた。打撃も片腕で敢行し、たま〳〵私が目撃した時は、三二壘に走者を置き、遊撃手の頭上を越る安打を放つて易々と二者を生還させた。うまいものだなあと私は同行の友人を顧みて思はず感嘆の聲を發した。うまいもんでせう、あれは有名なもんですよ、片手でピイもやればフワストもやりますぜ、カアブも出すし、安打も打つし、脚だつて遲かあねえし、大したもんだ、あれでもう一本手があつてごらんなさいな、竹內だつて永井だつて(その頃の早稻田と慶應の投手)かなやあしない。全くですぜ、嘘だと思ふなら、早稻田でも慶應でもい丶から選手はみんな片手しか使はせねえで試合をさせて見るがい丶や。

突然私の横に立つてゐた薄禿のぢいさんが、我が事のやうに自慢をはじめた。彼は、明かに此の原の土鼠か地蟲か蓙のやうに、年中棲息してゐるフアンに違ひ無かつた。彼は目の前に展開される倶樂部戰出場の選手を我子のやうに知つてゐる。伊藤だか井上だか山田だか鈴木だか加藤だか中村だかしらないが、夫々の氏名球歷を知り、得手不得手を知悉し、一擧手一投足に稱讚し、叱咤して飽く事を知らない。彼は見馴ない吾々をい丶鴨にして、自分の知識を殘り無く示し度い

慾望で口尻に泡をふいて居た。

あ、いけねえ、あんなバンドつてあるもんぢやあねえ、ざまあみやがれ、ゲツツウくつちまやあがつた、あいつあいつでもへまをやりやがるんですよ、もつとも未だ若いから爲方がねえが、あ、うちやあがつた、うちやあがつた、又一點か、これでオール・セームだ、なつちやあゐねえや。

ぢいさんはどつちの味方をしてゐるのでも無く、いづれも我子にひとしい兩軍のファイン・プレイを期待してゐるのだ。

ぢいさんがしきりに通俗英語を使ふのと同樣に、選手も不思議な英語を口にするのが草野球の一特徴である。カムオン・ボオイとか、ドンマイン・ボオイとか、ゲツツウ・ボオイとか無暗にボオイを連發し、時には邪飛球を追かける野手を激勵してとれ〳〵ボオイといふやうな和洋混合も出て來る。一番面白いのは、邪飛球が遠くへ飛び、誰かゞ拾ひに行かうとする折柄、新しい球が審判から投手に與へられる。その時、今拾ひに行かないでもいゝぞといふ意味と、新球が出るぞといふ意味をこめて、ネヴア・ボオルと叫ぶのだ。これは原の中のどの組でも通用する。我が薄禿のぢいさんの如きも、邪球の行衞をぼんやり見送つてゐる選手がゐると、やいネヴア・ボオ

ルぢやあないか、氣をつけろ、まぬけ、などゝ罵るのであつた。

草野球のグラウンドには塀も柵も無いのが通則だから、時には緊張し切つて守備を固めるナインの間を縫つて、美しい日傘が通り過る事もある。フアンは喜んで鋭く口笛を吹く。乳母車を押した紳士が悠々と突切つて行く事もある。呑氣なとうさんあぶねえぞとフアンは絶叫する。まことに朗かな景色である。

草野球のフアンの中には、代々木の原の薄禿ぢいさんのやうにたゞ見て樂む丈では滿足しないのもゐる。たとへば、町内のテイイムを組織して世話人になり、寄附金をねだり歩き、ユニフオオムの柄を選び、運動具の保管を引受け、隣接町村との試合の交渉にあたり、愈々當日はベンチに在つて策戰に參加し、彌次り、罵り、喜怒哀樂の限りを盡す。萬一町内の何某の家では息子を試合に出す事を喜ばないといふやうな事があると、フアンの中の年寄達が羽織を一着して訪問し、直談判に及ぶ。拒めば息子がいぢめられ、町内づきあひを斷られさうなので、いや／＼ながら承知する。いゝえ、てまへ共が及ばずながら監督して居りますから決して御心配はございませんと引受けて、おい、猛練習をやらうぜ、隣村に負けちやあ申譯がねえだと、恰もその昔の祭日に神輿をかつぎ出して喧嘩を賣つたり買つたりした光景だ。つい此の頃の新聞にも、芝浦あたりで行

はれた草野球で負けた方の選手やファンが審判官を袋叩きにし、優勝盃を強奪して質屋へ持つて行つて又あばれ、ふんじばられた記事があつた。

この草野球熱にうかされて、老も若きも、心得のあるのも無いのも、一度は試合をして見たい氣持になるものらしい。現に私も、さういふ連中に誘はれて、臆面も無く參加した事がある。勤務先の老童達にまじり、又「三田文學」の同人にまじり、みづから戰ひ、みづから彌次つた。何しろ二十有餘年間運動らしい運動はした事も無く、年齢（とし）のせゐで下腹に無用の脂肪がたまり、骨は固くなり、足腰はふらついてゐるのだから、ゴロが來るとしやがむのが辛く、飛球が來ると目が廻る、たまに長打をかつ飛ばしてかけ出すと心臟が心配になると云ふ有様だが、矢張やれば面白いのだからあさましい。最近にも私共兄弟に兄の子姉の子妹の子を加へた一組で、里見弴、久米正雄氏等の組織するゲイ倶樂部と試合をする約束をした。前の晩惡友に誘はれて鎌倉の砂濱で成吉斯汗鍋と稱する羊の炙肉をたらふく喰ひながら、老酒をコツプで鯨飲したおかげで、腹具合を害し、炎熱酷しい武藏新田の慶應球場で太陽を仰ぎ見た時旣に體力と氣力の衰へを感じた。我軍は當年五十二歳の兄が事故不參の外はみんな揃つたが、先方は、めあてのゲイ倶樂部は集まらず、上記の二氏の外は方々から狩出して來た連中で、味方同志互に顔を知らない烏合の勢だつた。し

かし中には現役の中學選手も二三人まじつてゐて、烏合なるが故に強味を增した事は疑も無い。

こんな馬鹿々々しい試合であるが、遙々見物に來てくれるフアンが少なくなかつた。里見久米兩氏を花形とする鎌倉老童連の顏もあるので、町內のフアンもついて來た。パパやをぢさんが出るので、雙方とも女子供の彌次が多かつた。天下周知の女性フアン久保田万太郎夫人も來場した。明治十年代に覇を唱へた溜池倶樂部で投手でも捕手でも遊擊手でもやつてのけ、好打好守好走をうたはれた帝國美術院會員岡田三郎助氏が羽織袴であらはれる。和田三造氏が令息令孃をつれてやつて來る。今年七十歲になつた私共の母も應援に來て、何故有島母堂は敵方の應援に來ないのかと物足りながつた。

斯の如く見物の顏は揃つたが試合は草野球の草野球たるところを遺憾なく發揮して、結局二十點對十六點で我軍が敗退した。

たゝかひ終つて岡田さんの感想を伺ふと、四十餘年前に比して打擊が著しく進歩したやうに思ふと云ふ眞面目な返事に接してすつかり參つた。兩軍とも投手が恐くないのでぽか〳〵打つ、打てばしくじるからどし〳〵得點する、如何にも打擊が優秀のやうに見えるのだつた。

和田さんは口が惡いから、よく見に來て下さつたと挨拶すると、うまい野球は度々見てゐるが

面白をかしいやつは見た事が無いから出かけて來た。いや實に面白かつた。この次にもあつたら又來ると云ふ。

母は母で、こんな面白い事は近頃なかつた、どうぞ又やつてくれと里見さんに賴んでゐる。かうなると草野球の選手は忽ち止度がなくなつて、秋風が吹くやうになつたら有島一族を迎へ、雙方ともベンチに老母を控へさせ、一戰に及ばうといひかはした。

我國の人口は急激に增加し、秋津島根は日に〳〵空地を減じて行くに違ひ無いが、それと反比例して、草野球は愈々さかんになるであらう。

まことに聖代のありがたさである。（昭和六年八月三十日）

その十

熱心な相撲ファンをさして、十日の相撲を十一日見る人だといひはやしたものだが、此の頃の相撲は十一日間の興行となり、言葉の價値が零となつた爲か、あまり耳にしなくなつた。ところが、最近これと同じやうな無意味に誇張したいひ廻しで野球ファンに呼びかけるのを聞いた。曰く、何しろこの人は一年中ネツト裏に頑張つて居ようといふんだから云々。違ふ時に違ふ人の口

から耳にしたので、或は斯ういふいひ廻しが世間一般に行はれてゐるのではないかと想はれるのである。いづれにしても、さういふ熱心なフアンがあらゆる競技に於て見出される事は事實である。何故冬期にも野球をやらないのかと遺憾がつた人があるし、夏期にもラグビイをやれと主張した人もあつた。フアンといふものは、それ程熱心で、又それ程無理解なのが多いのである。たとへば相撲の棧敷を十一日間買切つてゐる人が必ずしも角通で無いやうに、神宮球場ネット裏の指定席のフアン、必ずしも球通では無い。しかし通ぶる傾向の著しい事は忽ち觀取する事が出來る。俺は始終見てゐる、だから知つてるといふ簡單な論理に信賴して、却つて斯技の細かい味と、面白味の勘所を見逃してゐるやうに見受られる。彼等は明かに知識階級である。だから三階のフアンや外野のフアンのやうに單純に熱狂しない。あくまでも一方を贔負し、その敵を露骨に憎み罵る態度をよしとせず、内心の偏愛は押かくし、冷靜公平を通の道德と心得てゐる。それならおとなしく默つて見てゐるかと云ふと決してさうでは無い。喜怒哀樂を色に示し、形にあらはす事はいさぎよしとしないが、インテリのインテリたる弱點で、兎角知識を誇示し度がる。屢々競技を見ずに喋つてゐる。元來相撲の手捌は頗る早い變化を以て行はれるので、充分の注意と研究が無ければ見極められないし、野球の複雜なる技術と機會と作戰とは刻々の變化を伴ふので、ほ

んやりしてゐては判斷しにくいのである。だからフアンの多くが競技を他所にして喋つてゐる事は、大概當面の勝負の進行には痛切に響かない無駄話が多く、近所迷惑は一層甚しいのだ。例を擧(あげ)れば、土俵の上では東西の力士が眞劍になつて勝負を決しようとしてゐるのに、そのかみの常陸山太刀山の強かつた事、梅ケ谷が四十餘貫のまゝならぬ體でありながら、いかに相撲が上手であつたか、荒岩逆鉾がいかに手取であつたか、誰某は何縣何郡の産で誰某の部屋に屬し、身長何尺何寸、體重何貫何百匁で、角界きつての大飯くらひであり、誰某は、親子丼を十杯平らげ、誰某はウヰスキイを四本半呑んで、誰某は親孝行で、誰某は柳橋の何子といゝ仲だといふやうな知識を、小田巻の盡(つく)る時なく物語るが、扨て土俵の勝負はどういふ變化を生み、何がきまり手であつたかといふ肝心の事は無頓着といふのが典型的である。野球の場合も同じ事で、腰本監督はいかに強氣であるか、大下監督はいかに嚴格であるか、岡田監督はいかに智略を藏してゐるか、何某選手は何縣何市の産で何中學に學び、何年度に甲子園大會で優勝し、何大學から猛烈に引張られたが結局その敵方の何大學に入つた。身長何尺何寸、年齢幾歳、何とかいふ女優と浮名の立つたのは冤罪で、何とかいふ不良マダムに口說かれたが頑としてはねつけたのが事實だといふやうな知識の數を盡すのである。だが、インフイルダアス・フライ・アウトを審判の誤審と見て罵つ

たり、滿壘三振の際の捕手の落球を問題にしてネット裏會議を開いたりする程實際にはうといのである。それにも拘らず一球毎に批判し、選手監督審判員の頭腦の程度を疑ふやうな言葉を口走る、但しその所論は十中九迄結果論で、投手交代の結果救援投手が打たれると俄に監督の不明を詰り、危機打者の起用、バントと強打の適否、すべて結果がよければ是認して、流石は腰本だ、大下だ、岡田だと我が子分の事の如く鼻を高くし、反對に結果が惡ければ、腰本どうした、大下どうした、岡田どうしたとなるのである。それで甚しく優越感を味ひ、何しろネット裏のファンと來たら選手の癖から嗜好迄知つてゐるんだから大したもんですと、お互にいひ合つて滿足してゐる。

かういふ風に、ファンの興味は必ずしも純粹競技にあるのではなく、深入りすればする程熱心になればなる程、横道へ入つて行く傾向もある。場所中でも贔負力士を料理屋待合へ引つれて行き、翌日の勝負をふいにしてしまふ旦那ファンは珍しくなく、或は醉ひつぶしてみたり、或は女を取持つたりするファンもなくはない。此の種の旦那ファンは夙に近代スポオツ界にも出現して、選手を花街へつれて行つたり、あこがれてゐる女達の環の中に同伴したりして、自分の威勢を見せ度がるのがあるさうである。力士は昔から客に祝儀を貰ふ習慣があるから止むを得ないが、學

生選手を同じやうに心得てゐるファンのあるのはなげかはしいと或人甲が嘆じたところ、それは未だしもいゝ方で、近頃は選手を賣る奴が出現したと或人乙がいきまいた。

彼の言葉を信じれば、或競技界で有名な女性フアンこそは、選手ブロオカアだといふのである。これは頗るうるさ型に屬し、その道の男女の選手を年中家庭に寄せ集め、をばさんをばさんと呼ばれるのが何よりの樂みだつたのが、何時の間にか木戸御免の形になり、地方に競技のある時は自分も選手と同行して監督役を買つて出で、地方の選手が上京すれば、自宅に宿泊させるといふ有樣で、その道の名ある選手で手なづけてない者は一人も無いといふ程勢力を扶植した。それが、各中學の選手を、各大學へ賣つける顏役になりすました。隨分前から各大學の各種選手の爭奪ははげしく、昨日迄銀行の窓口でそろばんを彈いてゐたのが、今日は大學のユニフオオムを着て運動場をかけ廻り、昨日迄何某艦乘組の水兵が、今日は金釦の制服で角帽をかぶり、母校の名譽の爲に競走したりする裏面には、毎日の衣食住から小使錢迄學校持といふのもあるさうだし、入學試驗の省略は勿論として、教場には一度も顏を出さないでも試驗前には先生の中のフアンが合宿に來て受驗の要領を敎へてくれ、最も物わかりのいゝ學校では運動選手の試驗の點數は三割增とする內規さへあるといふ噂である。果して然らば正札附の選手を買ふか、競賣するかわかつたも

のでは無い。或人乙の知人或人丙は、前記をばさんに、その母校の爲一時金數百圓を以て有望なる中學選手を買ふ可く勸說されたさうである。不幸にして或人丙の母校は融通の利かない學校で、此の勸說に應ずる事の出來ない空氣が漲つてゐた。せつかくながら御斷する外は無いと遺憾の意を表したところ、をばさんは流石に顏役だ、忽ち啖呵をきつて、そんな時世に合はない野暮を云つてるから、お前さんの學校はあつちの大學にもこつちの大學にも年中負けつゞけてゐるんだよと、うでをまくらぬばかりだつたさうである。（昭和六年十月二日）

その十一

今年の秋の早慶野球第二回戰は、第一回戰を失つた慶應が壹對零でリイドした儘押切るかと思はれたのに、最終回の表に早稻田一點をかへして同點となり、一方の應援團は俄に活氣づくと他方の應援團は意氣銷沈して、聲もしどろになり、殆んど望を失つたものゝやうに見えたが、その回の裏二死の後に安打と死球で一二壘に走者のある時、早稻田內野陣の破綻で慶應側に凱歌のあかる劇的場景を現出した。悲喜交々のスタンドの混雜の中で、私の肩を叩いた人がある。それは、昔慶應の野球部に淺からぬ關係のあつた人で、遠國から遙々此一戰を見に來たのだから、むろん

狂喜して然る可き筈なのが、最初に口にした言葉を何だと思ふ。

「もつと靜かにベエス・ボオルを見たいなあ。」

と、しかも嘆息するやうに云つたのである。

運動競技は勝負を決するものだから、どつちを贔負する見物も、興奮し、熱狂し、喜怒哀樂を色に出すのが寧ろ當前（あたりまへ）だが、自然に色に出るばかりで無く、このきつかけをいゝ事にして、自分はいかに萬人にすぐれたる彌次馬であるか、彌次馬としての表現に獨創性を持つてゐるか、熱情をもてあましてゐるか、腕つぷしが強さうに見えるか、聲が大きいか、凄いか、頑猛か、頓狂か、何かの特徴を誇示したくて堪らなくなる人物が頗る多い。さればこそ芝居の大向が音羽屋ア播磨屋アと絶叫する意氣で、伊達が打棒を持つて出ると大統領と叫び、田部がプレエトを踏むと野球の神様アと怒鳴り、些か趣は違ふが川瀬があらはれると蒟蒻玉アと罵るフアンがあるのである。人も知る三田の汁粉屋のおやぢが日の丸の扇を開いて見榮を切れば、鶴巻町の下宿屋の婆さんは海老茶の旗を振立てゝ對抗する。一高三高の對抗試合には、健兒と自稱する兩校の應援團のなぐりあひを以て幕を閉（とぢ）るのが慣例である。

つらつらおもふに應援團が味方を贔負にするあまり、熱狂するのは無理も無いが、その熱狂振

を誇示する事に百害があるのだ。ほかの仲間よりも自分は斷然猛烈に熱狂してゐるぞと、形にあらはしても見せ度がる根性が、屢々不祥事をひき起すのである。その不祥事を避ける爲に、早慶明の應援團が、統制ある學生應援團以外は御互に責任を以て取締らうと誓約したのは、現在のファンの態度から見て歡迎すべき事であつた。これはもとより今春の明大應援團の暴行が近因となり、各應援團に自尊の觀念をいだかせようと云ふもくろみで、新聞紙の傳ふる所によれば、早稻田側の發意に基づくものだと云ふ事であつた。流石に政治家の生まれる學校だけあると感服してゐたところ、早慶第一回戰當日には、早大側の便衣應援隊が騷々しく彌次りはじめ、これを取締る筈の學生應援團は一向責任の實を擧げない。見るに見兼たリイグ當局が、ラウド・スピイカアを利用して、學生應援團以外の應援は一切しない事になつて居りますと注意を與へると、その言葉が終るか終らない瞬間に、何をつと云つた調子で、學生以外の便衣應援隊は一齊に立上り、フレイフレイ早稻田を絶叫しはじめた。すると、取締るべき筈の學生應援團は急霰の如き拍手を以て却つて歡迎したのであつた。立派な誓約はかたなしになつたが、更に驚くべきはつい此間、早稻田の發意で三校の間に誓約の出來た事を稱讃した新聞が、翌日便衣應援隊熱狂の寫眞を掲げ、且リイグ當局の注意に反抗した彌次馬の態度を「斷然痛快」といふ文字を以て煽動してゐるのであ

つた。

これを問題にして早慶のファンが又爭つた。いつたい早稻田の彌次は紳士的で無い、かりにも自分の方からいひ出した誓約を無視し、之を破るものに對して喝采を送り、稱讚するとは何事だ、あれが若し逆に、慶應側の便衣應援隊がフレイフレイ慶應を叫んだとしたら、抗議好の早稻田の事だから、應援團の中から決死隊のやうな顏つきをしたのが肩肱を張つて慶應側に文句をつけに行くだらう、よしんばさう迄で無いにしても、慶應側の便衣應援隊が騷げば、早稻田側の便衣隊も默つてはゐないに違ひ無い、ところが慶應側の一般ファンは誰一人騷がず、肅然として己を守つて居たでは無いか、そこが違ふところだよ、獨立自尊とは此の事なんだとむきになつてつつかゝると、早稻田ファンはせゝら笑ひ、その獨立自尊つて奴が氣障だよ、たまらないよ、臭いよ、ちやんちやらをかしいよ、いゝかい、あの三校の誓約といふものは、此の春の事件を互にふくむ慶明が又下らない騷動を起しては困るから、未然に防ぐ趣旨で第三者が提議したのだ、しかし早慶戰は天下を二分するたゝかひだ、選手が死を賭して奮鬪する時、應援團丈が涼しい顏して、お公家様が毬を蹴るのを御簾の中で透見してゐる御姫様のやうにおとなしく見てはゐられないぢやないか、此の場合の應援團は選手と異體同心だ、聲をからして歌ふのは、堪へようとしても堪へ

られない自然の叫びだ、それを何ぞや上品ぶつて御義理いつぺんの應援しかやらない慶應ボオイは、男の子か、あれでも若き血に燃ゆるものなのか、そんな事を云つてるから立教にも明治にもストレイトで負けたんだ、御氣の毒だがそんな非難は御念佛と同じだぜ、とこれも口角泡を飛ばした。

しかし、何でも彼でも一方をよしとし、一方をけなさうとするファンの議論は屢々裏切られる。流石に早稻田の應援團は昨日の非をいちはやく悟つて、第二回戰には便衣隊の跳梁を許さなかつたが、これに反して己を守り、如何なる場合にも統制を失はない事を自慢にしてゐる慶應が、慘憺たる第三回戰の大敗には氣を腐らし、學生應援團中リイダアの指揮に從はず、個人的彌次に墮落した者が多く、あまつさへ試合終了後、何故第一日の試合は雨の爲に中止し、今日は何故雨中にも拘らず續行したかと、審判員を詰問するやうな態度に出た。この現象を「衣食足て禮節を知る」勝つた方はおとなしく、負けた方はいけないのだと悟りすましたやうに評した人があつた。兎に角、靜かにベエス・ボオルを見度いといふファンよりも、熱狂己を忘れるファンの方が絕對多數である事は疑も無い。

玆に己を忘れた適例を擧（あげ）ると、第一回戰二對一で早稻田が慶應を破つた晩、その試合を見に地

方から出て來た取引先の人を客とし、私の勤務先の會社を主人とする宴會が新橋の或家で催された。末席につらなつた私が、隣席の上役と無駄話をしながら酒を飲んでゐると、突然甲高い聲が耳に入つた。床の間をしよつてゐる御客の一人と、若い藝者がしきりにいひ合つてゐるのだ。いや、いひあつてゐるのではない、年配の御客さんが、藝者に叱られてゐるかたちだつた。その女は、一寸馬の種類を想はせる、たとへば縞馬のやうな顔つきで、長くて下の方がつき出たやうな感じの顔が、醉つて赤くなり、怒つて一層赤くなつてゐた。

「いゝえ、なんてつたつて慶應は嫌ひです。斷然嫌ひだわ。第一慶應は卑怯です。やり方が汚ないわよ。」

「何が卑怯なんだい、何が汚ないんだ。」

「卑怯ですとも、汚なうござんすとも。ボオク問題つての知つてますか。知つてたら默つてゐらつしやい。」

「あら又あの妓はじめたよ。」

と私の目の前にゐる年増が眉をひそめた。

「野球つていふと夢中になつちまつて、何時でもあれなんですよ。困つちやうわ。」

「へえ、そんなに好きなのかい。」

「え、なんていふの、フ、ワ、ンて云ふのかしら、あれなんですよ。もつとも兄さんが選手なんだつていひますけど。」

「あら選手ぢやあないわ、監督よ。」

隣の若いのが大姐さんの無知を嘲るやうに訂正した。

「監督だつて、どこの監督だい。」

「それが××大學なのよ。だもんだから××の事つていふと、もう頭に血がのぼつちやうのね。お客様だらうが出先の御茶屋さんだらうがみさかひ無し、なんでもフレイフレイ××つて意氣なんだから……。」

「ほんとかい、××の監督は○○といふ人だぜ。」

話が面白くなつて來たので、私も乘出した。とたんに、

「慶應はとても汚ないんです。第一腰本つて人がいけないんです。なんだい、負けさうになつたもんだから、ボオクだなんていひがゝりをつけてさ……」

と、しつつこく管を卷いてゐたのが、此方の話が耳に入つたので、くるりと向直ると、恰も戰

場で武士が名のりをあげるやうに、

「えゝ、それがあたしの兄さんなんです。」

とあかりの下で姿勢を正した。

「はゝあ、あれが君の兄さんか。」

と一座の人が、兄さんといふのに特別の意味を持(もた)せてからかつた。

「いゝえ、そんなんぢやありません。實の兄さんです。正眞正銘の兄さんなんです。」

何子だか何龍だか小何だか何菊だか何奴だか知らないが、此の勇敢なる女性フアンは、××大學贔負のあまり錯覺を起してゐるのであらう、その大學の野球部監督は自分の兄だといひ張り、それが又何よりの誇に見えるのであつた。

「ね、わかつたでせう、あたしが××贔負のわけは。」

もう一度床の間の御客の方に膝を向けた。

「わかつた。しかし、だからと云つて慶應を憎む理由は無いぢやあないか。若しあの時の事がいけないといふのなら、審判官に喰つてかゝるのが當前ぢやあないか。」

「えゝ理窟はさうよ。だけど感情つてものはどうにも動かせないでしよ。野球のフアンなんてみ

んな同じよ。片方が好きなら、片方が嫌ひ。あたしは慶應が大嫌ひさ。フレイフレイ××。」
空になつたお銚子を持つて立上ると、應援歌を鼻歌で、裾を長く引いて襖の外に消えたが、それつきり戻つて來なかつた。（昭和六年十一月一日）

その十二

昭和六年秋の六大學野球リイグ戰が、慘憺たる早慶戰と、だらけ切つた慶法戰でおしまひになり、何となく喰ひ足りない、馬鹿を見たやうな感じで、胸の晴れやらぬファンにとつて、全米野球軍と稱する一團を迎へる事は闇夜のともしびに違ひなかつた。さればこそ前賣切符を手に入れる爲には非常なる努力を要し、十圓の通し切符が二十圓で飛ぶやうに賣れたといふし、かぶと町邊の若い者は、此の不景氣の折柄本業の方は當分見送氣分と達觀し、切符のプレミアム稼ぎに沒頭したのも少なくないと云ふ事である。由來大衆ファンは英雄崇拜で、又甚しく愛國心に富むから、當然二つの極端なる期待が生れた。ひとつは、豫てきく本場の野球を超人のしわざと觀じ、本壘打が十五本出るか二十本出るかを賭け、日本の學生軍がたちむかつて、三十點とられるか五十點とられるかと豫想しあひ、神宮球場外野の觀覽席の上をぽんぽんと飛び越すであらうとか、

あまりに壯大なる光景を想像した一群であり、もうひとつは平生崇拜する六大學の選手の或者を神の如く思ひ、いくら先樣がうまくつたつて、日本中から選拔した九人が死力を盡して戰ふからは、おめおめ負てたまるものかと力む一群である。近代日本野球史中の英雄宮武山下伊達と數へ、彼等が六大學リイグ戰記に殘した幾多の記錄の中最もはなばなしいのを常態と見做し、何しろ宮武山下が本壘打をかつ飛ばし、三日間連投の伊達が投げるんだからこつちだつて強えもんだと胸を叩き、兩軍火花を散らす場面を想像して夢中になるありさまだ。兩極端のいづれにしても、想像は眞實を遠ざかる程樂しいものである。前賣切符に法外のプレミアムのついたのも無理は無い。

ところが、愈々全米軍が渡來し、數度の試合を觀戰して、兩極端のフアンは完全に期待を裏切られた。盲拜主義者も鎖國主義者も、あまりのあつけなさに呆然とし、なんだつまらない、つまりませんなあ、さつぱり力が入りませんなあと、口々に云ふのであつた。音にきくベエブ・ルウスと本壘打數の第一位を爭ふといふゲエリツグは、一本の本壘打も打たない。東京では僅かにシモンズが、中堅背後の觀覽席へ打込んだ丈だ。三十點とるか五十點とるか、どいつもこいつも安打を放ち、いつ迄もアウトにならないのでは無いかと心配した程では無く、多くて十一點すくない時は二點しかとられなかつた。くつきり晴れた空の行衞もしらず飛んで行く雪白のボオルを

空想した浪漫派の樂しき夢は破れたのである。一方鎖國主義者も同じ失望に舌打ちした。彼等から見て、赤いオオヴア・コオトも癪である。觀覽席にむかつて帽子をとつて挨拶する外野手のお愛想も、いつも見る六大學の英雄のこちこちに固くなり、靑ざめ、こはばつた容貌態度に比べてあまりに呑氣過て怪しからん。あんな奴等に負けてたまるものかと思ふのだが、殘念ながら吾等の英雄はちつとも打てない。立敎頑張れ、明治打て打てと叫んでも、てごたへは無い。それでも强烈なる愛國的情熱は、客觀的批判を妨げ、現在大衆フアンに最も人氣のある伊達が出たら何とかなるだらうと噂する者が多かつた。扨て試合となると、六回迄一對一で持ちこたへ、七回の表に早稻田は四球と安打と敵失で一擧四點を入れ五對一とリイドしたので、滿場のフアンは湧立つた。流石に早稻田だ、流石は伊達だと、どうせ負けるものと見切をつけてそろそろ立上り、近所で行はれる慶明ラグビイ戰を見に行かうとしてゐたのも坐り直し、勝つた勝つたと熱狂した。ところが、今迄のんびりやつてゐた全米軍は忽ち態度一變し、きびしく選球し、よくあて、よく打ち、すぐさま七點奪つて勝敗を決してしまつた。しかも八回からは第一投手グロオブが出て、白鳥のまさに羽打たんとするが如き優麗なるフオオムで投る强球に、三人宛三振し、投球僅かに二十一で誰一人かする者も無く、流石のフアンも、たゞあつと云つたばかりで、言葉を發する者も

無かつた。その光景は恰も六萬の觀衆迄もろともに三振を喫したかの如きものであつた。稍しばらくして、なあんだ先刻（さつき）の四點はわざと呉れたのかとつぶやくのがあり、本氣になると幾點でも取りやがるんだなあと、忌々しがるのもあつた。勿論最初から大人が子供と相撲をとる時のやうに全力は盡さなかつたに違ひ無いが、わざわざ點をとらせたと見るのは皮相で、一方の油斷に他方の眞劍がぶつかり、幸運が機會を惠んだので、早稻田の奮鬪は稱讃すべきものである。しかし、彼等が緊張してかゝると、容易に相當の點を稼ぐ事も明白になつた。こゝらで大衆フアンも覺醒し、技術の面白さを味ふ方に心を向ければ、幸福に享樂出來るのだつたが、いかにせん大衆フアンは野球をスポオツと見るよりも、はたしあひと考へたがる精神が強いので、どうしても彼等を負かさなければ腹の蟲が納まらないのだ。そこで最後の全日本選抜軍に總ての期待をかけ、とどのつまり迄夢を見て夢が破れて、立腹し、しまひには味方の不甲斐なさを口汚なく罵り、又米選手に向つて林檎や柿を投げつけた者もある。玆に於てゆくりなくも思ひ出すのは、今から二十四五年前、亞米利加野球團が日本に來て、さんざん惱ました時、慶應義塾の選手へ宛て、諸君すべからく六尺褌を用ゐよと、忠告激勵の書を寄せた有名なる海軍士官のあつた事だ。この日天氣晴朗浪高しといふ日本海々戰の時の、皇國の興廢を一擧に賭けた将卒は皆六尺褌をしめたといふ。

果して慶應の選手が此の忠告に從つたかどうかは寡聞にして審かにしないが、今日もなほ多くのフアンは、その士官の如くどうにかして勝たせ度い一心から、神を頼み禪を頼み蝮の生膽を頼まんとする熱情に燃えてゐるのだ。

もつとも中にはいとも朗かなるモダアン型のフアンもゐる。私の見物してゐるうしろに、妙齡の令孃が四五人一列に並んでゐた。彼等は實に喋る、喋る。ね、ね、どうせ亞米利加人とやつたつてかなはないとわかつてゐるんでしよ、そんなら誰が出たつて同じ事なんだから、なるたけ綺麗な人を出した方がいゝわね、だつてさ、あつちの人みんな大きくて色が白くて立派でしよ、それなのにこつちがちひちやいのや、貧弱なのや、をかしな顏つきの人ではみつともないわ、恥よ、國辱よ、と一人が提議すると他の令孃にも勿論異議は無い。さうね、その方がいゝわね、だけど綺麗な人つてだあれ、と忽ち膝を乘出した。ピツチヤアなら誰でせう、早稻田かしら、明治かしら、キヤツチヤアは斷然慶應ね、フアアストには困つちやうわね、だつてみんな變なんですもの――たとへば斯くの如く、いづれも一般の女學生よりも着飾つたのが、はしたない品定めをやつてゐた。(昭和六年十一月二十五日)

――「文藝春秋」自昭和六年二月號至昭和七年一月號

ことばの亂脈

或不良少年が話した。この頃モダアンがつた女の子は男の子の眞似をして、君とか僕とかいふ代名詞をつかひ、よせよ、僕、君のその態度がいやなんだよ——などゝ云つて得意がつてゐるが、あいつを聞くと無上に腹が立つ、なんでえ、いくら男の眞似をしやあがつたつて、とどのつまりは違ふぢやあねえか、嘘だと思ふなら、いきなり横面をひつぱたいて、ひつくりかへして見りやあ直ぐわからあ——さういふ、反抗心がむらむらと來るといふのだ。それで或日、白晝銀座のまんなかで、斯る小癪な女の子が、男の子のやうな口のきゝ方で立話をしてゐるのを、通りすがりに不圖聞いて、自分でも何故だかわからないのだが途方も無く腹が立ち、斷然許しては置けない氣持にとつつかれた。もつとも其の日はあぶれて、晝飯にもありつけなく中腹の加減もあつたさうだ。かまふことあ無いよ、あいつどんなに扱つたつて怒りやあしないぜ、僕、自信あるよ——

みそつぱの感じの女の子がいふと、ちえつ、しよつてやがら――きやりこ金魚のやうなのが、わざと怒つた樣子をした。とたんに二人のショオト・スカアツを力いつぱいまくりあげた。まんまるいお尻の曲線があまり露骨にむき出されたので、流石にこいつあしまつたと思つたさうだが、あれえ――きやあつてね、女の子の音をあげやあがつた、いくら眞似をしようつたつて、男の子できやあつて奴はゐないやね――彼は彼等が正眞正銘の女の子である事を證明して、一目散に逃出したといふのである。

この種類の女の子が、わざわざ口に馴れない男の子の言葉を眞似する心理は、別段ヂヤアナリストの批判解剖を煩はす必要は無い。新しがつた人眞似は、多少冒險氣分も加つて、いかにも尖端を行くが如き得意を感じるのである。それは恰も此頃のプロレタリア小説が、無闇に卷舌を使ふことにつとめ、つい先頃迄は英語まじりの氣取つた會話をしてゐた女學生だつたり、女中がおともをして歩く令孃だつたり、みつ指ついた奥さんだつたりしたのが、それではプティ・ブルだと罵られさうなので、あそばせ言葉を無理に振捨て、資本家の豚、畜生ツ、糞ツ――などと十人が十人同じせりふを用ゐてゐるのと同じだ。

それがどうして聞く者のこらへしやうをなくなし、白晝帝都のまん中で、女の子のお尻をまく

る暴擧を敢てする程癪にさはらせるのかといふと、身につかない事でありながら得意な面をしてゐるあさはかが、他人の感觸を害するからであらう。年寄ならば苦笑ひで濟むところだが、血氣の者では手の方が先に出るのだ。

身につかない言葉を得意面して使ふのは、銀座通を街娼のやうに歩き廻る女の子ばかりでは無い。往年、永井荷風先生の傑作「すみだ川」小山内薫先生の作中最も人氣のあつた「大川端」などがあらはれ、所謂江戸趣味が人々の心を捉へた時代に、

川波が
岸になげくよ
しんめりと

と大川端の情緒を歌つた詩人があつた。年少にして未だ苦笑ひに逃避する事を知らなかつた私は、直ぐに口が先に出てしんめりはしんみりの間違ひだらうと指摘したところ、內心弱つたには違ひ無いのだが、しんめりでなくては心持が出ないのだと詩人は強辯した。

小川未明氏は越後、室生犀星氏は金澤の產で、それが御國の訛であらうが、「おなじ」といふべき場合に「おなじい」と書く。それが少しもをかしくない。何處となく陰性の、ねつとりとねばつ

た裏日本的文脈には、かへつてしつくりはまるやうだ。ところが、まるつきり鄕國が違ひ、氣質が違ひ、文體の違ふ年少の作家がわざわざ眞似をして、屢々「おなじい」と書いてゐるのを見ると、白晝銀座のまん中で、女の子のお尻をまくる不良の心持に、寧ろ同感を覺えるのである。

有名な作者が用ゐる言葉だと、それが普通使はれないものでも忽ち流行となり、何時の間にか在來の同意語を抑のけて一般的となる例は少なくない。武者小路實篤氏は其の姓名の示す通り公家の出た。だから上方言葉が自然に出て來ても、あの獨特の文章の色を強くこそすれ、些かもをかしくない。たとへば、東京で「何々して貰ひ度い」といふ場合に「何々してほしい」といふ。京、大阪ではそれがあたりまへだが、東京では、少なくとも武者小路氏出現以前には一般には用ゐられない言葉づかひだつた。ところが今では「何々して貰ひ度い」と書く人は極めて少なく、殊に若い人の間では「何々してほしい」の方が以前からの用語だと思はれてゐるやうである。

これも武者小路氏の出現の前後によつて違ふやうに思ふが、同氏出現前には「私は酒を好む」とはいつても「私は酒を好きだ」とはいはなかつた。それが今では「何々を好きだ」といふのがあたりまへになつた形である。これらは單に耳ざはりだといふに止まるが、流行が、人眞似が、言葉の使ひ方を全く逆にしてしまふ例も少なくない。

宇野浩二氏は一切人の意表に出るやうなねらひどころに興味を持つ作者で、作中人物の氏名なども、馬琴もどきの名詮自性を用ゐたり、感動詞や副詞の使ひ方をわざと變てこにして破調の面白さをめざしたり、自分一流の效果を擧る爲に苦勞を積んだが、氏の作品が世間に受けたので忽ち模倣者を簇生し、有名なる「等々々」の如きは明治以前うまれの學者迄が何の疑も無く借用してゐる。あたりまへなら「何と驚くべき事ではないか」といふところを、宇野氏は「何と驚くべき事である」と肯定する。それは宇野式文體であつてはじめて許される事なのに、多くの追隨者は正統派の文體の間に突然「何と驚くべき事であるのである」など、脫線する。

井伏鱒二氏も宇野氏に負けず珍妙不思議な言葉を活かして使ふ作者である。それが或地方獨特の言葉なのか、作者がねらふ味を出す爲にこしらへ、又は寄集めたものか知らないが、井伏氏の神經を持たない亞流の徒が不用意に眞似するのは、女の子が男の子の言葉の眞似をするのよりも、一層片腹痛い事である。

無闇に名詞に「お」の字をつけるのも現代の流行のひとつである。昔からの習慣で「お」がついても、さほど耳ざはりで無いのもあるが、原則としては名詞には「お」のつかないのが正道であらう。上方では男でも鯛を「お鯛」と稱し、大根を「お大」といひ、芋や豆はさんづけだ。東京でも、酒や

醬油には「お」の字をつけてあやしまないが、それだからと云つて、今更物といふ物に「お」をつけて、上品だと思つたり、やさしいと思つたり、叮嚀だと思ふのは惡趣味である。此の惡趣味の尖端を行つたのは、恐らくそのかみの華族女學校の教師と生徒であらう。習字を「お習字」圖畫を「お繪」修身を「お修身」など丶唱へたのは正にその學校である。しかしこれを津々浦々に廣めたのは當今の童謠詩人に違ひ無い。「み空の星」ですむところを「お空のお星」とうたはなくては承知しない詩人がある。空おそろしい事ではないか。既に大人が手本を示したので、小學校のませた詩人たちが得々として「お背戸のお柿にみがなつて」など丶やつてゐるのは無理も無い。お餅、お林檎、おサイダア、お自動車、めつたやたらに「お」をつける。

それと關係があるか無いか知らないが、自他の區別なく敬稱を用ゐる人間が、頗る殖えた。他人に向つて、自分のおやぢの事をお父樣といつたり姉の事をお姉さまなど丶云ふ。曾て「私儀母上樣御逝去被遊候に付」云々と云ふ缺勤屆を會社に出した三十餘歳の法學士があつた。

外國語で、日本語化したのにも隨分困りものが多い。女給と云ふ略稱が一般に通用するに至る迄、諸所方々で「女ボオイ入用」の貼紙を見たが、或女流小說家の作品中には「女のウェイタア」なるものがあらはれた。近頃のモダアンがつた小說には、屢々トランクを手に提げた紳士貴婦人令

嬢があらはれるが、これは明かにスウツ・ケエスの間違ひに違ひ無い。或る若い作家に此のあやまりを指摘したところ、よしんばそれが間違ひでも、みんなが手提鞄をトランクだと思つてゐるのだから差支ないではないかと云つて相手にしなかつた。そんなら若し、作中で手提鞄と大鞄と兩方を小道具に使はなければならない場合に困るではないかと突込むと、しばらく考へてゐたが、そんな場面は書かないから構はないとはつきり答へた。

佛蘭西語のシツクをシイクと訛つてゐるのも、言葉が言葉丈に甚だをかしい。嘘かほんとか知らないが、シイクといふのは亞米利加の俗語で、田舍者の事だと書いてゐた人がある。寡聞にして之を知らず、手許の辭書を引いてもみあたらないが、果してほんとゝすれば此上もない皮肉である。（昭和六年十二月二十日）

——「古東多卍」昭和七年二月號

「福澤諭吉傳」の刊行に就て

石河幹明先生　玉机下

御老體の先生が七年餘の歳月を費して完成された「福澤諭吉傳」の刊行に對し感謝致します。先生は御存じ無之事と思ひますが、凡十五六年前、私は大阪毎日新聞に「先生」と題する一文を投じた事があります。それは私の幼い記憶に殘る福澤先生の事を、印象派風の描法で書いた小品で、別段惡口をいつた覺えはないのですが、慶應義塾出身者の中には、福澤先生の事を兎や角いふのは怪しからん、生意氣な奴だと憤慨した人もあつたと聞きました。多分福澤先生を神様として書かなかつたのが御意に召さなかつたのであらうと思ひます。私は慶應義塾子飼のものですが、中學時代修身の時間などに、福澤先生は偉い偉いと神様のやうに聞かされながら、何故偉いのか、いかなる思想を持ち、いかなる功績があつたのか、はつきりと說き聞かされた事はありませんで

した。批判を許さない存在として押賣される爲に、いたづらざかりの天邪鬼は、かへつて福澤先生に對して反感を持ち、その著書を讀む事を嫌惡する心持さへいだきました。この度の先生の大著は、人間らしい福澤先生と、その生まれた時代と環境を正確に傳へるものと信じます。私はこの傳記によつて、近代日本の生んだ最も大なる人格に素直な心をもつて接する事の出來るのを限りなく嬉しく思ひます。(昭和七年二月一日)

——「福澤諭吉傳」内容見本昭和七年二月

はせ川雜記

ひと昔前の事、たまではあるが籾山書店へ行くと、眼つきの凄い、異様に顏の赤く、ひとくせ、ある番頭さんが、いつも挨拶してくれたが、それが誰だか、ながいこと知らなかつた。たまたま、大場白水郎宗匠の句集上梓をよろこぶ會が田端の自笑軒で催された時、このひとくせある面魂（つらだましひ）の人物を、世話人の中に發見した。

「あの人誰だい、始終籾山書店で見る顏だが……」

「長谷川春草。」

隣席の久保田傘雨宗匠は、あれを知らないのかといふやうに、きつぱり答へた。

「あゝ俳人か、うまいのかい。」

よくない事だが、俳句のことは何も知らないので、私は屢々斯ういふ頭の惡い質問をする。た

とへば、甲宗匠と乙宗匠とはどつちがうまいのかとか、大場白水郎宗匠はほんとにうまいのかとか、現在生きてゐる俳人では誰が一番うまいのかといふ類である。いづれも傘雨宗匠にきくのであるが、最後の質問の場合丈は實にはつきりした回答を得た。曰く、

「久保田万太郎がいつとううまいのであります。」

考へる迄も無く、めいめいの持味が違ひ、藝風が違ふので、はつきり優劣をきめる事は無理だし、善玉惡玉のやうに、うまいまづいのふたつに分るのは不可能に相違ないのだが、素人のかなしさで、かんたんにきめてかゝりたいのである。又ひとつには、大方の俳句の面白さがわからず、反對にいやみの方ははつきり感じるところから、反抗心が斯ういふ口をきかせるのであらう。たしかに不心得な事で、よくないとは思ひつゝ、永年のかたぎとなつた。

その時傘雨宗匠がうまいと答へたかまづいと答へたか、うまいけれども自分よりはまづいと答へたか記憶しないが、その後「俳諧雜誌」や「春泥」——われわれの仲間はひそかに「はるどろ」と呼んでゐる——で、春草宗匠の句を拾つて見るが、もとより私にはわからない。澤山ある中から、わざわざ拾ひあげるのは、あのひとくせある面魂の人間は、どんな句を作るのだらうといふ好奇心のさせるわざである。

その宗匠が籾山書店を勇退しておでんやをはじめるからよろしく頼むと、傘雨、白水郎二宗匠に紹介され、元來のみくひは好きだから、爾來時々御世話になる。この方もいたつて散文的で、無闇に分量を多く頂く丈で、うまいかまづいかは他人にきかなければわからない。尤も、先頃或多人數の會合で卓を共にした食通甲と乙が、しきりに銀座界隈のうまいものやを論じたあげく、甲がはせ川で喰へるのは釜飯だけだといふと、乙は心外に堪へぬ面持で、

「困るなあ、かゝいふ男は、江戸前の料理がわからないいんたから。」

と歎息するのを聞いた。信頼して然るべきであらう。

上方料理をよろこんで喰ひ、江戸前の料理の何なるかをわきまへない私がはせ川へ行くのは、あのひとくせある面魂の人間が、どんな様子で商賣をしてゐるかといふ好奇心に、一番強く誘引される爲らしい。

いつたい小說家、ゑかき、役者といつたやうな種類の人の經營するたべものや、のみやの類は、開店早々の新聞雜誌の宣傳は賑かで、ひとしきり義理と面白づくの客でたてこむが、元々芝居氣と自惚ばかり強くてどつとしないのが本質だから、あまり長續きしないのを例とする。よく見る景色で、主人が客と友達づきあひで飮んでゐて、ふりの客をかへりみないのなどは、何の爲の商

賣か本心がわからない。

「俳人のおでんやなんて感心したものではないぜ。」

はせ川の場合にも先づ憎まれ口を叩いてから出かけた。うちは奇麗で、靜かで、場所がいゝ。銀座の無秩序無反省な雜沓をはなれた出雲橋のたもとで、窓をあけると三十間堀が目の下に澱んでゐる。もろもろの汚物の沈んで流れない川底のどぶどろの發散する臭ひは、私を幼時の追懷に誘惑する。この臭ひは、昔東京の到る處でかいだ臭ひだ。明治のはじめ迄、三十間堀には蓮が咲いたさうだがそれは時代が違ふ。私共が知つてからは、あれから木挽町築地へかけては、新興日本のハイカラな洋風と、つめたい水の香をほのかに感じさせる寂しさをなひまぜにした景色だつた。私を可愛がつてくれた母方の祖母が、木挽町の河岸に住んでゐたので、祖母や伯父に手を曳かれてこの邊を歩いたものである。私ははせ川へ行くと、冬でも必ず窓をあけて、向河岸の家々を眺め、橋の上を通る人を見、どぶどろの臭ひを深く吸ひ込むのである。その臭ひは、あまりに強く濃くない限りは、決して惡いものでは無い。支那料理の前菜に出る皮蛋の香氣と同じだ。

おでんやとは云ふものゝ、わん、さし、酢の物ひととほりは出來て、お酒も結構だ。たゞ私の經驗では、甚しく出來不出來があり、一番評判のいゝ釜飯さへ、ぐしやぐしやのに出會した事も

ある。或時は甘く、或時は辛く、味のきまらない傾向もある。これは、こゝに集まるお客の中心が、いづれも一見識ある宗匠連で、あゝでもないかうでもないのおさしづがうるさい結果では無いかと邪推する。といふのは、或日の榮螺（さゞえ）の壺燒のつゆがあんまりあまからいので不審をうつと、

「壺燒といふものは斯うあるべきが本格だと、さるお客さまがおつしやいますので……」

と宗匠は持前のいんぎんていねい過（す）ぎるものごしで答へた。察するところその客は、緣日の夜の大道で幼い日に喰べた壺燒の味をなつかしがる江戶子であらうが、酒の肴となるべき場合、殊に料理屋風のぎんなんだのみつ葉だの景物の多い壺燒は、當然うす味でなければならないのではないだらうか。

とはいふものゝ、これは春草宗匠の直接負ふべき責任では無い。何故ならば宗匠はお茶を汲んだり、お燗をつけたり、サアヴイス專門で、みづから庖丁はとらないからだ。但しそのサアヴイスぶりについても、私は滿點を與へない。何がいけないかといふと、いんぎんていねい過ぎ、腰の低過（す）ぎる事が、私共をくつろがせない。おでんやのあるじの腰の低いのが惡い筈はないが、どうもあのひとくせある面魂で、

「へい左樣でござんす。」

など丶揉手をされたり、膝つ子の下迄手をさげて挨拶されると、正直のところうす氣味が惡い。御近所の御婦人方が澤瀉(おもだか)やにそつくりだと評判するさうだが、成程肩幅の廣い、がつしりした、四角い感じのするからだつき、殊にあの凄い眼つきは猿之助だ。だからふた心をいだいてゐるのでは無いかなど丶いふ惡態をつくのではない。野人禮にならはず、いんぎんていねい過る相手は苦手なのだ。

はせ川の柱かけに岡本癖三醉宗匠の句がある。

坐れば沈丁花の風がまともに

例によつて私には、うまいのかまづいのかわからないが、こ丶に癖三醉宗匠の筆蹟を見るのもなつかしかつた。

岡本さんは私の兄の、慶應義塾幼稚舍から本塾へかけての友達で、よくうちに遊びに來た。兄と私とは七才違ふので、その友達どもは私を馬鹿にしてからかひ、怒らせて喜んだ。かんしやく持の私は緣側のうすべりのおもしにかつてある鐵の棒を振廻して、泣きわめいた。五歳か六歳頃から小學時代へかけての私の記憶にも、岡本さんの姿は他の人々と違ふ特別のものとして殘つてゐる。角力をとつたり、陣取をしたりしてゐる仲間を、岡本さん丈は築山の上にしやがんで、冷

かに見下してゐた景色がはつきり想ひ浮ぶ。畫をかいたり、歌や句を作る事がはやり、岡本さんは皆から一枚上手の役者として尊敬されてゐたやうだ。岡本さんはよほどませたこどもだつたらしい。早くも外のこども達と同列の事は馬鹿々々しくなつてしまつたらしい。學校なんかには、まるつきり興味を失つてしまつたらしい。よくうちに泊つて、翌朝兄は几帳面に登校するのに、岡本さんはそのまゝうちにゐて、朝飯をくひ、晝飯をくひ、兄の歸るのを待つてゐる事もあつた。

今でも岡本さんの話が出ると、

「あの子は憎らしい口をきく子だつた。せつかくお菓子を持つて行つてやつても、三人に三つづゝといふやうに割切れるのは氣持が惡いなんて云つてね。」

母はきまつてそれを云つて笑ふ。

塾の運動會の時、學生がくじを賣り、當りくじの人には、菓子をくれるといふやうな事をやつてゐた。岡本さんはかけつこが早いので、きつと勝つから岡本さんのくじをひけと兄がいふまゝに期待をかけた記憶がある。その時岡本さんはだん袋のやうなシヤツにだぶだぶの下ばきといふ異風で、びりつこだつた。子供心にそれが岡本さんの芝居で、わざと負けたものゝやうに思はれた。同じく運動會當日學生が新聞を作つて賣つたが、これも岡本さんの仕事だつたと覺えてゐる。

「兒戯珍報」といふのだつた。

その後兄達は廻覽雜誌風のものをつくつてゐた。勿論岡本さんが筆頭で、既に本氣になつて俳諧の道に入つてゐたのだらうと思ふが、小說もかゝれた。その頃の私にとつて、小說をかく人といふものゝ偉さは、絶大のものだつた。兄の友達にさういふ偉い人があるといふ事丈で、胸が躍るやうだつた。

中學の頃、机を並べた疋田朱泉さんから、岡本癖三醉がいかにすぐれたる俳人であるかをきかされ、曾てその人を自分も知つてゐたといふ事にほこりを感じ、わかりもしないのに癖三醉句集を買つて長く所藏した。さういふ因緣で、坐れば云々の句にもなつかしさを感じたのである。

昨年の冬、親類の親のないこども達をつれてラグビイを見に行き、歸りにはせ川でおでんと釜飯をおごる事になつた。同勢十二人がぎつしりつまり、こども達は靴を脫いで、窮屈に坐つた。最初のうちこそ遠慮もあり、脚がしびれて參つてゐたが、外の御客の歸つた後で、みんな土間へ下りると、一度箸を置いたのまで元氣をとりかへし、釜飯のおかはりをし、おでんのしこみも殘らず平げてしまつた。

翌日こども達から、それぞれ禮狀をよこした中に、小學六年生のが色鉛筆ではせ川內部の繪を

描き、

　坐ればしびれて見えず沈丁花

とふざけて來た。

後日春草宗匠にその事を話したところ、

「いや、この方がうまい。」

と、ひとくせある面魂に似ず、いとも朗に響く聲でうけて笑つた。（昭和七年四月十八日）

――「春泥」昭和七年五月號

「西洋美術史研究」の序

澤木四方吉君はその一生を學問と藝術に對するわきめもふらぬ熱情と憧憬を以て貫いた。生來虚弱だつた爲か、幼少の頃から球を投げ、力を角するが如き遊戯には加はらず、ひとり書を讀み、彩管を弄ぶことを好んだ。肉體は虚弱だつたが精神は強く、晩年には幾度か血を吐きながら學問を見捨ず、學事を廢するよりは寧死なんことを欲するが如き言葉を口にし、學の大成を期して生きんことを望んだ。しかも君の壽命は短く、大志をいだきながら半途に死んだ。君は明晰なる學者の頭腦と鋭敏なる藝術家の官能とを兼備した美術史家であり、美術評論家であつた。該博なる知識を傾けて研究の成果を發表する希望はもとよりの事であるが、それよりもまづみづから鑑賞の愉悦に感激し、そのよろこびを他人にも分たんとするこゝろざしが深かつた。

「西洋美術史研究」上下二卷は、君が鑑賞のよろこびを吾々にわかたんとしたあつき賜である。

（昭和七年四月二十一日）

――「西洋美術史研究」昭和七年五月二十五日發行

「發端地」の作者

昭和六年から七年の春へかけて、私が一番感激して讀んだ小説は谷崎潤一郎氏の「盲目物語」で、一番面白く讀んだのは富澤有爲男氏の「發端地」である。「發端地」は三度讀んで、二度目ははじめよりも面白く、三度目は二度目よりも更に深い味はひを見出した。

富澤氏は畫家である。その油繪は帝展で二三枚見たが、氏の持味のあらはれの乏しいものであつた。私は寧ろ装幀畫家としてのすぐれた天分を認め、殊に肉の柔かい女の曲線か或ははんぺんのやうな氏獨得の描線が好きで、先年新聞に小説を連載した時は特に挿繪をかいて貰ひ、又將來著書の装幀には氏を煩はし度いと思つてゐる。だが、小説作者としての資質手腕は「發端地」の出る迄疑つてゐた。

餘程いぜんの事になるか、岡田三郎助氏夫人が、この原稿を讀んでみてくれと云つて、小說一篇を持參し、作者は岡田畫伯の遠い親戚にあたる人ときかされた。それが富澤有爲男氏だつた。その小說がどんなものであつたか、私の記憶には夙に煙幕がかゝつてしまつたが、たしか美しい一人の少年だか、半男半女だかの官能の惱みが描いてあつたやうに思ふ。最後の場面は、畫室のやうなところで、硝子窓を透して來る月光を浴びつゝ、全裸の肉身にみづから陶醉する景色があつたとおぼろげに覺えてゐる。それは私の記憶違ひかもしれないが、少なくとも私の頭の中では、そんな景色が幻影化され、しかも實在性を帶びてゐる。何故かといへば、私はその美しい少年だか、半男半女だかの主人公を、作者その人と結びつけて考へる習慣をつくつてしまつたから。

その小說には多くの獨創と特異質を認めかね、その後「鷲の巢」といふ雜誌で氏の書くものを見ても、畫人の餘技に過ぎないやうに思つてゐた。岡田畫伯も富澤氏の畫才を賞しながら、あまり多方面に才氣の走る事を心配して居られたから、氏が小說を書く事を內心喜ばず、又それによつて大成するとも考へて居られなかつたに違ひ無い。

有爲男といふ珍しい名前は、常に岡田夫人の口から聞き、美貌で、才人で、氣どりやで——と、親愛のこゝろから出る惡口をまぜて傳へられた。

富澤氏はいつも黑の上着に縞ずぼんで、澤山あつてつやゝかな頭髮を奇麗に分け、半透明の石の感じのする蒼白の皮膚を持ち、稍眼尻の下つた眼はよく微笑し、その癖つんとすます時は、その眼や鼻や口のほとりに鸚鵡族の氣取と愛嬌を見せる人である。名古屋の產とおもふが、名古屋らしくない訛のある言葉で、口のきゝ方に技巧のあとが著しい。世間一般が美男をもつて許すに違ひ無いが、時にふと美女の老いたるものゝ如き寂しさがある。玆に氏の風采態度を描くのは、長篇小説「發端地（ロンバルヂア）」を理解する上に、極めて役立つと思ふ老婆心からである。

「發端地（ロンバルヂア）」は完全に氏の嗜好によつて描かれたものである。作者は自分の嗜好を滿足させる爲につくりあげた世界の中に陶醉感を味ふ事を喜び、現實の姿をあるが儘に描く事や、理想や欲求を訴へたり押賣しようとする功利的の目的は持つてゐない。それよりも美しい人を美しい場景の中

に送り出し、もろもろの誘引にあやふく汚れんとするのを、一生懸命に引戻してほつと安心した作者の心を強く感じる。

「發端地(ローバルチア)」はえらばれたる土地と人とが既に異國趣味の香氣と色彩を濃厚に漲らせ、華麗珍奇な場面が繪卷物のやうに展開されるので、テンポはゆるやかだけれど、文字の上に極めて上品な映畫の效果も感得する事が出來る。誰かよき野心を持つ映畫監督が、これを手がけたなら必ず面白いものが出來るであらう。

＊

自然描寫の美しさは素晴らしく、畫家の眼と腕の冴えを容赦なく發揮したが、それよりも外套のうらの臙脂の薄絹の間に危くはさまつて、いたいたしく傷ついた白薔薇の花や、深夜ホテルの一室で見知らぬ女のひとの足に戲れる小犬の姿などの、氣の利いた小品畫の趣を湛へる描寫に深い理解と同情のそゝがれてゐるのを嬉しく思つた。

私は前にこの小說は理想を押賣するものではないといつたが、押賣はしないけれども作者の理

想美を觀念化した努力は充分認めるのである。殊に異鄕にある一人の美しい日本人の奥さんがまどはしに惱み又祈るこゝろには、舊敎徒の古く美しく嚴かなる倫理道德さへ感じる。富澤氏は近代人の鋭い官能を持ちながら、古き傳統精神に一層美しさと正しさを認めるのではないだらうか。作中にはげしくあらはれる美しい人に對する讃美憧憬、靑春の去りゆくを歎くこゝろ、醜いものに對する憎惡は、古典主義的の型に陷らんとしながら、豐かに新鮮な情緒と、敏感な感覺によつて巧みに救はれた。

「發端地（ロンバルチア）」の中につぎつぎにあらはれる場景は、吾々の眼には新しい歐羅巴のはなばなしい社交のちまたに多くとられ、そこに登場する人物は、男も女も美しい姿を惠まれ、空も山も町もホテルも麗しく描かれながら、始終深き寂寞の影につきまとはれてゐる。それは何故か。恐らく此の作者は人生に美を求めながら、常にその理想のまどかに滿されぬ惱みを心に持つ爲めであらう。「發端地（ロンバルチア）」は富澤有爲男氏のよき嗜好によつて描かれた唯美主義の作品だと稱してもいゝやうであるが、一面に於て氏の理念は絕えず頹敗的傾向に反對し、均齊と品位を保たしめる事に働いてゐる。そこに新しい宗敎畫の趣さへあらはれてゐる。

「發端地」には富澤有爲男氏が完全に表現されてゐる。その意味は作者が作中の主人公だといふのでは無い。否、作者はひと度も作中に姿をあらはしはしないのだが、彼の美意識、彼の倫理道德、彼の詩、彼の繪が、全篇を貫いて完全に織込まれてゐる。その爲に、鸚鵡族の氣取を感じる事もあり、美女の老いたるものゝ如き寂しさを感じる事もある。

「發端地」は僅かにその一部が發表されたゞけで、今後或機會に續篇が世に問はれるのたさうである。私はなほ多くの書きたい事を持ちながら、俗事に妨げられて筆をおかなければならない。作品完成の日をまつて、再びこの作者についての感想を述べるつもりである。(昭和七年五月三日)

——「三田文學」昭和八年五月號

同人雜誌の辯

毎月雜誌の出る頃は郵便配達の來る度に、あゝ又來たのかと歎息する程夥しく、第三種郵便物が押寄せて來て、前月分のが讀み切れず、もてあましてゐるのに、机の上には忽ち數十冊の雜誌が積みあげられる。幼少の頃は「少年世界」を、稍長じては「新小說」や「文藝倶樂部」を、今日出るか明日出るかと待ち侘び、日に幾度となく本屋の店頭に立ち、新しい紙とインキの匂に夢中になつたのに、今は月々その頃になると、心は重く苛立たしく、自然に眉間に皺の寄るのは借金の期限の迫つて來るのと同じだ。

そんなら讀まなければいゝのだが、多年のしきたりで、貰つた雜誌はのこらず讀む。しかも第一頁から最終頁迄、殆んど無選擇に讀み通さないと氣が濟まない。貴重な時間を無駄にする馬鹿々々しい遣口（やりくち）だとは思ふのだが、どれを讀みどれを捨（すて）るか、捨るものに對する下らない良心が働

いて、廿餘年間愚なる努力をしつゞけてゐる。

既に雜誌を讀む事が、樂しみよりも仕事になり、勞務になつてしまつた形があるので、大概の場合は苦痛を伴ふ。だから頁數の多い大雜誌は、外觀だけで肩が凝り、つい手をつけるのが億劫になる。私が同人雜誌の丹念な讀者である所以は、ひとつには頁數が少なく、短時間で讀了出來るからである。しかし、決してうすつぺらだといふ屬性丈で愛讀するのではない。同人雜誌本來の使命と特質を認めるからである。

同人雜誌は、大體市場價値を持たない原稿の持寄と見て差支無い。若しも商賣雜誌が澤山あり、誰の原稿でもどしどし買つてくれる世の中ならば、同人雜誌は殆ど生れないに違ひ無い。したがつて不景氣が深刻で、商賣雜誌の數が減れば減る程、同人雜誌の數は殖える傾向がある。しかも悲しい事には、原稿市場に於て需要が供給と均衡を保つか、或はより以上であるといふ天國の出現は想像する事も出來ないので、將來同人雜誌の數は益々殖えるに違ひ無い。そこで私は同人雜誌の使命と特質を正しく認識する事が必要だと思ふのである。

現在、商賣雜誌の數は少なく、それらは商賣雜誌本來の性質から、讀者を多く有する既成作家の原稿でなければ喜んで掲載しない一方に、後から後から原稿製作者は出て來るので、無名の士

は相集つて同人雜誌を作り、初登場の舞臺とする外に道が無い。由來雜誌編輯者は僅かなる例外を除くほか、よき批評家でもないし、藝術の愛好者でもない。彼等は、自分達よりも更に藝術を愛好せざる大衆讀者の好みに應ずるやうに誌面を配備する事に專念であつて、大衆讀者の知らない新人を世に紹介する冒險を敢てする程物好きでもないし、親切でもない。講談筆記と、如實性の乏しい時代物と、型の如き美男美女の戀愛小說は、容易に大衆讀者のロマンテイシズムを滿足させるが、所謂藝術小說は少數の文學愛好者の外にはかへりみられないのが普通である。眞に偉大なる藝術は必ず大衆の心を促へるものだといふ說は屢々威勢よく宣言されるが、果してさうだとはうなづけない。例へば近代小說中でこれ程のものはないと幾多の批評家が折紙をつけたトルストイの「アンナ・カレニナ」や「戰爭と平和」は、何處の國でも安易なる探偵小說や少女好みの戀愛小說以上の讀者を持つてゐるかは疑問である。私は、將來商賣雜誌の文學欄は、藝術小說の發表機關である事を拒みはしないかを惧れるものである。少なくとも雜誌販賣上、藝術小說の揭載の重要性の薄くなつた事は明白である。書くものゝ種類を限定し、枚數を制限する事は、編輯者當然の權利として誰も不思議に思はなくなつた。

さういふ傾向が歷然たる以上、純藝術の發表機關として、同人雜誌が重大なる使命をもつてゐ

る事を認めなければならない。同人雜誌こそ、自由に大膽に作品を發表し得る舞臺なのだ。單に數人のもの丶手習草紙だと考へてはいけない。商賣雜誌の註文ならば一生懸命に書くが、同人雜誌に載せるのだからい丶加減でい丶といふやうなつきあひ根性ではいけない。これこそは商賣雜誌と違つて、多數の人には讀まれないが、少數の專門家とほんとに文學を愛好する人々の批判を問ふのだと自覺したい。そこではじめて、同人雜誌本來の特徵である可き惡擦(わるず)れしない純眞性と、力強い野心がすこやかに伸び漲るであらう。

ところが同人雜誌の現在は、稀なる例外を除いて、吾々の期待を裏切るものが多い。うまいとかまづいとかいふ事よりも、其意氣に於て、人を打つ力の乏しいのが殘念である。よく同人雜誌の同人かおほつぴらに歎くやうに、批評家は默殺し、既成作家は讀んでくれないのは事實であらう。しかしそれは先方の不親切、不熱心を咎める前に、こつちの無氣力を反省しなければならない。いたづらに編輯後記で自讃に類する言葉をつらね、自分の書いたものは隨分い丶ものだと思ふとか、自信があるとか、同人某の作品は文壇を刺戟するだらうとか、日本では今迄になかつたものだとか、次號にはもつとい丶ものが發表されるとか、凡そ實質にそぐはないきまり文句を恥とせず、しかも二號は創刊號より內容外觀共に劣るのが一般で、三號雜誌の通りことばを其まゝ

に沒落するのが多い。よくある例は、一ヶ月休んで二ヶ月合併號を出し頁數の增加をほこるが、あれは斷末魔のうめき聲と同じで、合併號が出たらつぶれると見て間違ひ無い。實に根氣が乏しいのである。

又同人雜誌にこそ當然あるべき純眞性の稀薄と、新鮮感の缺乏も遺憾千萬である。それは當代流行の傾向が、感受性の強い若い人達に影響を與へる結果、その流行の埒外に出る事を極度に警戒し、不知不識（しらずしらず）の間に自分の持味を失ひ、模倣に傾く爲ではないかと思ふ。

いかに多くの社長が太鼓腹でタイピストを誘惑して京濱國道をドライヴし、ホテルに泊つて鼾をかくか、いかに多くのブルジョア夫人が青年と喫茶店でおちあひ、自動車に同乘してふと股をおしつけるか、こゝには世上多く見る膽汁質の重役はあらはれず、多產と授乳に美しさを失つた奥さんは登場する機會を與へられないのである。プロフェッサアも拳鬪選手も、女給もダンサアも、人形芝居の人形の首のやうに模型的である。或はこれは、作者の世間智が淺く、活社會から人を學ばず、他人の小說戲曲の中に人間を知る結果かもしれない。

同人が同人を制肘する事も獨自性を失はせる原因として働く。同人間の批評を氣にし、動かされ、集團の空氣の中に醉はんとする心持が強く、自分の素質をかへりみて、一人踏止まらうとす

る精神が乏しい。今は花形作家としてもてはやされてゐる某氏が、曾て同人雑誌に長篇を連載した。私は非常に愛讀し、他人にも勸めて讀ませ、多くの人が感服したが、完結に至らないで中止になつた。何故かといふと、其の人の特異の作風が同人とあまりにかけはなれてゐて仲間うけが悪く、斷絶の止むなきに至つたのださうだ。ところが、ひとたび此の人が一般に認められ、小説集が世に出ると、その長篇が集中の傑作として極をつけられた。同じやうな實例は随分多く、強情に自分を守る事はかなりむづかしい事らしい。

さういふ風に、私は今の多くの同人雑誌に滿足してゐないのである。私自身、多年「三田文學」といふ同人雑誌に參加してゐるので、他人事では無いのだが、純藝術を培ふ重大なる使命を自覺して、月々雑誌を出すといふ御座なりの態度を振捨て、新人の力作を紹介する事に努力したいと考へてゐる。同人雑誌に於てこそ力作が見出されるといふ喜びが味はゝれるならば、これに越すよろこびは無い。(昭和七年五月三十日)

——「讀賣新聞」昭和七年六月二日・三日

一文學生に答ふ

昭和七年八月五日の「三田新聞」に「三田文學の編輯を學生の手でなせ！」といふ投書が出てゐるが、それについて一言答へて置く。

「三田文學」は明治四十三年の創刊で、大正十三年に廢刊し、同十五年に復活した。どうして中途で一度つぶれたかといふと、最大原因は經營困難であつた。一文學生がいかにも大金のやうにいふ年額千圓內外の補助金では不足なのだ。これは今もつて變らない惱みである。創刊當時は物價が安く知名の文人の原稿も一枚一圓位のものだつたから、年額千圓內外の補助金でも立派にやつて行けたのであるが、時代が變つて、忽ち財政難に陷つた。元來此の雜誌創刊の目的は、塾からも文人を世に出さうといふので、既にある帝國大學の「帝國文學」早稻田大學の「早稻田文學」に對抗しようといふ婆婆ツ氣に發したのである。しかし塾內の原稿を載せてゐたのでは單なる手習

草紙に終つてしまつて文壇に人を送る目的にかなはないから、なるべく文壇との接觸を深くし度いと願つたものらしい。卽ち塾外の森鷗外上田敏兩先生を顧問とし、永井荷風先生を主幹として三田文學會なるものを作り、雜誌の編輯を任せた。當時學生だつた吾々は、學生の原稿がなかなか御採用にならないので、別に自分達の勝手に出來る同人雜誌を作らうと相談した事もあつた。

ところが大正のなかばになると上記の補助金では知名の文人の原稿を集める事が出來なくなり、從つて「三田文學」の文壇に於ける重要性も薄くなり、森先生も上田先生も永井先生も何時の間にか雜誌と緣を絕たれた。爾來今日に至る迄、執筆者の大部分は一文學生の希望通り「敎授、敎師、塾員、塾生」に限られ、ただ少しでも文壇との接觸をはかる意味で、塾外の人の好意による投稿を仰いでゐるに過ぎない。

一文學生は「所謂舊三田派に屬する原稿の賣れない文士連の發表機關になり切つてしまつてゐるのは不都合の限りである」とはげしい言葉でいつてゐるが、世間で謂ふ所の舊三田派とは、大正五六年頃、井汲、三宅、南部、小島、水木の諸氏が一齊に文壇にうつて出た時、それより一時代前の久保田水上等をさしてさう呼んだのであつてその意味では、現在執筆してゐるのは私丈けだと云つてもいゝ。若し又その頃の新三田派の諸氏をもひつくるめて舊三田派に算入するにして

も、その人達はあまり書いてはくれないのである。何故ならば、原稿が外に賣れるからである。現在雜誌に一番多く執筆するのはそんな古い連中ではなく、こゝ數年間の卒業生と現在々校生である。根據の無い漫罵はつゝしんで貰ひ度い。

又「編輯者の個人的偏見から、精神的主幹と云はれる某氏の趣味から雜誌が發行されてゐるやうなのは怪しからぬ」といふが、現編輯擔當者和木清三郎氏は非常な努力を拂ひ、なるべく個人的の好惡を避けて、各方面から原稿を集める事を心がけてゐる。昔の「三田文學」と今日のそれと比べて見れば、はつきりわかる事である。玆に精神的主幹といふのは私をさすものである事疑ないが、この言葉は久保田万太郎氏の好んで用ゐる洒落であつて、他には一人としてこんな呼び方をする者は無い。その私もなるべく自分の趣味を出さないで、出來る丈け各種の傾向のものを載せる事に努めてゐる。但し發禁の心配のあるものは絶對に避けてゐる。一度發禁を喰へば、雜誌は財政的にぺしやんこになるからだ。私は時に自分の辛抱を腑甲斐ないと感じる位、自分の趣味とは緣遠いものを推薦してゐるが、それにも拘はらず一文學生のいふ如き非難は絶えずうけてゐる。何故かといふと、澤山の原稿の全部を採用する事は實際上不可能だからで、取捨選擇は止むを得ない。これは誰がその任にあたつても非難をうけないわけには行くまいと思ふ。

茲で一寸斷つて置き度いのは、雜誌が一時廢刊された時、時の幹事石田新太郎氏から、どうしたら復活出來るか考慮してくれといふ相談をうけたのが私である。私は同人諸氏と度々會合しともどもに先輩知己に賴んで前金購讀者になつて貰ひ寄附金を乞ひ、廣告取をして補助金の不足を補ふ事とし、それでも不足の場合には自分が負擔する腹を定めた。かういふ遣口こそ合理的でないのであるが、さうしなければやつて行けないのが實狀なのである。その昔對立關係にあつた「帝國文學」も「早稻田文學」も夙につぶれてしまつた。つぶれるのがあたりまへで「三田文學」が今日なほ存續してゐるのが奇蹟であると云つた人があるが、いかに雜誌の經營が困難であるかを證するものであらう。

又一文學生は、千餘圓の補助金について「その金は何處から出るのだ」といひ、察するにその意味は、學生の月謝から出るのだといふのであらうが、慶應義塾は學生の月謝丈けでは立ちゆかない。維持會その他の寄附金があつて、はじめてやつて行かれるのだ。

編輯を學生の手にうつす事は、これを唱へる事も試みる事も容易であるが、永續させ效果を擧げて行く事は困難ではないだらうか。實は吾々もどうしたら學生と編輯擔當者とが協力してやつて行けるか、いろ〳〵ためしてみてゐる。

私一個の意見としては雜誌創刊當初の目通的り文壇に人を送るといふ事を主とすれば、現在のやうに雜誌編輯の玄人で文壇の知合の多い人を中心にして置く方がまさり、目的を變更して學生が內輪だけで樂しむ手習草紙とする積りならば編輯を學生の手にうつすのがよいと思ふ。但し後者の場合と雖も原稿選擇に對する不滿は止むまいし經濟難は一層甚だしくなるであらう。

正直のところ私は「三田文學」の御世話をする事には既に疲れてゐる。早晚休息を願出なければなるまいと思つてゐる。然し、ひそかに嬉しく思つてゐるのは、十數年來土を耕し畑を拓く事に努力しながら、常に默殺の憂目を見て來たのが、この頃やうやく陣容も整ひ、「三田文學」を踏臺として、新人相踵いで世に出る盛況を見る事である。雜誌は今日「墮落」してはゐない。やつとこさと頭を持上げて來たところなのだ。みんなが下らなく感情問題に囚はれず、協力して守育てる事につとめ度いものである。（執筆月日不詳）

——「三田新聞」昭和七年九月二十八日

もう一度「三田文學」について

昭和七年八月五日の「三田新聞」に出た一文學生の「三田文學」に關する投書には大分思ひ違ひがあるから、早速「一文學生に答ふ」と題する一文を投じたところ十月七日の本紙に一文學生事岸井隆氏が再び「三田文學」について意見を述べ、私を名ざして、これを默殺する事は承認を意味するのだぞと附記して居られるので、止むを得ず、もう一度答へなければならなくなつた。岸井氏は前回の私の投書を「抗議」と見て居られるが、私は抗議すべき程の問題とは考へてゐない。間違つた事を宣傳されては、多數の善良なる讀者にも誤解させる惧があるので、實狀を述べて說明したのである。

岸井氏が「三田文學」をさかんにし度い爲に意見を述べられるのは眞に有難い。吾々は二十餘年間その事で苦しみ續けて來た。ただ岸井氏のいふ事が、屢々事實に反するのを遺憾に思ふ。岸井

氏は、文壇との接觸をはかることによつて文壇へ作家を送り出すなどゝいふ事は、今の小說家志望の靑年は夢みてゐないといふが、それは事實を無視した論である。理想論をいへば、歌俳諧を樂しむ多くのかくれたる詩人のやうに、文壇なんぞを念頭に置かず、自分の文學をはぐくむ事で滿足出來れば幸ひであるが、多數の作家志望者が當面の問題は、如何にすれば文壇に出られるかといふ事にかゝつてゐる。私は個人として文壇づきあひの乏しい人間で、曾ては三田の人々から、あまりに文壇づきあひをしないのが「三田文學」の振はない所以であると非難されたものである。文壇と接觸をはかるなどゝいふ事に重要性を認めない岸井氏のやうな人のあらはれたのは甚だ心強い次第であるが、さういふ人は極めて少數で、少なくとも現在眞劍になつて作家を志てゐる人々は、いづれも贊意を表さないであらう。

「三田文學」が文壇的に意義のあつたのは久保田万太郎氏を生み出した唯美主義運動の頃だけだといふ岸井氏の說は、決して私の否定しない事である。初期「三田文學」が明治文學史上有意義な活動をし、その後久しい沈滯期にあつた事は誰よりも私が繰返して書いた。しかし、こゝでも深く考へてみなければならない。當時自然主義の運動が下火となり、一般にあきられて來た折柄、森、上田、永井、三先生を中心とする「三田文學」が、その頃としては充分の財政狀態を備へて出

現したのである。反自然派と見られる一流の作家の原稿を買集める事は容易だつた。ところが其後の文壇の狀態は急激に變化し、商賣本位の大雜誌に檜舞臺は移り、多くの文學雜誌は經營困難に陥つて「三田文學」も「帝國文學」「早稻田文學」と前後して姿をかくしたのである。復活後の「三田文學」は全く初期のものとは性質が違ひ、主として未だ名を成さない若い人の爲の舞臺となつてゐるのだ。よき作家の出現は何より待焦れる事であるが、長い忍耐をもつて待たなければならないのである。

岸井氏は文壇は既に崩潰したと見てゐるので「三田文學」が文壇へ作家を送る目的で刊行されてゐるのは無意味であるといふが、文學が世に存在し、活字に組まれて流布され、之を讀み、批評する事の止まない限り、文壇は消滅しない。文壇は崩潰したと云ふヂヤナリストの絶叫は、單に威勢のいゝ言葉の綾に過ぎない。

又岸井氏は「三田文學」を足場として文壇へ出た三田出身の作家が振はず「三田文學」以外の三田關係の作家が有名なのは一考を煩はし度いといふが、どうも腑に落ちない。但し此の問題は一々人の名をあげて數へてみなければならないので、その人達の迷惑を察して差控へる。

岸井氏の所說の中で私が一番氣にしてゐるのは「三田文學」は其の同人の個人的特定關係の人の

原稿ばかりを載せ、塾生ならば日參しなくては駄目だといふ點で、これは全くの邪推である。度々いふ通り、今の「三田文學」の執筆者の大半は最近の三田出身者と學生でその人々と私共編輯委員の者は何等の特殊關係があつたわけでもなく、雜誌へ原稿が出るやうになつてから知り合つたのである。廣く原稿を集めたい爲に、何とかして學生と接觸をはかり度いとは、かねて吾々がいひ合ひ、又屢々會合の機會もつくつた。岸井氏のあげてゐる平松幹夫氏提唱の創作研究會もそのひとつに違ひないが、扨てこれがなか〳〵實效をあげにくい。先輩は夫々仕事を持ち、家を持つてゐる、暇が少ない。學生は夏はゐなくなるし、試驗前には出て來なくなる。折角集まつても同級生は同級生丈のグルウプに固まり勝で、縱の結合はむづかしい。しかし此の事は始終吾々の話題にのぼつてゐるので、岸井氏でも誰でも、實務をやつてくれる人があれば幸ひである。吾々は決して學生の參加を阻むものではなく常にそれを望んでゐる。

若し學生で投稿しようといふ人は編輯者宛に郵送するか、手交すればいゝ。これは久保田水上みんなの踏んだ道である。さうでなければ學校の敎職にある同人西脇、井汲、石井、横山、高橋の諸氏に渡してもいゝ。編輯その他の事務を手傳つてくれる學生、太田、二宮、丸岡、今川の諸君に渡してもいゝ。吾々の方では、何處によき原稿があるかはわからない。持つて居る人の方か

ら歩み寄る位の努力はして貰ひ度い。

茲にひとつ私の感の惡さを告白しなければならないのは、岸井氏が繰返していふ特殊關係の人間が一人ある事にやうやく氣がついた。それは私である。今の「三田文學」は若い者が主として書いてゐるのに、原稿の賣れない舊三田派の作家の發表機關だとしつつこくいはれるので、そんな事はないと答へたのだが、成程舊三田派の私は毎號貴重な紙數を貰つてゐる。正に特殊關係だ。事が自分に關するので甚だ申上にくいが、私と雖も忙しい中で毎號書くのは辛い。もつとおちついて纏まつたものを仕上げたいと思ふのだがこれには譯がある。といふのは、今の「三田文學」があやふく存續してゆく支柱の主たるものは前金購讀者で、その人々の多くは私を援助してくれる意味で、高い雜誌を買つてくれるのだ。お羞しい話で、書いたものを讀んでくれるかどうか知らないが、私がつゞけてゐる限りは買つてやるといふ約束が多いのである。乍然(しかしながら)斯ういふ變態を長くつゞけてゐればゐる程私自身の勉強がおろそかになるので、何とかして「三田文學」のゆるぎなき基礎を定めて暇を貰ひ度いと考へてゐる。もう暫らく御見逃しを願ひ度い。

雜誌の値段の高い事は、吾々の心苦しく思つてゐるところで、殊に和木氏は編輯擔任と同時に値下案を提出されたが、値下をすれば忽ち窮乏の度を增す事がわかつてゐるので、どうしても斷

行出來ない。夢のやうな話だが、誰か特志家があらはれて、基金を寄附してくれる事ばかりを待望んでゐる。

編輯者和木氏が他の雜誌の編輯に力を貸してゐるのを「奇怪」であるといふが、何も奇怪な事はない。問題は、他の雜誌の編輯に携はつた爲に一方がおろそかになつてはいけないので、さういふ事實があれば勿論一方はやめて貰ふべきだが、さうでない限りは決して差支ない。和木氏の努力に對して深く感謝してゐるのは私のみではないであらう。

岸井氏はこの頃の「三田文學」はつまらないといふが、この頃の「三田文學」はよくなつたといふ方が定評らしい。かういふ事は觀方の相違で仕方がないが、少なくとも文壇に於ては認められて來た。默殺されたのは一時代前の事で、最近は然らざる事前述の通りである。これは月々の雜誌新聞が立證してくれてゐる。

「三田文學」の補助金について「その金はどこから出るのだ」と大見榮を切つてゐるので、慶應義塾の財政は月謝ばかりでは立ゆかないといつたところ、更に又月謝云々を繰返して居られるが、先年かういふ實話がある。慶應義塾の財政の苦しさが問題となつた時、或先輩は聲をはげまして、之を救ふには獨立經濟のとれない文學部を廢止するか、然らざれば獨立經濟のたつ丈け高い月謝

をとるのが第一の急務であると云つた。出したゞけの分前にあづからうといふ合理論でゆくと斯くの如きファシストと衝突しなければならない。(昭和七年十月十五日)

——「三田新聞」昭和七年十月廿一日

三宅悠紀子さんの戯曲

三宅悠紀子さんは故三宅豹三氏の令嬢で、野球の大輔君、劇評の三郎君の妹である。詳しい事は知らないが、豹三氏は前には二六新報社、後には歌舞伎座の經營に手腕を振つた、一種凄味のある人物だつたと聞いてゐる。家が近所だつたのと、年齢こそ違へ、大輔、三郎兩君以外の早世した人も知つてゐるが、女の子のある事は知らなかつた。昭和五年の秋「三田文學」に出た戯曲を讀み、編輯者の紹介文によつて、才能豐かな三宅兄弟に戯曲作家をこゝろざす妹のある事をはじめて知つた。しかし其の戯曲には感心せず、寧ろ閉口して、何故編輯者がこんなものを採用したのか、尠なからず不平だつた。聞けば、水木京太氏がいくつか讀んだ作品の中で、稍よしと思ふものを推薦したのださうだ。

その頃恰度同じ雜誌に帝劇專務山本久三郎氏令嬢の戯曲も紹介されたが、この二女流に共通の

ものは何れも舞臺藝術の傳統的定法に心を牽かれ過ぎて、新鮮感の乏しい缺點であつた。親が舊劇本位の劇場經營者である立場から、ちひさい時から舞臺に親しみ、歌舞伎特有の不自然や、役者の仕勝手といふやうなものに何の疑もいだかず、かへつて同情を持ち過ぎる結果、いざ自分が戲曲創作の筆を執る時、生きた社會や人間から暗示を受けるよりさきに、曾て見た舞臺の情景に影響され、不知不識模倣に陷り易い弱味があるのでは無いだらうか。悠紀子さんの戲曲には、古い殼がかなりしつこくこびりついてゐた。

　兄さんの大輔君は捕手一二三壘遊擊手、何處へ持つて行かれても立派にしこなし、好守好打好走の器用な選手だつたが、同時に尖鋭なる野球理論家として並ぶものなき筆力を示し、三郎君は歌舞伎劇の眞面目な研究家で、その正統派的劇評は後世の尊い參考資料ともなるべきもので、いづれもこゝろざす道の第一流に位してゐる。その兄弟の妹だから、並ならぬ才能を示すであらうと期待した人々は、矢張り世上芝居好の娘つ子の代表たるきいちやん、みいちやんの徒に過ぎないのかと落膽したに違ひない。その後の作品も同列以上に出る事なく、正直のところは此の女流作家に多くの期待をかけなかつた。

　ところが、今年の夏頃「三田文學」に出た五幕の戲曲「周圍」は、まとまりの惡さと、會話の拙劣

と、最初からついて廻つてゐる舊劇仕立のあまさを脱却しきれないところはあつたが、その規模の大きさに少しもめげず、多數の人間の性格と境遇と紛糾した關係を、かなり突込んだ解釋で見且表現し、それ迄の悠紀子さんとは段違ひの力量を示した。世評もよかつた。

此の作品が認められた結果、演劇雜誌「劇作」の求めに應じて發表したのが同誌十一月號を飾つた「晩秋」四幕である。氣力の無い小說家が巴里から連れて來た女との日本に於ける家庭生活、甲斐性のない良人とフランス語を敎へてせつせと稼ぐ妻、東と西の習慣訓練觀念氣質の相違の深さが、鬪ふよりもかけ違ふ結果、それは不幸に終るのが當然である。今に傑作を書く書くといつて長年何もしない夢想的な良人と違つて、妻は西洋人一流の合理的家庭生活をモツトオとし、舊敎國流の嚴しさを強ひる爲め女中がゐつかず、臨時手傳ひとして、良人の妹の友達の近代的令孃が介在して來る。富家の娘でありながら働くといふ事にあこがれを持つ、日本近代合理主義婦人のひとつの型に合するしつかり者で、一面奔放な感情を持ちながら、同時にそれを抑壓してあまりある意志と理性の持主である。長い間西洋人との一致し難いいろ〳〵の事に惱まされてゐた小說家は、此の令孃の身邊に出現した事で、久しぶりで日本を沁々と感じ、愛を求める。妻が知つて怒り、良人は家を出て行くといふ芝居だ。その良人が再び妻のところへ歸つて來るか來ないかは

書いてないからわからないが、解決の無い人生に無理に結着をつけて幕を閉ぢる必要は無い。少なくとも作者は、こゝにえらばれた二人の人の悲劇よりも、もつと一般的の東洋人と西洋人との相違、その結合の無理に重點を置いてゐるのだらうから、目出度目出度に終らない事を暗示すれば充分であらう。

この戯曲を讀んで、私は驚き疑つた。三宅悠紀子とはつきり作者の名前は認めたが、今迄の悠紀子さんの作品の匂を何處にも感じない。舊劇仕立のからくりや、あまさや不自然がみんな排除され、人形は人間となり、舞臺の上といふ感じがぬけて、其處にも此處にもある實世間の生きた悲劇に變つた。それは偶然が生んだ筋の上の悲劇ではなく、誰を咎める事も出來ない免れ難い悲劇である。何の誇張も嘘も無く、登場人物ははつきりと個性を示し、時代と境遇と教養との相違を背景として、くつきりと描き分けられてゐる。會話もめつきりうまくなり、無駄がなく、いきがあらはれ、その會話丈で他に說明がなくても、人々の顏かたち迄想像出來るのである。たとへは、私はかういふ夫婦を現實には知らないのだが、どうも知つてゐるやうな氣がして仕方が無い。戯曲の進行に無理が無い。女流作家に特有の感傷癖が無く、弱々しさが無く、強く大らかにどの性格の缺點も見拔き、どの性格にも同情してゐる。したがつて、どの性格も無理な行動をしてゐ

ないし、どの性格も自らかへりみて恥入らず、自分の言つた事爲た事を肯定するに違ひないと思はれる。それ程肉づけが豐かに出來上つてゐる。悠紀子さんの傑作ばかりで無く、近頃最もすぐれた戯曲のひとつである。短時日の間にどうして作者は此處迄來る事が出來たのか、景氣よくいへば奇蹟である。人の勉強努力が斯うまではつきりと成長を示した場合はまことに少ない。吾等鈍根の者は勉強努力を唯一の頼みとし、それによつて自己欺瞞の安心さへいだき勝であるが、三宅悠紀子さんの實例を見ては、自分の天分年齢の割引も忘れて、まだまだ勉強すればどうにかなるぞといふ發奮を得た。

不幸にして「劇作」は多くの人の讀む雜誌で無いから、この戯曲が人に知られずに終るのは殘念だと思ひ、私は逢ふ人毎に一讀を勸めたが、今迄の悠紀子さんの力しか知らない人達は私の言葉を信用しない氣色を見せ、讀んだか讀んだかと催促しても、なかなか滿足な返事に接しなかつた。ところへ最近になつて、久保田万太郎氏から「晩秋」は非常によかつた、築地座の連中も讀んで感心し、忽ち上演の話がきまり、自分が演出を引受けたといふ報告に接した。久保田氏は殘酷な程採點の辛い人である。それが進んで煩はしい演出指揮まで引受るといふのだから「晩秋」の出來榮えは立派に裏書されたわけで、私は私の眼識を誇りたい氣持でいつぱいになつた。作者もさぞか

し嬉しいだらうと想つてゐると、人の噂では餘程前から病臥してゐて、この作品も病牀で執筆したのだと聞いた。

私は作品を知つてゐて作者を知らないのであるが、長い間勉強努力して戯曲をかきつづけ、やうやく雜誌に載るやうになり、自分でも滿足していい作品が出來上り、それが他人にも認められ、はじめて舞臺にのぼるといふのに、作者は今や病重く、自分では見に行く事も出來ないといふのは、まことに人生の悲劇である。私は、せめては多くの人に此の戯曲の上演を見て貰ふのが作者を慰める唯一の道であると考へて、これを書いた。（昭和七年十二月十八日）

（附記）　築地座は十二月二十四日から三日間飛行館で公演する由

――「時事新報」昭和七年十二月二十日・二十一日・二十二日

夜汽車、宿屋、その他の落書

あけて七十二になる母が、大阪の兄の家に行つてみたいといふので、いつも正月は旅行ときめてゐる私が供をして、大晦日の夜東京をたつた。母には、先年家内をなくした弟の六歳になる女の子がくつゝいてゐた。

兄はつとめの關係で、小樽、倫敦、紐育、京都、門司、名古屋と二十餘年間あちらこちらと轉々し、今度は大阪へ轉任してはじめての正月なのである。二男二女の教育の爲め、何處に轉じても家族は東京を離れず、學期休の時だけ任地へ出かけて、一家族の顏が揃ふといふ生活をつゞけてゐる。私共は兄弟姉妹十二人といふ大家族で、それが結婚して子供が生れ、その子供がまた子供を生む時代となつて來たから、一族の總大將である母には五十人近い孫、曾孫(ひいまご)がゐる。出來のいゝのもあれば惡いのもあるであらう。私共が父の命日に集まると、何處其處の子供の出來の惡

いのは僕達の血統だとか、あそこの子供の不出來はうちから行つた女親の罪だとか、勝手な事をいひあふのであるが、さういふ場合いつも評判のいゝのは此の兄の子供達で、四人が四人とも出來がいゝ。年中おやぢが留守で出來るのだから、あれは賢明なる嫂一人の力で、父親の悪影響を蒙らないのがもつけの幸ひなのではないかと私共はいふのである。その嫂も、子供達も、暮からおやぢのところへ押かけてゐる。母にしてみればその賑かなところへ行くのも樂みに違ひ無かつた。

私は夜汽車が好きだ。勤先の同僚などで、役目の上で出張するのが、旅もいゝけれど夜汽車がいやだ、寢臺では眠れないとかこつのを聞くと、不思議に思ふ。私には汽車の寢臺程氣樂に眠れるところは無い。家にゐれば、夜中でも電報が來るか、電話がかゝるか、場合によつては人の訪問をうけないとも限らない不安定の氣持があつて熟睡を妨げるが、いつたん汽車の寢臺に横になつてしまへば、翌朝迄は絶對にうるさい事がない。私は何時も汽車の寢臺で、日頃の疲勞を完全に振捨るやうに思ふのである。但し冬季の汽車の人工溫度はあつがりの私には閉口で、他人が同室でなければ、窓をあけ度い位だ。だから、折角の安樂なる寢所も蒸暑く汗ばむので、私は素裸で寢る事にきめてゐる。一夜の旅ならば寢衣を持參する必要も無い。今度は母といつしよなので、

寢卷の用意はしたけれど、いざとなつては用ゐなかつた。宵に銀座のはち卷岡田で飲んだ酒の醉で身内がぽか〳〵してゐる上に、例の人工溫度が加はるので、裸で寢てさへ暑かつた。

私は上段の寢臺に上つて、あしたは京都で目をさまさうときめた。自慢では無いけれど、私は何時に目をさまさうと心できめれば、大概その通りに起きる事が出來る。時々は失敗もするけれど十中八九迄は二十分と違はない。だから、京都で目をさまし、着物をきて、顏を洗つて、朝飯を喰べて恰度大阪へ着く豫定をたてゝ安心して眠つた。

ところが、まだ夜のあけきらないうちから、下段の母が目をさまし、上段の寢臺を下からこつこつ叩くのである。年寄の氣ぜはしさと、旅馴れない不安心で、早く起きて身仕度をして置かないと降り遲れるとでも考へて居るらしく、もう直き夜があけるよと警告してゐるのである。知らないふりをしてゐると、なほこつこつ叩き、しまひには女の子が命を受けて、「をぢちやん、もうお起きなさいつて」といひながら梯子を上つて來てカアテンの間から顏を出す。をぢさんは素裸だ。たうとう起されてしまひ、かねて樂みにしてゐた車中の熟睡もなかばにして破れてしまつたのである。

大阪では、母は勿論兄の家に泊るのだが、私は勝手氣儘をするつもりで、別の宿をとる事にき

めてゐた。最初は簡單第一主義で堂ビルのホテルに泊るつもりだつたが、東京の先輩友人も、大阪の知人も、ホテルは居心地がよくないからよせといひ、岡田三郎助先生は、朝日新聞社の向河岸とかにある京屋といふのを推稱され、是非そこに泊れと熱心なおすゝめだし、平岡權八郎氏は、多年花月で働いて居た婦人が堂ビルの裏手でやつてゐる若菜といふ家を紹介しようといひ、大阪方の岡田四郎君は宿屋は自分に任せてくれ、南區笠屋町の大野といふのが靜でいゝと云つて來た。するど東京方の面々の中から、南の大野屋とはあんまり月並だ、騷々しくていけないだらう、役者の定宿だからはで過ぎやあしないかといろいろの注意が出た。或人の如きは、先年水谷八重子孃と同宿で、二時間湯殿を占領されて閉口したといふ實際經驗を持出して反對した。「永遠の處女」「われ等の八重ちやん」と同宿甚だ結構、同じ御湯に入るなんて寧ろなまめかしい賜だらうぢやあないかと、少々いやしい口もきいたけれど、結局岡田君にむかつては、役者の泊るうちなら御免かうむると申送つた。

折返して大阪方から、役者の泊るのは大野屋で、こつちの贔負は大野といふ、開業してまだ一年にもならない初心な家だ、間違へては困ると云つて來た。

さうかうしてゐるうちに出立の日も近づいたので、私は大阪の事は大阪方に任せるのがよいと

考へ、岡田先生推稱の京屋と、平岡氏推薦の若菜と、その大野の三軒のうちで、安くて茶代廢止でサアヴイスの惡いのにきめてくれと岡田君に頼んでやつた。

安くて茶代が無いといふ氣安さから、私は最初ホテルをこゝろざしたので、多く置いて甘く見られ、すくなくて罵られる茶代なるものは實に氣持の惡い制度である。これあるが爲に宿へ着く前から心配し、宿をたつた後迄心にかゝるものがある。

サアヴイスの惡いのを條件としたのは、平生簡易な生活をし、人手を借りずに暮してゐるのが、一夜二夜の宿屋で殿樣扱をうけるのは甚だくすぐつたく、又私の性質として、お天氣の挨拶や、型通りの世間話が出來ないので、おかみさん、番頭、女中と入替り立替り出入し、不必要にお茶を呑まされ、無益な會話を強ゐられるのは苦痛だから、こつちから用を頼まない限りはなんにもしてくれない事を希望する意味なのである。

岡田君からは、京屋と若菜の事は知らないが、大野は御註文通り安く、茶代は決して頂かず、サアヴイスは精々惡くさせるから安心しろといふ返事があつた。

梅田の驛に出迎へてくれた兄の自動車で送られて、笠屋町の大野の格子をあけた。朝も九時といふのに未だ寢てゐるらしく、二三度繰返して聲をかけ、そろ〳〵退屈しかけた頃、臺所から寢

ぼけた女の顏が出たが、うさんくさゝうに見てゐるばかりで、返事もしない。成程サアヴイスは惡さうだとたんに感服して、自分は岡田さんを介して宿を乞うた者であるが上つてもいゝかといふと、はつきりした返事もしないで、引込んでしまつた。又暫く待たされて、今度は別の丸髷の女があらはれ、お母さんといつしよに來て、兄さんの家迄送り屆け、それから引返して來るのだから正午近くなるだらうといふ岡田さんの話だつたので、こんなに早く來ようとは思はなかつたといふのである。私は愈々安心して二階の一室へ通つた。

それから元日、二日、三日、四日、五日の朝迄世話になつたが、その間泊客は私一人で、充分休息する事が出來た。この宿のおかみさんとは、元日の夜岡田君が來て酒になつた時、たつた一度顏を合せたばかりだ。最初に臺所から寢ぼけた顏を出したをばさんと、その手傳のおちよぼが一人ゐたが、これも一度顏を見たばかりだ。私の室のサアヴイスは、上記の丸髷と、おかみさんの妹だといふ束髮婦人が受持つた。この束髮は大阪の女學校を出て、三菱商事會社の社員と結婚し、良人は巴里駐在を命ぜられて數年間別居し、やうやく歸朝したと思ふと間もなく死別したといふ經歴で、これが美人だといふと、いさゝか古い型の小說を連想する人もあるだらうが、決して讀者を煩はす容姿では無かつたから、御安心願ひ度い。たゞいかにも頭腦明晰で、素早くこつ

ちの我儘をのみこんでくれるのには深く感謝した。

この頭のいゝ婦人のおかげであらう、私の希望通り、うるさいサアヴイスは一切廢止で、朝は臺所のをばさん以外は私よりも遲く起き、お茶だ、お菓子だ、炭だと、無用の働きを見せたがらず、必要以上の口もきかず、恰も我家に在るおもひをさせてくれた。その爲に、持つて行つた雜誌はまたゝくひまに讀了した。精々惡くしろと頼んで置いたが、サアヴイスの點はどうだいと岡田君にきかされた時、私はノオ・サアヴイスといふ奴で至極結構だと答へた。

歸京後岡田君へ宛て、よき宿を世話してくれた禮を述べ、徹底的ノオ・サアヴイスは偏に束髪婦人の賜であらうといつてやり、岡田君はそれを大野へ傳へたところ、頭腦明晰なる婦人はをさまらず、ノオ・サアヴイス、ノオ・サアヴイスといふけれど、自分の方では夜中廊下を歩くにも、安眠を妨げまいとして、どの位心をつかつたかしれないのに、それは御存じないのだらうと云つたさうで、サアヴイスの極致はノオ・サアヴイスに一致するのかとはじめて悟を開いたのである。

宿料が安くて、茶代心附一切申受けず、サアヴイス滿點とあつては、何もいけない事はないやうだが、こゝにひとつ私を失望させた事がある。それは、此の宿では純粹の大阪ことばのきかれないといふ事だ。おかみさん姉妹はガギグゲゴに強い訛のある九州辯に東京大阪が無遠慮に入り

まじり、色氣も氣品もない言葉だし、丸髷は東京下町の育ちで大阪ことばの片影も無い。旅にあつてその土地特有のことばの面白さに接しる事の出來ないのは、日本料理に洋酒を出され、西洋料理に日本酒を出されるやうな味氣なさだ。もつとも、今度大阪で、あゝ大阪らしい言ひあらはし方だなと思ひ、そのことばから大阪をはつきりと感じたのは僅かにみたびだつた。

ひとつは元日の晝間、場所は大野で、大阪のさる大盡が毎年この日、顔馴染の藝者に約束をつけ、あちらこちらのお茶屋の義理をするといふ豪勢なしきたりで、大野もその御贔負にあづかり、大勢の藝者がつめかけて、だんなの御入來を待つてゐた。何しろ一日に幾軒となく廻るのださうだから、大凡の時間はきめてあつても實際は何時來るのかわからない。待つてゐる方が次第に數を增し、階下のはゞかりだけでは間に合はなくなつたと見え、二階の私の室の近くのにも殺到して來た。戸の外で順番を待つてゐるのが待ち切れず、あけすけな下がかつた事を云つて催促すると、中の者も亦負けない騷々しさで應酬する、そのかしましさに伴つて柔味のあるわいせつな問答は、とても筆には寫せないが、大阪のいろまちをはつきりと感じたのである。

次は二日の夕方、住吉の兄の家を出て、電車通をいつぱい機嫌で步いてゐると後から來た流しの圓タクが、大將々々と呼びかけた。腹ごなしに少し步くつもりだつたので、知らん顔をしてゐ

ると、すうつと側を通りながら、窓から首を出した助手の奴が、大将々々のあとに靑大将とつけ加へ、同時に逃るやうにスピイドを出した。待て——私はそのからかひづらに誘はれて呼止めた。いつたん引込んだ助手の首が、疑ひ深さうに又出たが、五六間先に行つて車を止めた。逃出さないやうに手招ぎしながら近寄つて、笠屋町迄いくらで行くかときくと、五十錢やつて貰ひますといふ。三十錢だ——私は返事をきかずに、いきなり取手を捻つて中へ入つた。三十錢で行く事はおまへんぜ、正月の事ですさかい——運轉手はたつた今靑大将と叫んだ助手の輕率に參つてゐる表情でなげいたが、あきらめて、行きまほといふと直ぐにハンドルを廻した。廻しながら、こやついらん事をいひよると、助手の横面へ吐きつけるやうに云つた。私はこの場面の大阪らしさにすつかり滿足した。

　その次は四日の夜、友人島崎眞平氏が來て、何處かで御馳走してやらうといふ。私はかねて噂にきく平野町の丸治といふうまいものやに連れて行つてくれと望んだ。丸治には銀座のはち巻岡田の甥、長さんといふ若いのが見習に入つてゐるので、様子も見度いと思つたのだ。其處で飲んで、長さんの大人になつたのに驚き、この子はちひさい時からの馴染だが、どうにかものになりさうかと親方にきいてみた。もひとつ元氣が足りまへんなあ——と親方は言下に答へた。何とい

ふ含みのある、しかも適切ないひあらはしだらう。これが東京だと、から意氣地なしでしやうがありませんやと來るところだ。あゝ大阪だ大阪だと沁々感じたのである。（昭和八年二月廿六日）

――「時事新報」昭和八年三月十日・十一日・十三日・十四日

初老會前説

若いくせに年寄じみたことをいふ人間をみると片腹痛く思ふが、年寄のくせに若がつてゐるのを見ても、屢々氣障（きざ）に感じるのである。そのくせ私自身、このところ十年ばかり、どつちつかずで、年下の友達と騒ぐ時は御老體扱ひされて忌々しがり、年上の人にまじる時は小僧扱ひされて内心甚だ平かでない。しかしそれも日一日と本格の年寄の方へ近づきつゝある事は否定出來ないので、やがて誰からも小僧扱ひされなくなる日の寂しさも、時にふと沁々考へられるのである。

最初に私が年寄扱ひされる忌々しさを味はつたのは「三田文學」のおかげなので、故人澤木四方吉氏を主幹とする第二期「三田文學」の同人井汲南部小島三宅水木の諸氏が轡を並べて文壇へ打つて出た時、世間はこの連中を新三田派と呼び、永井荷風先生を主幹とした第一期「三田文學」以來の久保田水上等を舊三田派と呼んだ。既に世間がさういふものだから、所謂新三田派の連中もい

ゝ氣になつて、たまたま一座する吾々に對しては、さあ御年寄はそちらへなどゝ上席をすゝめながらけじめをくはせようといふ下心と見受られた。その實年齡の差は大したものではなく、殊に久保田さんとその連中の中の年長者とは二歳か三歳しか違は無いのだつた。今に見ろ、人を年寄扱ひしやあがつて、直き追ひついてしまふから――と理窟にならない事を云つてゐたが、何時の間にか一人二人と四十を越え、たうとう今年で新三田派も殘りなく初老となつた。同じ四十代になつてみると、いづれも頭髮は薄くなり、白髮もちらちらまじり、或者は持病に惱み、或者は下腹や頸の廻りに無用な脂肪の溜つた年寄型となり切つてゐ、前途の夢は乏しくなり、後から後から頭をもちあげて來る最新三田派からは完全に年寄扱ひされる身の上となつたので、舊も新も共々に、いづれか秋にあはではつべきの嘆を味ふ事になつた。かねて、第一着に四十代となり、不當に年寄扱ひをうけた私は、みんなが追ひついて來るのを待つて、盛宴を張らうと宣言してゐたので、今かうして四十づらがづらりと並んだのを見ると、嘆きのうちにも痛快の感を禁じ得ない。何となくみんながおないどしになつたやうな氣がするのである。卽ち近日日をえらんで、初老會を催さうと思ふのである。

こどもの頃、四十代の人間などは立派なおぢいさんだと思つてゐたが、自分でなつてみると、

一向未熟不鍛錬で、甚だとりとめのないのには恥入る外ない。鈍根は鈍根で爲方がないが、そのかはり何時迄も地道に勉強して目に物見せてやるぞ、いつたい日本人は早老でいけない、ほんとに人生の味がわかり、藝術批判の眼に曇りのなくなるのはこれからなのだと、ひそかに負惜を肚の底にいだいてゐたが、そんなたよりにならない覺悟に縋りついてゐるうちに、いつの間にか自分に老の來てゐる事を自覺して吃驚した。他人は知らず、私の場合、衰へは先づ肉體に感じられた。自分で自分の體が重たくなつて來た。歩く時、膝頭ががくんがくんと無駄に屈折する。咄嗟の場合に身をかはす事が下手になる。たとへば電車の釣革の必要を痛感する。車が急に止つたり、急に動き出したりする時、體の方が追隨しない。酒の量も半分に減つた。食慾が乏しくなつた。愈々不精になつた。あゝ衰へたものだなと齒がゆく思へば思ふ程、まんべんなく年をとつた事がわかつて來た。年をとつたのは、肉體ばかりで無い事がわかつて來た。何よりも知識慾が乏しくなつた。新規のものに飛びついて行く氣持が薄くなつた。流行に反感も起らず、それに遲れる事も平氣になつた。大言壯語、つけやきば、鵜の眞似をする鴉のをかしさが沁々わかつて來た。

　年齡とともに食物の嗜好が著しく變り、西洋料理は夙に嫌になり、支那料理さへも嬉しくなくなり、まぐろの刺身に箸が向かず、混合酒の技巧が鼻について來たが、それは我身の衰へを證明

するものとして悲しむべき事ではあらうけれど、同時に昔輕蔑してゐた鯛の味が魚では一番だといふ事がわかり、漬物では澤庵が最もすぐれたる味を持つ事がわかつて來た。文學に於ても同じ事で、あぶらが表一面に浮いてぎらぎらしたのや、メチール・アルコールのどぎつさや、ジンタ・バンドの賑かさをおもはせ、氣取や、ごまかしや、おさきばしりの見え透くのはいやになり、本格的な骨法のものゝ値打がわかつて來たやうだ。

おもへば古い事であるが、「三田文學」が創刊された頃、吾々は二十歳を僅かに越した學生であつた。當時この雜誌の主幹永井荷風先生さへ、三十を多くは出ない年配だつたのに、吾々の眼に映る先生は、既に浮世の浪を乘切つた際の人としか思はれなかつた位だから、同誌の顧問森鷗外先生の如きは、動かし難き老人に見えた。吾等過剩なる感傷に惑溺し、天然自然の風物のうつりかはりにさへ淚ぐむ程の文學靑年には、先生の嚴正なる客觀主義の創作の價値はわからなかつた。しかもわからない事を恥とせず、情緒既に枯渴せる老人の文學には、人を感動せしむる力は無いと放言して憚らなかつた。それが何時の間にか、その當時の鷗外先生の年齡と大して違は無いところ迄來てしまつた。鷗外先生の長年の文學生活に、話相手のすくなかつた寂しさも、この頃になつて沁々わかるのである。その點に於ては、吾々凡庸の徒の方が、かへつてしあはせだともい

へるのである。

愚なるものゝ無反省から、自分の力をかへりみず、他人の仕事を正確に評價し得ないのほほんて、仲間同志互に空漠たる夢を語つて滿悦したあさましさも、今は寧ろなつかしい位だ。吾々の仲間にも、當時の大家の作品を認めない事を以てほこりとする者もあつた。日本には一人として感心すべき作家はゐないから、外國文學の外は一切讀まないと豪語する者もあつた。今に見ろ、世界を驚かす大作を完成するからと、深刻な表情をするのを常とする者もあれば、仲間の中でいち早く文壇に認められる者があると、それを小成に安んずるものとして輕蔑する者もあつた。自分は片々たる作品は決して發表しない、一生に一作でいゝから古今獨步の傑作を御目にかけようと、繰返して誓ふものもあつた。だが、その大言壯語した人達はどうなつたか。威勢よく既成作家を罵倒したものが、遂に自分の作品をもつてしては先人をみかへす事も出來ず、いつの間にか姿を消し、日本には一人として作家らしい作家はゐないと豪語したものが、通俗讀物の作者として僅かにその名を止めたり、一作を出せば天下爲に驚かんと見榮を切つた者が、遂に一作をも發表しないで鄕里へ引込んで地主の旦那になりすましたり、夢ははかなく消えてしまつた。私の如きも、文學制作二十年間に、後世に殘るべき作品などはひとつも無く、いたづらに年をとつてしまつた。

私は、日頃若い作家と談笑しながら、未だ自分の力を知らず、氣輕に、口がしこく他を嘲り笑ふ事の出來る相手を羨しく思ふ。實際、私の知る限りに於て、容易に他人の仕事を罵り笑ふのは年とつた既成作家では無く、まだ廣く名前の知られない若人である。同人雜誌の六號記事を見ると、自己欺瞞も、強がりも、てれかくしも、あるのであらうが、大言壯語をたのしむ若者の心の奥底をのぞく興味で、おもはず微笑する事が多い。

勿論やみくもに先人の仕事に感服してゐるばかりでは、停滯があつて進步が無いともいへるし、感受性の鋭い若い者は、新しい刺戟を求める事に忙しく、古典をかへりみる暇が無いのも自然であらうが、はしりの面白さと、成熟したものゝ味とは、色のついた飯と、白い飯の相違のやうに、一方は片方のやうに深い味を持たず、あき易く、滋味に乏しい。それは一時の氣分の轉換には役立つが、所謂我家の米の飯とはなりにくいのである。

これも年齡のせゐかもしれないが、私は文學の各流派の夫々の主義主張の、どれにもこれにも或程度の面白さを感じる事が出來るが、そのひとつが絕對のものであつて、他のすべては泥土であるとは考へられないのである。どういふ主義、どういふ表現形式をとつても成立つのが文學である。自然派にあらざれば文學にあらずといはれた時代もあつた。プロレタリアの文學以外は外

道であると絶叫する聲も高かつた。しかし、さういふ一であつて他でないといふ議論のかまびすしさを裏切つて、あらゆる形式内容を持つ文學が、春さきの雜草のやうに土を破つて成長して來る。廣大無邊の文學は、何ものをも拒否しないのである。

たまたま文壇の先達の集る席上、醉へるが如く文學を談ずる人を見る事があるが、文學上の主義をあげつらふ聲を耳にする事は殆んどない。一般に作家は論爭を得意としないといふ點もあるが、多年身を以て經驗した年配の人々には、おのれを築きあげたものが主義であつたとは考へられないのではないだらうか。或時代に、或主義の名の下に一からげにされた作家達が、數年ならずして互に共通のものを殆んど持合せてゐなかつた事を發見する例は珍しくない。ひとしく自然派の名をもつて呼ばれた田山花袋、國木田獨步、島崎藤村、德田秋聲、正宗白鳥、岩野泡鳴の諸氏の個性は、ひとつの旗じるしの下に集めて見て不自然を感じさせはしないだらうか。里見弴氏を有島武郎、武者小路實篤氏等と共に人道主義の名を以て呼ぶ勇氣のある人が、今日もなほゐるだらうか。久保田万太郎氏さへ、中學時代には御多分にもれず、演壇に立つて自然主義論を演說した事があるさうだが、數年後文壇に顏を出すと、忽ち享樂派、唯美派のレッテルを張られ、やがて遊蕩文學撲滅論の槍玉にもあげられた。凡そこれらの名を以て呼ばるゝ特徵が久保田氏の作

品をいろどる最も力強いものであらうか。誰しも躊躇なく否と答へるであらう。

年齢は人の性質を柔らげる事もあるが、時には人を頑固にし、融通をきかなくする。多年努力して築き上げた自分の立場から、一歩も外に出たがらなくする。個性の相違がはつきりして來て、合唱が下手になり、人眞似が出來なくなる。年配の作家が、おのれを語る事には熱情を失はないが、主義を論ずる事に興味を持たなくなるのも無理は無い。

私は自分自身これらの年寄の動脈硬化症を痛切に感じて來た。しかし同時に自分自身と他人の相違をはつきり知る事も出來るやうになつた。はなやかな夢想はけしとんだが、四十代には四十代の人生があり、活動があり、努力があり、文學があると思つてゐる。感覺は鈍り、花火のやうな感激はなくなつたが、物を見る眼は廣く深く、社會人事に關して綜合的に考へる力は加つた。人生を短篇小說的見方で見ず、長篇小說的に見る能力は、次第に惠まれて來るやうである。恐らく往年の新三田派の諸氏も、初老の感慨のうらに、なほ自分々々の力いつぱいの仕事をしようといふ計畫を持つてゐるであらう。年をとるに從つて不精になり、ゆきゝの間遠になつた人達と久々で顏を合せ、めいめい勝手にてんでんの心境を語る初老會を、私は樂しく待つてゐるのである。

（昭和八年五月六日）　　――「三田文學」昭和八年六月號

「師・友・書籍」の序

大ざつぱな言方だが、吾々の父母の時代迄は、みだりに他を評し、おのれを語ることをいやしみさげすむ風が強かつた。それが何時の間にか、男も女も、老も若きも、地位職業の別無く、口を以て筆を以て、他を評しおのれを語るに暇なきが如き時代相を現出するに至つた。よりて來るところの社會的原因の存することはいふ迄も無いが、狹く文筆の方面に限り、直接の誘引を求むれば、隨筆の流行を數へることが出來る。彼の自然主義の運動が現實暴露を提唱し、平面描寫を維持し、やがて崩れて日本獨得の心境小說の發達を見るに及んで、作家は各自日常身邊の雜事を綴ることになづみ、その傾向の赴くところ、隨筆の流行を招來し、この文學の形式は、最も自由に手輕に他を評しおのれを語るに適するため、專門文筆の士にあらざる人にも筆を執ることを容易ならしめた。私の如きも隨筆と呼ばるゝ文學の形式に倣つて、他を評しおのれを語ることやが

て二十年に垂として未だに倦まず、あつめて本と成したるものも既に數冊に及んだ。

然るに小泉信三君は、專門學術上の論文發表には不斷の努力を惜まないが、專門以外の事になると、みだりに他を評しおのれを語ることを爲さず、悔を後日にのこさゞらんことを期するものゝやうである。古より、深き淵は騷がず淺き瀨に波は立つといふ。小泉君はうまれつき言葉すくなく、身邊の事を語り、友人知己の噂を賣ることを好まない。他人のこともいはないかはりに、自分のことをいはれるのも好まない。他人か他人の下らない噂をするのを耳にすることさへいさぎよしとしないやうだ。玆に斯う書くだけでも恐らくは眉をひそめるであらう。それ程隨筆流のひとゝなりで無いのである。

隨筆集「師・友・書籍」は、師を敬ふこと深く、友に盡すこと厚く、書を愛すること人にすぐれたる著者のえらびたる題名としてまことにふさはしいものであるが、このひとゝなり隨筆流にあらざる人の隨筆集とは如何なるものか。言泉によれば、隨筆とは何くれとなく筆のまに〳〵記しつけたる文書だといふが、當今流行のこの文學の形式は、もつと廣い意味を與へられ、或は評論に近きものもあり、或は小說に類するものもある。この集も、何くれとなく筆のまに〳〵書きしるすといふ趣のものではなく、もう少し研究的で、批評と主張を含むものであらう。それでも著

者自（みづから）にしてみれば、袴を脱ぎ、胡床をかいた姿を見せようとしたものに違ひ無い。その意味で、みだりに他を評しおのれを語らない小泉君のひとゝなりを、かへつてよくあらはしたものとして興味深くおもふのである。（昭和八年五月十九日）

――「師・友・書籍」昭和八年六月二十日

春窓院梅譽妙音大姉

女の年をとつたのは、若い時に無理をして、やさしがつたり、なまめかしがつたり、しとやかぐつたりした反動で、慾張と意地悪の表象のやうな面がまへになり勝のものであるが、春窓院さまは、六十と七十のまんなかどころでおなくなりになるまで、木の間がくれの初花のやうに、ほのかな色氣をたもたれ、御うまれも江戸ではあるし、長く東京下町の御内儀として世に處されたので、おみなりも、身のこなしも、言葉づかひも、粋ですつきりしたものであつた。私がはじめて御目にかゝつたのは昭和五年の春で、私のつとめさきの秀才が、春窓院さまの御縁つゞきの美しいお嬢さんとめうとの契を結ぶ事になつたのがきつかけである。御子息の白水郎さんとは隨分長いつきあひだが、私の生れつきの不精が氣輕にひとの家を訪問する事をしないので、つひぞ御目にかゝる機會が無かつたのである。

私は春窓院さまの美しさにひきつけられた。細い目には始終柔かいさゞ波を湛へ、形のいゝ顎を少しばかり上に向け、極端にちひさい口もとには、寧ろ小憎らしい色氣があつた。それに大變御話が上手で、それからそれと盡きないのであつた。これには泉鏡花先生も悉く感服し、どうもあの左樣でぎざんすといふとこなんかたまらなくいゝよと云はれるので、そんな事をいひますか、いやあしないでせうと反問すると、いゝえいひます、横寺町(そのむかし尾崎紅葉先生牛込のその町に住みたまへり)のお年寄もいひました、ごとぎの間の音でね――先生は、寺木ドクトルを度々煩はす齒で、齒ぎしりをするやうな形を見せた。私も依怙地になつて御本人にきいてみたところ、春窓院さまはたまらなくをかしいといふ風で、誰がそんな事をいふものですかとお笑ひになつた。だが、泉先生も旋毛(つむじ)まがりだから、そんな事を本人にきいたつて、はい申しますといふものかと承服しないに違ひ無いから、私はいまだに向ふは向ふ、こつちはこつちときめて、春窓院さまはぎざんすとはおつしやらなかつたと信じてゐる。

春窓院さまの四方山(よもやま)の御話のうちに、よほどいぜん芝の豐岡町に住んでゐた事があるとうかゞつた。私はその隣の松坂町に五歳の春から二十年間住んでゐたので、凡四十年前のその近所の景色が、對座してゐる春窓院さまと私との間の數尺の空間に、忽ちあざやかに浮び上つた。春窓院

さまの御住居のあつたところは、水の谷の原といふ名で、私の記憶にありありと殘つてゐる。その原は、水の谷といふ大名の屋敷跡だと聞いてゐるが、林があり、竹藪があり、大きな池があつて、近所の子供が凧をあげ、球を投げ、蜻蛉をつり、螽斯(ばつた)を追ひかけ、蛙をいぢめる好適の空地だつた。その池はもつともつと大きく深かつたのだが次第に埋もれ、その原はもつともつと廣かつたのが、段々家が建ち並んで狹ばめられたのだと聞いたが、しまひには水たまりもなく、雜草のかげさへ見えない町になつてしまつた。

先年久保田万太郎氏の句に、水の谷の池うめられつ空に凧といふのがあつて、水の谷といへば芝區三田豐岡町とばかり心得てゐた私は、淺草生れの傘雨宗匠が、どうして知つてゐるのか不思議に思つた。然るに久保田氏の水の谷は吉原の近くださうで、水の谷家の下屋敷の跡だといふ事を白水郎夫人の御話で承知した。

意外にも水の谷家は春窓院さまの舊藩主で、春窓院さまの生家中野家の本家は、家老格の家柄だつた。春窓院さまも若い時、舊主の屋敷に御奉公をされたさうで、さてこそ芝區三田豐岡町に住まはれた筈なのである。

茲に面白いといつては少しをかしいが、水の谷家の事については、春窓院さまの實子の白水郎

さんは案外何も知らず、夫人の方が姑の昔語を審さに聞き覚えて居られるのである。よめしうとめの仲むつましい御家庭のさまもおもひやられて床しい。たとへば上記の、濁りの無いあざやかな景色の中に昔なつかしいやるせなさを籠めた傘雨宗匠の秀句についても、白水郎さんは料理屋の庭の跡だらうといふやうな解釋を下した。或は水の谷家沒落後その下屋敷が料理屋の手に渡つた事もあるかもしれないが、句意はあく迄も大名屋敷の跡のあれ果てた空地に殘る池、それも埋められたあたりの空にあがる凧に、詩人の感傷を托したものと見なければ面白くない。あれはおばあちゃんの殿様のお下屋敷ですよと、その時夫人が私に教へてくれたのである。夫人のお話によると、水の谷家は山陰地方に領地を持つてゐたが、關東關西お手ぎれの際西方に味方したかどで徳川に憎まれ、元來大名の一番ちひさいものだつたのが、旗本格に下げられて、旗本としては一番大きいものとして殘つたといふのである。もとより春窓院さまの直話であらうが、口から耳へ傳へられたもので、はつきりしたよりどころは無いのである。さういふ事があつたものかどうか、取調べる興味は私には無い。それよりも、大名のびりが、旗本の頭に格下げになつたといふ昔噺の面白さで十分である。

その水の谷家は、後年不敏の殿様がつゞいてあらはれ、明治年間に完全に沒落してしまつた。

別段お家にまつはる怪談は無いさうだけれども、代々殘虐の行爲に驅られる殿樣が出て、最後には庭のくさむらに蛇、蟇を探し求めて鐵砲をうち、池に遊ぶつがひの鴛鴦をうち、松上に舞ふ鶴をうち、それが次第に嵩じては、鵞鳥の羽に油をそゝぎ火をつけて、火炎の立上るのを池に放つて滿足するといふ變質の殿樣もあらはれた。あれではお家のつぶれるのもあたりまへでござんせうと、春窓院さまは物語られたのである。

私は芝居や草双紙で養はれた知識で、忽ち惡逆無道の殿樣や、佞奸邪智の家來や、忠義の士や、美しい腰元のあらはれるグロテスクな御殿を空想し、陰謀、切諫、拷問、御手打、切腹、刄傷などの場面をいろどる金襖や、血紅の色彩の中に、高島田に紫矢絣のきもの、帶をたてやのじに結んだ妙齡の春窓院さまをおもひ描いて氣が氣でなかつた。殿樣か、若殿樣か、惡ざむらひか、無體の戀慕をしかけ、狼藉に及ばんとしたものは無かつたか。きゝての私が勝手な想像をしてゐる事には氣づかれず、話手の春窓院さまはいつに變らぬにこやかな表情で、昔をなつかしむもののやうに話をつゞけられた。

御家沒落の後、若殿樣の一人は下級船員となり、もう一人は春窓院さまのお里の本家にあたるその昔の家老の家柄で、當時新派の俳優として聞えた中野信近をたよつて弟子となり、しだしに

使はれて舞臺を踏んだ事もあるさうだが、いづれも香ばしい事は無く、御家再興の望みは絕えたのである。この春窓院さまの御話は、近年物語風の小說に完璧のうでをほしいまゝにしてゐる谷崎潤一郎氏でも煩はしたら、何か根深い因緣をからませて、豊かな想像の赴くまゝに、怪奇凄艶なるロマンスを構成するであらう。

春窓院さまは、まだまだ面白い御話を、いくらでも持つて居らつしやつたが、私はいたつてきゝ下手で、話のいとぐちをみつけても、それを何處々々迄も手繰つてゆく才覺が無いので、後では惜い事をしたと悔みながら、ついきゝもらしてしまふのであつた。そのくせ春窓院さまの御話の面白さと、お年寄には珍しい色氣のある御やうすに心を引かれ、白水郎さんがゐるとゐないとに頓着なく、家内や伜をつれて伺ふ事を樂みにした。

去年の夏は、春窓院さまの養老保險が目出度滿期になつたので、その金子でお庭にはなれを建増され、座敷開きに御招きをうけた。私はいつもの事で、遠慮もなくしたゝか頂戴したが、この日は珍しく春窓院さまも二つ三つは盃を重ね、ほんのりと色に出る位だつた。いつ迄も美しさの消えない、上品なお年寄の少しは心浮立つさま、すぐれてなまめかしく拝したのであるが、その新築のはなれが、やがて臨終の床にならうとは、まことにはかない事であつた。

殊に遺憾なのは、年の始の忙しさに、御病氣とは知りながら、つい例の不精が出て、家内に度々叱られながら御見舞にも伺はなかつたところ、如月十二日風寒き日に、最後までお若い時の美しさの偲ばれるのが、紅梅の散るやうに永き眠につかれた事である。おもへば長からぬ御縁ではあつたが、お年をめしても美しさとなまめかしさを失はなかつた婦人として、春窓院さまは私の記憶にいつ迄も生きてゐらつしやるであらう。(昭和八年六月二十六日)

——「文藝春秋」昭和八年八月號

年輪の差

わが國には、大人の讀む小說が無い——とは、本邦近代小說勃興期のそもそものはじめから、一部の讀者一部の批評家からのべつに聞かされた文句である。今はなつかしい思ひ出となつたが、私は小學時代から小說を耽讀し、汚損を嫌つて他人には一指をも觸れさせたがらなかつた兄の本箱から、硯友社全盛時代の小說本をぬき出して、盗み見るのが何よりの樂みだつた。兄は中學時代に早くも友達と廻覽雜誌を出したり、高濱虛子をかついで俳句の雜誌を印刷配布したりしてゐた。その兄が、よくある畫家や藝人の番附にならつて、小說家番附といふものをこしらへたのを見た事がある。たしか鷗外逍遙が年寄で、紅葉露伴が東西の横綱だか大關だつたと記憶する。もとより明治二十年代は此の二大作家がはなばなしく活躍した時代だから、劇界に於ける團菊、その後の角界に於ける梅常陸と同じく、文學といへば紅露と、必ず對立させて指を折るのが一般の

常識で、兄のこしらへた番附は決して不當なものでは無かつたのだが、文壇の事は何も知らず、たゞ無闇に小說を讀んでゐた私には甚だ意外な事だつた。「色懺悔」でも「拈華微笑」でも「心の闇」でも「多情多恨」でも、紅葉の書くものはよくわかり、面白く、その作品の悲喜哀樂に心を奪はれて感激したが、露伴の作品はむづかしく「風流佛」も「對髑髏」も「一口劍」も少しも面白くなかつた。幼い頭では小說といふ文學の一形式に屬するものとは考へられなかつた。しかし私は兄の才智を崇拜してゐたので、自分などには全くわからない露伴の小說を讀み、これを高く評價してゐるのを大變偉く思つたものである。

その後も長く、たゞ一つの例外の外は露伴の小說はわからなかつた。例外は「少年世界」の臨時增刊號に載つた「休暇傳」といふこどもの爲に書いたもので、これとても並の少年世界物に比べてはむづかしいものだつた。「五重の塔」は名文だと聞囓り、一生懸命に讀返して見たが、どこが名文なのかわからなかつた。當時何かの雜誌に出た勝海舟の談話筆記といふものに、日本現代の小說の無內容を罵り、僅かに露伴の思想と學識を認めるに過ぎ無いと云ふものがあつた。中學の下級生だつた私の文學熱は愈々はげしく、小說作家を神の如くうやまつてゐたから、この德川幕府のさむらひとして、意氣地を捨てゝ利口に江戸城を敵手へ引渡した老人が、當時一流の大家を十

把ひとからげに漫罵してゐるのに憤慨し、やつあたりに露伴に對する反感を強めた。後にしておもへば、露伴には想があるといふのは其の頃の讀者批評家の常套語だつたには違ひ無いが、漢學思想で鍛へられた海舟その他當時の大人にとつて、未だ小說は婦女子の慰みに過ぎずと考へられ、世態人情の描寫は卑俗と思はれ勝だつた折柄、博學多識佛典に參し、東洋思想を深く藏し、好んで超世間的理想を說き、屢々悟道の人を描く露伴は、容易に尊敬をかち得たのであらう。乍然吾々年少の輩には、露伴の理想小說は到底理解出來ず、私の如きは此の作者を眞に明治の大作家であると認めたのは、近年の事に屬するのである。

この挿話は何を語るか。恐らく勝海舟や、その同時代の文壇外の大人には、小說を味はふ力は無かつたであらう。又努めて理解しようともしなかつたであらう。それでも、學業を放擲して、小說を讀む事に夢中になつてゐた中學生の私よりは、少なくともその文章のうまさだけでもわかつたに違ひ無い。よき藝術は、鑑賞する側の人間が大人である事を要求し、之を味はふ爲には鍛錬を必要とするのである。

紅葉露伴が文壇の花形として一世の人氣と尊敬をあつめた時代が過ぎ、紅葉は逝き、露伴は默し、我國の文學史上最初の大がかりな目的意識を有する自然派の運動が成功ををさめ、その派の

推薦した作家を第一線に送出したが、その選手の中でも、秋聲白鳥泡鳴といふやうな、今日になつても明かに自然派の作家と見られる人々は、今日になつては果してこれが自然派かと疑ひ度くなる獨步藤村花袋の如き詩人らしさを多分に有する作家に比して、若もの——殊に女のわかいの、並に素人には甚しく人氣が無かつた。その結果、これらの立派な作品を殘した自然派の作家は、時の拍子で自然派の中に數へられた作家よりも、その派の運動に貢獻するところ少なかつたといつても差支ないやうな皮肉な現實を曝露したのである。何故かといへば、當時の文學青年は、理論としては時代の波に乘つた自然派を承認しながら、自分達のうちに潛在する若さは、陰慘にして希望のない自然派の人生觀に共鳴せず、その派の教義にそむく夢多き感傷主義に自然と心を寄せてゐたからだ。

おもへば、幼少の折の私にとつて小波山人の「日本お伽噺」「世界お伽噺」程面白いものは無かつた。「少年世界」で愛讀した幾多の讀物は、今でも暗誦してゐるものさへある。今日私共は所謂少女小說の馬鹿々々しさに愛想をつかしてゐるが、濱の眞砂の如くあとからあとから出て來る妙齡の女の涙をしぼつてしぼり盡きない。さうして見れば、既に世間の需要に應じて「幼年世界」があり、「少年世界」があり、「少女世界」があり、「中學世界」があり、「女學世界」があり、「令女界」が

あり、「主婦之友」があるのだから、もうひとつ年輪をはつきりさせて「大學世界」をさかんならしめる必要がありはしないか。曾て、明治の時代が若く、潑剌たる成長期にあつた時、大學生はたしかに大人であつた。學者として通用した。自分達でも、立派な大人だと自負してゐた。しかし明治以後の日本の文化も古び、社會も複雑となり、大學のねうちは下つた。大學そのものに變りはなくても、物品と貨幣の關係のやうに、相對的に値下りをくつた。今日では、大學生はそのかみの中學生にだも及ばぬ子供扱ひをうけ、自分達も子供のつもりで甘つたれてゐる。その階級の讀物として「大學世界」は存在の必要があり、繁昌の理由がある。

さういふ分野がはつきり認められず、たつたひとつの繩張の中で、年輪の差の著しいものが、全くお互に同情も理解もなく、てんでんばらばらにくひ違つた事をいひ合つてゐるのは、雙方ともに無益であり、迷惑である。たとへば、古典は大人の世界のもので、若いものゝ飛込んで行きたからない境界の中にある。新知識の追及に一生懸命で、それ丈で人間の一生の盡きてしまふ忙しい時代に、古典のかへりみられないのは當然であり、東洋固有の文化を勇敢に振捨て、西洋文明の吸收に急廻轉したものが、自國の古典を役立たせる機會の極めて乏しいのも當然である。しかし西洋文明移植の事業も一應は完成し、明治大正の文學も既に近代古典としての格附はきまつ

た。それは血となり肉となるべきものであるにも拘らず、若い人は、これを繙く事さへ億劫がる程興味を感じない。改造社の一圓本刊行は非常に有益な企業で、私は天才的出版者山本實彦氏の功績を表彰すべきものと思ふが、しかも此の一圓本さへ、若き文學の徒には案外讀まれなかつたといふ事である。年輪の差が超え難い溝を深くしてゐるからではないだらうか。

繰返していふが、明治の時代は我國の近代文明が未だ若く、頭の上の邪魔者を追拂つた若者が、新しいスタアトを切つて、歐米文化の後を追かける事に夢中だつたが、維新日本も古くなつた。小說の作家も二十代の人々が代表してゐた日淸戰爭時代とは違つて、五十代六十代の人がづらりと並ぶ事になつた。大人の讀む小說出でよといふ要求は、社會に古びのついて來た今日以後に於て、比較的容易に滿たされるのではないだらうか。果してさうとすれば、まことに慶賀すべき事だが、同時に若い作家にとつては、愈々自分達の舞臺の狹さを痛歎する事になるのであらう。文學修行の苦しさは、時代と共に深刻の度を加へるばかりである。

明治初期の小說は、作家も若かつたが、描かれた作品も、皮膚の滑かな、色白の、おしやれの若者を想はせる薄手のものが多かつたが、大正昭和と年を經て、頭髮は薄くなり、肌の色艶は濁つて來たかもしれないが、骨は太く、下腹に脂肪のたまつた逞ましい姿となつて來た。曾ての小

説は、枠張の舞臺の中で、美男美女の所作事ばかりを見せようとする傾向が強く、何をしてその日を送り、いかなる生活をし、どんな社會の一員なのか全く無關心で、飲まず喰はず、たゞ戀をするやうなのが多かつた。いぜん、私どもが辭書を引き引き外國の小説を讀みはじめた頃、一番驚いたのは、異人の手にかゝつた小説は素晴らしく人間臭く、どんな人間の背後にも廣い社會が嚴として控へてゐる事であつた。そこに大人の小説を發見した喜びがあつた。當時の日本の小説が「大學世界」向ならば、これこそは大人の讀む小説だつたのである。

勿論年輪の差は一方的に働くものではない。年寄は年寄で、自分の昔經て來た經驗の範圍内に於てのみ若者のする事に同情するが、自分の經驗しなかつた新しい事にぶつかると、之を理解する力は乏しい。即ち年輪の差の内輪と外輪が觸れ合ふ事は容易でないのである。彼の階級闘爭の説に從へば、資本家と勞働者は遂に闘ひやまない對立であるが、年輪の差の一致融合せざる事も之に等しいのではないだらうか。

試みに同人雑誌の中で、最も「大學世界」らしいものゝ六號雑記を讀んでごらんなさい。何等の論理も辿らずに既成作家を漫罵嘲笑揶揄するものを随所に發見するであらう。あれは一般に、空(から)威張(ゐばり)、負惜みに過ぎないと思はれてゐるが、實はさうではなく、年輪の差をいかんとも爲方なく、

大人の世界には入り切れない、自然の叫び、正直な聲ではないだらうか。（昭和八年七月五日）

――「三田文學」昭和八年八月號

親馬鹿の記

われ鍋にとぢぶたが出來て十年目に生れた優藏も、七月三十日で滿二歳になつた。體重三貫二百十匁。健康で、腕白で、水に濡れ、土にまみれ、かなぶんぶんや蟻を踏躙つて遊んでゐる。年とつてから出來た子供は、生れつきませてゐる惧れがあるが、優藏もおない年位の子供に比べると、おしやべりで、おませのやうだ。きやうだいがなく、大人とばかり遊んでゐるので、つい智惠がつき過ぎるのではないかと思ふ。物心のついた時から、おやぢの本を讀む姿を見つけてゐる爲か「ゴコン」——御本——は早くから好きだつた。まる一年になるかならない頃から、新聞や雜誌を兩手で持ち、仔細らしく小首を傾けながら、タドタドタドと讀んだ。この頃は、自分の知つてゐる限りの言葉を組合せて、大きな聲で朗讀する。「鴉はお山へ行きました」といふのが最も得意だが、時には鴉のかはりに太郎さんがお山へ行つたり、次郎さんがお山へ行つたりする。果して

これに類する讀本があるのかどうか、未だ明かでない。繪本の中に自分の知つてゐる鳥獸虫魚を見出す時の得意と、自分の知らないものに出あつた時の驚とは、瞳の色にもはつきりとうかゞはれる。或時は父、其處に父親を發見し、母親を發見し、自分を發見する。白い割烹着をきて食卓の用意をしてゐるのは母親で、背廣姿で電車を追かけるサラリイ・マンは父親で、赤い水着で蟹に手を挾まれてゐるのは自分にたとへ、背嚢しよつて學校へ急ぐ子供には未來の自分を空想してゐる。大家さんの御子さん達の學校へ通ふのが、今は何よりの羨しさだが、やがておやぢと同じやうな學校嫌になるのではないかと、行末甚だ心許ない。

　優藏のもうひとつの樂みは音樂である。生れて間もなく、銀座の大勝堂で買つて來たオルゴルは、一番氣に入つたおもちやである。蘇格蘭（スコツトランド）の民謠や、佛蘭西の俗曲の五つ六つ入つてゐるのを枕もとに置き、螺旋をまくと、赤坊はその音を捉へようとするらしく、耳と眼で音樂の後を追かける樣子だつた。

　ラヂオが家にあると、つい聽入つて時間を空しくするから、私は長く拒んでゐたが、女中達の慰安の爲に、女中部屋に引く事を許した。これも優藏の喜ぶものに違ひないと思つたが、どういふものかあまり興味を持たず、それとは違つて蓄音機には夢中になつた。目の前でくるくる廻る

しかけが面白いのか、子供向の曲譜が氣に入つたのか、或は子供の耳は正直で、ラヂオよりもこの方の音色を美しいと感じるのか、兎に角「コンキ」――蓄音機――は、朝も晝も晩も、一日も缺かさず鳴りつゞける。白狀すると、この蓄音機は借物だ。先頃優藏が病氣をした時、愚妻の妹が御見舞に貸してくれたので、爾來「雀の學校の先生」や「かつぽかつぽかつぽ兵隊さんが通る」や「出て來い出て來い池の鯉」は、彼が砂いぢりの時でも、飯を喰ふ時でも、身邊に据ゑて置いて、聞かなければ承知しないものとなつた。つまり、樂隊入りで暮らしてゐるのだ。何しろ使用回數が多く、おまけに自分で手を出して機械操縦を樂むものだから、レコオドは罅が入つたり、缺けたり、粉微塵になつたりするので、早く返してしまへといふのだが、氣に入り方が一通でないので、愚妻も取上げ兼ると見え、いまだにその儘になつてゐる。私も先年蓄音機が欲しく、弟の世話でその友達のお古を讓受けたが、折柄愚妻が病氣になり、ものいりが多く、レコオドを買ふどころではなくなつて、結局鳴らない蓄音機を暫時（しばらく）身邊に眺めたばかりで、又人手に渡してしまつたが、それから今日迄凡十一年、今度こそは好きなレコオド數百枚と共に買つて見せるぞと思ひながら、矢張こゝろざしを果さないうちに、思ひもかけない子供が生れて來た。子供がゐてはいゝ機械を買つても滅茶々々にされるから、やめにしようと思つてゐると、かほど迄「コンキ遊び」

に夢中なので、滿二歳の誕生日に優藏專用のを買つてやらうと云つてゐたが、愚妻はその妹のおともをして、雙方子供連で逗子へ行くといひ出したので、彼是そろばんを彈いて、うやむやにしてしまつた。どうして斯う迄蓄音機に緣遠いのかと嘆息したが、さりとて子供向のレコオド專門で、朝から晩まで「夕燒小燒で日が暮れて」や「たんとんたんとんたんとんたんとん」ばかり聞かされるのでは、無い方が遙かにましだから、二十幾年來の夢である蓄音機の事は、二度と口に出すまいと思つてゐる。

既にオルゴルと蓄音機に一心に耳を傾ける位だから、母親や女中達がうたつて聞かせる唱歌のひとくさりを覺え、舌の廻らないうちからよくうたつた。一番最初は、雨の日に母親が傘を持つて學校へ迎ひに來る、迎ひに來られた子供は得々として家路へ急ぐと、傘の無い子が柳の根元で泣いてゐるといつた風な歌詞の唱歌で、その繰返しが何の意味か「ちつぷちつぷちやつぷちやつぷらんらんらん」といふやつだ。それを僅に「ちつぷちつぷ」とだけ覺えて、之を口にする時は必ず得意と羞しさとの入りまじつた表情をして見せた。それを大人も面白がつて、いつしよになつてちつぷちつぷちやつぷちやつぷなどゝいふものだから、子供は益々いゝ氣になり、何か失敗したり、いたづらをたしなめられると、「ちつぷちつぷ」とそらとぼけてはぐらかしてしまふのであ

つた。

メートル法の實施は、最近の國粹主義、ファシズムの流行と共に、又々議論百出し、さきにはこれに反對するものは固陋のそしりを受け、今度は之に贊するものが國賊の如く罵られ、目下行惱みのありさまで、今更メートルで難澁する不便に心配してゐた吾々に一息つかせてくれたが、「百十七字略」同じ大和魂で、私は我子にパヽと呼ばれる事をいさぎよしとせず、幸に愚妻も頑固おやぢに育てられたので、マヽと呼ばれるくすぐつたさは知つてゐる。いつたい私共幼少の頃、東京の一般家庭では父親をおとつつあん、母親をおつかさんと呼ぶのが普通だつたが、文部省の方針か、田舍出の教員が無闇に上品ぶつてきめたのか、今ではおとつつあんおつかさんなどゝいふと、小學校で笑ひものにされるさうで、隨分前からおとうさまおかあさまに變つた。優藏は口がきけるやうになると、父親を「タツタアチヤン」と聞える呼び方をし、母親を「ヂヤアチヤン」と呼んだ。東京の或一部でお母さんといふところをあちやんといひ、ちひさい子供に對してちやあちやんと呼ぶが、それに倣つたわけではなく、他の者が母親をお母さまとか、お母ちやんとかいふのを耳にして「ヂヤアチヤン」と轉訛したものらしい。今では父親はお父ちやまになつたが、母親の方はお母ちやまと呼ばれる事もあり、相變らずの「ヂヤアチヤン」の事もある。私としては昔なつか

しさに、おとつつあんおつかさんと呼ばせて見たかつたが、それは望んでも無理だつた。何故かといへば、周圍の誰一人そんな古風な呼び方はしないからだ。

佛蘭西人はHを發音しないが、日本人でも彼地で生れると鼻を「アナ」といひ星を「オシ」といふさうである。優藏もどうしたものか、つい先頃迄鼻も花も「アナ」であつた。マミムメモの發音もむづかしいものらしく、まだが「バダ」みんなが「ビンナ」、もうひとつが「ボウトッ」だつた。

その廻らぬ舌でお話をするのも得意である。まだあんよは出來ても上手でない頃だつたと思ふか、二階の縁側で遊んでゐる時、象の形をしたおもちやを庭に投捨てた事がある。忽ち下にゐた犬がくはへて逃げたので、母親があわてゝかけて行つて取戻して來たのを、一篇の物語に仕組んだ。

ジヤウ　バアン　バイヤ　アッチ　ヂヤアチヤン　ノオノオノオ

「ジヤウ」はもとより象で「バアン」は自分が投げた勢を形容し「バイヤ」はセント・バアナアド種の雌犬マリヤの事で「アッチ」はあちら「ヂヤアチヤン」は上述の通り母親で、その母親が「ノオノオノオ」いけないいけないと犬を叱つたといふのである。うつかり投げた象の玩具が、忽ち手の屆かないところへ飛んで行き、犬にさらはれた出來事は、深い感銘を殘したと見え、この話はし

ばらくの間繰返して人に聞かせた。これが彼の經驗にもとづく第一の創作であつた。今日此頃は言葉數が多くなつたから、自分の見聞を語る事は樂になり、時には人にきいた桃太郎の話を飜案して、おぢいさんが柴刈のかはりにはゞかりへ行くやうな筋にもなるのである。

言葉の創作も子供にとつての大仕事である。それについて私が一番面白く思つたのは、誰かの呉れた花火の中に、しゆうしゆう火花の散つた後で、蛇のやうな形に灰の固まるのがあつた。これは子供を嬉しがらせたが、彼は花火といふものをはじめて見たので、その名を知らない。數日後にこれをねだる時「蛇出るの物頂戴な」といふ表現を考案して用ゐた。それに成功したので、當分の間「バイヤ喰べるの物」――犬のごはん――だの「蠅叩くの物」――蠅たゝき――などゝいふのがつゞけさまに出て來た。しかし斯ういふ自分の工夫ででつちあげた言葉は、周圍の者が一人も使はないので、忽ちをかしいと思つてやめてしまふ。

拙宅は市内に似もやらず、附近に樹木の多い屋敷がある爲か、一年の中五ヶ月は蚊帳を釣る位で、虫の飛來するものが頗る多い。それに馴れたのか、生れつきか、まだあんよも出來ない頃から、金ぶんぶんを握りつぶしたり、黄金虫をもみくちやにしたが、手足の自由がきいて來ると、目に觸れる虫はみんな踏躙つてしまふ。この間「をかちな虫」がゐるといつてつまんで來たのが、

百足の死骸の頭と尻尾に大きな蟻のくらひついてぶら下つてゐるやつだつた。御本尊の百足は動かないが、蟻が懸命に引ずるので、生きてゐるものと思つたらしい。私は芋虫でも毛虫でも手づかみだが、愚妻はいたつて弱虫で、それらの虫を見ると悲鳴をあげて震へあがる方だから、息子のやり口にはほとほと閉口してゐる。殊に、夏になつて金魚の季節となり、縁日ものゝ丈夫なのを水鉢に入れてあてがつたところ、うつかりすると手づかみにして握りつぶす。そんな事をしてはいけないとたしなめ、可哀さうだからおよしといはれても「可哀さうない」と云つてきかない。私は恐くも氣味惡くもないが、いたいけな虫を殺す事は好まない。どんな虫でも、よくよく見ると、實に可愛らしく美しく出來てゐる。人の喜ぶ蝶や玉虫は申すまでもないが、人のいやがる蜘蛛でも蚰蜒でも蜥蜴でもとりどりの美と面白さを惠まれてゐて、見れば見る程味が深い。人間のやうに大ざつぱなグロテスクなものではなく、精巧を極めた造物で、まことにいつくしむべきものに思はれる。そのいつくしむべきものゝ命を奪ふのは全く可哀さうに違ひないし、兇暴性をつのらせる心配もあるであらうが、さてこの浮世に生れて、はげしい人間鬪爭の舞臺へ登場するものが、虫も殺さないで生きて行かれるかどうか、かよわいものを憐みいつくしむ心も勿論ほしいが、あまりに纖弱な神經を養ひ培ふのは、行末の爲にどうであらうか。私は倅の殺生を奬勵はし

ないが、強ゐて押とゞめもしず、默つて見てゐようと思ふのである。その昔私も常習的の金魚殺しだつた。どういふわけで殺し度なるのかわからないが、追廻し追廻してとつつかまへ、息の根をとめたのは數知れずだ。おやぢ似だといはれる倅に、こんな事迄遺傳するのかと思ふと、自分の持つてゐるいやな根性が、やがて優藏にもはつきりあらはれて來るのではないかと、流石の親馬鹿も心が寒くなる。

さういへば、既にその一端はかくせない。先づ第一に強情で、これには母親が一番難澁してゐる。例へば夜中に目が覺めると、きまつて「瓶バイバイ」をほしがる。「バイバイ」はばいばいの訛で、母親の乳が出なくなつてから、代用のクリイムが卽ち「瓶バイバイ」である。「あゝチヤアチヤン、瓶バイバイ」と一人目ざめた優藏は、知らずに寢てゐる親共を呼び起す。今こしらへて來て上るから待つてゐらつしやいと、母親が臺所へ行かうとすると「待てないよう」とじぶくる。待てますと重ねていふと、「待てまちえん」と向ふも繰返す。優藏はお利口だから待てますと母親も意地になつて來る。「優藏お利口ない」いゝえ、お利口です、「お利口ないよう」わいわい泣きながら、十分でも二十分でも雙方讓らず爭つてゐる。しつこの時もきまつてそつくりかへつて反抗する。「まだ無いよう」といふのが斷りの言葉である。いゝえ、出ます、「まだ無いよう」ありま

すよ、「無い無い無い」手網の中の蛇のやうに全身であばれるのを抱上げておまるにかゝると、あく迄も「まだ無いよう」を叫びながら、勢よくしやあしやあやつてゐる。そしてけろりとして「おしまひちやんちやん」と宣告する。いやだといひ出したらあく迄もいやで通さうとする片意地に、母親は屢々てこずらされ、どうして斯う強情なんでせうと嘆息する。それがおやぢ似なんだとさと、いひながら、親馬鹿は肚の中で、あく迄も所信を貫かんとする精神もこゝから生れて來るのたぞと、内々頼母しく思つてゐるのだ。

子供の聯想といふものは意外に鋭い。優藏はたつた一度母親につれられて鎌倉に行つたのと、父親の旅の歸りを二度程出迎へた丈であるが、或時海軍省の赤煉瓦の建物の前を自動車で通ると、「東京驛々々々」と叫び出した。それを東京驛と間違へたのか、或は東京驛に似てゐるといふのか、どつちたかわからないか、必ずしも間違とは斷じられない。或晩、優藏の夕方の散歩に、泉先生御夫婦を誘ひ出し、町内を呑氣に歩いてゐると、突然「キリン、キリン」といつて上の方をゆびさした。或家の塀の外に、百日紅（さるすべり）の滑かな幹が、にゆうつとつき出てゐるのから麒麟を聯想したのである。この場合は確かに麒麟と間違へたのではなく、それに似てゐると感じたのであらう。もうひとつ例をあげると、魚屋から貰つた鰤をばけつに入れてやつたところ、一見して「オネズ」と

叫んだ。あれの顔つきといふものは、全く鼠そつくりではないか。

優藏は勿論おんもが好きだ。自動車が通る。自轉車が通る。オート・バイが通る。馬に乘つて兵隊さんが通る。交番のをぢさんが抱つこしてくれる。子供がかけ出す。物賣が來る。驢馬に車を曳かせ、喇叭を吹いてパン屋が來る。それよりも何よりもチンドン屋は面白い。だつこして、おんぶしておんもに出たがつたが、あんよが上手になつてからは、靴をはいたり、結ひつけ下駄で出かける。頭が大きく、肩や胴廻りがふと過る爲か、同い年の子供に比して、實はあんよは上手とはいひにくい。よたよたかけて行つたかと思ふと轉んでしまふ。足馴らしと、腹ごなしの目的で、私は優藏をつれて毎夕町内を一廻りする事にきめた。「チヤンポ、チヤンポ」と喜んで出るには出るが、途中できつと「アツコ」――だつこ――になる。どうも上體が重た過るやうた。

この散歩には、泉先生の御宅の前を通り、二階の萬年床で新聞や雜誌を讀んでゐる先生を呼びおろしたり、お風呂最中の奥さんを誘ひ出したりする。先生は子供を面白がらせる爲に、鼻から烟草の煙を出して見せて下さる。「汽車々々」と喜ぶので、先生の汽車はさかんに煙を吐く。あゝ苦しい。こいつはなかなか樂ぢやあないと、ひといき入れようとすると、子供の方では「もつと、もつと」とあとねだりだ。それぢやあ、もう一本と、先生は奥さんの敷島を貰つて、又鼻孔から

煙を吹く。この一代の文豪が、往來のまん中で、かゝる藝當をしてゐるのは、まことに御氣の毒な、もつたいない風景である。散歩に疲れて父親の腕に抱きあげられ、すこし眠くなつて家路へ歸る頃、首ががくんとなつて上を向くと、高い高い大空に、滿月に遠い「こはれたお月さま」を發見するのである。

斯う書くと、いかにも子供は父親になついてゐるやうだが、實はなかなかおやぢの側には寄つかない。女中が何か氣に入らない事をすると「ダイドコ、ダイドコ」と叫び、臺所へ引込んでゐろといふのと同じく、父親が叱つたり、いましめたりすると「お父ちやま、勉強」といつてしりぞける。餘計な世話を燒かないで、机に向つてゐろといふ意味である。さうかと思ふと、何か新しい遊び事を見せたいやうな場合には、二階にくすぶつてゐるおやぢにむかつて「お父ちやまおりて來い」と叫ぶ。おやぢは〆切の迫つた原稿をおつぽり出して飛んで行くが、間もなくあきられてしまつて「お父ちやま勉強々々」をくらつて、再び二階へ追ひあげられる。

これはつい此間、愚妻がその妹の御供を仰せつかつて逗子へ貸家を見に出かけた日の事だ。妹の方には小學校と幼稚園へ通ふ男女の子供があり、その體の爲に夏場を海岸で過さうといふので、愚妻も優藏をつれて同居させて貰ふといふのだつた。私が机に向つてゐる隣に晝寢の優藏を寢か

しつけ、愚妻は足音を忍んで出て行つた。間もなく目を覺まし、いつもなら必ず母親を呼ぶ筈なのに、ぽつかり目を開いたまゝ起上らない。女中が何かおめざを持つて來ても「いけない」と云つて受附けない。大好物の冷した番茶も「いけない」と云つて押戻す。何をしても「いけない」の一點ばりで、おそろしく不機嫌だ。女中はおやぢの邪魔と見て、抱いて階下に下り、やがて庭に出て砂遊びや水遊びがはじまつたやうだつたが、暫してのぞいて見ると、元氣なく女中に抱かれてゐる。あやしいぞと思つたので、私も下へおりてゆき、額に手をあてゝ見ると熱がある。檢溫器ではかると三十七度少しだつたが、やがて高熱となる豫感があつた。これはいけないと思つて二階へつれて行き、床の上に置くと、ぐつたり横になつて動かない。そのうちに吐瀉し、熱は三十九度七分にのぼつた。早速甲乙兩醫に電話をかけたが、いづれも留守だ。全身火のやうにあつくなつて「お母ちやまは」と訊き出した。女中が手を出しても承知しない。お母ちやまは御用があつて遠くへ行き、お留守だと云つてきかせると、素直にあきらめて、それつきり母親の事は何もいはなくなつたが、そのかはりに私にぴつたり抱きついて離れなくなつた。二度目の吐瀉があり、大事に至らんとするものゝやうに想はれるので、おやぢはすつかりあわてゝしまつた。そのおやぢの懷に手を差入れ、乳をさぐりながら不安心な顏をしてゐるので、抱いて歩いたり、添寢をした

り、いつ迄も歸つて來ない愚妻を愉んだり、なかなかやつて來ない醫者を怨んだり、手のつけやうもなくへこたれてしまつた。やうやく甲醫が來て診察し、呼吸音が切迫してゐるけれど平生丈夫だから大した事はあるまい、暑氣あたりと見受るから、腹の中を洗つてしまはうと、浣腸し、蓖麻子油をのませて歸つたが、それもちつともいやがらず、ぴつたりと父親に噛りついて離れない。ふたんはちつともやつて來ないのだから、私にとつては我兒の體温を、斯うまで直接に肌に感じたのははじめてだ。けだものゝ情愛のやうな、いふにいはれぬものがあつた。嗚呼男親といふものは、女親が感じる程の親子の情を、ふだんは知らずにゐるのだなと、その時沁々思つたのである。子供は結局母親のものだと、嫉妬に近い感情も胸を打つた。きいきが直つたら優藏の好きな物をあげませうと、氣力をつけてやると、「なあに」と眼をみはつた。つひぞ父親の口から聞いた事の無い言葉だつた。何でも、何がほしいといふと、「ジヤウ」と答へた。象のおもちやがいゝといふのだ。

夜になつて乙醫も來、やがて極樂蜻蛉の愚妻も歸つて來た。子供は手當がきいたのか、熱も下り、元氣も稍囘復し、口も少しはきくやうになつてゐたが、母親の姿を見ると忽ち父親の手を離れて、しがみついた。なんだ、今迄あんなに賴りにしてゐたくせに、もう御用はないのか、私は

憤懣に堪へず、こつちへ來いと手を出すと、子供はそつけなく「お父ちやま勉強々々」と、あらぬ方をゆびさすのであつた。

翌日はけろりと直つたが、約束は約束だから象のおもちやを買つてやつてくれと、愚妻にことわけを話してゐるのをきいて、優藏は忽ち元氣百倍し「行きまちよう、ミチユコシ」――三越――と、母親の顔をのぞき込んだ。

こいつ馬鹿ではないぞと父親馬鹿がいふと、母親馬鹿はたゞさへ目尻の下つた目を皺の中にくしやくしやにして、滿足さうにうなづくのであつた。(昭和八年八月四日)

――「三田文學」昭和八年九月號

「二筋道」散策

「瀬戸君の書いたものが、はじめて本になつたお祝の會をするから出て下さい。」
と久保田さんが、いつもかういふ場合に見せる勢込んだ調子でいつた。どうしても引張出すぞといふ心構が、言葉に壓力を加へてゐる。
「何の本。」
「二筋道。」
「はじめて本が出るのかなあ。」
「全くはじめて。」
意外に思ふのを尤もだといふやうに、久保田さんは受けてくれた。
「出ませう。」

私は躊躇しずに應じた。この古くからの芝居の作者、澤山の脚本を書き、兎角不振勝だつた新派に度々當りをとらせたうできゝが、今日迄脚本集を持つてゐないといふのは嘘のやうな氣がする。讀んだ覺えは勿論無いが、曾て何處かで瀨戸君の脚本集なるものを見た事があるやうな疑さへ抱いた。今は知る人も少ないだらうが、この人は少年の頃、閣太郎の名で、鬼太郎贋阿彌流の劇評を書き、まだ文學雜誌として相當の格式を失はなかつた「文藝倶樂部」を賑かにした經歷を持つ。それは私共が何か書きはじめるよりも前の事で、しかも年齡は向ふの方が餘程若いのだから、恐らく十代にして早くも大人の口をきいた稀なるわせに違ひ無い。當時芝居の廊下などで、あれが閣太郎だと教へられ、なあんだ、あんな小僧つ子かと思つた事を忘れない。發育不良兒みたやうな青白いのが、強度の近眼の爲か顏に陰影が深く、泣いてるやうな笑つてるやうな印象を與へつゝ、袴を引擦つて歩き廻つてゐたものだ。その後瀨戸君と口をきくやうになつたのは、尾張町にカフエ・ライオンなるものが出來た當初で、物珍しさも手傳ひ、銀座へ出れば必ず立寄る事にきめてゐたが、小山内先生か吉井勇氏を介して其處で知合つたのだと記憶する。爾來二十有餘年、閣太郎は本名の英一となり、洒落と皮肉をなひまぜにした短文劇評家は、義理人情と涙を經とし緯とする通狂言の作者となつたが、何時も逢ふのは酒席で、しらふのつきあひは無いのであ

る。

「随分古い瀨戶君だが、今迄本が出てゐないのかなあ。」

私はあく迄も腑に落ちないで、幾度も首をひねつた。久保田さんの話では、今度出る本も、本人がいやがるのを勸めて納得させたので、春陽堂の日本小說文庫と稱する安物の叢書の一冊だといふのであつた。

「世話人は新派の連中なんだが、こつちからは吉井勇、里見弴、あなたと私、それに泉先生のところへ行つて賴んで見ようと思ふが、どうでせう、出てくれるかしら。」

久保田さんは、ひとつの仕事を片づけて、もうひとつ仕事を持つてゐるといふやうなせきこんだもの丶いひ方をした。

「さあ、むづかしさうだなあ、何分世話人が世話人だから。」

いや、私は御免かうむりませう——とはつきり斷られる事は豫想しながら、わざわざ久保田さんが行かないでも、同町内の私が諾否を確めようと引受けた。日は何日、場所は濱町の何家、會費はいくらときかされ、その晩泉先生の御宅の格子先から申入れると、意外にも、

「瀨戶君は好きだから、出かけませう。」

といふ返事を貰つた。珍らしい事だから、私は得意になつて久保田さんへ報告した。
ところが當日になつてみると、おなかの具合が悪いから失禮するといふ御斷に接した。先生のお腹は薄手だから、いたみやすいのはふだんの事だが、殊に藝者の侍る席で役者と一座する時と、雷の鳴る日がいけないやうである。雷は犬、蠅、さしみ、氷と共に恐いので致方ないが、片方の方は別々に逢ふのなら別段こはくもおそろしくも無いのだから、まづ一種の食合せといつたやうなものであらう。
なんだい、出るといつたぢやあないか——私は少々中腹だつたが、泣く兒と地頭と同じで、お腹が痛くては爲方が無いから、一人で會場へかけつけた。
玄關には花柳伊志井瀨戸日出夫といつた面々が控へ、行屆いた世話人ぶりを見せてゐたが、奥へ通つてみると、正客の瀨戸君の外には井上正夫がゐる丈で、定刻を少し廻つてゐるのに、甚だ心もとない景色だつた。元々時間の觀念の持合せのない連中とは承知してゐたが、それにしてもひどい。三十分たち一時間たつても、やうやく半分位しか集まらない。集まらないでも構はないからはじめませうといふので、御膳が出たが、床の間をしよつた瀨戸君は、兩隣もその隣もその又隣も空席で、宴會の餘興にまかり出た落語家のやうな恰好だ。それでも酒がはじまると、稍か

たちはついて來たが、凡そ薄情な會で、御膳が出て盃を手にしたからは、もう義理が濟んだといふやうに、さつさと歸つて行く人が一人二人で無い。ぽつぽつやつて來る一方には、遠慮なく姿を消してしまふのだから、いつ迄たつても座敷いつぱいに人が揃ふといふわけには行かない。就中怪しからないのは久保田さんで、人を誘つて置きながら、七時になり八時になつても姿を見せず、何處へ電話をかけても行衞不明で、御膳に出るべきものはみんな出てしまひ、既に座敷もあらけた頃、最後の着到として名告をあげた。

この日の會は至極内輪の集まりで、その後間もなく東京劇場で公式の祝賀會が催された。今度は泉先生のお腹も痛まず、わざわざ私の勤務先へ車を廻して下さつた。折柄この劇場では、泉先生の「義血俠血」を脚色した「瀧の白糸」をやつてゐて、昔源之助がやり河合がやり喜多村のやつた水藝の太夫を花柳が初役で大當をとつてゐた。瀧の白糸の名にちなむで、おもてにはつくり物の斷崖に本水を落してゐたが、その瀧壺とも見える所に、誰かを待合せるのか、女が一人本を讀んでゐた。夜ならばこのつくり物も涼しく見えるのだらうが、眞晝間の日輪の下で、これは不思議な景色だつた。こゝは客席に冷房裝置のしてあるのが自慢だが、費用の關係で上の方には及ばないから、會場にあてられた五階は頗る暑い。

いつたい出版記念の會といふものは、何時頃から流行しはじめたのかはつきり記憶しないが、大概は文壇の仲間同志の寄集りで、競ふやうに澤山の卓上演説があり、夫々の機智も諧謔も、又かと思ふばかりで、主客ともにうんざりして御開きになるならはしで、そもそものはじめには潑剌たる空氣も感じられたが、近頃のやうにのべつまくなしでは、刺戟も興味もなくなつてしまつた。ところが此の「二筋道」の會は、何分二十有餘年間文筆の業に携はりながら、雜誌新聞には緣の薄い爲、文壇づきあひは乏しい作者の事だから、集まる人も文壇人は少なく、この種の會合には比較的にすれてゐないのが多いので、何時もの出版記念會とは趣を異にするものがあつた。殊に「二筋道」は芳町に舞臺をとり、張と意氣地を楯にして藝者の爲に氣を吐く事で終始してゐるのだから、その土地の人達が、何か御手傳をといつた樣子で、一流の顏を揃へてゐるのは無理も無いが、これがおきまりの出版記念會風景を根底から打破つた。

さういふ來會者に取圍まれ、瀨戸君は老齡且歩行不自由の父半眠氏と並んで、よき息子ぶりを見せ、非常に嬉しさうだつた。兎角かういふ會合の主賓といふものは、固くなり過ぎたり、神妙がつたり、さうかと思ふと逆手に出て、こんな事では喜ばないぞといふ態度をとつたりするものだが、當日の主賓はいかにも邪氣なく、祝はれる身のよろこびをつゝみ切れない有樣で、極めて

明朗なるものであつた。ひとつにはお父さんが本人よりも喜んでゐるので、それを又息子が嬉しく思ふといふ二重の目出度さもあつたであらう。何にしても、皮肉に拘はらない美事な態度だつた。

例によつて宴席では誰彼の卓上演説がある筈で、世話人は泉先生にも頼みに來たが、先生はなかなかうんといはない。先生の出席を瀨戸君は何よりも喜んでゐるのだから、ひとつ祝つておやりなさいと橫合ひから口を出して、やうやく承知して貰つた。實は私も久保田さんに誘はれて、前後二度の會に出ると約束した時、少々酒氣もあつたので、卓上演説迄も引受けてしまつた。しかし、何もいふ事はなく、しらふの時には馬鹿々々しいと考へるのが本筋だから、泉先生といふ大ものを口說落した功績に免じて、自分だけはかんべんしてくれと申出たが、司會者の久保田さんは承知しない。扨てどんな事を喋るべきかと考へながらぱくついてゐる心持はいゝものでない。果物が出て、珈琲が出て、世話人代表の北村喜八氏が挨拶を述べ、司會者久保田さんは第一番に泉先生を指名した。

先生は立上つて、瀨戸君とはじめて逢つたのは愛宕山の放送局で、その時瀨戸君は大酩酊だつたが、その次に逢つた時は容姿端麗なるジェントルマンだつた、卽ちこの人は生れながらに二筋

道云々といふのであつた。私は泉先生のを聞いてすつかり參つてしまつた。じやの道はへびだ。何故かといへば、ぱくつきながら私が頭の中ででつちあげたのも、醉拂ひの瀨戸君と、今日此の席にお父さんと並んでゐる孝行息子の瀨戸君とを二筋道に引かけて落をとらうとしてゐたのだから。その外に何がある。私は「二筋道」といふ芝居を見た事が無い。本は勿論讀んでゐない。近頃はまるつきり芝居を見ないし、昔見た新派の芝居のどれが瀨戸君の作かもはつきりとは覺えてゐない。こいつは弱つた、何か別の言葉を組立てなければならないと混亂してゐると、そんな事には頓着なく、久保田さんは私を指名した。私はすつかり閉口して、自分のいふ事はすつかり泉先生にいはれてしまひましたと正直に悲鳴をあげてしまつた。

長田秀雄伊藤痴遊喜多村綠郎河合武雄川村花菱花柳章太郎大谷竹次郎諸氏が夫々祝辭を述べたが、中で私は大谷といふ人の長々と喋るのには辟易しながら、あく迄も剛愎らしく、どんな機會も逃さずに商賣一手で押さうとする態度に打たれた。投げ手もはたきこみも用ゐず、眞向から筈押いつてんばりの相撲取のやうな、がつしりした風格だつた。成程、これでは東京の人のいゝ、遊び半分洒落半分の興行師が束になつたつてかなはないわけだと思つた。

最後に瀨戸君が答辭を述べ、又半眠氏が親としての感謝を認めたものを讀上げたが、感極まつ

で嗚咽し、滿足には完了しなかつた。私は彼が醉拂ひである事は知つてゐる。彼が感情家で涙脆い事も知つてゐる。彼が仁俠の志の厚い事も知つてゐる。曾て或家の夫人に非行があるといふ噂が傳へられ、更にその主人が相手方を脅迫して金錢を授受したといふ噂がつけ加へられた時、その腐つた根性を罵つて號泣したといふ事も聞いてゐる。大凡彼のひとゝなりは承知してゐたのであるが、親をおもふ心の流露かくの如きものがあらうとは、私の今迄知らなかつた所である。息子の成功に滿足してゐる半眠氏と、父親をいたはり、喜ばせようと一心になつてゐる瀨戸君の並んだところは、まことに美しいものであつた。

散會後、眞直に歸宅し、今日の會の記念に貰つた「二筋道」を一氣に讀了した。

私は瀨戸君のこれがはじめての本だといふのを、最初はひどく不思議がつたが、考へて見るとそれ程不思議ではないのである。昔から、脚本は、兎角獨立した文學とは認められない旁だつた。殊に瀨戸君は、松竹の祿をはむものかどうかはつきりしないが、少なくとも實質上その御抱か囑託かに相當する作者である。永い間のしきたりで、自分の內部に湧く感興にもとづいて自由に制作の筆を執るよりも、先づ役者の顏觸をきかされ、その一人々々の柄にあてはまる芝居を書いて貰ひ度いとか、或はもつと立入つてあらましの筋立をきめ、それにころもを着せ味をつける事を

註文するとか、受動的に働く場合が多いのであらう。その間の消息は「二筋道」の「序に代へて」といふ文章の中にもはつきりうかゞふ事が出來る。「唯世間の評判の波に乘せられて後から後へと書かせられたゞけで」とか「もう一度繰返すが唯書かされたゞけだ」とか、作者は自分の立場を明白にしてゐる。斯ういふ立場で制作するとすれば、自分の制作の第一の目標は、如何にすれば役者の仕勝手がいゝか、いかにすれば當面の見物の氣に入るか、いかにすれば劇場經營者の唯一の目的である大入をとる事が出來るかといふ事にあつて、脚本そのもの、戯曲的價値或は廣い意味に於る文學的價値は直接のめあてとはならない筈であらう。茲にも座附作者或はそれに近い作者の書くものが、芝居の觀客を構成する大衆よりも一段高い教養を持つ讀書階級を相手にしては、出版される事が稀だといふ理由が見出される。

しかし、いくら劇場經營者の、又は役者の註文によつて書くとはいへ、あらゆる座附作者の作品が本人の藝術制作衝動によらずして書かれるとは斷言出來ない。彼等はその註文によつて制限を受ける事は確かだけれども、自分の創作慾を全然殺す事は出來ない筈だ。手近い例は、河竹默阿彌の如き代表的座附作者の脚本に、いかに豐かなる獨創的詩情が盛られてゐるか、それは渾々として流るゝ泉の如く自由奔放に、註文や制限を洗ひ清めてあまりあるものである。吾々は今日

のいたづらに廣く明るい舞臺の上で、默阿彌が描いた頽廢期の因緣物語や人情話を見るよりも、寧ろ書齋に於て之を繙く方が感興の深い事を知つてゐる。

私は瀨戸君の「二筋道」が、同君の作中最も勝れたものであるかどうかは知らない。しかし、これ程人氣を煽つた作品は外には無いであらう。いかにそれが評判になつたかは、最初の「二筋道」があてたので、「續二筋道」（正しくは何といふ外題か、私は知らない。以下同）を書かされ、これが又うけたので「續々二筋道」を書かされ、第四の二筋道を書かされ、第五の「二筋道」を書かされ、とめどがなくなつたので「お名殘二筋道」を書いたところ、不幸なる偶然は、これをほんとのお名殘として、立役者伊井容峰の死をもたらした。若も作者が逃げを張らなければ、松竹は第七の第八の第九の第十の「二筋道」を書かせたかもしれないのである。さういふ立場にある座附作者といふものが、いかに強い腕つぷしと、太い神經を持つてゐなければつとまらないかは、今更いふ迄も無い事だ。その點で瀨戸君は申分の無い作者だといはなければならない。記念出版會の日に、松竹社長大谷氏は、此の作者の健康を憂ひ、呉々も氣をつけてくれと繰返して云つたが、正に松竹にとつて之以上調法な作者はなく、此の人に健康を害されては、折角甦生をうたはれる新派の將來を暗くするし、松竹の營業にも差響くに違ひ無い。それ程調法がられる丈「二筋道」は伊

井喜多村河合の所謂三頭目にぴつたりはまつた脚本で、且又義理人情、張と意氣地といふ通俗道徳を眞向からふりかざし、おまけに必ず涙の薄墨で畫面の統一をはかる事を忘れないから、今日の新派の觀客層には又なき心のよすがであらう。宜なるかな、花街の子女は此の芝居によつて、自分達の精神生活を再認識し、玄人の身の上のあはれを深く知ると共に、逹引に生る矜持に胸を躍らせたといふ。玄人でない者も、今日では藝者といふものが、いぜんのやうに世にはびこる存在でなく、どつちかといへば影の薄くなりゆく階級だから、弱者の爲に氣を吐く作者と共に、同情の涙を惜まなかつたに違ひ無い。「二筋道」の成功は當然の事といふ外はない。

しかし、これが本となつた場合、吾々は默阿彌の脚本集を愛誦するやうに、深い感激を持つて讀了出來るかといふと、乍遺憾否と答へる外はない。明白に、書いた自然さが稀薄で、書かされた無理が濃厚である。この缺點は舞臺の上でも、心あるものには忽ち觀取さるゝに違ひ無いが、色彩と音樂で眩惑し、注意を散漫ならしめる舞臺よりも、ひたむきに文字を追つてゆく書齋の方が明確に感じるに相違無い。爭はれないもので、第一の「二筋道」が一番書いた自然を多分に持ち、書かされた無理が少ない。それが第二第三となると、心がおろそかになり、形の上の無理も露骨になつて來る。舞臺の事なら何でも知つてゐる作者は、自分でも純情の稀薄になつた事は承知し

てゐるであらうが、そこか座附作者の太い神經と、強い腕つぷしを要するところで、構ふものか、どうせ見物には此處の所の無理はわかるまい、こつちは書き度て書いてゐるのではない、書かされて書いてゐるので元々無理はわかつてゐる位の心持で、うでを賴んで書流してしまふのであらう。その結果が最も覿面にあらはれるのは、そもそもの成立ちから役者本位で人間本位でないのか、愈々舞臺本位で世の中とかけ離れた實感の乏しさに走つてしまふ事である。

そんなら、作者は全く制作の喜びを味はゝず、たゞ劇場に對する義務として書いてゐるのかといふと、それは違ふ。作者には純粹創作の樂は少ないかもしれないが、大衆相手の仕事に共通の、いかにすれば受けるかといふ一點に充分の感興があり、又註文主を喜ばせる滿足、役者を嬉しがらせる滿足とあはせ行ふ事が、とりも直さず自分の腕を確認する事になるのだから、その目的の爲にも制作の熱情はあり得るのである。從而作者自身が、書かされたから書いたといふのは一面の眞實ではあるが、その儘うけとつてはいけない。腕つぷしに自信を持つ作者として、この場合註文主の無理がひどければひどい程、腕のふるひ甲斐があるのである。もう一つもう一つと書かされる度に澁面をつくりながら、作者はその無理に負けない自分を顧みて快心の笑をもらしたに違ひ無い。第二義的のものであらうが、之も亦制作の喜びと稱して差支ないであらう。

此の種の喜びは、一般に腕つぷしの強い座附作者に共通のものであらうが、私はこゝに他の人々と瀬戸君を距てる一線があると思ふのである。それは瀬戸君の場合、無理な註文とは知りながら、註文主の望みにそふ作品を書上る心持と同時に、あく迄も自家の米の飯でなければ客膳に供し度ないといふ心持を失はない事である。いつ迄も文學青年の純情を忘れ兼る精神があると思ふのである。そこに、全くの工人であつた松居松翁氏や、甘んじて工人となる外にあこがれのない巖谷三一氏などゝの歴然たる相違を見る。果して私のこの見方が正しいものとして許されるならば、私は松竹と新派の爲に進言して、瀬戸君をしてもつと思ふまゝに冒険をさせ、之を支持する方針をとらせ度い。卽ち、あまりに多くの役者に役をつけ、各々の仕勝手を考へ過る今迄のやり口の外に、時には活社會から生のまゝの材料をつかませ、他を顧慮する事なく書かせて見るのである。叩き込んだ腕つぷしのこの作者の事だから、いくら勝手氣儘をさせても必ず上演價値と同時に興行價値のあるものをつくり上るであらうし、昔と違つて今日の新派は素晴らしく技藝がうまくなつてゐるから、これを仕いかすに違ひ無い。新派の甦生といふ聲に安んじて、明治時代の新派型に歸れといふ議論もあるやうであるが、それは新派の使命をおろそかにするもので、やがて衰滅の途へ導く因とならう。新派はあく迄も腕と元氣にまかせて、少しでも新派の世界を擴げ

て行かなければ噓だ。一時その存在の危期を唱へられた新派に對して、多大の同情を持ち、主として內部の結束に力を貸したのは久保田さんで、新派の大御所などゝ呼ぶ者さへあるが、新派最近の隆昌に直接貢獻した第一人者は、誰が何といはうとも瀨戶英一君である。恐らく今後も二筋道」以上の人氣を博す作品があらはれるのであらうが、もう一筋他の道を步かせて見るのも面白くはないか。無類の腕達者をして、束縛なく腕を振はせてみたいのが、私の慾である。（昭和八年九月四日）

――「三田文學」昭和八年十月號

續親馬鹿の記

ひと夏を逗子でくらした優藏は、眞黑になつて歸つて來た。留守番をした父親に、面白かつた逗子の話をきかせようとするのであるが、意あまりあつて言葉足らず、「ね、ね、ね、ね」といつまでも相手に呼びかけながら、結局話にならないで、おしまひになる事もあれば、「えゝと、えゝと、えゝと、優ちやんね、逗子に行つた。おもちろかつた。」と冒頭から直に結論に飛んでしまふ事もある。しかし、海の偉大と、トンネルの不思議と、大船驛で買つた鯛めしのうまさは、この夏の間の彼の經驗の中で、最も忘れ難いものとなつたやうである。朝、目がさめると、蚊帳の中であつちこつちころげ廻り、殊に蒲團の外の疊の上で手足をばたばたやるのが海の思ひ出を樂むしぐさで、時々「波が來た」と叫んで母親の懷にもぐり込む。トンネルの方は、座敷のまんなかに立はだかり、大の字の形で之を示すのであるが、その股ぐらに汽車のおもちやを通させたり、

おやぢにくゞれと命令したりする。親馬鹿は忽ち四這ひになり、がうがつたんがうがつたんといひながら、トンネルに頭を突込むのである。こどもは有頂天になつて喜び、トンネルの位置を變へては、東京、品川、横濱、鎌倉、逗子と知つてゐる限りの驛名を叫ぶのであるが、汽車は屢々鯛めしを聯想させ、「おいちいかつたねえ」と眞劍になつて親の顏をのぞき込む。御近所のありがたさで、そんなに好きならうちでこしらへてやらうぢやあないか、うちのはもつとうまいや――と、泉先生が約束して下さつた。先生のとこの奧さんは、これが御得意なんだ。いつ來るかいつ來るかと待つてゐるが、まだ來ない。こどもは忘れてしまつたらしいが、親馬鹿は忘れず、先生んとこの鯛めし、いつ來るんだらうと、愚妻をかへりみて怨みがましくいふのも一度や二度では無い。

泉先生御夫婦を誘つて上野の動物園へ行く約束も久しいものだつた。優藏が最初に動物園へ行つた時は、をぢちやんもをばちやんもいつしよにつれて行つてあげませうと、こどもが生れて間も無い頃から、おやぢの馬鹿がいひ出して、よし行かうといふ返事を受取つた。その後親類の子供達の出かける時誘はれた事もあるのだが、先生との約束を重んじて參加させなかつた。何しろいきものは好きだから、戸外に馬蹄の響を聞けばかけ出さうとし、近所の犬にゆきあへば尻尾をつ

かんで放さず、繪本の中でも動物のが一番の氣に入りで、獅子も虎も熊も象も麒麟も形丈は知つてゐるのだから、「ほんとの動物園」を見せたらどんなに喜ぶでせうと、母親の方がその日を待兼てゐた。

うちにもセント・バアナアド種の犬がゐるし、鳩もゐるし、十姉妹（じふしまつ）もゐるし、金魚もゐるし、鯉もゐるし、近頃になつては白鷺もゐるので、これを「優藏の動物園」と名づけ、しきりにおやぢは面白がつて見せるのだが、こどもはとつくに見飽きてしまつた。「鷺さん、けんかんしていけないから、ひとつ返しませう」など、生意氣をいふのである。

いつたい此の白鷺は、今年の夏の或日、私の留守に、横山さんの御使と名告る人が持つて來たといふばかりで、最初は何處の横山さんが、何處でつかまへたのかわからなかつた。まだ十分には巣ばなれしない二羽の雛を、とりあへず犬舎に入れたが、ひとりだちの出來る迄は、口を割つて鰌を咽喉（のど）へ入れてやらなければならなかつた。皆が厄介がつてゐるところへ、又三羽追加して來た。この時は私も在宅し、玄關へ出て見ると、洗濯したての糊のよくきいた白地のかすりの着物に、小倉の袴を裾短かにはき、白足袋、白緒の薩摩下駄といふいでたちの、若い坊さんが、竹籠をさげ、上野の寛永寺から參りましたといつて添狀を出した。それによると、慶應義塾の國文

學の先生横山重氏のいひつけで、更に白鷺三羽を御届するとあつた。私はすつかり恐縮し、實は先日の二羽で既に充分なので、これは御斷したいと云つたが、若い坊さんは恰も聞えないものゝ如く、竹籠の紐を解きはじめた。佛に仕へる外には一切他念の無さゝうな人柄だから、俗人の言葉は耳に入らないらしい。先日御届したのゝ様子も見届て歸り度いと云ふので、私も觀念して、庭先の犬舍に案内すると、これならば上等たと大層滿足してくれた。その犬舍に新參の三羽も放たれたが、今度のは前のよりも發育が惡く、きりそうも劣るやうだつた。坊さんの話では、上野のお山には毎年鷺が來て巣をかけるが、今年は特別で、一寸數へた丈でも凡六百の巣を營み、五位鷺一千羽、白鷺百羽位群つてゐるといふ事だつた。偶々古文書の研究に通つてゐる横山氏がそれを見て、こどもの慰みに貰つてくれたのであつた。不幸にして、後から來た三羽は死んでしまつたが、前の二羽は日に日に大人びた形になつて來たので、池を掘り、禽舍をつくつて移した。どういふ性質なのか、この鳥は好物の鮹を與へると、めいめい別々に喰べようとはしないで、一方がくはへると他の奴はその嘴から奪ひとらうとする。異様な聲を發して爭ふのを、こどもは喧嘩と見てゐるので、「しやぎしやんけんかんしていけないから、ひとつ返しませう」としたり顏で親どもに同感を強るのである。正邪いづれにあるかは別とするも、喧嘩する者を成敗しようとす

る心持が働きはじめたのだ。

泉先生には「白鷺」と題する長篇小說がある位で、凄艷な姿のこの鳥は御贔負と思はれるから、うちの白鷺を見に來て下さいといふのだけれど、鷺は見たいが犬がゐやあがるので、――と身震ひまでして眞平の形をし、それよりもいつそ動物園へ行かうといはれるので、愈々豫ての約束を果す事になつたのである。日曜は混雜するに違ひ無いから、平日をえらび、私は勤を休む事にした。九月下旬、これが今年になつてはじめての休暇だ。先生は何處へ行くにも放さない魔法壜に熱燗の酒をつめたのを大事に抱へ、奥さんはお晝のお辨當の包を持ち、親馬鹿はいたづらものを燒香場の三法師のやうにだつこして、申分の無い秋晴の朝、上野の山へ出かけたのである。先生は動物園なんか、幾年にも來た事はあるまいと思ふと、案外さうではなく、園內の改造も知つてゐる。私の方は、記憶はおぼろだが、たしか一番上の兄の長男が小學校へ通ふ前につれて來たのが最後で、その子供が上野の森の鴉をつかまへろと云つて、この叔父さんを困らせた事を思ひ出した。それが今は三十歲近いのだから正に二十四五年前の事である。

門を入ると、とつつきが白鳥の池で、自分のからだよりも大きい鳥が悠々と水に輪を描いて泳いでゐるのを見ると、こどもの足は早くも釘づけになつてしまつた。動物園々々々ときかされて

はゐたが、かほど迄に廣大なものとは想像もつかなかつたらうから、たゞたゞ目をみはり、きよとんとして、傍に親どものゐる事さへ忘れ果てたる様子だつた。默つて放つて置いたら、いつ迄でも動きさうもないけしきだつたが、さきにはもつと喜びさうなものが澤山ゐるのだから、促して進んだ。かねておもちやや繪本でお馴染のけだもの、巨大な象は長い鼻を振り、よその子供の投るビスケットをまき上げて喰ひ、河馬は盥の口をあけて水の中から面を出し、獅子はたてがみを震はせて咆吼する。何から何迄珍らしく、不思議で、面白い。ひと廻りするとすつかり疲れてしまひ、親馬鹿にだつこしないではゐられなくなつた。恰度正午だつたので、園內の茶店で優藏は母親の用意して來たビスケットとチヨコレートをたべ、その上奥さんの手づくりの、でんぶと海苔のかゝつた御飯を頂き、泉先生と私は魔法壜の御厄介になつた。

親馬鹿はこのどんたくに味をしめ、その翌日、もう一日休暇を貰ひ、この日は終日家にゐて、優藏と遊びくらした。效驗いやちこで、その日以來父親は一層くみしやすい遊び相手として認められた。いつたい父親は、いくら勉強したからつて、四這になつて股ぐらをくゞつても、熊になつてひつくりかへつても、こどもをひきつける事にかけては母親の敵でない。向は叱つても、かまひつけなくても、時々は押入に入れても、こどもは益々慕ひ寄つて來るが、こつちはのべつ幕

なしに御機嫌をとり結ばうとしても、忽ちあきられてしまひ勝だ。哺乳動物にはかなはない——と常々嘆息するのであるが、此の第二日目の休暇に發明した「お馬遊び」だけは、父親の專賣として我子の嘉稱するところとなつた。我家では一番廣い八疊の室の眞中の疊二枚を座蒲團で埋め、その周圍をぐるぐるかけ廻る丈で、一向智惠の無い話だが、こいつがことのほか氣に入つた。爾來父親の姿を見ると「お馬遊びしよう」と誘ひに來て、着物の色から自分を白い馬、おやぢを黑い馬に見立て、ぐるぐる廻を強請する事になつた。黑い馬は忽ちくたびれて、蒲團の上に寢ころび、はあはあ云つてゐると、白い馬はいつかな承知せず、「黑いお馬、もつとかけ出せ」と命令する。黑い馬は從順だから、むつくり起きて、又してもぐるぐる廻だ。おかげではじめて知つたのは、四十五歳十箇月の男子よりも、二歳二箇月の男兒の方が、ぐるぐる廻の呼吸が續くといふ事だ。

「お馬遊び」に關聯して、私が不思議に思ふのは、優藏は左ぎつちよでは無いのに、この遊びの場合には、どうしても右廻をしないのである。あまり一方からばかりだと目が廻るから、今度はこつちと敎へても、「うゝんこつち」といつて、絕對に承知しない。時計は左廻だが、野球も競馬も右廻だ。將來の爲にも右廻にさせようと努めるが、まだ一回も成功しない。古溪波多野承五郎先生には、右廻左廻の研究があつたが、私には我子の左廻が何故であるか、どうしてもわからな

い。

こどもに對する私共の自戒のひとつは、なるべくものを教へないといふ事だが、遊び相手の女中に教はつたり、往來で聞嚙つて來たりして、とんでもない事を口走る。眞面目な顏をして、アイウエオカキクケコと、何の事かわけもわからずに叫んでゐるかと思ふと、アラヨイヨイヨイと轉向して行く。一ッ、二ツ、三ツ、四ツ、五ツ、六ツ、七ツ、八ツ、九ツ、十、十一、十二と數へ、誰に教はつたのだらうと父母が驚いてゐると、その次は十三七ツとうたつてけろりとする。

凡世の中に Why と How が無ければ進歩はないと云はれるが、智惠のつくさかりのこどもにとつては、あらゆる事が「何故」であり「どうして」である。「お父ちやま、何處へ行くの」と殆んど毎朝きく。會社へ行くのと答へると、「何處の會社」とか何の會社とたゝみかけて來る。この返答は頗るむづかしい。何故かといへば、こどもの理解の屆く範圍内で適當の返事を見出さなければならないからである。丸の内の會社などといつたのでは返事にならない。止むを得ず、東京驛のそばの會社といふとうなづいてくれる。「お父ちやま、何してるの」といふのに對して、御本讀んでるのと答へると、必ず、「何の御本」と來る。「三田文學」を讀んでゐるんだよでは返事にならない。御話の御本といふと「何の御話」と何處迄もきりが無い。いろんな御話と逃げても「何のい

ろいろ」とあく迄も追かけて來る。苦しまぎれに、こどもにはわからない御話といふと、甚しく不滿足で「優ちやんわかる」と怒つた顏をする。試みにこつちからも質問してみた。優ちやん此間何處へ行つたのといふと、卽座に「逗子」と答へたから、こゝぞとばかり、何處の逗子だときいた。恐らくこれには困つて、海の逗子だとか、汽車の逗子だとかいふのだらうと思つてゐると、こどもの頭には迷ひが無く、言下に「葉山の逗子」と答へた。尤も、一寸間を置いて、「優ちやんねえ、鯛めしみんなお姉ちやんにやつちやつた」とつけ加へた。例の大船の鯛めしを思ひ出したので、お姉ちやんといふのは親類のこどもの事である。

父母と同じ食卓で、優藏だけはいたづらをしないやうに籐椅子の上に乘つて食事をするのであるが、大人の喰べる物を喰べてみたい慾望は頗る強い。殊に漬物の茄子や生瓜(きうり)の色彩は目をひくものと見え「優ちやんもおつけのものたべる」と毎日せびるのである。これはこどものたべる物でないといふと、大概は一度であきらめるが、旋毛(つむじ)をまげると「優ちやん、もう大きくなつた」といつてきかない。漬物といふものは三度々々目に觸れるので、始終頭を去らないらしく、何かの拍子に「大きくなつたら」といふ言葉をきくと、直にそいつを思ひ出す。優藏も大きくなつたら學校へ行くのだといふと、「そしておつけのものたべるの」とつけ加へるのである。

してはいけないといふ事をわざとしたり、大人のいふ事にわざと反對したりするのも、今日此頃の道樂のひとつである。そんな事をしてはいけませんといふと「していゝのよ」といふ。優藏はいゝ子だからよしませうといふと「優ちやんいゝ子でない」といふ。親類へ遊びにゆく時、向ふの子供と仲よくするんですよといひきかされると「いや、けんかんする」と叫ぶ。何處かで聞嚙つて來た唱歌のひとくさりに、ごめんください花子さんといふのがあつて、得意になつて繰返すから、親馬鹿も聲を合せてうたふと「違ふ、花子さんでない。優藏しやまた」といふ。そんなら、さうしようと、ごめんください優藏さんとうたふと「優藏しやんでない。花子さんだ」といふ。花子さんといへば優藏しやまだといひ、優藏さんといへば花子さんだといひ張つてさいげんが無い。それ程まがつた旋毛もいつか眞中にをさまつて、親と子がいつしよにうたふ時こそ親馬鹿のしあはせである。

雀、雀けふもまた
暗いみちをたどひとり
林の奥の竹藪の
寂しいおうちにかへるのか

斯ういふ風に、こどもの相手をして親馬鹿の限りを盡してゐる時、私は屢々亡父をおもひ出す。八男四女の父として、亡父は曾て親馬鹿の態を見せた事が無かつた。極端に無口で、我子とも口をきく事は稀だつたから、まして況や馬になり、犬になり、河馬になるが如き事は到底出來なかつた。生來の氣むづかしさを、自制する事で一生闘つたやうな父には、親馬鹿の味はわからなかつたか、或はわかつてゐても敢て行ふ氣持になれなかつたのであらう。父の性格の不幸だつた事をおもふと共にその父に心配をかけ通した自分を、今になつて遣瀬なく考へるのである。

そんな事がおやぢの胸に去來してゐるとは知るよしもない優藏は、或時膝の上に乘つておやぢの顔をつくづく見てゐたが、「お父ちやまの顔、きたない顔ねえ。どうしたの」としんそこから汚なさを痛感したやうな聲を發した。不覺にも私は、半巾で自分の顔を拭いたが、それは墨がついてゐるのでもなく、泥がついてゐるのでもない。老いたる父の、皺の多い、髯の密生した、しみだらけの顔が、こどもの目には忌々しく映じたのであつた。私は苦笑して、傍の妻をかへりみると、愚妻は半分は痛快だが、半分は嬉しくなさゝうな顔つきで、これも苦笑ひの外に手を知らなかつた。(昭和八年十月五日)

——「三田文學」昭和八年十一月號

根氣くらべ

昭和八年十月十八日の時事新報に「父と子の入れ替り」といふ漫畫人の噂話が出た。

宇野信夫といつても知つてゐる人はあまりあるまい。苦節何年になるか、何しろ長い劇作の隱忍時代から、いつまで經つても浮ばれなかつた人である。

といふかきだしで、新潟にゐる父親がリヨヒオクツタスグカヘレとたび〳〵催促したあげく、勘當の代りに禁足したところへ、築地座から電報で、戲曲「ひと夜」を上演したいといふ申いれがあり、しかも師匠久保田万太郎氏が演出を引受けたから、息子よりもおやぢの方が夢中になり、即刻息子を引つれて上京し、目下毎日息子よりも先におやぢが稽古場へ顔をだしては、久保田氏に叱られてゐるといふのである。漫畫の方は、久保田さんのつもりらしい肥つた人物の前に、頭をかいてゐるのか顔をかくしてゐるのか、おやぢに違ひ無い人間が、いづれも極めて拙劣な筆致

で描いてある。

宇野信夫君は、全く長い間勉強をつゞけながら、認められない人であつた。それはたしかにその通りだが、その外の事は例によつて出鱈目な揑造であり、現在父親は埼玉縣熊谷にゐる。新潟は姉の嫁入先だ。今度「ひと夜」が上演される事は、もとより宇野君一家の喜びに相違ないが、父親が息子を引つれて上京したとか、毎日稽古場に顏をだして叱られてゐるなどといふのは、大噓である。凡そこの種の噂話は、面白さのためにはどこ迄もうそつぱちを書くのがあたりまへのやうに思はれてゐる。ついでにいへば、久保田さんは宇野君の師匠ではなく、彼には寧ろつれない先輩だつた。

宇野君がいつから、いはゆる苦節何年の勉強をはじめたのか知らないが、私のところへくるやうになつてからでも、既に數年は經つ。最初は突然戲曲の原稿を送つて來たのである。當代には珍しく、半紙に毛筆で、一字一句も書損じのない見事なもので、無類の惡筆に惱んでゐる私は、それを手にして驚歎した。讀んでみると、江戶末期の芝居か草双紙の流れをくむものゝ如く、一見甚だしく現代ばなれのしたものだつた。しかし私には相當面白く思はれたので、たしか鶴屋南北の戲曲や月岡芳年の錦繪に比べて批評したやうに記憶する。直に、彼は別の原稿を持つて來た。

驚いた事には、この能書家が、悪筆ぞろひの慶應義塾の學生で、國文學を修めてゐるといふのだつた。東京の下町の息子によくある型で、無意味にはづかしがつたり、てれた風をしたり、頭をかいたり、叮嚀にかしこまつてゐるかと思ふと突然卷舌になつたり、どこから見ても近代の學生型からかけはなれた人物だつた。私は、こいつニンコの與太者ではないかと疑つた。

初對面のその翌日だと思ふが、朝早く又やつて來た。私はつとめのある體なので、玄關で用を濟ませたいといふと、昨晩はありがたうございました、これはつまらない物ですがといつて、ふろ敷を解き、紙に包んだ墨の形をしたものを差出した。私は、物品の贈答は面倒で大嫌ひだから貰ひたくないといふと、いゝえうちで出來たものですからといつて、無理に置いて行つた。あけてみるとジョニイ・ウオオカア赤標一本があらはれた。ウヰスキイをうちでつくる奴があるものかと家人と共に笑つたが、何かさうした出まかせも多分に持合せてゐるらしく、愈々與太者の疑を深くした。それ以來のおなじみで、度々遊びに來るやうになり、來る時はきつと原稿を持つて來た。

彼には書きためた戲曲が澤山あるらしかつた。淺草界隈から隅田川へかけての風景をとり入れたり、田舍のお寺を舞臺にしたりして、おくみおとせといつたやうな型の娘をまづ登場させ、そ

こに直助權兵衞や髮結新三とつきあひのありさうなやくざがあらはれ、かどはかしだとか手込だとかいふ場面が展開され、無殘に虐げる事に深い興味を持つてゐるやうに見えた。どこかに江戸讃美論を高唱された頃の永井荷風先生や、嗜虐性や變態性慾に創作の基調を置いた時代の谷崎潤一郎氏の影響もうかゞはれ、淺草附近の市民生活の寫生劇には、久保田さんにならふところもあるやうだつた。その事を本人に話すと、實は最初久保田さんのところへ原稿を送つて見てもらはうとしたが、相手にしてくれなかつたといふのだつた。久保田さんに逢つた時その事を話したら、あゝあの筆で書いた原稿かと、それだけは覺えてゐたが、作品には全然感服しないものゝやうだつた。

私の所には若い文學者志望の學生が多勢來るが、その人達と比べて、宇野君は何等共通のものを持つてゐない。物腰、態度、趣味、嗜好、何から何迄右と左だ。試みに外國の作家の話をしても、殆んど何の知識も無いやうに見える。わざと知らないふりをしてゐるのかとも疑はれたが、更に明治時代の我國の大家の作品を話題にしても、これまた何も知らないらしい。いつたい君はどういふ作品が好きなのかと聞くと、西鶴や南北は大分讀みましたと答へた。突込んで聞いて見ると、近代の文學にはあまり興味を持たず、德川期のものゝ方が心を引くらしく、談偶々落語講

釋に及ぶと、待つてましたとばかり活氣づき、完全に卷舌になつて、蘊蓄を傾けた。口を開けばプルウストを論じ、ジイドの言葉を引用する人々と、一致する筈が無いのである。

ためしに彼の毛筆で書いた奇麗な原稿を、甲乙丙丁に讀ませようとつとめたが、いづれもその原稿の外形にあらはれてゐる時代の古さに辟易して、手に取る事を肯じない。たまに二三枚めくつて見てゐるかと思ふと、忽ち放りだして、斯う假名を崩されては僕達には讀めませんよと苦笑する。私は自分の認める宇野君の特徴をまづ述べて、「三田文學」の編輯者に掲載を依賴し、今日迄に二つか三つは印刷になつたが、いづれも編輯者の歡迎するものでは無かつた。私に對する義理に過ぎないのである。あゝあの筆で書いた原稿ですか――これが同人間の宇野君の作に言及する時の表現となつた。言葉の意味には價値判斷は無いが、その言葉を口にする時の態度、語調には、輕蔑するか、迷惑がるか、いづれかひとつを明示するのである。

しかし、宇野君の原稿で毛嫌されるのは、たゞにその毛筆、半紙、變體假名の爲ばかりでは無い。作中に出てくる人物が當代の好みに緣遠いのである。こゝには近代青年文士の好んで取扱ふ種類の人間、たとへばダンサア、女給、有閑マダム、女學生、スポオツマン、會社員、勞働運動者、畫家、詩人、小說家などは出て來ない。そのかはりに、人力車夫、行者、香具師、錢湯の主

人、映畫館の下足番、三味線ひき、お店もの、女郎あがり、だいこく、といつた連中があらはれる。それを戯曲の第一頁に見出す時、早くもうんざりしてしまふ若人が多いのである。

いつの間にか學校は卒業したが、いつ迄經つても原稿はすらすらと活字になるに至らない。大學校まで卒業して遊んでゐてはいけないといふので、父親の投資した丸之內の赤煉瓦の建物の地下室の食堂の帳場に坐つた事もあるが、もちろん失敗し、何とかいふ大衆向娛樂雜誌の編輯局員にもなつたが、雜誌社がインチキで月給もくれない、八方ふさがりのていたらくだつたが、その間いつも感心させられるのは實に書くことが好きなのだ。こんなのは駄目だといつて突返すと、二度でも三度でも書直してくる。こつちが怠けて讀まないでゐると、忽ち五つ六つの戯曲が私の机邊に積まれてゐる。うまいまづいは別として、彼程制作を樂み、玉を磨くやうに自分の作品をいつくしんでゐる人は少ない。私はその熱心に同情し、何とかして世にだしたいと思ひ、若いてあひにはいくら勸めても駄目だから、年寄の方に目をつけて、久保田さんに賴んで見た。同じく淺草に材をとり、これも今時の世の中のはなばなしい表面には出て來ない人間を手がけるのだから、多少のなさけはあるだらうとあてにしたが、いけなかつた。あれは駄目ですよと一蹴されてしまつた。この感傷詩人にとつては、宇野君の陰慘にしてやゝきたならしい感じのする戯曲が、

癇にさはるもの ゝやうに見えた。

そこで今度は手をかへて、「三田文學」以外の雜誌を目ざし「劇と評論」に掲載方を依賴した。この雜誌の連中は、新らしがつた事をいふけれども、根は古い教養に培はれた風があるから、密かにたのむところがあつたが、この方も何時迄待つても握りつぶしだ。どうでせう、あの原稿はいけませんかと、腫物にさはる氣持で催促してみると、あゝあの筆で書いた芝居ですか、あれは讀みにくいのでつい見る氣になりません、と極めてはかない返事だつた。

手も足も出ないので、私も匙を投げ、甚だすまない事だが、宇野君が原稿を持つてくると、思はず舌うちをする氣にさへなつた。私は彼があく迄も戲曲の活字になる事を希望するならば、まづ明治大正昭和の我國の作家の小說を讀み、西洋諸國の近代小說を勉強してみろと勸めた。あまりに當代とかけはなれた彼の教養では、今日のジヤアナリズムに迎へられる事は望めないからである。それはいゝが、こゝにをかしいのは、それと同時に今後原稿は、半紙に毛筆で書く事をやめて、普通原稿紙と呼ばれるものに、ペンとインキを用ゐて書く事を希望した。白い鴉は黑い鴉より美しくとも、仲間はづれになる事を免れないから、せめては羽の色だけでも同じにさせようといふ老婆心だつた。

宇野君は素直にこの勸告をいれ、圖書館に通つて讀書し、ペンとインキをもつて書くやうになつた。次第に彼の作風も變り、今日この頃は、直助權兵衞の徒輩は出現しなくなり、世界は現代日本になり切つたが、しかし彼が好んでつかんで來る市井の悲喜劇は、常に陋巷の無學文盲の連中か、野心も贅澤もなく小體に暮らしてゐる小市民の、あと十年も經てば完全にさういふ型の人間はなくなりさうな人々である。

そこで不幸にして世にあらはれない宇野君の戲曲の特徴をかいつまんであげると、時代は現代に違ひないが、丸之內や銀座の代表する新興現代ではなく、さういふ新勢力に壓倒されて亡びゆく前時代の名殘であり、場所は多くは淺草の裏手の方の路地の奥で、人物は無智で呑氣であると同時に一面わるものの根性も持ち、助平でもあり、おしなべて道德觀が乏しく、久保田さんの描く小市民程義理人情に拘泥せず、もつと卑俗下賤である。つまり社會の最下層の人生に、かなり銳い眼を向けてゐるのであるが、あまりに希望も野心も憧憬もない階級なので、明日に夢を持つ人には、これが今の世の事とはおもはれない程むかしの事のやうな印象を與へる。彼はこの濕地にうごめく人々に對し、義憤も發しなければ同情も示さず、あく迄も突放して書き、時には悲劇を悲劇らしく見せず、わざとそらつとぼけたやうな態度で臨む事もある。

世の中なんてこんなものだぞ、どうにもなるものかといふ虚無思想もうかゞはれるし、苦しんでゐる人々の姿態の中に、嗜虐性の滿足を感じてゐるのではないかと思はれる節もある。從つて、彼の未發表の作品の中には、陰慘な人生のどん底の影の濃く漂ふものが多い。しかし一面には江戸兒の機智と諧謔を持つてゐて、裏長屋の人生にも、たくまないをかしさのある事を見逃さない。今日迄の所、比較的評判の惡くないのは、この傾向の物のやうで、今度の「ひと夜」の如きも、陰慘の味に別れて、をかしさの明るさに移らんとする作者の一面を見せたもので、或はその點が、築地座の好みにかなつたのかもしれない。

場所は例によつて淺草で、馬道(うまみち)邊の路地の奧と指定してある。登場人物は、日蓮宗の行者、錢湯の主人(元は浪花節語り)、映畫館の下足番、映畫館の三味線ひき、三味線ひきの女房(元は牛屋のねえさん)の僅に五人だ。その五人の生涯にとつて、恐らくは何等重要な關係のない夏の一夜のかゝりあひを、寫實風に取扱つた味の輕い戯曲である。決して宇野君の代表作でもなく、力作でもない。寧ろ氣樂な氣持で書いたところに、淡い味があると見るべきものである。この戯曲も、私の手許に送り屆けられた數十篇の中のひとつで、重量は乏しいが無難の作と認め「三田文學」の編輯者に依賴して置いたので、近く掲載の運びとなつてゐた。ところが本人にしてみれば、

いつも落第の不運に遭遇しつけてゐるので、どうせ今度も駄目だらうと見切をつけ、同じものを「劇と評論」に投書し、それが珍しく採用されたばかりでなく、築地座の座頭友田恭助氏と、同座の文藝部員ともいふべき劇評家大江良太郎氏の御眼鏡にかなひ上演と決し、同座の顧問格の久保田さんが演出を引受ける事になつた。

この話をきいた時、私は久保田さんにむかつて宇野君の作品として「ひと夜」は決して上乘のものではなく、あの程度のものなら十位あるといふと、いゝえ大江君の話では、今迄發表されたものは皆駄目で、今度のだけがいゝのださうだといつてきかなかつた。果して大江君は今迄の宇野君の作品を讀んでゐるかどうか、いさゝか疑はしく思ふのである。しかし、本人の喜びは非常なものだし、私としても長い間浮び上らなかつた此人の作品が、脚光を浴びる事になつたのは何よりうれしい。來る原稿も來る原稿もいたづらに返送するばかりで、又來たかと眉をひそめた私が、これでもかこれでもかと、ひたおしにおして來た宇野君に、根氣比べで負けたやうな感じがする。「ひと夜」は傑作でも力作でもないが、この書く事の好きな、ねばり強い作者は今度の上演を機として、やうやく世にあらはれ、將來もつといい仕事をしあげるであらう。(昭和八年十月二十一日)

——「東京朝日新聞」昭和八年十月二十八日・二十九日・三十日・三十一日

「三田文學」編輯委員隱居の辭

私は、今度「三田文學」の編輯委員を辭する決心をした。他人にとつては何でもない事であるが、私には感慨深く、おもひは筆紙に盡し難い。

私のはなやかならぬ文筆生活も二十二年の久しきに及んだが「三田文學」はその搖籃であり、苗床であり、母の懷であつた。明治四十四年の春、處女作「山の手の子」を、當時の主幹永井荷風先生に見て頂き、掲載を許されたのがはじまりで、大正五年澤木四方吉氏が主幹となつてからは、殆んど毎月休みなき、一番熱心なる投書家となつた。いちど、大正十四年に此の雜誌は取つぶされたが、同人の協力で翌年復活し、爾來私は一箇月も缺かさず書きつゞけ、同時に雜用も引受けて今日に及んだ。

かへりみれば、私の文筆生活は「三田文學」のおかげで芽を吹いたので、これが無かつたならば、

生涯かゝはりの無い事だつたやうに思はれる。私は自分の才能の乏しさを知悉してゐるので、進んで文士たらんとするこゝろざしを持たなかつた。若も「三田文學」創業時代の嵐が身邊に起らなかつたならば、私には創作の筆を執る機會は遂に惠まれなかつたであらう。全く人の一生は、思ひもかけないめぐりあはせに支配されるものである。

怖々永井先生の御手許に差出した「山の手の子」が、意外にも世間受がよかつたので、私のかどでは幸運だつたが、自分自身にはその好評に何等の根據が無いやうに思はれ、些かの自信も持てなかつた。その上當時は、歐羅巴大戰後の文壇好景氣時代とは違つて、文學では飯の喰へないのがあたりまへだつたから、私は勤人となつて、所謂二重生活の道をえらんだ。斯くする事が、却て自分の文學をけがさずに濟む賢い方法だと考へたのである。私は勤人としても鈍根を免れなかつたが、決して怠惰では無かつた。だから自分では、文學の爲に勤の邪魔をされたとは思はず、又人並以上に精力はつゞいたから、勤の爲に文學が邪魔されたとも思はなかつた。勿論時間の乏しさは常にかこちつゞけたが、そのかはりに心にもない無理をして筆で稼ぐ苦痛は受けずに濟んだ。私が「三田文學」の爲に、永年たゞ奉公をする事の出來たのも、二重生活の賜であつた。萬一筆で喰ふ氣だつたら、私と雖も此の雜誌の爲に無報酬で働く事は出來なかつたに違ひ無い。その

意味で、學校が力を入れたくなつてからの「三田文學」にとつて、私の如き型破りの人間のゐた事は、不思議な縁ともいふべきである。

そもそも「三田文學」復活運動の起つた時、同人の多くは、傳統にしたがひ、結束力を強め、且責任を明かにする爲に、主幹を置く方がよいといふ意見で、年長の故に私がその候補者に推された。しかし學校當局は、教職員にあらざるものは不可なりといふ理由で許可しなかつた。久保田万太郎氏は此のいきさつを三田山上の大ホオルで報告し、私を呼ぶに精神的主幹をもつてした。止むを得ず、吾々は形式として委員制度を採用し、石井誠、井汲清治、西脇順三郎、横山重、南部修太郎、久保田万太郎、小島政二郎、水木京太、水上瀧太郎の名を並べ、日常編輯その他の事務を取扱ふ人としては勝本清一郎氏をえらんだ。委員は雜誌の出る迄は屢々會合し、いかにすれば經濟がたつかを主として論じ合つた。或人の如きは、雜誌を背負つて街頭で賣らうと叫んだ。私共は先輩を訪問して寄附金をせびり、廣告の掲載を勸誘し、又三田關係の人達や親戚友人に前金購讀者となつて貰ふ事を再三依頼した。「精神的主幹」は、何よりも物質上の心配に一番頭を惱ました。當時私の友人の中には、私が何か言はうとすると、又「三田文學」の話かと先手をうつて笑ふ者さへあつた。

表面は委員制度だけれど、忙しい人間が年中寄合つてもゐられないし、同人間の諒解もおのづから私を中心とするのをいゝ事にして、學校當局の認めない私が勝手に事を運び、幸ひに大過なかつたばかりでなく、今日の隆昌を見るに至つたのは、實は編輯事務擔當者の功績である。この點で「三田文學」は非常に惠まれて來た。我儘で、自主共同の精神に乏しい文學青年に、のべつ無理解な惡口をいはれながら、割の惡い仕事を一身に引受けて來た人々のおかげで、この雜誌は存續し、次第に基礎を固めたのである。私は歴代の編輯擔當者、勝本清一郎平松幹夫和木清三郎三氏に對し、あらためて感謝の意を表し度い。

全く、復活當初の「三田文學」は、どの方面からも相手にされず、默殺され勝だつた。殊に吾々は、此の雜誌を主として同窓の後進の爲の道場とし度いと思つてゐるのに、かんじんの其の人達の中には、世間でうたひはやさない張合ひなさから、先づ輕蔑の眼をもつて見る傾向が強かつた。恰もうすつぺらな同人雜誌の簇出しはじめた頃だつたから、或る利口さうな學生の如きは、自分達の抱負を語り、今更「三田文學」なんかを復活させたからつて、吾々若い者は相手にしやあしませんよと、私共の愚さを嘲笑した。當時はなやかな夢をいだいてゐた若人達は、その後どうなつたか知らないが、苦節幾年といふのか、今日の「三田文學」は純文學雜誌として、やうやく廣く認

められるやうになつた。

もう大丈夫、よくもこゝ迄持ちこたへて來たものだと思ふ安心と同時に、私は自分が非常に疲れてゐるのをはつきり知つた。勤人としての私も一年々々忙しさを增し、殊に最近は地方へ出張を命ぜられる事が多いので、毎月雜誌へ寄稿するのが苦勞になつて來た。何も毎月書くにはあたらないではないかといはれゝば正にその通りだが、私が「三田文學」の前金購讀者を勸說し、先輩に援助を求める時、毎號必ず書く事を誓つたのである。よく考へてみれば無意味な約束であるが、私の心持は之を果さないでは濟まなかつた。手前勝手に考へれば、斯うい ふ強情が經營難の「三田文學」を今日迄存續させたのだといへない事も無いやうである。

それが年一年と無理になり、月々苦痛がはげしくなつて來た。どんなものでもいゝから〆切日迄に書くといふ事丈が當面の目的みたやうになつて、おざなり原稿ばかりつゞき、豫て書き度いと思つてゐる長いものには、何時迄たつても手をつける事が出來ない。義理を果すといふだけで、樂んで制作をする熱もなければ餘裕もない。その上に、雜誌を廻つての雜用と人事の交渉が一層私の時間を喰ひ、責任感を脅かす。原稿の選擇は主として編輯事務擔當者が責任をもつて行ふのであるが、いろいろの關係から、採るか採らぬか相談の意味で、私の手許へ廻つて來るのも少な

くない。又事情を知らない人は、一切の仕事を私がやつてゐるものと誤解し、直接原稿を送つて來るのも澤山ある。それを讀み、短評を添へて返送する役目は隨分つらい。就中煩はしいのは身の上相談だ。金策、就職、戀愛、結婚——どれもこれも出來る事ならかなへてやり度いが、大概は心配を分つ丈で力になる事が出來ない。「精神的主幹」も屢々精神の疲勞に堪へ兼ね、自分の「三田文學」に對する仕事は、文學ではなくて人事ではないかと疑ふ事もあつた。

悲しい事には、私の肉體も精神も著しく年をとり、衰へ、疲れ易くなつた。無理がきかなくなつた。それを自覺して、こいつはうかうかしてゐられないぞと、深く考へるやうになつた。元來私は、下手の横好きのそしりをまぬかれないが、文學が好きでたまらないのだ。他人の仕事にも十分興味を持つと共に、自分の仕事も樂みたいのである。それが、名は文學であつて、實は雜用に過ぎないやうな此の頃の文學生活を、何時迄もつゞけてゐては、悔てかへらぬ事になりはしないか、先づ「三田文學」の雜務と責任から逃れて、自由氣儘な立場となり、追ひかけられる氣持を忘れて制作にしたがひたいと、切に願ふやうになつた。この心持は、この二三年絶えず私を惱ましつゞけて來たが、みだりに口外しなかつた。今度編輯委員隱居の決心をしたのは甚だ唐突のやうであるけれども、實はながらく肚にあつた事なのだ。深厚なる援助を賜つた方々は、私の心持

を御諒察下さる事と信じる。

即ち私が編輯委員を辭するのは、もつと文學に親しみたいといふ心から出た事であつて、文學と別れる意味は毛頭ない。又編輯委員はやめても「三田文學」と手を切らうといふのではない。雜誌に關する雜用から解放され、責任者としての重荷をおろし、もう一度昔にかへつて、投書家として迎へて貰ひ度いのである。それが私の我儘な希望であると同時に、明日の「三田文學」の爲にもよい事だと思ふ。

私は同人中の年長者の故に「精神的主幹」に推された。ところが、雜誌の性質として、年々若い同人が殖え、私と多數の人との年齡の距りは次第に遠くなるばかりである。こちらには何のへだてもない氣持でも、時代の差が、年輪の差が、先方をけむつたがらせる。それが雜誌の潑剌たる飛躍をはゞみ、精彩をくもらせる事は當然である。私の存在は、たしかに雜誌の無事を保證し、輕浮に流るゝ事を救つたであらうが、清新の感じを奪つた事も疑ない。「三田文學」は幾度も取つぶされさうになつたが、同人の頑張りで動かし難いものとなつた。たとへば、その根を張る時代に、私といふ人間が必要であつたといつても差支ないであらう。そして、完全にその任務を果したといつても叱られはしないであらう。けれども、既に枝は伸び、葉はしげり、今後は花をつけ、

實を結ぶ時代となつた。疲れたものには休息を與へ、野心と希望に燃ゆる若い人達が、かはつて努力すべき時が來たのだ。ひと息ついたらば、私も新生の歡びをもつて、はなやかならぬ私の文筆生活の最後に、ひと花咲かせて見たいと思つてゐる。長年私の爲に後援を惜まれなかつた方々、並に同人諸君よ、私の愚かなる夢を笑ひ給ふな。（昭和八年十一月六日）

——「三田文學」昭和八年十二月號

なかおま屋の酒

友人中島芳男君、慶應義塾英文科を優等にて卒業しながら、碌々として徒食し居たるところ、この度親のなさけにて、八丁堀に立派な店を構へ、ついでにといふのはどうかと思ふが、美しいお嫁さんをもたせて貰ひ、そろばんは下手だが、酒はうまいのを飲ませると、健氣な決心の臍をかため、小賣と酒場を開業致し候間、お臺所の御用は申す迄もなく、御散歩の御こやすみに、寸いつぱい、御ためし被下度、しらふにて奉願上候（昭和九年一月二十八日）

――「なかおま屋廣告」昭和九年二月

弔辭

鎌田榮吉先生逝く。

先生は慶應義塾の大先輩で、私共の恩師であると共に慈父の如くなつかしい方でありました。先生が多年一世の師表として仰がれ、慶應義塾々長として、貴族院議員として、大臣として、樞密顧問官として、帝國教育會々長として、國家社會に盡された功績は今更數へあぐる迄もない事でありますが、私共はその外に、慶應義塾に學んだおかげで、先生の如く慈愛深き先輩に、時にはほめられ、時には叱られ、一家内の者の如く教へ導かれた樂しさとかたじけなさを、生涯のしあはせとして、いつ迄も忘れは致しません。先生はおかくれになりましても、私共の心の中には昨日の儘に生きて居られ、私共が死んだ後々迄も、同窓の後進の人々に、又私共の子孫に語りつぎ、その人々の胸の中に永遠に生きてゐらつしやる事と存じます。

慶應倶樂部は先生を顧問に頂き、曾て先生から會館建築資金の御寄附を仰ぎました。その金額は極めて少なく、洒間恰も座興のやうに無雑作に御渡し下さつたのでありますが、私共が受取つた暗示は非常に大きいものでありました。私共は一日も早く慶應倶樂部の內容外觀を完備し、先生が慶應義塾並に義塾同窓の爲に何事もよかれと御配慮なさいました厚き御志の一端に酬いたいと思ひます。(昭和九年二月八日)

——「慶應倶樂部」昭和九年三月號

鎌田榮吉先生を憶ふ

鎌田先生のおかくれになつたのは、昭和九年二月五日の夜であつた。風邪で寢てゐるところへ、電話のしらせを受け、愚妻は直に御手傳に行くかと促すやうにきいたが、私は氣の張を失つて、ろくに返事もしず、又蒲團の中へもぐつてしまつた。翌朝御宅を弔問し、心甚だ樂しまず、勤先へ出ても鬱々としてゐると、慶應倶樂部から電話で召集をうけた。折悪く重要會議開催中だつたので斷つた。その晩歸宅すると再び倶樂部から電話で、鎌田先生告別式當日弔辭を差上る事となつたが、今日の臨時役員會で、あなたに書いて貰ふ事に評議一決しましたからよろしく願ひますといふ。私はどきんとした。私は弔辭といふものが非常に嫌だ。あゝ悲しいかな——といふのを朗讀されると、佛も浮ばれまいといふやうなはかない氣がするのである。私は駄目です、弔辭向の人間で無い、軟文學の徒にそんな無理な註文を出す事はないと一生懸命で斷つたが、今更そん

な事をいはれては困る、中一日しかないのだから、他へ交渉する暇が無い、皆さん一致であなたに頼むときめたのだから是非とも承知して下さいと云つて肯かない。いはれてみると先方の困るのも想像出來るので、それでは、どうせ後で非難されるに違ひ無いが、一切私の流儀でやりますから其のつもりでゐて下さいと念を押して置いた。

暮の二十四日に引込んだ風邪がこじれて、熱が出たり、咳が出たり、痰がからんだりして、すつかり氣力を失ひ、勤の外には外にも出ず、本も讀まず、ものも書かず、出來るだけ寢るやうに努めてゐたので、久々で机に向ふと勝手が違つて、我家の書齋とは思はれなかつた。僅原稿紙二三枚のものだが、ひどく苦んだ。私は先生の死を悼むおもひに於ては誰にも劣らないつもりだが、そのおもひを述べるのは弔辭の形式が一番いけない。殊に弔辭は之を朗讀する風習があるから、萬一そんな事になると短くなくてはいけない。柩の前で芝居がかつた姿勢を長々と曝してゐるのは堪らない。さうかといつて例のきまり文句を讀上るのも氣羞しいし、あまり自由な形式に流れてもふさはしくない。あゝでもない斯うでもないと考へ迷ふあひまあひまに、倶樂部の役員達の中の一言居士の顏もおもひ出されて、一層苦勞になるのであつた。

それでもどうにか形だけはついたが、われながら實にまづい。そのくせ、それを讀返してゐる

うちに、不覺にも涙が出て來て止める事が出來ない。文章は拙くても、先生の死を悼み、殘念におもふ心持が、涙腺を壓迫して容赦しないのである。これはいけない、若(もし)も式場で朗讀する事にでもなると、みつともない泣面をさらしものにしなければならない。どうしても平靜を失ひ度ないと思ひ、今度はひそかに聲を出して讀んでみると、愈々涙は止め度なく流れて來た。

もとより私は意氣地なしだ。屢々人前で不覺の涙を見せはするが、此の場合鎌田先生でなかつたら、かほど迄に意氣地なくはならなかつたであらう。私は先生には一方ならぬ御世話になつてゐるが、さういふ關係を離れても、今日の日本から先生を失ふ事が實に惜い。殘り少ない一生のうちに、再び先生のやうな風格の人に接し得ようとは考へられない。まことに二なき人物であつた。假に範圍を狹めて慶應義塾社中に限り、福澤先生以後の人物は誰であるかと問ふならば、誰しも鎌田先生の名をあげて答へるに違ひ無い。それ程先生の存在は大きかつた。

今はなつかしい思ひ出であるが、私共幼少の頃は、福澤先生に直接教を受けた人々は、多く三田を中心として住居してゐた。小幡さんや岡本さんは山上塾内に住み、濱野さんや笠原さんは稻荷山の下に塀をつらねてゐた。私共も庭の築山から塾の森を見る位置に住み、その他多くの教職員も近くに家を構へてゐた。三田は、完全に慶應義塾の町であつた。當時鎌田先生は、川ひとつ

向ふの麻布に居られたやうに記憶する。

私は父母、叔父、兄達の口から、絶えず塾の先輩の噂を聞いてゐた。當時世間で三田の十哲などゝいひはやしたのは誰々の事か知らないが、小幡さんも荘田さんも阜郷さんも松山さんも、度々將棋をさしにうちに來た。さういふ高名な人々に對し、父の方が香一枚強いといふ事を知つて、ひそかに得意になつた事も覺えてゐる。中上川さん、朝吹さん、豐川さん、門野さんといふやうな名前も始終耳にし、殊に朝吹さんや門野さんの奥さんは、母のところへ來られるので、よく承知してゐた。しかし鎌田先生の名は私はあまり聞かなかつた。今にしておもへば、鎌田先生は始終塾に居られたわけではなく、地方の學校の校長をして暫く東京をよそにされた關係もあり、私の父とは一寸年齢も違ひ、その上鎌田夫人があまり外へ出られない方だつた事なども、その原因として數へる事が出來るやうである。少なくとも私の小學時代に於て、私は塾の偉い人の中に鎌田先生を加へてゐなかつた事はたしかで、これから見ても先生は新時代の三田に多く關係し、影響した方だとおもふのである。

私が塾の普通部に入つた時は、先生は既に塾長だつた。福澤先生は大患の後で、もはやよぼよぼしてゐらつしやつたが、矢張總元締に違ひないので、私共は塾長といふものを、後日のやうに

偉いものとは思つてゐなかつた。しかし、福澤先生もおかくれになり、小幡先生もおかくれになり、門野先生は學校を去つて實業家となられ、鎌田先生一人三田山上に並ぶものなき大先生となり、その全貌がはつきりあらはれて來ると、次第に先生の偉さがわかつて來た。先生は自分の偉さを認めさせる爲に強ゐて努力をしたり、あせつたり、芝居をしたりするやうな方でないから、曉の光が次第に闇を拂ふやうに、自然に大らかに世にあらはれた。

私は私共の學んだ頃の慶應義塾が、未だ多分に私塾の風を存してゐた事を嬉しく思ふ。先生の數も少なく、生徒の數も少なく、大學と普通部と合せて一千に足らざる人數だつたから、山上で顏を合せるものは互に其の名を知つてゐた。學生が狹い運動場で野球をやり、庭球をやつてゐる向ふの方では、長い袂をひるがへして福澤家の令嬢が自轉車の稽古をしたり、小幡家の令嬢が毬をついたりしてゐる風景は、極めて長閑なものであつた。殊にその令嬢達が申合せたやうに美しかつたのも、學生どものしあはせであつた。

その外に米人教授ヴイツカアス氏の一族も、ゆたかなる色彩であつた。教授は禿頭痩軀、英國型の紳士で、混血兒の奥さんと、仲よく腕を組んで散歩したり、雪の日には夫婦で雪合戰をやつたりしてゐるむつましさを、私共は大層新鮮な景色に眺めた。奥さんは割合に多産で、みごもる

と時ならぬ時にも薄い外套を身に纏つた。あゝ又妊娠した――と口さがない學生は、夫人の姿態の變化にも注意を怠らなかつた。そのヴイツカアス教授の御宅の隣が今の萬來舍で、最初は福澤一太郎氏が住み、大先生歿後一太郎氏が本邸に移られると、あとに鎌田先生が入つた。先生は大型の鳥打帽子を深く前のめりにかぶり、偉大な體格に似合はないふらふらした足取で、袴のずるつこけさうなのにつまづきはしないかとあやぶまれる形で塾監局の煉瓦の建物に通はれた。何か考へてゐるのか、無念無想なのか、わきめもふらず、しかしふらふら歩かれたが、學生がおじぎをすると、相手の顔も見ず、帽子もとらず首だけ一寸うなづいて、又ふらふら行つてしまふのだつた。

福澤先生程の人物の後に登場したのだから、兎角先人をよしとする迷信からいつても、鎌田先生の値うちは割引されるのがあたりまへかもしれないが、生意氣な學生共は、先生は不得要領でいけないなどゝ云ひあつた。不得要領は當時の流行語の一つである。

たしか私共が未だ普通部にゐた頃、塾内に鎌田排斥派があつたと聞いた。排斥の理由は無爲無能だといふので、嘘か本當か、二三少壯の教授が一部評議員と結んで立つたのだと噂された。しかし、何の會議の席か、その洋行歸の少壯教授は、激論のあげく、鎌田先生に襟がみをつかまれ、

會場外につまみ出されたといふ評判が一切を解決した。單純無智なる學生は此の武勇傳を傳へ聞き、不得要領のふらふらの塾長にかゝる決斷と腕力のある事を知つて非常に愉快になり、俄に先生を崇拜する心持になつた。

一年々々と、先生の塾長としての實力と貫祿は認められ、いつの間にか不得要領などゝいふ漫罵は消え失せ、全塾の學生、全卒業生の信望を擔ひ、慶應義塾の發展と共に、先生の輪郭も大きくなつた。先生の偉大さは海の如く、どんな器を持つて行つても漫々と湛へてあまりある趣があつた。どんな偉い人でも、六十七十になると、その能力は發揮し盡した觀があり、その後に多くを望めない氣のするものであるが、先生丈はあの高齡に達しても、少しも精神的動脈硬化の症狀がなく、機會さへあれば、いくらでも伸びて見せるぞといふ底力があつた。先生は一生涯、自分の偉さを誇示しようとした事が無く、あせらず、いらだゝず、ふらふらと歩む姿その儘で、何のこだはりもなく、去るものは追はず、來るものは拒まず、呼吸(いき)の切れた事なんか一度もなしで、あそこ迄のし上つてしまつた。先生こそは、最も大なる非凡の凡人である。

何事にもこだはらないといふ事は先生の一大特徵である。二十五年間塾長をしてゐるうち、塾長の社會的地位は平大臣なぞの及ばないものとなつてゐる筈なのに、いつたん誘はれると惜氣も

なく去つて文部大臣になつてしまつた。世間には大臣病といふ悪疾があるが、先生は大臣になる事を一生の望みにしたわけでもなく、大した出世と思つたのでもなく、子供が新しい玩具を喜ぶ位の氣持で引受けてしまつた。これがざらにある人間だと、自分を高く買はせる爲にも大臣を蹴飛ばし、蹴飛ばした事を自慢にしたがる所だが、先生は例によつて水の低きに流るゝが如く自然に、古きを捨てゝ新しきについた。福澤先生は革命家魂が強く、意氣のすさまじさと共に芝居氣もあり、華族を斷る時なぞは、待つてゐましたといはんばかりの意氣がうかゞはれるが、鎌田先生はくれると云つたら平然と男爵にでも子爵にでもなつたであらうと思ふのである。心頭を滅却すれば火も亦涼し。先生は誘ふ水に誘はれて溺れず、ふりかゝる火の粉を拂はずして傷つかず、しかも坊主臭いつめたい悟顔がなくて、誰人をも懷に抱く溫かさがあつた。塾長としては申す迄もなく、貴族院議員として、文部大臣として、樞密顧問官として、帝國教育會々長として、何處に行つても並びなき人と認められたが、就中交詢社理事長としては、先生の後に又あるべしとも思はれぬ名理事長であつたのも、この風格の爲であつた。

　先生は日本人ばなれした體格と、みづから求める事のない大樣な態度から見て、年少血氣の者には不得要領に見えたかも知れないが、實は極めて行屆いた觀察と判斷を藏し、又咄嗟の間に機

智諧謔を弄する豊かな才能を持つて居られた。その上讀書を怠らず、交際談笑の間に新知識を吸收して自家藥籠中のものとし、常に若々しい心を失はなかつた。その上に明朗なるいたづらを好む童心を多分に惠まれて居られた。これが交詢社のやうな、うるさい人間の集會所で、誰一人にも後指をさゝれず、親しまれ、なつかしがられた所以である。一人の敵も持たないといふ人を、私は鎌田先生の外に知らない。

交詢社にはいろいろの會があるが、先生はどの會にも顏を出し、おめず臆せず衆と共に樂まれた。書の會、繪の會、和歌の會、俳句の會、漢詩の會、どの方面でも柄になく感のよさを示されたやうである。最も驚くべきは、近年西洋舞踏の流行につれて、ダンスの會の牛耳もとつて居られた。深き童心から出る彌次馬氣分は、先生の得意がり、嬉しがる事であつた。交詢社俳句會の宗匠格、大場白水郎氏の談によれば、句會席上これは新しいと思ふものに、屢々先生の句があつたさうだ。型にはまらず、自由に遊ぶ先生の心境の賜であらう。私の家に先生の書かれた一軸がある。「大夢出門矣」の五文字が大書してあつて、何となく先生の大なる理想の片影のやうな氣がするのだが、本當の意味はつかめないので來る人每に聞いてみたけれど、首を捻るばかりで埒があかない。止むを得ず先生におたづねしたところ「タイム・イズ・モニイ」時は金なりさと、さも

嬉しさうに笑はれた。かういふ種類の洒落は自由自在に頻發し、又みづから非常に樂まれた。

私が今、何よりもなつかしくおもひ、度々人にきかせる話がある。大正二年の秋、私は亞米利加合衆國マサチュセツツ州ケムブリッヂの下宿で、紐育三田會からの電報をうけとつた。明日鎌田先生が行くから出迎へよといふのだつた。同じく慶應義塾を出、同じくハアヴアアドに學んでゐた川崎吉兵衛さんといつしよに、ボストン驛で待受けた。この時の先生の用件はヴイツカアス教授の後任として、塾の經濟學部に米人教師を雇入れる事であつた。たつた一晩しかゐないと云はれるので、直に大學に案內し、總長ロウエルと經濟學の大家タウシッグ教授を訪問された。この時は、たしかホイトナックといふ人が選ばれて日本へ赴任したと覺えてゐる。

用件を濟ませ、ボストンに引上げ、支那飯屋で食事をし、先生の發議で寄席に行つた。當時亞米利加は未だ禁酒國ではなかつたが、ケムブリッヂは例外のドライ・タウンであつた。私共は地下鐵へ乘つてボストンへ出る外は、酒を飲む場所を持つてゐなかつたから、たまにボストンへ行く事は何よりの樂みだつた。行けば必ず飲んだ。したがつて、鎌田先生にくつついてゐれば一杯飲めると思ふのは當然の事である。吉兵衛さんと雖も同樣に違ひ無い。ところが支那飯屋でも酒は出ず、いきなりチヤプスイで御飯だ。支那料理は咽喉が乾くから、寄席にゐる間は甚しく渇を

覺えた。咽喉の乾くのは偉い人だつて同じだから、戸外へ出ると直に、何か飲まうと先生の方から切出された。何か飲まうといへば少なくとも麥酒の事と解するのは私共の常識である。しめたと思つて珈琲店に行くと、先生は大きな聲でウヱイタアと呼んだ。給仕の男がやつて來ると、麥酒と云つて一寸間を置き、ひとつとつけ加へ、更に珈琲と切つて、二つと註文された。いふ迄もなく麥酒は先生自身の爲で、珈琲は吾々兩人に下さつたのである。何を飲むかとも、何が好きかともきかずに、いきなり註文して押つけられたのだから、役者の違ふ私共には、ぐうもすうもたかつた。

その晩先生をホテルへ送り込むと、二人は直ぐさま近所の酒場に飛込んで、麥酒ふたつと命じ、かちりと合せて、ぐつと飲み干すと、互に顏を見合せて、偉いものだなあ――と感嘆の聲を發した。（昭和九年三月十二日）

――「三田文學」昭和九年四月號

「雪女郎」立見の記

三宅大輔君は、そのむかし慶應野球部の萬能選手で、後にはその監督となり、又徹底的理論家として著書もあり、斯道の權威であるが、近頃は脚本制作に沒頭し、既にその第一集も出版され、つゞいて集中の一幕物「雪女郎」は、歌舞伎座の檜舞臺で菊五郎吉右衛門によつて上演された。三宅君は今日迄のところ、野球の三宅で知られてゐたものだが、弟の三郎君は篤實なる劇評家として聞え、妹の悠紀子さんは新進の劇作家として知られてゐて、今やこの三人きやうだいは、廣い意味に於て、同じ道にこゝろざす身となつたのである。

私は三宅君の幼少の頃から知つてゐて、三きやうだい夫々直接間接の交渉がある爲、大輔君の著書も貰ひ、又「雪女郎」上演に際しては、愚妻と共に招待をうけもした。ところが暮の二十四日から引込んだ惡性の風邪が何時迄もぬけず、遠縁にあたる醫師の語をかりれば、萬年風邪にとり

つかれたのださうで、少しよくなつたと思つて外出すると又ぶりかへし、咳が止まず、痰がからみ、時には微熱があり、惡感を覺え、一月二月三月と長引いてしまつた。その間約一週間は暇を貰つて完全に寢てみたが、別段何のきゝめもなく、その後は晝は勤に通ひ、夜は早くから床に入つて蒲團をかぶつてしまつた。風邪とはいひながら、三箇月にも及ぶと、からだも疲勞し、氣力も衰へ、殆ど雜誌を讀む事もなく、無爲の夜長をもてあました。全く、八時や九時から床に就いては夜中のたいくつに堪へられないのである。私はつくづく寢あきてしまつた。それでも時々、止むに止まれぬ用事で外出すると、不圖したはずみに襟首に風があたり、寒いなと感じると、その晩きつと咳に惱まされた。私は出來る丈つきあひを斷り、深窓のおやぢとなつて風邪と鬪つた。さうした折柄なので、脚本集も貰ひ放しでなかなか讀まず、この野球理論家がどのやうな戲曲を書いたか、それがどんな舞臺效果をあげるか、好意と好奇心は充分持ちながら、さて外に出る勇氣がなくて、折角のお招も斷つてしまつた。

　私は近年劇場に足を踏入れる事が稀になつた。殊に歌舞伎劇は、時間の長さと劇場内の空氣が不愉快で、たまに勤務先のおつきあひで出かけても、中途で逃出す程辛抱が出來なくなつた。自分から進んで行く事なぞは絶無である。だから、たとへ風邪でなくても歌舞伎座へ招かれるのは

苦痛である。それにも拘らず、三宅君の芝居たけは見度い氣持があり、見ないでは氣が濟まなかつた。結局私は風邪のぶりかへしを惧れるのと、時間の惜さから、一幕丈立見する事にきめたのである。愚妻も誘つてみたけれど、この方は世間の女並に、一日見てゐてもあきず、二日つゞけても喜ぶ方だから、一幕見なぞは眞平だ、どうせなら同じ日に、一番目から通して見ると云つて肯じない。尤も、先年私の妹で、これも別段芝居が嫌ひといふのではないが、立見はした事のないのが、その亭主のもの好きにそゝのかされ、そのかみの十二階の如く登つて登りつきない感じのする歌舞伎座の階段をえんやらやつと上つて、これがかねて聞く立見場かときよろきよろしながら、何處に舞臺があるのだらうと、人々の頭を越して遙かの向ふをのぞいたとたんに、腦貧血を起してへなへなとくづほれてしまひ、亭主に助けられて廊下に出て、長椅子の上に伸びたまゝ、一幕も見ずに引返したのであつて、吾々身內の笑話になつてゐるが、愚妻も高いところへ上つたり、高いところを見上げたりすると、忽ちめまひのする質だから、笑話も笑事でなく、笑ふ者を憎んで居るので、立見ときいておぞけをふるつた。

當日、愚妻は早くから勇んで出て行つたが、こつちは悠然たるもので、風邪のおまじなひに銀座でいつぱいひつかけ、歌舞伎座へ行くと、切符賣場には數十人が、金魚の糞の如く並んでゐる。

私もその末端に加はつたが、まだ前の幕が濟まないので、行列は少しも動かず、忽ち私のうしろに人がつゞき、人がつゞき、人がつゞいて延びて行つた。私もいぜんは方々の芝居を見て廻り、下駄ばきのまゝはひれる立見場の、鐵格子のはまつたうす暗い中で、中賣の駄菓子を嚙る人々にまじり、一種の空氣を感じて昂奮したものであつたが、それも二十餘年の昔となつた。行列をつくつて切符を買ふ辛抱も、歐米遊學當時を打止めにして、久しくかゝりあはない事になつた。

行列をつくつてゐる人々は、いづれも芝居馴れ行列なれた顔つきばかりで、ぽつと出の田舍者などは一人もゐない。お上りさんならば舞臺の上の芝居と共に、きらびやかな劇場内部の設備裝飾に驚き、其處にゆるゆる半日を費した滿足を購はなければ承知しないであらうが、立見の客は演劇を正統に理解するかどうかは別問題として、芝居の數は見てゐる連中である。晩飯の後、寢る迄の時間を樂しまうといふ下町の人が多い。芝居といへば最上の他所行で、さかんに塗りたて、見るばかりでなく見られるつもりで押出すマダムや令孃の姿は見えず、市村は左衞門尾上うめ幸と呼んで平然たる紳士もゐない。ふだん着のまゝ、一寸近所に買物に出たのと同じ心持の人達である。しかし何となく、自分達こそ本當の芝居好なのだぞ、劇通なのだぞといひたさうな表情は持合せてゐるやうである。

私は、その長い行列のなかに、目ぼしいみいちやんはあちやんはゐないかと見廻したが、前にも後にも、時間を忘れさせ、心を樂ませるに足る姿は見出せなかつた。あいにく、風は都大路のアスフアルトを吹きまくつて、舞上る埃は屢々横面をざらりと撫でる。

どどどどどつと、すさまじい勢で人間が吐出された。前席の勸進帳がおしまひになつたのである。どういふわけか、立見の客は幕がしまるとあわたゞしく戸外へかけ出すのが常法である。狹苦しいところで押合ひ、汚ない空氣を吸つてゐたので、生理的にも戸外の風を欲するのかもしれないが、ひとつには寸閑を盜んで一幕のぞいたので、之から先に用事を控へてゐるのもあるだらうし、主人や亭主や女房には內緒で來た氣の咎を感じてゐるのもあるのであらう。又もうひとつには、おしまひになつた事にいつ迄も愚圖々々かゝりあつてゐるのをいさぎよしとしない江戸子の作つた慣例でもあるのであらう。兎に角不必要にあわたゞしく、海嘯に追はれる人の姿で場外へ散つてゆく。

忽ち吾等の行列には生氣が漲り、叩きつけられた蛇が蘇生したやうにうねり出した。列の七分通うしろにゐた私も、押され押されて場內に吸込まれ、長い長い階段を幾曲も幾曲もまがつて上つた。暗い立見場へ踏込んだ瞬間、耳の側で、音羽屋アと叫んだ男がある。忽ち四方から、播磨

屋ア音羽屋アの聲が應援團の如く湧起り、芝居の神様と怒鳴るのがゐると、踊の神様とわめきかへす。いふ事は月並だが、叫ぶ人の心持はたかぶり、意氣と意氣が反響し、又反響した。

それは昔馴染の聲だ。雰圍氣だ。私の魂の中に眠り呆け、正に枯死せんとしてゐた若い時の感激が、揺り覺まされ、思はず知らず伸び上つて見ると、意想外に遠い遠い谷底に、舞臺がちひさく見え、人形芝居の人形よりも稍小型の芝居の神様と踊の神様を發見した。うす暗い、疊もしてない汚ない家で、文字張の戸外には降る雪がしんしんと積るらしかつた。菊五郎のいきばんでしかも低い聲と吉右衛門の肚の底からかすれ切つた聲は、はつきりとは聞分けられないが、せりふ毎に土間棧敷から、わあつといふ笑聲が起り、三宅君の芝居は正に大受と見受けられた。その笑聲の中には、愚妻のもまじつてゐる筈である。しかし、立見の客は笑はない。笑ひたいにも、笑ふ丈はつきり聞えないのである。

恐らく此の劇場内で、立見の客程緊張して見物してゐるのは無いであらう。元來立見はその料金は比較的高く、しかもよくは見えもせず聞えもしないのだから、よくよく時間の乏しい人か、よくよく好きな人によつて存立するのである。だから聞きにくいのを聞きとらうとし、見にくいのを見極めようと努めるのは當然で、虚榮と見せびらかしで、かたちをつけた積りでゐる土間棧

敷の客とは立場が違ふから、うすぼんやりしてゐるのは少ない。

生憎、寫實派の役者は低聲で、舊派では菊五郎、新派では喜多村の如きその派の代表者は、立見の客を悩ます事甚しい。「雪女郎」は、かなりあくどく前受をねらひ、しぐさも誇張されてゐるが、それでも菊五郎のせりふは通りにくい。私も、何とかして一語でも多く聞取らうと、爪立ち、首を突出し、あらゆる努力をして、やうやくあら筋をつかむ事が出來た。雪の降る夜に、共同生活をしてゐる二人の三下奴が、無い金をしぼつて酒を買ひにゆき、歸りみちに墓場をぬけるところで雪女郎らしいものに出つくはして脅えるといふ丈の事で、それを器用に賑やかし、菊五郎には早口の卷舌をつかはせ、吉右衛門にはしつつこく訥らせ、その對照でをかしがらせ、手際よく半時間を樂ませる。その時私は原作を讀んで居なかつたが、直感によれば、吉右衛門は原作に忠實に從ひ、菊五郎は自由に氣儘にやつて居るのではないかと思つた。したがつて、三宅大輔君の欲するものとは違ふ演出なのではないかと思つた。何故かといへば、假にも野球理論家としては、一切の妥協を廢し、最高理論の實行を要求して一歩も讓らなかつた人が、斯う迄新味の無い、理想の影の微塵もない、ありきたりの手で行かうとは想像しなかつたからである。おもひ起す、往年早慶野球戰が二十年振で復活し、戸塚原頭に凄壯の氣を漂はせた時、慶軍の監督は、三宅君で

あつた。彼は學生時代から徹底的理論家で、試合前の選手會に列席する先輩の古い理論、或は無理論に辟易し、その連中の居る間は多く語らず、彼等が辭去する後姿を見送り果てゝ、さあこれからが本當の選手會だと宣言するのを常としたといふ。當時新聞批評家は彼を智將と呼んだが、彼は決して權道を歩むものではなく、米國職業野球團並の盡さゞるなき訓練と、高級なる戰法を求めたのである。しかし、それは二十年三十年前の戰場生殘の先輩には理解し難いものであると同時に、中學を出たばかりの選手連にも、望んでしかも行ひ難いものであつた。復活戰當時の早稻田は、みつちりしこんだ古強者が揃ひ所謂黄金時代にあるに反し、慶應は年少未熟の者が多く、試合は一方的のものに終始した。恐らく三宅君と雖も、この一戰を得る事に多くの望をかけてはゐなかつたであらうが、その後に來る時代の爲に、最高理論の適用に進まんと努めた事は觀取出來るのである。彼の思ふ儘にやらせた結果がどうなるかはひとつの謎であるが、不幸にして彼の理想論と、非妥協性は先輩同輩の支持を得る事難く、永く監督の任にある事なくして退いた。乍然球界に於ける三宅大輔君は、嚴として一國一城の主である。久しく沈默を守つて居るが、觸るゝ者あらば斬らんとする氣魄は未だ失はないやうである。さういふ三宅君に興味を持つてゐる事が、私をして風邪を冒して立見をさせた原因の最たるものであるから、今のあたり小手先の器

用の外に何物をも發見しなかつたのは、滿壘の好機に望をかけた最強打者が空しく三振したのを見た時のやうな、力の拔けた感じだつた。土間棧敷の割れるやうな笑の前に、重々しく緞帳の下りはじめたのを見ると、私も立見の客の常法に倣つて、最先に階段をかけ下りた。

家に歸り、風邪のぶりかへした形跡の無いのに安心し、貰つた儘で封を切らなかつた三宅君の戯曲集を蒲團の中に持込んで「雪女郎」はもとより、ついでに他の戯曲も讀了した。どれもこれも極めて普通の意味での上演向脚本で、構想も表現技巧も會話も、すべて在來のお芝居と少しも變らず、尖鋭なる野球理論家の片影だにつかむ事が出來なかつた。妹の悠紀子さんは將來に期待をかけ、病弱なる肉體を虐げても、最高級の藝術に憧れ、常に野心的な重量のある戯曲の制作に力を盡し、寧ろ悲壯の感をいだかせるが、大輔君は野球に於てこそ毅然として俗論を拒否し、理想主義の孤壘を守つて降らなかつたのに、ひとたび轉向して戯曲制作に從ふや、全くその反對の今日主義を頂いてゐる。曾て村正の妖劍の如き切味の理論家として、その理論には頭を下げても、あまりに理論の鋭ど過る爲に、かへつて實績をあやぶませる嫌さへあつた人が、上演用脚本の水平線に達する事を目的としてゐるやうな、平調無事をねらつてゐるのは意外だつた。恐らく三宅君のこの種の戯曲は、今後も屢々舞臺照明の光を浴びるであらうが、それが三宅君程の人物の望

であつては寂し過る。

そこでひとつの問題が殘る。何故三宅君は野球の三宅と戲曲の三宅とで、かほどに態度が違ふのか。彼は野球理論家として、彼の理論が大衆に容れられない事を知り、たゝかひ破れたものと觀じて、あらたに戲曲家としてうつて出るには、今日主義の賢明なるを痛感した爲であらうか。それではあんまりみじめ過る。彼は今でも、談ひとたび野球に及べば、昔に變らぬ一家の見を持して譲らないと聞く。想ふに彼はあく迄も野球の三宅である事にほこりを持ち、戲曲制作を餘技と見下してゐる人ではないのか。私は明白にさうだといひ切つて、さつぱりした氣持になり度いのである。戲曲に於ては決して一流たる事に願をかけず、素人の氣安さで、只管上演される面白さをねらつてゐるのではないだらうか。殊に三宅君は菊五郎と仲よしだから、その方面の影響もうけ、何時上演されるかわからないやうな戲曲を書く馬鹿馬鹿しい努力を輕蔑してゐるかもしれない。想像を逞しくすれば、三宅きやうだいは、兄は妹の妄想を笑ひ、妹は兄の通俗を蔑視してゐるかもしれない。

又、三宅君の戲曲制作の根本には、戲曲の文學的一面を無視する考があるのではないだらうか。彼は戲曲の筋に興味を置き、情緒とか雰圍氣とか、會話の味とかいふやうな、素人見には一寸形

にはあらはれない方面には何等の關心を持たない。嚴密なる客觀主義を標榜する作家は、屢々自己の主觀を壓搾する事に悩むものであるが、三宅君は努めて之を排除したのではなく、はじめからこんな悩みを持合せてゐないのである。その意味に於て、この筋立の器用な作者は、舊來の座附作者の流を追ふものといふ可きである。最も驚く可き適例は、「雪女郎」について作者自らが斯ういつてゐる。「これは喜劇ではない。自分が幼時にいだいた雪の夜の情緒を描かんとしたものである」云々。しかし、この戯曲を讀んでも、舞臺を見ても、何處にもそんなものは感じられない。雪の夜の象徴は微塵も無く、人の世の諧謔が多分にある。誰を演出者にしても、これを喜劇として取扱ふ外に道は無い。私は立見場の一隅で、菊五郎の奔放な藝風から、私が原作を勝手に變更してゐるのでは無いかと疑つたが、戯曲集を讀んでみると、多少あくどく誇張した事は否めないにしても、決して作者を迷惑がらせる程甚しき變更は加へてゐない事がわかつた。彼是想ひあはせ、三宅君は戯曲はあら筋丈でいくものとし、あとは役者の遣方でどうにでもなるといふ考を根本にしてゐて、文字の上には雪の夜の情緒をあらはさなくても、演出によつてあらはさるべきであると信じてゐるのであらう。

それは無理だよ――今度逢つたら彼の肩を叩いて、さういつてやらうと思つた。そして、私は

三宅君に對し、何を希望しようか。あく迄も素人のなぐさみとして甘んじるならば爲方が無いが、さうでなければ天下の三宅大輔として……寢つかれぬ床の中で無理な要求を組立てゝゐると、とつくに歸つてゐたのであらう、愚妻が枕頭に寢覺の水を持つて來て、「三宅さんの芝居とても面白かつたわ」と、亭主の友達の成功を喜び、芝居きちがひの昂奮をかくし切れない様子だつた。ここにもファンの代表者がゐる。三宅君が今の芝居道に割込んでゆく餘地は十分にある、今後も彼の戯曲は上演され、多くの客を滿足させるであらう。吾々が自分にも出來ない最高要求を提出する事は、誰をもしあはせにしないかもしれない——私は先刻の歌舞伎座の土間棧敷から湧起つた樂しい笑聲と、音羽屋ア播磨屋アの應援團の熱叫をおもひ出して、安らかに眼をつぶつた。

（昭和九年五月二十六日）

——「改造」昭和九年七月號

借家運

麴町下六番町常田家の持家を拜借して住んで、十年になつた。泉鏡花先生の奥さんが見つけて下さつた家で、二百五十年を經過すると傳へられ、先生名づくるところの元祿屋敷である。古び、荒れ、天井も床も低く、西北向の一見甚だ住みにくさうな家で、私の親戚知己の間には頗る評判が惡く、物好きを笑ふものもあつたが、大きな贅澤のいへない吾々には、存外住心地のよい、ありがたい家だつた。いつたい番町といふ土地は、屋敷町だから、商工業には緣遠く、東京市內で最も近代風景を持たないところだ。住民もながく居ついた人が多く、一般に大様(おほやう)で、町內の親和の深い所だ。よく新聞で見るやうな、お祭の時に若衆があばれたり、何かの時に靑年團が威張つたりするやうな事を聞かない土地柄である。殊に私共に幸ひだつたのは、大家さんが非常に親切な方で、何から何迄氣を配り、おもひやり深くして下さつた事だ。いつも、右から入れば左へ出

てしまふ放漫なその日暮らしに祟られ、夏霜枯を嘆じつゝ、長篇小説を書いて急場を逃れようと、汗みどろになつてゐる時に、氣心のわかつた以上は不要だといふ理由で、敷金を返して下さつた時の難有さは今でも忘れず、幾度も他人に話すのであるが、此の世の中にそんな大家さんがあるかしらと、聽者が信用してくれない。

結婚後十年目に、おもひもかけない子供が生れる事になり、子供が生れたら、この西北向の家では困る、何處かに引越さなければならないと相談してゐると、それを知つてか知らないでか、庭さきに上二室下二室の二階を增築して下さつた。勿論家賃はあがるものと覺悟してゐたが、そんな心配は無用だつた。新築の二階に勉強机を移した時、今迄低いところに住んでゐた自分の眼に、近々と迫る空の廣さが新鮮なる驚きであつた。

斯うまでして頂いては、もう何處にも越せないわねえ——と、引越を樂みにしてゐた愚妻は、嘆息するやうにつぶやいた。引越せない、全く引越せない、上下二室づゝ殖えて、しかも家賃が元の儘でいゝといふのでは、何としても引越せるものではない、私は大家さんに追ひ出されない限りは、此處に住んでゐようと思つた。

それから足かけ四年たつた今年の春、大家さんの御庭さきに又一軒貸家が建つ事になつた。私

はあわてた。大家さんのお庭さきは即ち私共の拜借してゐる家の座敷の眼の前だ。そこに二階家が建つとすれば、とりもなほさず我家をうかゞふ望樓の如きものではないか。私は深く嘆息した。今日迄の大家さんの御親切を思ひ、自分達の內心の誓を思ひ出すと、俄に引越す氣にはなれなかつた。それでも、眼の前の空が又暗くなるやうな氣がして、つい愚痴になると、かねてから二百五十餘年の家に反感を持つてゐた親類や友達は氣が早く、何處其處に素晴らしくいゝ貸家があるとか、手頃の分讓地があるから一軒建てゝはどうだとか、ひとの懷も知らないで、さかんにはやしたてる。その分讓地が一坪二百圓だつたり、素晴らしい貸家といふのが家賃一千圓だつたり、言句も出ないのである。いつたい一千圓の家賃の貸家なんてものがあるかしらと反問すると、某工學博士の持家で、南向の崖の上で室の數が二十幾つかあつて、曾ては某省大臣の官邸だつたといふ。ひとを馬鹿にするなといふと、そんならもう少し安いのでは、山の手の何處とかに地坪二千五百、室數四十三で、六百圓といふ格安のがあるといふ。私は愈々驚いてしまつた。それだけの家なら六百圓は格安かもしれ無いが、なんだつて四十三の室が必要なのだ。宿屋か料理屋か病院かと疑つたが、まぎれもない個人の住宅だといふ。實に世の中は廣い。吾々の想像も出來ないお伽の國が到る所に發見されるのである。だが、さういふ風に周圍が騷ぎ立つと、こつちの心も

動いて來る。恰度そこへ、萬事に氣のきく友人が、朝日新聞の廣告欄を切拔いて來て、これはどうだと見せてくれたのが、私の六感にぴいんと來た。「九段坂上眺望佳」――誰の持家かわからないが、三井信託の管理するものである。

豫而私は市內の高臺の崖のふちに住みたい、廣々とした空を眺め、東京の町を見下したいといふ野心を抱いてゐた。九段の上で、萬々一崖のふちなら、其處から見晴らす空はどんなに廣いだらう。私は勤務先から程近い三井信託に足を運んでみた。係の方に切拔を見せると、あゝその家ですか、隨分古いうちですが、番人がゐますから、何時でも御都合のよい時に御覽下さいといふので、直に出かけて行つた。門扉は閉され、貸家札が貼つてあつたが、くゞりをあけて入つて、玄關の呼鈴を押した。明治初年の變革で祿にはなれたといふやうな風格のおぢいさんが、來意を聞いて案內してくれた。雨戶は久しく閉したまゝらしく、中へ入ると黴くさい匂ひが鼻を打つた。老人は頗る飾氣の無い口調で、何しろ八年間空家になつてゐて借手がなく、荒放題に荒れてゐて、鼠の住家となつてしまつたし、肝心の南側は隣家の方が一段高いので風通しが惡く日が當らない、したがつて晝も暗く、夏は暑い、おまけに水洗便所はこはれてゐるし、ボイラア焚の風呂も駄目になつてゐて、とても住めたものではありませんといふ。その言葉は半分は本當らしく、半分は

嘘らしく聞えた。しかし老人は繰返して、私に警告を與へるもの丶如く、かういふ古くて大きい家の住みにくさと、不經濟を數へ立てた。それは私も同感だつた。この家の缺點は、何よりも私共にとつて廣過る事だ。こんな大きな家に入つて、俄に經濟が膨脹し、につちもさつちも行かなくなつたからといつて、信託會社は敷金を中途で戻してくれるやうな神業はしてくれまいと、今迄の大家さんの寛大な心持を思ひ出し、矢張引越は見合せた方が後日の爲ではないかと二の足を踏みはじめた折柄だ。老人が力を入れてあけた緣側の雨戸の外に、芝生があらはれ、その芝生の向ふに、東京の町々が展開された。私はあやふく叫ばうとした。あ丶、何といふ廣い空だらう。空といふものは、決して仰ぎ見るばかりのものではない。高臺に立つて見ると、見下す事さへ出來るのである。私は夢中になつてしまつた。試みに崖のふちに立つて見ると、北の方には小石川の兵器廠が見え、本鄕の帝國大學が見え、眞東にはお茶の水の土手が見え、ニコライの會堂が見え、南の方には日本銀行の建築場の起重機が見え、三越の屋上の旗が見える。遠くにタンクが二つ霞んで見えるのは本所か深川か――それ丈の廣さを一望にをさめて、私は呆然として佇んだ。

その晩家に歸つて今日見た貸家の事を愚妻に話す時、私は自分の本音が吐けず、彼の番人の老人の言葉を借りて、高臺のい丶場所だけれど家は古び荒れ、南がふさがり、晝も暗く、おまけに

風通しも悪いさうだと氣のぬけた事を云つた。何故かといへば、自分の見た儘を報告すると、忽ち愚妻は乘氣になり、後の經濟の事なんか頓着なく、明日にも引越さうといひ出しさうに思はれ、愈々さうなつた曉の家計の不如意が、想像する丈でも重荷だつたのだ。

それにも拘らず、愚妻は翌日その家を見に行き、すつかり昂奮して歸つて來た。家は荒れてはゐるけれども、灰汁洗(あくあらひ)をすれば綺麗になる、東がすつかりあいてゐて、南も隣家との間が十分あるから、暗くもないし、風も通る、あのおぢいさんはあの家がふさがると、立退かなければならないので、いやがらせをいふのではないか、第一子供の健康の爲にも、芝生の庭がいゝ、思ひ切つて引越しませうよと乘氣になる。待て待て、家はいゝかもしれないが、家計費が嵩んでやりきれまいといふと、いゝえ今度こそは儉約して見せますと力をこめていひ放つた。しかしこいつはあてにならない。自分でも今度こそはといふ位で、從來の成績はあまり香ばしくないのだ。だけども、拭掃除だけでも大變だぞ、女中が可哀さうぢやあないかといふと、いゝえあたしも一生懸命手傳ふから大丈夫ですといふ。これも言葉は頗るけなげだが、實行のあがらないのはわかつてゐるから、あまり信用はしなかつた。うやむやに濟んだ積りだつたが、又次の日には、里の母親を引張り出し、大工の棟梁をつれてゆき、その足で三井信託にも廻つて、水洗便所も直して貰へ

る事迄たしかめて來た。女中達にも話したら、みんながどんなにでも働きますといつたといふ。當前ぢやあないか、誰がいゝえ働きませんといふものかと笑つたが、家事は一切愚妻が支配してゐる我家のたてまへから、次第に壓迫されて來た。どうしても奮發しなければならないかなと考へてゐると、滿二歳十箇月の伜までが、富士見えるとこに行きませうなどゝいふ。富士見町といふからには、富士山が見えるに違ひ無いと大人どもの話合つてゐるのを小耳に挾んだものらしい。愚妻の母親も激稱し、棟梁の如きは無責任に、いつそ御買ひになつてはなどゝ、まるで冷かすやうな事をいふのだつた。

はたからおだてられると、凡夫のあさましさで、私はやたら無性に、高臺の崖のふちの、東京を見下す、空の廣さに醉つてしまつた。夜、街々の燈火(あかり)がついたらさぞいゝだらう、それが霧の晩だと一層いゝだらう、月夜は素晴らしいに違ひ無い、朝日の上る頃もいゝだらう、雪の日はきつといゝぞ、夕立の時も面白いかもしれないと、四季いつでもいゝ事にきめて、段々熱が高くなつた。遂に私は自分の心に鞭うつて、大家さんのところへ引越の事を申述べに行つた。私の方では申譯無い氣持に苦しんだが、先樣は他意なく聞いて下さつた。

私はあく迄も大家運がよく、今度の三井信託は名にしおふ大所だから萬事大樣(おほやう)で、あの家は隨

分古く荒れてゐるから住みにくゝはないか、外にもつといゝのがあるといつて、同じ富士見町に近代洋式の貸家もあるから一度見てはどうかと勸めてくれた。私は、高臺の崖のふちといふ條件を伴はない限りは、どんな家だつて魅力を感じないのだが、會社の親切を無にするのも惡いと思ひ、行つて見たが、洋風嫌の私には內部に入つて見る氣も起らず、數秒時門前に佇んだゞけで引返した。

愈々引越ときまり、私の方でも少しは手を入れてもいゝと申出たが、先樣では何から何迄してくれて、留守番のおぢいさんがとても住めたものではないと警告してくれた家が、忽ちあかるく、清潔な家に變つた。

何月何日には引越さうと準備をしてゐると、或晚大家さんが見えて、實は町內の人が御宅の引越の事をきゝつけ、その原因は自分のところの新築にあるのだから、それを見合せてくれと云つて來たが、果してさうならば考へやうもあるといふやうな御話だつた。私は答へて、その新築も勿論引越の動機のひとつには違ひないが、決してそればかりではなく、子供のなかつた昔と今では一家の事情も變り、心境の變化もあり、その上多年の夢であつた高臺の崖のふちの廣い空に心を奪はれた爲であつて、永々の御親切に對し當方こそ心苦しく思ふ旨を述べ、御諒解を得た。町

內の口きゝが誰であるか、いかなる理由で吾々如きものを引留めようとしてくれたのかわからないが、麴町も番町界隈は戶數も人口も少なく、商賣家にとつては四人五人の家族でも引越されるのは苦痛なので、馴染の床屋の親方か、酒屋の主人か、打揃つて出向いたものと想はれる。

さういふ町內の人達に對し、又大家さんに對しても、あとに入る人を紹介して立退きたいと思つたが、なかなか適當な人がなく、一脈の心咎を感じつゝ、五月二十八日に移轉した。幸に、間もなく、私共でも御世話になつた事のある小兒科の先生が私共のあとに越して來たと聞いてほつとした。尙その上に、新築の貸家も出來上り、同時に或る高名の小說家の控家となつたと聞き、かげながら喜んだ。

さて引越にはつきものゝ向三軒兩隣に蕎麥を配る段になつて、あまり相手が堂々としてゐて羞しくなつた。向三軒のむかつて左は曉星中學校で、眞中は地方の豪家の控家で、右は何といふ家か門札も古びてゐるが、自家用ガレエジもある家である。兩隣の南は有名な富豪の一門で、北は曉星小學校だ。どつちを向いても、もりそばの五つや六つ持つて行かれた景色でない。どうしたものかと迷つてゐるうちに、うやむやになつて缺禮した。

家は古いけれど、障子も疊も新しくなつてみると、留守番のおぢいさんの言葉を裏切つて、あ

かるく、住心地よく、風は涼しく吹いて通る。たつたひとつおぢいさんの警告をもつともと思つたのは、家が大き過ぎて人手のかゝる事ばかりだ。どうしてこんないゝ家が八年間もふさがらなかつたのか、格安の家賃で借りる事が出來たのかと不思議がつてゐると、或人が來て、この家にはけちがついてゐるからですといふ。その話によれば、大正十二年の大地震の時、庭さきの崖が崩れて下の家をつぶし、たしか一人死んだ筈で、おまけにその當時の持主だつた某は、關係會社の財政を左前にして行衛不明になつたといふ。しかし、そんな詮索をすれば、どんな貸家だつてけちはつくに違ひ無い。崩れた崖はコンクリイトで固められ、その堅牢なるが如く今度の住人は榮えるであらうとうらなつてもよいであらう。

新居の庭は廣く、大部分は芝生で、高臺の見とほしをきかせる爲に多く樹木の植ゑてないのが、この家の前の持主のよき趣味を物語るものと思はれる。八年間空家となつてゐたゝめか、その芝生の中に、或は外に、雜草の夥しいのが嬉しかつた。れんげ、たんぽぽ、草あやめ、水引草、あかのまんま、薊、かたばみ草、月見草、その外よく見る草で名を知らないのが、風に乘つて來た種子が自然に根を下したのか、又はわざわざ好んで植ゑたのか、荒れた庭の趣を深くしてゐるのである。私はその數々の雜草を、前の持主が好んで植ゑたものとおもひ度かつた。關係會社の經

營上兎角の噂があり、世の非難の的となつた一人の實業家が、その全盛の日に、庭に石を置き、松や梅を植ゑるかはりに、野の花を移し植ゑて樂んだといふ風格を想像して見度いのである。

その雜草の中に立つて、遠く下町を見下すのが、越したその日からの日課になつた。はじめての日、崖のふちに佇んでゐると、眼の前の青空に鳶が悠然と輪を描いて舞ふのを見た。東京の空に鳶を見ざる事久しかつたので、幼い日の事など思ひ出しつゝ、何時迄もその姿から眼を放さなかつた。おい、鳶が飛んでゐるぜと、うちの者にも喜びを分ち、ひどく喜んだが、數日たつと家の者達の間に、あの鳶はお隣で飼つてゐるのだといふ噂が生れた。その昔、私も鳶を飼つた事があり、恰も日清戰爭の後の事で、彼の黄海のたゝかひ最中、高千穗艦に鷹がとまつたといふ瑞祥が生々しく語り傳へられてゐた頃だから、とまり木に足を縛つてとまらせたのを、それになぞへて樂んだが、鳶を放し飼ひにする事は出來さうに思はれない。お隣の大木にでも巣があるのだらうと否定したが、何といつても崖の上の自分と同じ高さに鳶の姿を見るのは嬉しかつた。

移轉後間もなく、私は臺灣へ出張を命ぜられて、約一箇月留守にしたが、歸つて來ると家の者は逗子へ行つてゐて、九月の末迄歸らないといふ。廣い家に一人ゐる所在なさから、私は毎日勤務先から歸ると、雜草の庭に出て、時には芝生に寢ころがつて、暮れ切らない夏の夕空を仰ぎ見

た。そんな時、珍しく歌のやうなものが湧いて來る。私はそれを筆紙にうつして推敲する程の氣にもならず、大氣の中に出まかせに放送した。

東京のなかばをのぞむ高臺に貸家ありたる夏のよろこび
十年程住む人もなく荒れはてし家のめぐりに月見草咲く
鬼薊待宵草のはかなげに咲く庭荒れて住む人もなし
春來れば土筆(つくし)つばなの萌出(いづ)るたのしみをかけて借りし家かも
隣屋は分限ときけば引越の蕎麥も配らずその日草摘む
素はだしの子がかけ廻る青芝のほかに木のなき庭のよろしも
かれがれになりてなほ咲く植木屋が盆にくれたる朝顔の花
芝よりも雑草多くはびこりし庭の月夜にしげき虫の音
高臺にはじめて住めば月青き空近みかも雁なきわたる
廣告の風船あがる南の空のかなたに海見ゆらんか
深川か本所かしらず遠霞たなびく果てを飛行機の飛ぶ
寢て見れば芝生にまじる草あやめ風にゆるゝもあはれなるかな

口をついて出るたゞごと歌は、風に乘つて崖の向ふの空に消えてゆき、身のめぐりにもの柔かな感傷が漂ふ。センテイメンタリズムは文學の外道であるとして、極力これを排除するにつとめたのは愚かな事ではなかつたかとさへ思ふのであつた。(昭和九年九月三十日)

――「三田文學」昭和九年十一月號

「註文帳畫譜」ちらし

泉鏡花鏑木清方――と兩先生の名が並んだゞけで、吾々は忽ち美しい人情風俗のみちあふれる理想世界を想像し、感情陶酔に誘はれる。鏡花先生の名作「註文帳」は、ひとたび人の心にしみ入ると、一生涯忘れられない凄艶悲調の物語で、恐らく清方先生も、鏡花世界の因縁の絕ち難さから、どうしても繪にしないではゐられない、みこまれた心持で、この畫譜の制作をおもひたゝれたのではないだらうか。

明治大正昭和にわたる我國の文學の主流が、廣い意味に於る寫實主義、世態描寫主義である事は疑ひない。その中にあつて、鏡花先生は超時代作家として、けなしても、罵つても、嘲けつても、遙に高い頭上に燦として輝く明星の位置を占め、兎角時代とは無緣のやうにおもはれ勝だつたが、今日になつてみると、先生の作品の中に最も強く「明治」の感情が描かれてゐる。因緣を作

のくさびとし、幽靈さへあらはれる「註文帳」にも、今や吾々は作品そのもの丶魅力と共に、限りなき「明治」のなつかしさをおもふのである。

今日の清方先生を浮世繪派と見るのは少しくはゞかられるが、世態風俗をうつす事を旨とする流派に數へるのは差支あるまい。しかし先生は、當世婦女の姿を描く場合にも寫實風ではなくて、あく迄も理想派である。先生のひと丶なりは、この世の中にはびこる粗野猥雑を潔癖に排除して、理想美の創造に專念せられるやうに見える。その結果世態風俗畫の陷り易き卑俗、なまなましさとは遙にかけはなされた域に達し、清楚極まつて神韻生ずるが如き幽艶なる線と色は、觀る者を恍惚たらしむると同時に、肅然襟をたゞさせる。先生は風俗畫家として大正昭和の世態をも描く。しかしその作品には何處迄も明治時代にはぐ丶まれた感覺がついて廻つて離れない。吾々は先生の作品に接する時、畫面の時代の如何を問はず、限りなき「明治」のなつかしさに打たれるのである。

鏡花清方兩先生は、お互に相手の藝術を尊敬しあふ羨むべき仲よしであり、又文と繪とこれ程うつりのい丶とりあはせも珍しいが、しかも各々獨自の個性に生きて、文品と畫品は決して同種のものでは無い。たとへば鏡花先生の藝術は己れの道德を他人にも求め、情熱の高潮する時、屢

々氣を負つて啖呵を切る積極性に富んでゐるが、清方先生の畫品は何處迄も己れを守つて動かず、靜に來る者を待つものゝやうである。從而（したがつて）新小說社版「註文帳畫譜」も、鏡花先生の原作の趣をうつす事に忠實なるものと見るよりも、その作品の中に見出した清方先生獨自の情緒の丹靑による表現と考へるのが至當である。その意味で、原作と畫譜とあはせ見る時、一層感興は深いのである。（昭和十年三月三日）

――「時事新報」昭和十年三月五日

輝く編輯者

「輝く三田の編輯者和木清三郎氏」と、新聞だつたか雑誌だつたか忘れたが、文壇噂話の中に書いてあつた。若い時から頭の地肌の透いて見えた特徴をからかふ意味では毛頭無い。今日の「三田文學」のはなばなしさと、そのはなばなしさを招來した編輯者の颯爽たる姿をたゝふる言葉である。その噂話は、もとより眞面目なものでは無かつたが、私には見過せなかつた。長い間、冷酷に默殺され、不當に輕蔑された「三田文學」が、冗談にもしろ洒落にもしろ、「輝く」といふ文字を冠せらるるに至つたのだ。それは和木氏のみが頂くべき形容詞では無い。輝く「三田文學」の輝く編輯者と解して差支ないのである。

さうかと思ふと或雑誌には、いろは歌留多になぞらへて「ふるはぬ三田文學水上瀧太郎」といふ、七色唐辛から唐辛を抜いたやうな、きゝめのないいやがらせも出てゐた。人間といふものは、本

當の事をあまり突込んで云はれるのは喜ばないから、若しも「ふるはぬ水上瀧太郎」なら、私も苦い顔をしたかもしれないが、今日私は老い、氣力を失ひ、只管休息を願ふのみであるから、振はざる事勿論だが、「三田文學」の方は次第に滿潮の勢を示し、その存在價値はやうやく一般に認められて來たところである。いろは歌留多の思ひつきの淺さは、何か根性の卑しさを想像させるばかりで、痛くも痒くも無い見當はづれは、たゞ笑ふ外ないのである。

しかし「三田文學」が「輝く三田文學」となるのには、完全に十年の歲月を要した。一代の文豪永井荷風先生を主幹とし、學校も大乘氣で、廣く當時の新人を糾合した前期「三田文學」の功績は別とし、澤木四方吉氏を主幹とした第二次「三田文學」は、種々なる原因で衰運に傾き、遂に大正十四年、何の豫告も無く、吾々同人にさへ通告もせず、風船玉のしぼむやうに、ひつそりとつぶれてしまつた。その衰滅の原因については、私は屢々書き、又公衆の前で喋つたから、玆には略すが、大正十五年復活以後は身を以て當つた一人なので、つぶさに辛苦をなめた。勢ひよくいひ切れば、私は「三田文學」の爲に鬢髮霜を置き、精神肉體共に疲れ、人生の働き盛りを、とりかへしのつかない事にしてしまつた。

二十五年前、學校は「三田文學」を創刊する勇氣を起した。初期慶應義塾こそ各方面に人材を出

したが、官界からは夙の昔に追ひ拂はれ、教育界からも繼子扱ひされ、たゞ一筋に銀行會社方面の月給取を供給するに過ぎない學塾となり果てんとした時、せめては文筆の士を送り出さうといふ野望には十分意義があつた。多年賣込んだ月給取養成所としての世間の人氣と學內の氣風は、頗る根強いもので、雜誌創刊前後の塾の文科の卒業生は、年々數名に過ぎなかつた。さういふ土壤を耕し、種子を蒔き、收穫を得るには長い間の忍苦がなければならない。しかも學校には其の辛抱がなく、待ち疲れ、つちかはず、十四年廢刊の時の如きは、當然爲すべき手配さへ怠つて、うやむやに終つた事上述の通りである。

けれども「三田文學」は、學校當局の希望する效果を、多少なりとも擧げた事は否定出來ない。近代日本文學史上最大の運動だつた自然派に對抗し、「スバル」「白樺」と共に次代の文學を誘導する事に貢獻したばかりでなく、僅かながらも作家を生み、文學志望の學生を三田山上に集めた。それは全く永井先生の力で、當時の先生の活動程はなばなしいのは、前後にその比を見ない。人生の無意義と退屈を說く文學に暗澹たる氣持を背負はされて惱んでゐた若者共は、淸新なる情緒感覺を豐富なる文字で描き出した文章の魅力に陶醉し、風を望んで來る者が俄に增した。私の如きも、その頃の學生の一人として、親しく先生の風格に接し得た感激は、一生の幸福として忘れ

ない。永井先生は、慶應義塾にとつても偉大なる功勞者であつた。しかし、作家は短時日にして輩出するものでは無い。學校は當初の熱情を冷却させ、あくびをし、永井先生が辭任されると間もなく、雜誌に對する興味と期待を失ひ盡してしまつた。

第二代目の主幹澤木氏は、歐洲留學から歸ると、塾内にひとつの文化運動を起し度い希望を持ち、學生の指導にも熱心だつた。幸ひにしてその頃は、永井先生の文名を慕つて來た學生も多く、小島政二郎南部修太郎井汲清治三宅周太郎水木京太宇野四郎西脇順三郎石井誠勝本清一郎諸氏の如き、後年有名になつた人も揃つてゐたのだが、既に石と化してしまつた學校は、吾關せずの態度をとり、愚圖々々してゐるうちに澤木氏は健康を害して鎌倉に引込み、「三田文學」は生氣を失つてしまつた。

雜誌は翌年復活した。しかし、當時の學校當局が、心から此の復活を希望したかどうかは疑はしい。少なくとも一部には、初期以來の形式内容の雜誌の復活を喜ばない人もあつた。私の役廻は、今日あるが如き雜誌復活の急を說いて廻るチンドン屋であつた。臆面もなく先輩を訪問し、その人々の評議員としての力を借る運動もした。當局にとつては、うるさい、こざかしい、出しやばりとして、鼻つまみだつたに違ひ無い。

兎に角雜誌は復活の運びとなり、同人間の年長者として、又最も熱心なる復活論者として其の實行に當つた私が、推されて主幹たるべきであつたが、教職員以外の者ではいけないといふ理由で、學校は之を許さなかつた。資金乏しく、人手少ない仕事だから、同人は多大の犧牲を拂はなければならなかつた。或人の如きは、雜誌を背負つて街頭に立たうと主張したが、私もひそかに其の位の事をしなければ立ち行くまいと考へてゐた。しかし學校關係の有志、吾々同人の友人知己の俠援があつて、微々たる存在を持ち堪へ、輝く今日を迎へたのは、滿足此の上も無い事である。その間、編輯事務を擔當した二人のひと、勝本清一郎氏と和木清三郎氏の功績は頗る大きく、雜誌が今日迄存續し且次第に隆盛になつてゆくのは、主として兩氏の賜である。

勝本氏は、暫く私と同じ大家さんの邸内に住んでゐたので、その苦勞は私の眼前に生きて動いた。いつたいに文學者は自我が強く、共同の精神に乏しい。實行よりも批判に鋭く、編輯者の遣口に不滿を抱くと、忽ち攻擊の火蓋を切るか、然らざれば背いて去つてしまふ。勝本氏も氣性の勝つた、他に屈しない人であるが、編輯者の立場を顧みて、よく不愉快を忍んでくれた。もう厭だといひ出した事もあつて、それをなだめるのも私の仕事だつた。氏が種々の事情で辭任した後は、平松幹夫氏が引受けたが、間も無く大患に罹つて和木氏と變つた。正直にぶちまけてしまふ

と、和木氏は直情徑行の爲か非常に誤解され易い人で、久しい間私は兎角の評判を聞かされてゐた。けれども、何が惡いといふ筋の通つた事は無いのだから、單なる毛嫌に過ぎないやうに思はれた。曾て「改造」の編輯に從つた事もあり、書店を營み、出版の經驗もあるので、最適の人と認め、依賴する事に決したのであるが、之が何よりのしあはせだつた。原稿を集め、取捨し、校正をするばかりでなく、何よりもやりきれない廣告取りもしなければならず、しかもさういふ苦勞に同情もない小言、注言、不平をさばく、一切の仕事を一身に引受けてやらなければならないのである。和木氏は熱情あまりあつて、時には人あたりが強過るから、反抗を招き、衝突し、中には短慮にも去つて歸らぬ人もあつた。或は排斥運動と見てもいゝ策動も、無かつたとは云ひ切れない。しかし、氏の熱心と實行力と時日とは、やがて總てを解決し、今日誰人も氏を不適任といふ者はなく、人々の感謝を一身に浴びて「輝く三田の編輯者」となつた。

いつたい私は出無性のつきあひ下手で、文學は好きだが文壇は嫌ひである。この態度が雜誌の爲にも後進の爲にも損な事は百も承知だが、持つて生れた性分で如何にもならなかつた。ところが和木氏は常に文壇との接觸を心がけ、同人を廣く世間に紹介する事に努めた。他人の爲に進んで働く事を惜まない事、氏の如きは珍しい。輝く編輯者たることは、すべて此の美德の爲といつ

ても差支ない。同時に又、和木夫人が、常に雜誌の用務で出歩き勝の良人の留守をあづかり、家業一切を引受けて後顧の憂なからしめたかくれたる功績に對しても、吾々はよき機會に感謝の意を表し度い。

一方私は、次第に疲れて來て、和木氏不斷の鞭撻をうけながら、之に酬ゆる事が出來なくなつて來た。もともと熱心な投書家だつたのが、復活後は一回も休まず、每月寄稿した。それは同人への約束であり、又私を支援してくれる雜誌購讀者に對する義務心のあらはれであつた。單に每號顏を出してゐるといふ事は、些かも誇るに足りない。文人としては、よき作品を書く事こそ意義があるのであつて、百の駄文は千の駄文と同じく無價値である。さういふ愚かなる意地を張る爲に、私は貴重なる時間と、たゞさへ殘り少ない精力を浪費してしまつたのは、悔いてかへらぬ事である。それればかりでなく、私自身では雜誌の經營に白紙をもつてのぞみ、自分の好みを出來る丈出し度ないと思ひ、いひ度い事もいはず、やつて見度いと思ふ事も差控へ、次第に意氣地の無くなる自分をはかなく思ふ位だつたが、他人が見ると、「三田文學」は水上臭芬々として鼻持ちならずとする人もあり、その爲に雜誌が迷惑し、雜誌に作品を載せる若い人達の出世の妨となる事さへ想像されるのであつた。この邊の事をくどくど述べるのは略し、最もよき例として、もう

一度文壇いろは歌留多を借用しよう。「ふるはぬ三田文學水上瀧太郎」。

身心共に疲れた私は、自分自身を救ふ爲に、同時に又「三田文學」そのものゝ内部から湧起る精氣を潑剌たらしむる爲に、昭和八年末を限りとして、我が「三田文學」の編輯委員を辭した。隱居の私は一二年完全に休養する事にし、又若人の邪魔とならぬやう、つとめて會合にも顔を出さず、「三田文學」を見る世間の眼から、一日も早く忘れて貰はうと望んでゐる。

ところが情誼に厚い和木氏は、老いたる私を憐んでか、なかなか解放してくれないのである。事毎に相談に來られ、原稿を書かせようとし、諸會合に引出さうとし、元氣づけ、おだて、娑婆氣を起させようとする。その心持は難有いと思ふけれども、私の隱居のこゝろざしを完全に遂げさせてくれないのは迷惑である。それやこれやで、私と「三田文學」との關係を、世間は相變らず切離しては考へてくれない。たとへば、「三田文學」が賞を懸けて學生の創作を募ると、或新聞はこれを私個人の思ひつきに出で、私の懐から直接賞金が與へられるものゝやうに報道した。又最近の「三田文學」に復活十周年記念賞金五百圓を、今年度「三田文學」に掲載せられた作品中最も優秀なものに與へるといふ豫告が出ると、あれはあなたが御出しになるのですかと訊ねる人が二三にとゞまらない。すべて斯くの如く、「ふるはぬ水上瀧太郎」と結びつけて考へられては「輝く

「三田文學」の迷惑であるが、これとても一半は和木氏の罪で、記念賞金の發表に際し、「右作品を選定すべき委員は水上瀧太郎これを定む」と堂々と規定してゐるので、隱居が隱居にならず、忽ち賞金と私とを結びつけて想像されるのである。「三田文學」にとつて、腐れ緣といふ外は無い。

先頃の新聞紙傳ふるところによれば、實業家望月軍四郎氏は慶應義塾教職員養老資金として壹百萬圓を寄附されたさうである。望月氏は、獨立獨行の成功者で、私も面識があり、その風格を深く尊敬してゐるが、豫而學問教育の爲に資財をさかれる事多く、殊に慶應義塾の學風と、その理事者に信頼する事深く、今回の如き思ひ切つた申出をされたのである。官學と違つて私學には、恩給の沙汰もあり得ない實狀だから、此度の望月氏の美擧が、塾内に異常の感動を捲起した事はいふ迄も無い。望月氏は勿論富豪には違ひ無いが、財閥と呼ばれる程の際では無いであらう。よしんばさうであつたにしても、百萬の金を無償で投出すのは容易でない。從來とても、富豪が社會の爲に寄附行爲に出た事は稀では無い。自發的の場合もあるであらうが、多くは他の慫慂に應じ、又屢々或種の壓迫を匂はせられて之を行ふに至つた場合もあるであらう。その爲に勳章を貰ひ、位を貰ひ、貴族院議員になつた人もあるであらう。しかし、私學慶應義塾は、たゞ感謝の意を表する外に、望月氏に酬ゆべき何物をも持たない。

この望月氏の美學は天下の人が知つてゐるが、殆んど時を同じくして「三田文學」に對し有意義なる寄附の行はれた事は、義塾關係の人々も承知してゐない。これが「三田文學」復活十周年記念賞金として、同誌に豫告されて居るもので、或る匿名の人から、年々五百圓づゝ向十年間寄附の申出があつたのである。百萬圓と五千圓では、その金額に距りのある事勿論だが、寄附の對象を比較して見ると、「三田文學」にとつての五千圓は、慶應義塾教職員養老資金としての百萬圓に劣らぬ感動的出來事である。此の申出に接した和木氏が、吉報をもたらした時の昂奮は、今も私の眼前にありありと浮んでゐる。若し私が氏の感激を煽り立てたならば、氏は手放しで涙を流しつゞけたであらう。

寄附者は絶對に名を出し度くないといはれるので、遺憾ながら其の約束を守らなければならないが、曾て慶應義塾に學んだ人には違ひ無い。文學を愛し、何等か文化的の仕事に貢獻し度いといふのが眞意と推察されるが、又一面には「三田文學」同人が多大の犧牲を拂つて雜誌を守り育てゝ來た努力に對し、殊に編輯者和木氏の勞苦に對して多大の同情を寄せ、復活十周年を好機として今回の申出をされたのである。その寄附金を如何なる方法で使用するかは、私に一任し度いといふ申添があつたといふ事で、その信頼に對して深く感謝すると同時に、隱居の身を顧みて躊躇

した。おもふに寄附者は、多年の私と雜誌との關係及び同人中の年長者である點から、私を名指されたのであらうが、こゝにも亦隱居を認めざる世間があつたのでは無いかとも思ひ當る。賞金は年々異なる方法で使用される事になるだらうが、斯かる有力なる後援者を得て、我が「輝く編輯者」の光輝は一層赫々たるに違ひ無い。(昭和十年四月四日)

——「三田文學」昭和十年五月號

から最負

何が面白いといつて、相撲程面白いものは無い。私は生來勝負事が好きで、暇があるなら将棋も花合も洋式骨牌(かるた)も麻雀(マアヂャン)も凝つてみたい方である。運動競技は野球も庭球も蹴球も水泳も、その他いろいろのもの、どれもこれも面白い。ところが俗事多端、日常生活の營みに追はれ、ほしいまゝに之を追及する事は許されない。そこで自分の慾望整理を斷行して、數年來將棋骨牌を手にせず、麻雀は流行の最初にあたつて遊び方を習つた丈で深入りせず、運動競技の見物も制限をきびしくし、今では野球と相撲をのこすばかりだ。なほ今後そのふたつのどちらか一を選んで他を捨てなければならない場合にたち至つたら、私は躊躇なく野球を捨てゝ相撲を守る。一月と五月の本場所を、思ふが儘に見る事が出來れば、他の一切の享樂はなくてもいゝと思ふ事がある。

誰もしる常陸山梅ケ谷對立時代は、未だ西洋近代のスポオツが一般大衆の興味をひかず、勝負

事の好きな人間は、こぞつて相撲に血を湧かした。恰も後年の早慶野球戰の如く、天下を二分して常陸山黨にあらざれば梅ヶ谷黨で、一度も本場所をのぞいた事の無いもの迄も、いづれかを贔負にしてその勝利を祈る有様だつた。今も吾々年代の者、或はそれ以上の者は、當時を追懷して感傷癖にとりつかれ、昨日かすべてに於てまさり、今日が一切劣るが如き言辭を弄びやすいが、これは愼重に考へなければならない。

殘念な事には、相撲は時代を異にするとその強弱を比較することが出來ない。人は兎角過去の力士を回顧する時には其の最盛期のみをとりあげ、之を現代の未完成の力士と對比して論じたがる傾向がある。同じ番附に名前の對峙するものでも、その生涯の上り坂にあるものと、下り坂にあるものとを比べては公平を失し易い。たとばへ、常陸山と太刀山は、私の知る限りに於て(私より一時代前の人は必ず初代梅ヶ谷の名をあげて異議をさしはさむに違ひ無い)明治以後最強の力士であつた。此の二人は幾度となく土俵で勝負を決して居る。それでも、兩者の最盛期に於てどつちが強かつたかを斷定するのは困難である。常陸山は早く死んだが、太刀山は現存し、屢々雜誌に談話を載せてゐる。それを見ると、筆記者の無智も手傳つてゐるが、常に自分の方が強かつたやうに話してゐる。甚しい時は、初顔合せの場所でも常陸山を負かしたといふ大法螺迄書い

である。しかし、當時を知る者が公平にいへば、兩者はその盛時を異にするもので、太刀山入幕の頃、常陸山は既に最盛期に在つて、後年無敵と稱された前者の鐵砲も、決定的に效果をあげる事は出來なかつた。太刀山が常陸山を連破するに至つたのは常陸山の土俵の晩年で、そこに太刀山の完成期が來たのだ。互に勝負を爭つた力士でさへ、その強弱は俄に決し兼るのであるから、時代を距てゝはその無理が一層大きくなる。殊に土俵の廣さが違ひ、東西對抗が總當りとなり、更に加ふるに相撲技そのものが革命的進步を遂げた今日と往時を比較して、彼を強しとし、これを弱しとするが如きは、動脈硬化的偏見といはなければならぬ。もとより上例の二力士の如きは、稀代の強豪であるから、時代を超越するものかもしれないが、それにしても當時の取口で、果してよく玉錦のはげしい寄身に對し、必勝を期し得るや否や、まして況や梅ヶ谷國見山駒ヶ嶽等が武藏山男女の川と對峙して、よく之を連破し得るや否や。

こゝで先づ考ふべきは、今日の相撲が昨日の相撲でない事である。今日の相撲はあくまでも積極的である。出足が早く、變目が早く、互に攻めて攻めて攻めぬかうとする。實力第一と稱されながら、未完成の強さの故に屢々期待をうらぎる男女の川の、最大缺點と思はれる出足の遲さも、明治時代だつたならば、さほど際立たなかつたに違ひ無い。私は常陸山と男女の川を同時代にあ

らしめて、これを力闘させる事を空想する丈でも、十分感激に醉ふ事が出來る。

強い弱いを別にしても、なほ且昔の相撲が面白く、今の相撲はつまらないといふ人がある。所謂寛政式の四相撲を古典美として尊ぶ事は結構であるが、私見を以てすれば、最初から雙方が四に渡る事を型の如く心得、それから一呼吸して揉合ふ相撲よりも、先づ出足早に突かけて、互に攻め勝たんと先手を爭ひ、力の均衡が破れずに、はじめて四につがふ相撲の方が遙かに面白みは深いのである。今日の相撲は、立上つた時から勝負のきまるまで、千變萬化が一の律動によつて機械の如く展開し、その間一瞬の休みもなく、寸隙も許さない。闘志の旺盛、出足の迅速、技法の巧緻、緊張感、第一のわざと第二のわざとの變目の細かい味、これこそは現代積極的相撲技法の面白さである。不幸にして、毎場所初日から千秋樂迄桟敷に姿を見せてゐるファンの中にも、かゝる變革の行はれた事を、看過してゐる人がありはしないか。隙だらけ、むだ手澤山の勝負でも、四相撲でありさへすれば習慣的に讃稱する傾が未だにあるのではないだらうか。

何が相撲技法に革命を起させた原因か、これは彦山光三氏あたりの研究にゆだぬべきものであるが、人智の發達や力士の切磨による外に、近代社會思想が影響した事も考へ度い。強いものにはかなはないといふ封建思想が土俵の上にあらはれて、上位の力士につかまると、早くも勝負を

投げてしまふ實例は、いぜんに多く、今日は殆んど無い。たつたひとつの得意の手を、相手かまはずに連日用ゐて、勝つも負るも洒然たる力士のあつた事などは、樂しき夢となつたのである。いかに相手が強くても、僅かなる破綻につけ込んで、勝機をつかみ得る瞬間のある事を、どの力士も強く意識するやうになつた。土俵上の民主的思想は、總當式となつて一層はつきりしたやうに思はれる。

同時に又、革命の動因に、英雄の力の働いた事を忘れてはならない。私は思ふ、若し常陸山谷右衛門の出現がなかつたなら、今日の相撲は斯く迄發達しなかつたであらう。太刀山は強かつた。梅ケ谷は上手だつた。私の最も好んだ荒岩の技の冴は、殆んど藝術の域に達してゐた。その他もろもろの名力士を見た。しかし彼等の大多數は個人的英雄だつた。ひとり常陸山は角道をしよつてたつ概があつた。彼程將來の角道に對して大なる力を發揮し、影響を與へた者は無い。そのひとつに、彼が弟子達に與へた訓練が、後日の角技に根本的革命をもたらした。彼自身は、前へ出て行く方ではなく、受けて立つ力士であつたが、弟子達にはあく迄も突進してゆく相撲をとらせた。小常陸大の川碇潟(いかりがた)以下、比較的體力に惠まれない者が、舊態を脱しない相手方の錦繪相撲の弱點に乘じて、身上不相應の働きをしたのは、偏に出羽の海部屋の積極的取口によつて猛練習を

積んだおかげである。やがて相手方も、消極的取口では對抗出來ない事を悟り、遂に今日の如く進歩した相撲を招來したのである。

相撲の面白さは、土俵の上の勝負ばかりでは無い。時代と共に進歩する動向や、一人の有望力士があらはれ、之が次第に完成されてゆく過程、次に又他の有望力士があらはれ、前進者に迫り、やがて自らを完成する推移の如き、廣大無邊の面白さである。相撲の發生が古く、その形式も古風を守つてゐるところから、兎角守舊的觀方に迷ひ込み易いが、それは相撲を正解するものでない。相撲も亦社會人生の諸相の如く、常に進展して止まぬものと考へ、觀者も共に新鮮なる感覺と、明晰なる理智をもつてついて行かなければ、その眞の面白さを感得する事が出來なくなる。

(昭和十一年三月十八日)

――「相撲」昭和十一年五月號

相撲雜記

はじめて本場所の相撲を見たのはいつであるか、正確に語ることは出來ないが、私のうすぼんやりした記憶の中に、初代西の海が大戸平と組んで、東の二字口まで持つて行きながら、力士溜へうつちやられた光景が浮び上る。果して西の海と大戸平の勝負だつたか、或は他の力士の取組と混亂しながら、勝手に西の海と大戸平だときめてしまつてゐるか、それもたしかでは無い。しかし、あかぐろい西の海と、うす黄色い大戸平の肌の色まで、我が記憶の幻燈にはうつし出される。それが私の最初の相撲見物であるかどうかはわからないが、それより古い記憶は何も無い。恐らく明治二十五六年、私の五六歳頃の事である。

明治二十年代は、維新以來一番はりきつた時代ではなかつたらうか。洋風をとり入れる事に忙しかつた社會が、兎に角一段のおちつきに到着し、議會は開かれ、新組織の企業は起り、政治も

經濟も若々しい希望にみち、文學は紅葉露伴の新風が一世を風靡し、芝居は團菊が顏を合せ、やがて起つた日清戰爭の大勝利は、國民的自覺をよびさました。上に明治大帝を頂き、萬民一致國運の隆昌を疑はない時代だから、世の中は幼稚單純だつただけ、あかるくほがらかだつた。學問は直に實世間に應用され、うで次第で立身出世のみちは開け、富も名譽もかち得る事が出來ると、誰人も信じて疑はなかつたから、他人の思惑をはゞかる事なく、樂みをたのしむ事が出來た。外に各種の享樂があるわけではなかつたから、見るものといへば芝居と相撲にとゞめをさす。私は太平の御代の相撲場の光景を思ひ出す。回向院境內の小屋がけの場所は、幾人を收容したのかしらないが、天幕張の事だから、川風にはたはたとあふられる度に、その隙間から見える靑空は、大きくなつたり、ちひさくなつたりした。春場所の寒さはもとよりだが、夏場所は西日がさしこんで、當節の國技館よりも蒸暑かつた。場內の取締も、社會大衆の嫉視の眼も、きびしくない時勢だから、觀衆は互に勝手氣儘だつた。肉體を露出する事にひけめを感じず、夏は肌ぬぎが多く、一齊に團扇や扇子が白くひらめくのが、棧敷の緋毛氈の爲に際立ち、はでな浴衣に白縮緬の兵兒帶を幅廣くまきつけた勝力士が、贔負客へ挨拶に廻る景色も印象が深かつた。春場所では、何といつても藝者の姿が目についた。明治維新の波に乘つた田舍者が、官員となり實業家となり、俄

に大盡氣分になつたのに連れて、藝者は素晴しい人氣で社會の表面に躍出た。女役者はあつても、今の女優のやうにははびこらず、ダンサアも女給もレヴュウ・ガアルも存在せず、引込思案の素人の奥さんや娘さんとは懸絕した社會環境の中に、確固たる地位を占めて、噂の中心となり、さかり場の華であつた。封建時代の遺風で、相撲を見る婦人は少なかつた時に、藝者は別格として場內をいろどつた。藝者と力士の色模樣は、當然の事として、役者と藝者のそれの如く、人々の口にのぼつた。私は今でも、劇場で見る藝者より相撲場で見る藝者姿の方が美しいと思ふ。尤も相撲きちがひの藝者といふのが、例外無しに或る關取に對する最負強さに凝りかたまつてゐる丈で、相撲を正解してゐない事驚くばかりである。場所の數は澤山見てゐても、本當の見方を知らないので、誰某は男ぶりがいゝとか、無邪氣だとか、愛嬌があるとか、親孝行だとか、親方おもひだとか、稍進んでも、あの人は水を二度はつけないとかいふ風な感心のしかたしか知らないのである。

ものを見て休む時、飮食が必ずつきまとふのは我國のならはしであるが、これも亦いぜんは一層行儀がよくなかつた。醉漢と喧嘩はおきまりで、場內の空氣も甚だ殺伐だつた。學生の應援團といふ、いたづらに騷々しいものはなかつたが、個人々々の聲援には屢々女の聲もまじつた。鳳

鳳がとりざかりの頃、かぼそい聲でその名を呼ぶ少年があり、官員安藤則命といふ人の子息だと聞かされたが、その細くとほる聲は極めて特徴があつて、私は今日も尚耳の近くに聞くやうな氣持がする。その人は今も存命で、相撲を見てゐるであらうか。當時小學生の私も鬢髮霜を置くに至つた今日、その人も亦薄禿の老人であらうが、幸に健在ならん事を祈るものである。

投纏頭(なげばな)も亦當時の風景のひとつである。自分の聲援した力士が勝つと、土俵をめがけて帽子や羽織を投げる。行儀よく端坐してゐならぶ正面棧敷の大名貴族に對抗する、商工階級の意氣とも見え、見榮でもあつたであらう。これは國技館のやうに廣い所では效果もうすらぐが、何時の頃からかおかみの禁ずる所となつた。

力士が贔負客の棧敷に挨拶に行く事も、いつか協會が自發的に禁じた樣子で、今は僅かに後援會と稱する團體見物に對し、羽織袴の力士が幹事に引きつれられて、頭を下げにゆくだけになつた。贔負力士が棧敷へ來るといふのは、これこそ客の見榮で、相當嬉しいもの、やうに想はれるが、今日の如く世の中がせゝこましく、嫉妬深くなつては、これを禁じるのが穩當であらう。曾て常陸山を中心とする一方はあまり棧敷廻をせず、梅ケ谷國見山太刀山等の雷友綱部屋はしきりに愛嬌を賣つて歩いた。力士一流の、二つ三つつゞけさまに頭をさげ、棧敷の間のかよひをいつ

ばいにふさいで客と話をしてゐる姿を、當時の私はいさぎよしとせず、出羽の海一門の態度に贊成だつたが、今日になつてみると、それもなつかしい場内風景のひとつだつたと思ふ。

日清戰爭は我國の飛躍を現實に示し、世界の認識を改めさせ、國民の自覺を深めた。凱旋した將軍連が胸間に勳章をかがやかし、相撲を見物する光景も、強い印象を殘した。〔五十三字略〕國民の信頼は深く、尊敬は厚く、英雄崇拜の氣持が頗る強かつた。山路獨眼龍將軍とか佐藤鬼大佐などゝいふ劇的人物が、土俵を圍んで、吾々と共に樂む光景は、心強く樂しいものであつた。

力士に對しても、吾々は英雄崇拜心を多分に持つてゐた。そのくせ、子供は女にひとしく、最強最大の力士を好まず、稍型のちひさい、手取と呼ばれる力士を愛する傾向がある。私の如きも、小錦を破り常陸山を惱ます荒岩を好み、梅ケ谷を苦しめる逆鉾を愛した。この二名力士は今も回顧して、我が好みのあやまりでない事を思ふが、同時に私は長ずるに及んで、往年多少の反感をいだいた常陸山の如き大金剛力士を喜ぶ心境を養ひ得た。

大衆は女こどもと違ひが無い。朝潮は堅固な四つ相撲で、その相撲ぶりも實績も、立派な大關だつたが、不幸にして醜貌無愛嬌の爲に、人氣の無い力士であつた。何の取得も無い梅の花も、紅顏の美少年だつた爲に、相當の人氣があつた。武藏山は容貌と姿體にどことなく二枚目型の所

があり、殊に神經質らしい沈痛さが、女こどもの感傷にはまつて同情雨の如く、男女の川は外觀極めて粗豪の爲、大衆の支援を得る事比較的に乏しい。假に富の山大八洲の如き型の力士が、今後大に強くなつたとしても、双葉山大邱山と人氣を争ふ事は不可能である。名前は一寸申上かねるが、昔美人の名の高かつた或る良家の未亡人が、大邱山の土俵に上るのを見て、「いゝお相撲さんだわねえ、うちの〇〇(息子の名)もあゝいふ風になるといゝんだけれど」と、つゝしみを忘れた歎聲をもらしたのを聞いた事がある。つい此間、よそのお孃さん達に相撲を見せる事を頼まれて引受けたが、はじめて相撲を見るといふのに、令孃達はその例にもれず、双葉山大邱山が御贔負で、「叔父さまは誰がお好き」ときくから、男女の川が好きだと答へると「あら、いやあねえ」と眉をひそめた。やがて知合ひの角狂貴族に頼んで、双葉山の繪葉書にサインをして貰つて來た。かゝる時、力士と映畫女優のゴシツプの傳へられるのも、角道復興の兆と見るべきであらう。

もう一度昔にもどつて、私の家には大泉といふ力士が出入りした。彼は母の生國出羽庄内の產で、その親共は母の里から多少の恩顧をうけた農家のものであつた。明治初期の大力士梅ケ谷と對峙して、強力無双とうたはれた大達は、鄉里を同じくするので、これを頼つて弟子入したが、骨太で上脊もあり、幕下時代は今泉北海外ケ濱等と共に高砂部屋の四天王と呼ばれたさうだが、

前頭二枚目位迄進んだゞけで、惡疾に祟られて振はなくなり、一度脫走して大阪相撲に加はつた。後に歸參が叶つて再び回向院の土俵を踏んだが、既に衰退期に入つてゐて、少しもいい相撲を見せなかつた。若い頃はいざしらず、私が知つてからの彼はうつちやりの名人で、敵の土俵で勝つ事極めて稀なる、面白くない力士だつた。おまけに、あばた面の鬼瓦の如き容貌だから、人氣の無い事はいふ迄も無い。相撲好の私は、此の贔負甲斐の無い力士でも、やつて來れば、種々相撲に關する質問を發し、得るところ少なくなかつたが、たゞ相撲場で彼に口をきかれるのは、あたり近所の人に對して羞しかつた。今日も亦負けるに違ひ無い彼が、棧敷へ廻つて來るのには閉口した。わざと知らないふりをして橫を向いたり、話しかけられても返事をしなかつたり、見え透いた手を用ゐたものである。家に來ると酒を飲み、いゝきげんになつて、力士獨特のつぶれた咽喉で、相撲甚句や追分をうたつた。彼は私を部屋へつれて行き、稽古を見せたり、牛鍋で御飯をたべさせてくれた。その牛肉に山椒と唐辛子の粉を澤山かけて喰つたのが、幼い私には珍しく、その藥味の鋭い香を何時迄も忘れなかつた。私は彼に、高砂部屋の若い者で、いまに強くなるのは朝嵐と浪の音だと聞かされ、軀幹長大の朝嵐はたしかに、大關迄ものぼるだらうと思つたが、からだのちひさい浪の音が果して幕に入れるかどうか疑はしいと思ひながらも、さういふ三段目

邊の力士に注意を向けて見る興味を覺えた。朝嵐は後の朝潮で大關となり、浪の音は小兵ながら相撲がうまく、三役となつてその地位をはづかしめなかつた。

今でも私は相撲の面白さのひとつとして、若い者の中から後日の幕内力士を探し出す興味を多分に持つてゐる。一見小粒で、素人眼には物になりさうもなく見えながら、脚腰のしつかりした、取口に味のあるのに目星をつけ、その眼鏡に狂ひの無かつた時の嬉しさは、我子の成長を見守る母親の心に近いものであらう。旭川や巴潟は、この喜びを私に與へてくれた力士である。

三段目の中どころに、沖ツ海を發見した時の心地よさは、今も私の忘れ得ない所である。斯ういふ大物になると、角道の將來に對する深き安心を伴ひ、自分の氣持迄強くたくましくなる感じがする。

さうはいふものゝ、よく相撲好といはれる人の中で、勝負は幕下の方が眞劍で面白いなどゝ、いかにもくろつぽがつていふ人を見るが、私はその人々の相撲眼を輕蔑する。下の方の力士の面白さは、その將來を期待するところにあるので、かんじんの相撲は若く、隙だらけで、面白くないのが常だ。二段目三段目の面白さは、砂中に珠を求める面白さに過ぎない。彼等は素人に近く、無闇に投をうち合つたり、さし手をさしかへたり、土俵いつぱいに動き廻るであらう。それを相

撲の變化と見るのは大間違で、互に隙だらけだから動けるので、之を幕內力士と比べると、靜中に動ある眞の相撲の味とは雲泥の相違である。

相撲は大昔からあつた。その形式は今も尙甚だ古風を傳へてゐる。しかし相撲技術そのものや、競技方法は、吾々が知つてからでも隨分變つた。殊に最近には、土俵の擴大があり、仕切時間の制限があり、土俵中央に二條の白線を引いて仕切の位置を限定し、引分預の取直しをさせ、東西對抗を總當りにするなど、急激な變革が行はれた。明治年代の橫綱大砲萬右衞門は、九日の相撲(當時は晴天十日の興行といふもの、十日目千秋樂には幕內力士は登場しなかつた)の大半を引分る程超時代的存在だつたが、彼をして今日にあらしめばどうするであらうか、私には想像がつかない。稀代の小兵力士、長く三役に位した玉椿の如きは、引分取直制度のもとに、あれ程の名聲をあげる事は不可能であらう。

古くからの相撲フアンは、東西入まじりの總當式取組を喜ばないが、いつたん味を占めた吾々は、總當の面白さに別れたくない。これは天龍一派の脫走にあつて、俄に顏ぶれの寂しくなつた窮餘の策にはじまつたのだが、これが爲に吾々は、毎日好取組を見る事が出來るやうになつた。今假に舊制に戾るとすれば、玉錦武藏山男女の川の三巴戰のどれかを失はなければならない。或

は此の三大力士に對する清水川双葉山等の顔合せの中、いくつかを犠牲にしなければならない。贅澤に馴れた吾々は、その寂しさに堪へられないであらう。たゞ總當式が氣の毒なのは力士である。今の關脇小結前頭二三枚目位の力士の辛さは察するにあまりある。舊制度ならば、彼等も立派に星を殘す連中であるが、總當の爲に勘定の惡くなるのは心外に違ひ無い。私は此の點に於て、自然の解決を待つ自由主義者である。即ち將來或る一つ又は二つの部屋が、幕内の半數に近い力士を一時に輩出した時、おのづから東西に分れるのを、氣長く待たうといふのである。

大體に於て、私は現在の相撲に十分滿足し、感謝し、殆んど何等の註文も無い。天龍一派のトオナメント式相撲などは見たくも無い。場所一番の相撲に全力を盡すのでなければ滿足しない。又部屋制度を解消し、力士全部を協會直屬とせよといふ新らしがり屋の說には大反對である。そんなやり方は、相撲の眞劍味を奪ひ、必然力士を弱くする。海のものとも山のものとも知れない若者をつれて來て、手塩にかけて育て、訓練し、しあげる現制なればこそ今日の發達を招來したのだ。ひとつ釜の飯を喰ひ、起居を共にしてゐる者同志が取組むのでは、八百長を助長し、相撲を見世物化するに違ひ無い。

預、引分も、昔のやうに其の儘預り、又は引分けてしまふ方がよいといふ說もある。これには

私も一應首肯する。下位の力士が惡戰苦闘して、やうやく引分、預となつたのを、又取直させられては堪るまいと思ふ。殊に體力の劣る力士が、揉みに揉んだあげく、二度目の勝負を強制され、あつけなく負るのを見る時は、最初の勝負の感激までも、ふいにしてしまふ感じがする。しかし、これも總當と同じやうに、あくどい御馳走に馴れた吾々は、今更ちよつと捨て難い。殊に此の取直制度は、今日の相撲のはげしさのひとつの原因とも考へられるので、これを廢する爲に再び消極的相撲にもどる惧れも無しとはいへない。

たゞ私が他の人々に對し異說を立てたいのは、旣に引分が取直しと定まつた以上、水を入れる事はやめてはどうかと思ふのである。雙方が疲れ、呼吸が苦しくなり、互にしかける氣力も乏しくなつた際、一應引分けて水を入れるのは、更に勝負を新鋭ならしめる方法として案出され、雙方をいたはりながら、あく迄も決戰させようといふ武士道によるのであらうが、相撲は同じ人間がとつても、完全に同じ體勢を二度繰返す事は望まれないものである。一見前と同じ組手に見えても、本人達にして見れば、からだの各部の位置の一分二分の相違さへ非常な力の增減を招く。實際の土俵で、吾々の遠い棧敷から見ても、前の體勢とは違ふ事がはつきり認められ、冷々する事が多い。ましてや取組んでゐる本人にしては、堪へ難い事に違ひ無い。屢々水入後直ぐに、あ

つけなく勝負のきまる事のあるのは、單に鋭氣の囘復の早い方が有利になるのではなく、行司によつて人爲的に行はれる體勢の些少の相違が、とりかへしのつかない重大な結果となつてあらはれる場合があるのである。あくまでも勝負を決するといふ精神は、既に引分取直しによつて達せられるのであるから、引分取直しの行はれる限りは、不自然なる水入は廢止すべきであらう。私は、水入後に決する勝敗につき、常に不快なる疑念に惱まされる。

なんでもかんでも昔をよしとする論者もすくなくない。仕切時間の制限はいけないといふ。土俵中央の白線は無用だといふ。これらをやめて、雙方の自由意思をもつてたゝかはせなければ眞の相撲の味は出ないといふ。一應の理由はたしかにある。しかし、既に土俵そのものさへ個人の勝手を無視して廣さを限定してゐるのだ。二條の白線を引く事によつて、不快なる頭の密着を許さず、時間の制限によつて、無理な註文をつけて何時までも立たない卑怯を防ぐのは止むを得ない事である。野球の投手も球を持つて長く身構へてゐる事は許されない。競技の興味の爲にも之等の制限は必要である。

話を昔に戻すと、子供の頃親戚の相撲好の老人に、常に本場所を見せて貰つた事は、私の一生のしあはせで、深く感謝するところである。後年自分の棧敷を持つやうになつてから、私は自分

の下に育てられ、芝居も映畫も見た事がないといふ當代稀なる記錄保持者であるが、いつたん嫁して野放しとなり、十分の反動を伴ひ、芝居と共に相撲は大好物となつた。みめかたちすぐれたる常の花武藏山天龍の勝利を祈る女子供の常識から入つて、一歩も進まない事勿論である。これが體質虛弱で、寒暑共にきびしくこたへ、冬は棧敷に炬燵が欲しく、夏は六人詰の蒸暑さに辟易する。しかし私は、過去の追憶のうち最も樂しかつた相撲見物の喜びを、なるべく多勢の子供達に分けてやりたくて、滿員の棧敷に脚や膝の痛さを忍んでゐる。「何とかしてゆつくりと相撲が見度い」と愚妻は屢々歎息する。

その子供達は時々、荒岩は現代の力士の誰に一番似てゐるか、逆鉾の取口は誰に似てゐるかといふやうな質問を發して私を惱ます。力士には大別して數種の型があるが、いざとなつて考へると、ぴつたり相似の二人といふものは無い。何とかして子供達に、昔の名力士のおもかげを傳へ度いと思ふが、とても出來ない。私は裸業の力士を見る每に、この地上にありあまる人間の中には、親子兄弟姉妹をのぞいて、同じからだつきのものはお互にゐないのだと思ひ、造化の玄妙不可思議に驚くのである。

相撲技法の變遷については、多くの觀客が全く氣附かずにゐる。誰も彼も、たゞ單に四相撲の多かつた昔をなつかしがる。社會のはげしい推移は、相撲をも一變した。私の友人が三十年ぶりで相撲を見て、「僕には當今の相撲はわからない」と歎いたが、それは正直な告白である。全くその言葉の通り、三十年前の相撲とは大違ひなので、見る方の心構へも變つてゐなければならないのである。

この變遷は角界の玄人にも往々見逃され勝だ。年寄連中の中にも、觀客の慢言と同じ事を云つてゐる者のあるのはなげかはしい。

私は近年稽古場をのぞいた事が無いので、果してどういふ稽古振かしらないが、今の相撲は稽古がなまくらだといふ聲はよく聞かされる。しかし私は、これにも疑を持ち、稽古のやり方が變つたのではないかと想像してゐる。多分昔の方が嚴格であり、無理強ひであり、階級的であつたであらう。師匠の型をひたすら教へ込まうとしたであらう。だが、當今の方が、もつと個性を生かし、又肉體の條件を考慮に入れた合理的な稽古が行はれてゐるのではないだらうか。現在の土俵の上のはげしさと、變化の早さを見ると、なまくら稽古だとは考へられない。よく、學生あがりの力士などに、彼は頭でとると一口にいふが、相撲は決して頭でとれるものでは無い。稽古を

積んだのが頭を働かしたのでなければ、之を土俵上に活用する事は出來ない。

私が見た過去四十餘年の力士の中で、最も好んだのは荒岩龜之助である。しかし今日の私は常陸山谷右衛門の堂々たる相撲振をなつかしく思ふ。年齢に伴ふ心境が其處に到達したのだと考へる。現在の力士でいへば、若し私が荒岩を見た頃の年齢なら、大方の女性ファンと共に矢張双葉山をあげるかもしれないが、實は男女の川が一番好きだ。彼の未完成の、粗奔なる取口には屢々苦笑させられるが、豪快無比なる大力士として一場所々々完成に近づくのを見るのはまことに目出度い。それにつけても思ふのは、力士にとつて何よりのしあはせは、その力士の全能を發揮する事の出來る好敵手を持つ事である。常陸山は自分よりも重量ある、相撲巧者の梅ケ谷があつて、はじめてあの強力を十分に發揮する事が出來た。太刀山と駒ケ嶽は身長殆んど同じく、組んでもはなれても互に力を出し切る事が出來た。ところが、武藏山病んで、玉錦と男女の川の一番を時代の代表的取組と見る時、男女の川にとつて如何にもあひくちの惡い敵手である。相撲の巧拙は勿論であるが、それよりも何よりも男女の川の身長があり過（すぎ）るのである。不用意ないひ方だが、若し男女の川の身の丈が、もう三四寸低かつたら、彼は今日迄の玉錦との戰績を、逆にしてゐたかもしれない。少なくとも玉錦に對して、十分全力をつくし得る相撲をとる事が出來たであ

らう。しかしもう一歩進んで、今の儘あの偉大なる體軀を完全にいかし切る事が出來たら、その雄大なる事誰人をもつてしても比較にならないであらう。その期待は樂しい。（昭和十一年五月十一日）

――「中央公論」昭和十一年六月號

修文院釋樂邦信士

六月十六日、南部修太郎氏が腦溢血で倒れたといふしらせをうけ、麻布新龍土町の御宅へかけつけた。表門は堅く閉されてゐるので、勝手口から入り、刺を通じて暫時待つと、夫人が、睡眠不足の疲れた樣子で出て來られ昨夜深更火事があり、それを見に門前迄出て、突然意識を失つたものだと聞かされた。御見舞の言葉を述べて辭したが、それつきり意識を回復せず、廿二日の朝、世に珍しき善良なる魂は天に歸した。

南部氏は實にいゝ人だつた。をかしい位いゝ人だつた。思ひ出すと古い事だが、大正五年の秋外國から歸り、旅疲れを口實にして、私は湯河原に出かけた。今は代がはりになつたらしいが、當時の中西屋は學生時代からの馴染で、主人の龜さんとは友達づきあひだつたから、別館の上等の部屋を提供してくれた。二三日たつた或日、晝の御膳をはこんで來た女中が、本館の方に南部

修太郎さんがゐらつしやいますといふ。私は南部さんの名前も知らなかつた。若い、ぷくぷく肥つた、笑はないでも笑つてゐるやうな婢は、私が彼を知らないのをあやしみ、南部さんの方では私の事をよく知つてゐると云つた。そんなら、南部さんといふのはどんな人だときくと、慶應の學生さんで、こはいやうなハイカラさんですわと答へた。さういひながら、顏を染め、羞しさを笑ひにまぎらしてしまつた。近頃こそ、こはいとか凄いとかいふ言葉をいろいろの意味に使ひ美しいとか偉いとかいふ方にも流用することになつたが、その頃斯ういふ表現はまだ流行らなかつた。しかし、山家育ちの溫泉宿の小婢の口から、こはい樣なハイカラさんときかされ、何となくはつきりと、一人の美男子を想像する事が出來た。こゝにハイカラさんとは、勿論頭髮を奇麗に分け、みだしなみのいゝ若人といふ意味も含んでゐるが、同時にそれは美しいといふ意味も含んでゐて平たくいへば、いゝ男といふ事に違ひ無かつた。若い女には、青年客の噂をするのに、日常用ゐる「いゝ男」では、あまりぬきさしならぬ事になるので、ハイカラさんといふ曖昧な言葉をえらんだのであらう。あ、あ、あれが南部さんですと婢はお盆を持つたまゝ立上つた。緣の欄干を越えて、庭をへだてた本館の二階の窓に、上半身を見せ、その人は一寸默禮するやうな樣子をした。いちど臍をさげに行つたのが戾つて來て、南部さんが逢ひたいといふが都合はどうかとき

ゝに來たので、どうぞといふと、直ぐに御本人があらはれた。かすりの着物に對の羽織、なる程長く延ばした頭髮を奇麗に分けた美貌の青年だつた。

それが最初の對面で、いつしよに散歩したり、互の部屋を訪問しあつたが、元來私は座談の呼吸のつゞかない方だし、南部氏は非常に早呑込で、折角こつちが順序を立てゝ話さうとしても、それは知つてゐますよとか、そんな事はわかつてゐますよとか云つて、打切つてしまふ人なので、まとまつた話といふものは、した覺えが無い。交遊二十年、遂に變らぬ事だつた。

たゞ一度、南部氏が非常に親切に、私に忠言をくれた事がある。それは氏が「三田文學」の編輯を擔當し、新進作家として世に認められ、文壇のつき合ひも廣くなつた頃で、暫く大阪に行つて居た私が東京に戻り、赤坂氷川町に獨身世帶を持つてゐた時だ。恰も私の著作集が上梓の運びになつてゐて、その部數が僅に一千部だと知つて、南部氏はいかにも驚いたやうに、今文壇に登場したばかりの自分の本さへ三千部は間違ひなく刷るのに既に幾册かの著書があり、新聞小說も書いたものが、一千部とは何事であるかといひ、結局それは文壇づきあひをしないからいけないのだといふ結論で、私の不心得をいましめてくれたのである。新建の壁土のまだ乾かない借家のしめつぽい六疊で、暗い電燈の下に對座してゐた彼と私を今もなつかしく思ひ出す。

當時の南部氏は、持つて生れた善良なる魂の爲に、世間が考へてゐるよりも高く自分を買ひ、かなりいゝ氣持になつてゐたやうである。日に月に文壇人とのつきあひの廣くなる喜び、ファン・レタアの來る樂しさ、殊に女の愛讀者からの手紙や、時には浮氣な人妻からはげしい誘惑をうける得意さを、素人作家の私にきかせて、大に發奮させようとしたのであつた。意見され、忠告されながら、私は私なりに南部氏に危險を感じてゐたが、次第に彼が純文學を離れ、少女小説の作者となり、文壇の遊び事、たとへば將棋や麻雀にばかり耽つてゐるのを見て、今度はこつちが忠告してやる番だと思つたが、扨て少しでも切出すと、それは知つてゐますよ、そんな事はわかつてゐますよと、彼は笑ひを以て中斷してしまふのであつた。

そのくせ彼は意外に勘の惡い人であつた。同人中、珍しく洒落のわからない人であつた。丹念几帳面な強味を持つてゐたのだらう、勘の惡さや、洒落のわからなさなんか意に介さず、寧ろそんな事も特徵のひとつだと圖太く肚をきめてしまへば面白かつたのだが、善良なる彼は反對に、何でも彼でも承知してゐるぞ、わかつてゐるぞといふ態度をとつた。その結果が、他人のいふ事を皆まで聞かず、わかつてゐるよと笑ひ消し、その實わかつてゐない事が多かつた。作家としての彼も、文字に對する勘は鈍い方であつた。そのくせきゝ覺えの言葉を使ひたがる方で、屢々を

かしい間違をしでかしたが、最も有名なのは門前雀羅で、彼はそれを繁昌の意味に解してゐたのだ。しかも友人が之を咎めようとすると、よせよ、わかつてゐるよと笑つて打消した。

幼少の頃から喘息に苦しみ、よくもこゝまで生きて來たものだと述懐し、こゝ迄來たからは大丈夫だとたのむ所もあり、大に酒をたしなむ私に向つては、いゝ加減にしないと腦溢血になりますよと常に忠告してくれたが、少しも酒を飲まない彼が、かへつて腦溢血で倒れてしまつた。

昨日にかはる修文院釋樂邦信士に對し、私が甚だ遺憾に思ふのは、いつもいつも、そんな事は知つてゐますよ、わかつてゐますよで追拂はれ、遂に一度も私の思ふ事を、彼に傳へる事の出來なかつた果無さである。(昭和十一年六月二十五日)

——「時事新報」昭和十一年六月二十七日・二十八日

藝術家の反吐

他人の行爲について、それが並ならぬものであればある程、その原因をつきとめたがるのが世のならはしで、此の心持を迎へるためか、日毎の新聞にあらはれる市井の出來事にも、大概はその原因を明記し、或は推測してゐる。例へば三原山に投身したものがあれば、年寄ならば生活難、若い男か女ならば失戀、學生服を着てゐれば受驗の失敗ときめてかゝり、萬一遺留品の中に書籍でもあれば、哲學に凝り過ぎた結果だとか、文學に耽つたあげくだとか、種別は大概きまつてゐる。

小說家牧野信一氏がくびれて死ぬと、その自殺の原因を、あゝだかうだと臆測する。或人は文學上のゆきづまりだといひ、或人は生活の破綻だといひ、家庭の惱みだといふ人もあり、酒精(アルコオル)中毒の發作だといふ人もある。恐らく、それらの原因と推測されるものが寄集まつて、彼を死に誘

つたのであらう。人間は不圖したはずみで、死なうと思ふ事もある。殊に牧野氏のやうな氣まぐれの詩人は、宿醉の胸の惡さから世を厭はないとも限らないし、つかまへようとした油蟬に小便をひつかけられた氣まづさから、えゝまゝよと思ひ極めないともいへないのである。

私と牧野氏とは殆どつきあひが無かつた。はじめて氏の訪問を受けたのは、中戸川吉二氏が雜誌「隨筆」をはじめ、その編輯者として私に寄稿勸說に來たのだから、關東震災の年か、その翌年である。氏は、當時既に新進作家として認められてゐた。小兵、童顏、綠色の洋服に赤い襟飾(ネクタイ)で、いかにも羞しさうな物言ひをし、氣どりとはにかみとがちやんぽんになり、それをまぎらす爲に突かゝるやうな、からかふやうな口もきいた。

二度目は、それから餘程後で、夜遲く、拙宅の近所に住む氏の友人といつしよに押かけて來た。したゝか醉つてゐたが、なほ酒を呑ませろといふので、燗をつけると、盃を口につけるかつけないで、食卓の上に夥しく反吐(へど)をはいた。惡臭を放つ汚物の洪水の中に、眞白なのは米粒で、赤いのは鮪のさしみか、黃色いのは澤庵、青いのは菜葉であらう。色彩は豐かだつた。水を飲みませんか、橫になつてはどうですかといたはつても、にやにや笑ひながら、もつと酒を飲むといふ。そのくせ、本當に飲む餘力は無く、食卓にもたれかゝり、閉口したやうな、閉口してはゐないぞ

といひ度いやうな、悄氣たやうな、さうかと思ふと痛快がつて居るやうな様子を見せてゐた。どうだ、參つたかとでもいへば、參つてなんかゐるものか、わざと反吐をはきに來てやつたんだぞといひさうな、二段構へがはつきり認められた。
斯ういふ場合、吾々俗物は氣樂なもので、ごめんなさいとあやまつても、もういけないと手を振つて逃出してもすむのだが、神經のこまかい藝術家の辛さで、引くに引かれぬはめに陷り、うゝん飲むといつては盃をとりあげるが、口まで行かないうちに胸を濡らし、膝にこぼれた。「隨筆」時代の童顔には些かふけて、額に皺が深くなり、瘦せた背中や肩に不健康な疲れが見え、それが氣を張つて飲めない酒を飲まうとするので、非常にいたいたしく、氣の毒だつた。
その後は一度か二度、銀座の岡田か長谷川か、飲屋で偶然あつた事があるばかりで、遂に親しく口をきく機會も無かつた。
去年十一月、久保田万太郎氏夫人が急死され、私はその葬儀の御世話をしたが、甚だ不適任で、最初頼むといつた久保田氏もよせばよかつたと思つたらうし、うかうか引受けた私も後悔し、やり切れない思ひでゐる折柄、たまたま久保田氏に義絶されたかたちの人を葬儀に參列させるさせないで意見を異にし、勝手にしやがれと中腹でお通夜の人々の屯してゐるところへ救を求める氣

で入つてゆくと、水上さん――牧野ですと聲をかけた人があつた。若しもあのうるんだやうな美しい眼がなかつたら、私は誰だか思ひ出す事が出來なかつたらう。それ程牧野氏には久しぶりで、緑色の洋服に赤い襟飾りの印象を一番あざやかに持つてゐる私には、年とつて、ひどく素朴な様子になつた氏が、その時名告りかけなかつたら、たとへ美しい大きな眼にぶつかつても、誰だか思ひ出さなかつたかもしれない。人と爭つた後のたよりない氣持の爲か、私には、牧野氏の呼びかけた時の聲がひどくなつかしさうなものに聞えた。そのくせ、簡單な挨拶をかはしたばかりで、おしまひだつた。肚の中では、一度此の人と飲んで見ようかなと思ひはしたが……

それつきりで牧野氏は死んでしまつた。芥川龍之介氏のやうに、氣取つた、人騒がせの遺書もなく、催眠藥を嚥むといふやうな奇麗事でなく、鼻をたらし舌を出し、あさましく死んだ。私はその記事を新聞で見た時、直ぐに色彩豐かなる反吐をおもひ出した。その日の氏の二段構へを思ひ出した。文學の事なんかで死ぬものか、生活苦なんかで死ぬものか、死んでもいゝと思ふから死んでやるんだぞ、俺が死なうとは思はなかつたらう、ざまあ見やがれ――首に繩をかけ、踏臺を蹴倒す時まで、深刻な顔つきはなるべくやめようと思ひながら、此の氣まぐれの詩人は、自分を嘲り、人を嘲り、舌を出す效果にほくそ笑みもしたのではないだらうか。（昭和十一年六月三十

日）

──「時事新報」昭和十一年七月四日・五日

鈴木三重吉氏の酒の上

鈴木三重吉氏が死んだ。個性の豊かな、獨自の作風に徹した、すぐれた作家であつたが、晩年は小說の筆を執らず、童話と小學生の作文の指導に力を盡し、此の方面に於ても十分の功績をのこした。文壇の垣根は自然派の手によつて完全にきづかれ、泉鏡花先生は時代遲れとして虐げられ、森鷗外先生はディレッタントとして輕蔑され、新星夏目漱石先生も遊戲文學として排斥された時代に、鈴木氏の「千鳥」「山彥」は出た。人生の眞實を探求するといひながら、單調なる日常生活の平面的記錄に墮せんとする小說のはびこる中に、稚拙といつてもいゝ程純粹清新な若き憧憬のみちあふれる作品のあらはれた事は、新文學を求める吾々にとつての喜びであつた。もとより、垣根の中の連中がこれをけなす事に努めたのはいふ迄もないが、いつの間にか垣根の外には春が來てゐて、氏の文學は立派に生育した。やがて氏の作風は次第に空想を去つて現實的傾向に進み、

單純な夢は深刻なる嗜慾と變り、遂には病的な神經と感覺の文學に迄行きついたが、私は自分の少年の日の夢をはぐくんだ氏の第一著作集「千代紙」を何時迄も愛讀し、その美しい幾節かは暗誦してゐる位だつた。後年幾度となく藏書を整理し、或ものは賣拂つて小遣錢とし、生活費とし、或ものは圖書館に寄附し、或ものは友達の救濟費としたが、そのかみの思ひ出のなつかしさから、「千代紙」は手放す事が出來ず、今日なほ本箱の隅に美しい裝幀を見せて、つゝましく納まつてゐる。

私が處女作「山の手の子」を書いたのは明治四十四年で、たしかその年の秋の三田文學講演會に鈴木氏は出演され、晩餐會後吾々學生と親しく談笑された事があつた。私の幼稚な作品を大變ほめてくれたので、羞かしくて口がきけなくなつた。後進に對していたはりのある、よき先輩だと思つたが、それから十幾年たつて再び逢つた時は、あやふく喧嘩にならうとした。

それは、私が長篇「大阪の宿」を雜誌に連載し、やうやく完了を告げた時だから、多分大正十四年の暮であらう、思ひもかけない、鈴木氏から、「大阪の宿」完成祝賀會を開くから來てくれといふ案内をうけ、日本橋の灘家に行つた。灘家は先年なくなつたやうだが、うまい酒を飲ませる家で、殊に大關を賣物にしてゐた私の馴染の飲屋だつたから、鈴木氏の豫て御贔負ときいて大變嬉

しかつた。相客は泉鏡花先生と久保田万太郎氏で、平生私一人の時は土間で飲むのだが、特に二階を借りて酒宴となつた。

鈴木氏は言葉を盡して拙作をほめ、殊に結末に篇中の主要人物を一箇所に集めた手際は見事だつたと大におだてさかんに盃をくれた。話が文壇の事に及ぶと、當時流行兒の誰彼を罵倒し、甲はお目出度い馬鹿野郎だとか、乙は天をおそれない根性がいけないとか、丙は卑俗極まる商賣人だとか、丁はとつちやん小僧に過ぎないとか、一言のもとにけなしつける。

久保田氏は今日の如く大家の風格を備へるに至らず、高飛車にきめつける流儀の奥義には達してゐない時代だから、あたらずさはらずの挨拶をし、三重吉贔負の泉先生は既に頗る御機嫌で、「そりやあ今ぢやあ谷崎と三重吉が一等うめえや」と相槌をうつ。然るに主賓の私は、さんざんほめの言葉は頂いたけれど、一々鈴木氏の說にも服しかね、異說もたてるし、口返答もするので、こいつがもともと酒癖の悪い御主人の癎にさはり、段々言葉はあらくなり、眼は据り、顏色は蒼くなつて來た。かねて此の人の酒の上の悪い事はきかされてゐたが、何しろこつちは招かれた客だから、まさか酒亂の犧牲にはなるまいと多寡をくゝつてゐたのだが、つい今しがたまで、お前はうまいぞとほめてくれたのが、忽ち下手糞だときめつけられる事になると、私も些か考へなけ

ればならなくなつた。
　鈴木氏の作品には「千鳥」のむかしから、必ず一人の無智なしをらしい女がゐて、初期のものでは、これをいとほしみなつかしむ感情にひたつて滿足してゐたが、後期のものになると、さういふ女を自分の我儘な思想感情に絶對忍從させようとあせり、女が思ふ通りについて來ないのに苦しみ悩み、時にはいぢめ、踏みつけ、呪ひ、一生をだいなしにしてしまはなければゐられない嗜虐的傾向を示して來てゐた。成程これだなと氣がつくと、私には自分の立場がはつきりわかつた。鈴木氏は無智な、あはれな境遇の女を好んで描いたと同じ心持で、文壇のはじつこに、ゐるかゐないかの私なればこそ目をかけてやらう、いたはつてやらうと思ひたつたのだ。作中の女が、作中の男の思ひのまゝについて行かなければならないのと同じく、私も亦鈴木氏の一言一行に只管賛成し、感服し、時には我慢しても、堪へ忍んでも、隨從してゐなければならない役目を背負はされてゐたのだ。誰もかまひつけない凡庸作家を、わざわざ招いて喜ばせてやらうといふのに、その態度は何事だ、ありがたがり方が足りないぞ、もつと感謝して然るべきだらう、よし、そんならこいついぢめてやれ、やまひづかせてやれと、持前の酒癖がむらむらと湧上つたのだ。少し大袈裟だが、山雨欲來風滿樓といふ雲行となつた。

さあ、もういゝ加減に切上げようぢやあないかと、泉先生が煙管を筒にしまはれると、もう一本飲まうと鈴木氏は私の方に向いていふ。私も飲むといふ。それが空になると、又一本飲まうといふ。私も飲むといふ。これはいけないと思つてか、泉先生は久保田氏を促して、行かう行かうと立上られた。二人の姿が廊下へ出たと思ふとたんに、貴様は生意氣だぞと鈴木氏は立上つた。別段暴力を振ふ積りは無かつたのだらうが、それだけ內訌するものがあつて、苛々して堪らない焦躁のさまは、どんよりと濁つた儘に凄味を加へた眼の色にもはつきりとあらはれた。私も立上らなければならなかつた。鈴木氏は、こいつどうしたら一番手きびしく踏んづけてやる事が出來るかと考へてゐるやうに、餌食を前にした惡獸の身の構へで、喘いでゐた。

運よく小婢（こをんな）が、おつれさまがお待ちになつてゐらつしやいますといひに來てくれたので、私は助かつた。どうも今日はありがたう御座いましたと挨拶して、おつれさまの後を追つた。暫く三人でおもてに待つてゐたけれど、鈴木氏はなか〳〵出て來ないので、その儘失禮してしまつたが、それつきり、相見ざる事十年餘に及んで、突然その訃をきいた。もつとも、その事のあつてから數年後に、數寄屋橋の上で擦れ違つた事がある。もともと不健康な人だつたが、一層病的の度を加へ、おまけに步行困難の樣子だつた。先方は心づかず、こつちはさはらぬ神に祟りなしと思つ

て知らぬふりをして過ぎた。讀者はあく迄も讀者で、作者には逢はない方がいい。私は今も變らぬ鈴木三重吉氏の愛讀者である。（昭和十一年七月五日）

――「時事新報」昭和十一年七月十一日・十二日

街歌

會社員を父とし、私立の學校に學び、會社員となつた私は位階勳等の高い官吏や軍人に近づきの無い事夥しい。殊に軍人とは緣遠く、海陸あはせて、面識のあるのは數人に過ぎない。その數人の中に、今をときめく陸軍大臣寺內壽一閣下と、海軍大臣永野修身閣下を數へ得ることは、私には不思議な氣持がする。尤も寺內さんには三十餘年も逢つた事が無いから、先方では覺えてゐないかもしれない。何しろ日露戰爭以前の事なのだ。

私共の家には、鎌倉に別莊があつた。別莊といふと、いかにも贅澤な、洒落たものゝやうに聞えるが、それは全く子供の健康の爲に建てた實用一方の家で、海に近く、庭は平面の芝生で、相撲を取つたり、球投げをするのが目的で、石を置いたり、苔をつけたりする趣味とは、全く緣の無いものだつた。

子供本位の、暑中休暇用の別莊だから、時期はづれには戸をしめるつもりで、門の側には番人の住む小家があつた。だが、當時は父方と母方の二人の祖母が年中住んでゐたので、番人の必要はなくて濟んだ。その不用の小家を、たつた一夏他人に貸した事がある。元來、父は家を貸して賃錢をとるといふやうな煩はしい事を嫌ふ人間だつた。芝の松坂町に永く住み、晩年白金三光町に移轉した時など、これから土地家屋の値段の上るのは疑ひ無いから、暫く他人に貸して置き、後日高値を待つて賣却しては如何かと勸告する人もあつたが、家主商賣は不愉快だから、安くても構はない、賣拂ふといふことで、私が命ぜられて賣買談の立會ひや、登記の手續をさせられた。父は理論を重んじ、自分の經營する會社の事や、會計監督を引受けてゐた母校の事になると、非常に冷靜嚴格に利益を圖る事を忘れなかつたが、自分一個の事になると、存外氣分本位でかたづけてしまふ風があつた。從而、家を貸して賃錢をとる事などには、寧ろ厭惡の心を抱いてゐた。その父が、どうして別莊番の小家を他人に貸す氣になつたのか、どうしても私にはわからない。つましい祖母の主張だつたのか、年寄と子供ばかりの不用心よりも、屈強の學生のゐる方が安心だとでも考へたのか。

借手は帝國大學の學生で、村上隆吉同圭彥平佐純俊の三氏だつた。中學下級生の私には、大學

卒業前の學生は立派な大人に見えた。殊に兄村上氏の如きは、動作も口も重々しく、髯は濃く、老成人の風があり、卒業論文の制作にとりかゝつてゐた爲か、あまり海邊にもゆかず、机にむかつてゐることが多かつた。弟村上氏は一高時代野球選手として鳴らした人で、體格雄大、眼が大きく、鼻が高く、その上頭髪が縮れてゐるので、混血兒のやうな風貌だつた。村上家の血統なのであらう、此の人も極端な無口だつた。平佐氏は痩身の神經質さうな人で、よく仲間うちの者のからかひを眞にうけて憤つてゐた。

三人の大學生のところには、いろんな人が遊びに來たが、母屋の方の吾々と交渉のあつたのは、高木さん中村さん寺内さんだつた。高木舜三氏は高商の庭球選手として、日本の第一人者とうたはれた人だ。私はこの人に波乘を教はり、それに自分の工夫に改良を加へ、當時未だ幼稚だつた鎌倉の河童連の中で、波乘の開祖などゝ稱されて大得意になつた。それ等の人達の中で一番人氣のあつたのは中村さんと寺内さんで、二人の祖母はこの人達の來るのを待兼てゐた。手品をやつて見せたり、冗談話でおばあさんの笑を止まらなくさせたり、掌に鍋墨を塗つて來て、ていねいに頭を下げる女中の頬邊になすりつけたり、機智と諧謔と悪戯で、年寄子供を喜ばせた。寺内さんは、その時既に中尉だつた。この連中は、いづれもお茶の水の附属中學出身だつたらしい。

私は子供の頃、素人初段だつた父の眞似をして將棋をさし、子供としては強かつた。上記の人達の中にまじつて勝負を爭つても、負けなかつた、西洋骨牌も私の得意だつた。さういふ遊び事をやる時も、中村さんと寺内さんはふざけて、わざとこすい事をしたり、それがばれると座中をひつくりかへして逃げてしまつたりした。又、寺内さんは、勝負事をしながら、年中うたを口吟んでゐた。いつも變らぬダイナマイト節で、將棋の形勢非なる時などは、殊に力強くうたつた。私も聞き覺え、今も記憶してゐる。

　民權論者の涙の雨で
みがきあげたる大和魂
　國利民福增進して民力休養せ
　若しも成らなきやダイナマイト・ドン

三十餘年の歳月は流れて、その間に村山さん兄弟、平佐さん、高木さんは亡くなつたが、寺内さんは武運強く、陸軍大將となつた。

前にもいつた通り、私はダイナマイト節當時の寺内さんしか知らないのだが、その後彼をはげしく憎んだ事がある。それは恩師永井荷風先生が附屬中學に學ばれた頃、所謂硬派の寺内さんが、

先生を軟弱の徒として大にいぢめたと知つたのだ。私は義憤を感じ、今後何かの機會に相會する事があつても、言葉はかはすまいと思つた。

然るに、突然寺内さんは非常時陸軍大臣として、肅軍の大任を引受け、〔十五字略〕身命を賭して起つた。〔七十九字略〕正直率直長い髯を蓄へない大臣の此の明朗なる態度こそ、幾年國民が待望んだものであつた。機會があらば私は寺内閣下に昔の寺内さんにかへつて貰つて、昔教はつた歌を共にうたひ度い。

悔むまいぞや苦は樂の種
やがて自由の花が咲く
國利民福增進して民力休養せ

……………………………………（昭和十一年七月十二日）

――「時事新報」昭和十一年七月十八日・十九日

ちやんぽん生活

「お父さん、僕のおうち何處にあるの。」
ことし六歳になる伜が、深き疑ひを眼の色にも見せて、突然おやぢの顔をのぞき込んだ。
「こゝにあるぢやあないか。」
思ひもかけない質問に、眞意の程もはかりかねたがこどもの顔つきは眞劍で、不安に堪へないやうにも見えた。
「うゝん違ふよ、僕のおうちだよ。」
「たからこゝだよ。」
「違ふ。」
自分の質問のかんどこをつかんでくれない腹たたしさに、おやぢを叱咤した。

「こゝ僕のおうちぢやあない、拜借だよ。」

おやぢはぎやふんと參つて、「僕のおうち」を持たない伜の忿懣の態を見て默した。

「拜借だつていゝさ、こんな立派なおうちだもの。」

なだめてみたが、伜にはすこしも通じない。

「お父さん、今度建てる時、いゝおうち建てゝね、屋根で遊べるやうなのね。」

はゝあ――おやぢにもやうやくわかつた。

只今拜借の家は、東京の眞中の見晴のいゝ高臺で、家も廣く、庭も廣く、大家さんはおうやうで、家賃は安く、申分は無い。強て勝手ないひ分をつければ、廣過ぎ、立派過ぎるだけだ。普請の立派な事、障子襖の贅澤、湯殿臺所は廣く、おまけに自動車々庫迄ある。なかみの無い車庫の存在は、かへつてみつともない位のものだが、こゝには子供の三輪車が納まつてゐる。何といつても電車で通勤する月給取の住居とは見えない、身分不相應のおうちなのだ。拜借なればこそ住んでゐられるおうちなのだが、そんな事は子供にはわからない。始終遊びに行く親類の、近代式洋風の家の屋上に出られる面白さに、すつかり魂を奪はれ、純日本風の我家に慊らず、他人のものを羨しがつてゐる折柄、誰から聞いたのか、この家は拜借物だと知つたので、恐らく何處かに

眞實の我家があるものと思ひ込んだものらしい。

「お父さん、僕のおうち何處にあるの。」

と子供心をいためたのである。

おやぢは悄氣た。おやぢにとつては、學校を卒業して四半世紀、夏も冬も滿足には休暇も貰はず、働きづめに働いて、未だに「僕のおうち」を持たないはかなさに、自責の念そゞろに深いのだが、伜の方は必ずしも拜借を非難してゐるのではなく、それよりも、屋根に出て遊べる家にあこかれてゐるのに違ひない。

「よおし、今に建てる時は屋根で遊べるおうちたぞ。」

入るだけは出てしまふ生活を多年しつゞけて、家を建てる見込の無いおやぢは、無責任に空虚な聲を發したが、

「きつとね。」

とゞめをさゝれて恥入つた。

近代日本獨特の和洋ちやんぽんの生活樣式程、複雜多岐珍妙不思議なものは無い。衣食住に例をとつても、結婚披露のお婿さんはモオニング・コオトが定式となつたのに、お嫁さんは高島田

につのかくし、うちかけを着たりいまだに色直しなどゝいふ下らない見栄も保存してゐる。國粹主義の親玉と雖も、必ずしも洋服を着ないとは限らない。況や一般勤人にとつては、洋服は勞働服であり又禮服で、和服は浴衣と寢衣の用途によつて僅かに對立する傾向になつた。殊に學生は、男女を問はず洋服が制服となり、これが除外例としては應援團長と、寶塚少女歌劇の濃綠の袴から足を出してゐるお孃さんを數へる位のものだ。更に一層新時代の、小學生並にそれ以下は、生れた時から一度も和服を身につけた事のないのさへゐる。否々、小學校から女學校迄押通して和服を着た事がなく、お嫁さんになる事にきまつて、はじめて自國本來の衣服を肌につける娘も珍しくない。

かういふ育ちの坊ちやんやお孃さんの中には、疊の上に坐る習慣を積んでゐないのもあつて、椅子と西洋机でないと勉強が出來ないといつたり、無闇に洋風ベツドを戀しがつたりする。そんな育ちでない者でも、何となく洋式が新鮮で感覺的だと思ひ込んでゐるのもある。從つて家屋も、明治時代は大體は日本風で、應接室だけ洋風にする一種の樣式が流行(はや)つたが、昭和の今日では、全部洋風の家が都市を取卷く勢となつた。まして況や發育盛のものどもは、野菜と魚肉を主とする日本料理では食べた氣がせず、一皿に盛りあはせたあやしげなランチと稱する物でも、西洋料

理とあればたんのうする。此の傾向は何處まで行くのか、まつしぐらに洋化して、我國固有の一切のものは形を失ふか。

そんな事は無いといひ度いところた。例を自分にとつてみても、青年時かなり長く外國に在り、その後は會社員として洋服とは縁が深く、洋風事務室で仕事をしてゐるのであるが、何時もおもふのは、一刻も早く靴をぬぎ、洋服をぬぎ、和服で疊の上に寢轉びたいといふ事だ。袋の中にとぢこめられてゐるやうな洋服、蒸れて汗ばむ靴の不愉快に比べて、さらりとした和服に素足の心地よさ。殊に不安定な洋風ベッドと違つて、疊の上の寢床は夢まどかだ。それと同じく食事にしても、私は今や洋食を口にするに堪へない。洋風宴會のおよばれは、ひとつの苦痛になつた。すべてが年齢の關係で、年をとると祖先傳來の日本人の血がよみがへり、何事も日本がよくなり、戀しくなるのだといひ度いところだ。

しかし、吾々年代のものこそさうかもしれないが、今の子供が大人になつた時、果して同じやうに疊を戀しがり、さしみと酢の物でいつぱいやる舌を持つであらうか。既に出立點の違ふものが、同じ道を通るだらうか。

「お父さん、もつといゝおうち建てゝね。」

とおやぢに迫る伜が、いくつになつたら立派過る程の拜借の家の住心地を解するのだらう。彼の一生涯、それがわからないのもおやぢとしては寂しい。だが、全くおやぢと同じやうな思想感情趣味嗜好を持つ年寄になられては、一層寂しい。

萬々一、私が家を建てるとしたら、どうするか。私は伜の欲するまゝに、屋根に出て遊べるおうちを建てよう。おやぢは悔んでも、ぢだんだ踏んでも、もはや生涯の終に近づいて來た。伜よ、君は君のおもふがまゝの道を進め。（昭和十一年七月二十三日）

――「時事新報」昭和十一年七月二十五日・二十六日

老父歎

四十五歳にしてはじめて父となつた私は、もとより人後に落ちぬ親馬鹿である。こどもは母親の偉さとこはさは知つてゐるが、父親には尊敬の念を持つてゐない。愚妻は世間並の考へで、何とかしておやぢをうやまはせようとつとめ、敎へ、心をくだくさまは笑止であるが、效果はすこしもあがらない。

世間の、自分と同年配のこどもの父親と比べて、我父は何たる年寄であらうといふのが、先づこどもの頭に浮んだ不審である。おやぢの膝に乘り、髯面を撫でたり、叩いたりしてゐたのが、突然、

「お父さんおぢいさんになりかけだねえ。」

と云つた。あんまり本當の事をいはれて、おやぢはぐつと詰まつた。

「ねえ、さうでしよ。」
たゝみかけて來るので、本當の事は本當だから、
「あゝ、さうだよ。」
と答へると、今度はつくづく顔を見て、
「お父さんのお顔、どうしてそんなにばつちいの。」
と來た。年をとつて皺が深く、贅肉が出來、たるみが出來、皮膚には汚點がいつぱいはびこつてゐるのだから、こども心にも汚ならしく思ふのはあたりまへだ。だが、あんまり適切な事をいはれるのは愉快でない。おやぢはむつとして僅かに苦笑をもらした。
このこどもが小學校に入り、中學から大學へ順調に進むとしても、その卒業の喜びにめぐりあふのには、ざつと七十迄生きなければならない。萬一こどももおやぢと同じ根性を持ち、學校を嫌ひ、先生にそむき、父母に歎きをかけるものとすれば、愈々命ながらへなければならない。その上、世間の親並に、こどもの結婚に關する一切の負擔もしてやらなければならないとすると、こいつはうつかり死ねないぞ——と嚴粛に、行末を想ふことがある。
親馬鹿は、あらゆることを犠牲にして御機嫌をとりむすばうとするが、こどもの方では十分に

買つてくれない。
「僕ねえ、內藤さんが一等好き。それからお母さん、それからお父さん。」
と正直に數へたてる。內藤さんは腕のいゝ西洋家具の職人で、机もこしらへてくれるし、椅子もこしらへてくれるし、おもちや箱もこしらへてくれるし、こどもを遊ばせることも上手だ。內藤さんが遊びに來ると約束した日を指折り數へ、內藤さんが來たとなると、おやぢが一生懸命にお相手してゐる時でも、忽ちふり捨て、
「僕、內藤さんと遊んで來る。」
といつてかけ出してしまふ。
愚妻は眞劍になつて、
「うちで一番優ちやんを可愛がつて下さるのはお父さんでしよ。だからお父さんが一番好きでしよ。」
と、だまさうとするが、
「うゝん、僕內藤さんが一番だよ。」
といつてきかない。あんまりうるさくなると、母親と父親の順位を變更して、その場を逃れよ

うとする。

「それぢやあお父さん二等にしてあげる。」

と讓步の實を示し、母親よりも手強くないおやぢの背中にかけて來て、

「ね、お父さん二等ならいゝでしよ。だつて爲方がないよ。僕內藤さんが好きなんだもの。」

と耳の中にあつたかい息を吹き込む。おやぢはまるで他愛なく、

「いゝよいゝよ、僕びりつこでもいゝんだよ。」

と云つて、母親の眉をひそめさせる。

どうして內藤さんはそんなにいゝのか、おやぢは多少の嫉妬もあつて、こどもと遊んでゐるところを、のぞきに行つてみると、成程こいつはかなはない。積木でお城をつくることもうまいし、木片や空箱を利用して玉ころがしも出來る。鐵鎚と釘さへあれば忽ち動物の住むアパアトメント・ハウスも出來上る。何しろ腕に職のあるのと、まるつきり不器用なのとでは競爭にならない。

「內藤さんにはかなはないよ。」

おやぢは嘆息し、無理にも父親を一等にさせようとする妻の愚かなる企を、ひそかにたしなめた。

ところが、今年の春から幼稚園に行くやうになり、友達が出來ると、久しく保つた内藤さんの王座も、やうやく搖らぐ事になつた。

「お父さん、僕の仲よし、誰だか知つてるか。」

「知つてるとも、内藤さんだらう。」

「うゝん違ふ。」

こどもは、おやぢの想像のうらをかいた得意と、祕密を喜ぶ心持でいつぱいだ。親馬鹿はあれにも、さては自分が一等に昇格したかと早合點して、

「それぢやあお父さんかい。」

と乘出した。

「うゝん違ふ。」

「お母さんかい。」

「違ふ。」

「富士子かい。」

「違ふ。」

去年生れた赤坊でも無いといふ。全く見當がつかなかつた。
「教へてあげようか。」
こどもは、おやぢの想像の糸が切れたと見ると、愈々得意になり自分から種あかしをしようといふのである。
「僕××さんが一等好き。二等は××さんの兄さん。三等は、だあれだ。」
「お父さん。」
「違ふよ。內藤さんだよ。」
おやぢは四等か五等か、今後ともあがる見込は無く、さがる可能性は十分ある。××さんは幼稚園のお友達だ。はじめて友達の出來た嬉しさに、流石の內藤さんも三等になつた。
こどもにとつて、目下最大の數は五十だ。何か物をねだる時も、澤山ほしいといふ心持を、此の數字であらはす事が多い。
「金魚五十疋買つてね。」
「花火五十ぱつあげませう。」
などといふ。どうしたものか少食で、ごはんは大概いちぜんしか食べない。どうかして二ぜん

食べさせようと努力してゐるのだが、中々いふ通にならない。そのくせ、他家のこどもが三せん食べたとか、五杯食べたとかいふと、

「僕五十ぱい食べてやる。」

と威張る。

或時おやぢの側にぴつたり寄添つて、

「お父さん、五十になつても死まないでね。」

といつた。東京のこどもは、どういふものか、死む死まない死みさうと訛るが、うちのも御多分にもれない。

「大丈夫だよ、死なゝいよ。」

その時四十九歳のおやぢは、父しても苦笑の外に手はなかつたが、こどもは一生懸命たつた。家中方々に飾つてある祖父の寫眞を見て、おぢいさんはどこにゐるのかときゝ、おかくれになつたのだと教へられ、最初はかくれんぼのやうに何處かにかくれてゐるものと思つてゐたのが、おかくれとは死ぬ事であり、年をとると死ぬものだと、うすうすわかつて來た折柄、おやぢは來年五十になるときいて、最大の數に達しては、死ぬのではないかと氣づかつたものらしい。

「きつと死まないでね。」

「大丈夫だよ。」

「五十よりももつとおぢいさんになつて、年がなくなつても死まないでね。」

五十を越して、こどもには勘定の出來ない年になつても死んでくれるなといふのだ。あんまり眞劍なので、おやぢは返答が出來なくなつた。こつちは七十迄も八十迄も生きて、こどもの卒業を見、嫁を迎へてやらなければならないと心配してゐると、こどもの方では物心ついた時からおぢいさんになりかけの父親の壽命に不安を覺え、いつ迄も死なゝいでくれと頼んでゐるのだ。老いたる父のはかなさに、親馬鹿も涙ぐみ、こどもの背中に手を廻し、

「死なゝいよ、死なゝいよ。」

そんな心配をかけてすまないと、あやふく泣き出しさうになるのである。（昭和十一年七月二十九日）

――「時事新報」昭和十一年八月一日・二日

「郡虎彦全集」に就て

齢二十一にして、文壇に初見参し、これを記念する爲か、一時のおもひつきか、萱野二十一の筆名を用ひ、小說「松山一家」は雜誌「太陽」の懸賞に當選し、戲曲「道成寺」は自由劇場第六回の上演脚本に選定されて脚光を浴び、後歐洲に遊ぶや、英語を以て戲曲を發表し倫敦に於て公演され、更に獨佛伊諸國譯も出るといふ華々しさで、世界的文豪たらんことを期したのが、不幸にして病み、三十五歲で瑞西に客死した郡虎彦氏の全集が、友人志賀直哉、武者小路實篤、里見弴諸氏の盡力で、やうやく出版されることになつた。

彼こそは、島國根性にみちみちたる日本文壇に慊らず、これを輕蔑し、直に日本生れのシェクスピアとして世界的文學を殘さうと志し勇敢に執拗に目的を果さんとした稀なる人間であつた。

全く彼は類の無い人間だつた。多くの文學青年が、文壇に出るとか出ないとか、右を見たり左

を見たり、恨んだり、ひがんだり、歎いたり、愚痴をこぼしたりしてゐるのをしり目にかけ、最初から自分こそは世界第一流の作家だと信じてゐたものゝやうに見える。天分薄く、氣の弱い吾々には、時にそれは誇大妄想か、出鱈目か、おどかしか、つけ元氣か、噓つきか、大山師かとも思はれたが、彼の短い生涯は、彼が決して口さきばかりの法螺吹でなかつたことを立證した。

とはいへ私と雖も、彼の仕事が果して世界的のものであるかどうかは疑問だと思ふが、彼程積極的に自己の力を世界に示さうと努力した人間は珍しく、まことに心地よき浪漫派として、その業績を推稱したいのである。

私は大正三年の秋から約一年間、英京倫敦に於て、彼と親しくつきあつた。未だ英語で作品を發表する前で、今から想へば、歐羅巴で古典藝術に感激し、それ迄かなりの感化を受けたオスカア・ワイルド、ダヌンチオ、ホフマンシュタアル、シュニツツラアに別れを告げ、ミケランジエロとシエクスピアに藝術の本道を見出し、身を以て之等の巨匠と競はんとこゝろざしつゝ、ひそかに心の準備を整へてゐた時代だ。尤も、日本人經營の喫茶店にゐる日本娘に戀し、何も手につかないといふ時代でもあつた。私は、彼が倫敦の眞中で、日本娘に戀する事の不思議さを、屢々口にしてからかつた。それが、他の日本人なら不思議はない。いつも日本料理を戀しがり、自室

では浴衣姿でくつろぎ、米の飯を夢に見る普通の日本人ならば、異郷に同胞と相語つて思郷の念を癒さうとするかもしれない。ところが、郡氏は日本にゐる時から、凡そ日本趣味には遠い人間だつた。和服を着た事が無い。米の飯は嫌ひだといふ。小うるさく他人の身の上に干渉したり、噂話に日も足りない日本人は好きでないらしかつた。さういふ彼が、どうして日本娘に參つたのか。これこそ、彼にとつては一種の異國趣味なのではないか。彼は私の誘問に對し、持前のほがらかな笑聲を以て答へるばかりだつた。

しかし、此の戀は失敗に終つて、間もなく、彼の晩年を、日本の妻の如く貞節にみとつた苦吉利婦人と相許すやうになつた。

彼は日本の文壇を輕蔑してゐた。反感を持つといふやうななまやさしいものではなく、頭から蔑視する態度だつた。西洋好の彼のひとつの強味であり、同時に又何となく妄想的な、芝居がゝりに見える原因でもあつた。

彼は島崎藤村先生と同じ頃に巴里にゐたが、此の大家を自分よりも遙かに天分の乏しい作家と見做してゐたやうだ。先生一流の、日本的な、謙譲な態度をこゝろよしとせず、又既に完成期に達した人の常として、歐羅巴の文化の中に在つても、情熱を以て之を感得するのでなく、離れて

觀察する傾向の著しいのを、鈍感とさへ斷定してゐたやうだ。

大正九年に彼が歸朝した時、私は屢々彼と逢つた。最後の時は、二人で或る待合であつたのだが、偶然同じ家の別座敷に泉鏡花先生が見えてゐて、しまひに一座した。その時、彼は私が此の天才作家に對し、心からの尊敬をもつて先生と呼ぶ、その敬稱をよせといつて止まなかつた。「先生はをかしいなあ」と、朗かに笑ひながら、肚の中では強く非難してゐた。

彼は鏡花先生の作品なんか、ろくに讀んでゐなかつた。讀んでも、あの日本人の感情にあふるゝ作品は、西洋好の彼には緣のないものだつたかもしれない。若し世界の言語がひとつだつたら、最も日本的な此の作家こそ世界的名聲をかち得るに違ひ無いと、私は熱心に說いたけれど、彼は決して耳をかさなかつた。その晩彼は私に好感を持たなかつた。それつきり、何の知らせもなく出立し、英吉利に行つて——或は歸つて——しまひ、異鄕の灰となつてしまつた。

兎に角彼は異常な天分を持つてゐた。不幸にして病弱だつたが、精神は強かつた。若し彼が壽を保ち、今日もなほ世に在つたらどうなつたであらう。四十になつても五十になつても、日本に歸る氣は起さず、歐羅巴人を讀者とし、觀者として、小說戲曲の制作をつゞけ、日本生れのシェクスピアを以て任じてゐたゞらうか、或は又年齡と共に故鄕が戀しくなり、日本に歸つて來て、

日本的なものを見直し、今迄氣の付かなかつた美と力との發見に感激したかどうか、私には想像がつかない。

私は繰返して彼の西洋好を說いたが、だからといつて彼は決して日本を嫌つたのでは無い。彼は日本を愛し、日本人である事を誇りとさへしてゐた。愛國的精神に於ては誰人にも負けないものがあつた。けれども、島國根性で、無批判に、獨善的に、日本の一切をよしとはしなかつた。日本のいやな所、卑小なもの、脆弱な點は極端に嫌つた。愛するが故に憎むといふ心持であらうか。

彼が死んで十餘年、今日郡虎彦の名を知らない人も多いであらう。二十一歳にして突如文壇の新星としてあらはれ、忽ち我國近代劇運動の最尖端を切り、華々しく文壇に地歩を占めたと思ふと、唾棄するやうに之を見捨て、今度は英吉利に腰を据ゑて、英語で戯曲、詩、評論を發表し、短い生涯に輝かしい才筆を示した、浪漫派精神の滿々たる詩人の業績を知るのは無益で無い。

(昭和十一年七月三十日)

——「時事新報」昭和十一年八月八日・九日

極樂淨土

勤先の應接室で、或日或る品物の賣込に來た人と對談してゐた時、何のきつかけか、突然その人は緊張した姿勢となり、聲も一變して、

「失禮ですが、西方淨土といふのは何處をさしていはれたのか御承知で御座いますか。」

といつて、私が返事に迷つてゐると、

「それは大日本帝國のことで御座いますよ。西方十萬億土を過ぎたる所にありといはれる清淨世界は我國のことで御座います。阿彌陀さまの御いでになるところで御座います。全くありがたい事で……」

南無阿彌陀佛々々々々々々々といひ出しさうな敬虔な態度で、その人は私に教へてくれた。いふまでもなく滿洲事變後の事で、歷史も地理も法律も、あらゆる學問を、明治以來の西洋流と絕緣

し、天上から見ようとする精神運動の興隆せんとする時であつた。商ひをもつてなりはひとする人ながら、時を得たる或宗教の信仰者の一人であると後で聞いた。さういふ方面の精神生活に縁遠い俗物は、かねてきく極樂が我國のことだと教へられても、たゞ茫然たるばかりだつた。

もとより吾々は、萬世一系の天子様を頂く世界無比の大日本帝國に生れた事をほこりとし、身の幸を喜ぶものであるが、さりとて此の國が、西方淨土だとは思はなかつた。吾々は小學校一年の時から、我が國體については明確に教へられて來た。（二百五十字略）

されば吾々は、大日本帝國臣民たる光榮を身に沁々と感謝してゐるのであるが、更に此の國土が西方淨土であると教へられて、あまりのことに心が顚倒し、實は相手の心狀に疑ひを持つた位であるが、全く眞劍に緊張してゐる様子を見ると、質問をする隙さへ見出す事が出來なかつた。

私共幼少の頃に、惡い事をして死ぬと地獄におちるとおどかされた。噓つきは閻魔さまに舌を抜かれ、又或者は六道の辻に踏迷ひ、賽の河原に石を積み、血の池にもがき、針の山に追ひあげられ、牛頭馬頭の呵責をうけるのだと、如實感のたつぷりある繪畫を見せつけられて震へ上つた。尤もその一方には、善い事をして死ねば極樂に行かれるといふ話もきかされたけれど、何しろ怖ろしい方は心魂に徹し、繪の印象も地獄の方が強く鮮明だし、一度でも惡い事をすれば地獄へお

あるとすると、大概の人間はその方に違ひ無いから自分も御多分にもれまいと思ひあはせ、此の世果（はか）無い心地に堪へなかつた。全く地獄の繪といふものは、サド侯爵に見せたらさぞかし興奮するだらうと思はれるやうな、怪奇殘酷なもので、幼童の心には壓力が強過る。私は今でもはつきりと思ひだす。裸にされた男女が、青ざめ、血を流し、肉體を苦痛にくねらせ、泣き叫ぶさまは恐らく生涯忘れる事が出來ないであらう。それなのに極樂の方は、どうも印象がはつきりしない。蓮の花は咲いてゐたであらう。しかし、どうもはつきりとは思ひ出せない。然るに、實に突然、この吾々の住む日本が、その極樂淨土だといふのだ。實に人間の空想程、ゆたかに樂しいものは無い。

その後間もなく、或會合の席で、私は日本淨土說を紹介した。正直のところ、私は一座の人達は、恐らく途方も無い此の空想を笑ふであらうと期待したのであるが、意外にも強い支持者があらはれた。

「全く日本は極樂ですよ。極樂といふのは、日本を更に理想化したものですよ。」

畫壇の大家は決然としていひ放つた。その意氣込はあたりの人が笑はんとしても笑へない位、おさへつけてあまりあるものであつた。

一いつたい日本程、春夏秋冬の變化の趣の深い國が何處にありますか。日本程山水の美しい國が何處にありますか。日本程多種多樣の草木の惠まれてゐる國が何處にありますか。日本程美しい鳥や魚や蟲の棲む國が何處にありますか。しかも人間は強く、利口である。全く極樂ですよ。」

流石に、自然の觀察描寫に精神をうちこむ畫人の說は面白い。成程、人の氣のつかない野山の雜草にも、とりどりに細かい美しい花が咲く。小鳥の聲も樂しい。四面海もて圍まれる國だから、魚貝はもとより種類が多い。今でもまだ東京の町中に蝶々蜻蛉が飛び、蟬どもは合唱する。紐育、倫敦、巴里、伯林に於ても斯く長閑なる景色を見ることが出來るか。佛教のことは少しも知らないが、山川草木のゆたかなる事に結びつけられると、さては自分は極樂淨土に生れたのか、善根をつくすまでもなく、かゝる果報に惠まれたのか――こいつは面白いぞと一人密かにほゝ笑んだ。

私は得意になつて、逢ふ人毎に說いた。

「西方淨土といふのは日本のことださうですねえ。」

すると相手は非常に驚いて、或者は最初私が經驗したと同じく呆然として目をみはる。或者は笑ひ出す。或者は眞意を捉へかねて、私の精神狀態を疑ふ。そこで私は、畫伯にきかされた說をうけ賣する。此の說は餘程我が同胞の愛國心に媚ると見えて、感心する者が多い。私は愉快にな

り、無反省になり、相手をえらばなくなつた。

「先生、いつたい西方淨土とは何のことですか。」

一人の文學青年は、私の心の狀態をあやしむもの丶如く反問した。これには私も當惑した。しきりに口にはしてゐるが、他人に說明する程の知識は無い。地獄の方なら充分に說明出來るのだけれど。

「待てよ、字引を引いて見よう。」

私は早速字典を引張出した。

さいはうじやうどはごくらくじやうどに同じ。西方十萬億土を過ぎたる所にあり。阿彌陀佛の住む所。淸淨にして、生死、寒暑、憂惱等の一切の苦痛無く、七寶の莊嚴と微妙の快樂に富む云々。

畫伯がとりあげたやうな春夏秋冬の變化はなく、年中のんべんだらりと同一溫度を保つもの丶やうである。山川草木鳥蟲魚貝の事は書いて無い。どうもこれ丈では、我が住む國土とは違ふやうだ。山川草木は美しいかもしれないが、こ丶には複雜なる人間社會の一切の憂惱が渦を卷いてゐる。〔八十六字略〕。知らざるもの丶幸が、忽ち脆く崩潰したので、私はすつかりてれて苦笑した。

青年は私のへこたれたのを見て、甚だいゝ氣持らしく、
〔二十五字略〕
ひと頃はやつた、をかしな三十一文字を、何氣ないふりをしてくちずさみ、バットの煙を鼻から出した。（昭和十一年八月五日）

――「時事新報」昭和十一年八月十五日・十六日

土産の石

つい此間讀んだ雜誌に、誰の書いたものか忘れたが、旅行の先々で石を拾つて來て記念とする樂しみが記してあつた。それはその人の獨創か、又は世間一般に、郵便切手を集めたり、燐寸(マッチ)の商標を集めたりするやうな流行なのか知らないが、實は私は今日迄、私の母のかしこきおもひつきだと思つてゐた。

「ほかには何もいらないから、お前の行く先々で、石を拾つて、お土産に持つて來ておくれ。」

今は早や二十餘年の昔となつたが、大正元年？秋、亞米利加へ行く時に、母は私に註文した。石は美しくなくともよい、ちひさいものでよい、みちばたにころがつてゐるものでよい……

元來私共一族は不精である。世間並の、あけまして御目出度うだとか、暑さ寒さにお障りは御座いませんかとか、いゝお天氣で結構だとか、惡いお天氣で困るとか、皆さんお變りは御座いま

せんかとかいふ挨拶は略してしまふ性格を遺傳してゐる。父は、明治維新の變革に際し、さういふことは不必要だと考へ、意識的に排除したのかもしれないが、吾々子供の代になると、極めて自然に口に出て來なくなつたものゝやうである。かゝる性格に關聯を持つものと思ふが、私は父から、お土産を貰つた記憶が無い。隨分旅行もした筈だけれど、父の旅鞄から子供達への土産の出た事は無い。

よくない事はうけつぐもので、私は學生時分友達と遠足したり旅行したりしても、ほかの者は旅に土産はつきものだと考へてゐるらしいのに、何を買ふ氣も起らなかつた。第一買物をするといふ事に興味を感じないで、寧ろ嫌忌する方だから、商店の店頭に立つて、あれこれと品物を選ぶのが愉快でない。それが必要品の場合でも、私は一刻も早く店さきを離れたいおもひがいつぱいで、品物の良否、價格の適否を判斷する暇もなく、勸められる物をその儘受取つてすませてしまふ遣口だ。だから、友達がお土産屋の店頭で、何彼と品物を手に取上げ、さも樂しさうに比較し、眞劍に値切る有樣を見ると、その心境を羨ましく思つたが、さりとて自分も進んで之に倣はうとはしなかつた。母はもとより並々ならぬ我が兒の不精を承知し、且又留學費の極端に乏しい事も知つてゐるので、どうせあたりまへの土産物を買つて來いといつたとて、おいそれと實行し

はしないだらうと、根性見透しの事に違ひなかつた。

私にしても、みちばたの小石を拾ふ位の事ならわけなしだから、きつと忘れずに持つて歸ると誓つて故國を後にしたのだが、さて亞米利加におちつき、足かけ三年まる二年完全に忘れてしまつた。忘れたといふよりも、例の根性が出て、無視してしまつたといふ方が適切である。みちばたの小石を拾ふ事は不正でもなんでもないが、知らない人が見るときちがひじみてゐるし、うしろめたい氣のするものだ。

愈々亞米利加を去るといふ時になつて、私はやうやく母との約束を思ひ出し、先づハアヴアド大學の校庭の芝生の中をうねる小徑（こみち）に小石を拾ひ、ボストン美術館の周圍を取卷く連翹の生垣の間に見つけ、その外あちこちで拾つたのを鞄の底にしまひ、英吉利に渡つた。倫敦でも、巴里でも、歸途のダアバンでも、シンガポオルでも、上海でも、兎に角一つは拾つて來た。今にして殊に痛切に思ふのは、大國民といふのか老大國といふのか、寛容といふべきか、怠慢といふべきか、戰爭眞最中の非常時でも、歐羅巴諸國では、稅吏と雖も鞄の底迄ひつくりかへして探す精神を持つてゐないので、此の石どもは安らかに眠つて來たが、大日本帝國の吏員は職務に熱心だから、神戸に於てはじめて鞄の底の石が問題になつた。母に約束の土産ですと說明したが、うさんくさ

、眼で、幾度も石どもを檢査した。異人の國の稅關吏や警官は、人前でも平氣で五拾錢玉を手に受け、大に融通をきかせるさうであるが、日本ではそんなふしだらは許されない。それにも拘らず裏面に於ては、役人の關係する疑獄の絕えないのはどうした事か。それは本筋に關係ないが、兎に角鞄の底から澤山の小石のあらはれた事は、吏員の疑ふ所となつたのである。

星霜二十餘年、今も母の住む本家の座敷の床の間には、水盤に並ぶ石ころを見る。その中には私の旅の記念が澤山ある。もとよりみちばたの小石だから、形も色も、石そのものゝ美しさは乏しく、若しそれが我家の門前にころがつてゐたとしたら、下駄の齒にかけて溝の中へ蹴飛ばしたに違ひ無いしろものばかりだ。だが、石どもの片面には拾つた場所と年月日が記してあるので、その時の景色がまざまざと思ひ出されるばかりでなく、その頃の感傷までも浮んで來る。ナイヤガラ瀑布のほとりで拾つた平べつたい石を見てゐると、初秋の空に音もなくあがつて消えた花火に、懷郷のおもひを誘はれた日が蘇へり、ケエプ・タウンの赤茶けた石を手にとると、夏八月といふのに桃の花の咲いてゐた夢のやうな景色が眼に浮ぶ。寢臺と洗面臺と一脚の椅子でいつぱいになり、身動きも出來なかつた紐育の下宿の暑さに堪へかね、夜毎ハドソン河畔の共同椅子にルンペンの如く茫然として、對岸の灯のきらめきを眺め、金の無い身の佗しさに、血のしたゝるビ

イフ・ステエキの事ばかり考へてゐたあさましさも思ひ出す。まるいちひさい石は共同椅子の下にでもころがつてゐたのであらう。倫敦ではなかなか石ころが見つからず、人工でかためた近代都市の不都合を忌々しがり、結局ハイド・パアクで手に入れたが、當時英京は燈火管制下に在り、しかも獨逸の飛行船に襲撃された時であつた。それでも物に動じない英吉利人は、極めて冷靜沈着に、芝居氣を起さず、安つぽい情熱をまき散らかさず、默々として多難の途を踏んでゐた。公園の芝生には俄仕立の兵隊さんが、情人と相抱いて日光に浴してゐた。巴里ではルクサンブウル公園で、肌の滑かな白い石を拾つた。ソルボンヌ大學の近くの安ホテルに、月極めで下宿してゐたのだが、そこには故人となつた澤木四方吉氏もゐた。小泉信三氏もゐた。島崎藤村先生も、日本へ歸る間際に少時同宿された。公園は直ぐ近くにあつた。詩人文人の胸像の立並ぶ小徑の椅子にかけ、美しい花園を見て、ぼんやり時間を消すのは樂しかつた。

土産の石は、決して外國のものばかりでは無い。我國に於ても、北は北海道南は臺灣、その最南端の鵞鑾鼻の燈臺下のまる石もある。この夏は勤先の命をうけて北海道へ出かけたが、旭川には甥が入營してゐるので、その孫の身の無事を祈る老母の爲めに、白い小石をポケツトにしのばせて來た。母はうす汚い、何の取得もない石を押頂き、亡父の佛前にそなへて、手を合せた。

（昭和十一年八月廿一日）

——「時事新報」昭和十一年八月二十二日・二十三日

空襲

食卓に蠅が飛んで來ると、うちのこどもは、

「空襲々々。」

と叫んで追拂ふ。數年來、年中行事のやうに行はれる防空演習のおかげで覺えた戰鬪知識の活用である。いかにも軍國の兒童の勇ましさを示すやうに想像されるであらうが、實はいたつて臆病で、防空演習の砲聲を聞いたり、飛行機の爆音を耳にすると、戰爭？といつて怯える弱蟲である。空襲々々は人眞似に過ぎない。〔七百九十七字略〕

防空演習について思ひ出すのは、歐洲戰爭のさなかに、英京倫敦がうけた空襲の實況である。

私が倫敦へ行つたのは、大正三年の秋で、この大都は既に燈火管制下にあつた。人の話をきいても、別段演習も行はず、町會や青年團や國防婦人會の熱狂的活動に援助せらるゝ事もなく、何の

手數もかけず、いつぺんの布告を以て、靜に穩に行はれたものゝやうである。屋内の燈火を消したり暗くしたりするのではなく、窓のカアテンを下すだけであつた。偶々カアテンを下し忘れても、愛嬌あるおまはりさんが、門口からやさしく注意するばかりで、(四十一字略)いつ敵機が來襲するかわからないのに、少しも興奮の色を見せなかつた。

大正四年九月八日、今は故人となつた戲曲家郡虎彥君といつしよに音樂會に行き、夕刻ハイド・パアクの近くの喫茶店の二階で、安い食事をしてゐた。突然、砲聲が連續して聞えて來た。空には空襲々々と口々にいひながら、往來から逃込んで來る人數で、屋内はいつぱいになつた。空には探照燈がはげしく交錯し、何處からともなく一齊に人の叫びが起り、全部がうわあつといふ不氣味な聲に包まれた。敵機を見たといふ者もある。十數機來襲したといふ者もある。何處其處に爆彈が投下され、多數の人間が死んだといふ者もある。砲聲は益々さかんだ。急に窓の硝子が血の色に變つた。大都の眞中あたりに、火の手があがつたのだ。念佛を唱へるやうに、火事だ火事だといふ聲がひろがつた。つゞいて又、他の方角の空が、不自然にあかるくなつた。その場にぎつしりつまつた人達は、身動きもしずに、しかけ花火を見るやうに、窓外を凝視してゐた。芝居がかりの英雄も出なかつた。人をかきわけ、突きのけて前に出ようとする狼狽者もゐなかつた。他

人に對して命令を下す、世話燒もあらはれなかつた。各自がめいめいの運命を信じて冷靜であつた。まだ砲聲はやまなかつたが、次第に絕え絕えになつたので吾々は戶外に出た。意外にも、火事は下宿の方角だつた。私は郡君と別れ、眞暗な道を急いだ。旅人の身の氣安さには、父母もきやうだいも心配になる者はゐない。たつた一人の自分の命だと思ふと、膽は据つて、少しも怖いとは思はなかつた。私は自分の運の強さを信じてゐた。爆彈の爲に火を發したのは二箇所で、一方は下宿の直ぐ近くだつた。そればかりではなく、下宿の前の道路にも爆彈は投下されたが、幸に不發彈だつたさうである。

私の記憶はあやしくなり當時獨逸の飛行船が幾機來襲したのか、倫敦市民の幾人が死に、幾人が傷ついたのか忘れてしまつたが、その夜の英吉利人の態度といふものは、關東大震災の時の我同胞に比して、極めて冷靜沈着だつた事だけは忘れない。戰時の敵機來襲は、不測の地震とは違つて、豫想し得る度合が強いから、周章狼狽しなかつたのだとも云へばいへる。石と煉瓦とコンクリイトで固めた都會は、木の紙と土でつくつた家に住む吾々とは安全度が違ふともいへる。個々の場合を見れば、悲鳴をあげた女もある。失神した女もある。しかし、市民全體として、忌はしき流言蜚語も傳はらず、各自の分を守り、他人に干渉せず、運を天に任せ、自制を忘れなかつ

た事は確である。偉大なる平凡の底力が、大地とひとつになつて根をはやした感じであつた。翌日は、おまはりさんや〔二十字略〕平素の通りの生活がいとなまれた。歐羅巴の戰時は、我國の平時よりも平靜だといふやうな氣持がした。

〔四百十七字略〕自分一個の考へから、戰時空襲の危機に際し、國民は徒らに興奮輕躁の態を示さず、冷靜沈着であらねばならぬ。然らざれば不測の困亂騷擾をひき起す憂ひがある。だから平素の演習も出來る事なら一枚の印刷物で指令し、あとは各自の自制を俟つ方法をとり度いといふ主張なので、倫敦市民の物に動じないありさまを學んではどうかと思ふのだが、〔二百二十字略〕——私の如きも此の非常時に際しては、目のあたり見た空襲の實況を、夢幻の一場面と觀ずる事に努力しなければならないのかと思ひ迷つた。（昭和十一年八月二十八日）

——「時事新報」昭和十一年八月二十九日・三十日

涙いろいろ

マリア・テレジア三宅由岐子の一生こそは、まことにあはれ深いものであつた。はたちをこしていくばくもなく病牀につき、まる六年間死病と鬪ひながら、戯曲創作に努力し、やうやく認められて、一二の作は脚光を浴びたが、作者は僅にその一場面をラデイオで聽く事が出來たばかり、作品集の世に出たのも、作品の映畫化されたのも、この薄命の靈魂の天に歸して間もない今日の事になつた。せめてはかゝる喜びに逢はせた上で死なせたかつたと思ふのは、私ばかりではあるまい。

マリア・テレジア三宅由岐子の「春愁記」がこの度「君と行く路」と改題され、ＰＣＬによつて映畫化されましたので、來る八月二十八日午後三時半より、麹町區有樂町日劇ビル三階東寶映畫試寫室に於て、試寫會開催の運びとなりました云々

由岐子さんの師匠と賴んだ水木京太氏と、兄三郎君の連名の案內を受けた。私は映畫には馴染が無い。ちつとも見に行く氣持が起らない。この二十年間に映畫らしい映畫を見たのは、凡七八年前の「アスフアルト」と二三年前の「夢見る唇」だけである。前者は、世の中にとり殘されさうな私に、新時代の感激を吹込んでやらうとの親切か、庄野誠一丸岡明二宮孝顯の諸君が引張出しに來て、私と家內がおごつて貰つた。後者も同じ目的からであらう、美川きよ子女史にいつぱい飮ませて貰つた上で、おともした。美しくなまめかしき女史と二人で映畫を見に行く果報は、誰か知人に見せ度い位のものだつたが、かういふ時には誰にも逢はないものである。見てゐる間は別段つまらないとも思はないが、あまり感服もしなかつたので、愛想をつかされたと見え、少壯文學者も閨秀作家も、その後二度とは誘つてくれない。要するに自腹を切つて映畫を見たのは、二十年間皆無なのだ。今度も、由岐子さんの作品が映畫化され、映畫館で興行されても多分見に行く氣にはならなかつたらう。案內狀を受取つたゞけでは、矢張不精をきめこんだであらう。ところが弟子おもひの水木師匠が、前もつて態々やつて來て、必ず來いといふ熱心に釣込まれてしまつたのだ。試寫室といふのは想像したよりも狹い所だつたが、冷房設備があるので涼しく、集まる人も、由岐子さんの兄さんの大輔三郎雨君、水木氏、その他三四の知つた顏と、全く知らない

女性數名、あはせて十數人に過ぎないので、大變氣が樂だつた。
大輔君は既に一度見てゐるさうで、最初にうつし出される標題を見たゞけで、涙を止める事が出來なくなり、最後迄悲しき泉は滾々として盡きなかつたといふ。さもあるべきことで、殊に逆緣の不幸にあはれた母堂の如きは、この映畫を見て、どうお思ひになるだらうか。
私は全く映畫の技術について無學文盲である。しかしこの映畫が、極めて原作に忠實に、何等餘計なものをつけ加へず、素直でけれんの無いのを心地よく思つた。それは原作が小說でなく戲曲である爲に、自由解釋の餘地の無い結果かもしれない。俳優では、築地座の舞臺でも評判のよかつた淸川玉枝の元は藝者だつたといふ母親が圖拔けてうまく、これも同じ座に屬し同じ役を手がけた經驗のある佐伯秀男の弟夕次がよく、ほかの映畫畑で育つた俳優は、うまいと思へなかつた。
その人達は、由岐子さんの創造した人柄とは違ふ出生と教養——或は無教養を持つてゐた。たとへば、山縣直代の霞といふのは、本所深川で生れ、代用小學校に通ひ、長じては藝者に賣られて行く明治年代の娘であつた。この人は風邪を引いてゐたのか、聲が惡く、トオキイの役者とは思はれなかつたが、又鼻のつまつたやうな、舌たらずのやうなのがお芝居らしくなく、現實感が

深いといふ逆説も考へられた。津紀子といふ霞の親友こそもつともつと理智的でありたかつたが、堤眞佐子といふ人は、下町生れのタアキイ・フアンといつたかたちで、又春さきの若き獸類のやうに、ホルモン過剩を想はせ、無智なフラツパアに過ぎなかつた。大川平八郎の兄朝次も亦、丸の内に行けば幾人でもゐる現實感は備へてゐたが、由岐子さんの世界からは遠い人だつた。最も緣なき衆生の感深きは藤原釜足といふ俳優の空木といふ華族でその板につかないこと氣の毒といふ外なかつた。ひとことでいへば、配役のあやまりか、人不足か、或はもつと致命的に、作品の描いた世界の人格も教養も詩も些か高過ぎて、そこ迄は行けなかつたのであらう。さういふ不滿を感じながら、しかも私は感慨無量で、涙のあふれさうになるのを、あやふくこらへこらへてゐたが、時にはこらへきれないで、薄暗がりを幸ひに思ふ事もあつた。

私は「春愁記」を舞臺でも見た。それとこれと比べて、勿論舞臺の方を面白く思ふのだが、此の戯曲の主題は、かへつて映畫の方が強くはつきりと感じさせた。舞臺の上の悲劇は、スクリインの中のそれよりも、立體感が深く、餘情があり、詩があり、殊に間がある。しかし、スクリインの中の悲劇は、觀者をして考へ、迷はせ、味はせる隙を與へず、たゞ一筋のストオリイをまつしぐらに進行させて、端的に感動させる強味を持つてゐるやうだ。精神の深きを汲まず、簡單に

筋を追つて喜ぶ大衆が、演劇を見捨て映畫に走るのはあたりまへだ。

私の涙も、悲劇のストオリイをぐいぐいとおしつけられて感動した涙であらうか。それもある。だが、それよりも、はげしく胸に迫つて來たのは青春再びかへらずの歎であつた。

私は由岐子さんがお嫁に行つたことのある人か許婚のうちに破局を見た人か、そんな事を聞いた覺えがあつてしかも確かでない。きむすめのまゝ死んだのかとも思ふ。いづれにしても、戯曲家としては、女性に似合はぬしつかりした構成能力を持ち、行屆いた人生觀察の眼を持ちながら、どこ迄も清純利發な少女らしい理想と夢を抱いてゐた人のやうに感じられる。頭腦のよさが、少女小說の甘い憧憬になづむ事は許さなかつたから、斯くあれ、斯くありたしと願ふ世界が、反對の醜いものに崩されてゆく悲劇こそ、現實の人生だとは觀念しても、なほ由岐子さんには美しく樂しき青春の夢が、常に豐かな空想として浮んでゐたやうに思はれる。至純の戀愛、夫婦仲の眞實、親子の情愛――あらゆる人の心の美しさを、病牀にある身なればこそ、なほさら強くあこがれたのではないだらうか。「春愁記」にはそのあこがれが感じられ、マリア・テレジア三宅由岐子の短い生涯のあはれとおもひあはせて、私の涙は愈々止度がなくなつた。

そればかりではない。それよりも強く鋭く私を動かしたのは、お羞かしい話だが、我が身にか

へらぬ青春への歎きだ。朝次と霞の戀、夕次と津紀子の戀、その悲しき破局さへ羨ましく思はれる年齢の悲しさが、何よりも私の涙の源だつた。元は藝者の、妾腹の子と生れてもよい、失戀して死ぬ運命でも構はない、風邪引で鼻のつまつたやうな聲の娘でもいゝ、春さきの獸類のやうに肉感ばかりの娘でもいゝ、さういふ世界に生きることのどうしても出來ない老の寂しさが、深き後悔を伴つて私の心をとらへた。私は五十年の過去をかへりみて、とりかへしのつかない途を踏んで來たものだと思ふと人の一生のはかなさが沁々おもはれた。どんな悲劇でもいゝ、もう一度青春よ來れ。(昭和十一年九月二日)

——「時事新報」昭和十一年九月五日・六日

流行唄

夏になると避暑に行く。山か海か、別莊のある者や、宿屋に長く滯在する本格的なのもあれば、日歸で近くの海岸へ出かける簡單なのもあり、貴賤貧富を問はず、一夏に一度は出かけなければ氣が濟まず、幅が利かず、女房子供が承知しないといふのが近代都市生活者の樂みとなり、惱みとなり、苦みとなつた。

私どもでも、夫婦二人きりの時代にはおくびにも出さなかつたが、子供が生れ、よちよち步けるやうになると、夏中海の水を浴びさせると、寒くなつても風邪を引かないといふ學說を家內が熱心に唱へはじめ、爾來每年逗子に借家して、出かけて行く。世の常の一家のあるじは、かういふ場合妻子と共に出かけ、休暇の貰へない者でも、避暑地から通勤するのがあたりまへのやうであるが、例の不精で、私にはそのあたりまへの事が出來ず、いつも留守番ときめて、妻子を見ざ

ること久しいのがおきまりとなつた。どんな場所に、どんな家を借てゐるのか一切知らずに過して來た。

今年は關西に住む友人の娘が、たまには父母の膝下をはなれ、他人の家の飯を食ふのも何かの爲になるだらうといふので、八月なかばから遊びに來てくれることになつた。何しろ妙齡の娘の一人旅だから、ふだんは威勢のいゝおやぢも、心配で堪らない様子は手紙の上にあらはれてゐるので、先づ小田原迄出迎へ、その後も土曜日曜には、なるべく逗子へ出向いて、令孃の御機嫌を親もとへ報告するやうに努めた。令孃は近代の教養を多分に持ち、世の中のまんなかへはふり出してもおぢおそれない健氣さを示し、昔のお孃さんのやうな意氣地なしとは違ふから、大阪から東京へ來る位平氣なのだが、親馬鹿の方は無益な心配をしてゐるらしい。お父さんが一番心配してゐるのです——と、父を見ること娘にしかず、令孃は輕く笑つた。けれども、吾々としても、大事の大事の嫁入前の娘をあづかつて、萬一間違ひがあつては取返しがつかない。いゝえ、令孃には間違ひがなくても、世の中には馬鹿もきちがひもゐる、海岸の無防備の家だから、兇惡な奴が忍び込まないとも限らない、それが何より心配だと家内の大眞面目も尤もなので、この備へには東京から猛犬を差遣して、令孃守護の役を仰せつけた。家内の心配するのも道理で、拜借の家

は、私の幼少の頃の記憶にもある海岸の異人館だ。西洋造の珍しかつた時代に、たしか二軒並んでゐて、その塗料の色にちなんで、土地の者は、赤異人青異人と呼んでゐた。櫛風沐雨幾十年、今ではペンキもはがれてまだらとなり、羽目板は隙間だらけとなり、硝子戸は狂ひ、窓の鐵格子は錆び朽ちて、要害極めてよろしくない。持主の異人さんは近年神戸に住んでゐるので、かくは荒れるに任せたのだが、椅子も卓子も寢臺も食器棚もその儘拜借し、客間の本箱には書籍も入つてゐる。主として英米の通俗小說本だ。

庭は廣い芝生で、海にのぞむ木戸をあけると石段があつて、直ぐ砂濱だ。右手には波切不動改め浪子不動の岬が見え、左には櫻山から鳴鶴が崎を望み、晴れた日には遠く伊豆の山々も見え、又その上に富士の高嶺を仰ぎ見る事もある。申分の無い場所といひ度いが、申分はある。

春秋冬は申分ないかも知れないが、夏は申分がある。近代避暑地風景として、せつかくの砂濱に、休茶屋、カフェ、喫茶店、射的場、大弓場、球投、釣堀、ピンポン、コリント・ゲームその他小屋がけの娯樂場が軒を並べ、我が借家の緣に立てば、それらの小屋の屋根が見え、庭に出れば裏面がまる見えだ。晝は波の音を消すばかりの人聲が濱邊いつぱいに漲り、海は濁つてしまひ湯に入るやうな有様、夜は夜とてさかり場一帶の鳴らす蓄音器が、十時になつても十一時になつ

ても止まず鳴りつゞける。幸ひにして「忘れちやいやよ」は、發賣禁止となつたが、これにかはる「とんがらかつちや駄目よ」は、今や賣出されたばかりだから、麥畑の出あひで風邪を引いたやうな鼻聲は、南風に乘つて絕間なくやつて來る。客の好みか、商賣の遣口か、「とんがらかつちや駄目よ」をかけたとなると、それを繰返し繰返し三十分でも一時間でもつゞける。どうもあの聲はいけない。低級だ、卑猥だ、淺薄だと嘆いても、流行の力は堰を切つた水で、止む可き術もない。

六歲の男の子は、忽ち聞覺え、いたづらをして母親に叱られると、

　立場の違ふ時はお互さまよ
　それでもあなたはとんがらかつちや駄目よ

とうたひながら逃げて行く。母親の方でも、子供がじぶくつてゐると、

　都合の惡い時やお互さまよ
　それでもあなたはとんがらかつちや駄目よ

とはぐらかすと、忽ち釣込まれていつしよにうたひ出す。末期の唄も效果はある。非常時に藉口して、無闇に褊狹な說をたて、良民を苦しめる奴があつたら、すべからくとんがらかつちや駄目よを以て應酬すべきだ。流行唄は屢々時の社會狀勢を反映する。庶政一新だ、電力統制だ、魚

市場改革だと矢つぎばやにやつて來る官僚……に對し、大衆の心の中に、とんがらかつちや駄目よをうたひ度い韻律が動いてゐるのではないか、波は靜かに、月はよし。明治の御代には武男さんと浪さんと、手をつないで散歩した逗子の濱邊が、今はとんがらかつちや駄目よの氾濫だ。

その唄の聲の湧出る濱邊の小屋は、雨が降れば漏り、風が吹けば吹き飛ばされるかも知れないのだが、勇敢にも妙齡の婦人が住んでゐる。住んでゐる限りは、飲みもし、食ひもする。飲み食ひすれば、排泄しなければならない。だから共同のはゞかりは、ぬかりなく建てゝあるが、個々の小屋に屬してはゐないから、えゝ面倒とばかり、砂濱を利用する。我が借家の石垣の下の如きは最も好都合の場所である。物を煮炊する匂ひばかりでなく、一種異様の臭氣が來る。不幸にして、海は大概風上である。

はじめてこの家に泊つた時、寢所の變つた爲か曉早く目がさめた。朝の海氣を吸はうと、ひそかに戸外に出た。芝生には露が置き、朝凪の海には未だ日が上らない。私ははだしのまゝ渚に下りて行かうと、裏木戸をあけて出た。あ、驚いた。何たる光景であらう。石垣の下のカフヱの女の子か、射的場の娘か、たつた今目がさめ、催したのであらう、寢衣の裾をくるりとまくり、女は女同志仲よくお尻を並べて砂地に凹みをつくつてゐるのが、一人二人三人。失禮々々、私は決

してさういふ景色を見ようと期待したわけではない。すべてこれ廻合せだ。狼狽てゝ木戸の中へ引かへしたが、用をすませた彼女らは「ねえ、ねえ、戀すりやつらい」と、あてつけがましくうたひ出した。

都合の悪い時やお互さまよ
それでもあなたはとんがらかつちや駄目よ

（昭和十一年九月十一日）

――「時事新報」昭和十一年九月十二日・十三日

留守番

夏になると、家内も子供も近くの海岸に出かけて、一人留守番をするのが、數年來のならひとなつた。さぞかし御不自由でせう、お寂しいでせうと他人は同情し、家内も心配し、子供もお父さん一人で可哀さうねえ、來年は海のある所につれて行つてあげようと、氣づかつてくれるが、お父さんはその來年も亦留守番だ。

私は世の中の亭主といふものゝ手數のかゝるのには、常々驚いてゐる。どうして、あゝまで女房の手を借りなければ生活出來ないのか、不思議に思ふ。そこへゆくと、多年獨身下宿生活で鍛へあげた私は、人手を借りる事はわづらはしく、手輕に暮す方法は身についてゐる。食事は、街頭で鮨をつまみ、蕎麥を食つても濟む。茶よりも水を好むから、火の氣はいらない。間食はしない。烟草も吸はない。酒は日本酒を好むけれど、燗をつける手間を省いて麥酒で我慢する。氣の

進まない時の對談は非常に辛いが、沈默の耐久力は豐かに持つてゐる。年中忙しく日を過してゐるのが、一人靜かに留守番をするのは、決して惡い心境で無い。沈思し、反省し、又時に感傷に耽る事も、情緒涸渇せんとするものにとつては、思ひがけない樂(たのしみ)である。平生俗務に追はれ、看過し勝な自然の推移、鳥蟲草木の姿に氣のつくのも、獨居の賜といふべきであらう。

夏二月は勤先の執務時間も變り、歸宅しても未だ日は高い。いつもならば玄關の鈴が鳴ると、子供が飛びついて來る、家内の甲高い聲と人々の足音に騷がしい家の中が、古寺の如くひつそりと空氣も動かず、夏草の丈伸び、雜草のはびこる庭は、もろもろの小蟲の樂天地となり、虻のうなりが高く聞える。

只今拜借の家は、高臺の見晴しのいゝ崖のふちにあるが、その崖は大地震の時に崩れ、下の家を倒し、人命を奪つたと傳へられ、先々住の成金は歩(ふ)に還り、先住の事業家は會社をつぶして行方もはかなく、けちのついた家として八年間住む人も無かつたおかげで、頗る惠まれた條件で借る事が出來た。亢々廣過きるので、人手不足で埃だらけとなり、虻や蜂やばつたの類も飛込んで來るし、夜は馬追やきりぎりすが哀切な唄をうたふ。

西に傾く日ざしの中を、麥藁蜻蛉、鹽辛蜻蛉、ぎんちよ、やんまが飛びかひ、油蟬、みんみん、

つくつく法師は椎や檜の梢に鳴きつゞける。日が沈み、風が涼しくなると、猿の腰かけ位の青竹の臺を崖のとつぱなに持ち出し、暗くなる迄ぼんやりしてゐるのが、何よりの休息となり、又留守番甲斐を強く感じるきつかけとなる。夏の夕空は大方晴れて、清く美しく、猥雜な海岸避暑地などに行くよりも爽かである。その時分になると、蜩が鳴き、月見草は吐息をつくやうな微かな氣配の中に、ひとひらづゝ花瓣をほころばせ、見てゐるうちに咲き揃ひ、心弱く震へる。小石川本郷神田日本橋の町々に灯がともり、ネオン・サインの赤や紫が、夜の色の深くなる程輝きを增して來る。それは、家族の者がゐてもゐなくても同じ戸外の景色に過ぎないのだが、たゞ一人留守番をする身となつて、はつきりと眺め、沁々と感じるのである。

　何よりも美しく思つたのは、七月の下旬か八月のはじめか、おはぐろ蜻蛉がひとつがひ、芝生の上を高く低く、離れては近より、近寄つては離れ、仲よく飛んでゐるのを見た。此の種の蜻蛉は、小川か沼澤か、水の邊りに多くゐるものゝやうに思ふが、何處から來たのか、三日程つゞけて來て、その後姿が見えなくなつた。隣家の大木に巣を持つ鳶の、滑走するやうな姿も美しいが、毎日夕方五時頃に、遠く本郷臺の方から一羽二羽三羽、白鷺が飛んで來て、目の前を近々と通り、皇居の方へ消えて行くのは、珍しく美しい風情だつた。それよりもなほ大らかに美しく、悠然と

大空に圓を描いて舞ふ鶴を見た時の驚きは、今も胸のときめく程である。誰が東京の空に白鷺が日毎に飛び、又時に鶴の舞ふ事を知つてゐるか。自分は特別にえらばれた人間のやうな、自惚に醉つた。

崖下の町々の人も、晝日中は夫々の商賣にいそしみ、夕暮の風の吹く頃は、ほつと一息つくのであらう、家々の陸（ろく）屋根や物干臺に、肌襦袢と下ばきの男の姿、猿股ひとつ、六尺越中一本の裸體もあらはれ、浴衣やあつぱつぱの女も登場する。敷物を運んで涼をとる人もあり、鉢物に水をやる風流もある。蓄音機を持出して、流行小唄を聽く人もある。平生、心なく、高い處から見てゐると、たゞ一枚の瓦の屋根と見えたのが、つくづく見ると、個性を發揮しいろ／＼の樂みのある事が、はつきり浮彫（うきぼり）になる。盆栽草花は一番多く、狭い所に禽舍をつくり、水盤を据ゑて、小鳥金魚を飼育する者もあり、傳書鳩を夕暮の空に放つ人もある。とつぷりと日がくれると、街路樹の下に涼み臺を出して、東京特有の夜風に吹かれる風俗も未だ殘つてゐる。無闇やたらに金錢慾に夢中になり、贈賄したり、收賄したり、無闇やたらに政權慾にあくせくし、人をおとしめたり、〔七十九字略〕してゐる時勢にも、善良なる臣民は默々として働き、僅の、暇を盜んで愼み深い樂みに心を慰めてゐるのだ。〔七十四字略〕あゝ、政權をねらふえげつない者共よ、東京の空を白鷺や鶴

の群ひ遊ぶ姿を知るや。（昭和十一年九月十五日）

——「時事新報」昭和十一年九月十九日・二十日

取越苦勞

皇紀二千六百年、我國の首都東京に於て、オリンピツク競技會が催されることにきまつた。朝野をあげて躍起となり、懸命の運動努力を盡した賜だといふことである。これこそ躍進日本の實力を世界に認めさせた證據だといつて、早くもお祭氣分に醉ひ、祝盃をあげ、萬歳を叫んだものもあれば、今から五色五輪のマアクを衣服髮飾り持物にあらはして、いゝ氣持になつてゐるものもあり、これが半世紀前には尊王攘夷を唱へた國民の裔かとあきれるばかりだが一方にはオリンピツクに夢中になる國民の態度に憤慨し、此の非常時に遊び事に熱狂するは何事だといきまく右翼もあり、スポオツはブルジョアの慰みに過ぎぬといふ第一課を眞向からふりかざして、いやがらせをいふ左翼もあり、さうかと思ふと、此の前色の黒いフイリツピンの運動選手が來た時さへ女學生がサインを強要し、その代償に貞操を與へたものもあるから、色の白い世界的選手が來た

ら大變な事になるだらうと心配するものもある。自分の素行については極めて寛大であるが、他人の情事には神經過敏で、決して看過しないばかりか、異人種に女をとられる事を許し難しとする國民性に強烈な嫉妬心が油をかけ、オリンピック反對論の中で、最も多數の共鳴を得るかのやうに見えるのは、貞操提供心配說である。田舍の村落の青年達が、自村の娘を多村の者にとられる事を恥とし、屢々流血の慘事をひき起すやうな不祥事が、皇紀二千六百年を汚さゞれば幸ひである。さういふ事を未然に防がうといふのか、その筋では、ひどく眞劍で、日本娘に手を出す異人は、どしどし國外に追放しようと宣言したと傳へられる。或は保護檢束に等しいものかもしれない。さうかと思ふと、フイリツピン人と乳繰合つたのは、僅に數人のお茶つぴいに過ぎないので、我國一般の女性は決して浮氣ではない、それにも拘らず斯かる心配でオリンピツクに反感を持つのは、認識不足であり、女性侮辱であると憤慨する女もある。いつたい、露をだにいとふ大和の女郎花(をみなへし)が、どうして斯く迄人々に心配をかけるやうになり變つたのか。異人といへば邪宗を信じ、魔法を使ひ、四足を食ひ、人倫の道をわきまへぬ、あだいやらしいものと思ひきめてゐたのが、一にも西洋二にも西洋となり、毛嫌ひが逆に盲拜となつた時勢の推移も考ふ可きであるが、それよりも當節の浮氣娘には、日本の男を相手にするよりもあとくされが無く、旅の恥と同じや

うに、間も無く遠くへ去つてしまふ相手ならば、口を拭いてすましてゐれば人に知られずに濟むといふ利口な考へが、強く働いて居るのでは無いたらうか。つい先日の或地方新聞の報道によれば、その地方の港に碇泊した異國の軍艦が、一般市民に觀覽を許した處、見物の大和の女郎花どもは、異人の水兵と抱合たり、接吻したり、痴態を演じ、ふるあめりかに裾まで濡らしさうな有様、その筋も見るに見兼ねて、嚴戒を加へたもの凡四十名といふのであつた。

さればこそ、時勢を見る事は頗る神經質な……の代表者が、四年先の女の子達の行狀に對し、一本釘をさしたのは、まことに故ありといはなければならない。その上……には、西洋風の運動競技を好まない風潮がある。近代スポオツは國民の體格をよくするといはれてゐるが、それは嘘たといふのが、現今……の定説らしく見える。かけくらべや飛びくらべの結果か、國民の身長の伸びた事は認めるが、一朝事ある時、身長の高いといふ事は卽ち敵の彈丸の命中率をよくする事であり、又塹濠を深く掘る必要を伴ひ、決して歡迎すべき事で無いといふのはよく耳にする言葉である。そればかりでなく、オリンピックのひとつの使命として贊成者の數へる、運動競技による〔六十六字略〕往年亞米利加の職業野球團が渡來した時、これこそは大統領ルウズベルトが、示威の爲に差遣(さしつかは)したのだから、あくまでも打敗らなければならぬと腕をまくつた……があつた。運動競

技を運動競技として見ず、命がけの仕事にさせなくては承知しない傾向のある我國のファンが、次のオリンピックに如何なる態度を見せるかは、心ある者の心配の種であらう。或は又國士ぶつたり、強硬がつたりする暴漢が、競技場で劍舞を演ずるやうな芝居をやらなければいゝがと、心配してゐる人もある。

とはいふもの、、反對派は數に於ては極めて少なく、國民の大多數は早くも熱をあげはじめ、オリンピック迄に東京の河川を浚渫しろ、オリンピック迄に便所を水洗式にしろ、オリンピック迄に我國祖先傳來の痰唾を所構はず吐き散らす惡習を改めさせろ、オリンピック迄に吉原をとりつぶせ、オリンピック迄にカフエを淨化しろ、オリンピック迄にあれもやれ、これもやれで、恰も庶政一新論者の如くかしましい。それは元より結構であるが、論者は河川の不潔、便所の汚穢、その他の存在を甚しき恥辱のやうに感じ、外人の眼に觸れさせたくないといふのであるが、私は更に大に恥づべきは、オリピック競技に對する我國民の熱狂度のはげしさでは無いかと見る。聞く所によれば、最も熱心な亞米利加さへ、西部地方が熱をあげてゐるだけで、東部地方は極めて冷淡だといふ事だし、英佛の如きは全く單純な運動競技と考へてゐるらしく、我國の如く國を擧げて夢中になり、戰爭の如く血眼になり、之に諸々の利益を結びつけて、有史以來の出來事のや

うに大騒ぎを極めるのは、何となく貫祿の不足を暴露するやうな不安定感を伴ふのである。擧國一致の熱情は大日本帝國を、短時日の間に今日の地位迄引上げた。しかし、何事にも國を擧げて感激するのは、脆き地盤の上に建てられたる大廈の如く不安である。贊成者にも反對者にも、心のゆとりが欲しいと思ふ。

私は元來運動競技を好むのであるが、何となく四年先の心配が胸につかへ、この頃はそれが苦勞の種になつてしかたが無い。人を見ると同感を強るのであるが、或人は私の取越苦勞を笑つて、四年先の事ですぜ、その頃日本は戰爭ですよ、オリンピツクなんかあるものですかと、嚙んで吐き出すやうにいつてのけた。（昭和十一年九月二十四日）

――「時事新報」昭和十一年九月廿六日・廿七日

旅籠苦勞

この二三年、勤先の命をうけて旅へ出る事がしげくなつた。本島は殆んど隈なく四國、九州、北海道、臺灣、滿洲も一巡し、殘すところは朝鮮と樺太だけだが、その朝鮮も二三日中に出かける事になつてゐるので、間もなく、足跡全國にあまねしと稱しても差支へない事になるであらう。つい先頃、何かの同人雜誌に私の出張といふのは物見遊山だとからかつて書いてゐたが、文學靑年らしい生嚙りで、とんでも無い當推量である。九州は年に一二度行くが、耶馬溪を見ず、別府を知らず、仙臺に赴いて松島に立寄る暇なく、北海道に渡つて湖沼を探る機會を與へられない。徹頭徹尾人事に終始し、名所舊跡には緣遠い旅行である。その上時間を切詰めた日程を組む習慣になつてゐるので、自儘の行動をとる餘裕がなく、恰も奴隷のやうに、人の手から人の手に渡つて行くのだ。こんな物見遊山があつて堪るものか。

いつたい、旅を樂むのは若いうちの事で、老人には苦痛らしい。私の場合、私も決して若いとはいへないが、旅行そのものは苦しく無い。若し勤先の用務を帶びず、自前で氣隨に旅行するのだつたら、どんなに樂しいだらうと常に思ふ。幸ひ頑健なので、他人の苦にする事が苦にならない。たとへば、汽車に乘つては眠れないといふ人もあるが、私は汽車の方がよく眠れる。船ならはなほ更いゝ。平生の忙しさから逃れ、身邊の雜事に遠ざかつて、ほつとひといきする安心の結果らしい。そのかはり、一般の人が、とまりとまりの旅籠屋で休息するのを喜ぶのと反對に、私には宿屋といふものゝ居心地がよくない。宿屋に泊る事さへなければ、つとめの旅と雖も、もつと樂しいに違ひ無い。

元來私の日常生活は、多年の下宿住居の延長で、我國古來の亭主關白の位についてゐない。世間の關白どもは、隨分手數のかゝるものらしく、一人ではネクタイが結べない、一人では袴がはけない、一人では御飯がまづい、一人では留守番が出來ない、一人では寢られない――いろいろ我儘をいひ、何から何迄女房の手をかりなければ暮せないものださうである。何といふ意氣地無し、そんなのはさぞかし女に嫌はれるだらうと思ふと、意外にも世の女性は、さういふ風の手數のかゝる亭主こそ、ひとしほいとしがるものださうである。

手數のかゝるものが世の常の事とすれば、今日の宿屋の客あつかひも、まことに行屆いたことゝ云はなければならないが、何分こつちは下宿育なので、その行屆くのが窮屈で堪らない。ひとたび宿屋の敷居をまたぐと、俄に殿樣待遇となり、何をするにも女中がついてゐて手傳つてくれる　宿屋によると、ひどくはきちがへた親切で、賴みもしないのに、勝手に鞄をあけ、中身を整理してくれるのがある。三食の時の外、一切飲食しない習慣の私には、執拗に茶を勸められるのも迷惑だし、手酌で呑み、手盛りで食ふ平素の氣樂さと違つて、一々給仕人の手を煩はすのも難有くない。特に酒といふものは、自分の呑み度い時について呑むのが一番うまいので、酌はたぼなどといふのは外道である。まだ盃中になみなみと湛へてゐるのに、せつゝいて勸められてはうまくない。

殊に近年サアヴィスといふ外國語がはやり出してから、無闇に心を配り氣をつかふ事の意思表示を競ふ傾向になつたので、客が就床し、鼾をかく迄は次の間か廊下に樣子をうかゞひ、朝も早くから待機してゐて、咳拂ひひとつ聞いても、お目覺めですかと入つて來るといふ有樣で、恰も監視つきのやうなものである。野人は宮殿に招かれて只管恐縮するばかり、荒大名は茶席に坐してたゞしびれをきらすのみ、下宿の延長に過ぎない家庭のあるじは、かく迄行屆くサアヴィスに

出逢ふと、煩はしく、面倒臭く、息苦しく、「吾に自由を與へよ」と叫び度なるばかりである。それ故私は、旅の先々で、洋風旅館があれば其處に泊る。名古屋の某ホテルの如く、蚊の出る時でも蚊帳がなく、蚊取線香の煙を立てる素朴なのでも、福岡の某ホテルの如く、銀座裏のアパアトに比すべき簡素なのでも、大阪京都名古屋長崎の名だゝる旅館より居心地がいゝ。これは世間の旦那方の申される事ではなく、下宿者の私の好みに過ぎないのだから、各地第一流の旅館は、愈々サアヴイスを競つて御贔負の御客樣方に、殿樣氣分を滿喫させるがよい。つまりは、〔十四字略〕他人の生活をなるべく脅かさず、自分の生活もなるべく脅かされ度ないと希ふ者のよまひ言と思つて貰へば結構である。それよりも、何よりも、茶代心附といふ難物がある。法外に澤山置くのは大馬鹿であり、桁はづれに少ないのは恥だといふ通念があつて、しかも目安が無い。宿に着く前から其の事を心配し、愈々勘定をすませて出立した後迄心にかゝる。あゝ皇紀二千六百年オリンピック大會開催迄に、面目一新すべき諸件中の最たるものでは無いだらうか。

更にこれにつけ加へて、お土産といふ厄介物がある。茶代を置くのは愈々最後で、既に鞄も整へ、さよならの一歩手前迄來てゐる時なのだが、その茶代に對するおかへしの心で、土産をくれるならはしがある。手拭一本風呂敷一枚なら、手輕に處理する事も出來るが、土地の名物の菓子

折だとか、かさばつた箱入の物などになると、手荷物一個殖えたかたちで、先々の旅の邪魔になり、文字通り重荷に小附だ。いらないと云つて捨てゝ來るのも失禮だし、氣障だし、曾て臺灣全土を一巡する月餘の旅では、その處置に閉口した。たまたま尾道の宿で、茶代がへしをくれないのに感激し、それからの旅の先々で、其の宿の別嬪のおかみさんの心意氣をほめたゝへ、扨て家に歸つてみたら、あるじより先に茶代がへしは屆いてゐた。私としては、あまり先走つてほめたゝへた關係もあり、これとても餘計なものに思つたが、此の遣口は重荷に小附式にまさる事萬々である。

谷崎潤一郎氏は日本の便所の臭氣になつかしさを感じるさうであるが、俗物の私は便所も湯殿も洋式がいゝ。殊に湯殿へ、背中を流すサアヴイスを強ゐる男衆の來るのも愉快で無い。高貴の御方ならばいざしらず、吾々が背中を他人に流して貰ふのなんか、おごりの沙汰といはなければならない。恐らく、今時錢湯で流しをとるのは、下らない見榮を張る藝者位のものではないのか。餘計な事だが、藝者諸君よ考へてみろ、みつともないぞ。

私は旅籠屋の三助君に、辭を低くして斷るのである。赤ん坊の時は別として、他人に體を洗つて貰つた事は一度も無いのだから、勘辨してくれといふのだが、なかなか勘辨してくれない。或

地方の宿に泊つた時、二助君はすつかり機嫌を悪くし、旦那のやうな人は出世しませんよ、私共は、これで女房子供を養つてゐるんですぜと、たんかを切つた。私はそこそこに湯から上り、あてがはれた室の縁に出て、高い空を仰いだ。かゝる時こそ旅ははかなく、我家戀しくおもはれるのである。（昭和十一年十月一日）

——「時事新報」昭和十一年十月三日・四日

草を踏む

二十幾年か前、亞米利加の學校に學んだ頃、その大學に日本人は四五人しかゐなかつたが、既に家庭を持ち、妻子をのこして來た人は、寄るとさはると故鄕の戀しさを語合ひ亞米利加の不都合を數へ立てた。私は若かつたから適應性が豊かだつたし又執着すべきものを故鄕に多く持たなかつたから、金の乏しさには弱つたが、その外は氣樂な海外生活を苦勞にはしなかつた。年寄達の歎きは愚にもつかないもので、一軒の家に幾家族かが住み、互に挨拶もしないのは不屆きだとか、昇降機に女と同乘すると、男の方が帽子をぬぐ習慣は怪しからんとか、往來で女房の靴の紐の解けたのを亭主が結んでやるのは恥辱であるとか、折角上等の綠茶を土産に持つて來てやつたのに、牛乳と砂糖を入れて飮むとは何たる惡趣味であるかとか、いろいろある中で、たつたひとつ私の同感に堪へなかつたのは、何處へ行つても路面が石と煉瓦で固めてあつて、柔かい土を踏

む快感を味はひ得ない歎であつた。その頃我國に於ては、帝都東京と雖も銀座の步道に煉瓦が敷いてあつた位で、一般には自然の土の儘で、雨が降れば全市泥土の海となる有様だつた。然るに亞米利加では、新開住宅地が出來ると、家より先に先づ道路が出來、その道路は鋪裝されてゐて、道を步くには必ず石質の堅いものゝ上に踵をぶつけなければならず、その抵抗は頭のてつぺんに響いて來る感じで、故鄉の泥土の海が、かへつてなつかしく思はれるのであつた。私は夜中屢々學校の庭や公園の芝生に忍び込んで、時には靴をぬぎ、土を踏む快感を味はつた。マサチユセツ州ケムブリツヂは楡の樹の多い所で、人氣の無い木立の中の芝生を、たゞ一人狂人の如く踏み廻る日本人の頭の上には栗鼠がけたたましく叫びかはし、梢遙かに濕氣の少ない大陸の清澄な空高く、月や星がくつきりと、冷く輝いてゐた。

二十餘年の歲月は容赦なく過ぎて、東京も今では土を踏む事の出來ぬ町となつた。尤も最近市に合併された地域は、まだ其處迄行かないと見えて、東京驛で下りる丸の內の勤人の中には、長靴をはいてゐる人も見かけるが、先づ大體、雨が降つても足駄の必要はなくなつた。そのかはり、例の踵から頭のてつぺんへ響く不快なる感じは、たゞさへ苛々してゐる神經を絕間なく刺戟する。家にゐても、戶外を走る電車自動車の響はのべつに耳を襲ひ、全く物音の聞えないやうな靜けさ

は、東京中何處にもなくなつたが、歩いてゐる自分の足音に迄悩まされるのは堪らない。

私共幼少の頃、既に下町の子供の中には稻を知らず、麥を知らず、蟬も蜻蛉も蛙も、目で見た事はあるけれど、手でつかまへた事の無いのがあつて、山の手育ちの私共は驚いたが、近頃では、山の手の縁日でも、おたまじやくしを賣るやうになつた。私共子供の時分、東京も到る所に原つぱがあり、春秋の草の花や、小鳥小蟲の生活も自然に知る事が出來、土筆(つくし)茅花(つばな)を摘み、虎杖(すかんぽ)の酸つぱい味もなつかしく、蟬も蜻蛉もきりぎりすも、たやすくつかまへることが出來、田圃に行けば蛙も目高もゐて樂しいいたづらの對象となつたが、今では石と煉瓦に圍まれ、青空さへ狹く限られてしまつた。おやぢは燒いて食はうと赤蛙を追かけ裸足で泥田をかけ廻つたのに、子供は縁日で買つたお玉じやくしを鉢に飼つて、僅に動物の成長を見守るばかりだ。

曾て亞米利加で、夜半人知れず芝生を踏んで、土に觸れる快感をみたしたのと同じやうに、今日の東京に於て、屢々草を踏みたい衝動に堪へぬ事がある。麹町下六番町に住んだ頃は、市ケ谷と四谷見附の間の土手に行き、斜面の草生をかけ下りたり、寢ころがつたりして、僅になぐさんだ。今日此頃は靖國神社の境内の、祭日には曲馬團や猿芝居の出る空地に茂る雜草を踏みに行く。夏の夕方など、勤先から疲れて歸る我家近く、この草原を横切ると、柔かい踏心地は一時に疲勞

を忘れさせ、足下から薄青い羽をきしませ、ばつたの飛び立つのも昔なつかしく、暫時佇む事がある。この草原には、黄昏頃、人を待つ若い女の姿も見え、男女の學生が肩をくつつけ合つて歩く風情もある。アスファルトで固めた路を歩くよりも、草を踏む逢引の方が、戀人の心をしつかりつかむ事が出來るのではないだらうか。

私は廣い東京に、公園のふえる事を希ふものであるが、願はくば庭園の美しさに縁のない、たゞ雑草の茂るに任せた公園を欲しいと思ふ。そこで、市民に草を踏ませ度い。花の樹も、花壇も、池も、石も、奇麗な芝生もいらない、草を踏む心地さへ味はひ得ればいゝのである。(昭和十一年十月六日)

——「時事新報」昭和十一年十月十日・十一日

朝鮮晴

朝鮮といへば、夏はむやみに暑く、冬は極端に寒く、長雨と洪水と、旱魃と饑饉と、姦通と殺人と、すべて悲慘陰鬱な事件ばかり聞かされてゐたので、この度の旅行も雨と風と寒さは免れないものと覺悟してゐた。ところが釜山に着いて第一の印象は晴渡る秋の空の美しさであつた。宿の二階から見える岡の上に誰か偉い人の銅像がたち、朝の風にかすかに梢のゆらぐ楊柳の下に佇んで海を見る婦人の白衣、その白さは夜の間に降積んだ雪を知らずに、雨戸をあけた時のまばゆさであつた。十月は內地の空も美しいに違ひ無いが、その美しさには濕氣が拔け切れない感じが殘つてゐるのに、朝鮮の空氣はからりと乾き、しかも極めて肌理（きめ）こまやかである。私は茫然と岡の上の空を見てゐた。白衣の婦人は立去り、暫時空の美しさばかりとなつたが、間もなく、又一人同じ場所にあらはれて、白い光は何時迄も動かなかつた。

ほんとに朝鮮の婦人の服装は清楚優美で、これに多少の改良を加へ裾を短くして輕快味を多分にとり入れた京城の女學校の制服は、內地の娘達が得々として身につける洋服よりも遙に美しいものであつた。但しその女學生達の言葉たるや大阪、九州、山口、廣島を主とした各地の混交語で、偶々大通の四角で、二人の娘の話合ふのを耳にしたが「あたし買物に行きよるんよ」といつたやうな粗野なもので、美しき制服の手前羞かしかるべきものであつた。夜毎につゞく宴席で、藝者と妓生と座を共にしても、金絲銀絲のきらびやかな豪奢な帶、總模樣の色彩豊かな衣服の裾を引く大和撫子は、單純な色彩の妓生の衣裳の效果に負けて濁りくすんで見えるばかりだつた。私は、簡素な結髮に銀の笄をさした妓生と並んで、馬鹿々々しく大きい島田髷が、いかにグロテスクなものであるかを發見した。妓生の本場平壤の一夜は、日清戰役に原田重吉が名をあげた玄武門のほとり、大同江を見下す牡丹臺に過したが、妓生の優艶なるたちゐふるまひと、高く澄んだ愁心歌の哀切なる節調は、旅人の感傷をそゝるものであつた。若しそれ夏の夜涼に月を眺め、妓生と藥酒をのせて船を江上に浮べる事が出來るならば、傷心いかばかりかと想像されるのである。長鼓をうち鳴らしつゝうたふ聲は清く、內地人の濁つた聲とは比べものにならない。彼のマラソン選手を生んだ半島は、將來すぐれたるソプラノ歌手や、勝太郎、市丸の人氣を奪ふ流行歌

手を輩出するであらう。九州あたりから輸出されて來た藝者の言葉も動作も粗野を極めてゐるのと、歌舞音曲琴棋書畫、客の應對宴席の作法を十分教育された妓生とは、恰も鐵道沿線にはびこる荒地野菊と、溫室の蘭との相違がある。

いつたい、內地で吾々の接する鮮人は、自動車の運轉手でも、土工でも、反抗精神にいらだつ爲か、眼つき銳く兇暴の相を帶びてゐるが、それは本來の朝鮮人の相貌では無いのではないか。田野に働く農夫も、市に物賣る商人も、我朝の公家殿上人の如く柔和で、溫順圓滿の相を備へてゐる。殊に婦人の美しさは、近代の好みに屬する性格的表情美には緣遠いが、我國の傳統的理想型そのまゝの、おとなしくやさしい顏だち多く、色白く肌理こまやかに、春信もあり淸長もあり歌麿もある。

私は、草亂れ、落葉の降るに任せた祕苑の岡に上り、池を廻り、樓臺にいこひ、栗鼠の走る小徑を步み、鵲の鳴きかはす林を踏み分けて、その昔榮華を極めた王や后が、多數の美女を從へて曲水の遊に耽り、花見の宴を張つた有樣を想像し、美しい繪屛風を心に描く事が出來た。まことに祕苑こそは世界に稀なる美しき庭苑であるがしかも今は荒れ果てゝ、ひとしほ深き趣きを加へ、微かに啼く虫の音に耳を傾けつゝ、私は林間の高き空を仰ぎ見て佇んだ。先年北京に遊んだ時も

同じ願ひに堪へ兼たが、許されて此の庭に數日を送る事が出來るならば、私の枯渇した詩情も、再びよみがへるのではないかと想ふのであつた。

朝鮮の山は地肌あらはに、樹木少なく、野は平らかに變化なく、奇勝稀なる嘆はあるが、そのかはり金剛山の奇峰峻嶺は天下の絶景である。恰も紅葉の頃だから、その壯麗なる眺めはたぐふ可きものも無かつた。一萬二千峰とゝなへられる峰々の中、僅かに萬物相と九龍淵をきはめたばかりであるが、その規模の大きさを表現するには、どうしても支那の繪畫文學に任せる外はない。こゝでも亦晴渡る秋の空の美しさ、私は新萬物相の絶頂の岩に立つて、その空の一片を呑むやうに深く呼吸した。

釜山京城金剛山元山平壤大田と廻つて、多くは汽車に睡る忙しさであつたが、空はいつも美しく晴れてゐた。再び釜山に戻り、連絡船の出る迄を、白雲台溫泉場で晝寢したが、私は其處のホテルの三階の緣側から、海の上の空の美しさを眺めて、秋の朝鮮にこそ、本當の日本晴のある事を沁々感じた。（昭和十一年十月十六日）

——「時事新報」昭和十一年十月十七日・十八日

老人激昂

下關から一路東京へ走る急行列車は滿員だつた。車中、私の筋向に講釋師一龍齋貞山が、どつかりと胡座を組んでゐた。彼が先頃、滿洲に在る皇軍慰問の爲に出かけた事は、新聞で知つてゐた。側に一人、袴を長く引擦るやうにはき鼠色の羽織に縫紋の、どう見ても高座の人としか見えないのが附添つてゐた。二人はしきりに旅の思出を語合つてゐたが、その話に引かれて前の座席にゐた實業家型の人が名刺を出してちかづきを求めた。隨分大變だつたでせう、御苦勞さまでしたとねぎらひ、貞山は答へて、滿洲の野に在る兵士の勞苦、その兵士の慰問の爲に自分達は國境近く迄出かけたことなどを、咽喉を使ふ藝人に特有の嗄がれた聲で話してゐた。

それとは反對の筋向では、七十前後と見える老人が三四人知合らしいのにむかつて、昔の瀬戸内海の海賊の話をしてゐた。

私は鞄を机にし、右の話も左の話も耳にしながら、明日に迫つてゐる新聞の原稿を書いてゐた。食堂の給仕が、お食事の用意が出來ました。お待申して居りますといふやうなことの書いてある紙片を、めいめいの膝の上に置いて過ぎた。やあ、もう晝か、飯でも食ふかな、海賊を語る老人は、外套を着たまゝステツキを持つたまゝの姿で、連を促して立上つた。

どうです、ごいつしよに如何でせう、無事に歸つて來られた歡迎といふ意味で、いつぱい差上ませう。貞山に話かけた人は、この有名な講釋師と卓を共にする事に多分の興味を持つもの丶如く、繰返して勸めて、この一組も食堂に去つた。私は朝が遲かつたので、食慾がなく、俄に話聲のなくなつた車中の靜な間に原稿を書き進めたいと思つて、一段と馬力をかけた。

やがて、貞山の組が先に戻つて來たが、それを追かけるやうな形で、背廣の紳士があらはれて、貞山の隣に腰かけ、極めて慇懃に話かけた。この度は御苦勞さまでした、どの邊迄お出かけでしたか、いづれ彼地で得ゝれた材料を種にしてお話になるのでせう、と質問をすると、貞山は、矢張行つて見なくては實際の事はわかりませんねえ、實に我が兵士達の苦心は大したものですよといふやうな返事をしてゐた。私は此の背廣の紳士を新聞記者だらうと思つてゐた。ところが背廣の紳士は、貞山のところを切上ると、今度は私の前に立つた。私は……の者ですが、どちら迄お

出かけですかといふ。私はぎよつとした。……といふと、吾々を保護してくれるものと考へるより先に、叱られるか、縛られるか、留置されるか、いづれにしてもいゝ事ではないと思ひ勝なのだ。朝鮮に行き、今は東京に歸るのですと答へると、直ぐに職業はと追かけて來た。會社員ですと答へると、案外手輕に、お邪魔しましたと云つて去つた。

背廣の紳士は順々に車中の人を調べて、後部の車室に移つて行つた。その時、海賊について語る彼の老人が、先刻とは見違へる赤い顏をして、連の人達といつしよに戻つて來た。實に怪しからん、人を侮辱するにも程がある、何だ見ず知らずの人間がいきなり名刺をくれとは何事だ、無禮ぢやあないか、我輩は云つてやつた、俺は斯ういふものだ、逃げもかくれもせん、貴樣達に疑はれるやうな人間ではないぞとね。酒の爲に相貌の變つたのが、車中全體に聞かせようと、高聲で怒鳴りはじめた。醉拂の癖で、同じことを幾度も繰返す。無禮ぢやないか、侮辱ぢやあないか、名刺を出せとは何事だ、あれは何だ、あいつは何者だ。

連の人は少々もてあまし氣味で、あれが………ですよとなだめようとすると、……たらうが何だらうが無禮ぢやあないか、人が食事をしてる最中に名刺を出せとは何事だと、愈々たけりたつ。

背廣の紳士は最後尾迄行つたと見えて、再び吾々の車室に戻つて來た。前の時にはゐなかつた老人を見るとその隣に腰を下し、何か話かけたと思ふと、老人の憤激は極度に燃え上つた。何、もう一度名刺をくれといふのか、人を馬鹿にするな、たつた今食堂で、君の仲間の奴が無禮な事をぬかしたから、我輩は斯ういふものだ、逃げもかくれもせんと云つてやつた、然るに又名刺を出せとは何たることだ、人を侮辱するにも程がある、我輩はお前達を相手にする人間ではない、東京へ行つて………に逢つて談判する、無禮だ、侮辱だ、怪しからんと、ステッキで床を叩いてわめきたてる。背廣の紳士は、つとめて物柔かく、名刺を頂くのは決して侮辱ではない、それが自分達の任務なのだと說得しようとするが、老人は何がそれ程癪にさはつたのか、すつかり冷靜を失つて無禮だ、侮辱だと叫びつゞける。連の人が見兼て口を出すと、一層威勢がよくなり、いつたい近頃新官僚といふ奴が跋扈するやうになつてから、地方の小役人共の威張ること非常なものだ、政黨の腐敗といふが、官僚の腐敗はもつと甚しいぞ、各地に起る瀆職事件はどうだ、吏道肅正などと口ではいふが、その實は少しもあがつとらんぢやないか、それにも拘らず人を見れば泥棒と考へ、いきなり名刺を寄越せとは何事だ、無禮だ、侮辱だ、此儘にはすまされんと止度が無い。流石に背廣の紳士も手のつけやうがなく、失禮しましたといひ捨てゝ立去つた。しかし

老人は相手がゐなくなつても、なほ憤慨のほとばしるまゝに、怒鳴りつゞける。あまりしつっこ過ぎるので、私は聞き辛くなり、席を立つて食堂へ行つた。

實に痛快なぢいさんだつたなあ、同じ食卓の窓際に差向で、正宗の瓶を眞中に話合つてゐるのは、恐らく食堂車で、他の背廣の紳士に對し彼の老人が怒罵を浴せた時、ゐあはせた人なのであらう。いや、近頃は若い者は駄目だ、元氣のいゝのはぢいさんだよ、いつかも汽車の食堂で、醉拂つたぢいさんが、〔三十六字略〕紳士を惱まし、しまひには拳骨を相手の頭上に加へた、流石に門松をくゞつた數の多い人間は違ふなあ……

二人の人はかゝる老人の元氣、氣概を稱讃しながら盃を傾けてゐたが私はその時はじめて、何故あの老人が些細の事に止度なく激昂したかがわかつたやうに思つた。彼は車中突然名刺を求められた事をきつかけにして、平素抱いて居るもつと深い憤りを爆發させたのだ。自分達がよいと信じて行つて來た一切の事を、全く立場の違ふ新勢力の爲に蹂躙され足下の大地がゆらぎ出したやうなつかまり所の無い不安の中に置かれたのだ。若い者には未來があるが老人には無い。社會の急激なる變革は、老人には致命的打擊である。〔四十八字略〕警察官につかまつたといふ記事が新聞にあつたが、彼是おもひ合せると、決して笑へない悲劇である。〔十字略〕は、老人を不治のヒステ

リイ症におとしいれるものか。（昭和十一年十月二十二日）

――「時事新報」昭和十一年十月二十四日・二十五日

賣女の友

調物(しらべもの)の爲に、久しく手を觸れなかつた本箱から、二三の英書を取出して見てゐると、その一冊の間から、變色した封書が出て來た。佛蘭西語で綴られた手紙である。我友よ、次の木曜日午後三時、フライ氏夫妻とごいつしよに、わたくし共の新居にお出で下さい、お待申上ますといふ簡單なものだ。私はそれを讀み、赤面し、微笑した。二十餘年前、恰も歐羅巴大戰の眞最中、私は倫敦の安下宿にゐた。中年獨身の主婦が、その妹と二人で經營してゐる此の宿には、大陸から戰禍を逃れて來た人達が多く泊つた。時には、いかゞはしい婦人も同宿した。あゝ、遠き故鄕の父母は、我が子が異鄕に於て、賣女とひとつ屋根の下に起居するとは想像もしないであらうと、友人と語合ひ、共に苦笑した。零落した英人フライ夫妻、獨探の嫌疑濃厚な白耳義人と稱する男、跛の印度人、いろいろの止宿人がいりかはり、私はやがて古顏になつてゐた。手紙の主も獨軍に

蹂躙された地方からきのみきのまゝ逃げて來た佛蘭西の女で、二人で一室を借りて住んでゐた。二人とも美人では無かつた。一人は蒼白い、ぶよぶよした肉づきで、あかぐろい斷髮を縮らせ、歩く時に上體をわざとらしく振る特徴が著しかつた。もう一人は、百姓女のやうに血色のいゝ、しかし小柄な女だつた。元々商賣をしてゐたのか、戰爭の爲に其處へ落込んだのか、一見して身柄は想像出來た。その爲であらう、宿の主婦は、此の二人には出入口の鍵を與へなかつた。それでは不便だ、そんな下宿といふものがあるものか、不都合だと、二人は吾々の前でしきりに不平をいひ、度々交渉の結果、やうやく目的を達したが、或晩男を引入れたところを見つかつて、ヒステリイ症の主婦はかんかんに怒り、罵り、退去を命じる事件となつた。主婦は、獨探の嫌疑の濃厚な男とねんごろになつてゐたが、そんな事は少しも恥ぢず、哀れな女達に對しては、英吉利人特有の人を見下した態度で、居丈高に罵倒し、叱責した。英語をよく話さない二人の女は、辯解の言葉もなく、次の朝追出されてしまつたのである。

其の日の午後、英人フライは私の室にやつて來て、あの佛蘭西女達は實に可哀さうだ、勿論尊敬すべき婦人ではないが、憎む可き獨逸人の爲に住むべき土地は占領され、此の倫敦に來ても、身寄もなければ、食ふ術も無い、もとより感心出來ない商賣だが、外に爲様が無いぢやあないか、

自分は深く同情する、ところが、今朝あの二人が新しい室を見つけたのだが、前金で無いと入れてくれない、彼女等は一文も持つてゐない、そこで自分に泣きついて來たが、自分も御承知の通りの始末で、助けようと思つても助けられない、ついては此の際申兼るが、あの二人の爲に、一週間分の室代を貸してやつてくれないかと、曾ては第一流のホテルに泊つて、競馬と骨牌とシャンパンで日を暮したといふ善良無能なる老人は、一生懸命に私を口說くのである。私も金には不自由勝なのだが、むらむらと安價な俠氣に唆され、一片の金貨を老人の掌に置いた。凡一週間後に、私は此の招待狀を受取つた。フライ夫妻といつしよに佛蘭西女のところに行くと、二人は佛人特有の人なつつこい樣子で歡迎し、珈琲をわかし、菓子を切り、私の爲には葡萄酒を抜いてくれた。そして金貨一片を返濟し、窮狀を救はれた感謝を大袈裟に表白するのであつた。

私は、二人の女が、兎に角餓死しないでやつて行かれるのを祝福し、又私にとつて大切な金の速かに戾つて來たのを喜んだが、扨てその金貨が如何にして得られたものであるかを想像すると何ともいへない氣持がした。

その晩私は、フライ夫妻と二人の佛蘭西女を誘ひ、オックスフオード・サアカスの支那料理屋で、チヤプスイを御馳走し、返濟をうけた金をつかつてしまつた。間もなく私は倫敦を去つたの

で、二人の佛蘭西女との交際もそれつきりでおしまひだつた。

私は相當長い年月海外で暮したのだけれど、その國の人ならば當然知つてゐる事を少しも知らない。例へば、結婚葬式の事、正式の宴會の事、中流以上の家庭の有様、それもこれも知らない。安下宿で、零落者や避難民や賣女とひとつ屋根の下で暮らしたのだから、普通一般の事は知らないのである。大方の旅人の見る外國といふものが、如何に貧しい觀察、淺薄な解釋に終始するか、その原因は此の邊にあるのではないだらうか。（昭和十一年十月二十九日）

――「時事新報」昭和十一年十月三十一日・十一月一日

指定席の批評家

野球季節となれば、神宮球場で必ず見る顏々がある。お互に顏だけ知つてゐて、あゝあいつ又來てゐるなと思ひながら、そのあいつが誰なのかわからずに、五年たち、十年たつのもある。氣の輕い人達は、いつか挨拶をかはし、球場丈の交際をはじめ、季節の終になると、又來年はとか、この秋はとかいつて別れて、次の季節のはじめに、御久振でとなつかしさうに相逢ふのもゐる。試合の數は見てゐるから、選手の顏はよく知つてゐるし、新聞の運動記事もよく讀んでゐる。過去の戰績も十分承知してゐる。選手の成績も記憶してゐる。しかし、大概は中年仕込の悲しさで、肝腎の野球そのものを知らず、又選手の素質を知らない。すべてを近き過去の成績本位で判斷する。しかし、いづれも知識階級をもつて任じてゐるから、遠慮なく批評する。どれもこれも結果論だから、傍で聽く者にはうるさいばかりで、面白くもなければ得る所も無い。私は應援團

といふものも嫉たから、屢々思ふのは、試合開始のサイレンから試合終了のサイレン迄、數萬の見物が一言も發しない靜肅なる緊張の中で、試合を見物したいといふ事である。

今年の秋の季節も、此の一戰を最後とし、早稻田は既に優勝の名譽を獲得し、昨日の一回戰も、危氣なく大勝したのに、相手方の慶應は、帝大に一勝したばかりで、法政と二度、立教と一度引分、引分でも慶應にしては大出來だと云はれる程の不始末で、天下の輿論は對等の勝負とは見做さなくなつた。論より證據、この日九段から青山四丁目迄私の乘つた電車の客も「勝負は問題ではありませんよ、應援を見に行くんです」といふ心細いのや「おい歸りに何處かで祝杯をあげようぜ」と肩をいからす早稻田の書生や「又負やがるんだらう、いやんなつちやふな」と自軍の不振を語合ふ慶應ボオイを滿載してゐた。全く此の數年、うち續く慶應の不振に、多年指定席に顏を並べた同窓のフアンも辛抱しきれなくなつて姿を見せず、野球部の先輩さへ愛想をつかして見に來ない位だから、英雄崇拜の一般大衆に評判の悪いのは當前だ。それよりも衰運のはかなさを明に描出するのは、所謂天下の早慶戰當日、勝利を信じて緊張してゐる早稻田側のスタンドは、學生席も一般席もぎつしり詰まつてゐるのに、慶應側は學生席さへ空地があり、滿場立錐の餘地無しとは、新聞辭令に過ぎず、正確なる報道を尊しとすれば、實は早稻田側立錐の餘地無しに過ぎな

い有様だ。今日も勿論慶應側には立錐の餘地があり、學生席の如きは八分の入りだ。慶應、みつともないぞ。

兩軍の練習中、出場選手の顏觸が放送されると、忽ちネット裏指定席の批評家達はいきまきはじめた。「何故高塚を出さないのだ、高木でもいゝぢやないか、楠本では駄目だよ」「監督がいけない、これでは問題にならない」。楠本は不幸にして制球に難があり、稀代の偉材を未だ十分に發揮してゐないので、極端に不信用なのだが、既に前日高木、中田、高塚を使つてゐる以上、楠本の剛球に賴る外に途は無い筈なのだが、批評家達は承知しない、不滿の聲は次々に傳播して輿論となつた。その時、先生々々と私を呼ぶ人がある。「今日慶應が勝つたら、御馳走しますから是非來て下さい」あたりの人の視線は私に集中した。誰一人、慶應が勝つとは思つてゐない空氣を破つて、かういふ聲をかけたのだから、聲をかけた人よりもかけられた私に、附近の人の輕蔑の眼の集まるのは不思議でない。私は大にてれて、實は明日から旅に出る身の、今夜は自宅で子供達といつしよに御飯を食べようと思つてゐたのだが、周圍を憚かる心から、手取早くうなづいてしまつた。笑つてゐる人もあつた。

試合がはじまる。第一打者が第一球を右翼に打上(あげ)ると、後の席では「早稻田は打つねえ」と感嘆

する。平凡な飛球なのだが。次の打者が遊撃頭上を抜くと「楠本では駄目だ」といふ聲が一層高くなる。高須の右翼三壘打で一點を先取すると「監督はどうしたんだ、早く楠本を引込ませろ」「これではあんまり面白くなさ過る」「此の調子では十點は開きますぜ」と、愉快なのか、不愉快なのか、兎に角勝負はきまつたやうにいひ出した。

慶應は、國方櫻井共に外野へ凡球を打上げ、早くも二死となつたので「慶應は打てないなあ」「打てるものか、若原ですもの」との早稲田禮讃の聲があがる。勝川は捕手の打撃妨害で出壘し、灰山の左中間二壘打で生還同點となつたと思ふと、岡本田楠本いづれも物凄い當りで安打を續け、一擧四點を擧げてしまつた。ネツト裏の批評家は、若原は打たれない、早稲田の勝だと放言してゐた手前、いふ可き言葉を失つて、沈默してしまつた。若原も自信を失ひ、自らひつこむつもりか、ベンチに戻つたが、慰撫されたのであらう、水を飲んで又プレイトに戻つた。若原は私の好きな選手なのだが、此の時の態度はよくなかつた。

二三回は事なく濟んだが、四回早稲田二死後、淺井柿島に四球がつゞき、楠本は又してもフオームを失はんとし頗る苦境と見えたが、斯ういふ時には運惡く失策の出るもので、勝川は左程困難とは見えない制球を後逸し、安打がつゞき四球がつゞき、遂に高塚と交代しなければならなか

つた。批評家達は凱歌をあげるが如く「だから楠本では駄目だと云つたんだ」「何故最初から高塚を出さなかつたんだらう」「監督の頭が悪いんですよ」と時を得て一齊に喋りはじめた。結局此の回、早稲田は四點入れて五對四と形勢を逆轉した。「もう駄目だ」「早稲田は打つからねえ」「絶對に勝味はありませんなあ」と、批評家達はあらためて先見の明を誇るのであつた。

ところが五回の裏、たつた今大失策を演じた勝川——後で聞いた話だが、彼は失策の申譯なさに、試合が濟んだら故郷名古屋へ逃げて歸らうと思つてゐたさうだ——が、見るからに奮起した様子で、バツトを振り振り出て來たが、果して三壘打をかつ飛ばし、灰山も安打して同點となり、岡も亦二壘打して無死走者三二壘の危機となり、若原は又水を飲みに行つたが、今度は慰撫する者もなかつたのか、其儘引込んでしまつた。勢に乘つた慶應は、代つた近藤を攻めて總計四點を加へ、八對五とリイドした。批評家達は、全く豫期しなかつた形勢に、暫時寂として聲も無かつたが、「若原をかへる手はないよ」「近藤では駄目だ、若原は必ず立直る投手なんだがなあ」「ベンチが悪い、これでは慶應の勝だ」と手の裏をかへす斷定を下す者も出て來た。此の日の若原は球速なく、カアブは入らず一方遅れ走せに打棒の冴えて來た慶應は、選球もよく、若原得意のコンビネエシヨンの裏をかいて、五回丈にして八本の安打を放つてゐるのだ。いくら豪氣のベンチと雖

も、立直り上手の若原でも、これでは交代の外に途は無いと思はれるが、批評家は自分達の絶對に信頼した若原に責を負はせる事は、即ち自説を裏切る事なので、此の交代に責任を負はせようとするものらしい。冷静に考へれば、交代が敗因ではなく、交代しなければならない投手不振が敗因なのだ。

勝敗は問題でないと云つてゐたのが、打てない筈の慶應の得點は總てアアンド・ランで、あく迄も積極的攻法で壓迫を續けるので、流石の批評家達も「試合は水ものだからねぇ」とか「慶應にも勝たせてやらなくては可哀さうだよ」とか、嚴正批判の埒外に出てしまつた。

不幸にして高塚は、柿島の強襲球を大事の左手にあてゝ負傷し、六回から高木が代つた。彼は對法政戰にこそ好投したが、前日も巧味を示さず、今日は、一層不手際で、近藤、佐武、村瀬に連續安打され一點を奪はれた。先刻は、楠本ではいけない、高塚か高木に限ると主張した批評家は「何故高木なんか出したんだ」「實に監督の頭腦は不可解だ」「私は結局早稲田の勝だと思ひますよ」試合の經過の變轉と共に風向も變つて行く。しかも七回一死後呉の三壘打に四球が連續して滿壘となつたので、高木は中田と交代した。中田は前日極端に不調だつたので、批評家の信用は目下の處零(ゼロ)だ。殊に、一壘手の拗の惡さで一點を許し、安打が出て又一點を奪はれ、同點に追ひ

つかれたので、批評は愈々うるさくなつた。「だから云はない事ぢやあないよ」「中田なんか出してどうする積りなんだ」「監督の頭の惡さですね」「絶對に早稻田の勝だ、實力の相違だね」「しかし慶應にしてはよく鬪ひましたよ」「負けてもあきらめはつくでせう」「でも慶應可愛さうね」と婦人の同情の聲もまじつた。

八對八で九回となり、廣い球場も息苦しくなつた。宮崎が淺井の三匍を懷に抱きそこなつた時は、あゝあゝあゝといふ啞のやうな聲が諸方に聞えた。「これでおしまひだ」「もういけない」「ね、矢張早稻田でせう」と、若原の交代の時慶應の勝だと宣言した聲が勢ひよく云ふのだ。しかし海野のバント三飛となり、淺井の二盜は櫻井の好投に斥けられて二死となると、「延長戰だぞ」といふ聲が聞えた。かと思ふと近藤左翼に二壘打し、佐武の遊匍を勝川低投して生かし、四球が出て滿壘となると、球場は感激と不安の交錯で騷然となつた。「最後に來る所へ來ましたね」「しかし慶應は大出來でしたよ」と、病人が最後の呼吸(いき)を引とつた時の醫師のやうに斷案を下した。しかし慶應は切拔けた。「延長戰だ」といふ聲が再び起つた。誰も彼も早稻田が負けるとは考へないやうだつた。

岡の三匍は難球だつたが、高須巧に處理して一死となれば、愈々延長戰を期待する聲が高くな

つた。しかし本田河瀬と三遊間の安打がつゞき、慶應の好機となつたが、批評家達はあく迄も其の勝利を信じない。「打順が悪いなあ」「宮崎では駄目ですよ」「ピンチヒツタアはゐないのか」「監督の頭の悪さ、お話になりませんね」としきりに歯がゆがる。だが、その宮崎は第二球目の高目の直球を切るやうに左翼に打つた。わあつといふ歡聲の中を、本田は三壘を過ぎて本壘に突進して來る。前進守備位置にゐた長野は、ワン・バウンドで捕つた球を本壘に投げた。彼は強肩だ。本田の突込は無理とも云へる。しかし九回裏の混亂裡に、これを敢行しない法はない。球は稍外にそれて且高い。球は佐武のミツトに入つたが、タツチはむづかしい。本田は本壘に滑り込んだ。わあつとあがる三壘側の歡聲の中を、五色のテープが飛び違ひ、人々は一齊に立上つた。批評家の聲は歡聲に消されてしまつた。（昭和十一年十一月五日）

――「時事新報」昭和十一年十一月七日・八日

わせだのわるもの

身内の年寄に病人が出來、かなり心配になる容態なので、見舞にかけつけたところ、枕に半分顏を埋めてゐるのが「わせだのわるものはどうした」ときいた。あまり突然で何の事かわからず、返事に困つてゐると、看護の者が說明してくれた。つい此間、枕もとで讀んできかせた新聞に、早慶野球第一回戰早稻田勝利の夜、祝杯に醉拂つた學生が、銀座裏をうろつく慶應の學生に喧嘩を吹かけ、麥酒瓶だか、コップ(新聞の報道は例によつてまちまちである)だかで、瀕死の重傷を負はせたといふ記事があり、病人はことのほか苦々しく思ひ、その惡者はつかまつたか、重き罪科に處されたかと氣にかけてゐるのださうである。

明朗なるスポオツとは新聞人の好んで使ふ言葉であるが、早慶戰には昔から忌はしい出來事が附隨してゐる。誰も知る通り、明治の末には一度中止になつた事さへある。その時は、兩校の應

援團が興奮し、殊に早稻田は約束を守らず、人數の制限を無視し、示威行動には出るし、當時跋扈した神田邊のごろつき書生も合流し兇器を携へて乘込む者もあるので、多數の子弟をあづかる學校として、流血の慘事をひき起しては父兄に申譯無いといふ處から、慶應義塾塾長鎌田榮吉先生が、早稻田に出向いて中止の申入れをしたのである。今もはびこる惡者どもは、その頃から傳統の脈を引いてゐるものと見て差支へない。

學生は學生らしくしろとは、常に世間大衆の口にするところであるが、何が學生らしいのかは、はつきりしてゐない。學業を勵むのが學生の本務だとは、誰も考へる事だらうが、學生らしくしろの要望の中には、決して學問をしろといふ事は含んでゐない。學生は破帽獘衣を身につけろといふ要求もあるであらう。馬鹿々々しい話だが、その昔第一高等學校の學生が、新しい帽子をわざわざ破いてかぶつたり、新しい袴を故意に汚してはいたりしたのは、健兒の意氣を示すつもりだつたのだ。強さうに見せる事は學生らしく、禮儀を知らないのも學生らしく、時には亂暴するのも學生らしく、醉拂ふのも學生らしく、立小便するのも學生らしいと考へる者もすくなくない。だから、制服を着ながら、わざと足駄を引擦つて得意になる中學生もあれば、特に黑木綿の紋附の羽織に白く太い紐を結び、弓の折れや、仕込杖を手にして豪傑がる大學生もある。斯ういふ學

生が、學生仲間で毛嫌されながらも幅をきかしてゐるのは、我國の大學の特異性であるが、慶應義塾は合理主義、文明主義の福澤先生の流儀を傳へ、粗野兇暴の學生を擯斥する風があり、偶々(たま／＼)田舍からはきちがへたのが出て來て、無益に肩をいからしたり、わざと往來をふさいで步いて見ても、少しも幅がきかないので、次第に影がうすくなつてしまふ。學生ならば、ちつとは脫線しても、亂暴しても構はないといふ考へ方が流行(はや)らず、學生も社會人の一人なりとする傳統精神が強いやうである。しかし、「學生は學生らしくしろ」といふ世間大衆の眼には、これが氣障に見え、お洒落に見え、弱蟲に見えて人氣を博さない。黑紋附も、長髯もお洒落のひとつのあらはれなのだが、あんちやん達は、そこ迄は考へない。

「學生らしさ」を十分に發揮する風景は、神宮球場に於ても屢々見せつけられる。應援團長と團長とが握手し、ブラス・バンドをつかつて芝居がゝりの入場式を行ひ、之に相手方の奮鬪を祝福する齊唱を交換し、儀禮を盡したかと思ふと、忽ち「馬鹿野郎」「何をッ」「かへりに見ろ」「與太者」「ごろつき」と無統制に罵り合ふ。夫々贔負大衆は、此の「學生らしい」勇ましさに感激し、共感の拍手を送つて聲援する。學生らしい學生の中でも學生らしいのには、更にひとつの仁義がある。試合に負けたら、相手の應援團をぶんなぐつてやらうと云ふのだ。芝居や講談によくあるやつで、

御前試合に負けた奴が、勝つた方が殿様の御盃を頂き、いゝ氣持で歸つて來るのを待うけ、やみうちにするあの手である。

一度中止になつた早慶戰が復活した時、早稻田は黄金時代だつたのに引かへ、慶應は新人の多い貧困時代で、勝負は問題にならなかつたが、その時早稻田の野球部の生みの親といはれる安部磯雄氏は、早稻田が勝つたから間違ひは起らなかつたが、萬一負けたら一騷動は免れなかつたらうと述懷したさうである。弟子を見る事師にしかず、「學生らしい學生」が負けた時、いかなる態度をとるものか、安部氏は見拔いて居たものと見える。これを實際に示したものは「林檎事件」だ。應援團の一人が食ひかけの林檎を選手に投げつけ、その選手がこれを投返したのを怪しからずとして、木刀を持つたり、短刀を懷にした「學生らしい學生」が球場になだれ込み、更にあばれ足りず、銀座に押出して學生らしからぬ弱蟲の慶應をぶんなぐり、傷つけ、負けた腹いせをした事件がある。これに類する小事件は早稻田の負けた時には必ず起る事になつてゐるが、幸に慶應が學生らしくないから先づ先づ無事なので、この相手が明治だつたらどうなるかと、想像する丈でも慄然とする。彼等は「學生らしさ」に於て一層「學生らしい」から、慶應の如くむざむざ張り飛ばされてはゐない筈だ。事實、早明戰は早慶戰のやうに、歴史的意義づけ方が少ない爲に事なきを得

てゐるのであるが、假にこれが早慶戰の如きものであつたらどうなるのだらう。或人笑つて曰く、「早稻田の惡者だつて相手はえらぶよ、弱蟲の慶應だから兎狩の氣持で繰出すが、相手が明治となれば、學生らしい態度なんかとれるものか」と。この論法で行くと、早慶戰につき物の行動隊の出現を防ぐのは、慶應の弱蟲も學生らしい學生となり、木刀を持ち短刀を持ち、短銃を持つて正當防衛に賴る外はない。

私は「早稻田の惡者」を憎む事勿論であるが、試合に勝つたからといつて、直に銀座に流れて行き、酒場や喫茶店の女の子の前で、舌たらずの氣焰をあげる「學生らしくない」慶應ボオイを好まない。缺食兒童のやうにひよろひよろしたのが、醉拂つて校歌をうたつてゐるのなんか、みつともなさの極みだ。こんな奴等はぶんなぐられた方がいゝとさへ思ふのである。

病人は「早稻田の惡者」の事が餘程氣になると見え、その後一週間もたつて又見舞に行くと、又しても「早稻田の惡者はまだつかまらないかねえ」ときいた。あまり心配させては病氣の爲によくないと考へたので「あゝあれはつかまりましたよ」と答へると「それはよかつた」と安心した樣子で、間もなく輕い鼾をかきながら熟睡した。(昭和十一年十一月十二日)

――「時事新報」昭和十一年十一月十四日・十五日

清順院貞室惠京大姉一周忌

ことし十一月十六日、淸順院貞室惠京大姉久保田お京さんの一周忌法要は、お京さんが最後迄熱烈に愛した良人のこゝろざしによつて、いとねんごろに營まれた。親戚のものと極く親しい友人ばかりで——といふ事だつたが、私も親しい友人の中に加へられ、本鄕の赤門前の喜福寺に詣でた。他の人を見ると、お經が濟み、燒香が濟んでから墓參すべきもののやうであるが、私は先づ御墓にお詑に行かなければ氣が濟まなかつた。門を入り、長い石疊を踏み、本堂の左手の墓地へ入ると、とつつきが久保田家の御墓で、石碑を圍み埋めて、折柄の菊の花が、香烟と共にほのかに香つてゐた。うすぐもりの日で、土はしめつぽく、踏石は水に濡れ、地下の靈も寒さうに思はれた。お京さん、すみません——私は手を合せ、頭を垂れた。菊の花は面をうつばかり、高く香つた。私はお京さんに買かぶられ、子供の事、良人の事、亡き後々の事迄も、何かと親身に心

配しなければならないやうな、身にあまる信頼をうけてゐたやうに思はれる。それにも拘らず、私の片意地は、今や次第に久保田家から遠ざからうとし、お京さんがあれ程可愛がり頼りにした御子さんは丈夫かどうか、學校は何年生になつたのか、パパは果してよきパパであるか、主婦の無い家といふものがどうなつてゐるものか、一切何も知らないのである。私の古い道徳は、この事で常に私を責めてゐる。

本堂に隣る控の間には、久保田さん父子、親戚の方々の外に、知つた顔も多かつた。挨拶して席につくと、直ぐに、今日のお世話人が、小型の本をくれた。亡き妻の一周忌記念として、久保田氏がこの一年に「かの女をめぐつてのわたくしの生活」をしるした文章三つを集めたものである。早速開いてみると、先づ最初にお京さんが、お京さん特有の大きな廂髪で、こゝろもち微笑してゐる寫眞、それにぴつたりくつゝき、母の手に縋つてゐるいとけない耕一君のゐるのがあらはれた。お京さんの年齢も、耕一君の年齢も、私には一寸判斷しにくいのだが、そのお京さんの笑顔は、母親としての、人妻としての、嬉しさと満足のみちあふれたものである。胸が迫り、お京さん、すみません――と、お詫びしなければならないのであつた。

衣ずれの音のきこゆる花野かな　　鏡花

巻頭に泉先生の句が載つてゐる。先生はお京さんが大の御贔負で、といふと先生は、御贔負なども失禮な、僕は崇拜してゐたんだとおつしやるに違ひ無いが、まこと女らしく、やさしい、美しい、しとやかな人として、始終ほめたゝへてゐらつしやつた。吾々の時代の浪漫派の巨匠は、この句の中に、お京さんのありし日の姿を偲ばれるのであらう。

私はお京さんを、久保田夫人としてみる前に知つてゐた。それも勿論久保田さんのひきあはせには違ひ無かつたが、當時私は、二人が結婚する事にならうとは思はなかつた。お京さんが久保田家のお嫁さんとなつた時、私は大阪につとめてゐた。私は久保田さんの爲に祝福した。やがて私も東京に歸り、しげしげ久保田家に出入した。久保田さんは、既に第一流の文人として名を成してゐた。そこに耕一君が生れた。お京さんはいつも笑顔だつた。一周忌記念文集の中の「可哀想な彼女」のかき出しには、父親が、こどもに、亡き母のどのやうな顔をおもひ出すかときく、涙ぐましい對話がある。こどもは「機嫌のいゝ顔だね」と答へてゐる。父親も、自分も機嫌のいゝ顔しか感じられないといつてゐる。ところが、私には、お京さんの極めて不機嫌な、ヒステリックな、蒼白の顔が、一番さきに浮んで來る。それは私が、最後にお京さんを見た時の相貌である。お京さんの長からぬ生涯の終に近い頃で、病氣の爲に心悸たかぶり、ねたみ心の深くなつたお京

さんをなだめに、深夜訪問の役目を負はされて行つた。寢てゐたお京さんは起きて來て、自分で門を開いて迎へてくれた。久保田さんは、文集の中の「引越しのこと」の中で、「放漫な、でたらめな、しめくゝりのない生活」と自分を鞭打つてみせたが、お京さんはそれらの惡德には極めて寛大だつた。この文學的表現は、決して深刻なる自省を伴はず、從つて讀者も、些かの憎しみを感じないに違ひないが、お京さんも此點については、寧ろそれを、善良なる性格のあらはれと認めてゐた。だが、その外の惡德、嘘の多い生活には堪へられないと云つて、曾てないうはずつた聲で、恰も私を咎めるやうにせき込んだ。しかし、そのあひまあひまに、いかに自分が夫を愛し、夫の爲には苦勞を忍んだか、切々と語られるのには、私も胸を打たれた。かう迄夫を熱愛する妻といふものがあるのかと、私は驚いた。熱烈に愛すればこそ、殊には病中の、兎角ひがみも深くなるのがあたりまへなのだと同情した。お京さん、私はあなたの味方です――と、私は肚の中で叫んだ。

　お葬式の濟んだあと、「これを機會に、こどもは寄宿舍に入れること、おやぢはアパアトに住むこと」と、私がこれを最後の進言として敢て言つたのは、甚しく久保田さんの御不興をかつたやうで、これに對する抗議が卽ち「引越しのこと」なのだが、私の眞意は「嘘の多い生活」の中にこど

もを置く事を不可としたのである。寄宿に入れる事や、アパアトに住む事は二の次なのだ。お京さんの希つたやうなパパであれば、又何をかいはん。

だが、私はその進言をほんとに最後として、お京さんの信頼に背いてゐるのだ。讀經が終り、吾々の燒香の順の廻つて來た時、私は香を拈（ねん）じつゝ、お京さんすみませんと頭をさげた。（昭和十一年十一月二十日）

――「時事新報」昭和十一年十一月二十一日・二十二日

七生報國

一夜、酒宴の最中、突然一人が一座の者に問を發した。若しもう一度生れかはる事が出來るとしたら、喜んで此の世に生れかはるかどうか。その席には、後世に作品の殘る小說家もゐた。高名な畫伯もゐた。役人もゐた。實業家もゐた。年齡は四十七八から六十四五迄。

「まあ御免かうむりませう。」

と日本畫の大家は、何の躊躇もなく答へた。

生れかはるといふのは、今の自分と同じ人間に生れかはるのかもつと利口な人間に生れかはるのか、もつと愉快な、苦勞の無い世の中に生れかはるのなら、生れかはつてもいゝと、小說家は云つたが、いつた後から直に、

「やめた、やめた。どうせ多寡の知れた世の中だ。眞平々々。」

と手を振つて打消した。

誰も彼も、もう一度この長い人生を、最切からやり直さうといふ者は無かつた。酒の席だから、冗談も出たし、まぜつかへしも飛出し、笑聲も高かつたが、その裏から妙に重苦しい氣持が、冷い影を伴つてはびこつて來た。私もしらけた氣持で、冷たい盃を口に持つて行つた。

矢張誰も同じか。自分のやうに今日迄の半生を、後悔ばかりしつゞけて來た者は、屢々もう一度生れかはり、今度こそは浮世の岐路に踏迷はず、充實した生涯を送り度いものだと考へ勝だつたが、それが何時の間にか變つて、五十年六十年の生涯を、碌々として飯を食ひ、平々凡々の日數を重ねるうちに、肉體も氣根も疲れ、二度とふたゝび生れかはる事なんか面倒臭くなるのではないだらうか。又してもしゝばゞの世話をかけ、這ひ、歩き、學校に通ひ、どうせ落第もするだらうし先生に叱られもするであらう、假に優等生になつたとしても、小學中學大學と十五六年も費し、その間にいろけづき、悩ましいおもひに苦み女に心を動かし、齷齪働き、うるさい他人の批評に身をさらし、おもひの儘の事は何も出來ず、女房を持ち、これが重荷になり、こどもが生れこれが負擔となり、〔二十四字略〕少し偉くなれば妬まれ、脅かされ、〔十一字略〕これが浮世の姿とすれば、誰がもう一度生れかはつて來ようなどと願はうや。

「それにしても、七生報國を誓つた楠正成や尾崎紅葉山人は、偉いものだなあ。」

と、我身の腑甲斐なさを恥ながら、これらの英雄の心事のはかり難きに疑念をもつて口に出した。

楠正成も、今こそ忠義の權化として國民崇敬の的となつてゐるが、寡兵をもつて大軍とたゝかひ、たゝかひ疲れて討死する迄の生涯は、苦艱の連續といつてもいゝ。紅葉山人の短い生涯も、はなばなしいものではあつたが、胃痛にさいなまれ、苦しみながら、七生報國の氣魄を藏してゐた事は驚かれる。尤も苦しい一生だからこそ、かへつて今度の世の中に希望をつないだのかもしれない。今度生れかはつたら、あの作戰でなく、この作戰で行かう、必ずや勝つて勝つて勝まくらうと、湊川の最後の瞬間にも、正成は光明の世を望んでゐたのかもしれない。今度こそは健康に惠まれ「金色夜叉」を完成しようと、紅葉山人は臨終の床に、次の世の有様を空想したかもしれない。

「矢張正成も紅葉山人も、若くて死んだから元氣がよかつたのでせう。五十六十迄生きてゐたら、七度生れかはる事なんか希望しなかつたに違ひ無いや。」

と或人は無雜作にかたづけてしまつた。結局、この世の中で志を得ても得なくても、五十年六

十年生きると、生きる事に疲れて、生れかはる氣がなくなるのではないかといふ所に、最後の私たちは來た。もとより正成が七生報國を誓つたのは、忠義一途に出たものであり、紅葉山人のは日本帝國の文化の爲に、苦しき人生を生きかはり死にかはり、御奉公申上ようといふ精神に外ならないが、これらの人々とは方面こそ違へ、近世日本の政治財政に七十年八十年の生涯を捧げ、最近の時勢の裏の裏まで知つてゐた犬養木堂や高橋是清は、（八十四字略）

私は、その酒席の冗談が心の底に食ひ込んで弱つた。一座の人は皆、長く生きようとは願つてゐる。私もその一人だ。今の命は長く保ち度い。だが、もう一度生れて來る丈の根氣は無い。はげしい疲勞は生への執着を忘れさせる。或地方に於て、極端なる勞働の疲勞から危險を忘れ、鐵道線路を枕にして眠り、轢殺されるものゝ數が多いといふ事をきく。先年或山に登つた時、足弱の女が、もう歩けない、捨てゝ行つてくれ、谷底へ身を投げて死んでしまふと駄々をこね、連の男どもをてこずらしてゐるのを目撃したが、疲れ切つて、一歩も進めなくなつた時、火山の底に飛込んだり、瀑布と共に落下する事が唯一の救だと感じる事もあるであらう。酒に醉ひ、げろを吐き、のたうち廻る妓が、死に度い死に度いとうなつてゐるのを見た事があるが、これもやすやすと死ぬ事を希ふ瞬間に在つたものと思ふ。生と死は壁一重だ。平々凡々の生涯の終に近く、身

も心も疲れながら、この命だけは長かれと願ふ身も近頃の世並に堪へきれず、いつ何時もう一歩進めて、短氣を起さないとも限らないのだと思ふと、寂しい心持に襲はれる。さうかといつて、七度生れかはる氣力があるかといへば、それはもはや失ひ盡したやうである。まゝにならないのが浮世か。（昭和十一年十一月二十六日）

――「時事新報」昭和十一年十一月二十八日・二十九日

大道狹し

東京も市街地に住み、朝から晩迄時間に縛られ、齷齪働く勤人には、散歩が唯一の運動だ。だが、適當な散歩區域が無い。銀ぶらは、東京人の最も愛好し、自慢する場所であるが、あの人込を安心して歩くのは、餘程の膽力と、太い神經を持合せなくては駄目だ。歐米の都會は、混雜の度合は銀座にまさるものがあつても遙に秩序があり、危險が少ない。行人同志、足を踏んだからといつて、踏んだ方も踏まれた方も、先を爭ふやうに帽子をとつてあやまる。掏摸はゐても、日本人程器用でないし、練習も積んでゐないさうだ。醉漢はゐるにはゐても、我身を恥るもの丶如く、しよんぼりと足を引擦り、暗いものかげをえらんで歩く。ところが、〔八字略〕我國では、醉拂ひは天下御免で、人込の中を千鳥がけに歩き、體當りをくはせ、自分の方からぶつかつて置きながら、間抜とか、馬鹿野郎とか相手を怒鳴りつけ、忽ち亂鬪を現出する。足を踏むといふのが又

大事で、踏まれて默つてゐるやうでは、男で無いといふ武士道もある。一寸擦違ふ拍子に、うつかり相手の顏でも見ると、なんだつて俺の面を見やがるんだ、電車でも通つてるつていふのかと來て、張飛ばされ、蹴飛ばされ、まかり間違ふと脇腹を抉られないとも限らない。勿論人の出さかる所には、自分勝手にきめた繩張を死守する與太者がゐて、常に兇器を懷中にして、鴨を探し、脅迫強請傷害の數を重ねて、顏を賣らうとする。そゞろ歩きなどゝいふ呑氣なものではなく、足を踏みはしないか、突當つては大變だ、顏を見てはならないぞと、戰々兢々たる有樣で、ちつとも樂しくない。しかもこれが、銀ぶらに限つた事ではなく、新宿でも、淺草でも、神田でも、日比谷公園でも同じだ。從つて、吾々のやうな氣の弱い者は、我家を中心とする一定區域の、極めて地味な散歩の外にみちが無い。

今の借家に越して來た時、うちのこどもは四歳だつたが、やうやく散歩といふ言葉を覺え、又三輪車に乘る事が出來るやうになつた頃なので、それに乘つて往來に出るのを喜んだ。お父さん、散歩に行かうと誘はれると、私にもいゝ運動だし、新しく越して來た土地の珍しさに、連立つて近所を歩いた。こどもは三輪車にまたがり、忙しく兩足を動かし、おやぢはそれを追かけて、門を出て行く。默つてついて行けば、こどもは必ず九段坂の中程の鳥屋を目ざした。この鳥屋は餘

程古い店らしく、私の記憶は四十年以上もさかのぼる事が出來る。母方の親戚にあたるのが、飯田町に住んでゐて、多分五六歳頃の私は、母方の祖母の膝に抱かれ、人力車で九段坂を通つた。親戚の家はどの邊にあつたのか、今では全く見當もつかないが、狹い坂の中途で、黑板塀のさむらひ屋敷だつたやうに思ふ。そこには頭の大きい男の子と、色白で目の細い女の子がゐた。それよりも、その九段坂の鳥屋の記憶は、實にはつきり殘つてゐる。異國の鳥類が、當節のやうに樂々と輸入されず、極めて珍しい時代だつたから、私はその店さきで見た雪白の鸚鵡と、赤いのや綠の鸚哥(いんこ)を、強く眼に燒つけられたのである。今もその店は繁昌で、鸚鵡や鸚哥ばかりではない、鶴もゐれば、鹿のゐることもある。栗鼠はくるくる車を廻し、九官鳥は人語を叫び、さまざまの小鳥は高く啼きかはしてゐるので、こどもは三輪車を乘捨ると、店の內部へ誘ひ込まれる。おやぢは車の番をしてゐなければならない。お父さん、鶴かひませう。お父さん、孔雀買つてね、こどもは御主人やおかみさんの前で、遠慮なく聲を張あげる。あゝ、お前が大きくなつて、自分で世話が出來るやうになつたらね、おやぢは店の人にいひわけする氣持もまぜて、こどもに答へる。お父さん、兎なら僕大きくならないでも飼へるんだつて。駄目だよ。うゝん大丈夫だとさ。誰が智惠をつけたのか、是非とも兎を飼ひ度いといふので、これは極めてお値段も安いから、望むが

まゝに白いのと黑斑のを買つて、鳥小舍に入れたが、三日とたゝず、猫か鼬に危害を加へられて、死んでしまつた。お父さん、今度はね、鹿をかひませう、鹿なら鼬よりも強いから。あゝ、お前が大きくなつたらね。おやぢは閉口し、どうかして十姉妹の方に、こどもの興味を向けようと努力するのである。

一年二年、おやぢとこどもは、鳥屋の店頭に立つて買ひもしずに樂んだ。まことに小鳥の美しい姿を見、きよらかな聲を聞くのは樂しかつたが、〔百三十九字略〕頑是無いこどもに說明するのは、大人の立場として苦しいので、しきりに行きたがるこどもをだまし、次第に鳥屋の興味を忘れさせてしまつた。やがて事件は一段落を告げ、………も引上げたが、その頃にはこどもは、此の散步道を忘れてしまつて、鳥屋さんへ行かうとは云はなくなつた。

九段と平行する中坂は、文學に緣の深い所で、昔は瀧澤馬琴がこの坂下に住んでゐたといふし、近くは明治中期、硯友社の發祥の地は此處だときく。眞正面に駿河臺のニコライ堂が見え、晴れた日の夕空は美しい。坂の上の角には、和洋女子專門學校といふ不思議な名前の學校がある。日本の女と西洋の女とが共學する專門學校かと思ふと、さうではなくて、和洋兩方の裁縫とか料理とかいふ實用向の事を專門に敎へるものらしい。地方から來た學生が多いらしく、往來で呼びか

はし、話合ふのをきくと、田舍訛が甚しい。簡易な寄宿舍もあると見えて、此の頃の喫茶店の女給仕のやうに成熟したお尻に兵兒帶をしめたのが、ぞろぞろ歩いてゐる。學校の前がアパアトメント・ハウスで、これは相當小ぢんまりした、みつきのよいもので、內部はうかゞひ知る事も出來ないが、或室の窓には白足袋が干してあり、或室からは三味線の音がもれて來る。或時二人の職人が通りかゝり、若いのが年寄りのに質問した。おい、あの英語讀めるかい。讀めるもんか、日本語だつて讀めやあしねえ。さうか、クダン・アパアトメント・ホオスと書いてあるんだぜ、ホオスつてのは家つてことだとよ。

こゝは四角で、女學校とアパアトの他の二角は、古風な店構ひの酒屋と、前正金銀行總裁の住宅だ。女學校の角に郵便函があり、これが鳥屋さんにかはつて、こどもの散歩の目標となつた。夏は涼しい風がまともに來る。しかし、時々いやな奴に出つくはす。橫濱迄歸りたいんですが、電車賃を貸してくれませんか、などゝいふ薄氣味の惡いのもゐる。あの人、いゝ人? あとで、こどもは不思議がつて聞いた。〔五百二十字略〕(昭和十一年十二月三日)

——「時事新報」昭和十一年十二月五日・六日

空氣の味

この頃は、しみじみ空氣の味をおもふ。發育ざかりの若者には、濃厚なものゝ味しかわかるまいし、其日々々を好勝手に、寢たければ寢、出歩きたければ出歩く生活の出來る者にも、この味はわかるまいと思ふが、吾々の年齢になり、窮屈な月給取の境涯に縛られてゐる者にとつて、空氣の味の深さ、こまやかさは、何にたとへんものもない。數年前迄、下六番町に住んでゐた頃、私は勤め先へのゆきかへり、市ケ谷から東京驛迄省線を利用してゐたが、夏は別として、秋から春へかけての、車内の腐敗した空氣と、味噌汁と澤庵漬を主成分とする人間臭さには辟易した。吾々日本人は、異人の體臭の動物臭さはたまらないといふが、いつたん胃の腑に入つた味噌汁と澤庵のかもし出す我同胞の發散する臭も、これをひとゝころにまとめて嗅がされると、決してなつかしいものではない。もとより私も、味噌汁と澤庵を無上に賞美する點に於て、いかなる國粹

主義者にもひけをとらないつもりだが、多數の人間が集り、しかも外氣の流通を許さない場合、此の國粋的食物の消化されたものは、爽快なる香氣を漂はせない。私と雖も、眞冬は遠慮するが、春さきのぽかぽかした日ざしの漲る頃や、秋の空の青い日には、電車の窓をあけて、新鮮な空氣を呼び込みたい。幸に座席に着くことが出來ると、私は自分の背中の窓を、我もの丶やうにあけるのがおきまりだつた。すうつと一條、きめこまやかな空氣が顔を撫で、咽喉にとほる。うまい。おいしい。何ともいへない味だ。諸君、すべての窓を開いて空氣を味へ、と心に叫んでゐると、忽ち近所の人が立上り、手を差延ばし、たつた今私のあけた窓を、無言で、腹立たしさうにしめてしまふ。あ丶、此の窓は自分一人の窓では無かつたのだと思つて、我慢すると、一瞬たりともうまい空氣を吸つた後だから、前よりも一際強く、あくどく、味噌汁と澤庵を主成分とする人間臭さが、むうつと襲ひか丶るのである。時には私も意地になり、しめられた窓を又あけてやつたが、忽ち車内の憎惡は一身に集まり、九對一の孤立狀態は、恰も今日の日本の姿の如く感じられた。何故に世の人々は、それが五月六月の、既に夏近く、戸外でも風の戀しい頃になつても、伊達の外套やレイン・コオトみたやうなものを着て、額に汗を滲ませながら、なほ且窓をあける事を拒むのか　私にはわからない。異人と違つて、風の吹通す家に住み、隙もる風に惱み勝なので、

無闇に風を怖れ、空氣を尊重しない習性を養つたのだらうか。

この頃私は市電の御厄介になつてゐるが、これも亦省線と同じく、うつかり窓をあけると、忽ち四方八方から非難の電氣が火花を散らすので、味噌汁と澤庵を主成分とする人間の臭にむかむかしながら、忍苦の行をつゞけてゐる。その上、私の勤先は、近代の模範建築だから、冬は寒くないやうに煖房の設備がしてあるし、夏も暑くないやうに冷房の装置がしてある。私のやうに、冬でも毛の肌着を身につけない者にとつて、煖房の熱度は常に高過る。その爲に眠くなり、疲勞し、怠惰になる。おまけに、夏も冬も、窓をあける事を許さない。あければ外氣が侵入し、せつかくの人工溫度を滅茶々々にしてしまふので、止むを得ない事なのだが、朝から夕方迄忙しく働く者が、新鮮な空氣を吸ふ事が出來ないといふのは、まことに悲慘な事ではないか。勿論屋內に味噌汁と澤庵を主成分とする人間の臭をこもらせない爲には、絕えず人工的に空氣の入替を行つてはゐるが、それは遂に自然の換氣には及ばない。第一、空氣の味の違ふ事、天然鰻と養殖鰻の相違以上である。私は、夕方の退出時に、玄關からおもてに出ると、先づ外氣を深く吸ふ。殊に冬、屋內の無益に高い溫氣に蒸され、素肌につけた白シャツも熱つぽく汗ばむ程なので、ひとたび戸外のつめたい空氣を、腹いつぱい呑み込む時の快感は、まつたく醉ひざめの水の味である。

醉ひざめの水の味は下戸にはわからないといふか、かゝる空氣のうまさを感じるのは窓をあける事さへ許されない勤人の身の不自由を忍べばこそと思ふこともある。厚い壁と硝子戸で、きつちりとしめ切る家に住む異人が、窓をあけ放つて、外氣に觸れることを喜び、つめたい風の自由に吹込む家に住む日本人が、やたらに窓をしめたがるのも、同じ消息を語るものかもしれない。

暇があるなら、海邊山邊の味の濃い空氣を味はひたいのだが、日曜と雖も十分の時間の無い私は、少しの時間を利用して、庭先の崖つぷちに立ち、遥に遠い空を見ながら、空氣を吸ふのを樂みにしてゐる。昔ならつた經濟原論の第一章に、空氣や日光は自由財だと書いてあつたが、その自由財さへ思ふ儘にはならない我身をはかなむこともあり、又時たまながら、空氣の味を沁々感じ得る幸に深く感謝することもある。今度の日曜には、庭にむしろを敷き、終日々光を浴びながら腹いつぱい空氣を吸つてやらうといつも思ひ思ひ、つい忙しさにそれも果せないありさまである。（昭和十一年十二月十一日）

――「時事新報」昭和十一年十二月十二日・十三日

相撲客道

常陸山梅ヶ谷對立時代を最高頂とし、その引退後次第に下坂となつた相撲の人氣は、一時全く沈滯したことがある。恰も野球の人氣の素晴しかつた頃で、ラグビイ其他の戸外競技も次第に大衆の人氣を獲得して來た時代である。ものわかりがよく、氣の早い日本人の常として、將來人氣の中心となるのは外來の戸外競技で、相撲の亡びるのは時間の問題だといふのが常識だつた。いつたい日本人程、俺は日本人だといひたがり、いかにも他國民より高い所にゐるものゝやうにいひながら、しかも他の國のものに心醉し、何の躊躇もなく眞似をする國民は、世界にその比を見ない。同じく國民的自負心の強い英吉利の如きは、此の點に於て全く違つて、他國の文物を取入れる事には頑冥といふか、片意地といふか、梃子でも動かない趣がある。彼等は、自國の遊技として、ラグビイとクリツケツトとボオト・レエスで滿足し、野球の如き亞米利加物を受つけない。

程度の差こそあれ、歐羅巴大陸諸國も同樣の傾向た。然るに日本は、運動競技の例を見ても、野球庭球蹴球籠球排球水球何でも來いで、しかも夢中になる。そこに近代日本の比類なき進歩が伴つたのであるが、惡くいへば操守の精神に乏しく、浮氣だともいへる。相撲滅亡說の唱へられたのも、この性質に根ざすのである。

ところが、相撲は滅亡するどころでなく、こゝ數年來の人氣といふものは、常陸山梅ケ谷對立時代に、まさるとも劣らないもので、曾て滅亡說を唱へたものも、口を拭ひ、兩國橋を爭つて渡つて行く。しかし、今日の隆盛を見て安心してゐては危險だ。何故かといへば、大多數の客は、相撲の面白さを十分にわきまへて見に來るのではなく、世間の人氣が相撲に集つたとなると、その人氣に誘はれて來るのだから、いつ何時、再び相撲にそむいて、新しく人氣を集めるものに移つて行かないとは限らない。それ程客は浮氣である。

私は相撲程面白いものはないと思ふ。これをいつ迄も盛んならしめるには、協會が努めて力士の養成に力を盡し、又諸般の施設の改善に意を用ふ可きは申す迄も無いが、吾々フアンも協力して相撲道の隆昌に盡さなければならないと思ふ。

土俵は常に掃き淸められるが、客席はいつも不潔である。近頃は淸掃婦がゐて、飮食物の殘骸

をとりかたづけてゐるが、それでも絶間なく通路に捨てられる果物の皮、甘栗の殼、鼻紙、もろもろのきたない物が、歩行を困難にさせる位だ。芝居では、夙に客席の飲食を廢したが、相撲は相變らずだ。私は惜い時間を休憩にして、食堂へ客の足を運ばせる制度を、採用して貰はうとは思はない。今のまゝで結構だが、客がみづから顧みて、愼んで貰ひ度いのだ。飲みながら見なくては、相撲氣分が出ないとは、屢々角通を以て任じる人の口から聞く。しかし、土俵の上は眞劍なのだ。殊に相撲技の特徴は、僅に數秒の間に張切つた力の競合(せりあひ)と、千變萬化の體勢と、瞬間の註文と、これに伴ふ技術とが、迅速極まる動きをもつて行はれる所にあるので、盃を手にして陶然と眺めてゐるのでは、その眼も、判斷も追隨して行く事が出來ない。一所懸命に、襟を正して見てゐても、簡單な差手の左右をさへ、見誤まる事がある。それでは本當の相撲の味はわかる筈が無い。最もはげしいのになると、番數も取進み、愈々幕の内の好取組が見られようといふのに、大醉して首があがらず、鼾をかいて眠つてゐるやうなのもある。失禮とも無禮ともいひやうの無い馬鹿々々しさだ。飲むなら飲め、食ふなら食へ。しかし、土俵の上の取組を見る事を、第一義としなければならない。

力士は古來の正しき型を重んじ、禮儀を盡して土俵を踏むのに、客はあまりに勝手放題過(すぎ)る。

若し、客も禮儀を重んじて見るやうになつたら、場内の空氣は一層緊張し、土俵は一段と嚴肅になるであらう。とはいへ、私は棧敷からの聲援を排斥しようといふのでは無い。たゞ無闇に怒鳴つたり、他に迷惑を及ぼすやうな遣方を非難するのである。芝居の客が贔負役者の屋號を叫ぶのには、凡そきつかけがあり、かんどころがある。それでなければ效果は無いのだ。近年學生の應援團が、團體的聲援をするのを見るが、そのリイクアの芝居がゝりの態度には唾棄すべきものがあり、又學生にあるまじき作法をわきまへないものがある。たとへば、甲の峰の爲に應援するのが目的だとすると、その力士が支度部屋を出て花道にあらはれると、忽ちフレイ・フレイを浴せかけ、今や土俵では二三番前の取組で、丙の海と丁の山が眞劍に仕切つてゐるのにはいつさいお構ひなしだ。その爲に土俵の上の力士の立合の邪魔となる事が多く、結局おめあての甲の峰と乙の川の取組の前二三番の取組を汚辱し、又逆に一般觀衆の反感をそゝり、甲の峰を不人氣にする結果となる。聲援したいものは聲援しろ。しかし、あく迄も土俵の上の取組を見る事を第一義としなければならない。

相撲客道は、相撲を見る事を專一とすれば足る。別にむづかしい事は無い。その意味で、私は生ける手本を示し度い。それは某公爵の態度である。これこそは相撲客道の模範として差支ない。

世が世ならば将軍職に在るべき方だけあつて、あく迄も行儀よく、しかも平民的なくつろいだ心構もあり、一番と雖もおろそかにせず、土俵第一に見物してゐる。よほどの好きと見えて、午前中から入場し、鰻か親子か、丼を抱へて食事をすませ、時には、場内の粗末なライス・カレイを取寄せてゐる事もある。噓か本當か知らないが、私行上については、兎角助平の噂をきく事もあるけれど、相撲場に於る限りは、則天無私といふ姿に見える。たゞ、近年同伴する令孫であらうか、行末さぞかしと想はれる洋裝の令嬢が、棧敷に於て帽子をとらないのは、不贊成だ。他人の事を考へて、極めて小形のをえらんでゐることはわかるし、又洋式ならば、斯かる場合、着用してゐて差支ないに違ひないが、近年歐米に於ても、他人の迷惑を考へて、脫帽するならはしに傾いてゐるのだから、おつきの者が注意して、客道にもとらざるやう心がくべきである。ついでにいへば、正面土俵近くに、陸軍軍人の爲の特權席が設けてあるらしく、いつも少壯士官が並んでゐるが、軍隊のしきたりはいざしらず、他人の迷惑を考へたら、脫帽するのが當然であらう。

いひ度い事は澤山あるが、要之(えうするに)客は相撲を見せて貰ふ事に感謝し、同好の人々の爲に身を愼み、只管(ひたすら)相撲そのもの丶心髓を味ふべきである。それが相撲客道であらう。(昭和十一年十二月十三日)

——「相撲」昭和十二年一月號

「人生案内」まへがき

子供から大人になりかけの年ごろの人たちのために、面白くて有益な本をこしらへたいのだが、贊成してくれないかと、山本有三さんから申し込まれて、私は即座に贊成しました。贊成はしたけれど、この頃はいそがしくて、自分で書くひまが無いから、平生したしくつきあつてゐる若い文學者たちと相談し、その中の有志に書いてもらふ事にしました。私に與へられた題目は「人生案内」です。

われ／＼の住んでゐる世の中は非常に複雜だから、この本の讀者のやうな年少の人たちには、どういふ組織になつてゐるか、わかりにくいだらうと思ひます。けれども、諸君が大人になり、世の中の表面に立つて働く日もやがて來るのだから、世の中とはどんなものか、その世の中で働くには、どういふ準備をし、どういふ心がけが必要であるかを知つて置かなければいけません。

まづ最初に、諸君が生まれて育つ家について書いてもらひました。たくさんの家がより集まつて、世の中は出來あがつてゐるのですから。第一部「家庭」の執筆者富田正文さんは慶應義塾につとめ、福澤諭吉先生の傳記の編纂につくした人です。第二部は、世の中に出て働く前に、いろいろの事を學び、立派な人となる土臺をきづいて置かなければならないので「教育」としました。平松幹夫さんは安田商業學校の先生で且つ文學評論家です。第三部は「社會」で、これを讀めば、世の中とはどういふものか、大體わかると思ひます。原實さんは鐵道省につとめてゐる人ですが、社會評論家としても活動してをられます。第四部は「職業」で、誰しも大人になつてから、どういふ職業をえらばうかと迷ふものですが、これを讀んで置くと、正しい判斷をする事が出來るでせう。和木清三郎さんは三田文學といふ雜誌の編輯者で、野球批評家としても有名な人です。

「人生案内」は、複雜でわかりにくい世の中のことを説明するので、「日本少國民文庫」の中では、むづかしい方だらうと思ひます。しかし、出來るだけ面白くしてあるつもりです。おしまひまで讀み通してごらんなさい。讀んだゞけのことは必ずあると思ひます。

——「日本少國民文庫第六卷人生案内」昭和十二年二月十七日發行

前相撲見物記

多年本場所の相撲を見てゐるけれど、まだ前相撲の勝負を見た事が無い。凡當今の番附に名をつらねてゐる力士は、上は横綱大關から、下は序の口の最後のものまで、東西合せて三百數十人だが、此外中前相撲東西に御座候としるされてゐる。大望を抱いて此の道に飛込んだ若者が、將來の夢と目前の苦勞の相剋に、命を賭けて身心の鍛錬を競ふ姿は、是非とも見度いと思ひつゝ今日に及んだ。それは、相撲は前相撲が一番面白い、あれ程眞劍な土俵は幕の內の力士では見られないとは、かねて角通といはれる人の口から屢々聞かされた。

今年夏場所の三日目に、私はやうやく宿望を遂げた。何しろ、初日には四時半からはじめたといふし、二日目は六時だつたと聞いてゐた。平生私どもは、夜ふかしの朝寢である。その例を破つて、みんなに早く起きて貰ふ必要は無い。朝飯ならば、場所で間に合ふときめこみ、私は前の

晩、家人にむかつて、明朝玄關の戸があいてゐても泥棒と思ふなといひ渡し、若し早く目がさめたら出かける、寢坊したらやめるときめて、枕についた。

大體私は、明日の朝何時に起きようと思ひきめて寢れば、その時間きつかりに目のさめる質（たち）である。この日は五時ときめて、それより稍早く目がさめた。心の迷か、かすかに櫓太鼓が聞える。私はためらはずに、飛起きた。家のもの達が目をさまさないやうに、音を忍び、顏を洗ひ、衣服を着かへ、氣力をつける爲にウヰスキイをひつかけ、玄關の戸をあけて忍び出た。此の日天氣晴朗無風。清々しい初夏の朝空と、新緑が、爽かに輝いて動かない。時々崖下を通る電車のきしりの外には、何の雜音も無いので、大川を渡り、日本橋を越え、神田を越えて、櫓太鼓は九段の上まで、はつきり聞えて來る。昔は江戸中に響渡り、風の具合では海を越えて木更津迄も聞えたといはれるが、近年は市中の物音が多く、騷しく、それに妨げられて、遠方では聞えないのだが、今朝は早起の德で、力強く響く太鼓の音に胸を轟かせ、昔なつかしく思つた。

電車は空いてゐた。釣道具を持つ人が、幾組か乘つたが、大牛は私といつしよに國技館前で降りた。木戸前の茶屋は未だ支度が整はず、いつになく早い私の出現に、お早いぢやあございませんかと、驚いてゐた。時計を見ると六時だ。私は、少し羞しい氣もしながら、木戸札を貰つて入

場した。いつもは勤をしまひ、あかりのつく頃かけつけるのだから、館内いつぱい人で埋まる光景しか見てゐないのだが、此の朝の棧敷の紅い毛布は咲ほこる花のやうに輝かしく、その棧敷の客といへば、西側の力士溜を少しはづれた中段の所に、田舍風の婆さん二人の一組と、それより餘程上の段に、二人の男の子を連れたおやぢの一組がゐるばかりだつた。今日は六時半から勝負がはじまるといふので、それ迄に朝飯を食はうと思ひ、賣店に行つて見ると、すしやも天麩羅屋も西洋料理屋も、まだ支度さへしてゐない。たつた一軒おでん屋が、鍋から湯氣をたてゝゐるので、いきなり入つて椅子にかけたら、旦那まだですよと斷られた。やむを得ず棧敷に戻り、ぼんやりしてゐると、茶屋の若い者が來て、パンでも持つて來ませうかと心細い事をいふ。いらない、それよりも酒を一本持つて來てくれといふと、これは直さま埒があいた。今日は日が永う御座んすぜと、酒を持つて來た若い者は、冷かすやうに笑つて去つた。私は棧敷で酒を飲む事には反對で、勝負本位で他は一切かへりみないといふ持說だが、早朝からの見物だから、特に許して貰つて、盃を手にした。

六時半には柝が入つて、東西からぞろぞろ前相撲があらはれ、檢查役も東西に一人づゝ席を占

め、若い行司達も溜に控へた。行司の中には七歳か八歳の豆行司もまじつてゐた。待疲れた三、四階から拍手が湧き、忽ち聲援が降るのである。私の大嫌な學生應援團が、例の芝居がかりのリイダアの指揮にしたがつて、あさましいレヴュウを展開する。自分達の同窓の中途退學生が、この前相撲の中にゐるのであらう。

前相撲は無雜作にはじまつた。呼出は土俵に上らず、溜から力士名を呼上る。呼ばれた力士は互に德俵のところで丁と手を打つだけで、直ぐに突かけて行く。つゞけさまに二人に勝つて、勝星ひとつを貰ひ、三つ星を重ねてはじめて出世するのだと聞いてゐるが詳しい事は知らない。私の頭髪を刈にゆく理髪店の息子が、昨年玉錦の所に弟子入して、江戸錦と名告り、既に一月場所に初土俵を踏んでゐて、今度こそは新序にならうと努力してゐるので、そのおやぢから、新弟子のつらさは年中聞かされてゐる。江戸錦も、しばらくはバリカンを持つて家業の手助をしてゐたから、私も顔見知だ。柄が大きく、腕が太く、のつそりしてゐるので、大人だと思つてゐたら、今年やうやく十八歳だといふ。身長五尺八寸餘、體重二十一貫、親方はこれが可愛くてたまらないのだ。どうもづうたいが大き過て、うちの商賣には向きませんから、思ひ切つて相撲取にしてみましたが、さて物になれるかどうか、何しろ二番つゞけて勝たなくては星にならないつてんで

すから、番附に乘るだけでも大變ですよ、私の頭をいじりながら、樂みらしく、心配らしく話すのである。殊に、江戸錦が二所ヶ關部屋に入門して間もなく、埼玉縣から同じ部屋に、六尺四寸三十貫といふ大物がやつて來て、巖錦の名を貰つた事が、各新聞に寫眞入で出た時は、親方の我子を思ふおもひは愈々せつないやうだつた。あゝいふ大きい奴に出て來られてはかなひませんよと、羨しさうに云つてゐた。その江戸錦は中相撲だから、まだ出て來ない。

土俵の上では、年少の力士が突あひ押あひ、勝負を爭つてゐる。幕の內になつた時よりも、三役に入つた時よりも、はじめて番附に乘つた時が嬉しかつたと、力士達がいふやうに、此の第一の關門を突破する事に一生懸命なのは當前だ。だから土俵に眞劍味があふれるばかり現はれるかといふと、私は否と答へ度い。本人達はもとより眞劍に違ひ無い。しかし相撲技の未熟は、各々の勝負を隙だらけなものにして、緊張感を伴はない。突合つても、押合つても、組んで釣あひ、投あつても、體は土俵いつぱい動き廻つてゐるのだが、その變化には必然性が乏しく、土俵には空しく風の吹く隙間が多分に殘つてゐる。

これは僅に三十分で、勝つたのも負たのも入りまじつて引込むと、次は中相撲の連中で、流石に體も一廻大きく、中にはちひさい髷を結つてゐる者もある。新聞でお馴染の巖錦も、首から上

丈他の者を抜いて、のつそりと現れた。どういふわけか、巨大力士の肉色はどす黒いのが多いが、巖錦も此の例にもれず、肌の色は冴えてゐない。しかし體の釣合ひは申分なく、これが圓滿に發達したら、正に大力士に違ひ無い。

今度も、土俵中央で輕くしきる事だけはゆるされてゐるが、矢張二人抜で、無雜作な力鬪は瞬間に勝敗を分つのである。いつ來てゐたのか、病氣休場中の大男出羽ヶ嶽文二郎が、西の力士溜に近い棧敷に、杖といつしよに兩脚を投出して觀戰してゐるのを發見した。

突然、豆行司のきんきん聲で、さしかへまして江戸錦と叫ぶのを聞いた。それ迄、探してもわからなかつた我が江戸錦は、同輩の肉體をかきわけて登場した。ちひさいちよん髷を頂き、理髪店でバリカンを手にしてゐた時は大男だと思つたが、この晴の土俵に上ると、體は細く、こどもらしく見えるのであつた。それでも、勝ほこる相手と突あひ、突勝ち、更に新手が出て來ると、一氣に押切つて勝名告をうけた。あゝ、おやぢに知らせてやり度いと思つた。巖錦はさかんな聲援を浴びて土俵に上つたが、立あひがまづく、小兵の相手に下から押されて、踏止まる術もなく、押切られてしまつた。圖抜けて體の大きいものは、體全體に力をみなぎらせる事が、小兵のものよりもむづかしいので、人一倍の稽古を積まなければ完成しにくい。腕力と體重だけでは行かた

いところに相撲の技術がある。私は大力士の完成したものゝ出現を切に希望してゐるので、巖錦の如き偉材が、十分の錬磨を經て大成する事を祈るのである。

最近相撲道の隆盛につれて、體格力量に自信のある若者が、實力次第でその道の第一人者になれる相撲を志し、進んで志願する者の數は激增したときく。社會の他の方面の立志は、いかに勉勵努力しても、萬人の目の前にその實力を示す事はむづかしく、段階の細かい順序があり、情實があり、とんとん拍子に出世する事は思ひも及ばない。それよりも、無資本で、貧富敎育の有無を問はず、自分の力づくで、勝てば出世するこの道に志を立てる者の殖えたのは無理も無い。昔の志願者と違つて、さういふ事の一切を考慮に入れた上で、門を叩く者もすくなくないに違ひ無い。だが、玉錦や双葉山は萬人の一人であつて、幕の内となり十兩となる者さへ、千人の一人と覺悟しなければならない。その上、いかに體格に惠まれ、力量と技術と並びすぐれても、病氣と怪我といふ大敵が、中途挫折の悲劇を突發させる。病氣と怪我は、他の道に於ても同じ不幸を伴ふ事はいふ迄もないが、肉體專一の相撲に於ける程致命的な結果をもたらす事は無い。大關横綱の期待をかけられながら、病氣や怪我の爲に頓挫した者はすくなくない。現に西の棧敷で觀戰してゐる巨人出羽ヶ嶽は、當代隨一の大男で、未だ年若くして關脇の榮位にのぼり、その強力は相手

方の力士を畏怖せしめたが、不幸難病にとりつかれ、最近は土俵をつとめる事も叶はず、二段目のどん尻に僅にその名を止めるに過ぎない。彼は、土俵の上の間の抜けた勝負を見て、時々大口を開いて笑つてゐたが、その笑さへいたましく見えた。

或は横綱武藏山が、沖つ海との一戰に腕を挫折し、爾來突張も上手投も十分の威力を發揮し得ず、今や將來の出場さへ疑はれる有樣となり、又強力無雙の高登が、脚部の負傷の爲、夙にのぼるべき大關の地位には、殆んど緣もなくなつたやうな姿になり果てた事など、實力次第でどうでもなり、情實も斟酌も無い相撲道の明るさが、逆に作用して、人生の悲慘事をまざまざと見せつけてゐるのである。その他此の種の例を數へればいくらでもあるが、かゝる不幸の運命が、常に土俵の上に伴ふつらさは、吾々觀客をして屢々沈鬱の念に堪へざらしめる。

私は中前相撲の勝負を見て、相撲の面白さは感じなかつた。屢々角通の口にする、幕下の若い元氣のいゝ力士の取組が本當に面白いのだとか、前相撲こそ眞劍味があつて面白いのだとかいふ言葉は噓である。相撲は斷然上位の力士の取組が面白いのだ。たゞ、下の方の相撲を見て興味を感じるのは、將來どんな大物が出るかといふ期待だけである。

それにも拘らず、私は前相撲の勝負を見てゐると、一組さへ見落す事の出來ない心持になり、

一度も席を立つ事が出來なかつた。はからずも、私は同人文學雜誌の事を想ひ起した。私は文壇組合には加入してゐない素人作者で、しかも一生涯の內には上れない程度のものである。しかし文學は面白くて堪らない。私の手許に送られて來る多數の同人雜誌を、私は殆んどみんな讀む。同人雜誌必ずしも無名新人の書いたものばかりで埋められてゐるとは限らないが、大多數は無名の人と見て間違ひない。編輯後記や、その人達が他人の作品を批評した文章を讀むと、いづれも自分の才能を高く評價してゐるものゝ如く、既成有名作家の商業主義を罵り、無氣力を嘲笑し、古さを唾棄し、自分達の眞劍な心構を高唱してゐる。しかし、その制作の大槪は、新鮮でもなく、眞劍味も感じさせない。私は、文學に於ても、鍊磨の效を積まなければならないのではないかと思ふ。小學校や中學校で、同級生を投飛ばしてゐた若者が、本職をこゝろざし、前相撲を取つてみて、隙だらけのへまをやるのと同じ事が、こゝにも見出されるやうに思ふのである。全くつまらない作品を、月々數十或は百數十讀む事二十餘年に及ぶ。どうしてそんな馬鹿々々しい事に貴重な時間を費すのかと忠告してくれる人もある。自分でも、それ丈の時間を、もつと良書に費すべきだと常に考へるのだが、又一方には讀まないでは濟まない氣持がある。その心持を解剖してみる事もある。慾張の心のあらはれかとも思ふ。吝嗇のあらはれだとも思ふ。瓦の中に玉の埋も

れるのを惜む心もあるにはある。前相撲の中から、將來の大關横綱を見出すと同じ興味もある、しかし、結局は文學が好きなので、つまらないといひつゝ、矢張本心は面白いのではないかと思ふ。前相撲の稚拙な勝負を見て、あゝすれば勝つ、かうすればきまると批判しつゝ、その批判を許す隙間に不滿を感じながら、同時にこれを樂むのと同じではないか。どこが拙いかを發見する事は、完成を望む第一步である。私は、つまらないと思ひながら、一番の勝負さへおろそかに見逃せなかつた自分を尤もだと思ふ事が出來た。

約一時間を費して中相撲は終り、八時から序の口の取組になつた。四階三階二階の順に滿員となり、いつか出羽ヶ嶽の姿も見えなくなり、四方の棧敷も見てゐるうちに人で埋まり、土俵は一番々々と緊張して來た。だが、私は平生と違つて、此の日は終日重苦しく、鬱陶しい心持を消す事が出來なかつた。人生の一方ならぬ苦勞を、あまりにはつきりと目の前に見せられた心の重荷が、容易に轉向出來ない爲だつた。今日見た番附外の相撲取の中には、遂に番附に名前は乘らずじまひで、落伍してしまふ者もあるであらう。それよりは稍よくて、番附に乘るには乘つても、その後の進境遲々として、下積に終る者もあるであらう。この方が一層中途半端で、不幸の度はいやまさるものかもしれない。或は拔群の成績で將來を期待され、とんとん拍子に進む者もある

であらう。しかし其の優秀の者と雖も、病氣か怪我で中途に志を碎かれる不運に遭遇するかもしれない。私は同人雜誌の上で馴染の深くなつた若い作家のみんながみんな、芥川賞を貰へばいゝと念じるのと同じく、今日見た若い力士達が、いづれも揃つて息災で、出世する事を祈るのであつた。

午後になつて、子供を連れてやつて來た妻は、前相撲つて面白ござんすかと、自分も一度は見度い顏附で訊いたが、私は頗る不機嫌に答へた。つまらない、二度とは見ないつもりだ。人生五十の坂に辿りついて、早くも身心疲れ果て、再び生れ變つて來る事はまつぴら御免だと思ふ私には、斯う答へる外にみちが無かつた。（昭和十二年七月一日）

――「三田文學」昭和十二年八月號

曾禰先生追憶

三田の學窓に在つた頃の事、塾長鎌田榮吉先生は吾々を一堂に集め、この度先輩有志の寄附によつて圖書館を建てることになつたが、その設計は人格最も高く、一世の師表と仰がれる人をえらび、曾禰達藏先生に御願ひすることに決したと報告した後で、ひとり建築に限らず、凡そ人間の仕事は、これに携はるものゝ精神をおのづから表現するものであるから、先づ第一に修養に心がけよといふ訓話をされた。後年明治生命保險株式會社に入社し、會社の建築顧問たる曾禰先生に親しく接し、並びなき人格に學ぶ事の多かつたのは、私の一生のしあはせであつた。

父が晩年の休息所として建てた芝白金三光町の家は、明治時代中流家庭の住宅の一樣式で、玄關と應接室だけが洋風で、これは曾禰先生の設計によるものであつた。玄關の扉の外に、ポオチ

風の場所があり、これが供待に利用されるやうに、腰かけがとりつけてあつた。父の死後、何事も實用本位で、形式を尊ばない母は、玄關が西北向で風が寒いといふ理由で、ポオチの前面に更に扉をつけて、風を防ぎ度いといひ出した。著しく美觀を傷つける此の申出に私は反對し、設計者の曾禰先生に對しても、そんな亂暴な申出は差しくて出來ないと拒んだが、母は一切無頓着で、大工を呼んで決行するといふ。止むを得ず曾禰先生をおたづねし、斯ういふ次第で困つて居りますと申述べたところ、先生はしばらく考へて居られたが、まあ御年寄のいふ通りにした方がよからうとおつしやつて、早速母の希望の儘に改造して下さつた。專門家としてはまことになさけない事だつたに違ひ無いが、年寄の望む事なら、善惡にかゝはらず、きいてやつた方がいゝではないかと云ふ思召だつたと推察する。母は先年腦溢血で倒れ、爾來病牀を離れる事の出來ないからだになつたが、私は見舞に行く度に、扉をあけてポオチに入る不思議な樣式を羞しく思ひつゝ、先生の溫い御心持を懷しく感じるのである。

明治二十八年、馬場先門角に建つた明治生命の石造スレエト葺の社屋は、コンドル曾禰兩先生の合作と聞く。明治年間の洋風建築中最も美しいもの丶ひとつであつた。私はその社内で働く事

を幸ひとした。或時、曾禰先生にむかつて、不燃質の物を構成材料とする洋風建築こそ、あらゆる美術の中で一番永く世に殘るものではないだらうかと、羨望の念を披瀝した事がある。勿論、明治生命の社屋の如き美しいものを造られた先生の御仕事を祝福するつもりであつた。ところが、先生は極めて寂しさうに、日本の如く進歩の激しい國では、洋風建築の壽命もはかないものだらうといはれた。その後數年ならずして、明治生命はその美しい建築を爆破して、幾層倍の新館を建てなければならない程發展してしまつた。誰にも未練はあつたが、事態は止むを得ないのであつた。愈々舊館の取毀される日の來た時、私は現場に於て、自己の生命を打込んだ建築の最後の姿を眺めて居られる先生の感慨に想到して胸が迫つた。恐らく先生は、この日の來ることを豫想して居られたであらう。しかし、御自身の生涯に、早くもこの事が起らうとは考へておらつしやらなかつたのでは無いだらうか。濛々たる砂塵をあげて破壞されてゆく景色の中に、先生の雙眼の涙を見たものは私だけであらうか。

明治生命は堅實を旨とする會社である。一時しのぎや間に合せを許さない氣風が強い。建築の事にしても、本店はいふ迄もなく、各地支店いづれも其の土地の一流の場所に一流のものを建て

た。什器の如きも數十年使用して少しも狂ひの來ないものが多い。或は之を評して馬鹿だともいひ得る。日進月歩の世の中では、間に合せ物で一時をしのぎ、次々と新式のものに取換へてゆくのが利口だともいへるであらう。しかし、それは明治生命の精神が許さない。私は此の精神を、會禰先生の精神と一致するもの丶やうに思ふ。會社の建築物の修繕工事、或は物置小屋とか、板塀とか、あまりたいしたものでないもの丶築造について、私の如きは屢々けちな根性を出し、間に合せで行き度いと申立てたが、先生は決して同意されなかつた。從て大概の場合、會社の係の者が內々たて丶ゐた豫算よりも、遥かに高くなるのがおきまりだつた。此の點については、明治生命館の建築を成し遂げた當時の取締役會長武市利美氏も、完全に會禰先生と精神を一にした。兩先輩の協議の席に列し、名優の顏合せ、稀代の横綱の對戰を見るおもひで、私は幸福感でいつぱいだつた。

先生は、自分には何の道樂も趣味も無いといはれたが、私は上野の繪畫展覽會場で屢々先生を御見受けした。近代洋畫の一傾向であるデフオメエションは、如何なる理由で發生し、如何なる意義を有するものかと、御質問をうけた事もあつた。先生は勿論此の傾向を好まれなかつた。た

しか明治の巨匠の遺作展覽會の時だつたと思ふが、川村清雄畫伯の神代杉の木目をその儘見せた板に、油繪の具で描いた花鳥や、滿山の紅葉の中にかゝる瀑布の圖などを激稱して居られた。洋風建築の大家が、日本畫に近い油繪に心を寄せられるのは意外といへば意外だが、先生の御育ちになつた時代と環境を考へると、それがあたりまへにも思はれる。歪曲派を好まれない事なども、同じ精神に出るものであらう。(昭和十三年一月二十一日)

――「三田文學」昭和十三年八月號

嫁入支度

友人の娘の縁談に一役買ひ、仲人をうけたまはる事になつた。友人は上方に住んでゐるので、便宜上お嫁さんの御道具は前以てお婿さんの家に送り、お嫁さんは式の日が迫つてから、兩親に伴はれて上京して來た。自然、仲人の妻として、愚妻は嫁入道具の檢分にかゝりあつたり、きつけの事や、結髮の心配迄させられてゐた。お婿さんは未だ若い勤人だし、お嫁さんの父親即ち私の友人も、澤山の子供を抱へてゐる眞正直な月給取だし、且又日支事變の最中の事とて、諸事手輕にやらうといふ申合せだつた。にもかゝはらず、最愛の、殊に總領娘といふので、親心はおもひつのり、簞笥鏡臺その他の諸道具、無理をするなよといひ度い位、はりこんだものであつた。その諸道具がお婿さんの家に滯無く納まり、送狀と實物といちいちてらし合せて來た愚妻は、あの用簞笥はとてもよかつたとか、あの衣桁も、亂箱もほんとにいゝ好みだつたとか、簞笥にいつ

ぱいつまつてゐた衣類もなみなみならぬものだつたとか、その昔自分が嫁に來た時の質素貧弱な支度と想ひ比べて、女心のあさましさから、いかにも羨しさうに報告するのであつた。豫而（かねて）私は、衣裳や道具や披露宴などに贅澤をするのはよせ、それよりも、そんな餘分の金があるなら娘に持たせてやるがいゝと云つてゐたので、なんだい、ふだんは金が無い、貧乏だと愚痴ばかりいひながら、負惜みかのぼせたのか、無用な眞似をするぢやあないかと、大に罵つたものである。だつて、はじめての事ですもの、出來るだけの事はなさり度いでしよと、愚妻は、それが世間のあたりまへだといふやうな口ぶりでかばふのだつた。

　式も披露も目出度濟み、仲人は重荷を下し、ほろ醉ひ機嫌で、宵のうちに歸つて來た。寢るには早し、腹も張つてゐるし、だらしなくひつくりかへり、そこらに積みたまつてゐる雜誌の中から、出まかせに引出したのが、「文藝」（昭和十二年十一月號）だつた。巻頭の小說宮本百合子女史作「道づれ」を讀む。これは長篇の一節で、前の方は何時頃讀んだのか忘れてしまひ、これ丈では三枚つゞきの錦繪をばらばらに見るやうな本意なさだ。しかも此の雜誌に載つてゐるところ丈でも、幾場面かあり澤山の違ふ人物が出て來て、夫々直接の脈絡が無いのだから、讀んでゐても油がのらず、氣乘がしない。やめようかなと思ひながら、惰性で頁をあけてゆくと、突然私と私の

作品が引合ひに出て來たので、吃驚した。全く思ひもかけず、あんまり意外なので、往來の眞中で兩方から自動車が迫つて來た時のやうな、足のすくむ氣持が胸を打つた。便利の爲にその部分を拔く。

みほ子の心に、けふの最後の客であつた庇髮の女の顏が浮んだ。そして、いろんな想像や聯想から、「大阪の宿」といふ小説のことを思ひ出した。その小説を書いた人の親の家が有名で、店の顧客だといふやうなことから、誰かゞ隨分古くかゝれてゐるその本を持つて來た。その小説の作者は、三田といふ人物の感想として、令孃といはれる階級の若い女たちが、すつかり親に庇護され、自分自身には何の力もないくせに、いやにつんとすましてゐるのがいやだ、なかみのない氣位がいやだ、といふことを力說してゐた。それかと云つて先祖代々贅澤をしあきて來たやうな顏をしてゐる藝者も、どこが粹なのか、すつきりしてゐるのかわからないと、歯ぎれのよい文章でかゝれてゐた。主人公の三田といふ男が、勤めの往復でいつも逢ふ一人の型にはまつてゐない愼ましい職業婦人に對して深い好意を感じるにつれて、其らのことが描かれてゐるのであつた。

みほ子は、店の性質上、貴夫人、令孃と云はれる部類の人々を多く見てゐる。それだけに、

云はれて居ることがぴつたり來た。一層社會の廣い範圍が自分たちの生活を正當に評價しはじめたやうな微かな賴もしさがあつた。

その後、その小說の作家が結婚して、相手の娘さんといふのは、嫁入支度は帶だけ何十本とか持つて來たさうだといふやうなことが噂にのぼつた。何でも或る俄雨のとき、その令孃が頭から濡れながら、格別身裝をいとはふともせず步いてゆくのを見て、その樣子に心をひかれたといふことであつた。

男としてさういふ女を面白く思つたといふ點もみほ子にはわかる心持がした。が、それにしろ、帶だけ何十本も持つて來るやうなひとにとつて、車にものらず往來する程度の着物ぐらゐが、何ほどのことであらう。びしよ濡れになつてみることも、時にとつての若々しい一興であつたらう。小さな見榮や氣位なんかに煩はされるに及ばない程巨大に庇護されてゐる娘のおほやうさにひかれて妻にする心、つゝましやかな働く娘にひかれてゆく心。どちらもこの人にしてみれば女に對して自分が選ぶ自由をもつた上での好みである。折かへした形であらはれてゐる上流人らしい傲慢さを感じて、みほ子は、自分の中に反撥するものがあり、店のほかの連中と一緒に興味本位でそのお喋りに入つてゆけなかつた。

こゝ迄讀んで、私は一時に醉がさめた。五・一五事件、二・二六事件以來、私の心は物事に脅えやすくなつてゐる。〔六十二字略〕赤の闘士宮本女史は、時世の非なるにかんがみて、しばらく正攻法に出る能はず、髀肉の歎に堪へざるまゝ、僅かに筆を構へてプテイ・ブルの攻撃をこゝろざし、しらみつぶしに人身攻撃をはじめたのであらうか。いつたい、右の一節が、此の小説の中で、みほ子といふ百貨店に勤務する女の頭に浮んで來る必然性があるのか、繰返して讀んでもわからなかつた。

「大阪の宿」は大正の末頃に書いた小説だ。主人公三田をかりて、貴婦人令孃藝者といふやうな、おもひ上りがちな、型にはまつた女を好まないといはせてゐるが、これは全く作者自身の感懷に相違無い。今でも私は、貴婦人令孃趣味を持つてゐない。あんまりこしらへ過ぎた粉飾の女を見ると、吐氣を催す。だから、私は銀ぶらを好まず、避暑地の渚を好まず、結婚披露宴を好まず、劇場内の空氣を好まず、愛國婦人會を好まない。それよりも、銀行會社百貨店などに働く娘さんの方が潑剌としてゐて美しいと思ふ。このおもひは「大阪の宿」を書いた時代と少しも變らない。

そんならお前は、何故帶だけでも何十本といふ嫁入支度の娘を女房にしたのかと、宮本女史はいふであらう。これが、何處から出て來たひがみなのか、私には全然見當がつかない。家内はそ

んな御大層な家の娘では無い。長い間の下宿生活で、あやふく婚期を失ひさうになつた私の爲に、母方の親戚から來てくれた平凡な月給取の娘に過ぎ無い。往來で俄雨に濡れて行くのを見初めたといふやうな、おあつらへ向の筋合ひでは無い。私の記憶では、簞笥がひとつ、鏡臺がひとつ、その外何を持つて來たのか、或は何も持つて來なかつたのではないかと思ふ。令孃崩れの宮本女史は、中流家庭の子女の結婚披露といふものが、どの程度のものか御存じであらうが、私共は雨家の親戚の外には、二三私の勤先の上役を招いた丈で、友達を呼ぶ事も出來なかつた。帶だけ何十本といふ支度の嫁入とは、凡縁遠いものであつた。

俄雨に濡れてゆく娘を見初めて妻に迎へる一段は、實は拙作「虫の命」の中に出て來る場面なのだ。

或日散歩の歸りに、何時の間にか曇つた空が、灯ともし頃に雨になつた。彼は電車に急いでゐた。ある橋の際だつたが、雨具の用意の無い人があわてゝかけ出して行くのに、盲目の乞食が、橋の上に佇んだまゝ濡れてゐた。濡れるのを怖れて馳出す人の誰が振向くものか。それでも乞食は皺だらけの掌を差延ばして待つてゐた。幾何(いくら)かやらうかなと思ひながら、自分丈が進んで動くのを氣がとがめるやうな躊躇があつた。ふと、彼の前を、何時から同じ方

向を歩いてゐたのか、矢張り濡れて行く娘があつた。裾を端折つたり、足袋を脱いだり、肩に手拭をかけたりする女とは違つて、草履なのに、観念した風でおちついて濡れてゐた。橋の上を五六間行過ぎたが、戻つて來て、帯の間から錢入を出すと、いくらかを乞食の掌に置いた。彼はその間に後から追越したが、雨にも頓着しないで、わざわざ戻つて來た娘の姿が心に殘つた。

この小說の主人公は、やがてその娘と結婚するのであるが、愚妻は前述の通り、母の里の分家の娘で、はなを垂らしてゐる頃から知つてゐるので、殘念ながら些かも小說的場面を持つ事は出來なかつた。殊にをかしいのは、「大阪の宿」の主人公は、その後雨の日に見初めた娘と結婚したとあるが、小說「虫の命」は大正十年の作で「大阪の宿」よりも數年早く世に出てゐるのである。

そんな事實には頓着なく、潔癖なる赤の女鬪士は、町娘に心を寄せるが如き言說をなす作者が、帯だけ何十本といふ嫁を迎へたといふ誣告を以て世人に問ひ「車にも乘らず往來する程度の着物ぐらゐが何ほどのことであらう、びしよ濡れになつてみることも、時にとつての若々しい一興であらう」と、執念深く、あくどく、意地悪く邪推を働かせてゐる。事實無根は別として、車にも乘らず往來する程度の着物なら濡れたつて平氣ではないかといふところは、宮本女史と雖も流石に

女で、細かい氣のつかひ方をしてゐて面白いが、御氣の毒ながら「虫の命」の雨に濡れてゆく娘は、金持の子ではなく、貧しい家の娘なのである。

おもふに宮本女史は「大阪の宿」は讀んでゐるらしいが「虫の命」の方は讀んでゐないらしい。讀んでゐればそんな間違はしない筈だ。してみると、女史の小説「道づれ」の中に出て來る百貨店の娘には實在のモデルがあり、その人から「大阪の宿」の作者は職業婦人が好きだといひながら、帯だけ何十本の娘と結婚したといふ噂をきかされたものであらうか。兎角世間の人は小説といふと、實際の事、殊に作者自身の事を書くのだと考へ易い傾向がある。それで、誰かゞ「大阪の宿」と「虫の命」をあはせ讀み、勝手に作者の身の上にひつかけてでつちあげた書かれざる小説が完成し、これがたまたまブル攻撃の材料のはしくれに使用されるといふ不思議な運命を孕んだのであらう。執念深い、意地惡く、虛構の事を以て人を誣る女史の惡意か輕率に不快のおもひをさせられたが、又一面には、たとへ十數年前の事にしても、百貨店の娘さん達が、私の作品を讀み、作者の噂をしてゐたといふだけでも、私の如きはなやかならぬ作家にとつては、嬉しいたよりに違ひ無い。畜生、をしい事をしたなあと、私は半白の頭に手をやつて、むざむざ過した青春を歎いた。

「おい、面白い小説があるぜ、讀んでごらん。」

禮服をあらためて來た愚妻の方に、雜誌を押してやつた。平生、そんなものは手にもとらず、亭主の書くものさへ讀まうともしないのだから、氣乘のしない樣子で受取つたが、讀んでゐるうちに緊張して來て、

「馬鹿にしてるわねえ、帶が何十本だなんて。」

身に覺えの無い事なので、大に憤慨し、勿論宮本女史がどんなに偉いか、どんなに赤いか、どんなに肥つてゐるかも知らないので、何故にかゝる無實の罪を着なければならないのか思ひあたらないし、辯明の爲方もしらず、苦情の持つて行き所もなし、やりきれなさとじれつたさで、泣面にさへなりかねなかつた。今日のお嫁さんの支度が、自分の嫁入の時に比べて行屆き、立派な事をひそかに羨み、自分の時ももう少しどうにかして貰へなかつたものかと口惜がつてゐる口ぶりだつたから、平凡なる女氣の、恰も嘲弄されたもの丶如くにうけとつたものである。

「いゝぢやあないか、かういふ有名な女史の書くものだから、宣傳力は十分あるよ。俄雨に濡れてゆく姿を見初めたなんて世間の人に思はれるのも、枯木に花だぜ」

自分よりもむきになつて怒つてゐる家内を見ると、心にゆとりが出來て、無責任に笑ふ氣分も湧いて來た。

「いつたい宮本さんてどんな人なんです。知つてる方ですか。」

「知らないがね、兎に角偉いんだ。」

私も實際此の赤の信念あつき女丈夫について多くを知らない。女史が未だ中條博士の愛孃としてブルの生活をしてゐる頃、どこかの劇場の廊下で、あれが年少にして彗星的に文壇にあらはれた天才少女だと、人から指さし教へられた事はある。靑んぶくれの、發育不全らしい姿だつた。その後亞米利加に行き、ひどく年の違ふ男と戀愛結婚をし、歸朝し、離別し、同性愛の噂がたち、いつの間にか發育し過ぎ、血色迄も赤くなり、同志の男といつしよになり、度々引張られ、なぐられてもすかされても信念をかへないといふやうなあらましは承知してゐる。實はその信念の強さには、ひそかに感心もしてゐるのだ。昨日迄は極端な左だつたのが、時世を見る事のすばやさから、忽に今日は右に走り、よそめには、何でもいゝからリイダアシツプを取らうとするものゝ如く見えるのより、操守堅固な方が偉いやうに思はれる。といふと、此の頃の物騷な世の中では、何處からか有志があらはれ、赤の非轉向者を偉いなどゝは怪しからんときめつけられさうだが、決して赤の禮讃では無い。惡に強きは善にも強くといふやうに、一途に堅き鐵石心は、やがて大和心にも通ふところがあらうかと思ふと、輕佻浮薄の徒よりも、いつかは御國の爲に盡す事もあ

るであらうと考へられるのである。

それ程の女史にして、何故明かに私共の名をあげて、根無し事を誣るのか。ブル攻撃が赤の文學の一つの動向であつて、その目的の爲には多くの人の憎しみを買ふやうにしむけ、しらみつぶしにやつつけようといふ策戰なのか、或は赤銅の鬪士も時に昔のブル生活の夢を見、親のゆるした結婚をしてゐたら、自分も帶十數本のお嫁さんだつたのだと思ふと、帶何十本といふ噂を聞く丈でも女心の妬ましさが默つてゐるにゐられなくなるのであらうか。まさかとは思ひながら、若しさうならば、偉さとは別に、世間並の女らしさに笑はまほしく思はれるのである。(昭和十三年七月一日)

――「三田文學」昭和十三年八月號

素人談義

彦山光三氏は、相撲學者として、相撲批評家として、絶對に他の追隨を許さない最高峰にゐる。相撲の正道を論じて其の品位を高め、相撲の正しき觀方を說いて觀客の認識を改めさせ、活字引として、指導者として、相撲道に盡すこと多年、私共素人に教へる所亦極めて懇切、常に質疑し、學ぶこと頗る多いのである。

氏の近著「土俵場規範」も必讀の書であるが、その補成篇中に「相撲の觀どころ」といふ一文がある。慶應義塾文學部教授にして庭球部長の肩書を持つ井汲清治氏に、相撲を觀る勘どころを約言指示してくれと求められ、直感的にはこれを把握してゐることはいふまでも無いのだが、概念構成不十分の爲に、適當なる表現に迷ひ、卽答に苦み、翌日に至つてやうやく解答のまとまつた經過を書いた興味深い文章である。

「相撲は、兩力士の足と、土俵ぎはを觀ることが、第一の勘どころです。倒れた場合は文句はない。土俵の外へ、たとへ、足を一分でも、そして、一秒の何分の一かでも先へ出せば、出した方が敗です。これを觀わけるのが、相撲觀技のアルフアであり、オメガでもあります。ですから、行司はいふまでもなく、檢査役でも、足ばかりを、土俵ぎはばかりを注視してをります。」

この解答に井汲氏は滿足し、「よくわかりました。」と明快に感謝し、水上瀧太郎も亦贊意を表したと書いてある。確に私も贊意を表した記憶はある。しかし、贊意を表しながら、心の底では、それでは未だ不十分だと思ひ、しかも適切なる表現の用意が無かつた爲め、何が不十分なのか即座には說明の出來ないもどかしさに惱んだことも記憶してゐる。恰もそれは、彥山氏が最初井汲氏の質問に卽答し兼た時の心持に似たものであつたらう。

その時私は、井汲氏が彥山氏の解答で本當に納得したかどうか、些か疑はしいと思つた。多分、あまりしつこく聞くのは禮にかなはずと感じたか、又はかりそめの質問に、旣に興味を失つてゐたかで、輕く切上(あげ)たのでは無いかと思つた。今になつて考へてみても、井汲氏の質問は、相撲を觀るのには、どこに重點を置き、どういふところに中心興味を感ずべきかといふのであつて、勝負の決定はいかにして見きはめるべきかといふのでは無かつたやうである。果してさうとすれば、

彦山氏が足を見ろといふのは、行司や検査役の心構へとしてはいゝが、少しく質問の的をそれた答のやうに思はれる。私は寧ろ「相撲を觀る勘どころは、力の競合(せりあひ)を見るところにある。」と答へたい。こゝに力といふのは、腕力のことをいふのではなく、廣い意味の力で、卽ち相撲技をさすこと勿論である。或は兩力士の體勢の刻々の變化を見ろと云つてもいゝやうである。今更いふ迄もなく、相撲は一人ではとれない。二人のものが勝負を決するのであるから、攻勢と守勢とにわかれるのが當前である。假に土俵上の兩力士が仕切つてゐる時を五對五の對等の力と定め、それが何時均衡を失するかは先づ第一の觀どころである。一氣に押出すとか、突出すとかいふ一方的勝負は、多く立上(たちあがり)の一瞬に力の均衡が破れたので、觀てゐて甚だあつけない。それが大相撲の場合だと、たとへばもろ聲で立上つて突合ひ、雙方土俵を讓らず、共に體勢の崩れない一瞬間の後に、一方が突勝つたとする、そこにはじめて力の競合に破綻が生じ、七對三の力となり、勝負のわかれめのひとつの機會が發生する。だが、次の瞬間に、突負てゐた方が相手を巧にいなした場合、今度は逆に三對七となり得る。攻守位置をかへるのである。それが土俵の中央で、ばつたり四(よつ)に組み、互の體勢がいづれをまさり、いづれを劣るとしない時は、再び五對五の力に戻つたものとみる。斯ういふ力の競合の變化を觀るのが勘どころでは無いだらうか。足をみろといふので

は、あまりに狹い。卽ち勝負の決定に至る迄の分秒の經過の中に、力の對比、體勢の優劣を觀るのが、相撲を觀る勘どころではないだらうか。

相撲季節の眞最中、或宴會の席で、相撲好と稱する酌人達が、客に對するサアヴイスはそつちのけにして、某關は親孝行だから勝たせたいとか、誰さんはおかみさんにのろいから負るのだとか、あの人はいい男ぶつてゐるから嫌ひだとか、お座敷へ來ても愛嬌が無いからいけないとか、負てもにつこり笑つて花道を引上てゆくところがふるひつき度いやうだとか、さかんに喋つてゐたが、いつたい貴方は誰が御贔負なんですかと、私に訊いた。別段贔負といふのは無いと答へたところ、贔負がなくて何が面白いんでせうと、仲間同志互に顔を見合せて不審がつた。私は得意になつて、贔負なんかなくても、力の競合を觀るところに面白味があるのだと二三の大勝負の例まで引いて說明したが、姐さん達は一向感心せず、一言のもとにかたづけてしまつた。

「つまんないわねえ、そんな人情の無い觀かた。」

私は完全に叩込まれた形で、こゝにも別の觀かたがあると思つた。(昭和十三年十二月十八日)

——相撲 昭和十四年一月號

ものゝふのみち

夏の長旅に疲れた體を任せた船には、戰地から歸還する軍人も多勢(おほぜい)乘つてゐた。支那の某地方から、日本へ御挨拶に行くといふ親善使節の一行も居た。軍人達はさかんにデッキ・ゴルフをし、私は終日椅子に寢てぼんやりしてゐたが、その甲板を手を組んで歩き廻る異人夫婦が人目を引いた。女の方が年上に見え、長身肥大頗るつきの醜婦で、亭主は去勢されたやうな猫背の柔和な男で、それがぴつたり體をくつつけ、足並を揃へ、幾度も甲板を往復した。この夫婦には三人の子供があり、姉は八歳位、弟は六歳位、妹は四歳位で、末の子は足に繃帶をして跛を引いてゐた。夫婦はお國ぶりか、濃厚な情愛を遠慮なく見せつけ、散歩が濟んだと思ふと、ひとつの椅子に二人で腰かけ、互に肩へ手を廻した姿勢でうつとりし、我が國の良風美俗に反し、一向子供達には構はなかつた。親が相手になつてくれないので、おのづから自主獨立の風を養ふのか、子供達は

いぢけず、はにかまず、大人の間に立ちまじり、舳から艫まで我家のやうに馳廻つた。

たしか航海二日目の事であつた。私は相變らず寢椅子に伸びて日光を浴び、海氣を吸つてゐた。例の異人夫婦は規則正しい步調で散步してゐたが、いつか亭主の方は見えなくなり、女房の方は私の隣の空椅子に來て、毛絲の編物をはじめた。間もなく、三等船室の客達がぞろぞろ上つて來て、物珍しさうに步いてゐたが、異人の女の姿に興味を寄せて、遠巻にして眺めてゐた。その中から、浴衣に細紐をしめたゞけのおかみさんが、編物の手ぶりを見るためか、近々と異人の後に來て、のぞき込んだ。あんまり近くにひつついて來たので、異人の女もおつかない顏に微笑を浮べて振仰いだ。

「奥さん、何處へ行くの、東京？」

異人と口をきいて見たくて堪らないといふ樣子だつた。

「東京でない。わたし生れた國に歸ります。」

「奥さんのお國、亞米利加？」

おかみさんは、異人が日本語を解し、十分話の出來るのに滿足し、遠巻にしてゐる連中の方に、得意らしい風を示した。

「亞米利加でない。英吉利です。わたし英吉利人。」

異人の女は突然興奮の色を見せ、反抗するものゝやうに毅然として答へた。おかみさんは何の氣もつかず、益々へだてのない態度で、

「旦那さんもお子さんもみんないつしよに歸るの。」

「いゝえ、旦那さん歸らない。旦那さんおつとめある。歸れない。わたし、子供歸ります。旦那さん神戸まで送つて行く。」

聲は震へを帯び、調子は高くなつたが、おかみさんは無頓着で、あくまでも會話を樂むやうに、

「どうして奥さん、旦那さんと別れて、そんな遠いところへ歸るのさ。」

異人の女は一瞬返事に躊躇する風だつたが、つと立上ると殆んどヒステリカルな聲で、

「あぶないから、わたし子供つれる歸る。こはいから……」

遠巻にしてゐた人達を押分け、編物の毛絲の玉の甲板に踊るのを引擦りながら、

「子供達可哀さう。わたし可哀さう。旦那さん可哀さう。みんな可哀さう。」

うしろの者に聞けといふのか、自分自身をなだめるのか、いひ殘して立去つた。

とり殘されたおかみさんは、何のことか少しもわからず、たゞ會話のたち切られたのが氣に入

らたい風で、異人の女の後姿を見送つたが、やがて仲間の中にまじつて甲板を降りて行つた。

私は不愉快な氣持を抱いて目をつぶつた。目をつぶつても、あの異人の子供の四歳位の、かぼそくひよわい女の子の繃帶した足を引摺つて歩く姿が、まざまざと見えてしかたが無い。まさかとは思ふけれど、（二十六字略）金髪碧眼の子供をつかまへて、どんなことをするか知れたものではない。

恰も日英會談の眞最中といつてもいゝ時たつた。（百七十四字略）

私は商賣用で各地を旅行する度に、排英の示威の強さに驚いた。「英吉利人には賣りません」これは某地の百貨店の入口に揭げた白布に、墨黑々と書かれた文字だ。「英吉利人お斷り」これは、凡そ英吉利人なんか住んでも歩いてもゐさうもない田舍の町の場末の映畫館の貼紙だ。或地方の溫泉場では英吉利人の宿泊を謝絕する決議をし、或ダンス・ホオルでは、英吉利人とは踊らないと定めたとか傳へられた。露をだにいとふ大和の女郞花の精神を發揚したものであらう。（三十七字略）はからずも大和島根の風光にあこがれて來たり、かうまで排英親獨の機運の濃厚でなかつた頃に招かれて來た英吉利人どもも驚いたに違ひない。若しも「英吉利人には賣りません」が、もつともつと擴大されたら、彼等は食ふに食無く、着るに衣なく、住むに家無きものとなるであらう。

これは日本精神ではないであらう。武士道ではないであらう。それでは何だ。敵方のものに情をかけるが如き手ぬるい人道主義は、自由主義と共に排撃すべく、ヒットラアが猶太人を追放したのと同じやり方を學ぶつもりでやつてゐたのか。

しばらく、日清戰爭時代の追憶にふけらしめよ。玄武門一番乘の原田重吉、彈丸咽喉をつらぬくもなほ喇叭を吹きやめなかつた白神源次郎、その他數々の英雄の武勇談は、主として三枚續の錦繪によつて傳へられたが、吾々の子供心に最も深い印象を殘したのは、砲煙彈雨の下、左手に敵國の幼兒を抱き、右手に日本刀を振りかざして奮戰する樋口大尉の英姿ではなかつたか。我が日の本のものゝふは、敵の子供でも可愛がるといふ人道主義的感激は純粹だつた。

今度の支那事變でも、日本の兵隊さんは蔣介石をこそ憎め、武器を持たざる民衆を愛し、老幼をいたはり、彼の北清事變や歐洲大戰に西洋異人が行つたやうな、掠奪、暴行、虐殺を働かないといふのがほこりであり、日本人としてはそれが當前となつてゐるのだ。それがものゝふのみちなのだ。

それなのに、何故武器を持たざる英吉利國の多寡の知れた旅行者に對し、物を賣らないとか、宿泊を斷るとかするのであらうか。元より、英吉利國の異人は、世間知らずで、無愛想で、自負

的で、面憎いものどもには違ひ無いが、それでも、そのものどもが日本國土にゐる限は、衣食住の安全を保つてやらなければ、日本精神に恥るのである。

何處に行つても、激越な文字で英吉利をやつつけろといふ建札が、並木の樹々と數を競ふやうに並んでゐる。到る處で排英演說會が開かれ、滿員の盛況を呈してゐる。吾々は國を憂ふるの士に感謝するものであるが、これに導かれる大衆が「英吉利人には負けません」では、あまりに低調であり、あまりに末節に走り過ぎ、かへつて日本精神に反し、もののふのみちを踏み違へたものでは無いのか。この船に乘つてゐる夫婦者の英吉利異人も、日本人の高き志を知らず、街上の示威に驚き、只管迫害の身に及ぶ事を恐れ、先づかよわき女子供を本國へ歸さうとするのでは無いだらうか。まことに遣瀨無い心持だつた。あゝもののふのみちはすたれたるか。

ところが一日、二日とたつうちに、船中一番の人氣者になつたのは、英吉利人の男の子だつた。いたづらつこで、人おぢをせず、誰にでも話かけ、殊に軍人達に可愛がられた。一人の飛行將校が私にさゝやいた。

「西洋人といふのは、子供の時は可愛いが、大人になると憎々しくなりますねえ。」

折柄目の前を、いつもの通り腕を組んで大またに步いて行くその夫婦を見送つて、私達は笑つ

た。親達に倣つて、誰も彼もヂョンと呼んだが、ヂョンは父親に別れて故國へ歸る事の意味を、十分には知つてゐないらしかつた。神戸につくと別の船に乘り、加奈陀に行き、又別の船で英吉利に行く、其處には自分達のおばあさんがゐると、得意さうに話した。

「どうも日本の子供のやうにはにかんだり、いぢけたりしないのは、親達がほつたらかして置く結果ですかな。」

と感心してゐる人もあつた。この子供達の評判がよく、皆に可愛がられてゐるのを見ると、私は丁度安心に似た心持になつた。

短い航海の終の日に、海の日の出を見ようと思ひ、暗いうちからふなばたに椅子を寄せて待つてゐた。水平線の上の空がほのかにあかるくなつたと思ふと、忽ち眞紅な日輪が登つて來た。待構へてゐたのは私だけではなかつたと見え、反對の側の甲板から、船室から、あらはれて來た人達が、てすりにずらりと並んだ。日輪はぐん〳〵登り、あれ〳〵といふうちに、完全に水を離れてしまつた。爽かな景觀で、五六人一齊に拍手した。全く萬歳を叫びたいやうな瞬間だつた。

ゴッド　セイブ　アワア　グレシアス　キング　と英國々歌を唱ひ出した人がある。びつくりして見ると、陸軍中尉の制服を着た士官がヂョンの手を引き、足並揃へてあらはれて來た。子供

は未だその歌を十分教へられてゐないと見え、士官が唱ふのに連れて唱はうとしながら、ついて行かれない程度だつた。おもちやの日本陸軍士官の禮式の日の帽子をかぶり、おもちやの劍を腰に釣り、得々として靴音高く練り歩いた。

センド　ヒム　ヴヰクトリアス　ハツピイ　エンド　グロリアス

わが日の本の武勳赫々たる士官は、英吉利異人の子供と手を組んで、高らかに唱ひながら、新鮮な日光の漲りあふれる甲板を踏鳴らした。それは英吉利國の繁榮を謳歌するのではない、親英の心持をあらはしたものでは勿論無い。罪なき子供に對しては、たとひその國は敵性を有するも、たからかに愛撫の手を差延ばす日本精神のあらはれである。民衆よ、はきちがへるな。もののふのみちはかくこそありたけれ。（昭和十四年十二月二十五日）

——「東京日日新聞」昭和十五年一月六日・七日・八日

覺書

泉鏡花先生は、天賦の才能を以て、極めて特異な思想感情を、あますところなく文字に表現し盡しておかくれになつた。凡そいかなる作家と雖も、一作を成すや直に、何か表現し切れないものゝ胸に殘つてゐる、あと味の惡さに惱むのが普通だらうが、泉先生にはそれが無かつたらしい。或は、先生自身にはかゝる惱があつたかもしれないが、少なくともその作品には、さういふ痕跡を止め無い。作者と作品の間に過不足がない。讀者の側で何か物足りなく思ふならば、それは先生の持合せてゐないものを求めてゐるであつて、先生が持つてゐながら表現し殘したものでは無いのである。

明治大正昭和を貫く我國近代文學を、くまなくあさり求めても、先生程描寫力の豐かな作家は外に無い。鷗外や漱石が、先生を第一位の小說家として推奬したのも、主として此の素晴らしい

描寫力に敬服した故であらう。西洋古今の小說家中、最も逞しい描寫力を持つと極附（きはめつき）のトルストイは、あらゆる場面、あらゆる人間を描いて、しかも心理描寫を作ふ非凡の腕力を發揮したが、繪畫的描寫の一面丈を比べるならば、泉先生も亦彼に劣らぬ鮮かさを示された。但し、彼とこれと、西洋畫と日本畫の相違の存する事は言ふ迄もない。

先生は、小說は物語であると考へ、この點に多くの疑をさしはさまれなかつたやうだが、それにもかゝはらず先生の作品は、眞直に筋を語るものではなく、描寫に次（つ）ぐに描寫を以てする場面の展開を辿り、決して口から耳に傳へる風のお話にはならなかつた。描寫に自信を持つ先生の文章は、暗示にかくれる形態でなく、豐富な文字の數をつくして、執拗に殘りなく描かなければ承知しない。どんな事でも描いて見せるぞと先生はきほつて居られた。先生はよく昔の藝道の達人の話をされ、何某の狂言師が狐の聲を發して飛上ると、あたりに獸の惡臭が漂つたとか、誰某の繪師が墨を以て描いた牡丹は、火焰の色に燃えたつたとか、さういふ類の藝談に及ばれた。況や文章の道に於ては、藝の極致に達する時、神業か鬼神力か、花を描けば芬々たる香を發し、草を描けば颯々たる風のわたる事も、まのあたりだと說かれた。眞實さういふ境地に到り得るものだと信じて居られた。此の場合、眼に見る儘を、精緻克明に寫すのは藝道の眞ではなく、先生は屢々

物の風情をつかんで眞實を描かうとし、時には草艸紙や浮世繪や演劇や能や狂言が幾代かを經て完成した姿に則る方法をえらばれた。自然派以來、現實の眞を追求するのが藝術の本道だと信じられたのに對し、先生は理想世界に之を求め、眼に見る可らざる境地に眞善美を創造された。又、心理探求の傾向を全然持つて居られなかつた爲め、人間は兎角類型的性格となり、內的發展は乏しかつたから、當然筋と場面の複雜怪奇が特徴となつた。平凡に其の日其の日の生活を送る隣近所には作者の感興をそゝる藝術境は無い。仲人が間に立つて見あひをし、夫婦になり、乏しい月給をかこちつゝ、子供が生まれ、年をとり、ひそかに墓場に運ばれてゆく、ありきたりの生涯にも、人生の深い悲喜哀樂は多分に暗示される筈であるが、先生はかゝる家常茶飯事には携はらなかつた。鏡花世界に登場を許される男女は、父母、先生、師匠、美人、達人、或は藝道、戀愛に對して一途に信仰憧憬し、驚く可き運命、境遇にもてあそばれ、虐げられ、しかも至純の感情をたゞ一筋に守り通すことによつて生甲斐を與へられるのである。言葉を換へていへば、ありのまゝの眞實の記述は先生にとつて藝術では無かつた。一般には、あり得可らざる事のやうに思はれる世界を、眞實あるが如くに描くのが先生の藝術であつた。先生の豐富強烈鮮明な描寫力は、完全に之を遂行し得て、量と質と、共に並ぶものを見出さない。

泉鏡花先生こそは、自分の創造した世界に、自分の思ふまゝの人間を生かし、我儘に遠慮無く、自分の持つてゐる限りの思想感情を流露しつくし、表現し切れぬ悩みを殘さず、大往生を遂げられたのである。羨しくも尊き生涯であつた。（昭和十五年二月八日）

――「圖書」昭和十五年三月號

後記

本卷には、昭和五年十月作以降昭和十五年二月作の絶筆に至るまで、先生四十四歳より五十四歳に至る晩年十箇年間の「貝殼追放」七十八篇を收錄した。獨自の文學形式たる「貝殼追放」は、本全集九卷、十卷とこの十一卷の三卷を以て、はじめて完結されたものである。就中昭和九年五月作「『雪女郎』立見の記」以後の諸篇は、これまで單行本として刊行されたことなく、本全集ではじめて印行されるもので、この機會に、昭和八年八月日本評論社版「(第五)貝殼追放」及び昭和九年五月改造社版「親馬鹿の記」(第六貝殼追放に當るもの)の兩著に收載洩れとなつてゐた「いひわけ」「一文學生に答ふ」「もう一度『三田文學』について」の三篇をも、併せて收錄した。

この十箇年間は、作者個人にとつても祖國日本にとつても、眞に內外共に、歷史的に重要な期間であつた。衆知の如く、五・一五、二・二六、支那事變、三國同盟と、相次いで重大事件が勃發してゐる。その時その折に觸れて、先生の燃ゆる祖國愛が、時に筆端火を吐く文字となつて迸つたのも當然であらう。しかし、そ

れ等の憂國の至情に出づる文章と雖も、中にはすでに擧國一致の今日の時局に於いては、今更改めて公けにするに及ばぬ部分もある。のみならず、或は輕率な讀者には却つて誤解を招くやうな惧れもなくはない。本卷に收錄すべき「通夜物語」事件（昭和十一年六月）「切腹」（同前）「人氣もの」（同前）「獨逸皇帝萬歲」（昭和十三年十二月）「指導者氾濫」（昭和十三年十二月）の五篇の所收を見合せ、四五の箇所を敢て省略したのは、一にこの事由に基くものである。特に一言、編纂擔當者の責任として、附言しておきたいと思ふ。

先生の身邊を顧みても、この年代間には、嗣子優藏君の出生（昭和六年七月三十日）、長女富士子孃の出生（昭和十年十二月二十一日）など、「父となる記」「親馬鹿の記」「老父歎」等の諸作の因をなすお目出度のあつた一方、多年孝養の限りを盡された母堂優子刀自の逝去（昭和十三年五月二十六日）にもあはれ、人生最大の悲喜を同時に經驗されてゐる。このことも、本卷の特色をなす所以のものとして、附記しておきたいことである。

編纂の順序は、他卷と同樣概ね執筆の年次に從つたが、うち「ファンのいろいろ」の一篇のみは、十二箇月に亙つて分載されてゐるので、委員間で協議の上、最終篇の執筆月日に該當する箇所に插入することとした。「就職難」は、當初は「就職籠球戰」の題名であつたが、「（第五）貝殼追放」所收の際に改題されたものである。「修文院釋樂邦信士」は「三田文學」（昭和十一年八月號）に、「曾禰先生追憶」は「曾禰達藏中條精一郎建築事

務所作品集」(昭和十四年五月十五日刊)に、それぞれ初出の掲載紙誌以外に轉載されてゐる。
「『師・友・書籍』の序」「『西洋美術史研究』の序」「『福澤諭吉傳』の刊行に就て」の三篇は、一括して「よせあつめ」の題名で「三田文學」昭和八年七月號に轉載された。各著書の實際の序文とは字句に多少の相違があるが、「よせあつめ」の際に訂正されたものと思はれるし、またこの原稿は保存されてあつたので、校合は原稿に從ひ、掲出誌名のみ前記初掲のものを採つた。

校訂、校正は、前記の兩刊行本を底本として掲載紙誌を原據とし、未刊の部分は掲載紙誌に據つたが、幸ひ「三田文學」「相撲」等に所掲のものは大部分原稿が保存されてあるので、それ等はすべて原稿を原據に採つた。

措辭、送假名等は、編纂規約によつて各篇毎に原據に從ふこととし、全卷の統一は殊更に避けた。「綺麗」「奇麗」、「十分」「充分」、「無性」「不精」、「效果」「効果」、「僅かに」「僅に」、「素晴らしい」「素晴しい」等の例は、すべて右の理由によるのである。

本卷の校正には、今井達夫、大塚光幸兩氏の特別の支援を得た。（平松幹夫）

東京府規格外許可　巳寄紙規第一五四號

昭和十六年十一月十五日印刷
昭和十六年十一月二十日發行

水上瀧太郎全集　十一卷
會費參圓

著者　阿部章藏

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波茂雄

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地
發行所　岩波書店
電話九段(33)一八七番
振替口座東京七四四一六番
會員番號一〇二〇三七番

精興社印刷　長澤製本

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社

落丁・亂丁等不完全な品がありましたら直接御申出願ひます　お取替致します



